バカとテストと失われゆく記憶(ロストメモリー)

唐笠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バカとテストと失われゆく記憶（ロストメモリー）

【Ｎコード】
Ｎ９９０７Ｔ

【作者名】
唐笠

【あらすじ】
振り分け試験当日の放課後、とある事件により吉井明久は日付が変わるごとに記憶がリセットされてしまう！？さらには召喚獣までもが……！？
原作のバカテスに沿いながらも、まったく違う物語となっていく本作。
※話の都合上、明久、瑞希、雄二の出番が多くなっております。
明久×姫路を前面に押し出しておりますのでご了承ください。

第０問　その日は僕がいなくなった日（前書き）

バカテスの連載小説第２弾！
本作もどうぞよろしくお願いします

第０問　その日は僕がいなくなった日

明久ＳＩＤＥ

「姫路さん、大丈夫？」

「はぁ、はぁ、大丈夫ですよ……」

振り分け試験の最中、姫路さんは高熱をだしてしまった。
僕は姫路さんが心配で家まで付き添いでやってきていて、今はその道中だ。
隣を歩く姫路さんは元々体が丈夫でないことも拍車をかけて、すごく辛そうだ。

「おっと！」

突然、体の重心を崩した姫路さんを支える。
その細身ながらも自己主張が激しい体を支えると、ふわっといい香りが漂う。

「あっ、明久君すいません／／／」

恥ずかしそうに姫路さんが言う。
まぁ、公然の目の前で抱き抱えられたら誰だって恥ずかしいよね。
ちなみに姫路さんが僕の事を名前で呼ぶのは理由があったりするが、それはまたの機会ってことで。

「ぼっ、僕の方こそ急にごめん／／／」

当然、僕の方も恥ずかしい訳です。
街中で女の子を抱き抱えるだけでも恥ずかしいのに、相手はあの姫路さんだ。恥ずかしくない訳がない。

僕は姫路さんを支えながら立たせると、再度歩き始めた。

しばらくすると車通りの多い、大通りにつく。
僕は青信号を確認して、姫路さんの肩を担ぐように渡る。

「明久君、ありがとうございますね……」

「これくらいなんてこ、危ない姫路さん!!」

僕は姫路さんを思いっきり突き飛ばす。
幸い、姫路さんは別の車線までとんでいったようだ。

キキィィーーーーーーーーーー!!

ただ、僕がよけるだけの猶予は残されていなかった……

第０問　その日は僕がいなくなった日（後書き）

いかがでしょうか？
今回は物語の機転となるプロローグのみで、次回から原作に沿っていきます。
なお、こちらは不定期にあげていきますのでご了承ください。

第1問　頭痛と記憶となくなった春休み

明久ＳＩＤＥ

ジリジリジリジリジリ！

けたたましい目覚ましの音で目が覚める。

「ほわぁ～～～」

欠伸を手で押さえながら周りを見渡す。

そこはいつもと変わらない僕の部屋だ。

確か昨日は……

「くっ！？」

突然頭痛におそわれる。

頭に手を当てるが、目立った外傷はなさそうだ。

痛む頭を押さえながらも普段着に着替える。

ピンポーン

こんな早朝からチャイムの音がなる。

玄関に向かい、扉を開ける。

「おはようございます明久君」

なぜだか姫路さんがいた。
しかも文月学園の制服を着て、鞄まで持っている。
「おはよう姫路さん。こんな朝早くなんの用かな？」
制服を着ながら遊びに来たわけでもないだろうし……
「明久君、今日から学校ですよ」
「えっ？」
姫路さんの言葉に固まる。
今日から学校だって？
そんなバカな。
だって昨日は……
「つっ！」
またさっきの頭痛だ。
「あっ、明久君大丈夫ですか！？」
姫路さんがうずくまる僕に駆け寄ってくる。
「だっ、大丈夫だからし……んぱ――――
薄れゆく意識の中、姫路さんが僕を呼ぶ声が聞こえる。
この感じ、前にも……

「うっ……」

目が覚める。

「もう大丈夫ですか？」

姫路さんが僕を覗き込むようにたずねる。
どうやら、僕の家の居間らしい。
ご丁寧にも布団に寝かしてもらっている。

「うん、突然倒れちゃってごめん……」

まだ少し頭が痛むが、起き上がる。

「まだ起き上がったら危ないですよ。ゆっくりしててください」

姫路さんが僕を布団に押し返すように、両手でゆっくりと押す。
すると不思議な事に残っていた頭痛がきれいさっぱりなくなってしまったのだ。

「姫路さん、本当にもう大丈夫だって」

「本当ですか？」

姫路さんの疑問に首を縦に振る。

「それより、今日から学校って本当？」

姫路さんが嘘をついているとは考えにくいけど、一応聞いてみる。

「……はい」

一瞬、姫路さんの顔に陰が落ちたのは僕の気のせいだろうか？
それにしても今日から学校だだなんて。
まだ、春休みはなにもやっていない気がする。

「きっと明久君は疲れてるから、勘違いしたんですね」

「そうだよね、ハハハ」

そうだ、春休みがまるごとなくなるなんて事がある訳ないじゃないか。

「じゃあ、制服に着替えてくるね」

立ち上がろうとする僕の手を姫路さんがつかむ。

「……制服はここにあります」

そう言って姫路さんは鞄から、新品の制服を取り出す。
もちろん文月学園の男子用の物だ。

「これって新品だよね？」

「その……明久君は坂本君とふざけてて制服を破っちゃったじゃないですか」

そうだっただろうか？
雄二と取っ組み合いをして
制服を破ったなんてことはなかったと思ったけどなぁ……

そう思いながらも制服に着替える。
当然だけど、姫路さんのいない僕の部屋でだ。

桜が舞い散る中、僕と姫路さんは走っていた。
僕が気絶していた時間が思った以上に長く、遅刻寸前なのだ。
僕ならまだしも、姫路さんが僕のせいで遅刻になるのは、なんともいたたまれない。
角を曲がると、前方には校舎と鉄人が見える。

「吉井に姫路遅い、いやおまえらはしょうがないか……」

珍しく鉄人が遅刻寸前を許してくれた。
てっきり、重い拳でもくらうかと思ったのになぁ……

「これが二人のクラスだ」

鉄人から僕と姫路さんに一通ずつ封筒が渡される。

吉井明久　Ｆクラス
姫路瑞希　Ｆクラス

姫路さんは途中退室で０点だから仕方ないし、僕の方は言わずもだろう。

そういえば、あの日はどうやって帰ったんだっけ……？

疑問を持ちながらも僕の学校生活が再び幕をあけた。

第1問　頭痛と記憶となくなった春休み（後書き）

正体不明の頭痛に悩まされる明久。
そしてなにかを知っている瑞希。
次回、明久の身に起こったことを知るもう一人の人物が！？

第2問　あの日あったこと（前書き）

お気に入り登録してくださった方ありがとうございます

第2問　あの日あったこと

バカテスト1

問題　○月○日で○の中に同じ数字が入り、特別な日を3つ答えなさい

姫路瑞希の答え

1月1日　正月・7月7日　七夕・11月11日　世界平和記念日

先生から

正解です。ちなみに奇数の月はすべて用意されているので調べてみてください。

吉井明久の答え

5月5日　姫路さんの誕生日

先生から

確かに特別な日ですが、一般的なものにしてください

「さっさと席につけウジ虫！」

これが僕の教室でかけられた第一声だった。
僕はともかく姫路さんをウジ虫扱いしたのは誰だか確かめるため、声がした教卓に目を向ける。
そこには、よく学校に入れたなと思うほどに赤い髪に鍛えられた身体、そして僕よりも背丈が高い

「やぁ、不細工おはよ」

不細工こと、雄二がいた。
こいつは一年の時からの悪友で、小学生時代は神童とまで呼ばれていたらしい。
まぁ、結局は『元』神童な訳で、今は学力最低のFクラスの仲間だ。

「ところで雄二、一つ聞きたいんだけど?」

「なんだ、俺が教卓にいる理由か?」

「ううん、違うんだ」

笑顔で雄二の前まで行く。

「だぁれがウジ虫だ!!」

姫路さんの分も合わせておもいっきり雄二を左手で殴る。
しかし、僕の拳は簡単に止められてしまった。
しかも、止められた拳はびくともしない。
おかしい……

確かに雄二は力が強いけど、こんなに簡単にパンチを止められるほどではない筈なのに……
それとも、僕の力が弱くなったのか……？

「明久、そろそろ先生が来るから席につけ」

雄二が僕の手を離す。

それと同時に教室のドアが開き、幸薄そうな先生が入ってきた。

「では、各々好きな席に着いてください」

先生の支持を受け、僕は雄二と姫路さんの間の席に着く。
しかし、これが本当に教室かと思えるくらいに酷い設備だった。
机はなく、ちゃぶ台に使い古した座布団。
すきま風が入ってくる窓。
更にどこからともなく漂うカビ臭い匂い。

「先生、僕の座布団に綿が入ってませーん」

一人の生徒が抗議する。

「我慢してください」

ひどいな、おい……

「先生、すきま風が寒いんですが？」

また別の生徒が抗議する。

「心頭滅すれば火もまた涼し」

いや火もまた涼しじゃないよ、寒いって言ってんでしょ……

しかも先生のアゴが一瞬、しゃくれた気がするのは気のせいだろうか？

ため息をつきながら机に突っ伏す。

バギッ！！

豪快な音と共に、僕のちゃぶ台が真っ二つに割れた。

「先生、僕のちゃぶ台が無惨な姿なんですけど？」

無理と分かっていながらも、抗議はしてみる。

「これをどうぞ」

先生が何かが入った袋を教卓から取り出す。

よかった、さすがにちゃぶ台くらいは面倒みてくれるのか

先生から袋を受け取り、中身を確認する。

その中には――金槌と釘、更にちゃぶ台の設計書が入っていた……

「技術室で新しいちゃぶ台を作ってきてください」

文月学園は想像以上に厳しい場所でした……

ＮＯ　ＳＩＤＥ

明久が教室を出た後、すぐに教卓まで破損したため、福原先生も用務室へ出ていった。
それを見計らったように雄二が前へ出る。

「みんなに話しておくことがある！」

よく通る雄二の声にみんなが前を向く。

「さっき出ていった明久だが、あいつは大変な状況にいる」

「明久になにかあったのか？」

美少女の秀吉が雄二に質問する。

「秀吉は知らないというか、俺と姫路しか知らないことだからな。姫路も前に来い」

雄二の指示を受け、瑞希も前に出る。
本来なら底辺であるＦクラスに彼女がいることに教室が沸き上がる。

「みんな静かにしてくれ。確かに姫路がここにいるのは異例だが、明久の方が重大なんだ」

再び全員の注目が雄二に集まる。

「姫路、本当に話してもいいんだな？」

小声で聞く雄二に瑞希は「はい」とうなずく。

「明久は振り分け試験の日にある事故にあった。それが原因であいつの中では、毎日が振り分け試験の次の日なんだ」

「坂本、それってどういうことよ……」

ポニーテールとリボンがトレードマークの美波が悲しそうに言う。

「明久の中の記憶は振り分け試験の日までの記憶とその日の記憶しかない。
もっと解りやすく言うなら、あいつは昨日の事は覚えていられない。
永遠に振り分け試験の次の日を過ごしているんだ」

雄二の発言に再び教室が沸き上がり、様々な憶測が飛び交う。

「あいつってヤクザとかとつるんでんじゃないのか」

「もしかしたら生まれつきなんじゃねえの」

「いや、人体実験の被験者かもしれないぞ」

「明久君はそんな人じゃありません！！」

瑞希が教室中に響き渡るほど、声を張り上げて叫ぶ。
彼女からは想像もできないほどの大きな声にクラス中が静まり返る。

「おい姫路、ここは俺に――」

「明久君はそんな人なんかじゃないんです！」

瑞希は雄二の制止も聞かずに続ける。

「明久君は……明久君は私を庇って車に跳ねられたんです……」

瑞希は振り分け試験の日にあったことを話し始める。

明久が高熱を出した自分を気遣って家まで送ろうとしてくれたこと。
車にひかれそうになったところを明久が庇ってくれたこと。
気づいたら、明久と共に病室で寝ていたこと。（偶然通りかかった雄二が病院に連絡をしてくれた）
春休み中に明久と出掛けたり遊んだりしたが、どれ一つとして覚えてはいなかったこと。

瑞希が話し終える頃には、いつもの声の大きさでも教室中に聞こえるくらいに静まり返っていた。

「明久ってやつ大変なんだな」

「あぁ、本人がいないとしてもあんなこと言っちゃって悪かったよな」

「悪いやつどころか、いいやつだよな」

「あっ、俺もそれ思った」

「だよな、咄嗟に自分を犠牲になんかできるもんじゃねぇし」

クラス中の反応がさっきとは真逆になっていた。

「みんな最後に聞いてくれ！
当然だが、明久はこの事を知らない。いや正確に言えば知っても忘れてしまうわけだ。
ただ、この事を明久に言わないでほしい。
これは医者から言われたことなんだが、今の明久は一日分以上の事を覚えようとすると危険な状況らしい。だから下手に考え込むような、こういう話はしないでほしいんだ。当然、勘づかれないように自然体で接してやってくれ」

雄二の呼び掛けにクラス中がうなずく。

「じゃあ、そろそろあいつも戻ってくる頃だろうし、自己紹介といくか。右端から順番にだ」

こうしてクラス中に吉井明久がどういう人間なのかが認知された。
ただ、物事はいつも余計なものをつけてくるわけで……

（ククククッ、いい事を聞いたぞ）

第2問　あの日あったこと（後書き）

その日の記憶を引き継げない明久。
それは彼にとってどう働くのか！？
よろしかったら感想、評価などお願いします

第3問　戦力はいかほどに？（前書き）

感想くださった方、評価してくださった方、お気に入り登録してくださった方、そして読んでくださる読者の方々ありがとうございます。

※今回は秀吉は他に類を見ないほど壊れてますので、原作の秀吉じゃなきゃダメだという方はお気をつけください

第3問　戦力はいかほどに？

明久ＳＩＤＥ

僕が新しいちゃぶ台を持ってＦクラスに戻った頃には自己紹介が始まっていた。

「おぉ、明久か。さっさと席につけ」

ちゃぶ台を雄二と姫路さんの間に置き、そこにつく。

「自己紹介が始まったばかりで良かったですね」

笑いかけてくれる姫路さんの笑顔が今日もまぶしい。

おそらくこの笑顔だけで一食（水道水）抜きにしてもやってけれるだろう。

「意外に早く終わって良かったよ。なんなら今度、姫路さんの分も作ってあげようか？」

「なら、一緒に……いえ、やっぱりやめておきます」（約束しても明久君は覚えておくことができませんから……）

伏し目がちになる姫路さん。もしかして僕に悪いと思っているのだろうか？

「遠慮しなくても作っておいてあげるからさ」

半ば強引に約束を取り付ける。

「なら……お願いしてもいいですか？」

遠慮がちに、でもどことなく期待の眼差しで僕を見ている気がする。

「うん。っと、そろそろ秀吉の番だね」

姫路さんとの約束を取り付けて前に向き直ると、ちょうど秀吉が立ち上がるところだった。

「木下秀吉じゃ。みな、よしなにじゃ」

戸籍上男である美少女、秀吉の笑顔は今日も可愛かった。
本人は男だって言い張っているけど、じきに胸も成長してくるに違いない……

「……土屋康太」

名前だけの自己紹介はムッツリーニのあだ名で通っているプロのカメラマンだ。
別に本業な訳ではないけど、色々とプロ顔負けの腕前なのだ。ただ、彼の名誉のために内容は伏せておこう。

それからしばらく関わり合いのなかった人の自己紹介が続く。
その後、ポニーテールと大きなリボンがトレードマークの帰国子女の島田さんの番になる。

「趣味は吉井明久を「島田！」

雄二が突然島田さんに叫ぶ。
なにがあったんだろうか？
なんか不吉な事を言おうとしてたみたいだから、一応雄二に感謝しておこう。

「わっ、わかってるわよ……
島田美波です。ドイツ育ちだったので難しい日本語は解りませんがよろしくお願いします」

島田さんがお辞儀をする。
この男ばかりのＦクラスで姫路さんと秀吉と並ぶ清涼剤なだけあって男子たちがあれやこれやと言い合ってる。

「ドイツ帰りってことは帰国子女じゃね！？」

「って事はお嬢様なのか！？」

「いや、お嬢様ポジションは姫路さんだろ」

「だな。ということはひんｎｙ腕はそっちにまがぁぁぁ！！」

この喧騒の中、島田さんが的確に言った犯人を見つけて間接技を決めている。

僕も下手な事は言わないようにしよう……

「貧乳最高なのじゃ」

って誰だ！？この騒ぎの中、こんなことを言えるやつは！？
……って、『じゃ』？

ありえないとは思いつつも秀吉の方を見る。
そこには島田さんに折檻されている哀れな秀吉の姿が……
いくら普段から自分が男だと訴えているとしても、このタイミングでその男らしさはどうかと思う……

そんな秀吉に呆れていると僕の番がやってきた。

クラスに馴染むためにも第一印象は大切だよね

「吉井明久といいます。気軽にダーリンって呼んでくださいね」

「「「「ダァーリーン！！」」」」

予想以上にノリがよかった……

「おいダーリン、さっさと座れ」

しかも、雄二までにもダーリンと呼ばれる始末だ……
僕がへこたれるように座ると、隣の姫路さんが困ったような顔で聞いてきた。

「明久君はダーリンって呼ばれたいんですか？」

「姫路さん、あれは冗談だからね……
できれば本気にしないでほしいよ……」

僕の訴えに姫路さんはホッとしたらしく立ち上がる。

「姫路瑞希といいます。みなさんよろしくお願いいたしますね」

ペコリと頭を下げる仕草がなんとも言えない可愛らしさをかもしだしている。
当然Fクラスの野郎共も大はしゃぎな訳で――――

「やっぱりいかにもなお嬢様だよな」

「正に才女って感じだな」

「わしは貧乳派じゃ」

「姫路さんさえいれば何もいらない」

とりあえず最後のやつは探し出す必要があるな。
あと、再度島田さんに折檻されている秀吉は助けなくていい気がしてきた。

「ゴホッゴホ……」

自己紹介を終えて座った姫路さんが咳き込みながら席につく。
本来ならAクラスにいるはずの姫路さんがこの劣悪な環境にいるのはしのびない。
なにより体の弱い姫路さんにこの環境は過酷だろう。

「雄二、ちょっと廊下までいいかな？」

立ち上がり、隣の雄二の肩に手を置く。

「あぁ、かまわない」

僕たち2人は廊下に出ていった。

「で、姫路のために試召戦争を仕掛けたいんだろ？」

「なんで分かってるの……」

なぜだか僕が一言目を発する前から言いたいことがバレていた。
しかも、オブラートに隠して言うつもりだったのに、ご丁寧にも本心の部分を言われてしまった……

「お前はわかりやすいんだよ。まあちょうどいい。俺も試召戦争を仕掛けようと思っていたからな」

「えっ、雄二も！？」

まずい、これは僕へのライバル宣言か……？

「あぁ、世の中学力が全てじゃないってことを証明したくてな」

「うん、なら頑張ろうよ」

少なからず、今のところはライバルではないみたいだ……

「「打倒Ａクラス！」」

お互いの拳をグーで殴り合い、笑う。

「坂本君となにを話していたんですか？」

「ちょとこれからの計画をね」

曖昧にごまかし席につく。

僕たちが戻ってきた頃には雄二を抜く自己紹介が最後だった。

雄二は教壇に上がり、一度クラスを見回してから声を張り上げる。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺の事は坂本なり代表なり好きに呼んでくれて構わない」

雄二が一呼吸いれる。

「みんなこの設備に不満はないかぁ！！」

「おおありじゃー！！」

クラス内の上々の反応を見て雄二がうなずく。

「俺も不満がある。だからAクラスに試召戦争を仕掛けようと思う！」

「バカな、そんなことができるわけがない」

「そうだ、俺たちがAクラスに勝つなんてことなんか夢のまたその また夢だ」

早くも諦めムードが漂い始める。だが、ここで諦めてしまわれると僕にとってもつらい。

「みんな諦めるのはまだ早いじゃないか！」

立ち上がって叫ぶ。

「おっ、吉井がやる気らしいぞ」

「なら俺たちだってもたもたしてられないな」

「だよな。吉井が言うなら頑張ってみるか」

意外なほど、僕の発言に影響力があった……

「あぁ、明久の言う通り諦めるのは早い。それに俺たちのクラスは勝てる理由がある」

「なに、そんな凄いやつがいるのか！？」

「おい康太、姫路のスカートの中を覗いてないでこっちに来い！」

「……！？（ブンブン）」

「ふぇ！？」

あわててスカートの裾をおさえる姫路さんと、畳の痕を頬に残しながらも否定するムッツリーニ。

とりあえず、あとで撮れた写真を見せてもらおう。

「こいつがかの有名な寡黙なる性識者（ムッツリーニ）だ」

ムッツリーニ。
それは親しい仲では普通に呼ばれている名だが、一般的には男子からは畏怖と畏敬を、女子からは軽蔑をもってあげられる名だ。

「あいつがあのムッツリーニなのか！？」

「だが、そんな大物がこんな一般の場にいるはずがない」

「でもあのあからさまな証拠をあげられても否定する様は正にムッツリーニだ」

なぜだかムッツリーニが凄く偉大な人物へと昇華されていた……

「木下秀吉だっている」

秀吉はその演技力をもってしてでの評価だろう。
本来なら美少女としても活躍できたかもしれないけど、さっきのあれを見た後だとさすがに女の子として扱うのはひけてくる……

「そしてなにより姫路瑞希だ。みんなだって姫路の実力は知ってるはずだ」

確かにＦクラスという立場上、僕たちの点数は総じて低いものだ。
その中でＡクラスでも上位の上位にくい込む姫路さんをどう配置するかで勝敗は大きく変わってくるだろう。

「俺や明久だってがんばる」

なんで僕の名前をだｓ「たしかにな」

えっ？

「あぁ、吉井や坂本ならやってくれそうだよな」

「そういえば坂本は小学生時代神童って呼ばれてたんだよな」

「なおさら心強いじゃないか」

「俺たちはなにがあっても坂本と吉井についてくぜ！」

意外なほどに僕の評判はよかった……

「よし、まずはDクラスから征服だ！！」

「「「おおー！！」」」

「全員筆を執れ！出撃の準備だ！！」

かくして僕たちの初めての試召戦争が始まった。

第3問　戦力はいかほどに？（後書き）

まず最初に秀吉ファンの方すいませんでした。
普段から「わしは男じゃ」と言っているので男らしくしようとしたら、間違った意味で男らしくなってしまいました。
重ね重ねすいませんでした！

そして次回からついに試召戦争！
更には○○のお弁当が……

第４問　春休みは花嫁修行！？（前書き）

原作と比べると早いですが、今回は姫路さんのお弁当の話です。
では、お楽しみください

第４問　春休みは花嫁修行！？

Ｄクラスとの闘いを午後に控えた僕たちは昼食をとるため、屋上に来ていた。
ちなみにＤクラスへの戦線布告は姫路さんを除いた、いつものメンバーで行ったためか特に酷いめにあわずにすんでいる。
しかし僕は屋上に来て、やっと気づいたことがあった。

お弁当を持ってきてない……

今日は朝から色々あったし、なにより今日から学校だということを忘れていた僕がお弁当を用意しているわけがない。
どうしようか焦っていると、姫路さんが可愛いピンクの布に包まれた長方形の箱を差し出してきた。

「姫路さん？」

「明久君、よかったらお弁当食べます？」

若干うつむき加減で姫路さんが聞いてくる。
視線を一度、包みから姫路さんの方に戻すと、そこには姫路さん自身の物とおぼしき弁当箱がある。
ということは――

「もしかして僕のために作ってきてくれたの？」

「その……明久君が学校のこと忘れてると思って……
迷惑だったでしょうか……？」

「そんなことないよ。ありがとう姫路さん」

「（意外に瑞希って積極的ね）」

「ん？島田さんなに？」

「別になんでもないわよ！」

僕は姫路さんの手から弁当箱を受けとり、フタを開ける。
そこには色艶やかな白米、定番のだし巻き玉子、サクッと揚げたエビフライ、隅に盛り付けられているポテトサラダ等の魅惑的なものがきちんと並べられていた。

「うまそうだな、貰うぞ」

「……同じく」

「わしもじゃ」

いつの間にか隣に来ていた三人がお弁当をつまみ食いしてしまった。

「「「モグモグ、この程よい食感に、いい味配分、うまい（のじゃ）！」」」

三人の口から全く同じ言葉がでる。
そんなに美味しいのかと思い、僕もエビフライをつまむ。

エビフライは口に入れた瞬間、香ばしい匂いを発し、噛む度に衣のサクッとした感じがたまらなかった。

「うまい！」

あまりの美味しさに思わず大声をあげてしまった。

「ウチもちょっといいかしら？」

「はい島田さん」

島田さんの方に弁当箱を差し出す。

「モグモグ、本当にすごい美味しいわ！」

島田さんも美味しそうに食べている。

さすがにこれ以上あげると、僕自身の取り分が無くなってしまうので弁当箱を引き寄せ食べ始める。

「うん、姫路さんって料理上手だね」

「みなさんのお口にあったようで良かったです」

「これくらい美味しいと姫路さんと結婚する人は幸せだろうなぁ……」

「ふぇ！？えっと……明久君はその方がいいんですか…」

「うん、結婚する人は料理ができた方がいいからね」

なぜだか姫路さんの顔が赤い。

もしかして、また体調を崩したんだろうか？

「姫路さん大丈夫？
また体調を悪くしたらなら保健室まで連れてくよ？」

「いっ、いえ私は大丈夫ですから心配はいりませんよ……」

そう言うと姫路さんは、さっきよりもうつむいてしまった。

雄二ＳＩＤＥ

「（ねぇ坂本、なんで瑞希はあんなに料理が上手なの？）」

明久お得意の天然タラシスキルを発揮している間に俺の方に小声でたずねてきた。

「（驚くかもしれないけど、春休み前のあいつの料理は食えたもんじゃなかったんだぞ）」

「（うそ！？あんなに美味しい料理つくるのに！？）」

「（あぁ、というか初めて食ったときは冗談抜きで失神したからな）」

俺は島田に姫路の料理について話し始める。

「（明久が事故にあって退院したのは、事故にあった翌日だった。
俺と姫路は事故日当日に担当医師から明久の記憶障害について聞か

されたんだ。
当然、姫路は明久の世話をしようと春休み当日から身の回りの事をやっていた。もちろん、明久には色々と理由をつけてな。
それで当日は俺も手伝うことになって、いざ昼飯って時に姫路が用意してくれたんだ。
一応病人である明久に一番最初に食べさせるのは悪いと思い、一口味見したところで俺は意識を失ったんだ。
意識が戻った俺は、これからの明久のためにも姫路に正直に話した。
そして改善策として俺の幼なじみの翔子、要するにAクラスの霧島を呼んで姫路に料理を教えてもらった。
姫路も本当ならAクラスだったって事もあってか二人はすぐに打ち解けて、次の日には姫路の料理が食えるものになっていた。
それ以降は翔子も教えてないって言うから、単純に姫路の頑張りだろうな。
ただ正直、ここまで上手くなってたなんて驚きだけどな）」

「（そんなことがあったのね……）」（いくら吉井の記憶が一日でリセットされるとしてもウチはどれだけ出遅れてたんだろう……）

見え見えの島田の表情に思わず苦笑してしまう。

「（まっ、明久たちも話し終わったようだからシャキとしろ）」

「（別に落ち込んでなんかいないわよ！）」

耳元で小さいながらも耳に響く声を出されて、思わず耳を塞ぐ。

「そういえばなぜDクラスからからなのじゃ？」

ちょうどいい所に秀吉からの質問が入った。

明久たちもちょうど話し終わったみたいだから、この話題を昼飯の肴とするとするか。

明久ＳＩＤＥ

午後になり試召戦争が始まるまで残り数分だ。
昼飯の時に雄二から聞かされた計画には正に神童と感じさせるものがあり、少し見直したりもした。

「明久、お前は絶対に持ち場を離れるなよ」

「はぁ、教室で雄二の護衛だなんて地味だよね」

「まあ、そんなにしょげるな」

そう、僕の役目は教室で雄二の護衛らしい。
まあ、最終的には回復試験を受けている姫路さんが来るまでの時間稼ぎな訳だけどね。

「お前がしっかりやらなきゃ、姫路にＡクラスの設備を使わせてやれないだろ？」

「確かにそうだね。よし、俄然やる気が出てきたよ！」

カチッ！

時計が１時を示す。
それはＤクラスとの試召戦争の開始時刻だ。

「「「「「いくぞぉぉぉ！！」」」」」

Fクラスのみんなが意気込む。

この勝負、絶対に負けられない。

頑張ってくれるみんなのためにも、姫路さんのためにも！

第４問　春休みは花嫁修行！？（後書き）

春休み間の修行により瑞希の料理は絶品に。
次回こそは前回やるといってやらなかったＤクラス戦をやりますので、よろしくお願いします

第5問　格上の相手は油断する？（前書き）

お気に入り登録数が１０を突破しました！
ご愛読ありがとうございます！

第５問　格上の相手は油断する？

「いよいよ始まったね」

「あぁ、こういうのは最初が肝心だからな」

僕と雄二はムッツリーニのビデオカメラで戦況を見ている。

「最前線部隊が衝突するぞ！」

見ると島田さん率いる最前線部隊がＤクラスの最前線舞台と衝突していた。

ＮＯＳＩＤＥ

「島田美波、行きます！試験召喚獣、サモン！」

Ｆクラス　島田美波　数学１１２点

青い軍服にサーベルをもった美波の召喚獣が現れる。

「木下秀吉、参るのじゃ！サモン！」

Ｆクラス　木下秀吉　数学３２点

白い袴に薙刀をもった秀吉の召喚獣が現れる。

「須川亮、行くぜ！サモン！」

Ｆクラス　須川亮　数学２８点
柔道着に棍のようなものを持った須川の召喚が現れる。

「一人高いやつがいるが、それ以外は雑魚だな。サモン！」

Ｄクラス　鈴木一郎　数学７８点

「二人でやればなんとかなるだろう。サモン！」

Ｄクラス　山田太郎　数学８２点
両者の召喚獣が出揃い睨みあう。

「行くわよ！！」

「いざ勝負じゃ！！」

「いくぜ！！」

先に動いたのはＦクラスの方だった。
狙いは全員、鈴木だ。
なるべく多人数で一人を倒すようにとの雄二からの命令なのだ。

「くっ、山田！」

鈴木が秀吉と須川の攻撃を押さえながら叫ぶ。

「わかってるって！」

山田の召喚獣が鈴木の援護に向かおうとするが、その進路は美波の召喚獣により塞がれてしまう。

「ここから先は行かせないんだから！」

「うっ……」

美波個人と山田個人では戦力差は歴然だ。

うまく立ち回れば山田の勝利もありえるが、それは召喚獣の扱いに慣れていればの話であって、単純な動きしかできない両者ではほぼ勝ち目はないだろう。

そして鈴木の点数は秀吉と須川の合計点より勝っているが、手数の問題なのか苦戦を強いられている。

この勝負、今のところはＦクラスが有利だ。

明久ＳＩＤＥ

「なんとかなりそうだね」

「いや、そうもいかないらしいぞ」

「えっ？」

「くっ、まずいぞ五十嵐先生と布施先生を呼ばれた！Ｄクラスは科学で勝負する気だ！！」

廊下から誰かが叫んでいる。

「ほらな」

雄二は初めからこの状況を予想していたのか、随分と余裕そうだ。

「戦死者は補習！！！」

鉄人の声が響き渡る。

「嫌だ！！あんな拷問は耐えられない助けてくれー！！」

「拷問？違うな、趣味は勉強、尊敬する人物は二ノ宮金次郎という立派な生徒に仕立てあげるための教育的指導だ！」

一つの部屋に大量の人を監禁するのが拷問じゃなければ、いったいなんと言うのだろうか？

残念ながら僕はその問いに対する答えを持ってはいない。

「雄二、当然作戦があるんだよね？」

むしろないと補習室送りだ。それだけはなんとしても避けなければならない。

「ない！」

雄二の無情な言葉が教室に木霊する。

「どうするんだよバカ雄二！このままじゃ補習室送りじゃないか！」

「心配するな。いくら科目が科学に変わったとしても、すぐに戦況は変わりはしない」

「そうか、そうだよね。それよりも僕たちは戦況の把握の方がｄ「そこにいらっしゃるのは美波お姉さまではありませんか！」

「うっ、美春！？」

ビデオカメラに島田さんの方を色々と危ない目で見ているグルグルドリルの髪型の女の子が映る。

「お姉さま行きますわよ、サモン！」

Ｄクラス　清水美春　科学８６点

「あぁもう！サモン！」

Ｆクラス　島田美波　科学２４点

どう考えたって島田さんが負けるだろう。
そう考えている内に決着がついてしまった。
もちろん、島田さんの敗北というかたちで……

「あぁ雄二どうするんだよ！
もう僕らのクラスはほとんど残ってないんだよ！」

「ぐわぁぁぁ！」

「うわぁぁぁ！」

「不覚！」

「ドジっちまったな……」

次々と廊下から聞こえてくる悲鳴。途中、明らかに僕らのクラスじゃない人が入っていた気がするが気のせいだという事にしておこう。

ガラガラ

教室の扉が開き、Ｄクラス代表の平賀君と数人の取り巻きがやって来た。

「代表自ら討伐とはご苦労だな」

「そっちこそ取り巻きが一人で大丈夫なのか？」

「問題ない。なぜならこいつは観察処分者だからな！」

僕の方を指さす雄二。

「バカな、観察処分者だと！？」

「文月学園始まって以来の初である観察処分者だというのか！？」

「この学園でたった一人という観察処分者だなんて……」

「「「「要するに雑魚だな」」」」

Dクラス一同が口を揃えて言う。

「そんなに言うならやってやろうじゃないか！サモン！」

平賀君個人に恨みはないが、平賀君を指さす。

「なら一騎討ちといこうか、サモン！」

僕と平賀君の召喚獣が対峙する。

Fクラス　吉井明久　科学３３点

Dクラス　平賀源二　科学１３４点

「いくぞ！！」

平賀君の召喚獣が先に動き、僕の方に向かってくる。

普通このままでは僕の負けは決定しているが、それは召喚獣の扱いに慣れていないならの話だ。

「よっと」

木刀で相手の足を払いコケさせると共に木刀で叩きつける。

平賀源二　科学１０８

「なに！？」

平賀君は格下の相手に点数を減らさせたことに動揺しているらしい。

「まだまだぁ！」

体勢を立て直される前にもう一発きめる。

平賀源二　科学９４点

「くそっ！」

「平賀、援護いれるか！？」

「いや、一騎討ちでやるって言ったんだから一騎討ちでやるさ」

平賀君にもプライドがあるらしく、仲間の援護を拒む。

「そうまぐれが続くと思うな！」

再度、平賀君が向かってくる。

次は右に避けてから攻撃かな

そう考え、右に避けようとするが、なんと召喚獣は僕の意思とは反対に左に避ける。

「えっ！？」

「もらったぁぁぁ！」

召喚獣があらぬ方向に避けてしまったために反応が遅れ、平賀君の攻撃がヒットする。

「くっ……」

吉井明久　科学３点

なんとか直撃は避け、戦死は免れたものも、観察処分者に付与されるフィードバック機能により全身に痛みがはしる。

「吉井君チェックメイｔ「いいや平賀、お前らがチェックメイトだ！」

「なに！？」

雄二の発言にＤクラス一同の注目が集まる。
その瞬間、教室の扉が開き――

「姫路瑞希、行きます！サモン！」

Ｆクラス　姫路瑞希　科学３９６点

Ｄクラス　平賀源二　科学９３点

「えっ？」

勝負は一瞬でついた。もちろん、姫路さんの一撃でだ。

～戦後対談～

「はぁ、まさか姫路さんがFクラスだっただなんて……」

平賀君がうち萎れながら言う。

まぁ、誰も姫路さんがFクラスだなんて思わないよね……

「試召戦争のルール通り教室は明け渡す。ただ、明日にしてほしい」

確かに今日は遅いし、その方がいいだろう。

「雄二、それでもいいよね」

「いや、設備の交換はしないつもりだ」

「えっ？」

雄二の言葉に耳を疑う。

「俺たちの目標はあくまでAクラスだ。極端な話、Dクラスの設備に興味はない。
もちろん、Dクラスがある条件をのんでくれればの話だがな」

「条件は？」

設備交換を免れるとあってか、平賀君は食いついてきた。

「それはここでは言えないから部屋を移そう」

「ああ、わかった」

第5問　格上の相手は油断する？（後書き）

うーん、ここまでは一日の出来事ですから特色が付けづらいですね。
一応、所々オリジナル要素はいれていますが……

Dクラス戦決着。
そして明久の召喚獣におとずれた不具合!?

次回もお楽しみください！

第6問　不幸の恋文（前書き）

今回は会話パートですので会話文が多めです。

第6問　不幸の恋文

～数分後の教室～

「みんな新学期そうそうご苦労だった。今日は遅いし、明日は回復試験があるから帰っていいぞ」

雄二の言葉にぞろぞろとFクラス生徒が帰り始める。

「そういえば雄二、Dクラスの設備を交換する代わりにだした条件ってなんだったの？」

「悪いが、それは秘密だ」

「ちぇっ、雄二の意地悪」

「なんとでも言え」

悪態をつく僕に対して雄二は何食わぬ顔だ。

「明久よ、ちとこちらを手伝ってくれんかのぅ」

秀吉が立て付けの悪い窓を開けるのに苦戦している。換気でもするつもりだろうか？

「うん、今いくよ」

「あのぅ、坂本君ちょっといいですか？」

僕が秀吉の方へ行くと同時に姫路さんが雄二をつれて廊下に出ていった。
なにを話すのか気になるが、秀吉を手伝ってあげなきゃいけないから……

いや、やっぱり気になるので窓からそっと覗くことにする。
なにやら二人で話しているようだが、なにを話しているのかは聞こえない。
ただ、姫路さんが恥ずかしそうにもじもじしている事だけは分かる。
どうやら雄二とはこれからについて話し合う必要がありはそうだね

「覗きとはお主も趣味が悪いのぅ」

いつの間にか隣にいた秀吉が僕に言う。
ただ、自己紹介の時に地雷を踏みまくってた秀吉には言われたくない。

「……覗きは犯罪」

一番言われたくない人物こと、ムッツリーニに言われてしまった。
確かに正論だが、ムッツリーニに言われると癪にさわる。

「さぁ、吉井に木下、土屋も覗きなんてしてないで換気を手伝って」

島田さんの言葉に僕たちは渋々と窓を開けにいく。

雄二ＳＩＤＥ

「あぁ、俺ももともと興味があったんだがきっかけはあいつの一言だ」

「じゃあ明久君は……」

目の前の姫路が嬉しそうだが恥ずかしそうな顔をしている。

「さあな。振り分け試験でなんかあったみたいで、それで譲れないもんでもあったんだろ？」

からかうように姫路に笑いかける。

「振り分け試験ってことは……」

「俺はこれ以上言えないが、姫路の想像は大方間違っていないと思うぞ」

そう、いくら記憶を失おうとも、何度記憶を失おうともあいつの想いは変わることはない。

きっと、全てを忘れようとも変わることはない。あのまっすぐな気持ちも想いも全て。

俺は無条件にそう信じれた。

明久ＳＩＤＥ

「雄二、姫路さんとなに話してたのさ」

帰り道、隣を歩く雄二に放課後の事をたずねる。

「あぁ、誰かさんの誰かさんのこれからについてだ」

どうやらこいつは本格的に僕の敵に成り下がったようだ。

「雄二、僕も雄二と話したい事があるんだ」

「俺は構わないが明久、お前は鞄どこに忘れてきた？」

「えっ？」

見ると手に持っていると思っていた鞄がない。

「教科書を忘れるならまだしも、普通鞄を忘れるか？」

「おかしいなぁ、なんの違和感もなかったよ」

「それはお前が普段から空同然の鞄しか持っていないからだろ」

言い返したいが、図星すぎてなにも言えない……

「まぁいい。明日はＢクラス戦なんだから、今から学校戻って取ってこい」

「うん、わかったよ」

はなっから雄二が付き合ってくれないのは分かっているのでひき止めたりはせず、学校に向かって走る。

ガラッガラガラ

２－Ｆの立て付けの悪い扉を開ける。

あれ姫路さんだ。どうしたんだろう？

自分のちゃぶ台に座り、何かを書いている姫路さんに近づく。

「姫路さん、なにしてるの？」

「ふぇ！？わわっ！？あっ、明久君！？」

姫路さんの驚きと共に何かを書いていた紙が、僕の前に舞い落ちる。

『あなたのことが好きです』

そんな一文が目に入る。

「明久君、それはそのぅ……」

それを拾いあげ、姫路さんに手渡す。

「変わった不幸の手紙だね」

『こいつ認めない気だ！？』

黙れ、僕の中の悪魔！

「明久君、それはすごく困る勘違いなんですけど……」

「今度僕が正しい不幸の手紙の書き方教えてあげるよ」

『そんなもん知らないだろ！』

いいや、今なら雄二に対して幾万通りもの不幸の手紙をだせる自信があるよ。

「そのぅ、不幸の手紙じゃないんですけど……」

「嘘だ！現に僕はこんなにも不幸な気持ちになってるじゃないか！」

『いい加減認めろよ』

「違うんです」

姫路さんが優しく僕の手を掴む。まずい、これは非常にまずい……なんとかして話題を繋がなければ……

「相手は同じクラスの？」

「はい……」

姫路さんが恥ずかしそうに言う。

『雄二も同じクラスだしな』

いちいち追い討ちをかけないでよ！

「そいつのどこがいいの？外見なんて良くもないし」

『自分の事を棚にあげるなよ』

「いえ外見じゃなくて、もちろん外見も好きですよ」

『諦めろ、これはマジだ』

諦めたら、そこで試合終了だろ！？

「まさか中身も？」

「はい……」

「確かに肝臓とか強そうだけど、頭の中身は軽そうだよ？」

『今のお前なら現実逃避大会でギネスとれるよ』

そんな不名誉なギネスなんかいらないよ！

「それは体と頭の話なんですけど……」

「まさか性格も？」

「はい、優しくていつも明るくて元気でずっと私の憧れだったんです」

「そう……その手紙……」

「はいっ！？」

ここは素直に応援してあげよう。

「その手紙うまくいくといいね」

「はいっ！」

満面の笑みの姫路さんは本当に幸せそうだった。

「その明久君、よかったら私がこの手紙を書こうと思った理由を聞いてくれますか？」

「理由？僕なんかでよければ聞くけど」

「私、いつも一番になれないんです」

そう姫路さんが切り出す。僕からしてみれば色々と凄いと思うけどなぁ

「なにをしても一番になれなくて、いつも誰かの力を借りているんです。
だから、だからこそ、この想いだけは誰にも負けないように一番でいたいんです。例え、それが届かないとしても、その人の記憶に残らなくても一番でいたいんです」

「姫路さん……」

僕はこんなにもまっすぐな想いにこたえる術を持ち合わせていない。

いいや、そもそも僕に向けられた想いでもないのに答えようとすること自体が間違えなんだ。

ただなぜだか、この言葉は僕に向けられている気がしたんだ

「帰ろうか姫路さん」

結局、僕はその想いを確かめられるほど勇気はない。

「そうですね」

ただ近くで姫路さんが幸せならそれでよかったんだ

第6問　不幸の恋文（後書き）

ラブレターのパートを少し加筆しましたがいかがでしょうか？
そして次回から日付が変わって、いよいよ設定が活きてきます！
感想、ご意見等もいただけると嬉しいです。

では、次回もよろしくお願いします

第7問　記憶の欠片（前書き）

今回から日付が変わります。ただ、時間的にはほとんど進みませんが……

第7問　記憶の欠片

瑞希ＳＩＤＥ

「おやすみなさい明久君。また明日、初めての二年生で……」

寝ている明久君の側から離れ、試召戦争でほつれてしまった明久君の制服を鞄にいれます。各部屋の明かりも消して私は自分の家に帰りました。

～次の日～

昨日はＤクラスと試召戦争をして見事、勝利を納めました。そして今は明久君の家に向かっている訳なんですが、今日はなんて言ってごまかしましょうか……

でも本当に明久君に真実を伝えない事が明久君のためになるんでしょうか？

今の明久君は記憶の許容範囲が一日分しかなく、このような考え込む事を言うのはご法度だって分かってますけど、やはりこれではいけない気がするんです。

そうこう悩んでいる内に明久君の家までついてしまいました。

ピンポーン

「はーい」

昨日と同じように私服姿の明久君が出てきます。私はあと何回この光景を繰り返せばいいんでしょうか？
だけど心中を明久君に知られる訳にはいかないので、なるべく笑顔で接します。

「明久君、おはようございます」

昨日と同じように明久君は呆けています。だから私も昨日と同じ言葉をかけることにします。

「明久君、今日から学校ですよ」

「えっ？」

明久君が驚きと共に少し考え始めます。

「つっ！」

昨日と同じように明久君は頭を押さえてうずくまりだします。

「あっ、明久君大丈夫ですか！？」

私は明久君に駆け寄り首を抱えあげます。

「だっ、大丈夫だからし……んぱ――――」

「明久君！明久君！」

気を失った明久君を揺さぶりますが、起きる気配がありません。やっぱり昨日となにも違わず……

「うっ……」

居間に布団をしき寝かせていた明久君が目を覚ましたようです。

「明久君、大丈夫ですか？」

「うん、もう平気だよ」

そう言って無理に起き上がろうとする明久君を両手でそっと押し返します。

「まだ起き上がったら危ないですから、ゆっくりしててください」

「本当にもう大丈夫だって」

そう言って再度起き上がった明久君の顔は確かにさっきまでの無理をしている顔ではありませんでした。あの日から明久君は度々、頭痛で苦しむ事がありますけど原因は分からずじまいです。

「それより今日から学校って本当？」

「正確には昨日からなんですけど、明久君は停学処分を受けていましたから今日からなんですよ」

とっさに嘘をつく。昨日と同じ嘘をついてもよかったんですが、それでは試召戦争の事を説明しづらくなっちゃいますから……

「そうだったかなぁ……？」

「きっと明久君は疲れてて覚えてないだけですよ」

ごめんなさい明久君……

私は明久君に何度も嘘をついています。多分、これから毎日、何回も……

「そうか、そうだよね。じゃあ制服に着替えてくるよ」

立ち上がる明久君の腕を掴み、鞄から制服を取り出します。

「明久君の制服はここです」

「えっ？」

「明久君は坂本君とはしゃいで制服を破っちゃったじゃないですか」

ごめんなさい明久君……

本当の明久君の制服は私の家にあるんです。明久君が私を庇ってボロボロになってしまった制服が……

「ほら、早く着替えてこないと学校に遅れちゃいますよ」

「あっ、うん……」

明久君は制服を持って自分の部屋に着替えにいきました。

桜舞い散る中、私と明久君はゆっくりと登校します。昨日と違って明久君が気を失っている時間が短かったのでのんびりと言っても時間に余裕がありそうです。

「そういえば姫路さんは振り分け試験の日、熱をだしちゃったからFクラスなんだよね」

「そうですね」

「ごめんね、力になれなくて」

申し訳なさそうに言う明久君は以前となんら変わりのない明久君です。そう、私の大好きな優しい明久君です。

「明久君が謝る事なんてありませんよ。それに――」

「それに？」

「明久君と同じ2年Fクラスなのは嬉しいですよ」

明久君の記憶に残らないのをいい気になって少し大胆な発言をします。

「そっか、僕もFクラスなんだ。僕も姫路さんと同じクラスで嬉しいよ」

やっぱり明久君はこういう反応なんですね。だけど、ここで気づかれるよりはいい気がします。だって、ここで想いが伝わったとしても明日になれば、またいつもの関係なんですから……

「これからたくさんの思い出をつくってきましょうね」

「うん」

記憶に残るのは私だけですけど、今一緒にいるこのときを大切にしていきたいです。できれば、ほんの一部分でも明久君の記憶に残ってくれる事を願って笑いかけます。

～文月学園～

学校に着くとクラスにはまだ誰もいませんでした。

「一番乗りだね」

「そうですね、一番乗りですね」

誰もいない教室で二人っきりというのは、なんだか非常に気まずい気がします。

『ピンポンパポーン

二年Ｆクラスの姫路瑞希さん、至急学園長室までおいでください』

校内放送での呼び出しです。

「明久君、ちょっと行ってきますね」

「あっ、うん……」

少し心配ですけど、明久君をおいて学園長室まで向かいます。

～約３０分後～

学園長先生の話は明久君の状況についてのものでした。あの事件の事は私の両親から学校には伝えてありますから、近況報告といったところでしょうか。

ガラガラ

教室に帰るとクラスの２／３くらいの生徒が来ていました。

「よお姫路、明久のやつ知らないか？」

「クラスの中にいないんですか？」

坂本に質問で返しながらクラスを見回しますが、確かに明久君はどこにもいません。

「それがＦクラスどころか、どのクラスにもおらんのじゃ」

「ほんと吉井はどこに行っちゃったのかしら」

「……危険」

木下君に美波ちゃん、土屋君も心配そうにしてます。

ガラッガラガラ

「ふぅ、間に合った」

私の後ろの扉が開き、そこには真新しいちゃぶ台を持った明久君がいました。

「あっ、姫路さん。はい、約束してたちゃぶ台」

驚きで声がでません。だって、その約束をしたのは昨日で明久君は覚えているはずが……

「ひっ、姫路さん!?」

気づくと私は明久君に抱きつきながら泣きじゃくってました。多分、周りからは好奇の目で見られているでしょうけど、私にはこうする以外の方法がない気がしたんです。

「っぐ……あ…明久君…ぐす…」

涙が止まりません。なぜだか分かりませんが明久君は昨日の約束を覚えていて……明久君にとって存在しないはずの昨日の記憶が一部分でもあって……

「どっ、どうしたの姫路さん！？」

明久君が驚いて離れようとするのを強く抱きつき阻止します。ここで明久君を離したら、またどこかへ行ってしまいそうで……またなにも覚えていられない明久君に戻ってしまいそうで怖かったんです……

「行かないでください……」

ただ一言、そう言うのが精一杯でした。

「大丈夫」

私の頭に優しく手がのせられます。

「大丈夫だよ姫路さん。僕はどこにも行ったりしないよ。ずっとここにいるから安心して」

「明久君……」

優しく乗せられた手につい目を細めてしまいます。明久君の記憶がなぜあるのかは分からないですし、調べる事もできません。ただ、ここに明久君が、明久君の優しい手が私のすぐそばにあるという事実が幸せです。

明久君……

もし、明久君の記憶が一生戻らないとしても、明久君と同じ時を共有できないとしても……大好きです

第7問　記憶の欠片（後書き）

なぜだか残っていた明久の記憶！？
果たして彼の身になにが！？
次回は明久視点でお楽しみください

第8問　記憶の欠片2（前書き）

ＰＶが１５０００を越えました！
これからも本作をよろしくお願いします

第8問　記憶の欠片2

明久ＳＩＤＥ

何が起きているかわからない。姫路さんが放送で呼ばれて一人になってしまったから、約束してあった新しいちゃぶ台を作って持っていった。そうしたら姫路さんは僕に泣きながら抱き着いてきた。本当に分からない事だらけだ。姫路さんを泣かしたのは僕なんだろうか？ならなぜ泣かせてしまったのか？ちゃぶ台が気に入らなかったから？僕が妙なお節介をやいたから？それとも誰かにいじめられたとか？

どれも的外れな気がする。僕では姫路さんを泣き止ませる事はできない気がする。悔しいけど僕はどうすることもできやしない……

だけど、いつまでもこうしていたら姫路さんにあらぬ噂がたってしまう。だから姫路さんを僕から引き離そうとする。だけど姫路さんはまわした手を尚更強く握り、離そうとしてくれない。

「行かないでください……」

力なく、か細く姫路さんが呟く。それはまるで雛鳥が親鳥から離れるのを恐れるような呟き。『護ってあげたい』という気をおこさせる声。それは僕の中にいる僕じゃない僕にもすみわたるような訴え。

「大丈夫」

姫路さんの頭にそっと手をおく。

「大丈夫だよ。僕はどこにも行ったりしないよ。ずっとここにいる

から安心して」

周りから好奇の目で見られるかもしれない。でもここで姫路さんを突き放してしまったら、僕は大切なものを失ってしまう気がする。それに目を細めて幸せそうにしている姫路さんをさっきの泣き顔に戻したくない。悲しくて泣いているのとは違ったようだけど、それでも泣き顔より幸せそうな顔の方がいい。それは姫路さんに限った事ではなく、誰にでも言えること。バカな僕にでも誰かを笑わす事ぐらいはできるから。それが僕にできる精一杯なんだ。

「（瑞希、みんな見てるわよ）」

「ほぇ!?ほわわわ!?明久君すいません!」

何かを島田さんに耳打ちされた姫路さんが離れる。正直、ちょっとおしい気がするけど仕方ない。僕と姫路さんじゃあ不釣り合いな事は明確なんだから……

「謝ることなんてないよ。それよりもう大丈夫?」

なんで泣いてたか分からないけど、僕で力になれるならなりたいものだ。

「大丈夫ってなにがですか?」

「なにがって、姫路さんが泣いてたから何かあったのかと思って」

「そっ、そうでしたね。なんでもないんです。ただ、目にホコリが入っただけですから」

ホコリが入っただけであんな泣き方はしないと思うけど。やっぱり姫路さんはどこかが抜けてる気がする。

「えっ、でも「明久、人の事情に首突っ込むのは野暮ってもんだ」事情を聞こうとする僕を雄二が制止する。確かに雄二の言う通り、人には聞かれたくない事情があるだろう。僕もあの姉の存在はみんなに知られたくはないしなぁ……

「それはそうと明久よ、なぜ新しいちゃぶ台を作ってきたのじゃ？」

「あぁ、これは昨日姫路さんとやkっく!?」

また今朝と同じ頭痛に襲われる。いったいなんなんだこの頭痛は!?それに昨日?昨日は姫路さんと会ってなんかいないし……自分で言った言葉なのになにも分からない。なんで僕はちゃぶ台を作ったんだ!?いつ姫路さんと約束したんだ!?僕はいったいどうしちゃったんだ!?答えのでない疑問が頭の中に幾重にも渦巻く。みんなの僕を呼ぶ声がどんどん遠くなっていく。いや、僕の意識が薄れていってるんだ……

誰かが僕のそばに駆け寄ってくる。だめだ……まぶたが重たくて開けることができない……

やわらくて、温かな手が額に重ねられる。まるで僕の頭痛を取り去ってくれるかのようだ。ほら、頭痛がだんだんと薄れていって……

「治ったぁぁぁ!?」

思わず跳ね上がりながら叫んでしまう。さっきまで僕を苦しめていた頭痛はきれいさっぱりなくなっていたのだ。

「明久君、もう大丈夫なんですか？」

正座をしながら姫路さんが驚いたように言う。正座をしているところを見ると、さっきの手は恐らく姫路さんのものだろう。そういえば今朝も姫路さんが看病してくれたんだっけ。もしかしたら姫路さんは看護職が向いているのかもしれない。

「あっ、うん。もう平気だよ」

「明久が急に倒れたから心配したのじゃ」

「ほんと、どうなるかと思ったんだからね」

「……無事で安心」

みんなの心配してくれている言葉が胸にしみる。僕はこんなにも友達思いな人たちを友達にもてているのだから幸せ者だろう。

「姫路、少しいいか？」

「あっ、はい」

雄二が姫路さんを誘って廊下にでる。いったいなんの話をするんだろう？

「吉井、窓から覗くんじゃないわよ」

なぜか島田さんにやろうとしていることがバレた。さすがに、ここで島田さんに逆らって再起不能になるのは嫌なので、おとなしく引き下がる。それに新しいちゃぶ台を姫路さんの古いちゃぶ台と交換

しなければと思い、持ち上げる。

「明久よ、もしよかったら演劇部に古いちゃぶ台をくれんかのぅ？」

「うーん、姫路さんも新しいちゃぶ台があればいいと思うからいいんじゃないかな？」

「恩にきるのじゃ」

秀吉の笑顔は今日もまぶしい。ただ、秀吉がいつもよりも（ムッツリーニ的な意味で）男らしく思えるのは気のせいだろうか？まぁ何はともあれ、古いちゃぶ台を処分する手間が省けたことは確かだ。

「そういえば吉井は試召戦争について知ってる？」

「あっ、姫路さんに聞いたから大方は知ってるよ。確か昨日、Ｄクラスに勝ったんだよね。ごめんね力になれなくて」

登校途中に姫路さんに教えてもらったことを話す。あーぁ、僕も試召戦争やりたかったなぁ……

「明久が気にする事ないのじゃ」

「そうよ、吉井には今度の時に目一杯働いてもらうんだからね」

「……重労働」

「ははは、お手柔らかにたのむよ」

雄二ＳＩＤＥ

俺と姫路は教室から出て、なるべく人目につかない物陰に移動した。その方が明久や姫路のためにもなるし、なにより俺の命のためにもなる。こんな怯えながら学校生活をおくるくらいなら、春休み初日に翔子に頼るんじゃなかったと今更ながら悔やむ。

「その坂本君、話というのは……？」

「分かっているとは思うが、明久の話だ」

物陰から周りを見回す。もしこの話がＦクラス以外の連中にバレたら非常に危険だ。特に次の目標であるＢクラスに聞かれたとあったら、これ以上ない程のディスアドバンテージだ。どうやらＨＲ開始前とあってか、廊下にはだれ一人として出ていないようだ。

「あいつの記憶障害は治っていないんだよな？」

「多分、治ってないと思います。今朝行った時も、昨日と同じ反応をしてましたし……」

「そうか……」

なら、なぜ明久は姫路とのちゃぶ台の約束だけ覚えていたんだ？あいつの中で覚えていられる記憶と覚えていられない記憶があるのか？いいや違う。あいつの記憶の許容範囲はその日、一日分のみだから残るはずがないんだ。なら、どうしてだ？明久の中でなにがおこっているんだ！？

「あのぅ、坂本君？」

中々、次の言葉を発しない俺を不思議に思ったのか、姫路が心配そうな顔をしている。

「あぁ、すまないな姫路。そういえば、春休みもあいつは頭痛に悩まされた事があったよな？」

春休みに俺と姫路と明久でいる時にも、何度かあいつは頭痛に悩まされていたことがある。

「そうですね。原因は分からずじまいですけど……」

確かに原因は分からずじまいだ。だが、今日のあれを見て確信したことがある。

「だが、解決策がない訳じゃない」

「明久君の頭痛を治す方法があるんですか？」

「ある。それもすごく簡単な方法だ」

最初から憶測として候補にはあがっていたが、まさか本当にこれが解決策だとは思わなかった。

「その方法は姫路、お前が明久に触れることだ」

「私が明久君にですか？」

「あぁ、姫路が明久に触れるだけで、明久の頭痛は治る。春休みのピクニックや山菜採りの時だってそうだっただろ？」

「あれはただ、私が看病していただけで……」

どうも姫路は明久関連の事となると卑屈になりやすい。それは明久にも言えるか。

「そんなに卑屈なるなよ。現状で明久を頭痛から解放させてやれるのは姫路しかいないんだぞ。だから頼んだからな」

「私にできるでしょうか……」

「俺や他のやつらはどうしようもないんだ。それに合理的に明久のそばにいられるぞ」

「かっ、からかわないでください！」

姫路が顔を真っ赤にしながら言う。ここまで見え見えの好意を抱いているんだから、気づいていないのは当の明久くらいだろう。いや、姫路も明久の気持ちに気づいていないんだから、お互い様ってな。

「っと、福原先生も来たことだし教室に戻るぞ」

廊下の角に担任の福原先生を見据えながら、俺と姫路は教室に戻る。

～ＨＲ終了後～

俺は今後の作戦を話すために壇上に上がる。

「みんな、昨日はDクラス戦ご苦労だった。今日の午前中で補給試験を受けて午後にBクラスと戦争だ。準備はいいかー！」

「「「「おおーーー！！」」」」

上々の反応だ。試召戦争では点数は重要な要素だが、ときにモチベーションの方がものを言うときがある。うちのクラスの強みは、このモチベーションの高さだろう。もちろん、設備を良いものにしたいという理由もあるが、全員が明久に感化されている。

まったく、すごいやつだよ。記憶はあいつの中でリセットされ続けていても、あいつの言葉や想いはみんなの中で生き、突き動かしている。明久、お前が今の状況じゃなきゃ、どういう学校生活をおくっていたんだろうな……

「雄二、僕は補給試験やる必要がないけど、どうすればいいかな？」

「そうだな。じゃあ、みんながテスト勉強をしている間に先生を呼んできてくれ」

本当は明久も補給試験が必要なんだが、どう言いくるめるかだな。

「そうだね。僕はテスト勉強の必要がないから行ってくるよ」

「いや、お前はバカだから補給試験を受けろ。まぁ、テスト勉強の必要はないから呼んできてはもらうが」

「ったく、人使いがあらいなぁ」

文句を言いながらも先生を呼びに行ってくれるあたり、あいつの人のよさがでているのだろう。

ガラッガッガッガラガラ

明久が出ていったものの数秒後に扉が開く。入ってきた人物は根本恭二と数人の取り巻きだった。根本恭二とは何かと悪い噂がつきまとう人間でテストはカンニングの常習犯、喧嘩に刃物はデフォなどと、とにかくいけすかないやつだ。

「Bクラスの代表がうちになんのようだ？」

「なんの用って、宣戦布告に決まってるだろ？」

こちらを蔑んだ目で見てきやがる。つくづくいけすかない野郎だ。

「上位クラスが下位クラスと試召戦争しても意味ないだろ？」

「なら、負けたクラスは勝ったクラスの言うこと聞くというのはどうだ？」

こんな事を提案してくるなんて何か策があるに違いない。だが、策ならこちらも用意してある。いっちょ、知恵比べといこうじゃねえか。

「わかった、そのルールでのもう。こっちもちょうどお前らと戦おうと思っていたところだしな」

なにより、わざわざこちらが出向く手間が省けたというものだ。

「開始時刻はいつがいいんだ？」

「俺たちは補給試験を受けなければいけないから午後にしてくれ」

「わかった、午後だな」

根本はそう言うと足を外に向ける。だが、その足が教室の敷居をまたぐ事はなく、こちらに向き直りほくそ笑む。

「言い忘れてたが、俺は吉井の秘密を握っている。吉井のやつにばらされたくなければ、俺を討たないことだな」

それだけを言い残し、根本は教室から出ていった。

俺たちは完璧なまでにはめられてしまったんだ……

第8問　記憶の欠片2（後書き）

かなり不利な幕開けとなってしまったBクラス戦。果たして打開策はあるのか！？

次回もよろしくお願いします

第9問　突破口は渦中の中心（前書き）

なかなか更新できなかったのに、その間にお気に入り登録してくださった方々どうもありがとうございました

第９問　突破口は渦中の中心

明久ＳＩＤＥ

「ねえ雄二、今回はやけに防御に人員をまわしすぎじゃない？」

昼食前に雄二がクラスみんなにＢクラス戦の作戦を教えているところに質問する。

「いや、ほらあれだ。ＢクラスといえばＡクラスに次ぐ強豪だろ？だから、しばらくは籠城して様子をみるんだ」

雄二にしてはやけにはぎれが悪い言葉を疑問に思いながらも質問を続ける。

「それにしても４０人も防御にまわる必要性がないと思うんだけど？」

そう、僕たちのクラスは約５０人。その内の４０人も防御に割くなんて滅多にないことだ。

「それはあれですよ。その、坂本君は攻め込むタイミングを見計らってるんです」

僕の横から雄二に助け船をだしたのは姫路さんだ。

「あぁ、姫路の言う通りだ。なるべく狭い通路で先見隊が粘り、隙をみて総攻撃を仕掛け根本を討つ！」

いつもなら力強く、頼もしいはずの雄二の言葉はなぜだか心細く、なにか不安をもっているように感じた。

～午後　試召戦争開始時刻～

「先見隊任せたぞ！」

「「「おーお！！」」」

僕と姫路さん、島田さんを含む１０人はＦクラスから飛び出した。
今の選択科目は数学だから姫路さんはもちろんのこと、島田さんも戦力になるはずだ。

余談なのだが、お弁当はわざわざ姫路さんが作ってきてくれていた。
才色兼備という姫路さんのイメージ通り、彩り豊かなお弁当は美味しさもさることなから、どこかで食べたことがあるような懐かしさえ感じた。本当に前、食べたことがあるように……

「いたぞ、Ｂクラスだ！」

姫路さんのペースに合わせている僕たち三人よりも先行している横溝君が叫ぶ。
前を見れば確かに３人のＢクラス生徒がゆっくりと歩いてきている。
下位クラス、それも底辺のＦクラス相手ならば歩いてでも充分ということだろうか？

「いくぜ、サモン！」

「みせてやるぜ、サモン！」

「Ｆクラスだからってなめるなよ、サモン！」

横溝君、今井君、前川君の召喚獣が出揃う。

「バカは引っ込んでろよ、サモン！」

「ちっ、姫路がいるぞ！サモン！」

「なら早めに片付けて総攻撃だ、サモン！」

さすがにＤクラスと試召戦争しただけのことはあってか、姫路さんの情報は相手にも伝わっているみたいだ。

「吉井、瑞希、急ぐわよ！」

「うん！」

「はい！」

当然ながら手数が同じの場合は僕ら、Ｆクラスに勝ち目はないから三人を助けにいくために走り出す。

雄二ＳＩＤＥ

俺たちは今、Fクラスの教室内でいる。なんとかして俺の思惑通りに事が運べばいいんだけどな……

「雄二よ、少し時間をもらっていいかのう？」

「秀吉か、どうした？」

話しかけてきたのは木下秀吉。

こいつは俺の一年の頃からの友達であり、演劇部のホープ、文月学園内で多数のファンクラブをつくられるなどの様々な面があるやつだ。最近は色々な意味でFクラスに相応しくなってきている。

「疑問なのじゃが、なぜ明久を先見隊にいれたのじゃ？」

「その話は少し待て」

俺はムッツリーニに右手で合図を出す。

「……盗聴機類はない」

「ありがとなムッツリーニ」

「……これくらい普通のこと」

すばやく動き報告をすませるムッツリーニ。こいつはこういった類いのことをやらせたら全生命体の中でもトップクラスだろう。

「で、話に戻るわけだが、俺たちの中で根本を討つことができるのは誰だ？」

「なにを言っておる。わしらが根本を討ってしまえば、明久に秘密をばらされてしまうのじゃぞ」

「……右に同じく」

否定的な二人の顔は心から明久を心配しているものだった。

ったく、あいつには人を惹き付けるなにかがあるんだろうな。いや、かくいう俺もその一人か……

「いや、一人だけ根本を討つことができるやつがいる。それは――」

わざともったえぶったようにとめる。

「明久本人だ」

普段、あまり表情に出さない二人が驚いたのも無理はない。なんたって渦中の人間を使った大勝負なんだからな

「明久にできるわけが――――そうか、わしらは根本を討つことができぬという枷があるが、明久にはその枷がないのじゃ！」

「あぁ、あの場にいなかった明久にはその制約はない」

「……でも所詮は屁理屈」

ムッツリーニが否定的な態度をとる。普段から危機にさらされているやつだから仕方のないことだろう。

「あぁ、これは屁理屈だ。だが、明久が根本にこの事を聞かされる前に討てれば、この勝負俺たちの勝ちだ」

「そして、その突破力をえることができるのは何も知らぬ明久だけということじゃな」

「その通りだ。ただ、この作戦には大きな欠点がある」

「……用意できるものなら用意する」

さっきとは違い、ムッツリーニも乗り気のようだ。

「いや、用意するものじゃないんだ。この作戦に必要なのは明久に対する起爆剤だ。それも明久が怒り狂うほどのな」

明久ＳＩＤＥ

「明久君、右です！」

姫路さんの指摘をうけ、召喚獣を左に跳ばせる。僕の召喚獣が跳びさったのほぼ同時にもといた場所に相手の槍が突き刺さる。

「あっ、ありがとう姫路さん」

「はいっ！あっ、美波ちゃん危ないです！」

姫路さんの召喚獣についている腕輪から熱線が発せられ、島田さんの召喚獣に襲いかかろうとしていたＢクラス生徒の召喚獣、二匹が巻き込まれていく。
この腕輪は点数が一定以上の生徒の召喚獣に付属するらしいけど、腕輪の能力を使う度に点数が減ってしまうため何度も使えるものではない。

「瑞希、ありがとう」

「美波ちゃん、明久君、あと少しの辛抱です。頑張りましょう！」

姫路さんの言う通り、最初の三人と援軍としてやってきた十人も今は残すところ四人となっていた。
それに比べ、僕らの戦死者はたったの二人だ。これも一重に姫路さんと数学では点数の高い島田さんのおかげだろう。
ただ、姫路さんが腕輪を使ったのはさっきので三回目なのが不安ではあるんだけど……

「ウチらの力みせてやるんだから！」

「そうだね。残り四人、頑張ろう！」

雄二ＳＩＤＥ

「で、結局まとめると、明久を先見隊にいれたのは根本を討つため。姫路と島田をいれたのは明久の補助と姫路を温存して根本に警戒心を抱かせないため。

防御要員を増やしたのは、姫路と島田に守らなきゃならない人員を減らすためだ」

秀吉とムッツリーニに説明したことを再度まとめ、説明する。

「考えあっての割り当てとは、さすが雄二じゃな」

「……策士」

「これくらいできないとクラス代表は務まらないだろ？それに俺たちの目的はＡクラスだ。こんなところで立ち止まっちゃいられないんだよ」

そう、俺たちの目標はＡクラスだ。いくら卑劣な手を使われようとも立ち止まってなんかいられないんだ。

明久ＳＩＤＥ

「これで終わりだ！」

Ｂクラス最後の一人の召喚獣を木刀でなぎはらい、一時的ながらも僕たちの勝利に終わる。

結局、損害はＢクラス１３人に対してＦクラスは３人。上位クラス相手には充分すぎる結果だろう。ただ――

「はぁはぁ……」

隣で辛そうにしている姫路さんに胸がいたむ。本来ならばＡクラスにはいれるだけの実力があるのに、今はこんな劣悪な環境で戦いを強いられている。

それはあの日、振り分け試験の日に僕が起こしたことが原因で……

「吉井、ボケッとするな！次の部隊が来たぞ！」

はっと我にかえり、眼前を見据えると、そこには１４～１６名のＢクラス生徒が見える。

さっきこそこちらは僅かな損害で済んだが、それは姫路さんや島田さんの助けがあってこそだ。

島田さんは体力があるが残り点数が少ない。姫路さんにいたっては体力も点数も限界にきてしまっているという状況だ。

そしてこの状況で僕にできることは一つだけだ。みんなより三歩ほど前に出て腹に力をこめる。

「Ｆクラス吉井明久がＢクラス全員に数学勝負を「挑みません！」

えぇ！？」

横から僕の晴れ舞台に飛び込んできた声に振り向くと、そこには姫路さんがいた。

「明久君はこの状況を坂本君に伝えるために戻ってください」

「でもそれなら姫路さんや島田さんが戻った方がいいんじゃ……」

当然ながら姫路さんや（数学に関しては）島田さんの方が僕よりも点数上限は上なのだ。ならば雄二への報告も兼ねて補給試験だって受けれるのだから、二人が戻った方が得策だ。

「じゃあ、この場を吉井に任せて何コンマ秒持つわけ？」

どうやら島田さんの考えでは、僕は一秒すらもちこたえれないらしい……

「それに体力なら明久君の方がありますから、Ｂクラスの方に追い付かれる事もありません」

確かに姫路さんの言うことにも一理ある。

例えばここで僕がＢクラスを請け負ったとしても、あの人数で避け続けることはできない。逆に姫路さんと島田さんに任せれば、僕がＦクラスに戻るだけの時間は稼げるだろう。だけどそれは――

「やっぱりダメだ。女の子二人をこの場に残しておくなんてできない」

「二人だけじゃないぜ」

「あぁ、俺たちを忘れてもらっちゃぁ困るな」

「いっちょ、派手に暴れてやろうぜ！」

「須川、横溝、今井……」

みんなの男気に涙がでそうになる。こいつらそんなにしてまで女子に好かれたいのか！

「大丈夫ですよ明久君。いざとなれば腕輪もあと一回使えますから」

「ウチだって本気だしてやるんだから」

「二人とも……
ごめん！必ず、戻ってくるから！必ず助けに来るからね！」

僕はFクラスに走り出す。
後ろでは戦いが始まったらしく、喧騒が聞こえてくる。こんな時になにもできない自分が嫌になる。

姫路さんたちを助けることもできない

庇うこともできない

一緒に戦うことすらもできない

「くそぉぉぉーーー！」

なら、今僕ができる精一杯を。僕にでもできる精一杯をやるしかないんだ！

第9問　突破口は渦中の中心（後書き）

Fクラスに一人戻る明久！果たしてどうなる！？

よろしかったら、感想・評価のほどよろしくお願いします

第１０問　クズと試召戦争と急展開（前書き）

ＰＶ２００００をこえました。ご愛読ありがとうございます。

第１０問　クズと試召戦争と急展開

明久ＳＩＤＥ

「雄二！」

Ｆクラスの扉を乱暴に開けて入る。

「どうした明久」

「今すぐ援軍を！このままじゃ姫路さんたちが戦死しちゃうよ！」

必要最低限の事のみを雄二に伝える。

「なら今すぐと言いたいが、今すぐは援軍はだせない」

「どうして！」

「相手が援軍が来ることを見越していた場合、なんらかの罠がはられてある筈だ。
だから、ムッツリーニの情報収集が終わるまで補給試験でも受けてろ」

悠長に言う雄二に腹がたってくる。

姫路さんたちは僕が援軍を連れてきてくれると信じて送り出してくれたのに、僕は期待に沿うことすらできないなんて……

「なら、いい。僕一人でも助けにいくから」

そう言い放ち、きびすを返そうとする僕の肩を雄二が掴む。

「待て明久。今のお前が行ったところでなんになる？姫路や島田の負担を増やすだけだろ？」

「それは……」

雄二に言われてはっとなる。こいつは僕とは違って、対極を見据えて行動しているんだ。

それに比べて僕は目先の事しか見ていなかった。僕はなんてバカだったんだろう……

「わかったよ、雄二。その代わり、援軍には僕も加わるからね」

「言われなくても入れるつもりだバカ野郎」

美波ＳＩＤＥ

「はぁはぁ……」

体力に自信のあるウチでもさすがにきつくなってきたわね……

もう残っているのはウチと瑞希の２人だけ。それに比べて相手は残り１２人もいる。

「瑞希、ウチらもそろそろ潮時ね」

相手を見据えながらも、ウチの背中をカバーしてくれている瑞希に声をかける。

「明久君はもうFクラスについたでしょうか……」

「いくらバカでもついたんじゃない？」

こんな状況で他人の心配をできる瑞希には頭が下がる。
坂本から吉井を最優先で守るようにとの指示がウチと瑞希には密かにでてたけど、本当に献身的な子だと思う。

「よかったです。なら――」

瑞希の召喚獣に付いている腕輪が光りだす。
って、ちょっとまって！瑞希は吉井がいなくなってからも一度、腕輪の能力を使っていた。そして瑞希が吉井に別れ際に言った言葉には「あと一回なら腕輪を使える」というものが入っていた。
つまり瑞希が今、腕輪の能力を使えば消費できる点数が足りなくて戦死となってしまう！

「瑞希ダメよ！」

「きゃあ！？」

とっさに瑞希を突き飛ばす。幸い、瑞希に外傷はないようだ。それに瑞希が集中力を欠いたせいか、腕輪の輝きも収まっている。

「あっ、危ねぇ……」

「あいつらが仲間割れしてくれなかったら熱線にやられてたところだった……」

安堵しているBクラス生徒を他所にウチは突きとばしてしまった瑞希に駆け寄る。

「ごめん瑞希」

「いえ、私の方こそ先走った行動をしてしまいすいません」

やっぱり瑞希は吉井の目的が果たされたから、後に続くであろう援軍の負担を少しでも少なくするために、自らの命をなげうとうとしていたのだ。

「さぁ瑞希、ウチらはウチらでできる範囲まで粘るのよ！」

差し出したウチの手を瑞希が掴む。

「はいっ！頑張りましょう美波ちゃん！」

「いやぁ～素晴らしい友情劇をどうもありがとう。ゴミ捨て場に咲く二輪の花」

後方から聞こえてきた嫌みな声に振り向くと、そこにはBクラス代表の根本がいた。

「Bクラス代表がじきじきにでてくるなんて余裕じゃないかしら」

思いっきり根本を睨み付けてやりながらも瑞希に目配せをする。ここで根本を討ってしまい、戦後対談で口封じなり先生に言うなりす

れば万事解決だ。

「おやおや、そんなに怖い顔するなよ。じきに俺の女になるんだからよ」

「なに言ってんのあんた。ウチも瑞希もあんたみたいな性悪の彼女なんかにはならないわよ！」

瑞希の召喚獣が根本の召喚獣に攻撃するまであともう少し……

「おっとキツいねえ。これでも俺は優しいんだぜ？ほら、こんな落とし物まで拾ってやったんだからさ」

そう言って根本は右ポケットから桜色の可愛らしい便箋を取りだし、ほくそ笑む。

「そっ、それは……」

瑞希が明らかに動揺してしまっている。おそらくあの便箋は吉井の事も絡め、完璧に瑞希を封殺するための道具。これでは瑞希に根本を討たせるのはほとんど無理。ならウチが――

「おおっと、言い忘れてたが俺は戦後対談で口封じされても吉井にバラすぜ」

「卑怯よ！」

思惑が外れた以上、ウチも手も足もでない。

「おいお前ら、こいつらを連れてけ。こいつらは捕虜だ」

根本が後ろにいるＢクラス生徒に指示をだすと何人かの生徒がロープを持ってきて、ウチらの手首、足首を縛っていく。当然ながらウチらは抵抗することすらできなかった。

明久ＳＩＤＥ

「……報告」

補給試験が今さっき終わった僕と雄二の所にムッツリーニがやってくる。

「ご苦労だったムッツリーニ」

「……これ」

ムッツリーニが雄二にビデオカメラを渡す。この中に今の状況が録画されているということだろう。録画が再生される。

そこには姫路さんと島田さんだけになりながらも、懸命戦う二人の姿。どうやら音声機能はないらしく、なにを言っているのかはわからない。

後に続く援軍のために腕輪の能力を使い、戦死しようとした姫路さんを（ちょっと強引な方法で）とめる島田さんの姿。

そして根本君がポケットからとりだした便箋に動揺、悲しみ、恐れを含んだ顔をし、動けないでいる姫路さんの姿が映っていた。

「クソ野郎が……」

「明久どうした!?」

思わず漏れた僕の言葉に雄二が驚く。
だけど、今大切なのはそんなことじゃない。
なぜだか根本に無性にむしゃくしゃした。
許せないなんて生ぬるいものじゃない。
姫路さんを悲しませたことを後悔させてやる!
あの便箋がなになのか僕にはわからない。
だけど、根本はそれを使って姫路さんを悲しませていた。
それは、それだけ姫路さんにとってあの便箋が大切だという証拠。
僕にはまったく関係のないものだとしても、姫路さんが僕にこの事に関わってほしくなくても関係ない。
これは僕個人が根本の事を無性に許せなくて、腹がたって喧嘩をうりにいく。ただ、それだけの事だ。

「ムッツリーニ、二人の居場所は?」

「……おそらくBクラス」

「ありがとう」

ムッツリーニに礼を言い立ち上がる。

「雄二、悪いけど僕を戦線から外してほしい」

「構わない。お前みたいな雑魚はいてもいなくても変わりないからな」

こういう時の雄二は話が早くて助かる。

「ただし、こっちも好き勝手やらせてもらうからな」

「うん。もといい、僕が好き勝手に行動するんだから構わないよ」

多分、雄二はまた対極を見て行動している。本来なら僕もそれに従うべきなんだろう。だけど雄二は僕の気持ちを理解してくれた。目の前の事しか見えなくて、わがままな理由で戦線を外れる僕の気持ちを。

「総員に告ぐ、今から明久のために道を作る！明久を根本の所まで通すんだ！！」

「「「「おーお！！」」」」

掛け声と共に、僕たち総勢４０名はＦクラスから飛び出した。

～Ｆクラス、Ｂクラス間の廊下～

「来たぞＦクラスだ」

Ｄクラスの前に固まっているＢクラスの集団が声をあげる。だけど、立ち止まるわけにはいかない！僕たちはＢクラスの集団へと突っ込んでいく。

「Ｂクラス中島美幸が「Ｆクラス田中健太が受けます！」

相手が言い終わる前に、こちらから勝負を受ける。これは雄二がみんなに出した命令で、僕が勝負を挑まれて動けなくなるのを阻止するためらしいのだ。

「Bクラス佐々木孝明が「Fクラス藤田智也受けます！」

「Bクラス中谷純也「Fクラス榎田良平受けます！」

どんどんみんなが僕なんかのために犠牲になっていく。でも、それを気にして立ち止まったりしたらそれこそみんなに示しがつかない。みんなのためにも僕のわがままのためにも、そして姫路さんのためにも必ず根本の所にたどり着くんだ！

「くっ、こいつら強行策でBクラスまで行く気だ！誰か根本のやつに報告しろ！」

「俺が行ってくる」

まずい、この策が根本に早く伝わってしまえば奇襲性が落ちてしまう。そうなれば、人員を割きすぎた僕たちに勝ち目はない。
その時、雄二が僕の横をものすごい速さで横切っていき、報告に行こうとしていたBクラス生徒の肩を掴む。

「Fクラス代表坂本雄二がてめぇに数学勝負を挑むぜ！」

「雄二！」

雄二が戦死したらそこで僕らの負けだ。なのに雄二はなにをやっているんだ！？

「いいから行け明久！」

「でも「でももクソもねぇんだよ！ささっと行きやがれ！」

雄二の怒号が響く。

「ごめん雄二、必ず根本を討ち取ってくるよ！」

僕はこの混雑の中、ただ一人Ｂクラスを目指して走り出した。

瑞希ＳＩＤＥ

私と美波ちゃんは今、Ｂクラスに捕虜として捕まってしまっています。

なんでも私たちは明久君たちを誘き出すために使うらしく、今すぐそのことを伝えたいのですが手首と足をロープで結ばれているため身動きすることができません。

そしてなにより――

「まぁまぁ、二人してそんなに睨み付けるなって。なんなら俺をここで討ったっていいんだぜ？あんたならそれができるだろ、姫路さんよぉ？」

この根本というＢクラスの代表が明久君の秘密を握っている限り、私たちはなにもできません……

「ははっ、そんなにあのバカが大切か？あんなバカが悩もうとも苦

しもうともいいじゃないか？」

「好き放題言って、後で見てなさいよ！ボコボコにしてやるんだから！」

「酷いです！明久君のことをなにも知らないのに悪く言わないでください！」

私たち二人は根本君に敵意をむき出しにした目付きで睨み付けます。

「ったく、うるせぇなぁ！お前らは吉井に惚れてんのかよ」

「えっとそれは……」

「なっ、なに言ってんの吉井のことなんかなんとも……」

恥ずかしくなって顔をあげることができません……

「ははははっ、これは傑作だな。まさか二人ともビンゴとはな。だが、その恋も今日で終わりだ。なんたって俺の女になるんだからな」

FクラスとBクラスが締結した『負けた方が勝った方の言うことをなんでもきく』これを使って根本君は私たちを自分の彼女にしようというのです。

「なんでこんな酷いことするんですか！」

「なんでって決まってるだろ？俺の目的ははなっからお前ら二人だ。あんなクズどもの集まりの中でお前らみたいな華があったら摘みたくなるだろ？」

それに友香にはもう飽きたしなと付け加え、根本君はほくそ笑みます。
だけど、根本の狙いが私たちなら――――

「お願いがあります」

「なんだ？」

「私がおとなしくしていますから美波ちゃんを解放してください」

「瑞希なに言ってるのよ！ウチのことなんていいからバカなことをしないで！」

美波ちゃんが私のことを想って懸命に叫びますが、これしか私にできることはないんです……

「姫路がか……」

根本君は私を見定めるように眺めます。

「そうだな、もともと姫路が目的だしぐべぇら！」

言いかけた根本君の顔に上履きが直撃します。見ると美波ちゃんの上履きが一つしかありません。

「しっかりしなさい瑞希！あんたは吉井のことを信じていないの！」

「明久君のことを信じる……」

「そうよ吉井のことを信じなさい！それに吉井だって瑞希が根本の彼女になって勝ったとしても喜ばないわよ！」

美波ちゃんの言葉が私の中で反芻されます。

明久君のことを信じる

私を助けてくれた明久のことを

いつも笑顔で私を励ましてくれる明久君を

なにより私の大好きな明久君のことを

私が明久君のことを信じる。信じなきゃいけないんです。

だって、明久君は約束を守ってくれる優しい人ですから

明久ＳＩＤＥ

あともう少しでＢクラスだ。あともう少しで姫路さんと島田さんを助け出せる。

もう僕の後ろにはＦクラスの生徒はいない。その代わりにＢクラスの生徒もいない。僕がやるんだ。誰のためでもなく、僕自身のために！

バンッ！

勢いよくBクラスの扉を開ける。そこには手首と足をロープで縛られて動けないでいる姫路さんと島田さんがいた。

「明久君！」

「吉井！」

「なに、吉井だと！？」

二人の声に反応して根本が顔を押さえながら僕の方に振り返る。

「やぁ根本君。随分と面白いことをしてくれてるじゃないか」

「くっ、こんな雑魚一人抑えられないとは使えない駒どもめ……」

忌々しく言い放つ根本に歩み寄る。だが、そのとき――

「俺が全ての部隊を攻撃にまわすと思ったか？」

「なっ！？」

教卓の影、掃除ロッカーから跳び出してきた二人の近衛兵に進路を塞がれてしまう。

まずい、Bクラス二人を相手にした後にAクラス並の学力をもつ根本と闘うなんて無謀だ。

「「Bクラス山本（国谷）が」」

くそ、受けてたつしかないのか！？あともう一歩だってのに……

そう覚悟を決め、口を開こうとした僕の前に二つの人影が立ちはだ

かる。

「その勝負、Dクラスの平賀源二が受けてたつ！」

「同じくDクラス清水美春が受けますわ」

「えっ……？」

思わず自分の目を疑う。なんでDクラスの人がFクラスとBクラスの試召戦争に参加してるんだ？

「お前らはDクラスだろ。なぜここにいるんだ！」

「なぜって、憂さ晴らしかな？」

平賀君が当然といったように答える。

「関係のないクラスは試召戦争に関わったらどうなるかわかってんのか！？」

「ええ、それなりに処罰なりを受けるでしょう」

そう、試召戦争をしていないクラスの生徒が関わることは反則だ。ならこの二人はどうして……

「だけど受けるのは僕たちだけだ」

「そう、美春たちは勝手に勝負を受けただけですもの」

どうして二人はこんなにもしっかりと立っていられるんだ。今の二

人の状況は補習では済まされない程のことをしてるというのに……

「こんな勝負無効だ！」

「もしかして敵前逃亡か？」

「ぐっ……」

そう、勝負を挑まれた、または挑んだのに戦闘を放棄したとみなされ、戦死扱いとなるのだ。
当然、地獄の補習を受けるなら格下の相手と闘う方がいいと思ったらしく近衛兵二人は臨戦態勢にはいる。

「吉井君、なにもたもたしてるんだい？僕たちは僕たちで憂さ晴らしをするから、君は君のやりたいことをやりたまえ」

平賀君が僕にだけきこえるような音量で言う。
なんで平賀君や清水さんが僕を助けてくれるかわからない。だけど、これで根本の所にたどり着けるんだ！
平賀君の好意を無駄にしないためにも礼は言わず、近衛兵の脇を通り抜ける。

「根本ぉぉぉ！」

「ちぃ、Ｆクラスごときが俺に勝てると思うなよ、サモン！」

Ｂクラス根本恭二　日本史１６２点

両手に鎌を持ち、首からは数珠をさげた根本の召喚獣が現れる。

「サモン！」

Ｆクラス吉井明久　日本史７６点

僕の召喚獣も幾何学模様と共に現れる。

点数差は約１００点。さすがはＢクラス代表だ。

だけどそれがなんだっていうんだ！

１００点差があったら倒せないのか！

１００点差があったら、姫路さんや島田さんを助けられないのか！

１００点差があるからって、姫路さんを悲しませたやつを許せるわけないだろ！！！

「「覚悟しろ、根本！」」

僕の声に誰かの声が重なる。だけど誰の声かなんて確認している暇はない。

ただ、目の前の敵に集中するだけだ！

召喚獣を真っ正面から突っ込ませる。

「ふっ、格上相手にバカ正直に突っ込んでくるなんてバカなやつめ」

「あぁ、そうだ」

召喚獣を操作したまま静かに言う。

「僕はハガでどうしようもないやつだ。だけど――――」

手を思いっきり握り、腹に力を込める。

「「人を悲しませるようなやつには負けたくないんだよぉぉぉ！！！」」

不思議といつもより召喚獣に力が入っているのがわかった。
そして根本の召喚獣と斬り結んだ僕の召喚獣は、まるで点数差を感じさせない程の勢いで根本の召喚獣を吹き飛ばす。

Bクラス根本恭二　討死

「なっ……」

根本はあり得ないと言わんばかりに、その場にへたれこむ。
僕はそんな根本に近づき、胸ぐらを掴む。

「おい、姫路さんから取ったものを返せよ！」

自分でも驚くほど、どすの効いた低い声を出す。

「わっ、わかった。返すから……返すから、これ以上なにもしないでくれ……」

根本はなにをそんなに怯えているのかわからないが、姫路さんのものと思われる便箋を渡してくれたので床に叩きつけて解放してやる。

「はんっ、せいぜい床に寝転んで反省でもしてるんだな」

「あっ、明久君……？」

なぜだか姫路さんまでもが怯えたような目で僕を見ている。なぜだろう？

そうか、根本のやつが怖くてそれでまだ怯えているんだ。

「姫路さん、もう大丈夫だよ。根本はこの通り、なにもしないって言ってるから」

なるべく怖がらせないように優しく声をかける。

それでもまだ、姫路さんの目から恐怖の色が抜けていなかった。僕はそんな姫路さんに手を伸ばして――

「いやっ！」

「えっ……」

姫路さんが僕の手を拒んで後ろに下がる。

「どうして姫路さん……」

姫路さんが遠くに行ってしまう。僕の手を拒んで遠くに行ってしまう……

「今の明久君はいつもの明久君じゃありません」

いつもの僕じゃない？

なら姫路さんを怖がらせているのは僕なのか？

僕がいるから姫路さんは怖がっているの……

「いつもの明久君に戻ってください。いつもの優しい明久君に戻ってください！」

いつもの僕って言われたって、なにが違うのかわからない。
だって、姫路さんを悲しませた根本に復讐をしただけだ。それのなにがいけないんだろう。

わからない……

だけど、その答えを持ってるとしたら姫路さん以外はいない。だから、僕は姫路さんに近づいていく。

「明久君……」

姫路さんが怯えている。だけど、今度は姫路さんが後ろに下がることはなかった。

「（もしこれが記憶障害が原因なら私が……）」

姫路さんがなにかを呟くけど、今はそれ以上に早く安らぎが欲しかった。姫路さんがもっているであろう安らぎが欲しくて手を伸ばす。
僕と姫路さんの手が触れあった時、僕の中のなにかが変わった気がした。
それと同時にさっきまで殺してやりたいほど憎かった根本への怒りも、ある程度沈下される。

「お帰りなさい、明久君」

「あっ、うん……ただいま」

なんでお帰りなさいなんて言われたかわからないけど、一応返事をしてみる。

「もう勝手にどこかに行っちゃいやですよ？」

「うん……」

姫路さんの目にはもう恐怖の色はなく、いつものように優しく僕に諭すように言う。

「あの、取り込み中悪いけど、ウチのこと忘れてない？」

僕のちょうど視界に入らない位置にいる島田さんが面白くなさそうに言う。

しまった、無視されれば誰だって怒るよね……

「ごめん、島田さん。別に忘れてた訳じゃないんだ」

すいません、本当は忘れてました……

「本当は忘れてたわよね！」

島田さんの目付きが怖い。なんかやばい、色々とやばい。

「すいません、なんでもするから許してください！」

土下座をしながら島田さんに謝る。ええぃ、周りの目は気になるけ

ど背に腹は代えられるか！

「なんでも？」

「はい、なんでも聞きますから許してください！」

「なら、ウチは吉井のことアキって呼んでいい？」

「えっ？」

島田さんの意外な要求に顔をあげる。

「ほら、瑞希だって坂本たちだって吉井のこと下の名前で呼んでるじゃない。だからね、ダメ？」

「島田さんがそれでいいっていうならいいけど……」

よかった、てっきりまた間接技をきめられるかと思ったよ……

「明久無事か！」

雄二が切羽詰まったように入ってくる。

「あっ、雄二。ほら、この通り根本君も倒したから僕たちの勝ちだよ」

姫路さんのロープを外しながら雄二に言う。ちなみに島田さんの方は清水さんが（色々と危ない顔で）ロープをほどいてくれていた。

「そうか、ならよかった。平賀もありがとな」

「なに、俺たちは自分たちの好きなように動いただけさ」

「ははっ、言うじゃねえか」

「そっちこそ、俺たちがこう動くのを見越してあの時はなにもしなかったんだろ？」

「さてどうかな」

平賀君と雄二は笑いあいながら僕の方へ歩いてくる。

「姫路さん、大丈夫？」

姫路さんのロープをほどき終わり、体を支えながらたずねる。

「はい、特になにかされた訳ではありませんから。それに――――」

「？」

姫路さんから、それにの続く言葉が中々出てこない。

「明久、悪いが姫路を連れて教室に戻っててくれ。俺は根本をしばかなきゃならんからな」

「あっ、うん。姫路さん立てる？」

「申し訳ないんですけど、ロープで結ばれてたせいで足首が動かないんです……」

足を擦りながら言う姫路さんには本当に申し訳ないと思う。

全ては僕が原因なんだ……

振り分け試験当日のことを思い出す。あの日、僕があんなことをしなければ……

「なら掴まって」

だから、せめてもの償いに背中を向ける。姫路さんが僕の首に腕を回してくる。

背中に当たる魅惑の柔らかさに我慢しながらも、姫路さんをおぶさる。

立ち去れ僕の煩悩よ

欲望を捨て理性も捨てて、本能に従ってうごって、それじゃあダメじゃないか！

ダメだ。僕の煩悩はちっとも立ち去ってくれそうにない。

「明久君、もしかして迷惑でしたか……？」

「そっ、そんなことないよ！」

せっかくの機会を逃してたまるものか！

こうなったら仕方ない。常日頃の僕の高い平常心をフルに活用するしかない！

「よっと！」

姫路さんをおぶさりながら動き始める。

「じゃあ雄二、お先に」

「あぁ。姫路を頼んだぞ」

「うん、任せてよ」

僕はBクラスを出てFクラスへと向かった。

「やっぱりアキはウチのこと忘れてるじゃない……」

「まぁまぁ、島田もそんなに拗ねるなって。それに悪いが、今は二人だけにしてやってくれ」

「ウチもそこまで空気を読めなくはないわよ」

～Fクラス～

「ふぅ……」

Fクラスに戻り、姫路さんを下ろすと一息つく。

「あっ、明久君……ありがとうございました……」

姫路さんが顔を真っ赤にしながら言うのも無理もないだろう。というか、僕も相当顔が赤いに違いない。だって――――

学園中の生徒に姫路さんをおぶってるところを見られたんだよ！！

ちょうど僕が廊下に出た時は下校時刻だったらしく、色々なクラスの生徒に目撃されてしまっている。

事情を知っている人ならいざ知らず、無関係の人に好奇の目で見られるのは非常に恥ずかしい。でも、姫路さんからしてみればあらぬ噂がたつ可能性だってあるんだから申し訳ない事、この上ない。

「その、恥ずかしい思いさせちゃってごめんね」

「あっ、いえ…私は別に……」

恥ずかしくて目も合わせれない。どうしよう、なにか話題をつくらないと更に気まずくなるぞ……

そうだ、姫路さんの便箋を返そう。

そう思い、ポケットから姫路さんの便箋を取り出す。

「あっ……」

しかし、その便箋は僕の手から滑り落ち、途中で中身だけが出てしまった。

「わっ！見ちゃダメです明久君！！」

姫路さんの声に速攻で目をそらす。便箋はちょうど姫路さんのそばに落ちたらしく、封筒に入れ直している紙擦れの音が聞こえる。ただ――――

『明』『好き』

という二文字があの便箋に書いてあったのがちらっと見えた気がする。まるでラブレターのようなあの便箋に……

って、そんなことあるわけないか

人間とは自分の都合のいいように考えがちな生き物だ。それも僕みたいなバカなら、頻度だって多いだろう。

なにより、姫路さんが僕に恋心を抱くなんてこと事態に現実味がなさすぎる。

「そのぅ、明久君ありがとうございますね」

姫路さんが遠慮がちに言ってくる。便箋のお礼を言われてるのかな？

「あっ、いや……ほら偶然姫路さんの便箋らしきものが根本君のポケットから見えたからさ」

恥ずかしいので後ろを向きながら言う。

「ふふっ、明久君は嘘が下手ですね」

「うっ、嘘なんてついてないよ」

やばい、さっきより火照ってきた……

「じゃあ……本当のこと言ってくれたら内容を見せてあげますよ」

「えっ……？」

思わず振り返ってしまった僕の時が止まる。
そこには便箋を大事そうに両手でもつ姫路さん。
なにかを期待するように頬を染め、こちらを見ている姫路さん。
まるで、僕の勘違いが現実に、それもすぐ近くにあるのではないかと錯覚させる状況がそこにはあった。

「姫路さん……」

「はい……」

僕の意思とは無関係に姫路さんの名を呼ぶ。

「僕は……」

いったい僕はなにを言っているんだろう。僕に求められたのは事の真相のはずなのに。

姫路さんのそばに座り込んで目線を合わせる。

「僕は姫路さんのことを……」

「明久君……？」

たぶん僕は今、自分の想いを伝えようとしているんだろう。この幻想的な状況にいちるの望みをかけて……

「僕、吉井明久は姫路瑞希さんのことを……」

正直、成功するとは思えない。だけど、ここを逃したらもうチャン

スはない気がした。
この姫路さんへの想いが消えてしまいそうで怖かったんだ。

「ずっと昔から……」

ガラガラ

「ふぅ、危ねえ。弁当箱、忘れて帰る……って、もしかしてお邪魔でしたか……」

突然入ってきた須川君と目が合う。

「いや、そのこれは違うんだ！」

「そっ、そうです。違わないけど違うんです！」

「いや、俺たちFクラスはお前たちの仲には目をつむる気でいるからいいんだ」

やばい、須川君がちっとも話を聞いていないし、妙なことを言ってる。

「おい、こら押すな！」

「お前こそ押すなよ！」

「って、うわあああ！」

なぜだか掃除ロッカーからも今井君、前川君、横溝君が出てきた。

「おい、こら！バレちまったじゃないか！」

「横溝が押すから悪いんだろ！」

「いや、押したのは今井だろ！」

「第一、前川がちゃんと二人の状況を方向してくれなかったのがいけないんだろ！」

今井君の問題発言に姫路さんと顔を見合わせる。

「もしかして今までのこと……」

「うん、見られたよね……」

恥ずかしいなんてもんじゃない。ここにいること自体に耐えれない！

「姫路さん！」

姫路さんの手を掴み、Ｆクラスをとびだず。

「待て！二人を追うぞ！」

「おう！」

「俺は旧校舎側行くから、横溝は二人を追ってくれ！」

くそ、隠れて見てただけじゃ飽き足らず、追いかけてくるなんて、とんでもない野次馬根性だ。

逃げる最中、何人もの生徒にすれ違う。あぁ、また姫路さんに迷惑

がかかっていく……
でも、姫路さんを置いて行ったら横溝君たちに質問攻めにあってしまうだろうから置いて行くなんてことはできない。

「明久君」

「なに姫路さん」

走りながら姫路さんの方に顔を向ける。

「ありがとうございますね」

なんで、姫路さんはこんな状況で笑顔でお礼を言ってるんだ。ほら、周りの人が口々にひそひそ話してどんどん噂が広間っててるじゃないか……

「姫路さん、便箋のお礼ならさっき聞いたから後で」

「違いますよ。私が言ってるのは明久君が私たちのために一生懸命になってくれたことにです」

「一生懸命って、僕は当たり前のことをしただけで――」

「それが私には嬉しいんです」

なんで姫路さんは走ってて辛いはずなのに、そんなに楽しそうに笑うんだろう。

いや、笑ってるのは僕も同じか……

そう、いつの間にか僕も笑っていたんだ。なぜだかこの状況が幸せに感じられるほどに。

「いたぞ、吉井だ！」

だけど、そんな状況も長くは続かないわけで……
僕たちは前後を挟まれて教室に連行されてしまった。

～明久宅～

「ふぅ、今日は散々だったよ……」

「そうですか？私は楽しかったですよ」

夕飯を作りながら姫路さんが満面の笑みで言う。なんでも姫路さんは今日のお礼に夕飯を作ってくれるというのだ。
一人で食事をするのもアレだし、なにより姫路さんのご飯を一日に二度も食べれるなんて願ってもない朗報だ。

ちなみに教室に連行された後は正に地獄だった。僕と姫路さんだけを教室に残して、みんなが廊下や掃除ロッカーから覗いているなか「やり直せ」なんて言われたのだ。
姫路さんの名誉のためにも何をするわけでもなくじっとしていると、根本君との話を終えた雄二が戻ってきて、この茶番はお開きとなった。
その後に雄二に個人的に聞いた話なんだけど、Ｄクラス戦の後の平

賀君との戦後対談は要求をなにもしなかったらしい。
雄二いわく「平賀の良心に賭けてみた」とのことだ。
なんて危なっかしい作戦なんだろうかと呆れたが、同時に雄二の凄さも感じた気がした。

それにしても姫路さんは本当に楽しそうにご飯をつくるなぁ……
きっと将来、姫路さんと結婚する人は幸せだろうなぁ……

「はい、できましたよ明久君」

僕が考え事をしている間に姫路さんの料理ができたらしく、僕のいる居間のテーブルに運んできてくれた。

「うわぁ、おいしそうだね」

姫路さんはつくってきてくれたのは、ほくほくの白米に、肉の入った野菜炒め、ジャガイモでつくったスープ（たしかビシソワーズだっけ？）だ。

「明久君のお口にあうといいんですけど……」

「そんなに心配しなくても大丈夫だよ。だって姫路さんのお弁当だってすごくおいしかったんだから」

大皿にある野菜炒めを自分と姫路さんの小皿に移しながら言う。

「それよりも姫路さんも座りなよ」

「失礼しますね」

姫路さんが僕の向かいに座ったのを確認し、手を合わせる。

「いただきます！」

まずは野菜炒めに手をつける僕を姫路さんは心配そうな目で見てくる。

「どうですか？」

「うん、すごくおいしいよ。これは僕の好物の中に野菜炒めが入っちゃうね」

「明久君は他にも好きなものがあるんですか？」

「うん、パエリアが好きなんだよ」

「パエリアですか……」

姫路さんが思案顔になる。

「いや、別につくってほしいとかって意味じゃないよ。あれはつくるのにコツがいるし」

「大丈夫です。今度、勉強しておきますから安心してください」

小さくガッツポーズをとる姫路さん。こうなると姫路さんは引かない気質があるから今回は好意に甘えよう。

「じゃあお願いするよ。でも無理だけはしないでね」

「大丈夫ですよ。明久君は心配性なんですから」

そんなに僕って心配性だろうか？

僕からしてみれば姫路さんの方がよっぽど心配性な気がする。いや、姫路さんの場合は優しいだけなんだろうか？

はぁ……

将来、姫路さんと結婚する人は本当に幸せだよな……

なんせ、こんな可愛くて、気が利いて、料理もできる。なによりこんなにも他人に尽くす人なんて滅多にいないよ……

結婚っていえば、あのラブレターはどうしたんだろう？

「姫路さん、今更だけどあの手紙うまくいくといいね」

「あ……はいっ！頑張りますっ！」

満面の笑みで応える姫路さんに聞きたいことはある。だけど、冷静に考えれば僕の見間違いの可能性の方が遥かに高い。なら、いちいち自爆をする必要はないよね。

でも一つだけアドバイスぐらいしてもいいんじゃないんだろうか。

「姫路さん、あくまでアドバイスだけど手紙よりも直接言った方がいいかもね」

「そ、そうですか？明久君はその方が好きですか？」

「うん。少なくとも僕なら顔を合わせて言ってもらう方が嬉しいよ」

手紙は根本君のせいで嫌な記憶になっているだろうから、その方が

姫路さんにとってもいいだろう。

「本当ですか？今言ったこと、忘れないで下さいね？」

「え？あ、うん……」

なぜだか姫路さんはとても嬉しそうだ。姫路さんが嬉しそうだと僕までつい嬉しくなってくる。

それから僕たちは他愛ない話をしながら楽しい夕食を過ごした。

「じゃあ明久君、早く寝てくださいね」

「うん、なるべく早く寝るようにするよ」

正直言って、今日は満身創痍だからすぐにでも寝れそうだ。

自分の家に帰っていく姫路さんを見送ると寝室に直行する。

「ふぅ、疲れたぁ……」

ベッドに倒れ込むように入る。

「まったくだ。今日はへとへとだな」

「うんうん。そうだよ――って、えええ！？今の声だれ！？」

辺りを見回すが誰も見当たらない。

「おいバカ。俺はここだ」

「ここって、どこだよ？」

「お前の頭の上だ」

「頭の上？」

頭の上に手を当てると何かに触れる。それを掴んで自分の前で広げる。

「よっ！」

そこには、なぜだか僕の召喚獣がいた……

第１０問　クズと試召戦争と急展開（後書き）

明久の身に起こった変化。
そして突如として明久の前に現れた召喚獣。いったい彼は何を巻き起こすのか！？
ちなみに異端審問会の面々は、自己紹介の時のこともあって明久と瑞希の仲をじゃましてきませんのでご留意を。

よろしかったら感想などをよろしくお願いします。

第１１問　僕が消え君が生まれた日（前書き）

今回で、なぜ瑞希が明久君呼びか判明します。

第１１問　僕が消え君が生まれた日

明久ＳＩＤＥ

～振り分け試験当日～

いける！これなら１０問に１問は解ける！
って、ことは１００問やったら１０問正解、１０００問やったら１００問正解じゃないか！ならば――

僕は問題も見ずに回答用紙に次々と答えを書き込んでいく。１００問は無理だとしても１００問を越える問題を解けば、ＤかＣクラスくらいには入れるだろう。
今思えば、そんなバカなことを考えながら答えを書いていく僕の視界の隅に隣の席にいる姫路さんがはいる。
全体的にフワッとしていて、体は強くないけれど、今日はいつもにもましてふらふらとして頼りなさそうだった。休み時間になったら声でもかけようかな？
そう思って答案用紙に視線を移そうとした瞬間、姫路さんの体が大きくぐらついた。

「姫路さん！」

ほぼ反射的に姫路さんを支えるように抱き抱える。その体は火照っていて、一目で熱があるのがわかった。そんな僕に試験官の先生が近づいてくる。

「テスト中の途中退席は無得点扱いとなるがいいか？」

「そんな！熱をだしているのにあんまりじゃないですか！」

「健康管理も試験のうちの一つだ」

無情に言い放つ試験官に腹がたってくる。

「さぁ吉井、お前も早く席に戻れ。今ならまだ――――って、なにをしているんだ！」

「なにか文句ありますか！僕は文月学園はじまって以来の最悪な生徒、観察処分者ですよ。そんな人間が成績優良者の答案が見れるんだったら、見ることすらわからないんですか？」

僕は姫路さんの答案を手にとりながら言い放つ。

「吉井君……」

「姫路さん、無理しないで」

姫路さんを支えながらも試験官の方を見返せば、顔を真っ赤にして今にも沸点寸前というところだった。

「吉井、自分がやっていることがわかっているのか！」

よし、のってきた！

「ええ、わかってますよ。最低の生徒に相応しい最低な行動だってことぐらいはね」

「ええい！もう、出てけ！お前も姫路も無得点だ」

「無得点で結構ですよ。人を想いやる気持ちがない人間なんかより僕にはこっちの方があってますから」

姫路さんをおぶさりながら教室を後にする。

僕は寝てしまった姫路さんを保険室のベッドに寝かせておくと、学園長室に出向いた。

コンコン

「試験中に誰だい？」

「吉井明久です」

扉を開け、学園長室に入る。ここからが正念場だ。

「あんた振り分け試験はどうしたのさ？」

「カンニングで途中退席させられてしまいました」

「で、そのカンニングしたあんたがなんの用だい？」

「はい。僕がカンニングした際にカンニングされてしまった姫路瑞希さんも一緒に退席されてしまったんです。だから、彼女だけでも後日、振り分け試験をやり直させてあげれないでしょうか？」

首を縦にふれクソババァ
そう念じながら、こたえをまつ。

「だいたい状況はよめたよ。だけれど、それは無理な話だね」

「なっ、なんですか！彼女は一方的な被害者ですよ！」

なぜだ。なにがいけなかったんだ！？

「原因はあんただよ。考えてもみなよ。カンニングするようなズル賢いやつが、巻き込まれた人のためにここまでするかい？」

「うっ、それは……」

盲点だった……
そうだ、僕がカンニングするようなやつなら人のために動くわけないじゃないか……

「姫路瑞希になにかあったか知らないけど、あんたは姫路を庇うためにカンニングしたってことかい？安い茶番だねぇ」

僕の考えが完璧によまれてる……
これじゃあ、どうしようもないのか……

「まぁ、そんなに落ち込まなくてもいいさね。案外、姫路にとっても、あんたにとってもいい結果だったのかもしれないよ」

「えっ？」

「さぁ、もう帰った帰った。いつまでも間抜け面さらしてんじゃないよ」

学園長の意味深な言葉に疑問を抱きながらも、僕は学園長室を追い出されてしまった。

「あっ、あき――吉井君」

保険室に戻ると、ベッドに寝かせておいた姫路さんが目を開けていた。

「姫路さん、体調はどう？」

「まだ頭がくらくらします」

「なら氷枕でも用意するよ」

今日は保険の先生はいないため、棚からカバーをとりだし冷凍庫の氷を詰める。

「姫路さんちょっとごめんね」

姫路さんの頭を持ち上げると、氷枕を下にしく。

「ひんやりして気持ちいいです」

「そう、ならよかったよ。じゃあ、僕はこれで」

姫路さんもカンニングしたやつとなんか、いたくないだろうから席を立つ。

「待ってください…吉井君」

だけれど、僕の足は一歩目を踏み出す前に止まってしまう。

「どうしたの姫路さん？」

「その、私なんかのためにありがとうございました」

「なに言ってるの？僕は姫路さんの答案用紙をカンニングした挙げ句、姫路さんを道連れにしたんだよ？」

姫路さんに気を使わせまいと、自分に嘘をつく。

「そうやって私を気遣ってくれるんですね」

「違うって。本当にそんなんじゃ……」

「ならどうして、私を支えてくれたんですか？」

「それは……」

今思い返せば、本当に穴だらけの作戦だった。しかも結局、なに一つうまくいかない最悪の作戦だったんだ。

「それにさっきまで学園長先生に私のことを掛け合っていてくれたんですよね？」

なぜこんなにも筒抜けなんだろう。でも、もう隠したって仕方ないじゃないか。

「だけれど、もう一度姫路さんに振り分け試験を受けさせることはできなくて、無得点扱いなんだって。ごめんね」

「吉井君が謝ることなんてありません。だって吉井君は私のために退席してくれて、私が振り分け試験をもう一度受けれるようにしてくれただけじゃないですか。だから、私の方こそごめんなさい」

「でも、あそこで僕が姫路さんをつれださなければ……」

「吉井君がやらなくても私は退席してましたよ。だから、吉井君が気にすることなんてなにもありません。それと――」

「それと？」

「そのぅ、吉井君のことを明久君って呼んでいいですか？ほら、私たち二人ともFクラスになるわけですし……」

「えぇっとそれは……」

まさか姫路さんにまた明久君なんて呼ばれる日がくるとは思ってもみなかったから、どう反応していいかわからないって……

「明久君？」

「はいっ！？」

思わず、反射的に返事をしてしまった。

「ふふっ、これで決まりですね。じゃあ、これからお願いしますね明久君」

「あっ、こちらこそよろしくね姫路さん」

こうして姫路さんは僕のことを明久君と呼ぶようになった。正確には明久君に呼び名が戻ったのだ。

これは僕と姫路さんだけが知る二人の秘密。振り分け試験の日にあったほんの小さな二人だけの秘密。

それから僕たちは保険室で他愛ない話に花を咲かせ、下校時刻に下校した。

そこからは知っての通り、僕は姫路さんを庇い、車にひかれるんだ。

「そうかあの時、君は生まれたんだね」

僕は目を開けて、右手に乗っている召喚獣に話しかける。

「まぁ、俺の記憶があそこからあるんだからそうなんじゃねえの？」

腕捲りしながら素っ気なく応える僕の召喚獣。僕はこいつにあの日のことを見せてもらっていたんだ。

「じゃあ、もしかして僕は――」

「あぁ、その通りだ。お前のなくしたものは俺の中に蓄積されている」

召喚獣の言葉が疑問を確信に変える。僕が今日一日感じてた様々な疑問。それが全てこの一つでおさまる。

僕は記憶を引き継げないんだ

第１１問　僕が消え君が生まれた日（後書き）

召喚獣により、記憶障害に気づいた明久。彼はどうするのか！？

余談なんですが、拙作を更新すると見てくださる方も多く（作者が勝手に思ってます）、評価をしてくださる方もいて大変嬉しいのですが、感想ももらえると嬉しいです。
感想が書きづらい構成なのでしょうか？できればどのような点に留意すればよいか教えていただけるとありがたいです。

第１２問　終戦始まる！（前書き）

キリトさん、きるぐまー1号さん、Ｄｒ．クロさん、感想ありがとうございます！

第１２問　終戦始まる！

明久ＳＩＤＥ

Ｂクラス戦の翌日、僕、姫路さん、雄二、島田さん、秀吉、ムッツリーニの六人は宣戦布告をするためにＡクラスに来ていた。
Ａクラスは僕らのおんぼろクラスと違い、システムデスクに一人につき一台のＰＣ、更にはおやつのためかお菓子やスイーツも置いてあった。

「本当にこれでわしらと同じ学費なんじゃろうか？」

秀吉が小首を傾げながら言う。

「さすがにＡクラスとＦクラスで学費が違うって事はないから、同じなんじゃない」

そんな秀吉に応えるのは島田さんだ。

「……こっ、これは！？」

ムッツリーニが本棚の前で止まると、そこから動かなくなってしまった。

「どうしたのムッツリーニ？」

「くっ、来るな！巻き込まれるぞ！」

いつにもなく親身に言うムッツリーニ。相当、ハードなものがある

に違いない。
でも、よくよく考えてみればムッツリーニがそんなものを見て耐える訳がない。そう思ってムッツリーニの肩に手をおく。

「ムッツ――リーニ……？」

僕がムッツリーニの肩に手をおいた瞬間、ムッツリーニは白眼をむいて倒れてしまった。しかも鼻血を流す暇も与えないほどの瞬殺だ。

「ムッツリーニ！ムッツリーニ、傷は浅いぞしっかりしろ！」

僕がいくらムッツリーニに呼び掛けても、起きることはない。一体、なにがムッツリーニをここまで追い詰めたんだ！？

「ムッツリーニ。君の仇は僕が必ずとってみせる――――！？」

僕は言いかけた言葉を思わず呑み込んでしまった。なぜなら、僕の視界の先、すなわちさっきまでムッツリーニが見ていた本棚には小さな手鏡が置いてあったのだ。
しかも、その手鏡はまた他の場所にある手鏡を映し出し、またそれも他のものを映すといった具合になっていた。だが問題なのはそこじゃない。手鏡が映し出している先が姫路さんの足元だということだ。
あともう少しで姫路さんの……姫路さんのパン――――

「ぐはぁ！？」

意識した途端、僕の意識も持っていかれそうになったが、なんとか持ちこたえ、鼻血を2リットルほど出す程度の最小限の被害に抑えれた。

「あはははは、Fクラスの人ってほんと面白いね」

突然聞こえてきた元気な声に振り向くとそこには、緑のショートカットヘアのボーイッシュな女の子がいた。

「きっ、君がこんな卑劣な罠を……」

許さない。ムッツリーニの仇は今ここで僕がとる！

「卑劣な罠？なんのことかな？」

あくまでシラをきるつもりだな。

「とぼけるな！君の仕掛けた罠のせいでムッツリーニは他界して、僕だって死の瀬戸際なんだぞ！」

「ますますなにを言ってるのかわからないよ……」

くっ、白々しい嘘を！

「……明久、そこまでにしろ」

「ムッツリーニ！？」

立ち上がり、僕を右腕で静止する（僕の鼻血によって）ムッツリーニは血まみれだった……

「へぇ……君がムッツリーニ君なんだね。僕は工藤愛子だよ。よろしくね」

「……工藤愛子、聞いたことがある名だ。たしかお前がＡクラスの保健Ｎｏ．１か……」

「ＡクラスＮｏ．１なんだから学年Ｎｏ．１なんだけどね。君の噂も聞いているよ土屋康太君」

「なっ……」

ムッツリーニが驚くのも無理はない。なぜならムッツリーニの名は学園中に広まっていても、ムッツリーニ＝土屋康太ということを知っている人物は数少ないからだ。

「おい、明久、ムッツリーニＦクラスに帰るぞ！」

僕みたいな常識的な真っ当人には計り知れない静かな激闘は雄二の言葉により中断される。

「雄二、宣戦布告はどうしたの？」

「宣戦布告なら、俺と姫路で済ましといた」

「勝手にやっちゃってごめんなさいね」

うっ……

雄二の横で、見る者に癒しを与えるような姫路さんの笑顔と目がある。そんなものを見せられた状態で、あのブサイクと口喧嘩するなんて愚の骨頂だ。

本当なら雄二にとやかく言いたいところだけど、今日は姫路さんに免じて許してやろう……

「あと、翔子との締結で試召戦争は5人の一対一で行うことになった。それと、負けたクラスは勝ったクラスの言うことを聞くことになったからな」

「なんでもって勝てる算段はあるの？」

「任せろ、俺に秘策がある。さっ、帰るぞ」

要件を伝えると雄二はささっと動き出してしまう。

「明久君も行きましょう？」

「うん。ムッツリーニも行くよ」

「……工藤愛子、この借りは必ず返す」

「僕だって負けないからね。午後を楽しみにしてるよ」

この二人はまだ続きをやっていた……

「明久君、土屋君と愛子ちゃんになにかあったんですか？」

「まぁ、二人にも色々あるんだよ……」

「色々ですか……？」

不思議そうに首を傾げる姫路さんにはかわいそうだけど、本当に色々あるんだから仕方ない。

「ムッツリーニには悪いけど長引きそうだから、僕たちも先に帰ってようか？」

「そうですね。土屋君には土屋君の事情がありますからね」

僕らはＡクラスにムッツリーニのみを残して出ていく。

「そういえば明久君、息が荒いですけどなにかあったんですか？」

Ｆクラスに帰る途中で姫路さんが聞いてくる。

幸いにも鼻血は勢いよく発射したため、僕には一滴も着いていないが息はまだ整っていない。

「えぇと……日射病かな？」

「室内で、それも空調の効いているＡクラスでは日射病にはなりませんよ……」

「いや、最近の日射病はタチが悪いんだよ」

「そうなんですか……？知りませんでした」

こんな苦し紛れの嘘でも、まともに受け止めてくれる辺り、姫路さんの純心さがうかがえれる。将来的に悪いやつらに騙されないといいんだけど……

そういえば、ムッツリーニは立って手鏡を見ていて、僕は倒れたムッツリーニを支えながら手鏡を見たから見えたものが違うはずだよなぁ……

一体、なにが見えたんだろう？まぁ、姫路さんの足元に勝るものが

見えたとは考えずらいけどね。あーぁ、もう少し上が映ってればなぁ……

「あっ、明久君!?だっ、大丈夫ですか!?」

「大丈夫ってなにが?」

一体、姫路さんはなにをそんなに慌てているのだろう?

「明久君から鼻血が……それもたくさんの鼻血が出てます!」

「えっ……」

さすがに2リットルだした後での追い討ちには耐えれないらしく、僕は意識を手放して倒れてしまった。

~午後~

「只今からAクラスとFクラスの5対5の勝負を開始します」

Fクラス、Aクラスの生徒全員が入ってもなお、充分すぎる広さがあるAクラスの教室に高橋先生の声が響く。

あのあと雄二に聞いた話だと、科目の選択権はこちらが3で向こうが2らしい。格上であるAクラスにいったい、どういう交渉をしたんだろう……

「明久君、もう大丈夫ですか？」

「うん、大丈夫だよ。最近の日射病は本当にタチが悪くていけないよ」

「そうですね。私も日射病には気をつけなければなりませんね」

「そっ、そうだね……」

いくらなんでも鵜呑みしすぎではないだろうか？姫路さんには人を疑うということを知ってもらいたいものだ……

「では、両組の選手は前に」

「俺たちからは島田がいく」

「じゃあ、Ａクラスからは私が行くわ」

島田さんの相手は――――って、秀吉!?

「明久よ、勘違いしてるようじゃが、あれはわしの姉上じゃ」

「えっ、そうなの？」

「うむ、本当のことじゃ。顔が似ておるからよく間違われるがのぅ……」

どうやら秀吉にも秀吉なりの悩みはあるようだ。

「選択科目はそちらがどうぞ」

「じゃあお言葉に甘えて数学でいかせてもらうわ。サモン！」

Ｆクラス島田美波　数学１６８点

秀吉のお姉さんに科目の選択権を譲ってもらった島田さんの点数はＦクラスの生徒とは思えないほど高かった。ただ……

「これでも数学の点数はＢクラス並みなんだからね」

「確かにＦクラスでそれは凄いわね。まぁ、私はもちろん、サモン！」

Ａクラス木下優子　数学２７７点

「うそ……」

「Ａクラス並みだけどね」

勝負は一瞬にしてついた。もちろん、秀吉のお姉さんの勝ちで。

「勝者、木下優子」

「「「いえぃーーー！」」」

Ａクラス生徒の歓声を背に島田さんが落胆した様子で戻ってくる。

「ごめん、みんな……」

「なに気にするな。島田にはＤ、Ｂクラスの時に世話になっただろ

？」

「そうですよ美波ちゃん。私も美波ちゃんの分まで頑張りますから落ち込まないでください」

「次のムッツリーニがなんとかしてくれるはずじゃし、気負いするでない」

「そうだよ。Ｂクラス並みじゃＡクラスに勝てないなんてこともわからない島田さんなんだから仕方ないよ」

「みんなありがとう。それと――」

顔を上げてにっこりと笑う島田さんになぜだか恐怖を覚えた。

「あんたは一言多いのよ！」

「痛い！島田さんうではそっちに曲がるわけが（ボギッ！）あっ、曲がっちゃった……」

僕の腕があり得ない方向に曲がったのを確認すると島田さんは満足いったように離れていった。

あやつは鬼か？

「俺たちの二番手はムッツリーニだ。頼めるな？」

僕の惨事には目もくれず雄二は淡々と進める。こいつも鬼か？

「……任せろ」

「ムッツリーニ君が行くなら僕がでない訳にはいかないよね」

そう言って出てきたのは僕とムッツリーニを卑劣な罠にはめた工藤という女の子だ。

「……やはり来たか、工藤愛子」

「ムッツリーニ君との約束を破るわけにはいかないでしょ？」

「ふっ、威勢だけはいいな」

なんだろう。さっきからムッツリーニがＲＰＧによくいるクールな敵役に見えてくる。

「そういえばムッツリーニ君は理論派なんだってね。僕は実技派なんだよ」

「……卑怯な」（ぶしゃぁぁぁ）

たぶん、たどり着ける限りのところまで妄想したであろうムッツリーニが鼻血を大量噴射して自らの血の海に沈んだ。

「あれ、吉井君は平気なんだね」

「ははははっ、僕はその程度じゃビクともしないよ」

うん。姫路さんのあれの破壊力に比べたら言葉でなんと言われようともかわいいものだ。

「では、両者召喚を」

「……サモン」

システムの不具合なのか、ムッツリーニの召喚獣はまだ点数が表示されていない。

「じゃあいくよ、サモン！」

Ａクラス工藤愛子　保健体育４３２点

４３２点!?

高いなんてもんじゃない。さすがはＡクラスの保健体育Ｎｏ．１……しかもその強さを証明するかのように大きな斧を持った工藤さんの召喚獣は右腕に腕輪もつけていた。

「バイバイ、ムッツリーニ君」

工藤さんの召喚獣がムッツリーニの召喚獣に一瞬で肉薄する。その時――

「……加速」

ムッツリーニの召喚獣が消え、工藤さんの召喚獣が倒れる。

Ａクラス工藤愛子　討死

「えっ……」

工藤さんが呆気にとられるのも無理はない。なぜならムッツリーニの召喚獣が消えると共に工藤さんの召喚獣が戦死してしまったのだ

から。

「……加速終了」

ムッツリーニの呟きと共に召喚獣が現れる。いや、実際は見えるようになっただけなんだろう。

Ｆクラス土屋康太　保健体育５３４点

すごい……

保健体育だけで僕の総合科目に追い付きそうだ。

「勝者、Ｆクラス土屋康太」

口では冷静に言う高橋先生も少しばかりか動揺しているのがわかる。

「ムッツリーニ、よくやってくれた」

「……これくらい当然」

いつも通りといったように戻ってくるムッツリーニは大物の風格すら漂わせていた。

「次は姫路、いけるか？」

「はいっ！」

雄二の頼みを受けて姫路さんが前に出る。その目はなにかを決心しているものだ。本当になにかのために、誰かのために本気になれる人のものだった。

「姫路君がいくなら僕の出番のようだね」

姫路さんの対戦相手は知的そうな顔立ちに、すらっと伸びた長身、正にできる人がかける眼鏡というふうに勉強家を絵に描いたような人だった。

「やはり来たか久保利光……」

「雄二、知ってるの？」

「あぁ。久保利光、前回の振り分け試験で翔子に次ぐ人物だ」

「ってことは、学年２位……」

そんな強敵がまだ控えていたなんて……

「だが、その学年次席というのも姫路が途中退室で無得点扱いになったからという説もある」

「でも……」

「そうだ、それをさしおいても強敵であることには変わりない。あとは姫路がどれだけ頑張ったかだな」

「姫路さんが……」

なら心配はいらない。

なぜなら姫路さんは――――

Ｆクラス姫路瑞希　総合科目４６５１点

Ａクラス久保利光　総合科目３９９７点

誰よりも努力している人だから！

第１２問　終戦始まる！（後書き）

次回ついにＡクラス戦決着！
ちなみに瑞希の総合科目が原作と比べて遙かに高いのは、家庭科できるようになったからです。前々から思っていたのですが、家庭科があの悲惨さで翔子に匹敵するほどの学力がある＝家庭科以外は瑞希の方が上なんじゃないんですかね？

次回もよろしくお願いします

第１３問　罪滅ぼし（前書き）

鍼灸院さん、感想ありがとうございます！

第１３問　罪滅ぼし

明久ＳＩＤＥ

「しょ、勝者、Ｆクラス姫路瑞希」

いくら高橋先生といえどもＦクラスに二連勝されたとあってか、動揺も目に見えるものとなってきた。

「いったい、いつの間にこんな実力を……」

結果が信じられないと言うように久保君が言う。

「私、決めたんです」

それに対して姫路さんは毅然と一言、そう言った。

「決めた？」

「はい。頑張ってみようって決めたんです。私の好きなＦクラスのために頑張ろうって」

「Ｆクラスが好き？」

久保君の疑問ももっともだ。Ｆクラスは姫路さんとは真逆の生徒ばかりで、特に僕なんて……

「暖かくて優しくて、なによりもみんな、誰かのためを想って行動できるいい人ばかりです」

「姫路さん……」

僕はこういったことが苦手だ。いつもは怒られている立場で、それに慣れているから真正面から肯定されるとむず痒いものがある。たとえ、そこに僕が含まれていないとしても……

「でも、一番のきっかけは……私のために頑張ってくれている人の力に、その人に少しでも近づきたいって思ったからなんです」

なぜだか姫路さんは一度こちらを振り返ると笑いかけてきた。僕たちもそれにつられて笑い返す。

「そうか……
そこまで決心を決めていた君に、学年次席の座で満足していた僕が負けるのは当然のことだね」

そう言うと久保君は自軍の方へと足を向ける。しかし、その途中で立ち止まって

「その気持ち、いつか彼に届くといいね」

それだけを姫路さんに言って、また足を進めた。

「って、これは…その……違わないんですけど違うんですっ！」

姫路さんの訴えは久保君に届くことはなかった……

それにしても、姫路さんのために頑張った人って誰だろう？あとでお礼を言いたいんだけどなぁ。

「やりました明久君」

「ありがとね姫路さん」

こちらに戻ってくる姫路さんは笑顔だ。

「よくやってくれた、姫路」

「いえ、私にできるのはこれくらいですから」

姫路さんは謙遜して言うけど、本当はそうじゃない。

「そんなことないよ。姫路さんは試召戦争以外にも頑張ってるし、なにより僕は姫路さんといると楽しいよ」

「そっ、そうなんですか／／／」

「あっ、うん……」

褒められたことに慣れていないのか、姫路さんは顔を赤くしてうつむいてしまう。

「では、四回戦目の対戦者は前に」

選抜メンバーで残っているのは僕と雄二だけだから、僕の出番だろう。ここで勝てばシステムデスクが……姫路さんに相応しい設備で勉強をさせてあげれるんだ！

拳をぎゅっと握りしめると前に出る。

「待て明久」

しかし、僕の進行通路は雄二の手により塞がれてしまった。

「雄二、僕の順番じゃないの？」

「いや、お前は最後だ」

そう言うと雄二はＡクラスの方へ向き直る。

「翔子！俺は今から出るからお前も出てこい！」

「……わかった」

雄二の叫び声ともとれる程の大きさの声に応えたのは、黒いロングヘアーに女の子にしては長身で、おとなしそうな女の子だった。

「……雄二、今から大将戦やるの？」

「あぁそうだ。ただし選択科目は歴史。それも小学生程度の上限ありでやってもらう」

高らかに宣言する雄二。これこそが雄二のたてた作戦。なんでも霧島さんは雄二の教えた嘘によって『大化の改新を６２５年』と覚えているようなのだ。すなわち、この問題がでれば僕らの勝ちだ。でもなんで僕よりも先に雄二がいっちゃったんだろう？なるべく早く勝負を決めたかったのかな？

「では、準備をいたしますので別の部屋に移ってください」

高橋先生の指示に従い、雄二と霧島さんは別室へ移っていった。

～数分後～

席に座る二人の姿がモニターに映し出される。

「では、試験を開始してください」

二人が一斉にテストに取り掛かった。あの問題さえくれば……

雄二ＳＩＤＥ

翔子、悪いが俺はこのテストに全力をつくす。

小学生のテストだからってなめずに復習だってしてきた。

だから勝つのは俺たちだ！

そしてお前にきっぱりと俺を諦めさせる。

誰のためでもなく、俺自身の罪滅ぼしのために、お前を騙している俺自身のために！

そう決心した筈なのに、俺の手は止まってしまった。別に答えが分からないのではない。むしろ逆だ。

だけれど、この問題は……

『大化の改新のおこった年は?』

俺は頭の中にある一つの答えを書き込んだ。

第１３問　罪滅ぼし（後書き）

前回は今回でＡクラス戦が終わるみたいなことを言っていましたが、区切りがよかったのでここまでとさせていただきます。

次回もよろしくお願いします

第１４問　終戦と罪の意識と１つの答え

明久ＳＩＤＥ

雄二と霧島さんがＡクラスに戻ってくる。雄二の狙い通り、あの問題は出たから僕たちの勝利はほぼ確定だ。
まず、スクリーンに霧島さんの点数が表示される。

Ａクラス霧島翔子　９７点

「「「よっしゃぁぁぁ！」」」

Ｆクラスの男子が歓声をあげる。だけれども、となりにいる姫路さんの顔は曇っていた。

「どうしたの姫路さん？」

「あっ、いえ…なんでもないんです……」

いったい姫路さんはなにを悩んでいるんだろうか？
そんな僕の心配を他所に雄二の点数が表示されようとしている。僕たちはそれを固唾を飲んで見守ることしかできない。

Fクラス坂本雄二　９７点

「「「えっ……」」」

さっきまで、はしゃいでいたみんなが唖然としている。

「みんなすまない！」

雄二が頭を下げる。

「俺は翔子に教えた嘘で勝とうと思った。だけど、それは翔子を裏切り、あいつの努力を無駄にすることだと思ったら答えが書けなかったんだ……」

スクリーンに二人の答案用紙が映し出される。そこには共に同じ場所に６２５年と書いてあり、そこにバツがついていた。

「これは俺の弱さが導いた結果だ。どんなバツでも甘んじて受けよう」

まったく僕の悪友はなにを言っているんだか……

「雄二、謝ることないんじゃないかな？だって雄二は自分のしてし

まったことにちゃんと向き合っているじゃないか。それって立派なことなんだから、雄二は弱くなんかないよ」

「明久……」

雄二は僕の名前を呼ぶと共に顔をあげる。

「それにまだ、僕が残っているじゃないか」

「ったく…明久のくせに言ってくれるじゃないか」

こんな状況でも憎まれ口を言う雄二。やっぱりこうじゃなきゃね。

「まっ、雄二には色々と世話になってるしね。なにより、僕にとってもこの勝負負けるわけにはいかないんだ！」

僕はＦクラスの集まりから出ていく。

「では、最終戦を開始します」

選択権は島田さんと雄二しか使っていないから、こちらが選べる。

「科目は歴史でお願いします」

「わかりました。では、両者召喚をしてください」

「Ａクラス佐藤美穂いきます。サモン」

Ａクラス佐藤美穂　歴史２９８点

僕の相手はメガネをかけたおとなしそうな女の子だ。

「Ｆクラス吉井明久いきます、サモン！」

Ｆクラス吉井明久　歴史１６５点

僕の召喚獣が召喚されると共に周りから色々な声があがる。

「なんだあの点数は！？」

「あいつ、本当にＦクラスか！？」

「システムの不具合か！？」

「明久、お前いつの間にそんな点数に……」

雄二までも驚いている。まぁ、僕があんな点数とったら無理もないことだろう。だけど、僕は負けるわけにはいかないんだ！

「僕は今まで色々なものを失ってきたんだ」

だから今日の今という時のために一夜漬けをした。

「？」

佐藤さんは僕がなにを言っているか解らないと言う風に首をかしげる。

「僕を助けてくれた人のことも、支えてくれた人のことも、大切なはずの思い出もすべて……」

だから、今を生きている。それらを犠牲にしながらも。

「明久君…もしかして……」

おそらく姫路さんの考えはあっている。だけど、僕は振り向かずに話し続ける。

「失ったものは取り返せないかもしれないけど、僕はこれからを生きていかなきゃいけないんだ！」

それらを犠牲にして多くの人に迷惑をかけたから。

「いいや、例え明日を紡げないとしても僕は前を見続けていくんだ！毎日を最高のものにするために！」

「ったく、一人でかっこつけんなよな」

僕の召喚獣がやれやれという風にこちらを向く。

「君だって負けられないのは一緒だろ？」

「まぁな。さぁ、いっちょいきますか主人（マスター）！」

召喚獣が僕の意思とは別に木刀を構える。

「やっぱり僕に操作権はないの？」

「そうだな……まっ、主人が操作してくれても構わないが、危なかったら自分で動くからな」

「ありがとう。じゃあいくよ！」

「しくじるなよ！」

今度は僕の意思に従い、木刀を構える。

「戦闘開始！」

どうやら高橋先生も含めて、ほとんど人は僕の召喚獣のことをなにかの茶番だと思っているらしく気にしていない。これって、僕が観察処分者だから変なやつと思われてるだけなんじゃ……

ガキーン！

「主人、ボケッとするな！」

いつの間にか迫っていた佐藤さんの召喚獣とつばぜっている、僕の召喚獣が叫ぶ。

僕は召喚獣の身体を操作し、つばぜり合いの状況から受け流すよう横に木刀をずらす。そしてそのまま、木刀を先端で突くように突き出す。

ズズーー

Ａクラス佐藤美穂　歴史２５２点

突かれた反動で、佐藤さんの召喚獣が僅かに体勢を崩す。でもまだ仕掛けるには早い。

佐藤さんの召喚獣と一度距離をとる。

「不覚でした……」

佐藤さんの召喚獣は体勢を立て直すと、こちらの反撃を警戒してか守りに徹している。でも、召喚獣の扱いに慣れていない人に攻撃をよけるなんて芸当はできやしない。すなわち防御体勢とはただひたすらに攻撃を耐えることを意味する。なら――

「畳み掛けるよ！」

「あったりまえだろ！」

召喚獣と僕の意思が合わさり、一つのものとなる。それは根本と闘った時にも感じたあの感覚。不思議と力を感じることができ、まるでもう一人の自分がいるかのような感覚。

いける！

「「いけぇぇぇ！！」」

僕たちの声が重なり、木刀が佐藤さんの召喚獣に叩き込まれる。それは渾身の力となり、敵を打ち付け吹き飛ばす。

ずどぉぉぉーーん！！

佐藤さんの召喚獣は壁に激突する。

Ａクラス佐藤美穂　歴史１２点

「まだ微妙に残ってるな」

「でもあともう一息だよ」

そう、あと一発叩き込めば僕たちの勝ちなんだ。姫路さんにAクラスの設備で勉強してもらえるんだ。

だけど、その想いが早まったせいか僕たち二人は無策にも関わらず突っ込んでいってしまった。

壁に打ち付けられ、倒れている相手。　そこに刺突の構えで突っ込んでいく僕の召喚獣。そして、そこに突きだされる相手の武器……

「なにっ……」

僕の召喚獣は自身のうみだした速さによって相手の武器に刺さってしまう。そして最悪なことに木刀はあと数ミリというところで届いていなかった。

Fクラス吉井明久　討死

「勝者、Aクラス佐藤美穂！」

「そっ、そんな……」

高橋先生の判定に僕はへたれこむ。

あと一歩だったのに……

あと一歩で姫路さんに笑ってもらえたのに……

「明久君」

柔らかな声と共に僕の肩に手がおかれる。

「ごめん、姫路さん……」

謝って許されるものじゃない。姫路さんは勝ったのに……
それも学年次席の久保君に主席の霧島さんに迫る、もしかしたら勝るほどの点数で勝ったというのに……

「いいんですよ明久君。私は明久といると楽しいんですから」

「姫路さん……」

それなのに姫路さんは笑顔を向けてくれた。それも僕が言った言葉に対応するかのように。

「明久君は私なんかのために頑張ってくれたんですよ。だから私にはそれだけで充分なんです」

そう言って、姫路さんは僕の頭に手をのせる。不思議とそれに安らぎを覚えてしまう。それになんだか……ねむ…たく……

雄二ＳＩＤＥ

姫路が倒れそうになった明久を抱き抱える。ったく、明久のやつは……でも二人とも幸せそうだし、起こすのは酷か……
大方、徹夜したせいで寝てしまった明久に呆れながらも翔子の方へ歩いていく。俺は俺でけじめをつけなきゃならないんだ。

「翔子、すまなかった！」

謝って許される訳じゃない。俺は翔子の好意を、俺を信じるというバカげた、それでいてむず痒くなるような気持ちを裏切ろうとしたんだから……

「……雄二、なにを謝っているの？」

それでもお前は知らないふりをしてくれるのか……

「翔子、もういいんだ。俺がお前に教えたことは嘘だったんだ……だから…だから――」

これ以上、俺に振り回されないでくれ。そう言えたら、どんなにいいだろうか……

でも、俺の弱さはそれすらも許してくれないんだ。あれだけ表面で繕っていてもお前のことが好きだから。お前が俺を想ってくれているのと同じくらいに好きだから……

「……そんなこと気にしてない。それよりも私にとっては雄二との約束の方が大事」

「翔子……」

なぜお前はそこまで俺を信じれるんだ。なぜお前はあんな約束を信じれるんだ……

「……それに雄二と同じことの方が嬉しいから問題ない」

そう言って笑いながらＡクラスの集団に翔子は戻っていってしまった。

俺はどういう言葉をかけてやればよかったんだろうな……
その答えはたぶん、今の俺には出すことはできない。

明久ＳＩＤＥ

「目が覚めましたか、明久君」

「姫路さん…」

保健室のベッドで寝ている僕を姫路さんが心配そうに見ている。その姿は夕陽に照らされていて、普段にも増してなんというか――

「きれいだ……」

「あっ、明久君!?」

まずい、つい口に出てしまった!?どうしよう、なんとか言い訳を考えないと……

「いや違うんだ。その夕陽がきれいだなぁなんて思っちゃったりして。あははは……」

「そっ、そうですね。夕陽がとってもきれいですね」

いくら姫路さんでも、これが嘘なことくらいはわかっているはずだ。ただ、僕にあわせてくれたのは僕の気持ちに応えられないからなの

だろう。僕を悲しませまいとしてくれたのだ。

「……」

「……」

どこかで感じたことのある気まずさがおとずれる。

「あの、姫路さん」

「あの、明久君」

二人の声が重なる。

「姫路さんからでいいよ」

「いえ、明久君の方からでいいですよ」

恥ずかしさで姫路さんと目をあわせれない。いったい、今姫路さんはどんな顔をしているんだろう。

それが気になって姫路さんの方を横目で見ようとしたら、同じく横目で見ようとしていたであろう姫路さんと目があってしまった。

僕は急いで目をそらすと姫路さんとは反対側、すなわち廊下の方を見る。そこには換気用の小窓があって、そこから覗いているFクラスの面々がいて――――

「なにしとんじゃ、ボケェェェ！！」

ベッドから飛び起きると即座に廊下へ向かう。

「やばっ、吉井にバレたぞ！」

「くそっ、いい雰囲気だったのに！」

「次はもっと見つかりにくいところから覗くべきだな」

好き勝手なことを口々に言う面々を必死に追いかけるが、スタート地点の差もあってか追いつく気配がない。

「待ってください明久君！」

後ろから姫路さんも息をきらしながらも追いかけてくる。

「姫路さんは教室に戻ってて。僕は須川たちに制裁を加えてやらないといけないから」

もし、この話がFクラス以外の生徒に伝わってしまったら姫路さんの評判に関わりかねない。Fクラスの、それも底辺に位置する僕なんかと端から見たらいい雰囲気に見えかねない状況になっていたのだから。

「待ってください明久君！明久の目がさめたらFクラスに来てほしいって、坂本君言ってたんです！」

「姫路さん、今はあいつのことなんかよりも優先するべきことがあるんだ！」

後ろを走っている姫路さんに向きながら走っていると突然なにかにぶつかる。

「つぅ……」

進行方向に向き直り見上げるとそこには――

「あっ、雄二」

「よう明久。姫路に伝言を頼んでいたはずだが、すっぽかしてどこに行く気だ？」

「今は雄二なんかの用事よりも姫路さんの評判だよ！」

「お前、また姫路となにかやったな……」

雄二が一種の哀れみを含んだ顔でやれやれといったふうに言う。

「はぁはぁ……やっと追いつきました」

後ろから姫路さんが息も切れ切れにやってくる。

「あっ、姫路さんごめん」

「いえ…私が勝手に……追いかけてきただけですから…」

「でもそんなに疲れさせちゃってるからごめんね。その…姫路さんさえよければおぶろうか？」

今は下校時刻も過ぎてるから、人に見られる確率はほとんどないだろう。（須川たちは除く）

それに、こんなに疲れさせてしまった姫路さんをほうっておくことなんてできない。もともとは僕のせいなんだし……

「明久君は迷惑じゃないんですか？」

「迷惑なことなんかあるもんか。むしろ姫路さんの役にたてるなら僕はそれで嬉しいよ」

「／／／」

あれ？姫路さんが顔を赤くさせて下を向いちゃった。もしかして熱でもあるんじゃ！？なら急いで保健室に運ばないと！

「よっと！」

「ひゃあ！」

姫路さんをおぶると、姫路さんが小さな叫び声をあげる。

「明久、姫路、お前らは俺たちにみせつけてるのか？」

「？」

「？」

（ったく、二人してわかってねぇのか。鈍感天然バカップルが！）

「まぁいい。明久、姫路は熱なんかないからＦクラスに行くぞ」

「えっ、姫路さん熱ないの？」

「あっ、はい。そのぅ、熱はありませんよ」

熱『は』ということは他が悪いに違いない。姫路さんは僕に心配をかけないようにとしてるのかもひれないけど、僕もそこまでは鈍くない。

（絶対に明久は勘違いしてやがるな……）

「じゃっ、雄二行こうか。どうせ今からじゃ須川君たちに追いつきそうにないし」

「そうだな。Ａクラス戦のこと以外にもお前には聞きたいことがあるからな」

聞きたいこととは、おそらく召喚獣のことだろう。無論話すつもりだ。僕が今、知っていることを、覚えていることをすべて……

僕は姫路さんを背負いながら、雄二と共にＦクラスへと向かった。

第１４問　終戦と罪の意識と１つの答え（後書き）

遂にＡクラス戦が（半端なかたちで）決着つきました。次回は今回、不明瞭だった色々な部分を補足する回ですので原作にはない完全オリジナルとなります。
それと明久の召喚獣の名前ですが、中々決まらないのでなにか案のあります方、名前を応募します！妙案のある方はぜひともよろしくお願いします！

では、これからも拙作をよろしくお願いします

第１５問　君の名前は明るい希望（前書き）

アスタリスクさん、ＮＩＧＨＴさん、感想ありがとうございました！
ＰＶも５００００を突破いたしました。

第１５問　君の名前は明るい希望

明久ＳＩＤＥ

「おぉ、三人とも戻ってきたかのぅ」

「みんな待たせちゃってごめんね」

僕たち三人がＦクラスに戻るとそこにはいつもの三人と霧島さんがいた。当然だが、姫路さんは教室の前でおろしている。みんなの前では恥ずかしかったり、姫路さんに申し訳なかったりするが、一番の理由は僕の理性がもたないということだ。あの自己主張の激しい柔らかな部分が密着しているだけでも危ないというのに、歩く度に振動で押し付けられるようになるのだ。

「……明久チェンジ」

「そんなに僕の顔は危なかった！？」

ムッツリーニの判定に不服を訴える僕の肩に雄二の手がおかれる。さすが僕の悪友。僕をフォローしてくれるんだね。

「お前は素でツーアウト、ツーストライクだ」

前言撤回、こいつに友情を求めた僕がバカだった。

「……雄二、あまり吉井をからかうとかわいそう。それに私たちは戦後対談をするべき」

「翔子ちゃんの言う通りですよ。それに明久君は…その……（かっこいいです）」

「わかってるって。そんなに急かすな。まずは円になって話し合いでもするか」

雄二の声で姫路さんがなにを言ったかよくわからなかったが、僕をフォローしようとしてくれたことは確かだ。そういう気遣いは素直に嬉しい。

「姫路さん、座ろうか？」

「そうですね」

僕たちは雄二に言われた通り円になって座る。畳ゆえにくつろげながら円になれるというのはFクラスの数少ない利点だろう。

「まずは戦後対談なわけだが、FクラスとAクラスは共に二勝二敗一分、すなわち引き分けになったわけだ」

「……学園長の特別裁定で両クラスとも三ヶ月間、試召戦争は禁止」

三ヶ月間延期かぁ……
ってことは、姫路さんは少なからずあと三ヶ月間はこの環境で勉強しなきゃならないのか……

「そこで俺の提案なんだが、ＡＦ両クラス間で定期的に模擬試召戦争を行おうと思う」

「でも試召戦争は三ヶ月間、禁止なんじゃないの？」

「……あくまで模擬で設備は入れ換えないから問題ない」

なるほど、勝敗がどうあれ設備変更をしないということか。

「でも、それになんの意味があるのよ」

「まぁ、お互いの士気の高め合いと試召戦争ができない不満の解消といったところだ」

「確かに雄二の狙い通りにＦクラスには効果があるだろうけどＡクラスへのメリットは？」

「……私たちＡクラスも場馴れしておく必要がある。それに「翔子ストープ！！」

雄二が突然、霧島さんの言葉を遮るように大声をあげる。

「（雄二、言っちゃダメなの？）」

「（お願いだからめったなことは口にださないでくれ。俺のクラスの連中になにさ
れるかわかったもんじゃない）」

「（よくわからないけどわかった。雄二が付き合ってくれるって言ったことは黙っ
ておく）」

「（だからそれを言うなって言ってるんだよ！）」

なにやら内緒話をしている雄二と霧島さんはなんだか楽しそうだった。なんとい
うか――

「二人ともお似合いだよね」

「なっ、バカなに言ってやがるんだ！」

「明久君の言う通りですよ。翔子ちゃんも坂本君もとっても楽しそうでしたから
」

「……嬉しい」

「翔子も姫路もなに言ってんだ！」

「ほれほれ雄二も落ち着くのじゃ」

「そうよ、坂本が一番取り乱してるわよ」

「……照れ隠し」

秀吉たちに言われて雄二もようやく落ち着きを取り戻したらしく、深呼吸を一度いれている。

「話題を変えるとするか」

こいつ逃げたな。

「次は明久、お前のことだ。Ａクラス戦の時のお前を見るかぎりなにか知ってるよな？」

「うん……」

僕は昨晩、僕がおいてきたものを知ったんだ。

「その…どこまで知ってるんですか？」

隣から話しかけてくる姫路さんはとても心配そうな顔をしている。いったい僕は何度、僕の知らないところで姫路さんやみんなを心配させていたのだろう。

「僕が知っているのは振り分け試験当日の日の事と、僕の記憶が一日しかもたな

いってことかな…」

「それは覚えているというのではないかのぅ？」

普通、自分の記憶を知っているとは言わないだろうから秀吉の疑問ももっともだろう。ただ、僕の場合はそれで正しいんだ。

「ううん、知っているで正しいんだ……僕のことは僕の召喚獣に教えてもらったことだから。詳しい話は召喚獣に聞けたら早いんだけど、召喚フィールドがないからね」

「それなら心配いらないぞ」

「？」

ガラガラ

雄二の言葉と共に教室の扉が開く。そこから入ってきたのは色黒の肌、筋骨隆々の体、強面に角刈りの――――

「なっ…なんで鉄人がここに…？」

「俺が試召戦争のために新しいＦクラスの教師として呼んだ」

「なんてバカなことしてくれるんだ！これじゃあ毎日が鬼の補習じゃないか！」

「吉井、そんなに喜ぶな。お前には土日の特別授業を用意してやってるから安心しろ」

さっ、最悪だ……

「西村先生、いきなりで悪いが召喚許可をもらいたい」

「学園長からのお許しもでていることだし、いいだろう」

鉄人が召喚フィールドをつくりだす。

「サモン！」

僕のかけ声と共に見た目は普通の召喚獣が現れる。

「ふぅ～、やっとでれたぁー」

召喚獣が僕の意思とは関係なしに背伸びをしている。

「吉井、これはどういうことだ？」

鉄人が僕の召喚獣を訝しげに見ながら言う。

「その、なんていうか僕の召喚獣は意思があるんです」

「意思があるだと？こうしちゃいられん。学園長に報告してくるから勝手に帰るなよ」

「西村先生ちょっと待てくれ。先生がいなくなったら明久の召喚獣が消えちまうんだが…」

「ちょうど今、Eクラスに布施先生がいるから頼んでこよう」

そう言うと鉄人は召喚許可を取り消すと教室を出ていく。そしてその五秒後にまた召喚フィールドが形成される。いくらEクラスが隣だといっても説得も含めて五秒は人間のできる業じゃない……

「明久、早く召喚しろ」

「あっうん、サモン！」

一度フィールドが消えたことによって消えた僕の召喚獣が再び現れた。

「短時間に何度も呼び出すなよな…」

「あっ、ごめん…」

なんというか、僕の召喚獣は僕に対して高圧的な部分がある気がする……

「そういえば明久君の召喚獣に名前は決まっていないんですか？」

「普通に召喚獣とか君とかって呼んでるけど？」

「せっかく会話できるのにそれじゃあ不便だな。よし、今ここで名前を決めよう」

「変な名前にすんなよ…」

召喚獣は腕捲りをしながらちょこんと姫路さんと僕の間に座る。

「うーん名前ねぇ……」

「いきなり言われても思い付かんのじゃ」

島田さんと秀吉は考え中らしい。

「明久の召喚獣なんだからバカでどうだ?」

「雄二、それは僕への宣戦布告と受け取っていいのかな?」

「俺だってそんな名前は気にくわねぇ」

僕の召喚獣もご立腹らしい。

「こっちには人間の何倍もの力がある召喚獣がついているんだよ。それでもやる?」

「くっ…確かに分が悪いな。よし、この名前は没に」

こいつ、本気で僕の召喚獣にあんな名前をつけようと思っていたんだろうか?

次はムッツリーニがすっと手を挙げる。

「……ムッツリーニ2世」

「勝手に後継者をつくらないでよ！」

「てめぇの後継者なんかなるかよ！」

「バカな……」

本気でこんな名前で納得すると思っていたんだろうか……

「……じゃあカケルは？」

霧島さんが右手をちょこんと挙げて提案する。

「カケルか……
いい名前だけどなんでカケルなの？」

「……召喚獣の『召』を同じ読みの私の『翔』にかえる。で、『翔』はカケルって読むから」

ここにきてようやく本当に真面目な意見がでてきてくれて助かった。
このままじゃボケ大会になりかねなかったしね……

「ねぇ君はカケルって名前でどう？」

「却下」

「えっ、どうして？結構いい名前じゃないか」

僕が召喚獣を説得させようとするが、召喚獣は姫路さんのスカートをくいくいと
引っ張って気を引こうとしていた。要するに僕の話は無視しているわけだ。

「どうしたんですか？」

自分のスカートを引っ張っている召喚獣に気がついた姫路さんが召喚獣に話しかける。

「ねえねえ、姫路さんも僕の名前考えてよ」

なんか僕たちと話すときとは随分と違う話し方だなぁ……

「今考えていますから待っててくださいね」

「うんっ！」

フィードバックさえなければ、こいつを殴りたい。

「姫路さんが決めてくれる名前っ！姫路さんが決めてくれる僕の名前っ！」

嬉しそうに跳ね回る召喚獣は無邪気な子供そのままだった。ただし、姫路さんに
対してぶりっこなところ以外……

「そうですねぇ……明久君の召喚獣の名前は『明るい希望』という意味で『明希（あき）』というのはどうですか？」

「うんっ、それにする。姫路さん、ありがとうね♪」

明希はさっきにも増して嬉しそうに跳ね回っている。

「確かに明久にとっては、なにかと知っているであろうこいつが『明るい希望』になるかもしれないな」

雄二の言う通りだ。明希は僕の知らないことをすべて知っている。これからどうなるかわからないけど、明希が僕にとってマイナスになることはないだろう。

でも明希って名前って字面だけ見ると、僕と姫路さんの子供みたいで恥ずかしいようなむず痒いような感じになる。

ってダメだダメだ。せっかく姫路さんが考えてくれた名前なのに僕はなんて下心を抱いているんだ。

「おい明希、あんま跳び跳ねるな」

「跳び跳ねるくらい、いいだろ？」

明希は雄二の忠告を無視して未だに跳び跳ねている。

「ダメだこいつは……
姫路、お前から明希に止まるように言ってくれ」

「あっ、はい。明希君、あんまり跳ね回ると危ないですよ」

「うんっ、わかった！」

あれだけ跳び跳ねていた明希は姫路さんの一言でおとなしくなった。

「姫路さんだっこ！」

だけど次なる願望丸出しで姫路さんに向かって両手をあげている。

「いいですよ」

「わーい♪」

姫路さんの手のひらに乗せてもらった明希はご満悦の様子だ。

「ウチだって……」

島田さんが真面目な顔で姫路さんの方へ向かっていく。

「ほら明希、ウチの方にもきなさい」

「やだっ！姫路さんのところがいいっ！」

明希は差し出された島田さんの手から逃げるように姫路さんの腕を登っていく。

「なんというか姫路にぞっこんじゃのぅ」

「なんで瑞希だけそんなに馴つかれてるのよ」

「そんなこと言われましても……
ほら明希君、他の人のところにもいきますよ？」

姫路さんが自分の肩まで登ってしまった明希を手のひらに乗せる。

「うぅ…姫路さんは僕のこと嫌いなの？」

「嫌いなわけじゃありませんよ。ただ……」

上目遣いで訴える明希に姫路さんはたじたじだ。

「それにしても、なんで会ったばかりの姫路にここまでぞっこんなんだ？」

「会ったばかりじゃない。ずっと主人（マスター）の中から見てきたしな」

雄二の疑問に明希は姫路さんの手から飛び降り、円の中心に立って説明を始める。

「俺の意識が明確に生まれたのは根本の野郎と闘う直前だけど、俺自身の記憶が
事故のあった瞬間からあるんだから、その時俺が生まれたんじゃねぇのか」

「ってことは意識のないまま明久の中にいたってことか？」

「まぁ、そうなるだろうな」

僕自身は明希のことについて昨晩に教えてもらっているから目新しい話ではない。でも根本と闘った時に感じた、あの感覚は明希が生まれた証拠だったのかもしれない。

「そういえば聞き忘れておったが、お主は結局何者じゃ？」

「何者って言われても、明希としか答えようがないな。俺も主人も、俺が生まれた理由がわからないんだから」

そう、明希の正体は不明なところが多いのだ。一応、召喚獣としての機能は一通り揃ってはいるけど……

「その、明希君は明久君がなくしてしまったものをもってるんですよね？」

「うんっ！主人のなくしちゃった記憶は全部もってるよ。山に行ったことも海に行ったことも、どんどん料理が上手くなっていくことも全部覚えてるよ」

僕の知らない、いや、忘れてしまった記憶を明希はもっている。僕にはそれが羨

ましいような、哀れのような気がした。だって、明希は自分のものじゃない記憶
を背負って生きているのだから……
それにしても、明希の話し方は露骨過ぎる。あとで話しておかないとな……

「では結局、明久君自身はなにも変化がないってことですか……」

悲しそうに言う姫路さんはどれだけ優しいんだろう。ただの……そう、本当にた
だの友達でしかないはずの僕のことをこんなに心配してくれるなんて……

「あっ、それなら大丈夫だよ。主人にはその日、必要な記憶だけを共有して次の
日に繰り越してるから」

「ってことは明久君は元通り生活できるってことですか!?」

「一部しか共有できないから元通りとはいかないけど、ある程度は改善されるは
ずだよ」

「ありがとうございます明希君!」

「えへへへ」

姫路さんに頭を撫でられて明希は嬉しそうに笑う。

「……でもどういう原理で共有してるの?」

「なんでも観察処分者に課せられるフィードバックを逆利用してやってるらしいんだ。まぁ、そのせいで感覚以外もお互いに共有するはめになっちゃったんだけどね」

しかも、システムの一つである明希がシステムそのものを利用するのだから驚きものだ。

「ってことは今明久は姫路に撫でられている感覚を楽しんでいるわけだな」

「えっ、あっいやそんなつもりは……」

もともと感触はフィードバックするものだが、明希がきてからはそれが強くなった。もちろん直接感じる訳ではないが、今までの二、三倍程は感じるようになっている。

それを気にしないように我慢していたというのに、雄二はなんてことを言ってくれるんだ！おかげでさっきから頭に伝わる感触が気になって仕方ないじゃないか！

「……明久、本日二度目のチェンジ」

「うっ……」

今度は自分でも危ない顔をしている自覚があったから反論できない。

「明希、早く説明続けてよ」

自分の失態を隠したい気持ち半分、本当に説明を続けてほしい気持ち半分で明希
に催促する。

「いやだ」

「明希君、明久君が困ってますからお願いできますか？」

「うんっ！」

こいつめ……
拳を握りしめながらも、不毛な結果にしかならないので殴ることはやめておく。

「で、どこまで話したんだっけ？」

明希が姫路さんの手から再び降りて話し始める。

「明久君に記憶の一部を共有できるところまでですよ」

「そうだったね。えっとまずは――」

ここからは僕の知っている話がしばらくの間続く。今までの話も含めて要約する
と

明希が普通の召喚獣と違う部分は意識があって勝手に動き回るというところだけ
。

共有できる記憶は明希が必要と判断してくれた記憶のみ。あまりにも多くを共有
すると僕自身が危険らしい。（今現在は僕が記憶障害をわずらっていることと、振
り分け試験当日に姫路さんを庇って病院送りになったということのみ）

記憶共有によってフィードバックが強化されており、その影響により僕から明希
へのフィードバックも存在する。

明希が生まれた理由は不明。

あとは、明希自身は話していないけど極度の姫路さん主義であるということだ。
これはどう考えても矯正する必要がある。うん、絶対にだ。

「まぁ、こんなところかな」

「なかなか面白いものじゃのぅ」

「そうか？」

明希は秀吉に対して興味ないというふうに応える。

「面白いというか神秘的なものを感じます」
「神秘的だなんて、それほどでもないよ」
「へぇ、本当に喋ってるじゃないかい」
突然、教室に入ってきたババァ（学園長）に明希がびくりと肩を震わせる。
「なんだババァかよ。驚かせんなよ」
「あんたのデータ、今すぐにデリートしてやろうか!?」
ババァが明希を睨みながら不機嫌そうに言う。
「いいのか?俺は貴重な研究サンプルなんじゃないのか?」
「あのバカの召喚獣のくせに言うじゃないか」
「そんなことはどうでもいい。研究するねかしないのかどっちだ?俺だって自分の生まれた理由ぐらい知りたいから協力してやるぜ」
バカって言われた人には悪いけど僕も明希の出生は気になるから、明希の言う通りババァの言ったことなんてどうでもいい。
「研究するためにわざわざ出向いたんだから、研究させてもらうに決まってるさね。ただ、あんたの出生理由はわからないかもしれないよ」

「なに、わかれば儲けものとして考えるさ。それよりも今は時間がほしい」

「あんま急かすんじゃないよ。西村先生、召喚フィールドの維持を頼めるかい？」

「はいっ！では、ご一緒します学園長」

鉄人が直立の姿勢でバババァと明希と共に教室を出ていった。

「なんかあっという間だったな…」

雄二が肩をすくめて言う。

「僕って明希が戻ってくるのを待っていないといけないのかな？」

「明希君も召喚獣ですから、その必要はないと思いますけど」

「なら、もう遅いし帰ろうか」

窓の方を見れば既に夕日が落ちかかっている。

「そうだな。俺も寄らなきゃならん所があるから帰るとするか」

雄二の声でみんなが帰り支度を始める。僕も自分のカバンをとろうと後ろに手を
伸ばす。あれ？やけに重いなぁ……

「明久君、それ私のカバンです…」

姫路さんの言葉にハッとなって手に持っているものを見る。それは確かに僕のカバンではなく姫路さんのカバンだった。

だけど、僕はそれを姫路さんに渡すことができなかった。カバンの隅からのぞいているかわいらしい便箋のせいで。まるでラブレターのようなそれから目を離せなかったのだ。

だけど、僕はこれがなんなのか知っている。姫路さんが大事にしているラブレターだ。根本にとられて困っていたラブレターだ。僕がちょっとしたアドバイスをだした、あのラブレターだ。

でも、これは明希から共有してもらった記憶じゃない。僕自身が覚えていることなんだ。僕は記憶障害のはずなのに……

明希から共有してもらった訳でもない僕の記憶。これがなにを意味するのかはわからない。だけれども、このことは誰にも言わない方がいい気がした。もちろん明希にもだ。これ以上、僕のことでみんなを悩ませたくないから……

「ごめんね姫路さん。はい」

平静を繕いながら姫路さんにカバンを返す。

「ありがとうございますね明久君。はい、明久君のカバンですよ」

「あっ、ありがとう姫路さん」

姫路さんから僕のカバンを受け取り立ち上がる。周りを見回せば、みんな支度を
終えているようだった。そのまま僕たちは誰ともなく教室を出て、家路につく。

～下校中～

「そういえば明希から聞いた話なんだけど、ここ最近は姫路さんが僕の面倒を看
てくれていたんだってね。ありがとう」

隣を歩く姫路さんにお礼を言う。僕と姫路さんの家はそう離れていないため、今
一緒にいるのは姫路さんだけだ。

「いえ、私が好きでやっていただけですから気にしなくていいんですよ」

姫路さんはそう言ってくれているけど、僕が姫路さんを庇ったことに罪の意識を
感じているに違いない。だけれども、その罪の意識が僕と姫路さんを繋いでいて
くれるというならば、僕は……
それにあのラブレターのことだって、僕は姫路さんと繋がるための

道具として見
てるのかもしれない……

「どうしたんですか、明久君？」

「いや、なんでもないよ」

こういう時の姫路さんは僕の些細な変化を目ざとく見つけてくるから困る。なん
とかしてごまかしきらないと。

「嘘をついてますね」

やっぱりバレた。

「なんのことだかさっぱりだよ」

通用しない嘘で取り繕って時間を稼ぐ。あともう少しで姫路さんと別れる交差点
だ。あそこまでごまかしきれば…

「じゃあ明久君、これ…知ってますよね？」

そう言って姫路さんは、あのラブレターをカバンから取り出した。

「！？」

「やっぱり知っているんですね……」

姫路さんの顔が喜哀を両方含んだものになる。

「明久君はいったい私を……私のこれのことをどこまで知っているんですか…？」

ここで真実を話すべきなのか？
そうやって僕はまた、姫路さんに罪の意識を抱かせるのか？
また、新しい繋がりをつくるつもりなのか？

「一人で……一人で抱え込まないでください」

「姫路…さん……？」

いつの間にか僕の背中に姫路さんが手を回していた。姫路さんが今、どんな顔をしているかわからないけど、声から泣いていることはわかる。それも、僕なんかのために泣いてくれているのだ。
そんな状況にも関わらず、僕は隠し続けるのか？
例え、それが姫路さんと繋がる口実になるとしても話すべきなんじゃないだろうか。
いや、姫路さんにだからこそ話すべきなんじゃないだろうか。僕の大切な人だからこそ嘘偽りなく接するべきなんじゃないだろうか。なに一つ偽りなく接するべきなんじゃないだろうか。

「姫路さん、実を言うと僕――」

???SIDE

「ってことはあいつは…」

「あぁ、充分ありえることだね」

「なんとかする方法はないんですか」

「あることはある。ただし、君と一緒にいるお嬢ちゃんに協力してもらうかもしれないよ？」

「……私でできることならする」

「すまないな翔子」

第１５問　君の名前は明るい希望（後書き）

これにて一巻分終了となりました。見返してみれば、原作には似ても似つかないものになっています……
特に試召戦争はほとんどがオリジナルになってしまっているという惨事に……
そんな状況の拙作にお付き合いいただきありがとうございます。ここで少し明希の設定を

～明希（あき）～（名付け親は瑞希）

明久の召喚獣であり、自我をもつ。明久に記憶の提供をしている。ただ、共有できる記憶は明久の脳の状況により、ごく僅かである。おそろしいほどまでに姫路さん主義であり、対応の差が露骨に現れている。
姫路さん＞＞＞俺＞＞＞＞＞＞＞主人（マスター）＞＞＞その他
といった優先順位をもっている。
普段の一人称は『俺』であるが、対瑞希のときは『僕』である。
出生理由は不明であるが、彼の性格と関係がある。

アスタリスクさん、お名前の提供ありがとうございました！

では、これからも『バカとテストと失われゆく記憶』をよろしくお願いいたします。ご意見、ご感想などありましたら、どのような内容でもぜひどうぞ！

特別問題　座談会（試召戦争編）（前書き）

今回の話は本編に全く関係ないばかりか、メタ発言、作者の話まで存在します。
それらに嫌悪感を覚える方は、今回をとばしてお読みいただいて結構です。

特別問題　座談会（試召戦争編）

唐「お気に入り登録５０件突破の感謝と一章も終わった記念として座談会を開こうと思います。まずは自己紹介からどうぞ！」

明「本作で主人公をやらせてもらっている吉井明久です」

瑞「えっと…姫路瑞希です」

雄「坂本雄二だ」

唐「今回はこのメイン三人＋作者で座談会を行います」

瑞「そういえば明希君は参加しないんですか？」

唐「当初は明希も参加させる予定だったんだけど、一章の最後に出てきたわけだから二回目から参加してもらうよ」

明「明希が聞いたら暴言をはきそうだね…」

雄「あぁ。あいつなら暴言ですまない気がするがな…」

唐「まぁ、そこは気にしない方向で話を進めようか」

雄「といっても何を話すんだ？」

唐「そんなこと言われても決めてないしなぁ…じゃあ、作者の知人から言われてることでも話そうか？」

明「決まってないならそれでいいんじゃない…」

唐「じゃあ1つ目。明久が『それ日』の明久に似てる」

瑞「『それ日』って、バカテスのスピンオフ漫画、『それが僕らの日常』のことですか？」

唐「そうだよ。作者の書く話の明久は総じて『それ日』の明久に似てるらしいよ」

明「どんなところが？」

唐「姫路さんにぞっこんのところ」

明「なっ、なんてことを！？」

瑞「あっ、明久君！？」

明「ちっ、ちがうんだ姫路さん。これは誤解の正解の曲解であって、決してなにか間違いがあった訳じゃなくて…」

雄「おい、作者。確実にこうなるの分かってて言っただろ？」

唐「バレた？」

雄「大方、話を決めていないってのも嘘だろ？」

唐「そうだよ。だって、二人を弄りたかったし」

雄「まぁ、作者のしたかったことは置いとくとしてだ。確かに、作

者の書く明久は他に類を見ないほど姫路に一途だな。なんか理由があるのか？」

唐「単純に明瑞（明久×瑞希）が好きだから」

雄「悪い。お前にまともな返答を求めた俺がバカだった……」

唐「なんと失敬な！」

雄「じゃあ、言うが今まで創作紛いをしたｏｒ手伝った理由は？」

唐「好きなＣＰ（カップリング）があったから。ちなみに今までユリエス、リクつら、アルラン、に携わったことがあるよ」

雄「全部分かるやつなんかいないだろ…」

唐「もし分かる人がいたら相当、作者と気が合うということになるね」

雄「んな稀有な存在いるか！」

唐「まぁまぁ、世界は広いんだからどこかにはいるさ」

雄「ならいいんだけどな…
そういや、明久と姫路はどうした？」

唐「あそこ」（少し離れた場所を指差す）

明「――――ということがあったんだよ」

瑞「そうなんですか。面白そうですね」

雄「あいつら話の主旨が変わってないか？」

唐「あの二人だから仕方ないよ」

雄「じゃあ、作者に聞きたいことを聞いてから呼び戻すとするか」

唐「聞きたいこととな？」

雄「お前、『それ日』持ってなかったよな…」

唐「2巻だけ持ってる」

雄「先日買ってきた本の中にあったのか」

唐「友人に勧められたからね」

雄「で、なんで2巻だけなんだ？
……いや、言わなくていい。なんとなく察しがついた」

唐「言わなくていいなら言わないよ」

雄「じゃあ呼び戻すとするか。おーい、明久、姫路、戻ってこい！」

明「あっ、今いくよ」

瑞「すいません。今いきます」

～到着～

唐「はい、お二人さんお帰り」

明「ただいま」

瑞「ただいまでいいんでしょうか…？」

雄「次はなんの話題でいくんだ？」

唐「次はそっちで決めてよ」

明「なら今回これなかった明希の話は？」

唐「じゃあそれで」

雄「適当だな……」

明「明希って、他に類を見ないほど癖が強い性格してるけどなんで？」

唐「それは明希の出生理由に関係あるから話せないけど、他と被らないオリキャラがほしかったというのもあったかな」

雄「確かに、あの性格なら被ることはないだろうな」

唐「被らないぶん、受け入れられるかは心配なんだけどね」

明「それは否定できないよね……」

瑞「明希君、根はいい子だと思うんですけど…」

雄「まぁ、姫路への実害は皆無だからな」

明「そのぶんだけ、僕らが危険なんだけどね」

雄「召喚フィールドがなければ出てこられないっていうのがせめてもの救いだな」

唐「まぁ、その救いも清涼祭が終わるまでだけどな」

明&雄「えっ！？」

～学力について～

明「そういえば作者の学力ってどれくらいなの？」

唐「商業高校だから進学校の文月学園と比べられないけど、英語以外は平均以上だよ」

瑞「英語が苦手なんですか？」

唐「どうも英語だけは理解がいかなくて平均点を５～１０点ほど下回っちゃうんだよね……」

雄「予習、復習を怠るからだな」

唐「お前には言われたくない」

明「ははははっ、確かに雄二には言われたくないね」

雄「否定はしないが、ちょっと面かせやぁぁぁ！！！」

唐「自分の名言をこんなところで使うなぁぁぁ！！」

～数分後～

唐「ふぅ…酷い目にあったぁ……」

瑞「唐笠さんが坂本君をバカにするからですよ」

明「そうそう」

瑞「明久君もですよっ！」

明「すいません…」

雄「まぁ、これに懲りてしっかり予習、復習でもするんだな」

瑞「それは坂本君にも言えることですよ」

？「……雄二は常識を学ぶべき」

雄「げっ…翔子、なんでお前がここに……」

翔「……雄二のいる場所ならどこにでも行く」

唐「霧島さん、雄二が霧島さんと話したいことがあるってさ」

翔「……嬉しい。雄二と一緒に老後の計画をたてる」

雄「ちょっと待て翔子！付き合ってもない俺らが老後のどういう―目がぁぁぁ！！！」（目潰しされて霧島さんに引きずられていく）

明「じゃあ、座談会はこれにてお開きで」

瑞「坂本君はほっとくんですか！？」

唐「あれが二人の愛情表現だからいいんだよ」

瑞「そう…なんですか？」

明「大丈夫だからお開きにしようか」

瑞「そうですね」

唐「あっ、そうだ。はいっ、今日座談会に参加してくれたお礼」

明&瑞「夏祭りペア招待券？」

唐「まぁ、じきに本編で行くことになるから持っておいてよ」

明「なんというメタ発言……」

唐「気にしたら負けだぜ。

まっ、気を取り直して、これにて座談会を終了します」

瑞「お付き合いいただきありがとうございました」

明「できる範囲で応えるみたいだから、やってほしい議題があったらリクエストしてみてね」

特別問題　座談会（試召戦争編）（後書き）

ということで第1回座談会終了です。いかがだったでしょうか？
基本的に語りたいことを語っただけですので、特になにかってことはないと思うんですけどね…

作中でも言いました悩みとして、皆さんは明希のことをどうお考えでしょうか？
いい、悪いだけでよいですから意見をもらえるとありがたいです。

第１６問　僕と祭りとウエディングドレス（前書き）

総合評価ポイントが２００を越えました！
みなさん、ありがとうございます！

第16問　僕と祭りとウエディングドレス

～バカテスト2～

『あなたが今、欲しいものはなんですか?』

～姫路瑞希の答え～
想い出

～先生から～
なんでしょうか。ただのよい回答に見えますが、深い意味がある気がします。

～吉井明久の答え～
なくしてしまったもの

～先生から～
Fクラスはなんだか重くないですか!?

～土屋康太の答え～
後継者

～先生から～
なにの!?

～明希の答え～

姫路さんとの時間

～先生から～

そういうことは本人に――って、あなた誰ですか！？

明久ＳＩＤＥ

「で、清涼祭の出し物のわけだが何がいいと思う？」

雄二が教卓に立ちながらみんなに呼び掛ける。雄二がこんなにやる気なのには理由があって、霧島さんとの売上勝負を引き受けてしまったからしいのだ。

雄二曰く、負けたらなにされるかわからないとのこと。そんなに怖いなら勝負を引き受けなければよかったのに……

「おっ、ムッツリーニなんだ？」

雄二にさされて手を挙げたムッツリーニが立ち上がる。

「……とうさ……ぬすみど……アダル…写真館」

どうして写真館よりも先にヤバい単語を連発したんだと言われれば、ムッツリーニだからとしかいうしかない。

「明久、写真館だ。書いとけ」

雄二に促されて板書き係りを（強制的に）任された僕は黒板に書く。

『写真館』

「次は横溝か。なんだ？」

「メイド喫茶は使い古されてそうだから、ウェディング喫茶なんてどうだ？」

ウェディングかぁ……

純白の衣装に身を包んだ姫路さんはさぞかしかわいいだろうなぁ…

なんというか清楚感がアップして普段よりもかわいらしさが際立つと思う。

ウェディングドレスといえばタキシードだよね。ウェディングドレスとタキシード、姫路さんと僕かぁ……

で、成功したあかつきには、僕と姫路さんは教会へ直行してめでたくゴールインというわけか。これはなんとしても成功させなきゃね。

「おい、明久。妄想にふけってないで書け」

「はいはいっと」

雄二に幸せな人生計画を邪魔されたのを不服に思いながらも黒板に書く。

『ウェディング喫茶（男子はタキシード）』

「欲望丸出しにしてるんじゃねえ！」

「タキシードくらい着たっていいじゃないか！」

「お前の場合、狙いが見え見えなんだよ！」

「じゃあ言ってみなよ」

僕の考えが雄二ごときによめると思うなよ。

「言ってもいいんだな。この大勢の前で？」

「ごめんなさい」

どうやら雄二は僕の考えがよめていたらしい。さすがは元神童……

「次は須川か」

「中華喫茶なんてのはどうだ？」

中華喫茶かぁ…

中華喫茶といえばチャイナドレスだよね。個人的にチャイナドレスは好きだけど、対応するものを着てもなにもないっていうのが弱点なんだよなぁ……

『中華喫茶』

ガラガラガラガラ

「どうだ、催しは決まったか？」

僕が黒板に書き終わるのとほぼ同時に鉄人が教室入ってくる。本来ならばＦクラスの担任は福原先生なのだが、雄二がＡクラスにリベ

ンジするためにFクラスの担任になってもらうように頼み込んだらしいのだ。
おかげで毎週土曜日は地獄の補習と思いきや、鉄人の授業は思いの外わかりやすいと評判なのだ。というのも、僕自身は隣の姫路さんに教えてもらいながら授業を進めているので、いまいち実感がわかなかったりする。
あと時々、ムッツリーニがこちらを撮っている気がするのは気のせいだろうか？

「今のところはこの三つですね」

「もう受理までに時間がないんだし、この中から決めるように」

鉄人の指示を受けた雄二がみんなの方に向き直る。

「ということで、この中から多数決をとる。異論はないか？」

「「「異論なーし」」」

Fクラスの大多数を占める雄二を含めた野郎共がニヤニヤした顔でこちらを見ている。なんだろう悪寒が……

「じゃあまずウェディング喫茶がいいやつは手をあげろ！」

「はー「「「「それだぁぁぁ！！！」」」」」

僕が手をあげるまでもなく、男子の満場一致でウェディング喫茶に決定した。
こいつら、なにかたくらんでるな……

「しかし、ウェディング喫茶っていってもどこから用意するんだ？」

「それなら演劇部の物を借りてくるとしよう」

そう言って秀吉がそそくさと教室を出ていってしまった。

「じゃあ、次に料理内容だがどうする？」

「まずは無難にコーヒー辺りじゃないかな」

「パスタなんかもいいんじゃないか？」

「ここは豪勢に七面鳥だな」

「ウェディングなんだからケーキは必要だろ」

僕の意見に引き続き、みんなが次々と意見をあげていく。僕は急いでそれを黒板に書いていくが、とても間に合いそうにない。

「やっぱりサラダ類も必要じゃないか？」

「ならドレッシングも必要だな」

「飲み物は洒落てシャンパンとかどうだ？」

「麦茶とかも用意しようぜ」

「スープ系も必要だろ？」

「唐揚げとかもあったらいいな」

えっと…サラダにシャンパンに……

「ああ！！もう、みんな言うの早すぎだよ！」

「みんな、明久が書ききれないから一旦意見を出すのをやめてくれ」

雄二が手を叩きながら、みんなを止めてくれる。

えっと確か……

「ごめん雄二、なにを書いていいか忘れちゃった…」

「ったく、お前ってやつは…

みんな、すまないが自分のあげた意見をもう一度言い直してくれ」

「「「……」」」

雄二がそう呼び掛けるが誰一人として反応しない。もしかして……

「お前ら、忘れたのか…？」

Fクラスの男子全員が首を縦に振る。要するにこいつらはその場の思い付きで言いたいことを言っていただけなのだ。

「あのぅ、一応記録ならとってありますよ？」

姫路さんが遠慮がちに右手をあげて言う。

メモをとってあるなんてさすが姫路さんだ。気が利いているなぁ。

「助かるよ。ありがとね姫路さん」

「ちょっと待っててくださいね」

そう言って姫路さんが自分の席か僕の方に向かってくる。

「えっと…まずはコーヒーにパスタ、七面鳥、ケーキですね」

「うんうん、コーヒーにパスタ、七面鳥、ケーキだね」

姫路さんに言われた通りに書いていく。

『コーヒー・パスタ・七面鳥・ケーキ』

「次はサラダにドレッシング、シャンパン、麦茶、スープ、唐揚げです」

「サラダにドレッシング、シャンパン、麦茶、スープ、唐揚げっと」

『サラダ・ドレッシング・シャンパン・麦茶・スープ・唐揚げ』

「姫路さんありがとう。おかげでなんとかなりそうだよ」

「いえ、明久君も頑張ってくださいね」

そう言って姫路さんは自分の席に戻っていく。

「明久、共同作業ご苦労だった。あとは俺がやるからお前も席に戻っていいぞ」

「うん。任せたよ雄二」

雄二の許可がでたので、僕も自分の席に戻る。

ガラガラガラガラ

「お待たせなのじゃ」

僕が席につくのとほぼ同時に秀吉が戻ってきた。その手にはシルクのウェディングドレスとタキシードがそれぞれ一着ずつ持っている。

「すまぬのぅ。演劇で使う分しかないから、一着ずつしかないのじゃ」（棒）

「あぁ、それは残念だな。じゃあ、誰がいいか多数決で決めようぜ」（棒）

まずい…

雄二ならまだしも、秀吉までもがわざとらしい棒読みをしている。

これは細心の注意をはらわなければ、僕の人生計画は水の泡となってしまうだろう。

「じゃあ、まずはウェディングドレスを着るやつだがどうする？」（棒）

「姫路さんがいいと思いまーす」（棒）

「姫路さんでいいんじゃないかな」（棒）

「姫路さんしかないと思いまーす」（棒）

「……同意」（棒）

すごい棒読みのオンパレードだ。ムッツリーニまでもが参加してるとなると、男子でこの状況を理解していないのは僕だけなのか！？

「って、ことだ。姫路、やってくれるか？」

「私なんかでいいんですか…？」

恥ずかしそうにもじもじする姫路さんはなんともいじらしい。

「いいもなにも、みんなが推薦してるんだからいいに決まってるよ。頑張ってね姫路さん」

「はいっ、頑張ります！」

うんうん、やっぱり花嫁姿は姫路さんのような笑顔が明るい人が似合うと思う。

……はっ！？

まさか、みんなで姫路さんのウェディング姿を狙ってるんじゃ……そうはさせるか！幸せになるのは僕だ！！

「えーと、次はタキシードを着るやつだが立候補制にしようと思う」

「当然、俺がやるべきだろ」（棒）

「調子にのるなよ須川。ここは俺に決まってるだろ？」（棒）

「横溝こそ冗談はよせよ。俺にやらせとけって」（棒）

みんなが次々に立候補してしまっている。このままじゃ、僕が立候補する前に締め切られかねない。でも、それは逆にいえば、僕が立候補しても目立たないということじゃないだろうか。それならと僕は意を決して手をあげる。

「僕も立候補するよ」

そう僕が言った瞬間、みんなが僕の方に向き直り邪悪な笑みを浮かべていた。その様は正に「かかったなバカが」と言わんばかりだ…

「じゃあ、そろそろ締め切るぞ。須川に横溝、福村、それに明久の中からみんなが選んでくれ」

雄二の呼び掛けにみんなが相談を始める。内容はおそらく誰に投票するかというものだろう。

なにやら、僕の知らないところで作戦が立てられているらしいけど、今はそんなことよりもいかにこの勝負に勝つかだ。作戦の内容は気になるけど、幸せのためにはなにかを犠牲にしなきゃならないんだ！

「取り込み中すまぬのじゃが、このタキシードでは須川と福村はサイズがあわぬのじゃ」（棒）

「そっ、そんな…」（棒）

「俺の幸せな家庭が…」（棒）

秀吉の言葉に泣き崩れる二人。こんなにまでなって棒読みだという

ことを考えると、もしかして棒読みが流行っているのだろうか？

じゃあ、僕が警戒してたのも結局は杞憂ってことじゃないか。警戒して損したよ……

「あっ、そうだ。坂本わりぃ、よくよく考えたら俺、タキシードアレルギーなんだよ」（棒）

えっ横溝君、なにタキシードアレルギーって？

「そうかタキシードアレルギーか。それじゃあしょうがないな」（棒）

雄二も知ってるの！？

「うむ。タキシードアレルギー、あれは恐ろしいものじゃからのぅ」（棒）

秀吉まで！？

ねぇ、嘘だよね！？嘘って言ってよ！

「……最悪、死に至る」（棒）

タキシードアレルギーこわっ！

なんなんだよタキシードアレルギーって！

タキシードがそんなに危ないものなら花婿に着せないであげてよ！

「まぁ、というわけだ。残ったのは明久だけだから任せたぞ」

「えっ……？」

雄二の言っていることがよく解らない。えーと、整理すると――

須川↓サイズがあわない
横溝↓恐怖のタキシードアレルギー
福村↓サイズがあわない
僕　↓幸せの切符ゲット！！

って、ことは僕が花婿姿で姫路さんが花嫁姿！？
今すぐ飛び上がりたい衝動をぐっと堪えて冷静になってみる。

……
……
……
……
……
……
……
……
……
……
……
……

もしかして、僕って踊らされてた……？
そうだ、冷静になって考えてみればすぐにわかったことじゃないか！
Ｆクラスの連中はどういう訳だか僕と姫路さんの仲をみて楽しむ、

とんでもない野次馬どもじゃなかったか……
ということは、またなんらかの計画を練っているに違いない。これは警戒しなければ……

「よろしくお願いしますね、明久君」

「よっ、よろしくね。姫路さん」

突然、横からかけられた声に多少驚きながらも姫路さんに言葉を返す。
まっ、いいか。姫路さんのウェディング姿が見られて、セットで僕がタキシードを着れるのなら多少のことは目をつぶろう。
こうして僕らの清涼祭が幕を開けた。

第１６問　僕と祭りとウエディングドレス（後書き）

原作とは違いウエディング喫茶をやることとなった明久たち。
次回もよろしくお願いします！

第17問　僕と大会と記念写真（前書き）

ＮＩＧＨＴさん、吹き抜ける風さん、アスタリスクさん、感想ありがとうございました！

第１７問　僕と大会と記念写真

明久ＳＩＤＥ

天使がいる……

いや、天使なんかに例えてしまっては僕の眼前にいる人物に申し訳ない。

「どっ…どうですか？」

しかもその人物は上目遣いで僕に感想をたずねてきているのだ。

……そうか、僕は夢を見ているんだ。だから、目の前にはウェディングドレスを着た姫路さんがいるのか。夢ならなにを言ってもいいよね。

「うん、すごくきれいだよ…その……」

だけど、夢と思っていても中々言葉が喉に詰まってしまいでてこない。

「（明久よ、自分をつねってみるのじゃ）」

「あっ、うん」

突然耳打ちしてきた秀吉に言われた通りに、僕の頬をつねってみる。

「いたっ！」

あまりにも強くつねり過ぎてしまったため、痛みで声をあげてしまう。なんで夢なのに痛みを感じるだろう?

「(これでわかったかの?今、お主は夢を見ている訳ではないのじゃ)」

「(秀吉、なに言ってるのさ。姫路さんが僕にウェディング姿の感想を聞いてくるわけないじゃないか)」

そんなこと天地がひっくり返してもありえないことだろう。いや、雄二がババァを口説くのと同じくらいありえないかもしれない。

「(気を確かに持つのじゃ。お主らはウェディング喫茶でのペアだということを忘れたかのぅ?)」

「(……言われてみればそんな気もするよ……)」

「(そんな気ではなく、その通りなのじゃが…)」

秀吉のいう通り、これは僕の夢でも勘違いでもなく現実なのだろう。って、ことはだ。僕と姫路さんは結婚したのかぁ……

「……記念に一枚」

ムッツリーニがカメラを持って、僕と姫路さんを撮りたがっている。さすがムッツリーニ。結婚記念写真なんて気が利くじゃないか。

「姫路さん、せっかくだから一枚撮ってもらおうよ」

「そうですね。記念に一枚、お願いしますね土屋君」

「……並んで」

ムッツリーニの指示を受けて僕は姫路さんの横に並ぶ。

「……もうちょっと近くに」

「こうかな／／／」

「こっ、こうですか／／／」

僕と姫路さんはお互いににじりあう様に近付いていく。はっきり言って、すごく恥ずかしい。下手したら身体がぶつかりかねないし、かといって恥ずかしくて姫路さんの方を見る余裕もない。

かしゃっ！

ムッツリーニのカメラからフラッシュがたかれ、眩しさで思わず目をつぶってしまう。

「……撮れた」

ムッツリーニは満足そうに撮れた写真の記録を眺めている。

「ムッツリーニ、現像できたら僕にも一枚ちょうだいね」

「私も一枚欲しいです」

「……わかった」

ムッツリーニはそう言うと次の目標があるのか、素早く教室を出ていった。

「ごほっごほ…」

ムッツリーニがあまりにも早く動きすぎたせいで舞い上がったほこりで姫路さんがむせている。僕たちFクラスはAクラスとの試召戦争で引き分けだったので、設備ランクの引き下げということはなかったが、それでもFクラスの環境はお世辞にもいいとは言いずらい。このままでは姫路さんの様に身体の弱い人は勉強どころではないだろう。

「なんとかしなきゃだよなぁ…」

「なら、なんとかしてみるか？」

誰に言うでもなく呟いた僕の一言に雄二が問いかけてくる。

「なんとかしてみるって、いい案でもあるの？」

「あぁ、案ならある。考えてみろ、喫茶店であげた売上はどこにいく？」

喫茶店というと僕たちが行うウェディング喫茶のことだろう。

「普通に学園側が徴収しちゃうんじゃないの？」

「俺たちが自腹で用意して利益をあげたのにか？」

僕たちが自腹で喫茶店を経営する。それは見方を変えれば、喫茶店に投資しているのと同じだ。なら――

「そうか、利益額は僕たちが使っていいんだ！」

「そういうことだ」

「でも、あの学園長が許してくれるかな？」

「だから、今から学園長の所に行くんだ。着いてこい」

「うんっ！」

「……賞品の……として隠し…」

「……こそ…勝手に……如月ハイランドに……」

学園長室の前まで来ると、中で誰かが言い争っているのが聞こえてきた。

「雄二、誰かが中で話してるみたいだよ」

「なら無駄足にならなかっただけなによりだな」

そう言って雄二は再び足を進める。話していたとしても、用件だけ

は伝えておこうという魂胆だろうか？

コンコン

「失礼しまーす」

ノックもそうそうに雄二がドアを開けて中に入る。

「ノックの返事も待たないなんて失礼なガキどもだねぇ」

不機嫌そうに言うのは、この文月学園を牛耳り、僕らに劣悪な環境で勉強を強いる学園長ことクソババァだ。

「とんだ邪魔がはいりましたね。これでは話もできませんので、私はこれで失礼します」

そう言って僕らの横をすぎていったのは教頭の竹原先生だ。クールな目付きで一部の女子に人気があるって聞いたことがあるけど、姫路さんも竹原先生みたいな人が好みなのかなぁ…

「で、なんの用だい？」

話を邪魔されたのに学園長はあまり怒っていないようだ。案外、寛大だったりするんだろうか？

「本日は設備の修繕の申し立てをしに参りました」

律儀に言うのは雄二だ。さすが元神童というだけあって礼儀は心得ているみたいだ。

「突然なんだっていうんだい」

「はいっ。私たちのFクラスは最低限の設備だけは揃っていますが、土器をつくる時代から生きていた学園長ならいざ知らず、身体の弱い一部の生徒にとっては健康面で支障をきたす原因になりかねません」

少しボロがでた雄二に苦笑しながらも僕も続けて言う。

「ですから最低限、身体の弱い生徒でも勉学に励めるように設備の改善をしてほしいんです」

姫路さんの学園生活が掛かっているんだから慎重に言葉は選ばないとな…

「話はわかった。だけれど無理な話だね」

「どうしてですか！」

つい声を荒げて叫んでしまう。

「どうしてもなにもないよ。その身体の弱い生徒って誰だい？それがわからないのに承諾できるわけないじゃないかい」

「それは……」

ここで姫路さんの名前をあげてしまっていいのだろうか？

もしあげれば、設備の改善は果たされるだろう。だけれど、その事を知った姫路さんはどうなる？

また、僕の時みたいに自分に責任を感じてしまうんじゃないだろう

か？

「はぁ……
また、あの子のためかい？あんたも好きだねぇ」

「べっ、別に姫路さんのためって訳じゃないですよ！」

っ！！
言ってしまってから慌てて口を塞ぐがもう遅い。

「ほらみなよ、やっぱり姫路瑞希のためじゃないさね」

「それは……」

どうしよう……
このままじゃ、また姫路さんに重荷をかせることになってしまう。
救いを求めて雄二の方を向くが、首を横に振るだけだった。

「なにもそんなに困った顔することないじゃないか。別にあんたからの本音を聞ければ考えてやらんこともないよ。もちろん、姫路瑞希には秘密にしといてやるさね」

「えっ…？」

姫路さんに秘密にしてくれるだって？
なら、設備を修繕しても姫路さんは気を使うことなく学園生活をおくれるってことだ。

「私だって生徒の事情くらい理解してるつもりさ。さぁ、どうするんだい？」

どうするもこうするもない。僕の恥くらいで姫路さんが笑って暮らせるなら、いくらでも恥をかいてやるさ。

「学園長先生、姫路瑞希さんが勉学に励めるよう設備の向上をお願いします！」

学園長の座っている机の前に土下座しながら言う。

「あぁ、あんたの言いたいことはわかった。ただし、清涼祭で行われる召喚獣大会であんたらのどちらかが優勝するんだ。いいね？」

「はいっ！必ず優勝してみせます！」

僕は立ち上がり、雄二の方に握手を求めるように手を差し出す。

「よろしくね、雄二」

「悪い明久。俺はお前とはパートナーになれない」

だけど、雄二は僕の手を掴んではくれなかった。

「俺は翔子とパートナーを組んでいるんだ」

「どうして？」

「知ってるか？この召喚獣大会の優勝景品の一つとして如月ハイランドの招待券がある。それを翔子が欲しいと言うからお前とはパートナーになれない」

如月ハイランド。それはつい先日、オープンした遊園地のことだ。
雄二の話からすれば霧島さんとパートナーになって優勝を目指すということだろう。

「うんわかったよ。でも朝はあんなに霧島さんのこと怖がってたのによくパートナーになったね」

「お前、翔子に逆らったらどうなるかわかってないだろ…？」

そう言う雄二は恐怖からかガクガクと震えていた。相当、怖いことがあったに違いない。

「ごめん…なんかもう頑張ってね雄二……」

「できれば負けたいが、全力をださないと翔子に……」

なんというか雄二があわれだ。

「ガキども、結局こっちの話はのむのかのまないのかどっちだい？」

「当然やりますよ」

「俺はもとから出る予定だったからな」

「じゃあ、決まりだよ。せいぜい頑張って優勝するんだね。あと優勝したらすぐにここに来なよ」

「「はーい」」

目的を果たした僕たちは学園長室をあとにする。

あーぁ、パートナー誰にしようかなぁ……

美波ＳＩＤＥ

「はぁ……」

「島田よ、そんなにため息ついてどうしたのじゃ？」

教室の窓から外を眺めてるウチに声がかけられる。

「あっ、木下…」

振り向けばそこには缶のお茶を持った木下がいた。

「一つどうじゃ？」

「ありがとう。もらっとくわ」

木下から缶を受けとる。

「で、なにをそんなに悩んでおったのじゃ？」

「ううん。なんでもないの」

吉井と瑞希の関係に悩んでいるなんて知れたら恥ずかしすぎるわ…

「お主も気苦労が絶えんのぅ。明久のことじゃろ？」

「別に吉井のことなんて……」

そうよ、ウチとした約束は覚えてないくせに瑞希との約束は覚えてる吉井なんて大嫌いよ！

「そんなに意地をはるでない。わしでよかったら相談にのるぞ？」

「……」

「わしはみんなが楽しくすごせるようにしてほしいのじゃ」

木下の手がウチの手に重ねられる。

「もちろん、島田にも楽しくすごせるようにしてほしいのじゃ。だから話してくれんかのぅ？」

優しく重ねられた木下の手と言葉はウチの心まで温めてくれるようだった。

木下になら話してもいいかしら。なぜだかそう思えるほどに……

「ウチね、吉井のことで悩んでいるの。ううん、正確にいえば吉井と瑞希の関係で悩んでいるの」

「うむ。具体的にはどのようなことなのじゃ？」

「ほら、なんというかあの二人って、いつもお互いを探しあっているって感じじゃない？だから、それが羨ましくて……」

本当はこんな恥ずかしい話をする気なんてないけど、ここで逃げたらウチは一生逃げて生きていく気がする。そんなのは嫌だから、ウチはちゃんと向かい合わなきゃいけないのよ！

「確かにあの二人は事件のこともあってか、よく一緒におるのぅ」

やっぱり木下もそう感じてたんだ…

「だが、別に島田のことを避けているわけでもあるまい」

「だけれどもウチだって吉井と……」

「ペアになりたかったかの？」

「！？

なんでそれを……」

まさかウチが吉井と喫茶店のペアになりたいことがバレているなんて思わなかった。

「あのウェディングドレスの選考の時、お主はなにも喋らなかったであろう。いつもは元気なお主が喋らない。それだけで理由としては充分じゃ」

そう、あの時、ウチには名乗り出る勇気がなかった。みんなが瑞希を推しているのという理由もあったけど、なによりも吉井が嬉しそうにしてたから言い出せなかった……

名乗り出て吉井に嫌な顔をされるのが嫌だった……

「なんで瑞希ばかり推されるのかしら…」

「うむ……
それは島田にはちとばかし酷な話になるが聞きたいかの？」

「うん…」

「ならばここでは話しづらいし、屋上にでも来てくれるかの？」

～屋上～

「ではまず何から話せばいいかの？」

「じゃあ、瑞希が推された理由からでいいかしら」

屋上に来たウチらはなるべく人目につかないように隅の方に座り込んだ。

「その話をするにはまず島田に知っておいてもらわねば困ることがあるのぅ」

「知っておいてもらわないと困ること？」

「うむ。島田は異端審問会というものは知っておるか？」

「うん」

異端審問会。ウチも人づてに聞いた話だけど、カップルの仲を引き裂こうとする集団らしい。
でも瑞希が推された理由となにが関係あるのかしら？

「実を言うと須川たち、Ｆクラス男子のほとんどがその異端審問会の面子なのじゃ」

「うそ…」

とてもそうは思えない。だって――

「嘘でしょ？
だって、須川たちはまるで吉井と瑞希の仲を――」

「うむ。応援しておる。しかし、須川たちが異端審問会だというのも事実じゃ」

木下の言っていることの意味がわからない。だって異端審問会は男女の仲を引き裂こうとする筈なのに、吉井と瑞希の仲を応援してるなんておかしすぎる。

「そして異端審問会は男女の仲を引き裂こうとする集団じゃ」

ますます木下の言っていることがわからない。

「だが、異端審問会は明久と姫路の仲には目をつぶっておる。いや、むしろ応援しておると言った方が正しいの」

「なんで吉井と瑞希だけ？」

男女がイチャつくのが嫌だというなら、あの二人だって例外ではないはずだ。

「島田は自己紹介の時のことを覚えてるかの？」

「うん…」

あの時、吉井が記憶障害を患わっていることを初めてしった。そして、大人しそうな印象を受けた瑞希の必死な姿も……

「あの時、明久のやったことがクラス中に知れた。それと同時にクラス中の明久に対する印象はガラリと変わった。一人の女の子を我が身を犠牲にして護った英雄としてな」

「ウチもそれはすごいと思うわ。普通、咄嗟にできることじゃないからね」

でも、これでは吉井と瑞希の仲を応援する理由にはならない気がする。

「まぁ、それであれじゃ。明久の男気というのかの？それに感化された須川たちは二人をくっつけようと野次馬になったわけじゃ」

「う～ん……
よくわからないわ。それって相手は瑞希じゃなくてもいいんじゃないかしら？」

「その、なんというか察してほしいのじゃ。わしの口からはうまく言えそうにないからの」

なんとも歯切れの悪い木下の言葉を多少疑問に思いながらも話を続ける。

「ってことは、吉井の行動に感化された異端審問会は見逃してるってこと？」

「大方はそれであっておるのじゃ」

よくはわからないけど、なにも知らないよりは前進した気がする。あくまで、なにも知らないよりはだけど……

「他になにを話せばいいかの？」

「ううん、もういいわ。ありがとう木下」

「なんじゃ、もういいのかの？」

「うん。今のウチにはこれだけで充分よ」

知りたいことはまだまだあるけど、なぜだかこれ以上踏み込んだら知りたくないことまで知ってしまう気がした。だから、今はこれだけでいい。少しでもウチの気が晴れたからそれだけで。

そうだ、木下になにかお礼をしなきゃね。

「木下、今日のお礼に明日お弁当を作ってきてあげるわ」

「えっ……？」

突然のことに驚いている木下を他所にウチは出口へと走っていき、振りかえる。

「木下、早くしないとおいてくわよ！」

いまだにほうけている木下に一言そう言って、ウチはＦクラスへと戻っていった。

第17問　僕と大会と記念写真（後書き）

明久のパートナーは誰になるのか！？予想通りのあの人？それとも……？

次回もよろしくお願いします。

第１８問　僕と料理と負けられない理由（前書き）

アスタリスクさん、感想ありがとうございました

第１８問　僕と料理と負けられない理由

明久ＳＩＤＥ

「結局は雄二か僕が優勝すればいいんだよね」

今は学園長室からＦクラスに戻る途中だ。

「あぁ、そういうことになるな。だけど俺はできれば優勝したくない…」

「なんでさ！」

「優勝賞品の一つ、如月ハイランドの招待券。あれは招待券で来た客を無理やり結婚させるという噂があってだな。もし優勝してしまえば俺は翔子と……」

あっ、また雄二が震えだした。霧島さんはあんな大人しそうなのにいったい何をされたんだろうか？

「じゃあ、決勝で僕とあたって負ければ？」

「さっきも言ったが、本気をださないと翔子に……第一、お前はまだパートナーすら決まってないじゃないか」

そういえばそうだった…

「できれば翔子を倒せるやつ。例えば姫路とかと組んでくれると嬉

しいんだがな」

姫路さんとかぁ…

確かに姫路さんならば霧島さんと渡り合えるだろうし、ウェディング喫茶の宣伝にもなるからいいかもしれない。

「確かにいいかもしれないけど、姫路さんが僕なんかのパートナーになってくれるかなぁ……」

「明久、そういうのを世間一般的には杞憂って言うんだぞ」

「なに言ってるのさ雄二。杞憂ってのはいらぬ心配のことを言うんだよ」

「だから杞憂だって言ってんだよ」

雄二がなにを言っているのかさっぱりわからない。

「まっ、姫路に頼んでみろって。それに優勝すれば一緒に遊園地だぞ？」

「かっ、からかわないでよ！」

一緒に遊園地だなんて、僕がよくても姫路さんがいいわけないじゃないか。

「おっ、ちょうどいいところに姫路がいるな」

雄二に言われて前を向くと、確かにそこには姫路さんがいた。廊下のロッカーからなにかを取り出しているみたいだ。

「ほら、行ってこいって！」

「うぉっと！」

雄二に背中を平手で押され、よろけながら姫路さんの方へ行く。

「あっ、明久君！？」

「やっ、やあ姫路さん」

よろけながら自分の方へ向かってくる人がいたら誰だって驚くものだろう。

「その、姫路さん、少し時間もらってもいいかな？」

「はいっ！私もちょうど明久君に話したいことがありましたから」

姫路さんが僕に話したいこと？
いったいなんだろうか？

「じゃあ、姫路さんから話してよ。僕の方は急ぎの用事じゃないからさ」

「はい。では……」

姫路さんが一呼吸いれる。そんなに緊張する内容なんだろうか？

「明久君、私と一緒に召喚獣大会にでてください！」

深々と下げた頭からふんわりと髪が弾む。

……えっ？

姫路さんが僕とパートナーになりたいって？

「あのぅ…やっぱり迷惑だったでしょうか…？」

目を潤ませて、お辞儀の角度から見つめてくる姫路さんの破壊力は抜群だ。

「いや、そのぉ……姫路さんは僕なんかで迷惑じゃないの？」

正直、僕が姫路さんに頼み込む分には違和感がないけど、姫路さんが僕に頼み込むというのは非常に違和感がある。なんせ、姫路さんの方には僕でなければいけない理由がないのだから。

「私は明久君とでたいです…」

「えっ……？」

いや、まてまて！

これは僕が勝手に自分の都合のいいように解釈してるだけだ。冷静になって考えるんだ。

目の前には目を潤ませている女の子→その女の子は自分と一緒に大会に出たいと言っている→自分でなければいけない理由がない。むしろ自分じゃない方がいい→それでも自分と出たいと言う→チャンス！？

「姫路さん、ぼ「させるかぁぁぁ！！」ぐはぁぁぁ！」

言いかけてたところで、突然後方から走ってきた雄二から跳び蹴りをくらって床に突っ伏してしまう。

「大丈夫ですか明久君!?」

姫路さんが倒れた僕を支えてくれる。

「すまん明久。足が滑って蹴りがはいっちまった」

悪びれる様子もなくしれっと言う雄二を怨めしそうに睨むと、『お前だけ幸せになろうたってそうはいかねぇ』と目で訴えてきた。
こいつだけは許せない……

「明久君、どこか痛むところはありますか?」

姫路さんが心配そうにたずねてくる。手加減してくれたのか、雄二の蹴りは大事に至るほどの威力ではなかったので外傷的には問題ない。
ただ、さっきから柔らかいなにかが腕に当たっていて――

「あっ、明久君!?」

意識を手放すなか、思う。

前にも似たような気絶の仕方しなかったっけ?

「んっ……」

僕が目を覚ますと、そこは教室だった。周りを見渡せば、みんな装飾等の作業をしている。

僕が寝ていた場所には白い布が敷いてある。姫路さんが敷いてくれたのかな？

「明久よ、目が覚めたのじゃな」

「あっ、秀吉」

僕が目を覚まして一番はじめに話しかけてきたのは秀吉だ。手には結婚式の雰囲気をだすためのものなのか白いカーテンが握られていた。

「今は見ての通り、教室内の装飾じゃ」

「僕もなにか手伝おうか？」

「うむ。明久には飾りつけよりも厨房班にまわってほしいのじゃが」

「でも厨房班なら姫路さんもいるし心配ないんじゃないの？」

そう、姫路さんの料理はどれも軒並み美味しいのだ。だから姫路さんに任せておけば厨房班は大丈夫だと思うんだけどなぁ……

「それが、その姫路が問題なのじゃ」

「？？？」

「まぁ、とにかく行ってくれんかの？」

「うん…秀吉がそんなに言うなら行ってくるよ」

立ち上がり、そのまま厨房班のいる家庭科室へと向かう。

「あっ、吉井！」

家庭科室へと向かう途中、島田さんに呼び止められる。

「なに　島田さん？」

「その吉井に知っといてほしいことがあるの」

「知っといてほしいこと？」

やけに神妙になって話す島田さんに違和感を感じながらも聞き返す。

「うん。実は――――――」

がらがら

家庭科室の扉を開けるとそこには倒れている雄二がいた。なんか痙攣してる……

「明久……今の姫路…は……危険だ」

雄二はそれだけを言うと泡をふきながら白目になり、完全に床に突っ伏してしまった。それにしても姫路さんが危険？いったいどういうことだろうか？

「吉井、そこをどけ！」

倒れた雄二に気をとられていた僕は前方から担架で運ばれてくる須川に気づかなかった。声をかけられてとっさによけるさなか横目で須川君を見る。その姿は雄二と同じく泡をふき、白目をむいていた。

いったいこの家庭科室でなにがおきているんだ……

意を決して奥へと足を進める。そこには薄いピンクのかわいらしいエプロンをつけている姫路さんとFクラスの男子がいた。男子のうち、何人かは倒れている……

「あっ、明久君」

「姫路さん、調子はどう？」

「うーん、あんまりうまくいってないみたいです……」

姫路さんがしゅんとした様に言う。もしかして雄二や須川君は姫路さんの被害者なんだろうか？

「ははははっ、なに言ってるんだよ姫路さん。この胡麻団子とってもおいし――――ぶばぁぁぁ」

あっ、横溝君が泡をふいて倒れた。たぶん、姫路さんに気をつかって美味しいと言おうとしたんだろう……

でもこれでわかったことがある。この事件の犯人は姫路さんだ……

「大丈夫ですか横溝君！？」

「横溝は美味しすぎて気絶しただけだから気にしなくていいよ」

倒れた横溝君に駆け寄ろうとした姫路さんを止めるように今井君が言う。今井君ナイスフォロー！

「（吉井、よく来てくれた。お願いだから姫路さんをなんとかしてくれ）」

「（その前に姫路になにしたのさ）」

姫路さんに気づかれない様に福村君と僕は小声で話をする。

「（なにもしてないさ。胡麻団子をつくりはじめたらこの惨事なんだよ）」

たぶん、僕の知らないところで大勢の人が犠牲になったのだろう。

それだけの犠牲をだしながらも姫路さんを傷つけまいと嘘をつき続

けてくれたみんなには感謝しなきゃだな。

「（じゃあ、さっきまであった胡麻団子は姫路さんが作ったやつなの？）」

「（しんじれないかもしれないけどそうだ。なんから一つもらってみたらどうだ？）」

姫路さんの料理に限ってそんなことはないという信じたい心と、雄二と須川君、横溝君の仲間入りする可能性がある恐怖が僕の中で入り交じる。

でも、料理は客に出す以上、ことの真相を確かめる必要がある。その気持ちが僕の背中を後押ししてくれた。

「姫路さん、僕にも一つ胡麻団子を貰えるかな？」

「胡麻団子はさっきの横溝君の分で最後だったんですけど、明久君の時間が許すなら作れますよ？」

「うん。じゃあ、待ってるからよろしくね」

「はいっ！」

そう言うと姫路さんは早速作業に取りかかった。見たところ、おかしなところもないし手際も良い。

これであんな風になるとは思えないんだけどなぁ……

～数分後～

「はいっ、できましたよ明久君♪」

姫路さんが胡麻団子が六つ乗った皿を僕の方に持ってきてくれる。

「ありがとね姫路さん」

見たところ至って普通の胡麻団子だ。

「いただきます」

僕が胡麻団子を口に運ぶのをみんなが緊張した面持ちで見ているのが後方から伝わってくる。そんななか、僕は胡麻団子を一つ口に中にいれる。

口に胡麻団子を入れた瞬間、胡麻のこうばしさとあんこの甘さが口全体に広がる。

「うんっ。美味しいよ姫路さん」

やっぱり姫路さんの料理が不味いなんてなにかの間違いだったのだ。

「姫路さん、もう一個もらっていい？」

「はいっ！好きなだけ食べていいですよ」

姫路さんからの許可がでたので、胡麻団子をもう一つ拝借する。

ん～、何度食べても美味しいなぁ…

「（おい、無理するなよ。吉井まで逝っちまったら俺たちは頼るものがないんだからさ）」

「（なに言ってるのさ福村君。この胡麻団子、すごく美味しいよ）」

「（ヤバい、吉井の味覚がおかしくなってる……）」

どうやら福村君はさっきの惨事のせいで本当に美味しいという可能性を考えれないらしい。

「（疑うなら福村君も一つもらいなよ。本当に美味しいからさ）」

「（本当だろうな？）」

「（味は僕が保証するって）」

正直、僕の取り分が減るのはいただけないが、姫路さんにあらぬ汚名を被せたままの方がもっと嫌だ。

「（吉井がそこまで言うなら…）姫路さん、俺も一つもらってもいいですか？」

「どうぞ、まだまだ材料もありますから皆さんも気にせず食べていいですよ」

「じゃあ、いただきます…」

福村君が恐る恐る胡麻団子を一かじりする。その瞬間、福村君の顔

が美味しいものを食べた時独特のとろんとした顔になった。
うん、正直、男のこういう顔を見るにたえないね。

「これすごいうまいっすよ！」

「なに、そんなにうまいのか！俺にもよこせ！」

「じゃあ、俺も」

「最後もーらいっと」

福村君に続くようにみんなが次々と取っていき、あっという間に皿の上から胡麻団子が姿を消した。
胡麻団子を食べているみんなは満足そうだ。よかったぁ、これで姫路さんの汚名は晴れたようなものだ。

「（いやぁ、それにしてもうまいな）」

「（さっきまでの須川たちを殺めてた料理とはとても思えん。これが愛の力かぁ…）」

えっ……？
まさかこの展開は……

「（愛する夫のために頑張る嫁ってか？くぅ～、たまらないねぇ）」

「（まぁ、さすが我らがＦクラスの誇るカップルだな）」

まずい、これはいつものパターンだ！

「姫路さん、そういえば装飾で手伝ってほしいところがあるんだ！」

そう言って、片付けの準備をしようとしている姫路さんの手を掴んで走り出す。

「あっ、明久君!?まだ片付けが終わってないんですけど！」

「福村君、片付けは頼んだよ！」

振り向き、福村君に叫ぶ。

とにかく今は一刻も早く家庭科室からでなければならない。なんせ、あのパターンはまた僕と姫路さんで遊ぶ気だからだ。これ以上姫路さんに迷惑をかければ今度こそ嫌われかねない……

それだけはなんとしてでも避けなければだ……

～教室～

がらがら

「ぜぇぜぇ…た……ただいま…」

教室に滑り込むようにはいった時には、もう息も切れ切れだった。

「明久よ、そんなに急いでどうしたのじゃ？」

「またみんなの悪い癖だよ…」

「お主らも大変じゃのぅ……」

「???」

唯一、姫路さんだけは事の事情を理解していないようだ。姫路さんに天然気質があって助かったというべきなんだろうか？

「……タキシード」

ムッツリーニが呟く。

タキシード？

タキシードを着ているといえば、このクラスでは僕くらいなものだろう。

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

まずい、タキシード着たまんまだった…

考えてみればどこでも着替えた記憶がないのだから当たり前だろう。

「ごめん、秀吉。演劇部で使うタキシードをずっと着てて」

「わしは構わぬのじゃが。のう、ムッツリーニ？」

「……後の楽しみ」

二人はいったい何を言っているんだろうか？

別にタキシードの形状が変わるわけもないのに後の楽しみだなんておかしいにも程がある。

「まぁ、いいや。とにかく着替えてくるね」

そう言って、男子更衣室に着替えをしにいく。

～帰り道～

「雄二、じゃあね～」

「坂本君、また明日」

「おう、明久に姫路もまたな」

雄二と別れて、姫路さんと二人っきりになる。隣を歩く姫路さんの笑顔はいつもとなにも変わらない。

でも、その笑顔の下にある悲しみを僕は知ってしまった。今日、家庭科室に行く途中に島田さんが言った言葉が頭から離れない。

「ねえ姫路さん、今日言ってた召喚獣大会のことだけど、一緒にでようか？」

「えっ？明久君は私なんかでいいんですか？」

「僕も元々でる予定だったし、姫路さんとでてみたいよ」

「じゃあ、一緒にでましょう。ありがとうございますね明久君♪」

そう言って笑いかけてくれる姫路さんを見て再度決心する。

姫路さんを転校なんてさせない

第１８問　僕と料理と負けられない理由（後書き）

ある程度の方が想像していたと思いますが、明久のパートナーは瑞希となりました。
次回もよろしくお願いします

第１９問　僕と記憶と喫茶店（前書き）

ＰＶ８００００突破！
ご愛読ありがとうございました。
ＰＳ．後半部分を大きく修正しましたのでよろしかったらご一読ください

第１９問　僕と記憶と喫茶店

明久ＳＩＤＥ

「さてと、毎日御恒例の記憶共有といきますか」

「うん。お願いするよ」

僕の召喚獣である明希が僕の額に向けて手をかざす。そこから淡い光が放たれ、僕の中の記憶が確固たるものとなっていく。
この記憶の共有は眠りにつく前に毎日、明希がやってくれることだ。これをしなければ僕は今日の記憶を明日に引き継げない。しかも記憶共有をできるのも一部のため、ほとんどの事は忘れてしまうのだ。だけれど、明希がくる前はなに一つ記憶を引き継げなかった。いや、自分に記憶障害があること自体、気づいていなかったんだ。

「終わったぜ」

明希に言われて目を開ける。いつものことながら体には何一つとして異常はない。

「ありがとね。それにしても明希はなんで僕の家なら出てこれるんだろうね？」

「さぁな。出れるんだから出れるんだろ？」

明希は興味ないという風に言うが、これはすごい大問題だ。普通、召喚獣は召喚フィールドが無ければ出てこれない。それは明希にと

っても同じことだ。なのに、明希はなぜだか僕の家の中だけは自由に出てくることができるのだ。
まぁ、そのおかげで楽に記憶共有ができてる訳なんだけどね…

「近々、召喚獣大会もあるんだろ？俺はもう寝るぜ」

そう言うと明希はこちらの話も聞かずに消えてしまった。おそらく、召喚獣たちが普段いる世界（？）のような場所にでも戻ったのだろう。
僕もすることないし、そろそろ寝ようかな？

……やっぱり少し勉強しよう。それで少しでも姫路さんの足手まといにならないようにしないと。

そう思い勉強机に参考書を広げる。はっきり言えば勉強は大っ嫌いだ。だけれど、僕が我慢することで姫路さんが転校してしまう可能性が少しでも減るというなら勉強だってなんだってやってやるさ。

「ったく、お前には呆れるよ」

急に頭上から声が聞こえてくる。

「よっと！」

「明希！？どうしたのさ、寝るんじゃなかったの？」

なんと声の主は召喚獣の世界に帰ったと思った明希だった。

「主人（マスター）が頑張ってるってのに俺だけ寝てられるかよ。それに今回は姫路さんの転校がかかってるからな」

たぶん、明希の動いた理由の9割は後者だ。
だけれど、明希が僕のことを頑張ってると評価してくれたのは素直に嬉しい。いつもはぶっきらぼうな奴だけど、ちゃんと見てくれてるんだなぁ……

「教えてやるからささっと参考書の21ページを開け」

「えっ？明希って勉強教えられるの？」

「少なからず主人よりはできるな」

なにが悲しくて僕は自分の召喚獣にまでバカ扱いされなければならないんだろう……

「で、ここはこうなってこうなるわけだ」

「うんうん」

前言撤回、明希はかなり頭がよかった…

～清涼祭当日～

「って、ことで清涼祭始めるぜ！」

「「「いぇーい！！」」」

生徒会長の固い挨拶を全て省いた開始の合図に各クラスから歓声があがる。みんな、この日を待ちわびていたんだなぁ…

でも待ちわびていたのは僕も同じことだ。今日の召喚獣大会、なんとしてでも勝つ！

「明久君、私たちは一回戦の一番最後ですから喫茶店にいってましょうか？」

「うん、そうだね」

いつも通り振る舞う姫路さんの笑顔は儚く、脆く、それでいて惹き付けられるものがあった。僕は一度も姫路さん自身から転校の話は聞いていない。島田さんから聞いたことがあるだけだ。

それは僕に隠そうとしているのか、はたまた話す必要性を感じてもらえていないだけなのかは僕にはわからない。そしてその不安からか結局、僕自身からもその話題について触れることはなかった。

だから、せめて僕のできる精一杯を……

～Fクラス～

「明久、これを4番テーブルに持っていってくれ」

雄二から注文品の乗ったトレイを受け取り、４番テーブルを目指す。結局、厨房係はなぜだか色々と料理が作れるムッツリーニ（たぶん、ウェイター目当てで色々な所を回ってた）と須川君が中心となってやることとなった。

で、僕と姫路さんは主にホール班で手が空いたら厨房も手伝うといった具合だ。ちなみに雄二からは姫路さんを厨房に連れてくるなら僕も一緒にきてくれと指示を受けている。まったく、雄二も心配性だなぁ。この前のは何かの間違えだって証明されたのに。

「注文をお待たせしました」

指定された４番テーブルにコーヒーと胡麻団子をタキシードが汚れないようにそっと置いていく。店内を見渡せば、中々の盛況のようだった。この分なら設備の入れ替え分くらいは稼げるかな？

「ねえウェイターさん、結構かっこいいよね。あとで私たち案内してくれない？」

「あっえーと……申し訳ないのですが、僕はお仕事が立て込んでいまして……」

４番テーブルにいる客の突然の申し込みに多少慌てながらも、しっかりと対応する。

「あははは冗談だって。君にはもう花嫁さんがいるもんね」

「花嫁……ですか？」

「ほらほらあそこにいるじゃない」

相手が指差した方を見ると、そこには接客をしている姫路さんがいた。ん？
相手は確か…Aクラス戦の時に姫路さんと戦った久保君だったかな？
それにしても姫路さんも久保君も楽しそうに話してるなぁ……
やっぱり姫路さんも知的な人が好みなんだろうか？
はぁ……どうせ僕なんて……

「あれ？もしかして花嫁さんとられちゃって落ち込んでるの？」

「別にそんなんじゃありませんって。第一、その…僕と姫路さんは…そんな関係じゃ……」

「そうかな？私は結構お似合いだと思うよ。ほら頑張れ！ファイトだよ」

お客のお姉さんが僕を励ますように背中を叩く。

『キンコンカンコーン
試験召喚獣大会に参加しますFブロックの方は至急、お集まりください』

Fブロックといえば僕と姫路さんが参加するブロックだ。

「申し訳ありませんが、ただいまの放送ではいりました大会に出場いたしますので、僕は失礼いたします」

「そうかぁ、もうちょっとウェイターさんと話したかったけどしょうがないね。花嫁ちゃんと一緒に大会、頑張ってね」

「応援ありがとうございます」

姫路さんもさっきの放送で動き出したようだし、着替えのために一度厨房に戻ろう。

瑞希ＳＩＤＥ

「お待たせしましたご注文の唐揚げです」

「ありがとう姫路君」

名前を呼ばれたのに驚き顔を上げると学年次席の久保君がいました。

「久保君はＡクラスの作業はいいんですか？」

「僕たちのクラスの開店は１０時からだからそれまでは各々自由行動さ」

翔子ちゃんは坂本君と売上勝負をしているのになぜ開店が遅いのでしょうか？

「それより姫路君、あっちの調子はどうだい？」

「あっち…ですか？」

なにを言っているのかわからない私をくんでくれたのか久保君が小

指でなにかを指し始めました。その方向を目で追うと、トレイに胡麻団子とコーヒーをのせて運んでいる明久君がいました。

「だから吉井君との関係に進展はあったかって聞いてるんだよ」

「はわっ、違いますよ。私と明久君はそういうのじゃなくて……」

「隠そうとしても無駄だよ。あの日の君を見れば誰だってわかるさ」

「あぅ……」

そういえばそうでした……

久保君にはAクラス戦の時になぜだか私の気持ちがバレていたんでした…

「まぁ、隠しても無駄ってことで教えてくれるかな？」

「うぅ…そんなこと言われましても何も進展なんてありませんよ……」

「そうなんだ…」（これは驚いた。どちらとも一歩も動いていないのか…）

第一、私が明久君とそんな夢の様な関係になれるわけないんです…落胆しながらも明久君の方を横目で見ると、若い活発そうな女性と楽しそうに話していました。やっぱり明久君も活発な女性が好きなんでしょうか…？

どうせ私なんて…

「まぁ、そんなに落胆することないんじゃないかな。二人の新婚姿

はとってもお似合いだよ」

「新婚って…私と明久君のことですか？」

「君たち以外に誰がいるっていうんだい？」

からかっているのか久保君はとても楽しそうでした。

でも、ただの仮初めでも明久君とお揃いの衣装…

それも女の子なら誰でも憧れる花嫁の衣装を明久君と対になって着れる。それだけで私はとても幸せです。

例え叶わない願いだとしても、いつの日か本当のこの情景にたてたのなら私は…

『キンコンカンコーン

試験召喚獣大会に参加しますFブロックの方は至急、お集まりください』

「あっ！私はこれにでないといけませんから失礼しますね」

「うちの代表もでるらしいけど頑張ってね」

「はいっ！応援ありがとうございますね」

明久君の方を見れば動き出そうとしていたので、厨房に遠い席にいる私は先に動くことにしました。

明久ＳＩＤＥ

「ただいまー」

「今戻りました」

厨房の手前で姫路さんと合流した僕は制服が置いてある控え室へ向かう。

「おっ、明久に姫路か。お勤めご苦労さん」

「……おかげで盛況」

控え室に向かう途中で厨房でなにやら作業をしていた雄二とムッツリーニが話しかけてくる。

「盛況って言っても僕はただウェイターをやっていただけだからさ…」

「私もウェイトレスをやっていただけですし…」

「そんなことはないぞ。二人とも結構評判いいしな」

「……売上上々」

たぶんムッツリーニはまた写真を裏で取り引きしていたのだろう。と、なると姫路さんのウェディング姿の写真でも売ってるのかな？本人に許可もなく売買するなんて実にいかがわしいことだ。これは後で売ってもらうしかないな。きっと明希も喜ぶにちがいない。

「そういえば雄二、一回戦はどうだったのさ」

「俺が動く前に翔子が全滅させた……」

「そうなんだ…がっ、頑張ってね……」

「おう……」

すごい、さっきまで活き活きとしていた雄二がこの話題に変えただけで、まるで生気を吸いとられたようになってる……

「さてと、僕たちは制服に着替えなきゃだからそろそろ行かせてもらうよ」

「いや、明久と姫路はそのままの姿でててくれ。その方が宣伝になる」

確かに雄二の言うことには一理ある。

それに宣伝になれば客が増える→客が増えれば利益が増える→利益が増えれば設備が改善できる＝姫路さんが転校せざるおえない理由の内の一つであるFクラスの設備問題を解決できるということだ。

うん、確かに悪くはないかもしれない。ただ――

「僕はそれでもいいけど、姫路さんはウェディングドレスのまま大会にでても恥ずかしくない？」

「恥ずかしくないと言ったら嘘になりますけど私、がんばりますっ！」

正直なところ、姫路さんは恥ずかしがり屋だと思っていたけど、案

外芯が通っていて度胸があるのかもしれない。いや、ただ単にみんなのために頑張りたいだけなのかもしれない。
姫路さんの真意は僕にはわからないけど、その努力を無駄にしないためにも大会で優勝しなきゃいけない。そして姫路さんのお父さんを見返してやるんだ！

「なら二人とも頼んだぞ」

「……更なる利益」

もしかしてムッツリーニは服が破れるなどのラッキーイベントを期待しているのだろうか？召喚獣同士が戦う大会だからそんなことはないのになぁ…
いや、僕個人的には見てみたいけどね。

「じゃあ姫路さん、そろそろ行こうか」

「はいっ！行きましょう明久君」

僕と姫路さんは並んで大会の会場へと向かう。
僕の隣を歩く姫路さんの顔は今日もいつもと変わりなかった…

第１９問　僕と記憶と喫茶店（後書き）

次回、ついに試験召喚大会開幕！
さて、久保君はいつ壊しましょうかね？なかなか踏ん切りがつきません…
修正したあれは後ほど他の時にやりますのでご了承を

第２０問　僕と姫路さんの広まった噂（前書き）

今回は異端審問会の面々が増大！？な話です。

第２０問　僕と姫路さんの広まった噂

明久ＳＩＤＥ

「えー、今から試験召喚大会第１回戦を開始します」

司会を勤める男子生徒が言う。３回戦までは一般公開されないというのにやけにギャラリーが多いなぁ…

他のクラスのみんなはそんなに暇なんだろうか？

「まずは赤ブロックＢクラス岩下律子菊入真由美ペアご入場を！」

「頑張ろうね律子」

「うん」

僕たちとは反対側の立ち台に二組の女子生徒が現れる。んー、どこかで見た気がするんだけどどこだっけ？

「では、召喚してください」

「「サモン！」」

お馴染みの魔方陣から二匹の似通った召喚獣が出てくる。特徴的には姫路さんの召喚獣の装備を簡素にしたような感じだ。

Ｂクラス岩下律子　数学１７９点

Ｂクラス菊入真由美　数学１６３点

さすがＢクラスだけとあって中々の点数だ。力になれないとしても、姫路さんの足を引っ張らないようにしないと。

「皆さん大変長らくお待たせしました。本日はこの二人のために来た方も多いのではないでしょうか？対する青ブロックは我らが文月学園の誇る二人！Ｆクラス吉井明久、姫路瑞希ペアです！」

「「「「いぇーーーい！！」」」」

なんだか観客がすごく沸き立っている。待機場所からは司会者が何を言っているかよくわからないけど、なにかみんなが喜ぶようなことでもあったのだろうか？

「行こうか姫路さん」

「はいっ！がんばりましょうね明久君」

僕たち二人も立ち台の階段を登る。

「二人ともがんばれー！」

「絶対優勝しろよー！」

「二人ともお幸せにー！」

なんだか途中でおかしな言葉が聞こえた気がしたけど、応援してくれた観客席の方に手を振り返す。

「なんと本日の吉井明久、姫路瑞希ペアは新婚姿でご登場です！」

司会の男子生徒は立ち台に立った僕たちの説明でもしてくれるようだ。ついでに喫茶店の宣伝もしてくれると嬉しいんだけどなぁ。

「これは普段から廊下で手をひき合い愛の逃避行、公然の目の前でおんぶといちゃついている二人も遂にゴールインということでしょうか！？」

「えっ！？」

「ふぇっ！？」

僕と姫路さんが突然の司会者の暴露に驚くが司会者は止まる気はないようだ。

「遂にあの二人もゴールインとは今、私は非常に感動しています！」

「ちょっと待ってよ！これは僕たちがクラスで経営しているウェディング喫茶の衣装なんだ！」

立ち台の上から必死に司会者に弁明する。ふと隣を見ればショックからか姫路さんはショート寸前になっていた。

「なんと二人の結婚記念にＦクラスで喫茶店を開いたようです！これは是非とも行かなければなりませんね！」

「どういう話の聞き方したらそうなるのさ！」

たぶん、この司会者は僕の話なんか聞く気がないんだろう。

「あの二人の結婚記念だと!?」

「こりゃぁ、この後行くしかないな」

「俺、全種類注文して持ち帰るかな」

「カメラは絶対に必要だろ」

「まぁ、落ち着けって。まずは二人の初めての共同作業を見ようぜ」

観客が口々に言いたいことを言っている。どうしてこんなにも噂が広まってるんだ!?一度落ち着いて今までやってきたことを考えてみる。

Bクラス戦のあとに足がつってしまった姫路さんをおぶってFクラスに帰った。

そのあとに須川たちに見せ物にされかねない状況になったので姫路さんの手をひいて廊下に逃げ出した。

そして、それらを行った時間帯はホームルーム終了時間と被っているため、廊下には様々な生徒がいる。

……

……

……

……

……

……

要するに学園中に噂が広まるには充分すぎたってことか……
言われてみればそうだよね。だって目撃者が多すぎたんだもの…
どうしよう…今度こそ姫路さんに嫌われかねないよ……

「吉井さん、優勝についてなにか意気込みはありますか？」

こちらの気も知らない司会者がのんきにたずねてくる。ここはこれ以上噂が広まらないように当たり障りのない答えにしなければだ。

「絶対に優勝したいです」

「皆様聞きましたでしょうか！吉井さんは絶対に優勝したいとのこと！すなわち二人で如月ハイランドに行きたいということです！！」

「ひゅーひゅー」

「新婚早々お熱いねぇ」

「よっ、我らの代表！」

なんでこの司会者はこんなにも曲解して考えられるんだ！？
それに観客も観客だ。なんでみんな揃ってFクラスの野次馬化してるんだ！？
確かに姫路さんと行きたくないと言えば嘘にはなるけど、それとこれは別問題だ。

「では、岩下さんも優勝にむけてなにか一言を」

司会者が対岸の女の子にマイクを向ける。

「二人の邪魔したくないので、私たち棄権していいですか？」

「ちょっとなに言ってるのさ！ちゃんと闘おうよ！」

「おーと、ここで吉井選手が棄権を拒否しました！そんなにまでして二人の愛の力を見せつけたいのか、この野郎！」

もう、この司会者を止める気がしない…

「いいぞ吉井！」

「男をみせてやれ！」

「絶対勝てよー！」

観客も止める気がしない……

「では、のろけも終わったことですしお二方召喚を」

うん。もうこの司会者の言っていることを気にしたら負けだと思う。そう割り切って、隣でショート寸前の姫路さんに耳打ちする。

「（姫路さん、これはドッキリの一種だから気にしなくていいよ）」

「（ドッキリ…ですか？）」

「（うん、ドッキリ。こうやって僕らを混乱させる相手の策略なんだ）」

ごめん、岩下さん、菊入さん…

「（そうだったんですか。ならそれに惑わされないようにしなきゃですね）」

よしっ、姫路さんがショート状態から回復してきたぞ。

「（うん、そういうことだから召喚しようか）」

「（はいっ！）」

「「サモン！」」

魔方陣から僕と姫路さんの召喚獣が現れる。ちなみに明希に今日はなるべく喋らないようにと釘をさしているから基本的には喋らないはずだ。

Ｆクラス吉井明久　数学９６点

Ｆクラス姫路瑞希　数学４４７点

「明久君、前より点数上がってますね」

「うん、この日のために明希に教えてもらったんだ。けど姫路さんに比べたらまだまだだよ」

「そんなことありませんよ。明久がとても頑張ってくれたのがわかりますよ」

「そう言う姫路さんだって前より点数上がってるじゃないか」

そう、たしか前に明希に聞いた時は姫路さんの数学の点数は４００点台初頭と言っていた。元の点数が低く、伸び代のある僕と違い、学年トップクラスの点数をここまで上げるのは容易ではないはずだ。

「私、どうしても勝ちたいんです」

「えっ？」

「勝って、みんなと、明久君ともっと一緒にいたいですから」

姫路さんのその目には決意が宿っていた。あのＡクラスと闘った時のように…

「明久君なら私がなにを言っているかわかりますよね？」

「うん…」

あえて明確になにを知っているかは答えない。

「そうやっていつも私をさりげなく、知らないふりをして助けてくれるんですね」

僕自身は知らないふりをするつもりなんか……いや、知らないふりをしていたんだ。いつも真っ正面からの気持ちを向けるのがこわかったから。拒まれたらと思うとこわくて、いつも気づかれないようにと行動していた。

僕が姫路さんを笑顔にできなくてもいい。

僕に笑顔を向けてくれなくてもいい。

ただ、姫路さんが笑ってさえいてくれればそれでよかったんだ。
僕はそんな臆病で卑怯なやつだから…

「姫路さん…」

姫路さんの手が僕の手と重なる。

「がんばりましょう。明久君」

「うんっ！がんばろうか姫路さん」

今はこの距離でいい。いつか想いを伝えられるその時までは精一杯足掻いてみせるさ。

「では、試合を開始します。両者ともよろしいですか？」

「「「「はい！」」」」

「試合開始！」

開始の合図と共に相手の召喚獣は歩幅を合わせて突っ込んでくる。
中々息があっているようだ。だけれど――

「姫路さん！」

「はいっ！」

合図を受けた姫路さんが召喚獣を明希の後ろについて走らせる。

明希は僅かに前に出ていた菊入さんの召喚獣と斬り結ぶと、すぐに後ろに受け流した。そして明希の後ろにでスタンバイしていた姫路さんの召喚獣に斬られ菊入さんの召喚獣の点数は0となり、戦死する。

「真由美！」

「あちゃ～ミスっちゃった。ごめん律子」

「私が真由美の分まで頑張るから安心して」

仲間の戦死にも取り乱すこともなく岩下さんの召喚獣が突っ込んでくる。

僕は明希を左右に散るように操作して撹乱する。

「ちょこまかとすばしっこいわね」

岩下さんが明希に攻撃を当てようと躍起になっているところに手筈どおり、姫路さんの召喚獣が接近して大剣が振り下ろされる。もちろん一撃で戦死だ。

「勝者青ブロック吉井、姫路ペア！」

「「「「いぇーい！」」」」

雄二ＳＩＤＥ

「……以上が二人の様子」

ムッツリーニがビデオカメラをしまいながら言う。俺たちは試合会場に仕掛けてあるムッツリーニの隠しカメラから試合を見ていたのだ。

「それにしても明久も姫路もやりおるのぅ」

「当たり前だろ？あいつらのコンビは最強だ」

「最強って坂本はなにか根拠があるの？」

「あぁ、ある。考えてみろ明久の利点と弱点を」

疑問に首をかしげる島田に疑問で返す。

「吉井の弱点っていったら点数が低いことよね」

「強みは召喚獣の操作がうまいことじゃな」

島田と秀吉がお互いに確認しあうように言う。

「なら姫路はどうだ？」

「瑞希は総じて点数が高いことが強みよね」

「弱点と言える程でもないが、明久に比べれば召喚獣の操作で見劣りするのぅ」

「……相互扶助」

ムッツリーニの回答にうなずく。

「その通りだ。明久と姫路はお互いの弱点を補うことができる。例えば普段の明久の戦闘スタイルは召喚獣の操作が上手いことを活かしたヒット&ウェイが主流だ。しかしこれでは明久の点数の問題から与えられるダメージはごく僅か。だが、攻撃の手が姫路に変わることにより一度の撹乱で決着を付けることができる」

「でもそれなら瑞希じゃなくても点数の高い人なら誰でもいいんじゃないの？」

島田も差を感じてか少し不機嫌になっている。

「確かに今の試合くらいなら他の点数の高いやつでもこと足りただろうな。だが、二人の真の強みは――――っと、これは言うべきじゃないな」

「なんじゃ雄二よ、もったえぶらずに教えてくれてもいいじゃろうに」

「たまにはみんなも自分で考えるんだな」

「……薄情」

「なんとでも言え」

そう言い捨ててさっきの試合のことを思い出す。

例えばだ、明久が押される場合は相手の手数が多く避けきれないときだ。しかし姫路がいれば、その圧倒的な突破力により解決できる。逆に姫路が押される場合は明久のように技術に長ける者を相手にしたときや、翔子のように実力が均衡している者と対峙したときだろう。しかし前者においてはこの学園内で明久を越えられる者はおらず、後者においても明久に撹乱されている間に姫路にやられてしまう。明久を相手にしないという手もあるが、持ち前の召喚獣操作の上手さで足を掛けられたりしてしまい、その隙に姫路にやられてしまうだろう。

そして何よりも、明久と姫路の真の強みは表面じゃない。あいつらの中にある。お互いがお互いのために精一杯なところに。常にお互いを気にかけているから互いに互いを庇おうと、助けようとする。それはあいつら二人にとっては何よりも大きなことだ。たぶん、１＋１じゃ割りきれないものがそこにはある。理解できるものじゃない。それがあいつらだけの強さなんだ。

心と心のつながり。お互いが互いのために。それは似た者同士の二人だからこそだろう。どちらかのピンチには必ずどちらかが現れる。そして相手のために自分の限界を越えていくんだ。だからあいつら二人は負けない。互いがそこにいるから。それだけで理由として充分だ。

最強と対峙するってか。面白いじゃねぇか。見せてやるよ明久、俺の本気をな

第２０問　僕と姫路さんの広まった噂（後書き）

明久と瑞希の試合を見て燃える雄二。
そして学園中に広まった二人の野次馬！もはや野次馬同好会！？
よろしかったら感想評価のほどよろしくお願いします。

第２１問　僕と常夏と向き合う想い（前書き）

お気に入り件数９０＆ａｍｐ；ユニーク１００００＆ａｍｐ；総合点数３００突破を一挙に達成いたしました！
拙作の様な下手の横好きで作ったものにおつきあいいただき、ありがとうございます！

第２１問　僕と常夏と向き合う想い

明久ＳＩＤＥ

「ただいまー」

「今戻りました」

姫路さんと共に裏口から厨房にはいる。

「おぉ、明久に姫路よ、大奮闘じゃったな」

なぜだかウェディングドレスを着ている秀吉が盛り付けをしながら言う。

姫路さんは島田さんを見つけたのか、厨房の奥へと向かっていった。

「いやぁ、それほどでもないよ」

「謙遜することないぞ。俺も本気をだしたくなったしな」

楽しそうに笑う雄二を見てやっぱりかと思う。常々感じていることだが、どうも雄二は極端に逆境に燃えるタイプのようだ。

「じゃあ僕も本気をださなきゃだね」

「明久の本気なんて恐くともなんともないけどな」

「生憎、僕にも負けられない理由があるからただじゃひかないよ」

そう、負ける訳にはいかないんだ。絶対に。

「まっ、お前の大好きな姫路のためだからな」

「うん」

「おっ、珍しく否定しないんだな。それだけのことがお前にあったってことか。なに、俺もなにがあったか聞くほど無粋じゃねぇよ」

いつもながら雄二は勘が冴えてる。それでいて踏み込んでこないのはありがたいことだ。ありがたいことだけど――

「雄二、秀吉、ムッツリーニ聞いてほしいことがあるんだ」

周りの三人を見回せば、みんなこくりとうなずいてくれた。

「僕は今まで正面から向き合おうとしなかった。隠れて、隠して、偽り続けながらも、ある人のためになるならそれでいいと思っていた。

だけど、本当は違った。僕はその人に真っ直ぐに向き合うのが怖かっただけなんだ。否定されるのが、拒絶されるのがたまらなく恐くて逃げていたんだ。

でも今日、気づいたんだ。このままじゃ、いつまで経っても近づけないって。むしろ僕から離れていっちゃうんじゃないかって恐怖に似たものも感じた。だから、少しずつだけど、ほんの小さな歩幅だけど、歩み寄ってみようって決めたんだ。いつか届くまで、何度も、何歩も、いつまでも。

これはその第一歩だから、みんなに聞いてほしかったんだ」

言ってしまった。言っている間は夢中でなにを言っているかいまい

ち解っていなかったけど、これでもう僕の想いから僕自身が目を背けることはできない。

「明久、お前の想いはよくわかった」

「わしらもできうる限りバックアップするのじゃ」

「……失敗を恐れるな」

「みんな…ありがとう……」

みんなの言葉が胸に染みる。だけれど、これは僕に対する一種の枷だ。

もう目を背けることも偽ることもできないという枷だ。

この枷が僕から外れた時、僕は笑っていられるだろうか？

そばに君はいてくれるだろうか？

それは誰にもわからない。いや、君だけが答えを知っているんだね。

僕は厨房の奥にいるただ一人を見つめ、決心する。

もう逃げたりしない。

～数分後～

「それにしても中々の繁盛具合だよね」

一緒にサラダを作っている雄二に言う。

「確かに結構な売れ行きだ。これもお前と姫路の宣伝効果だな」

「からかわないでよ。姫路さんはともかく、僕なんか宣伝にならないよ」

ちなみに今のホール班は姫路さん、島田さん、秀吉の三人だ。二人の分のウェディングドレスはムッツリーニがさっき高速で作り上げていた。

つくづく自分の欲望に忠実なやつだなぁ……

「あの観客を見ても本当にそう思うか？」

「うっ…」

試合前のことを思い出して言葉に詰まる。

「なんでFクラスのみんな以外の生徒もあんな風になっちゃったんだろ…」

「お前、自分のしてきたことわかってるよな？」

「うん。わかってはいるけどさ、このままじゃ姫路さんに嫌われちゃうよ」

原因なんてわかりきっている。学園中に噂が広まるほどの人数に見られているのだから。だけど、噂になるとしてもなぜあんな行為に

でているのかが解らない。

「安心しろ、姫路はそんなことでお前のことを嫌いになったりしないからな」

「だとしても、みんなして質(たち)が悪いよ…」

「まぁ、人間は元来首を突っ込みたがる生き物だから諦めろ」

「そんなぁ……」

いったい僕はどうしたら、あの野次馬達から逃れることができるんだろうか…

「（口が割けても須川達が布教活動をしてるなんて言えないな…）」

「ん？雄二、なにか言った？」

「あっ、いや、なんでもないぞ」

怪しい。この上なく怪しいけどここで騒ぎをおこす訳にもいかないから、大人しく引き下がることにする。

「おい、どういうことだ責任者呼べ！責任者！」

突然、ホールの方からガラの悪そうな声が響いてくる。

「雄二！」

「あぁ、わかってる」

僕と雄二は作りかけのサラダを残し、厨房を出ていく。

「マジで汚ねぇ机だな。これが食事をだす机かよ！」

坊主頭の生徒がクロスで隠していた長机に文句を言っている。
一応、白のクロスで体裁を取り繕っていたものだが、Ｆクラスにある長机なのだから衛生的に良いものとは言いづらい。

「すいません。今、新しいものを用意しているところですので少々お待ちください」

見かねた姫路さんが坊主頭の生徒に謝罪をしている。『今すぐ用意する』と言わなかったのは姫路さんなりの配慮だろう。

「へぇ、姉ちゃん中々可愛いじゃねぇか。俺と遊ぼうぜ」

坊主頭が姫路さんの手を強引に掴む。

「はっ、離してください！」

姫路さんが振りほどこうとするが坊主頭は下卑た笑いを浮かべるだけで離す気はないらしい。あいつめ…

「明久、あとは俺に任せていってこい」

雄二が僕の肩に右手をおきながら言う。

「でも……」

ここで坊主頭を殴れば店の営業に大きく支障をきたすだろう。

「うそ偽りなく向き合うんだろ？
なら、お前がやりたい様に姫路を護ればいい。いけ、明久！」

「雄二…ありがとう」

雄二がどんな作戦をたてているかわからないが、今僕にできることは――――

「姫路さんを離せぇぇぇ！！」

坊主頭の所に走り、おもいっきり拳を叩き込む。

「ごぶぉ！？」

坊主頭が不様にも壁に叩きつけられのびる。僕は姫路さんを庇うように前に出ると、坊主頭の連れのモヒカンを睨み付ける。

「てめぇ、客にむかってなにしやがる！」

「おや、なにかご不満でもありましょうか？」

雄二が腕を鳴らしながらやってくる。

「不満もなにも夏川がぶっ飛ばされたんだよ！」

あの坊主頭は夏川と言うのか。

「すいませんが、こちらの花嫁には先約がいますので気安く触らな

いでいただけますか？」

「あぁん、先約だと！？」

「ええ、そちらのタキシードを着た花婿が先約済みですのでご引き取り願えますか？」

雄二、なに言ってるんだよ！
このままだとモヒカンが僕に殴りかかってかねないよ！？

「ふざけんじゃねぇよ！そんな理屈でぶっ飛ばされたてたまるかよ！」

「ふざける？本店においでの皆様、聞きましたでしょうか？このモヒカンは二人の関係を邪魔するようでございますが、いかがなさいましょうか？」

雄二が店内中に響き渡る程の大きさで言う。

「はぁ、てめぇいったいなに、っていたっ！」

あっ、客席からモヒカンにフォークが投げつけられた。

「なにしやがる！」

「それはこっちの台詞だ！」

「そうだ、てめぇこそ二人の邪魔してんじゃねぇよニワトリ野郎が！」

「邪魔なんだよ出てきやがれ！」

「ほんと、あぁいう奴って最低ね」

「食事が不味くなるわ」

「「「でーてけ！でーてけ！！」」」

店内中からモヒカンへと避難が集まる。
ここに来ている人は、時間の関係からも僕と姫路さんの試合を見ていた人たちがほとんどだろう。すなわち、野次馬ながらも僕と姫路さんの仲を応援してくれている人たちで埋めつくされているのだ。
雄二は最初からそれをわかっていて僕に突っ込ませてくれたのだろう。

「ちっ、ガタガタうるせぇ客だ！もとはと言えばてめぇのせいだぞ！」

逆ギレしたモヒカンが殴りかかってくる。
僕自身、腕っぷしは対して良くはない。だけど――

「ほんと、あんたたちみたいな客は迷惑なんだよ！！」

姿勢を低くして、相手の拳をかわす。
そのままがら空きになった鳩尾に思いっきり拳を叩き込む。

バタッ

「えっ……？」

ありえない方向から聞こえてくる誰かが倒れる音。
僕がその方向、僕の後ろを向くとそこには倒れてる姫路さんがいた。

「姫路さん！」

すぐに駆け寄り抱き抱える。見れば、頬が腫れていた。
おそらく、僕のよけたモヒカンの攻撃が当たってしまったのだろう。
僕がよけさえしなければ……

「明久…君、私は大丈夫です…から……気にしないでください」

「気にしないなんてできるわけないじゃないか！」

できるわけない。僕のせいで姫路さんを傷つけているのに見過ごすことなんて…

「てめぇ、よくもやりやがったな！」

いつの間にか起き上がった坊主頭の夏川が殴りかかってくる。
まずい、姫路さんを抱き抱えてるから避けることも、反撃することもできない！
雄二も、のびているモヒカンを教室からだしている最中だから援護は期待できそうにない。とにかく姫路さんだけは護ろうと、姫路さんを庇うように強く抱きしめる。

「さっきから邪魔なんだよ！！」

「ふぐぉ！？」

だけれど、僕に夏川の攻撃が届くことはなかった。

「主人（マスター）、よく姫路さんを護ってくれたな」

聞き覚えのある声に顔をあげる。そこには僕たちの前に凛と立つ明希がいた。

「明希、召喚フィールドもないのにどうして…」

「んなこん知るかよ。それに今はこのクズの始末が先だろ？」

本当に明希はわからないことだらけだ。

だけど、このピンチの状況でできてくれたのは願ってもないことだ。

「明希ありがとう」

「礼なんているかよ。俺たちは一心同体だ。

それよりも主人はきっちり姫路さんを護っとけよ」

そう言うと明希は夏川へと飛びかかっていった。

いや、もうそれは虐殺じゃないかってほどの惨劇だったよ……

人の何倍もの力がある召喚獣が弱ってる相手に対して、本気で殴る蹴る、木刀での滅多打ちなどの暴行を加えているんだからさ……

少し、同情したくもなったよ…

～数分後～

「ちくしょう、おぼえてろよ！」

数分間にもわたる明希の一方的な虐殺がようやく終了した瞬間に夏川は一目散に逃げ帰っていった。

「ちっ、まだ逃げるだけの体力が残ってたか」

明希も明希でこんな物騒なことを言っている。

普通、足を引きずりながら涙目で逃げていく人にそんなこと言えるか？

「うっ……」

明希が急にふらふらしはじめた。

「明希君大丈夫ですか！？」

「うん、大丈夫。どうやら召喚フィールドもないのに長くいすぎたみたい……

悪いけど、もう戻るね」

こんな時にまで姫路さんに対する口調を律儀に守って、明希は召喚獣の世界へと帰っていった。結局、明希がなんでこれたのかわからずじまいだったなぁ…

「皆様、当店の催しはいかがだったでしょうか？」

いつの間にか雄二がマイクを持って演説を始めている。

「当店のメインでございます二人とその召喚獣の活躍は中々のものではなかったでしょうか？」

雄二のやつ、今までのことを全て催しで片付けるつもりだな…
確かにその方が店の評判にも差し障りが少ないだろうけどそううまくいくかな？

「よっ、大将いいもん見せてくれたね」

「中々おもしろかったぜ」

「いいスパイスになったわ」

意外にみんな騙されているよう――ん？
よくよく見たら、誉めてくれてるのって観客席にいた人ばかりじゃないか！？
……そうか。
みんなが誉めてくれる事によって疑っている人にもこれが本当に催しなんだって信じ込ませようとしてるんだ。
事実、効果があるようで、どこからも疑いの声はあがっていない。
にして、この団結力はただ者じゃないよね…
これを敵にまわしてると思うと涙がでてきそうだよ……

「明久、姫路、いつまでも抱き合ってないでみんなに挨拶でもしたらどうだ」

「なっ、なんてこと言うのさ！？」

「はわわ！？こっ、これは違うんです！」

雄二の爆弾発言により僕と姫路さんは離れ、互いに背中合わせになる。

「こんな初な二人ですが、これからもどうぞよろしくお願いいたします！」

雄二が深々と礼をして演説という名の取り繕いが終了した。

「いやぁ、いいもん見せてもらったな」

「吉井って案外強かったんだな」

「バカ言え、あれは愛する彼女を護るためにだした力だぞ」

「そういうのってロマンチックよね」

「そうだな。やっぱり二人は――――」

「「「「文月学園代表カップルだな（よね）」」」」

なんだろう段々耐性がついてきたのか、はたまた雄二たちに暴露したせいなのかわからないけど以前のように取り乱さなくなった気がする。

「姫路さん、そろそろ次の試合の時間だし行こうか？」

「そっ、そうですね」

姫路さんは元から恥ずかしがり屋ということもあってか、まだ慣れ

てはいないようだ。僕はそんな姫路さんの手を掴み、歩きだす。

「姫路さん、絶対に優勝してみせるよ」

「明久君…」

一つ、僕の枷が外れた気がした。

これからも一つずつでいいから外していこうと思う。

時には新たな枷が付くこともあるだろうし、回り道をすることもあるかもしれない。だけど、必ずすべてを取り払っていつか想いを伝えようと思う。

今は君のためになりたいと伝えるだけでも手一杯だけど、いつかは君に――

「よしっ、ベストショット撮ったぞ！」

「なに!?俺にも見せてくれ！」

「みんな、吉井が珍しく堂々としている今のうちに撮るんだ！」

「「「「おうっ！」」」」

「なんでそうなるのさ！」

さすがに耐えきれなくなった僕は一目散に会場へ向けて走りだしながら思う。

どうして格好よく締めさせてくれないんだよ！

第２１問　僕と常夏と向き合う想い（後書き）

前回書き忘れていましたが、１９問を少しばかし加筆修正いたしました。
地味に重要（？）な部分が削られてますのでお時間がありましたら一読ください。
では、次回もよろしくお願いします！

第２２問　僕とあいつとあいつの彼女！？

明久ＳＩＤＥ

「さぁ、はじまりました第２海戦！」

司会者が高らかに宣言する。次はどんな爆弾発言を用意してることやら……

「まずは赤ブロック、Ｂクラス根本恭二、Ｃクラス小山友香ペア！」

根本恭二…

忘れもしないその名前。

姫路さんの大事なラブレターを使って脅しをかけたばかりか、姫路さんと島田さんを人質にまでとった卑怯なやつの名前だ。

これは僕自身が自力で覚えていられた数少ない記憶のうちの一つ。

理由はわからない。だけど、明希に記憶共有をしてもらっていないのに覚えているのだから、僕自身が覚えていた他ならない。

「続きまして青ブロック――」

さぁ、なんて言ってくる。今の僕はそうそう取り乱さないぞ。

「Ｆクラス吉井明久、同じくＦクラス姫路瑞希ペアです！」

あれ？

意外に普通だった…

若干、拍子抜けしながらも壇上へ向けて階段を昇る。

「さて、ここで皆様にビックなお知らせがあります。
なんとFクラスのウェディング喫茶にて二人の写真を５０枚も収録したメモリアルブックが販売しているとのことです！」

「「「「ぬぁぁぁんだってぇぇぇ！？」」」」

観客が訳のわからない驚き方をしている。
というか、たぶん僕と姫路さんが誰よりも驚いていると思う。

だって、許可した覚えもなければ撮られた覚えもないよ！！

さて、姫路さんがどれだけ動揺してるか確かめるために横目で見てみる。

「二人って、いったい誰でしょうね？」

「あははははっ、だっ、誰だろうね…」

前言撤回。
姫路さんは自分が撮られているとは露程も考えていないようだ。
もはや、天然を通り越して文脈を読んでいない気がする……

「更にただいまはいりました情報によると二人の最新ベストショットも販売とのこと。どちらも数には限りがありますのでお早めにどうぞ！
お求めはムッツリ商会まで！」

ムッツリニィィィーーー！！！！！
あいつめ……

『……記念に一枚』

『……上々の売上』

って、そういうことだったの!?
でも待てよ。５０枚も撮られたっけ？

……あっ！

そういえば土日の補習の時にムッツリーニがこちらをよく撮ってたっけなぁ。
てっきり姫路さんを撮ってたと思ってたら、僕たち二人を撮ってたんだ……

「数に限りがあるだと!?」

「これを逃したら一生後悔するぞ!」

「こうなりゃ大人買いだな」

「よしっ、俺が買ってくるからお前はこのビデオカメラで録画しとけ」

「任せとけ。ちゃんと俺の分も買ってこいよ!」

なにが『……失敗を恐れるな』だ!
もうなんか戻れないところまで失敗してる気がするよ!!

「では宣伝も済みましたし、両者召喚「待ってくれ司会者」

根本が司会者の言葉を急に遮り司会者からマイクを受け取ると一呼吸いれる。
まさかまた卑怯な手を使う気なんじゃ…

「吉井に姫路、俺はお前らにすまないことをした」

根本は突然、土下座をしだした。まさか、あの時のことを謝罪する気なのか？

「正直、俺の言葉なんて聞く気もないと思う。
だけどこれだけは言っておきたいんだ。俺は正々堂々お前らと闘いたい。
あんなことした人間が言えた言葉じゃないってことくらいはわかってる。
だけれど俺はもう誓ったんだ。正々堂々とまっすぐに生きるって。
ただ、それだけを言いたかったんだ」

いったい根本になにがあって、どういう心境の変化をもたらしたのかわからない。だけれど、許してしまっていいのだろうか？
姫路さんをあんなにも苦しめた人間をそうやすやすと…

「いいじゃないですか」

「えっ？」

小さく、僕にしか聞こえない程度に姫路さんが言う。

「人は変われるんです。
誰かと関わって、誰かに関わって、変わっていけるんです。

それは素晴らしいことだと思うんです。だから、許してあげましょう？」

誰かと関わって、誰かに関わってか……

僕は姫路さんと関わって色々なことに気づけた。色々なものをもらった。

だけど僕はなにかをしてあげれただろうか？

なにか姫路さんに変化を与えられただろうか？

たぶん答えはＮＯじゃないかと思う。

だけど、僕に言う姫路さんの目は僕を映していた。

まるで僕が姫路さんに変化を与えたのだと言わんばかりに……

「根本君、正々堂々勝負しよう」

「吉井…許してくれるのか……？」

根本は涙がつたう顔をあげて言う。

人前で泣くなんて、本当に悪いと思っていたんだろう。

「違うよ、姫路さんが許してくれたんだ。正直、僕はまだ根本君を許しきれていない。だから許してくれたのは僕じゃなくて姫路さんなんだ」

「そうか……

ありがとな姫路。あんな酷いことをした俺を許してくれて。

それと吉井、今はまだお前に許してもらえないかもしれない。だけど、いつかお前にも信用してもらえるように俺はがんばろうと思う」

「うん」

まさか根本がここまで真剣に考えているなんて思ってもみなかった。
案外、根はいいやつなのかもしれない。

「だから今は一組の相手として戦ってほしい」

「のぞむところだよ」

「お互い、がんばりましょうね」

お互いに対岸にいるため、握手はできないができる状況なら握手をしていたのだろう。

「なんと感動的な展開なのでしょうか！
あの学園中で卑怯と噂になっていた根本恭二すらも我らが二人は改心させたのです。これはカップル対決に目が離せませんねぇ」

「カップル対決…？」

僕と姫路さんは周りのみんながカップルだと勝手に思い込んでいるけど、それではカップル対決にはならないだろう。

「あっ、もしかして吉井は俺と友香が付き合ってるの知らなかったか？」

「ええ！？
知らないよそんなこと！今、初めて聞いたよ！！」

根本の突然の発言に驚きを隠せない。

「なによ、私が恭二の彼女じゃいけないわけ？」

「いや、そういうわけじゃなくてさ……」

確か雄二の話だと、根本を女装させて写真を撮ったって話だよなぁ…
小山さんもよくそんな人と付き合ってられるよね……

「本当はこの試合のあと、恭二と別れようと思ってたの」

「ゆっ、友香！？」

そりゃそうだよね。誰も女装趣味の人とは付き合いたくないと思うよ。

「だけどね、さっきの恭二見てたら見直しちゃった。
だって、私の大好きな会ったばかりの恭二だったから」

そう言う小山さんの顔はとても懐かしそうな、楽しそうな笑顔だった。

「友香…
ごめん。俺、間違ってたんだよな」

「いいのよ。また二人でやり直していきましょ？」

二人はいいカップルになるんじゃないかな。
たぶん、なんだかんだ言ってもお互いにお互いが必要なんだと思う。

「では、仕切り直しまして両者召喚を」

「「「「サモン！」」」」

それぞれの魔方陣からそれぞれの召喚獣が現れる。今回の科目は英語だ。

Ｂクラス根本恭二　英語２０２点

Ｃクラス小山友香　英語１５５点

根本英語が得意科目なのかＡクラスの中堅程の点数がある。

Ｆクラス吉井明久　英語５２点

Ｆクラス姫路瑞希　英語４０９点

対する僕らは総合点数では勝っているが、はっきり言って僕が雑魚同然だ。

「ごめん姫路さん。英語まではカバーしきれなかったんだ」

そう、明希に教えてもらうにも日数的に限界があって英語にはほとんど手をつけていないのだ。

「私がフォローしますから大丈夫ですよ。
だから私が危ない時には助けてくださいね」

「うっ、うん…」

姫路さんの笑顔に少しドキッとしながらも返事をする。
姫路さんが危なくなるなんてないと思うんだけどなぁ……

「試合開始！」

「友香！」

「恭二！」

根本と小山さんの召喚獣が一列で走り出す。どうやら二人の狙いは僕らしい。

ガキィィィン

根本の召喚獣と明希が斬り結ぶ。

「友香今だ！」

根本の指示を受けて小山さんの召喚獣が跳びあがる。
このまま僕の後ろをとる作戦か？

「させません！」

空中で姫路さんと小山さんの召喚獣が斬り結ぶが、点数の差が歴然としているため、あっさりと小山さんの召喚獣が押しきられ地面に叩きつけられてしまう。

Ｃクラス小山友香　英語８７点

「明久君、今助けます！」

姫路さんの召喚獣が加勢にやってくる。根本も一対二では分が悪い

と踏んだのか、明希を力ずくで押しきり小山さんの召喚獣のそばへと距離をとった。

「友香大丈夫か？」

「えぇ、まだいけるわ」

たぶん、これが本来あるべき根本恭二なのだろう。
まっすぐに生き、思いやりのある人間。
もしかしたら彼を変えてしまうような出来事がなにかあったのかもしれない。
僕にはそれがなんなのかわからないし、あったかどうかもわからない。
だけどいつまでも過去のことにとらわれていちゃいけないんだと思う。
僕も、その例外ではないのかもしれないのだから……

「友香、悪いけど吉井を頼めるか？」

「私はそれでいいけど、恭二一人で姫路を相手にするなんて無理よ」

「大丈夫だ」

根本の召喚獣が走り出す。

「友香…この試合に勝ったらお前に伝えたいことがある」

「恭二！」

そう言うと根本の召喚獣は一直線に姫路さんの召喚獣へと向かって

いった。
ここで僕が根本の召喚獣に足払いなどをかければ簡単に倒せるだろう。だけど、それは決意をみせた根本への裏切りとなってしまう。だから僕は…明希は根本のために明希を抑えようとやってくる小山さんの召喚獣を見据え、構える。
互いに斬り結ぶ、その瞬間に木刀で下から上へとなぎ払う。
小山さんの獲物は宙を舞い、落ちていく。ちょうど姫路さんにやられたばかりの根本の召喚獣に寄り添うように…

第２３問　僕とあの子と不思議な人（前書き）

アニメ２期は何巻で締めにするんでしょうね？
できれば６巻の内容はやってほしいです。じゃないと姫路さんの見せ場が…

第２３問　僕とあの子と不思議な人

明久ＳＩＤＥ

「ただいま――――って、凄い並んでるね…」

裏口から厨房に入る時も思った事だが店内がごった返しになっていた。

「本当にたくさんのお客さんがいますね」

姫路さんもあまりの盛況ぶりに驚いている。
これならＣクラスぐらいの設備分は稼げるかな？

「おぉ、明久に姫路よ、よく戻ったのじゃ。店内はごった返しになっておるから二人も手伝ってくれんかのぅ？」

「手伝うのはいいんだけど、雄二は？」

そう、厨房やホールを見渡してもどこにもいないのだ。

「雄二なら手洗いに「帰ったぞ」「噂をすればなんとやらじゃな」

秀吉の言う通り雄二が裏口から入ってきた。

「雄二お帰り。ん？その小さな女の子はだれ？」

見ると雄二が小学生と思われる女の子と手を繋いでいる。女の子の

特徴はツインテールに小柄な体躯。どちらかと言えば姫路さんや霧島さんタイプではなく、島田さんや工藤さんタイプである。小さな女の子を連れ回ってるなんて、もしかしてこいつはそっちの気質があるんじゃ……

「あっ、バカなお兄ちゃんです！」

突然、雄二のそばにいた女の子が僕の鳩尾に頭突きをかましてきた。

「？？？」

僕は小学生の知り合いなんていないはずだぞ！？

「あっ、葉月ちゃんじゃないですか」

「こにちはです、きれいなお姉ちゃん」

「こんにちは葉月ちゃん」

どうやら姫路さんとは知り合いのようだ。
でも僕に小学生の知り合いなんて……

「あっ！あの時のぬいぐるみの子か！」

「ぬいぐるみの子じゃなくて葉月です」

「ははははっ、ごめんね葉月ちゃん」

小さいながらも自尊心はしっかりとしているようだ。

「なんだ明久に姫路、お前らはちびっこの知り合いだったのか」

「一年の時、ちょっとね」

「私も一年の時に少し」

へぇ…姫路さんも一年の時に葉月ちゃんと知り合ったのか。
そういえばあの日は姫路さんを帰り道で見かけたんだったよな。それに葉月ちゃんが持っていた小さなぬいぐるみのこともわからずじまいだし…

「ふぅ、木下あんたも――――って、葉月!?」

「あっ、お姉ちゃん!」

ホールからやってきた島田さんに葉月ちゃんが抱きつく。
……お姉ちゃん?

「島田さん、その子って…」

「えぇ、うちの妹よ」

よくよく見てみれば、島田さんとの共通点は多々見られた。

「葉月、どうやってここに来たの?」

「葉月が『バカなお兄ちゃんはどこですか』って聞き回っていたら、あそこのでっかいお兄ちゃんが案内してくれたです」

そう言って葉月ちゃんが雄二を指さす。

よかった、僕の悪友はまだ犯罪者にはなっていなかったようだ。

「そういえば葉月、ここに来るまでにすごいものを見たです」

「すごいもの？」

「はいっ！坊主頭とニワトリ頭の二人がきれいなお姉ちゃんがたくさんいる所で『中華喫茶は汚いから行かない方がいい』って騒いでたら、周りのみんなが怖い顔してその二人をボコボコにしてたです！」

「そっ、そうなんだ…」

「そっ、そうなんですね…」

僕と姫路さんはただ乾いた笑いを浮かべるしかない。なぜなら、夏川とモヒカンを袋叩きにしていた人たちの台詞が目に見えているからだ。たぶん、二人は営業妨害をしようとしたのだろうけど、あの団結力を前には自殺行為に等しいだろう……

「まさしく天罰ってやつだな」

「いいきみよ」

「あやつらのような性悪は一度、痛い目をみるべきなのじゃ」

「……自業自得」

そうそう自業自得……

「って、ムッツリーニ！」

「……どうした」

「どうしたじゃないよ！ムッツリーニにみっちりと話したい事があるんだよ！」

「……わかった。控え室で話を聞こう」

姫路さんに聞かれる事を危惧したのかムッツリーニは控え室での話し合いを提案してきた。僕自身もできれば姫路さんに聞かれたくない話だから好都合だろう。

～数分後～

「ご注文を――――あっ、また来てくれたんですね」

目の前にいる女性に言う。この人は今日の朝早くからも来店してくれた人だ。

ちなみにムッツリーニとの話し合いは姫路さんの転校阻止の資金稼ぎということで折り合いがついている。

「ええ。花婿君の様子がちょっと気になっちゃったからね」

「ははははっ、僕の様子なんて見てもおもしろくありませんよ」

なぜだかわからないけど、この人とは話しやすい。

「そんなことないわよ。それよりも花婿君もふっきれたようでよかったわ」

「ふっきれた？」

「ええ。花婿君は花婿君なりに花嫁ちゃんへの気持ちにケジメをつけたんでしょ？」

「そう思いますか？」

「だって前来た時よりも花婿君、表情が明るいからね」

そんなに変わったのだろうか？

確かに僕自身、姫路さんへの気持ちに一種のケジメをつけた。

正確にいえばケジメと言うよりは覚悟を決めたに近いのだろうけど…

「で、どうなの？」

「どうって、なにがですか？」

どうもこの人の話は唐突すぎる。まるで僕の姉さんのようだ。

「だから、花嫁ちゃんには気持ちを伝えられそう？」

「んー……

たぶん、今すぐには無理だと思います。僕自身、まだまだ考えなきゃいけないことがありますし、なによりまだ怖いんです……

いくらケジメをつけたところで、姫路さんに否定されたらと思うと

……」

そう、結局僕がいくらケジメをつけようと、いくら変わろうと、姫路さんに否定されればそれまでだ。たぶん、今の関係にすら戻れなくなってしまうだろう…

「花婿君も大変ねぇ。
だったら私が花嫁ちゃんと近づける魔法をかけてあげようか？」

「魔法…？」

「ええ。でも普通にかけるだけじゃつまらないから、そうねぇ……
そうだ、花婿君たちがあの大会に優勝して、花嫁ちゃんを花婿君の家にエスコートできたら魔法をかけてあげるよ」

えぇと、つまり条件を要約すると…

試験召喚大会に優勝する。
そのまま姫路さんを僕の家へとお持ち帰り！？

「むっ、無理ですよ！」

「そんなに緊張することないじゃない。
よく夕飯だって一緒に食べてるんだからさ」

「それとこれは別問題ですよ！」

確かに、あれ以来も姫路さんが僕の家に来て夕飯を作ってくれたことは何度かあった。（もちろん明希は大喜び）
だけれど、それは僕が誘った訳ではなく、姫路さんの好意からなの

だ。
僕自身が自主的に姫路さんを連れ込むなんてできるわけがない。
「まぁ、いいわ。もし、花婿君にそれができたらとびっきりの魔法をかけてあげる。じゃあ、私はもう行くから」
いつの間にか注文していたサラダを食べ終えていた女性が立ち上がる。
「あっ、待ってください！」
「なにかしら？」
「名前、教えてもらってもいいですか？」
「あら、浮気かしら？」
そう僕をからかう様にクスッと笑う。
「そんなんじゃありませんよ。ただ、またどこかで会う気がして」
「そう、なら鈴（りん）って事にしておいてちょうだい」
「鈴さんですね」
はぐらかされている感じがしないでもないが、一応これで呼び名が決まった。
「じゃっ、花婿君またね」

そう言って鈴さんは会計を済まし、店を出ていった。

「ありがとうございました」

ポンッ

頭を下げる僕の肩に手が置かれる。

「どっ、どうしたの須川君、みんな…？」

振り向けばどす黒い笑みを浮かべた雄二、ムッツリーニ、秀吉を除いたFクラスの野郎どもがいた。要するには野次馬軍団に囲まれたわけだ。

「「「「吉井、少し控え室で話し合いたいことがあるんだが？」」」」

「次の試合もあるから、なるべく早く終わってね」

逃げようと思って逃げ切れる相手ではないため、大人しく観念する。

「「「「早く終わるかどうかは吉井しだいだな」」」」

「いやだぁぁぁぁー！」

僕の叫びもむなしく、控え室へと連行されてしまった。

なにがあったかは言わなくてもわかるだろう。

一般的に差し障りのない範囲で言うとしたら、「お前には生涯を共にする相手がいながらなにしとんじゃボケェェェ！！」とか言われながらボコられた。

とだけ言っておこう。というか、これ以上は説明させないでほしい。

第２４問　僕と追憶とあの日の約束

明久ＳＩＤＥ

「相手の方、いつまでも来ないですね」

隣に立つ姫路さんが不安そうに言う。

「そうだね。だけど――」

「だけど、どうしたんですか？」

「いや、なんでもないよ」

「そう…なんですか？」

対戦名簿に書かれている『高城』という名前。
どこかで聞いたことがある気がする。
あくまで僕の直感にすぎないけど、このまま高城なる人物とは対戦しない方がいい気がしてきた。もっとも、大会規定によりあと３分以内に相手が来なければ僕らの不戦勝だけど。

いったい高城って誰なんだ？
僕とはどういう関係があったんだ？
これは記憶を失ってるんじゃなくて、ただ単に忘れてるだけなんだから思い出せるはずだ。思い出せるはずなのに、なにもわからない……

それどころか、まるで記憶を失ったかのように思い出せないんだ。
いったい、僕はどうしちゃったんだろう…？

？？？ＳＩＤＥ

「で、首尾はどうだ？」

物陰から、まるで気配を感じさせずそいつは出てきた。いつも俺たちはこの場所で情報提供をしている。だけどそれも今日までだ。

「悪いが、お前とはもう協力できない」

「ほぅ…
俺に刃向かって一人のお前が無事でいられると思ってるのか？」

ムカつく野郎だ。
責任転嫁するつもりじゃないが、もとはと言えば俺はこいつのせいで……

「一人、そいつは違うな。
俺は今まで見過ごしていたんだ。いつも側にいてくれて俺を支えてくれた――の存在を。あまりにも共にいるのが普通すぎて気づかなかった。
俺はもう一人じゃない。だから、俺とお前の縁もこれっきりだ」

「生意気なことを言ってんじゃねぇぞ！
情報まで提供してやったのに無様にも負けた野郎が偉そうなんだよ！」

いつもの冷静さを失い怒号をとばしてきたあいつに内心驚くが、平静を装う。

「お前も勝てないよ。誰も信じることも、関わることもできないお前じゃあいつには…あいつらには勝てない」

「てめぇ、まさかあいつ側につくなんて言わねぇだろうな！？」

「お生憎俺もそこまでできたやつじゃないさ。ただ、これだけは言っておく。
俺はもうお前の仲間なんかじゃない。
お前が俺の周りに危害を加えるというなら、俺が全力で護る。――がそうしているように俺も俺のすべてを賭けて――を護りとおしてみせる」

「――の名前を口に出すなって言っただろ！」

「ぐほっ！」

突然殴りかかってきたあいつの拳をもろに受ける。
前々から思っていたがこいつは――の事を相当毛嫌いしているな。

「いいのか？」

痛む脇腹を抑えながらもあいつの目をしっかりと見据える。

「そんなに大声あげたら他の人が来ちまうぜ」

「ぐっ…

まぁいい。俺を裏切ったことを後悔させてやるからな」

そう言ってあいつは俺から離れていった。

負けるなよ――

明久ＳＩＤＥ

「結局、不戦勝になっちゃったね」

あれから対戦相手が来ることはなく、３分後に僕らの不戦勝が決まった。

今はその帰り道だ。

「そうですね。そういえば、対戦相手は誰だったんですか？」

対戦名簿は一組に一枚しか配られていないため、姫路さんは相手の名前を知らないのだ。

「ごめん、落としちゃってわからないんだ」

嘘だ。本当は高城と小暮という名字の生徒だった。二年で聞いたことのない名字だから、もしかしたら三年なのかもしれない。（一年はこの時期では召喚獣の操作を習っていないため除外）
でも、そんなこと以前に高城という名前が妙に引っ掛かった。
もしかしたら姫路さんになんらかの関係があるかもしれないから今回は伏せておこう。少なからず良い意味で関係はないはずだから……

「姫路さん、先に戻ってて。ちょっと手洗いに行ってくるからさ」

「はい、じゃあ先に戻ってますね」

いったん姫路さんと別れるとトイレに向かう。

～数分後～

「明久よ、大変じゃ！」

トイレから出たところで秀吉がウェディングドレス姿のまま走ってきていた。

「どうしたのさ秀吉！？」

ウェディングドレスのまま走る回るなんてよほどのことがあったのだろう。

「ウェイトレスが誘拐されたのじゃ！」

「誘拐！？」

さすがにあのモヒカンと夏川でも誘拐などしないだろう。と、思いたい…

「秀吉、二人の居場所は？」

「今、ムッツリーニが教室で調べておる。雄二も一緒じゃ。わしは雄二から頼まれた伝言を学園長に届けなければいかんから行くぞ？」

「うん、ありがとう秀吉」

僕と秀吉は互いに逆の方向へと走りだす。

僕が姫路さんから目を離さなければこんなことには……

～厨房～

「雄二、ムッツリーニ！」

裏口を勢いよく開けて厨房に入る。

ウェイトレス不在のためか、正面入口には休業中の看板も下がっている。

「明久か、ちょうどいいところに来た。いくぞ！」

「行くってどこに行くのさ!?」

「お前のお姫様を助けに行くんだよ。ムッツリーニのおかげで場所がわれたからな」

「……これくらい一般教養」

盗聴機類をしまいながらムッツリーニが言う。

だけれど雄二の様子がいつもと違う気がした。どこか焦っているような感じが…

もしかして!?

「雄二、もしかして霧島さ「言うな!!」

雄二の怒号に冷や汗をかく。怒ってる…

いつもは冷静な雄二が怒ってる……

たぶん、その矛先は誰でもなく自分自身に向けられたものだ。自分のせいでという思いが渦巻いて、雄二を苛立たせているだろう。

「行こう。悪者の退治にね」

「あぁ、目一杯こらしめてやるぜ」

「……裏方は任せろ」

僕たちは教室を飛び出すと、目的の場所へと向かった。

「ここか…」

ムッツリーニに案内されてやって来たのは近くのカラオケボックスだ。話によればパーティールームに三人は連れ込まれているらしい。

「明久、あえてあらかじめ言っておく。お前はお前の想うように行動しろ。
躊躇やためらいは一切いらない。お前にしかできないことをやるんだ」

「うん、わかってるさ。雄二もたまにはそうしていいんじゃないか？」

「そうだな。いっちょ、暴れてみますか」

雄二とげんこつをぶつけ合い笑う。

必ず後悔させてやる

「そろそろ時間だ。いくぞ明久」

雄二と共にカラオケボックスへと入店する。
ムッツリーニは裏から回る作戦のため、今ここにはいない。

『嬢ちゃんたちかわいいねぇ』

『ちょっと気安く触らないでよ』

『……いやっ！』

『その…私たちを解放してください』

『それは嬢ちゃんたちの頑張りしだいかな？』

扉の奥から下劣な笑い声が聞こえてくる。

こいつら、好き勝手しやがって……

「失礼いたします」

店員に変装したムッツリーニが反対側の扉から入っていく。部屋にいる全員の注意がムッツリーニの方へとそれる。

今だ！！

バタン！！

「くらぇぇぇ！」

扉を勢いよく蹴り開け、手近にいるチンピラの股を蹴りあげる。

「ぐぉっ！？」

その一発だけでチンピラはのびてしまった。だけどあと六人いる。

「明久君！」

「吉井！」

奥の席で縮こまっている三人と目があう。

「ほぅ…てめえが吉井か」

こいつは僕の事を知ってるのか！？

「てめぇ、よくもシンジぐぉ！？」

注意のそれた僕に殴りかかろうとしたチンピラに雄二がおもいっきり拳をくらわす。これで残り五人。

「てめぇらよくもウェイトレス誘拐してくれたな！」

腕を鳴らしながら雄二が叫ぶように言う。

「あいつが坂本だ！」

「あの悪鬼羅刹と呼ばれた坂本だと！？」

「かまうこたぁねぇ。三人でやれば関係ねえだろ」

僕を無視して三人のチンピラが雄二に殴りかかりにいく。いくら雄二でも……

「三人ごときで今の俺を抑えられると思うなよ！」

雄二はのびているチンピラの手首を掴むと手短にいる相手に投げつける。

「うわぁ！？」

「明久！お前は姫路たちを救出しろ！」

「うん、わかった！」

たぶん、今の雄二ならめったなことがなければ負けることはないだろう。

殴りあう（たぶん一方的に殴っている）音を背に姫路さんたちの近くにいるチンピラに殴りかかる。

「おっと！そんなひょろいパンチ当たるかよ」

チンピラは僕の拳を避けるとそのまま足を後ろに振り上げる。

「明久君！」

「「吉井！」」

まずい、さっきパンチを外したばかりだからよけれるだけの体勢が整ってない！

「くたばれ――」

「……くたばるのはお前」

蹴りが繰り出される瞬間、チンピラの背後にまわっていたムッツリーニが灰皿でチンピラの脳天を強打した。

まさかチンピラも自分がくたばるなんて思ってもみなかっただろう。

あとは僕の事を知っているらしい、あのチンピラだけだ。

「ムッツリーニは脱出経路を確保しておいて」

「……わかった」

そう言うとムッツリーニは安全に出られる通路を確保するためにいったん部屋から出ていった。

「お友達がいなくなっちまったけどいいのか吉井？」

チンピラがこちらを挑発するように言ってくる。ここで挑発にのっちゃだめだ。

「お前らは自分のしてることがわかってるのか！」

「わかってるに決まってるだろ？
当然だが悪いなんてちっとも思っちゃいねぇぜ」

「そうか…」

拳におもいっきり力をこめる。

「なら僕も今からすることを悪いなんて思わない」

拳を引き、狙いを定める。

「はぁ？
てめぇなんかが俺に勝てる訳ないだろうが！」

交差する二つの拳。
互いの狙いはたがわず命中した。相手の胸と僕の顔に。
僕はあまりの衝撃にその場に倒れてしまう。
薄れゆく視界のなか、チンピラが僕の方へと歩いてくる。

「はんっ、大したこたぁねぇな。あぁん？」

チンピラが革靴で頭を踏んでくる。

「ぐっ……」

踏まれる度にずきずきと頭が軋むように痛む。
視界が徐々に薄らいでいく。このままいけば気絶どころでは済まないだろう。
起き上がろうとしても力がでない。相手の力に押し勝つことができないんだ。

なんて情けないんだろう…
雄二は三対一でも果敢に挑んでいき、今も奮闘中だというのに僕は一人に対してもこのざまだ。僕が姫路さんを護るなんておこがましすぎたんだろうか。

「明久君を離してください！！」

姫路さんがチンピラに向かって灰皿を投げつける。
ダメだ、そんなことしちゃ…

「痛てぇじゃねえか！」

「きゃあ！」

ガシャーーーン

チンピラに突き飛ばされ姫路さんはテーブルを巻き込みながらとばされる。

『私が危ない時には助けてくださいね』

根本との勝負のとき、姫路さんが言った一言が脳裏によみがえる。

「許さない…」

「あん？吉井、誰をゆぶぉ！？」

すばやく起き上がり、顔面に拳をくれてやる。
正直、もう長くは立っていられない。いや、今すでに体力の限界を越えているんだと思う。だけど、僕がどうなろうとも約束は果たしてみせる。
バカでも約束くらい守ることはできるから。
それくらいしかしてあげられないから、僕は負ける訳にはいかないんだ！

「うおぉぉぉ！！」

「調子のんなよ！」

すぐに体勢を立て直し、繰り出されるチンピラの拳。

「邪魔なんだよ！」

それを身体を横に傾けてよけ、その反動で殴る。

「ぐっ！？」

与えられるダメージはこちらが受けるダメージと比べれば少ないものだが、決して０ではない。

「まだまだぁ！」

「うぉっ！？」

相手が体勢を立て直す前にもう一発くれてやる。

「くらえ！」

「がっ！？」

更にもう一発。さすがに堪えてきたのか、チンピラも肩で息をしている。

「まだだ！」

「ぐへっ！」

お次は体勢が崩れてて、顔面が近いのを利用し蹴りをいれる。不思議と気分が高揚してきているのが自分でもわかった。それは姫路さんを護っていることでヒーローになれたという高揚感なのからか、それとも別のものからきているのかはわからない。

「おいおい、さっきまでの威勢はどうしちまったんだよ？」

肘で鳩尾に攻撃をいれた後に更に蹴りあげる。

「ぐっ……」

さすがのチンピラも体力の限界がきたのか倒れこんだ。

「ははは、情けねぇな。おら、立ってみろよ」

襟元を掴みながら挑発する。

「やめろ…やめてくれ…」

「やめてくれだって？
さんざんやっておいてそりゃねえだろ」

「ひぃっ！」

僕が睨んだだけで他人が怯えるとは中々気分がすっきりする。

「でも助けてやってもいいぜ？」

「わかった。なんでもするから許してくれ！」

「そうか…」

安堵するチンピラに笑顔を向ける。

「じゃあ、死ね」

掴んだ襟元を勢いよく振り下げ、チンピラを叩きつける。
そのまま、僕がされたように頭を踏みつける。

「約束が…ちが…」

「違わねぇだろ？
お前がなんでもするつったから痛みつけてるんだろうが」

更に足に力をこめる。

「安心しろ。すぐに痛みも「明久君！」

突然姫路さんに呼ばれ、動きが止まる。

「明久君、もうやめてあげてください」

姫路さんがこちらに歩いてくる。

「もうこれ以上、明久君が人を痛みつけているところを見たくありません」

姫路さんの顔には涙が伝っていた。

「明久君がこんな心ない人たちと同じになるのは嫌です」

姫路さんが僕の手をとる。

「だから、もうやめましょう？」

「うん…」

チンピラの頭から足を離す。不思議とさっきまでの高揚感は薄れていた。

「野郎共撤収だ！」

足を離した瞬間、チンピラは血相を変えて逃げていった。

「「「アニキ、待ってくだせぇ！」」」

ご丁寧にものびていた他のチンピラも逃げていった。

「俺たちも帰るぞ」

霧島さんを背負った雄二が言う。美波はムッツリーニが支えている。

「そうだね。いつまでもここにいる意味もないし帰ろうか」

僕も姫路さんを背負うとカラオケボックスを後にした。

「ふぅ…姫路さん、怪我は…ないわけないよね…」

帰り道、背負っている姫路さんにたずねる。

いまさら背負ったぐらいで広まる噂もないし、気にすることはないだろう。

「ちょっとしたかすり傷ですから心配いりませんよ」

健気に笑う姫路さんを見て胸が痛む。

「でも僕なんかのせいで…」

「それは明久君にも言えることです。

明久君は何度も私を助けてくれたじゃないですか」

「僕は僕が好きでやってるからいいんだよ」

「なら私も好きでやってるからいいんです」
姫路さんはそう言いながらイタズラっぽく笑う。
「でもさ、僕は約束もしてるんだし…」
「約束なら私もしてるんですよ？」
「えっ？」
「明久君は覚えてないかもしれませんが私も約束したんです」
それは僕の失った記憶の中にあるんだろうか？
「明久君が明久君であれるようにって」
「それってどういう「ほら、もう学校に着きましたよ」
そう言うと姫路さんは僕の肩からおりる。
「私、着替えなきゃいけませんから先に行ってますね」
そう言うやいなや、姫路さんは校舎に向けて走っていってしまった。
「あっ…」
結局、『僕が僕でいられるように』ってなんだったんだろう？
なんだか意味深な感じのする言葉だけど、僕の中にその記憶はない。

僕が僕でいられるようにか……

雄二ＳＩＤＥ

俺たちが厨房に戻ると姫路は着替え終わっていた。

「姫路、ちょっと時間あるか？」

「次の試合が始まるまででしたらいいですよ」

「そうか、助かる。あの手の話だから控え室で話すぞ」

「はい」

俺と姫路は控え室に向かう。今日の明久の豹変ぶりに、異様な強さ。

俺の予想が正しければ明久は……

第２４問　僕と追憶とあの日の約束（後書き）

拙作での高城の役割はすでに決まっています。
原作ではどのようなキャラになるかわかりませんが…
次回もよろしくお願いします！

第２５問　僕と好敵手（ライバル）と準決勝（前書き）

クロさん、ＫＫＫさん、アルベルナさん、感想ありがとうございます！

第２５問　僕と好敵手（ライバル）と準決勝

明久ＳＩＤＥ

「さぁ、始まりました準決勝戦！」

誘拐事件の後、しばらくして準決勝戦が始まった。
もう一組の準決勝は僕たちが誘拐犯を凝らしめている間に行われたらしい。

「本日最後の試合の組み合わせはこの二組です！」

決勝戦は明日にやるため、今日の試合はこれが最後だ。

「赤ブロック、底辺と最上位の異色チーム。Ｆクラス坂本雄二＆Ａクラス霧島翔子ペア！」

司会者に促されて壇上に雄二と霧島さんがあがる。

「続きまして青ブロック、今大会でもラブパワーを存分に魅せつけてくれている我らが代表。Ｆクラス吉井明久＆Ｆクラス姫路瑞希ペア！」

「「「「いぇぇぇーーーい」」」」

三回戦からは一般公開をしている関係もあってか、観客が引き締めあっていた。
にしても、一般の観客も多くなって生徒の比率が相対的に低くなっ

てるはずなのに僕たちの時だけ相変わらずの盛り上がりようだ……
それを疑問に思い、観客席の方を見れば須川君たちが大きな旗を振っていた。
なになに『愛し合う二人に栄光を』って、はぁ……
相変わらずの須川君たちから目をそむけ、反対側の観客席を見ればムッツリーニがなにかを販売していた。しかも、そこを中心に僕たちへの傍迷惑な声援が聞こえてくる。
要するにムッツリーニは僕と姫路さんの写真を一般の客にも売っているのだ。
しかし、なぜ僕たちの写真を買ったくらいで須川君たちの仲間入りしてるのかがわからない。世の中は不条理だ……
しかし、幸いにも姫路さんは緊張からか周りの状況が目に入っていないようだ。

「姫路さん、ここが正念場だよ。がんばろう」

「はいっ！」

姫路さんの元気な返事を聞いて若干安堵する。少なからず、今は誘拐未遂のことは頭にないようだ。壇上に登りながらこれからのことを考える。

おそらく雄二は本気をだしてくる。それは霧島さんうんぬんではなく、雄二自身が楽しみたいからだろう。
僕より点数の高い雄二、姫路さんよりも順位の高い霧島さん。単純に考えれば勝てる相手じゃない。
だけど…だからといって退くわけにはいかない。

「明久、お前の全力を見せてみろ！」

「あぁ。雄二こそ手を抜かないでよね！」

互いの視線から火花を散らす。

「……瑞希には悪いけど、優勝はもらう」

「そうはさせません！

私にも勝たないといけない理由があるんです！」

普段の柔らかな印象とは真逆の目付きをした姫路さんを見て今一度決心を固める。姫路さんだって転校したくないと思ってくれているんだ。

決して僕といたいとかそんなんじゃないけど、僕もその他大勢の中にくらいは入れているはずだから……姫路さんの願いを叶えてあげたいから――――

「僕は…僕たちは絶対に負けたりしない」

誰に言うわけでもなく、自分に言い聞かせるように言う。

「では、両者召喚を」

司会者の指示を受けてみんなが身構える。これが実質上の決勝戦になるだろう。

「「「「サモン！！」」」」

Ｆクラス坂本雄二　総合科目１５４７点

Ａクラス霧島翔子　総合科目４６７３点

さすが霧島さんだ。４０００点代、それも後半となれば苦戦は必須だろう。
雄二も振り分け試験時よりも格段に成長している。だけどそれは僕も同じだ！

Ｆクラス吉井明久　総合科目１２８３点

Ｆクラス姫路瑞希　総合科目４６６４点

「なに、明久が１０００点越えに姫路も翔子とほぼ互角だと！？」

さすがの雄二も驚きを隠せないでいる。

「雄二、僕だっていつまでも変わらない訳じゃないんだ。
いや、むしろ変わっていかなきゃいけないんだ。僕自身のためにも僕の大事な人のためにも！」

「そうか…そうだよな。
お前はいつだって大事なやつのために一生懸命だ。自己保身のためには絶対にだせないような力を発揮するからな。その力の大きさ、俺は侮っちゃいないぜ。
かかってこい明久！」

正直、雄二がここまで僕を評価してくれているなんて思わなかった。
だけど、雄二が僕のことをどう思っていようとも僕のやることに変わりはない。

姫路さんのために勝つ。
ただ、それだけだ。

「さぁ、注目のライバル対決です。試合開始！」

試合開始の合図と共に雄二と霧島さんの召喚獣は左右に別れる。

「明久、先手はもらうぜ！」

別れた方向からして雄二の担当は僕だろう。
しかし、雄二のことだから真っ正直に突っ込んでくるとは思えない。
どうでる！？
明希も雄二を警戒してか終始目でおっている。

「姫路さん、霧島さんの相手がきつくなったら下がってね」

「はいっ！」

姫路さんの了承を確認して明希を雄二の召喚獣の方へと向かわせる。
雄二になにか策があるなら、それを潰すまでだ。

「俺と真っ向勝負か？
いい度胸じゃねぇか明久！」

互いに得物を構え、一撃必殺の構えをとる。
雄二の召喚獣と明希が交差するその瞬間、雄二は口元をにやけさせる。

「かかったな明久。翔子、今だ！」

「！？」

明希と雄二の召喚獣がぶつかり合う直前に、二人の間に霧島さんの召喚獣が割ってはいる。雄二の召喚獣に狙いを定めていた明希は当然のこと、あまりにも奇抜な作戦のため僕も反応が遅れてしまう。当然、その隙を霧島さんが見逃す筈もなく、明希の得物は大きく宙をまい、明久自身もその場に倒れこんでしまう。

Fクラス吉井明久　討死

最初に二手に別れたのは狙いがそれぞれ違うと思わせるため。本当の二人の狙いは最初から僕だったんだ。

「さすがだね雄二…」

フィードバックで痛む体を押さえ、言う。

「まさか…僕と同じことを考えてるなんて思わなかったよ」

「なにっ!?」

雄二が驚いて召喚獣に注意を向けるがもう遅い。すでに、雄二の召喚獣は姫路さんの召喚獣にやられているのだから。

Fクラス坂本雄二　討死

まさか雄二たちと作戦が被るとは思わなかった。
事前に姫路さんと打ち合わせた作戦はこうだ。
僕たちも最初から雄二に狙いを定めながらも僕だけが突っ込み、姫路さんは待ち構える体勢をとる。そして、僕と雄二がぶつかる瞬間に姫路さんが雄二を仕留めるといった具合だ。
二人とも回り込んだ方向が反対だったため、姫路さんと霧島さんの

召喚獣がぶつかり合うことはなかったのだ。

「すいません明久君。
本当は明久君を助けるべきだったんでしょうけど、できませんでした…」

「大丈夫だよ姫路さん。もともとこういう作戦なんだから気にしないで。
それよりも今は霧島さんと戦うことだけに集中して」

点数だけで見れば僅かに姫路さんが劣っている。どちらも召喚獣の操作になれていない場合、その僅かな差が致命的な差となる。

そう、召喚獣の操作に慣れていないのなら…

「いきます！」

「……負けない！」

二人の召喚獣がぶつかり合う。点数に差があるといっても誤差の範囲だ。一方的に姫路さんが押されるということはない。

ガチッ！

ガチャ！

ガキィィィン！

押しきることができないと判断すると互いに小さく合計しながらせめぎあっている。しかし、姫路さんの召喚獣の武器が大剣というこ

ともあってか攻撃のでが半歩遅い。

「姫路さん、いったん距離をとって！」

「はいっ！」

姫路さんの召喚獣がバックステップで距離をとる。

「させるな翔子！」

「うんっ！」

それを追うように霧島さんの召喚獣が突っ込んでくる。

「今だ！」

僕の合図と共に姫路さんの召喚獣の腕輪が光りだす。常時ならともかく、敵を追っているときなら熱線の広大な射程範囲から逃れることはできない。

「うっ…」

回避行動をとりながらの熱線。これだけの芸当を姫路さんができるようになったのも雄二が提案した模擬試召戦争のおかげだ。常に要所で活躍する姫路さんに対して、霧島さんは代表という立場もあって場馴れはしていない。

それ故、技術面なら霧島さんよりも姫路さんは上手なのだ。

Ａクラス霧島翔子　総合科目２９７０点

さすがに一発で仕留めることはできないか……

「翔子すまない。俺の判断ミスだ」

「……これくらい大丈夫。雄二は気にしないで」

現時点では姫路さんが勝っているが、これ以上の小細工は通用しないだろう。
それに雄二がなにか奇策を用いてくる可能性も充分にある。

「姫路さん、これからは深追いせず本当に狙える時だけ狙っていこう」

「坂本君がなにか関係してるんですか？」

「うん。雄二のことだからすべての手を晒してるとは考えづらいんだ」

「わかりました。慎重にいきますね」

雄二ＳＩＤＥ

明久がやられた後は姫路のアドバイスにまわるのは計算済みだ。
元々は俺もアドバイスにまわる気なんてなかったが、過ぎたことを気にしても仕方ない。それよりもどうやって明久を出し抜くかだな。

「翔子、慎重にいけよ。明久が突拍子もない作戦を用意してる可能性もある」

「……わかった」

さぁ、どうでる明久。

……ん？

見ると、明久も姫路になにかを耳打ちしてきた。明久の困惑した顔からして作戦の実行のアドバイスではないだろう。となると、なんだ？

さすがに公然の面前で恋色沙汰は……あいつらならありえるな。

互いのことになると周りが見えなくなる。まったく…いいんだか、悪いんだか…

っと、そんなことを考えてる場合じゃないな。明久がなにを考えているかだ。

……まさかはと思うが、こちらの奇策に警戒してるのか？

もしそうなら好都合だ。お生憎だが、こちらの策は尽きている。

だが、相手が勘違いをしているなら利用しない理由がない。

「翔子、一回だけ姫路に仕掛けるふりをしてくれ。あくまでふりだぞ」

「……わかった」

俺の指示を受けて翔子が召喚獣を突っ込ませる。

それに対して姫路は一歩早めに回避行動をとり、形だけの攻撃をかわす。

これでわかった。明久たちは俺にまだ策が残っていると勘違いして

いる。

この勝負、もらった！

第２６問　俺と好敵手（ライバル）と準決勝（前書き）

今回は少し短めですがどうぞ！

第２６問　俺と好敵手（ライバル）と準決勝

明久ＳＩＤＥ

おかしい。今の霧島さんの攻撃は大振り過ぎた気がする。
いくら召喚獣の操作に慣れていないとしても不自然すぎる。
まるで避けられるために攻撃したみたいだ。
しかし、そんな攻撃になんの意味がある？
人間相手ならまだしも召喚獣には体力の消耗の概念は存在しないから違う。
雄二、なにを狙っているんだ…？

「姫路さん、気をつけて。どんな手でくるかわからない」

「はい…」

姫路さんはそう言いながら、もう何度目かになる回避をする。
やはり、大振りに繰り出される霧島さんの攻撃。一歩早く避ける姫路さん。これでは埒があかない。

「姫路さん、一度仕掛けよう」

「大丈夫なんですか？」

「いや、あくまで仕掛けるだけで追撃はしない。一度、攻撃するだけだ」

「わかりました」

霧島さんの召喚獣が再度、攻撃を仕掛けてくる。

「今だ姫路さん！」

「はいっ！」

刀を大振りに振り上げた霧島さんの召喚獣の懐に姫路さんの召喚獣が入り込む。そして、そのままの勢いで大剣を突き刺すべく構える。

しかし、あれ程大きく振り上げていたのにも関わらず霧島さんの召喚獣は素早く距離をとる。当然ながら姫路さんの攻撃は失敗に終わる。

なるほど、攻撃よりも回避を優先しているというわけか。

と、なると初めから攻撃を当てるつもりはない。

あくまでも攻撃の姿勢を見せることに主軸をおいているのか？

でも、それになんの意味がある？

おそらく雄二がなんらかの策に……そうか！

雄二は策なんかありゃしないんだ！

だから、こちらを出方をうかがいながらも牽制できる攻撃のフリを繰り返してきているんだ。

「姫路さん、早めにしとめよう」

雄二が僕にも策がないことを気づく前に…

「勝負にでるんですか？」

「うん。大丈夫、絶対勝てるから」

「わかりました。私、明久君を信じてますから」

そう言いながら姫路さんは召喚獣をトップスピードで走らせる。
僕の見立てが正しければそろそろ……

雄二ＳＩＤＥ

ちっ、明久の野郎勝負にでてきたか。
なにか策があるのか、それとも硬直状態に痺れをきらしたか？
いや、策があるんだろう。
あいつにとっては人生がかかっている勝負だ。
それを自分から棒に振るうほどのバカじゃない。

「翔子、迎え撃て！」

「うんっ！」

翔子の召喚獣が姫路を迎え撃つために飛び出す。

「！？」

翔子に言ってから明久の目を見て驚くがもう遅い。
あいつの目は勝利を確信していた。
揺るぎない勝利をあいつのために、姫路のためにも。

悪い翔子…
たぶんこの勝負、俺たちの負けだ。

お前の行きたがってた所にも連れていってやれない俺を許してくれ。
お前に迷惑ばかりかけている身勝手な俺を許してくれ。
昔から引きずっている胸の内すら話せない俺を許してくれ、翔子……

翔子と姫路の召喚獣が斬り結んだ瞬間、翔子の召喚獣の頭上に何かが降ってきた。
あれは……明希の木刀…
そうか、明希が翔子の召喚獣にやられた時にとばされてたもんな。
いや、わざと手放したに近いのか…
この瞬間に訪れる姫路のために。不確定な可能性しかないのに迷わずか…

翔子の召喚獣に木刀が直撃する。それにより、一瞬怯む召喚獣。
ダメージは僅か２３点だが充分だ。
姫路が渾身の一撃を放つための時間稼ぎには…

「勝者、吉井明久＆姫路瑞希ペア！」

司会者の言葉も早々に壇上を降りる。正直、翔子に合わせる顔もない。

「……雄二」

だけど、お前はなにも疑わず俺についてくる。
なにも知らず俺についてくる。
俺はどうすればいい？
こんなにも俺の事を好いてくれてる相手になにをしてやればいい？
なにをしてやれば…どんな言葉をかけてやればお前は喜ぶんだ？

「すまない…翔子」

ただ、そう言うしかなかった。

「……ううん、私は平気。だって、雄二が私と一緒に頑張ってくれた。それがとても嬉しいから」

「翔子…」

なにか少し、ほんの少しだけど吹っ切れた気がした。

翔子…お前がいてくれてよかったよ

そんなことは死んでも言ってやらないが、これくらいは言わせてほしい。

「ありがとな翔子」

「???」

わからなくていいんだ。

まだ俺はお前に正直な気持ちを話せる程の勇気もないから。

だけど、なにかお礼くらいはしてやろう。

そうだな、自腹で連れてってやるか。如月ハイランドに…

第２６問　俺と好敵手（ライバル）と準決勝（後書き）

どうしよう…
雄二が真っ当人すぎる…
こいつ、本当に雄二か？
と、書いた本人まで疑問に思っています。
まぁ、タグにみんな結構まともとありますし気にしないようにしましょう。
では、次回もよろしくお願いします！

第２７問　僕と常夏と黒金の腕輪

明久ＳＩＤＥ

「明久、ちょっとこい」

「ん？なに雄二？」

喫茶店の片付けをしている最中に雄二に呼ばれて振り向く。
作業中に呼ぶ程なのだから重要な用事なのだろう。

「お前、姫路たちを誘拐したチンピラの顔覚えているか？」

「姫路さんたちを誘拐したチンピラの顔？
そんなの忘れるわけが……」

「忘れたんだな」

「うん…」

おかしい…
あんなにも憎いと思ったやつなのに顔すら思い出せないなんて…

「じゃあ、お前がどうやって最後のチンピラを倒したか覚えているか？」

「えっと…最初のチンピラは股間を蹴り上げて、次がムッツリーニが倒してくれた。最後は……」

あれ？
またここだけ覚えてないや…

「（やっぱり、そういうことか…）」

「雄二、どうしたの？」

なにかを呟いた雄二に疑問をもち、たずねる。

「いや、なんでもない。片付けの続きやるぞ」

そう言って、雄二は厨房の片付けへと戻っていった。

「なんでもないならいいや」

正直な話、雄二だけに構っていて片付けを疎かにする訳にもいかないので話早々に片付けを再開する。
それにしても、なんで記憶が部分的に抜けてるんだろう…

「……吉井」

「なにって、霧島さん！？どうしたの？」

いつのまにか僕の横にいた霧島さんにびっくりしながらも対応する。

「……雄二に話がある。吉井と瑞希も来て」

「うん。姫路さんは厨房の片付けをやってるし、雄二もさっき厨房にいったから行こうか」

「……わかった」

～厨房～

「雄二ー！奥さんが来たよ！」

厨房に入るやいなや、大声で雄二を呼ぶ。

「誰が翔子の夫だ！」

なぜだか控え室から出てきた雄二が叫ぶ。

「いや、誰も霧島さんなんて言ってないよ。ぷぷっ、自覚あるんだね」

「……自覚もなにも私は雄二のお嫁さん」

「明久、てめえ…
そっちがその気ならこっちにも考えがあるからな。
姫路ー！明久からデーあぐぐぐぐ」

なにやら雄二が、僕の人生にピリオドを打ちかねないことを言い出そうとしたので、咄嗟に口を抑える。

「坂本君、明久君がどうかしたんですか？」

片付けということもあってウェディングドレスから制服に着替えてしまっている姫路さんも奥からやって来た。
正直な話、とても惜しいことだ。できれば下校中でもウェディングドレスを……間違いなく変な噂が流れるだろう。須川たちの手によって……

「姫路さん、なんでもないんだ。それより霧島さん、用事ってなに？」

変なことを口走らないように雄二の口を押さえながら話題をふる。

「……うん。みんなにこれを見てほしい」

そう言って、霧島さんはビデオカメラを取り出す。

「……愛子が面白がって撮ってた」

愛子って言えば僕とムッツリーニを死の瀬戸際まで追い詰めた工藤さんのことだよね。あの人は本当になにやってるんだろう…

「翔子、なんだこれは…」

いつのまにか僕の手から逃れていた雄二が映像を見ながら言う。
僕も気になって覗き込むと、そこには二人組の男子生徒がリンチ…
……いや、虐殺されている映像が流れていた。

「なにこれ……」

「……巻き戻すの忘れてた」

そうだよね。いきなりこんなもの見せられても困るだけだもん…
ほっと安堵していると、雄二がいきなり霧島さんの腕を掴みだした。

「……雄二、嬉しい」

頬を染めながら言う霧島さんとは対照的に、雄二は険しい顔つきをしている。

「翔子、巻き戻しのボタンはどれだかわかってるな？」

いったい雄二はなにを言っているのやら……
そんなの僕だってわかるよ。

「……わかってる。ここを押す」

そう言って、霧島さんは赤いドクロマークのボタンを指差す。

「ちっともわかってねえじゃねぇか！！
どう考えてもこれから巻き戻しは想像できないだろ！！」

雄二の叫びももっともだ。
まさか霧島さんがここまで機械音痴だとは思わなかった…

「……輪廻転生で生き返る。そこから転じてやり直すって意味の巻き戻し」

「そんなわけあるか！！」

ある意味すごい解釈だ。

さすが、頭のいい人は考えることが違う。

「巻き戻しはここのボタンを押すんだ」

雄二がビデオカメラを持ちながら霧島さんに説明している。手馴れているところを見ると、前にも似たようなことがあったのだろう。

「結局、あのドクロのボタンはなんだったんでしょうね？」

「さぁ？

少なからず、いいことがおきるとは考えづらいよ…」

「ですよね…」

本当になんのためにあんなボタンが付いているんだろう…

「明久、姫路、巻き戻しが完了したぞ」

呆れている僕と姫路さんに作業を完了させた雄二が呼び掛けてくる。

僕と姫路さんも画面に食い入るように見つめる。

映し出されているのはＡクラスのメイド喫茶のようだ。

「あっ、誰か入ってきたよ」

「常夏コンビだな」

「常夏？」

雄二の意味不明な言葉に首を傾げる。

「あぁ、明久は知らないんだったな。
モヒカンが常村、ご存じ坊主が夏川。そんで二人の頭文字を合わせて常夏だ」

まさか当の本人はこんな風に呼ばれてるなんて思ってもないだろう…
でも――――

「そんなこと考えられるなんて暇なやつだね」

「殴るぞ」

雄二が拳を握りしめて睨んでくる。

「……雄二、暴力はダメ」

「明久君も坂本君を貶しちゃいけません。
坂本君はみんなが覚えやすいように考えてくれたんですよ」

「「ごめんなさい」」

どうも僕らは女性陣に弱い気がする。
確かに僕も悪かっただろうけど、雄二がみんなのことを考えて常夏と名付けたというところだけは否定したい。

「おい明久、画面に集中しろ」

「あっ、ごめんごめん」

再び画面に集中する。
常夏コンビは部屋の中心部に近い席を陣取ると、テーブルに足を掛

けながら深々と椅子に腰かけた。

『あー、やっぱAクラスの喫茶店の方がいいな』

モヒカンの常村がわざと大きな声で言う。

『まったくだぜ。Fクラスのウェディング喫茶なんてきたねぇしな』

あまりにも大きな常夏の話し声のせいで、周りの幾人かの客がざわめきたっている。あいつら、どこまで僕たちの邪魔をすれば気が済むんだ！

『飯は不味いしきたねぇしで最悪だな』

『それにウェイターの野郎だってどべらしぇば！？』

なにか僕と悪口を言おうとした夏川がものすごい勢いで壁に叩きつけられる。（本日2回目）

「てめぇ、なにしやがる！」

常村が夏川をぶっ飛ばした生徒に掴みかかる。

「なにしやがるはこっちの台詞だ！
お前ら、どこの料理が不味いって？どこが汚いって？で、ウェイターになんか文句あるのか！？」

誰だかも知らない生徒が僕たちのために怒ってくれている…
文月学園にはこんなにも優しい人がいたのか…
最近、周りからある意味で陰湿な嫌がらせを受けていたので思わず

感動してしまった。

『はんっ、そんなのFクラぐぼるばぁ！？』

次は別の生徒が常村を殴り飛ばす。

『もう我慢ならねえ！』

『俺もだ！』

『Fクラスのウェディング喫茶のどこが悪いんだよ！』

次々と生徒が立ち上がって常夏を取り囲む。

その中にはFクラスの生徒は誰一人としていない。

それなのに彼らは僕たちのために――

『『『『吉井と姫路さんの邪魔してんじゃねぇー！！！』』』』

一斉にみんなが常夏を踏んだり殴ったり、掴みあげて叩き落としたりと袋叩きにし始めた。

うん、やっぱり文月学園の生徒は私利私欲で動いてるみたいだ。

少しでも期待した僕がバカだったと思うよ…本当に……

僕が呆れていると騒ぎを聞き付けてか執事服姿の久保君がやって来た。

『これはなんの騒ぎだい？』

久保君の声に一人の生徒が振り向く。

『これは久保軍師。私たちは数刻前に我ら、異端審問会に対する反

逆者を発見いたしましたので処分をくだしている所存でございます』

久保軍師？
なんのことだろうか？
それに異端審問会って男女の仲を引き裂く会じゃなかったっけ！？

『具体的にはどのようなことをしたんだね？』

さすが、久保君は冷静だなぁ…

『はい。あそこの変態髪型二人組はＦクラスおよび、我らが全力でサポートしております二人の悪口『死刑』

ちっとも冷静じゃなかった……
というかなに…久保君もそっち側の人間なの？
僕には味方はいないの！？

『具体的には体育館裏で油を染み込ませた十字架に貼り付け、下から火で炙る。その後、髪型でどちらか判断がつかなくなったら腕と足を拘束して船越女史にプレゼントしてあげよう。ちなみに身ぐるみはちゃんと剥いでおくんだよ』

そう言って笑顔で去っていく鬼……
まさか久保君があんなに残忍な性格だとは思わなかった…

『さぁ、立ち上がれ下衆どもが！』

何人かの男子生徒が瀕死状態（もう死んでるかも…）の常夏を担いでＡクラスを出ていった。ここからが本当の地獄だ…

「……ビデオはここで終了。
ちなみに利光がお客になにか吹き込んでいたから評判は大丈夫」
恐るべし久保君…

「翔子、なんでこれを俺たちに見せに来たんだ？」
雄二の疑問ももっともだ。はっきり言って僕たちにこれといった収穫はない。

「……愛子から反応が気になるから見せてほしいって頼まれた」
本当に工藤さんはなにを考えているんだろう…
ますます彼女がわからなくなった…
もしかして僕たちが真性のドSだととでも思っているのだろうか？
当然だが僕たちにはそんな趣味はないし、姫路さんに至っては怖かったのか頭を抱えてうつむいてしまっている。
小動物みたいでかわいい…

「ったく、いつまで私を待たせるんだい」
姫路さんに見とれていた僕の後ろからしわがれた老婆の声が聞こえてきた。
振り向けば、なぜだかババァが控え室から顔を覗かせている。
姫路さんみたいなかわいい人ならまだしも、ババァがやると恐怖絵面だ…

「あぁ、すまねえなババァ。今からそっちに行くよ」
そう言って雄二はババァのいる控え室に入っていった。

いったい、なんの話があるんだろう？

「なんでも坂本君は学園長先生と優勝景品の一つである黒金の腕輪について話があるらしいですよ」

僕の疑問に姫路さんが助け船をだしてくれる。

「そうなんだ…」

なぜだろう。とても嫌な予感がする。黒金の腕輪…

明日、試合が始まる前に雄二に聞いてみよう。

覚えておくためにも夜、明希に頼んでおかないといけないな。

そう考え、帰り支度を始める。

「姫路さん、帰ろうか」

「はいっ」

第２８問　僕と奇数といつかの言葉（前書き）

きるぐまーさん、感想ありがとうございました！

第２８問　僕と奇数といつかの言葉

明久ＳＩＤＥ

「みんなおはよ…」

「おはようございます…」

姫路さんと共にくまのはった目下をこすりながら、教室に入る。

「よう明久に姫路…って、二人ともすごいくまだな…」

「ごめん、昨日徹夜だったからさ…」

今日が決勝戦ということもあって、昨日は徹夜で姫路さんと明希に勉強を教えてもらっていたのだ。

「そうか…
試合が始まるのは午後だから寝たらどうだ？」

「でもお店の方もありますし…」

姫路さんも眠たそうに目をこすりながら言う。

「大丈夫よ。店の方はウチらでなんとかしとくからさ」

「うむ、わしらに任しとくのじゃ」

「……今は休養が必要」

島田さんに秀吉、ムッツリーニも勧めてくる。

「じゃあ休ませてもらうよ…」

本来なら断るべきなのだろうが、今は眠気に勝てそうにない。

「では、みんなお願いしますね…」

姫路さんもみんなの厚意に甘えるようだ。

さて、どこで寝ようかな？

なるべく人が来ない場所…例えば屋上とかかな。

～屋上～

どうしてこうなった！？

なんでこうなった！？

なんで僕の腕を枕にして姫路さんは寝てるんだ！？

顔が近いし、柔らかいものが当たってる。

なにより僕の理性がやばい！

落ち着け僕…

落ち着いて素数を数えるんだ。1…3…5…7…9…11…13……

『そりゃ奇数だ』

なにキスだって！？

おのれ…僕の中の悪魔はそうやって僕を不幸のドン底に陥れるつもりだな。

『誰もキスだなんて言ってねえよ』

お前の言うことなんて信じられるか！
僕だって男なんだぞ。その気になれば眠ってる女の子の唇を奪うくらい……

『奪うくらい、なんだよ？』

うっ、奪うくらい……
寝てる姫路さんにキスするくらい……

『できないんだろ？諦めろよ』

うん…
でも君も人が悪いよ。僕の理性がとびそうになっている時にキスだなんて。

『俺は奇数って言ったんだけどな…』

あっ、そうなんだ…
緊張して損したよ…
……って、あれは素数じゃないの？

『あぁ。あれは奇数だぞ…』

そうなんだ…

『そんなんで午後大丈夫かよ…』

あははは…善処するよ。

『さて、もう寝るぞ』

そうだね。

心を平静に保って平常心でいれば大丈夫だよね。

『寝込みを襲いましょう』

て、天使!?

出てきたと思ったら急になにを言い出すのさ!

『だって、こんなチャンスめったにないよ。さぁ、勇気を振り絞って!』

そんな勇気いらないよ!

そんなことしたら姫路さんに嫌われちゃうじゃないか!

『嫌われはしないと思うが、寝込みを襲うのは賛成できねえな』

いや、嫌われちゃうからね!

『まったく意気地無しだなぁ~』

『人としての倫理に欠けてるだけだろうが!』

悪魔の言う通りだよ!

……って、なんで悪魔が正論言ってるんだろう…

『雄二だって想うように行動しろって言ってたでしょ！』

『どう考えてもそういう意味じゃねえよ！バカ！』

『誰がバカだ！』

『お前だ！』

『なにおー！やるか！？』

『やってやるぜ！』

えっ？

ちょっとなに喧嘩始めてるのさ！

って、お互いに頭突きをかますなぁぁぁ！！

～正午～

「ただいま…」

結局、天使と悪魔が互いに頭突きをしあったせいで僕は気絶してしまった。

一応、そのおかげで睡眠はとれたのだが、頭がじんじんと痛い…

「今、戻りました♪」

僕とは対照的に睡眠をとって元気な姫路さん。
彼女は僕を起こしてくれたのだから僕より早く起きていたんだろうけど、起きた時にびっくりしなかったのだろうか？
というか、なんで姫路さんは僕の腕で寝てたんだっけ？
確か……

～数時間前～

「明久君はどこで休憩しますか？」

廊下を歩いている僕に隣を歩く姫路さんがたずねてくる。

「やっぱり屋上かな？
あそこなら他の人の邪魔にならないだろうしね」

さすがに教室で寝ててはみんなの邪魔になってしまう。

「そうですね。私も屋上で休憩してもいいですか？」

「えっ…？」

姫路さんと同じ場所で二人っきり…
しかも今日は清涼祭だから、屋上に来る人なんていない。

「迷惑でしたか…？」

「ち、ちっともぜんぜん迷惑じゃないよ」

「ありがとうございますね、明久君」

別にお礼を言われる様なことはしてないんだけどなぁ…

って、そんなことより、もしかしたらなにかラッキーイベントがおきるかもしれない。気を引き締めていかなくちゃ！

ガチャ

屋上の扉を開け、敷居をまたぐ。

「きゃぁ！」

「姫路さん！」

敷居につまずいてバランスを崩した姫路さんをとっさに支える。

「っと、うわぁ！」（バタンッ！）

しかし、衝撃を殺しきれずに僕まで転倒してしまった。

しかも姫路さんは倒れたというのにすやすやと寝息をたててしまっているのだ。教えてもらった僕だって疲れているのだから、教えてくれた姫路さんはもっと疲れているだろう。

自信過剰かもしれないけど、僕の腕を枕にして寝ている姫路さんの寝顔は幸せそうだったから起こすのもはばかられた。

だから今はこのままでいい。僕が姫路さんの小さな幸せでも護れるのなら…

それから僕も少しだけ眠りについて後に起きて、混乱してたんだった…

～現在～

「じゃあ私は美波ちゃんとお話してきますね」

そう言って去っていく姫路さんの後ろ姿を見て思う。もしかして僕は姫路さんに男として認識されていないのだろうか？
だから安心して寝ちゃったし、起きた時にもなにも思われなかったんだろうか？
だとしたら相当ショックな話だ。
確かに信頼されてはいるのかもしれないが、なんというか腑に落ちない部分がある。

「よう、明久。売上貢献ありがとさん」

独りでに落ち込んでいるところに雄二がやって来る。

「売上貢献？」

「……これ」

そう言ってムッツリーニはアルバムを見せてくる。
なになに『夢の中で会いましょう』？

「なにこれ？」

「……見てみるといい」

ムッツリーニからアルバムを受けとると、中身を開く。

その中には僕と姫路さんの寝ている写真（だいたいが個別に撮られている）が大量にあった。
もちろん、さっきの屋上のやつも収録済みだ…

「またこのパターンかぁぁぁ！！」

開いている窓からおもいっきりアルバムを投げ捨てる。

「……もったいない」

「もったいないなんてことないよ！！」

ムッツリーニには肖像権という言葉を教えた方がいいかもしれない。

「まぁ明久、そんなに怒るな。結構利益あげてるんだぜ？」

「いくら利益が上がったって――」

そこまで言って気づく。
利益があがれば、その分だけ設備を良くできる。
設備が良ければ良いほど、姫路さんの転校する確率は下がるだろう。

「しょうがないなぁ…
で、どれだけの利益額が出たの？」

「……これ」

ムッツリーニから集計表が手渡される。

清涼祭限定写真集（完売）　￥５００×５００　計２５００００

緊急生産新婚写真集（完売）　￥６００×３００　計１８００００
夢の中で会いましょう（完売）　￥１００×４００　計４００００
合計４７００００

高校生が一日＋半日で稼ぐレベルの額じゃない。
大人でも犯罪でも犯さない限り、こうはいかないだろう……
いや、実際は肖像権侵害で立派な犯罪なんだけどね…

「……群がるアリ」

ムッツリーニが窓の外を見てポツリと呟く。

「急にどうしたのさ」

疑問に思いながら、窓の外を見てみる。
そこにはムッツリーニの言う通り、たくさんの人がそれはアリのように群がっていた。

「なにあれ…」

「明久がさっき投げたやつに群がってるんだろ？
生産ロットが１００冊と希少品だからな」

僕がさっき投げたもの＝『夢の中で会いましょう』（ムッツリ商会発行）
もうやだ、この学校……

「明久、へこんでるところ悪いがお前に話がある」

「なに…？」

へこんでるのがわかってるなら下手な事は言わないでほしい。

「優勝商品の腕輪だが、それは使用せずにババァに渡してくれ」

腕輪と言えば、昨日雄二がババァと話していたやつだ。

今朝に聞こうと思っていたのだが、すっかり忘れていたんだった。

「なんで使っちゃいけないのさ」

優勝商品なのだから、一回でいいから使ってみたいものだ。

「使わないで持ってきてくれれば、ムッツリーニの売上分も設備向上にまわしていいって話だぞ？」

「よし、使わずにババァに渡そう」

肖像権を無視してあげた売上でも姫路さんのために使えるというなら話は別だ。腕輪と姫路さん、どちらをとるかなんて聞くまでもないんだし。

「それと決勝の相手は例の常夏コンビだからな」

「そうなんだ。三年生なのによくそんな暇があったねぇ…」

受験勉強などはしないのだろうか？

「まっ、その事には大方めどがついてるがな」

「えっ、そうなの？」

「あぁ。昨日、秀吉に持っていかせた手紙の後すぐにババァからコンタクトがあったからな。
それで聞いたんだが、あいつらが優勝して腕輪を使えば推薦書を教頭に書いてもらえるらしい。教頭はババァの失脚を企んでるから万々歳ってわけだ」

秀吉に持っていかせた手紙というのは、あの誘拐事件のときのやつだろう。
それにしても常夏も教頭もそんなことを企んでいたなんて許せない。

「明久、見た目がバカでも本気でかかれよ」

「もちろん。そのために徹夜までしてきたんだからさ」

相手が常夏ならばちょうどいい。
もう僕らの邪魔ができないようなしてやる。

「明久君、そろそろ試合が始まりますよ」

「あっ、姫路さん」

いつの間にか戻ってきていた姫路さんの方に振り向く。

「って、ことだから雄二にムッツリーニ、行ってくるね」

「頑張れよ！」

「……応援してる」

「当然、優勝してくるよ」

二人の激励を受けて気を入れ直す。

「姫路さん、行こうか」

「はいっ！がんばりましょうね」

姫路さんと共に厨房を出て試合会場を目指す。

～試合会場～

決勝戦と言うことだけあって観客は超満員だ。
観客からの熱気に包まれながら僕の闘うべき相手が壇上に登ってくるのを待つ。

「赤ブロック、３年Ａクラス常村勇作＆夏川俊平ペア！」

常村と夏川…
雄二の言っていた通りだ。

「明久君、あの二人って…」

姫路さんが怯えたように言う。
接客中にあんなことをされればトラウマにもなるだろう。

「大丈夫。姫路さんは僕が護るから」

姫路さんの小さな手をぎゅっと握る。

「明久君…」

本当は僕が護られるになるんだろうけど、少しでも姫路さんの不安を拭いさってあげれればそれでいい。

「安心して。バカでも約束ぐらいは守るからさ」

笑顔で姫路さんに笑いかける。

「明久君、もう大丈夫です。
私には明久君がいますから平気です」

そう言って笑顔を返してくれる姫路さんを見て安心する。
だけど、あんなことを言われると少し恥ずかしい気もする。
恥ずかしいと言えば、今日は野次がちっとも飛んでこないなぁ。
疑問に思い、周りを見渡せばみんな固唾をのんで見守っていた。

カタッカタッカタッカタ

常夏コンビが壇上に登ってくる。
確か、あっちの坊主が夏川で、もう片方の坊主が……って、あれ？
モヒカンの常村がいない…

「司会者さん、夏川が二人に増えてまーす」

手を上げて司会者に抗議する。

「本当ですね。モヒカンの常村選手がおらず、坊主の夏川選手が二人に増えています。
いったい、どのようなマジックを使ったんですか？」

司会者が夏川Ｂにマイクを向ける。

「ふざけんじゃねぇ！
俺は常村だ！常村勇作だ！！」

マイクをぶんどり、自称常村である夏川Ｂが叫ぶ。

「整形ですか？」

司会者がサブマイクを取りだし、たずねる。

「誰が髪型だけの整形なんかするか！！
昨日、覆面の集団に十字架に貼り付けられて燃やされたんだよ！！」

あっ、久保君（鬼）が異端審問会のみんなに命令していたやつだ。
まさか本当にやるとは思わなかったよ……

「どうやら常村選手は相当の妄想壁のようです」

「誰が妄想壁だ！」

「今のご時世、それも文化祭中にそんな事があるわけないじゃない

ですか」

司会者の言うことも、もっともだが文月学園にその常識は通用しない。

「嘘じゃねえんだって！
本当にあったことだし、あの後なんて……」

常村もどきがぶるぶると震えだした。
確か、久保君の言った通りだとあの二人は船越先生に差し出されているはずだ。
良かったね、数学の成績は上がったはずだよ…

「えー、いつまでも妄想変質者と話していてもしょうがないので目の保養のためにも、吉井&姫路ペアにも伺ってみましょう」

この司会者は昨日と同じノリだった…

「ずばり、優勝する自信はおありですか？」

司会者からマイクが手渡される。

「はい絶対に勝ってみせます」

なるべく司会者に変なことを言われないように無難な言葉を選ぶ。

「はんっ、二年のそれもFクラスなんかが俺たちに勝てるわけないだろ？」

本物の夏川が挑発するように言う。

「確かに学年最底辺のFクラスとAクラスの対決ですが、先生方はどう思いますか？」

司会者が鉄人と高橋先生にマイクを向ける。

「単純に考えればFクラスコンビに勝ち目はないが、なにかのために一生懸命になれるやつの強さを実感するいい機会になるかもしれんなぁ」

そう言って鉄人は一度、僕の方を見る。

「そうですね。しかし特記すべき部分はFクラスが決勝まで不正もなしに勝ち上がってきたことでしょう。これはFクラスに対する認識を改める必要があるかもしれませんね」

もし、姫路さんのお父さんがこの会場にいれば今の高橋先生の言葉は効果絶大だろう。

「お二人ともありがとうございました。では、そろそろメインイベントといきましょう。両者召喚を」

司会者の合図を受けて、姫路さんの手を再度握り直す。

「「「「サモン！！」」」」

姫路さんと繋いだ手を振り上げ、召喚獣を召喚する。

Aクラス常村勇作　日本史２０９点

Ａクラス夏川俊平　日本史１９７点

向こうの装備はオードソックスな剣と鎧だが、高得点らしく質はかなりのものだ。

「どうした、俺たちの点数を見て腰がひけたか？」

「無理もねえな。Ｆクラスじゃ、そこの嬢ちゃん以外からは見れない点数だからな」

二人が下卑た笑い声をあげる。

確かにこいつらの点数は立派だ。

僕では届かなかった点数かもしれない。

だけど、それだからといって僕たちの一度きりの高校二年生の文化祭を……来年はＡクラスに行ってしまうであろう姫路さんとの文化祭をめちゃくちゃにしていいわけがない！

自分たちが楽に進学したいためにこんなことをするやつらのせいで、姫路さんの転校を阻止できないなんてバカげてる。

「前にある人が言ったんだ」

「晒し者から逃げる方法でも教えてくれたのか？」

Ａクラスとの試召戦争の時に姫路さんが言った言葉が脳裏に蘇る。

「『自分のために頑張ってくれる人の力に、その人に少しでも近づきたい。そう想えばがんばれる』って」

「（その言葉…）」

そう呟いた姫路さんがはっとなったように僕の方を見る。
僕はそれにただ笑い返すだけだ。

「はぁ？なに言ってんだ？」

たぶん、こいつらなんかには一生わからないだろう。
わかってほしくもない。こんな最低なやつらに姫路さんがくれた大切な言葉の意味を。

「僕も最近、心からそう思った」

ディスプレイに僕たちの点数が表示される。

Ｆクラス姫路瑞希　日本史３７２点
Ｆクラス吉井明久　日本史３０４点

「「なっ…」」

常夏が二人とも唖然としている。
ありがとう…姫路さん、明希。
二人の気持ちを無駄にしないためにも――――

「あんたらは小細工なしでぶっ飛ばしてやる！！」

第２８問　僕と奇数といつかの言葉（後書き）

ついに清涼祭編も佳境！？
次回もよろしくお願いします！

第２９問　僕と決勝といつものお礼

明久ＳＩＤＥ

「お前…試召戦争の時は１００点もなかったくせに！」

夏川の召喚獣の攻撃を楽によけると明希は攻撃の体勢に入る。

「実際、１週間前ぐらいはその程度でしたよ」

そこから蹴りのフェイントを入れ、相手をこけさせる。

「だけど、僕は…僕たちは負けるわけにはいかないんだ！！」

相手の足が地面に着く前に木刀で斬り払う。

ずどぉぉぉーん！！

これが僕と明希で考えた共同攻撃。

回避や足掛けといった小技は僕が担当し、相手にダメージを与えることを主軸にした攻撃は明希自身が受け持つ。

これは中々利に叶った行動だ。

主な理由としては、普段から僕の戦い方は小技中心だからやり慣れている。そして明希は直に相手との間合いがわかるため、大きな一撃も当てやすい。

「夏川！」

夏川の召喚獣が飛ばされたことにより常村の注意がそれる。

「隙ありです！」

召喚獣の身の丈以上もある大剣が常村の召喚獣に叩きつけられる。

「なにっ！？」

自身の召喚獣までもが飛ばされたことに常村が驚く。

「ちっ夏川、例の作戦でいくぞ！」

「おうよ！」

常夏コンビの召喚獣が同時に走り出す。中々のコンビネーションだ。
走っている方向からして二人の狙いは姫路さんの召喚獣……

「そんな見せかけが通用するとは思わないことですね！」

木刀をブーメランの要領で常村の召喚獣の右端へと投げる。
しかし、それは悠々とかわされてしまう。

「っと、お前こそそんな攻撃が当たると「常村止まれ！」

ゴヅーーーン！

常村は木刀を避けようと左端、すなわち夏川の召喚獣の方へと避けようとしたのだが、夏川の召喚獣も本来の狙いである明希の方へと軌道を切り替えたため、二人してぶつかったのだ。

Ａクラス常村勇作　日本史１０９点
Ａクラス夏川俊平　日本史１１５点
今のも合わせて相手は残り半分といったところだろう。
「なめたマネしやがって…」
格下のＦクラスに一発も与えられないどころか、一方的に押されていることにいらつく夏川。
「こうなりゃ、奥の手だ」
奥の手…？
４００点に至っていないのだから腕輪の能力は使えないはずだ。
だとすると僕たち2年生が知らないような裏技的なものがあるのだろうか？
「経験の差ってやつを教えてやるよ！」
そう言って、夏川はじりじりとフィールドの隅へと召喚獣を移動させていく。
僕に今できることは、その一挙一動も見逃さないようにすることだ。
「くらいやがれ！！」
大袈裟な声と共に召喚獣ではなく、夏川自身が動く。
はっとなって夏川の方を向くがもう遅い。
夏川は僕に向かって砂を投げた後なのだから。
避けられるだけの時間もないし、目をつぶって少しでも砂が目に入

らない様にするしかない。

「明久君！」

しかし、僕は目をつぶれなかった。つぶろうとした瞬間に姫路さんが僕の前に僕を庇うように立ちはだかったから…

「姫路さん！」

とっさに繋いだ手を引き寄せる。

「きゃあ！」

しかし、当然のように僕と姫路さんはバランスを崩してしまう。

「共倒れとは好都合だぜ」

気配で常夏の召喚獣が迫ってくるのがわかる。

だけど、僕も姫路さんも自身の召喚獣の位置がわからないため、動かすことができない。

「これで終わりだぜ！」

夏川の召喚獣が明希を一撃で仕留めるために獲物を大上段に振りかぶる。

だけど――

「姫路さんを護りたいと想ってるのは僕だけじゃないんだ！！」

悔しいけど、今回は任せたよ…

「まっ、そういうこった」

そう言うと明希はがら空きになった相手の懐に潜り込み、喉に木刀を突き刺す。

「なにっ！？」

Ａクラス夏川俊平　討死

明希はそのまま姫路さんの召喚獣を狙っている常村の召喚獣の方へと向かっていく。

「よけろ常村！」

「っと、うわぁ！？」

夏川のおかげで常村は間一髪といった具合で明希の攻撃をよける。だけど、操作にそれ程慣れていないやつが攻撃中に回避行動なんかをとれば、バランスを保てるわけがない。
案の定、常村の召喚獣はバランスを崩し、その場に尻餅をついてしまう。

「チェックメイトだ」

無防備な常村の召喚獣に明希の木刀が突き刺さる。

Ａクラス常村勇作　討死

「なっ……」

信じられないといった具合に常村が膝をつく。

「優勝はFクラス吉井&姫路ペアで決定だ！」

「「「「いえーーーい！」」」」

司会者の宣言に観客たちが沸き立つ。

「姫路さん、はいっ」

僕も立ち上がると姫路さんに手を差し出す。

「ありがとうございます」

姫路さんは僕の手をとると立ち上がる。

「僕たち勝ったんだね…」

いまいち実感がわかない。

「そうですね…

と言っても、明久君と明希君のおかげですけど」

「そんなことないよ。僕は――」

姫路さんがいたからがんばれたんだ。

「明久君がどうしたんですか？」

そう当然の反応が返ってくる。
いつもなら適当にごまかすが、この時の僕はどうかしていたんだろう。

「僕は姫路さんがいたからがんばれたんだ」

「ふぇ！？」

姫路さんがすごく驚いているのがわかる。
だけど、僕は不思議とこの状況になんの戸惑いも感じていなかった。

「今回の大会も試召戦争の時も僕は姫路さんから多くのものをもらった」

そう、僕一人では…いや、姫路さん以外とは決して手に入れられないものを…

「だから、少しでもそのお礼がしたいんだ」

ここで一度深呼吸をいれる。

「だから今日、僕の家に来てくれないかな？」

僕はただ姫路さんの返事を待つ。
その時間は僕にはとても長く感じられたが、本当は一秒も経っていないのかもしれない。

「はい。と言いたいところですけど無理です」

やっぱりか……

ある程度予想していた答えに消沈する。

「私だって明久君からたくさんのものをもらったんですよ」

柔らかく優しい姫路さんの声はさっきと矛盾していることを言っている気がする。

「ですから、私だけがお礼をもらうなんてダメなんです。私も明久君にたくさんお礼したいです」

えっ…？
もしかして…

「なので、私の家にも来てくれますか？」

「いいの…？」

「いいもなにも明久君が来てくれないなら私も行きません」

ちょっとだけムスッとした様に姫路さんが言う。
ここは姫路さんの厚意に甘えよう。

「じゃあ、今度行かせてもらうね。
でも、今日は僕の家に来てもらってもいいかな？」

「はいっ！よろしくお願いいたしますね」

そう言って姫路さんは満面の笑顔で笑う。
まるで僕の家に来るのが楽しみだというように…
今までも何度か来ているはずなのに、なんでこんなに嬉しそうなん

だろう？
わからないけど、姫路さんが喜んでいてくれているなら『お礼』はできそうだ。

「こほんっ！」

司会者がわざとらしく咳払いをいれる。
……まずい…
まだ試合会場だということを忘れてた…

「えー、いちゃつくのは構いませんが、いやむしろもっとやれ。優勝商品の受理がありますので少しいいですか？」

「「は、はい…」」

僕と姫路さんはただ顔を赤らめ、うつむきながらこたえるしかなかった。

ＮＯＳＩＤＥ

二人の生徒が屋上への階段を登っている。

「ちくしょう、まさかあんなやつらに負けるとは思わなかったぜ」

「まぁ、そんなに悔しがんなよ。
俺たちには坂本とババァが話していたやつの録音があるんだからよ」

「それもそうだな。
これを屋上の放送機材から流せばバババァは終わりで俺たちも楽に進学できるしな」

「それにあいつら二人はのろけてやがるから邪魔するやつもいねえ。俺たちの勝ちだ！」

「へぇ…
そいつはおもしろそうなことかんがえてんじゃねぇか」

ある人物が屋上への扉に立ち塞がるように物陰から出てくる。

「てめえはＢクラスの！？」

「あぁ、２年Ｂクラスの根本恭二だ」

「なら話が早い、ささっとそこどけよ」

相手がわかると安堵したように二人の内、一人が言う。

「おっと、どいてもいいがお前らと教頭の密会の話を校内放送で流すぜ？」

そう言って根本は録音機を見せびらかす。

「てめえ、こっち側の人間じゃなかったのか！？」

「もとはそっち側だったさ。いや、今でも俺は真っ当な人間には程遠い。

だけど、あいつの…あいつらのまっすぐな想いだけは邪魔させないんだよ！」

根本は今まで出したこともないような大きな声で叫ぶ。
それは文系に分類されるような彼が、悪の部類に入る二人を威圧するほどに。

「くっ…
な、なめるなよ。俺たちに喧嘩で勝てると思ってんのか！」

「勝てる…
わけないことくらいはわかってるさ。
だけど、生憎俺はAクラスの方々の様に賢くないんでね。あいつと同じように自分がやりたいようにしか行動できないんだよ！」

それは彼なりの恩返し。
もう一度、自分に他人を信じることを…仲間の大切さを教えてくれたバカな彼らへの彼なりの恩返し。

「いきがってんじゃねえぞ！」

「ぐほっ！」

根本に拳がクリーンヒットする。
だけれど彼は揺らぐこともなく立ち続ける。

「邪魔なんだよ！」

「ぐっ…」

根本の唇から血が出るが、歯を食いしばって耐える。

「いい加減に倒れやがれ！」バシッ

「なに！？」

根本に殴りかかろうとした拳は後方から腕を捕まれたことにより止められてしまう。

「誰だてめえら！」

二人組は後ろからやってきた数十名を睨み付ける。

「誰って、そこで大切なものを護っているやつの友達だけど？」

「友達だぁ？
こいつにそんなやつがいるわけないだろ」

バカにしたように笑われるが、根本自身も心当たりがなかった。
それも今まで散々なことをしてきたのだから当然の報いだろう。

（今さら、俺を友達なんて呼ぶやつなんて…）

そう思いながらも根本は顔をあげる。
しかし根本の予想に反し、そこには見慣れたクラスメイトがいた。

「お前ら…」

「助けに来たぜ代表」

クラスメイトは誰一人として嫌な顔一つせずに根本に笑いかける。

「岩下と菊入は先生を呼んできてくれ。野郎は代表を援護するぞ」

「「「「おーーー！！」」」」

岩下と菊入と呼ばれた女子は階下へと走り、残りは根本を守るように取り囲む。

「先輩方、もうあなたちにはなにもできませんよ」

「ちくしょう…おぼえてろよ！」

そう言い捨てると、二人組は逃げるように階下へと走っていった。

「お前ら、どうしてここに…？」

「なに言ってるんだよ。友達のピンチに駆けつけるのは当然のことだろ？」

「だけど俺は今まで散々なことをお前らに…」

「そんなの、もう昔の話だろ？
今のあんたは昔と違うんだ。なら、俺たちがあんたがを忌み嫌う必要なんてない。これからは仲良くしていこうぜ？」

差し出された手を根本は掴む。

「あぁ、まだ至らないところもあるかもしれないが、よろしく頼むな」

第３０問　僕と後夜祭と流れ星（前書き）

水龍さん、黒炉さん感想ありがとうございます！

第３０問　僕と後夜祭と流れ星

明久ＳＩＤＥ

「あっ、雄二！」

後夜祭が始まる１０分前くらいに、ようやく雄二を見つけることができた。

「よう明久。ババァの所にはもう行ったか？」

「行ったには行ったんだけど、立て込んでるから後夜祭の後にしろだってさ」

あのババァめ、人がせっかく言いつけを守ってやったのに…

「そうか…

そういや、もう姫路には後夜祭の約束取り付けてきたんだろうな？」

「取り付けてるわけないじゃん…

僕が姫路さんとダンスだなんて寝言は寝てから言ってほしいものだよ」

どういう風に解釈したら、バカで不細工で甲斐性無しの僕が姫路さんとダンスの約束を取り付けれるのか教えてほしいものだ。

「じゃあお前もバカは休み休み言うんだな」

「？」

雄二がなにを言いたいのかわからない。
だけれど、なぜかけなされてる気がするのは気のせいだろうか？

「まぁ、お前のそれは今に始まったことじゃないしいいか…
それよりも、俺になにか用があって呼び止めたんじゃないのか？」

そう言えばそうだった。
雄二が変なことを言い出すから危うく忘れるところだったよ。

「そうそう雄二、これあげるよ」

そう言ってポケットから如月ハイランドの招待券を取り出す。

「明久、お前…」

「霧島さんを連れてってあげなよ」

これは僕なんかが私利のために使っていいものじゃないんだ。

「でも、お前だって姫路と行きたいんだろ？」

「行きたくないと言えば嘘になるよ。
だけど、姫路さんと僕がそんな所に行っても釣り合わない。
それに、僕のこの気持ちはいつか自分で直接伝えたいんだ」

そう、姫路さんが誰かにするのと同じように…

「本当にいいんだな？」

「うん。霧島さんを喜ばせてあげなよ」
雄二が僕の手からチケットを受けとる。
「ありがとな、明久」
「どういたしまして」

瑞希ＳＩＤＥ
「……瑞希」
突然呼び止められたので振り向くと翔子ちゃんがいました。
「あっ、翔子ちゃん。どうしたんですか？」
「……瑞希は吉井と後夜祭に出ないの？」
明久君と後夜祭…
「いいんですよ。
明久君と私なんかよりもいい人を誘っているはずですから…」
自分で言っておいてなんですが、惨めな気持ちになってきました…
大会中の勢いのまま思いきって誘えば良かったです…

「……二人して不器用」

「？」

翔子ちゃんがなにを言っているのかわかりません…

「……そんな瑞希に耳寄り情報。
試験召喚獣大会にでたペアは絶対に後夜祭にペアで出ないとダメ」

「ふぇ！？」

って、ことは私は明久君と……

「……吉井はこのこと知らない筈だから瑞希が誘ってあげないとダメ」

「で、でも…」

もし断られてしまったら…

「……もしペアで出られないと男子の方が酷い目にあう」

「あ、明久君が酷い目に…」

「うん。だから吉井を助けれるのは瑞希だけ」

明久君を助ける…
いつも私を助けてくれる明久君を…

「わ、わかりました！
ありがとうございますね翔子ちゃん！」

私は明久君を早く見つけるために走りだします。
後夜祭開始まであと7分…

翔子ＳＩＤＥ

「……二人とも鈍感すぎて困る」

過ぎ去っていった瑞希の背中を見ながらポツリと呟く。
あんな嘘までつかないと二人は動かないだなんて世話がやける…

「よう、翔子！」

雄二の声！

「……雄二、どうしたの？」

振り返りながらこたえる。

「お前、こんな所でなにやってたんだ？」

「……鈍感な二人の背中を押してた」

やっていたことをありのままに話す。

「奇遇だな。
俺もさっきバカで鈍感なやつの背中を押してきたばかりだ。これのお礼にな」

そう言ってチケットをヒラヒラさせながら翔子に見せる。

「……雄二…」

涙が溢れてきているのがわかる。
もう行けないと思っていた如月ハイランドのチケット…
私が雄二と行きたかった如月ハイランドのチケット……

「雄二大好き！」

「こ、こら翔子離れろ！」

雄二が振りほどこうとするが、離れる気なんて毛頭ない。

「まぁ、今日くらいはいいか…」

雄二もやっと素直になったみたい。

「っと、そろそろ後夜祭の時間だな」

雄二が腕時計を見ながらわざとらしく言う。

「残念なことに俺はいまだにペアがいないという孤独の身。
どこかでペアができていない女子はいないもんかなぁ…」

チラッと横目で私の方を見る雄二。

「……実を言うと私もペアがいない。
どこかにペアがいない雄二がいてくれると助かる」

「俺は名指しかよ…」

呆れたという風に言われてしまうが、雄二もまんざらでもないようだ。

「……私は雄二と踊りたい」

「今日くらいは翔子の頼みを聞いてやるか」

そう言って差し出された手を私は掴む。

「よろしくな翔子」

「うんっ！」

明久ＳＩＤＥ

まずい！
後夜祭が始まるまで後４分しかない！
早く姫路さんを見つけないとせっかくの優勝がなかったことになっ

てしまう！
なんで雄二もこんな重要なこと早く言ってくれなかったんだよ！

～遡（さかのぼ）ること数分前～

「そうだ明久、チケットのお礼と言ってはなんだがいいことを教えてやる」

もったいぶったように雄二が言う。

「なに？」

「実を言うとだな、優勝したペアが後夜祭に出ないと優勝は取り消しらしいぞ」

優勝が取り消される…？

「ま、まさか！？」

「あぁ、お前と姫路のペアで後夜祭にでなきゃ優勝は取り消し。設備は買い直せなくなって姫路は転校しちまうってわけだ」

「そ、そんな…」

いったい僕はどうすればいいんだ…
ここまで来てみすみす姫路さんを転校させてしまうのか…？

「お前だって大好きな姫路が転校しちまうのは嫌だろ？
なら、今すぐ姫路を探して約束を取り付けてこい」

「で、でも姫路さんが僕なんかと…」

「大丈夫だ。俺が保証してやるから行ってこい」

雄二のこの自信がどこからくるかわからないが、今は雄二を信じるしかない。

「雄二、信じてるからね」

「あぁ、行ってこい明久」

雄二の声を背中に受けて僕は走り出す。

早く、姫路さんを見つけないと！

～現在～

廊下の角を曲がるとちょうど姫路さんも向こう側から走ってきていた。

「姫路さーん！」

「あっ！明久君！」

姫路さんの前で立ち止まる。

「はぁはぁ…探したよ、姫路さん…」

「はぁはぁ…わ、私も探しましたよ明久君…」

姫路さんも僕を探していてくれていたのならちょうどいい。

「で、姫路さん用事はなに？」

「あ、明久君の方から先でいいですよ」

本来なら姫路さんを優先すべきなのだろうけど、今はそんな悠長なことを言っていられない。

「じゃあ、お言葉に甘えさせてもらうよ。
あの…なにも言わず僕と後夜祭に出てくれないかな？」

「えっ！？」

姫路さんの驚いた顔を見るのは今日二度目だ。

「やっぱり、僕なんかとじゃ嫌だよね…」

あぁ…どうしよう！？
このままじゃ姫路さんの転校が確定しちゃうよ！

「嫌なんかじゃありません！」

「えっ！？」

今度は僕が驚く番だ。

「私は明久君と一緒に後夜祭に出たいです…」

さっきとは対照的にか細い声で言う姫路さん。

「本当に…僕なんかでいいの…？」

信じられない。姫路さんが僕の誘いを受けてくれるだなんて…

「はい。明久君の方こそ私なんかでいいんですか…？」

いいもなにも、優勝取り消しの件がなくても僕は姫路さんと後夜祭に出たいのだから当然ＯＫだ。

「当然だよ。じゃあ、よろしくね姫路さん」

「はい。こちらこそお願いしますね明久君」

差し出された僕の手を姫路さんが掴む。

～後夜祭～

「互いを想い合う男女がつどる後夜祭、ついに開幕だ！」

「「「「いえーーーい！」」」」

試験召喚獣大会の時と同じ司会者の掛け声に参加者たちの歓声があ

がる。

「ちなみに僕にはそんな相手はいないんですよね～」

「「「「あははは…」」」」

司会者の自虐ネタにみんなが乾いた笑みを浮かべる。
実際、ここにいる人は僕と姫路さんを除いてカップルばかりだろう。
そこでこの自虐ネタはいかがなものかと思う。

「まぁ、独り身の戯れ言はおいときまして後夜祭を楽しんでいこうぜ！」

「「「「いえーーーい！！」」」」

再び周りが沸き立つ。
早く司会者にもいい相手が見つかるといいね…

ちゃんちゃらちゃちゃちゃちゃんちゃらちゃちゃちゃっちゃちゃちゃちゃー♪

馴染みのあるリズムが流れてくる。

「って、なんでラジオ体操のリズムなのさ！」

思わず叫んでしまった…
普通、こういう時の音楽は軽快なものではないだろうか？
いや、たしかにラジオ体操のリズムも軽快ではあるけどさ…

「明久君は踊らないんですか？」

手を繋いだ姫路さんが不思議そうにたずねてくる。

「姫路さん、普通ラジオ体操のリズムで焚き火を囲って踊ったりしないよ…」

「でも皆さん、楽しそうに踊ってますよ？」

「えっ…」

周りを見回してみればたしかに多くのカップルがダンスには似つかわしくないリズムでも懸命に踊っていた。

しかし、その中にも僕と同じようにこの状況に唖然としている人物が一人…

「雄二ー！霧島さーん！」

姫路さんの手を引きながら二人の所に走っていく。

「よう明久に姫路」

「こんばんは翔子ちゃん、坂本君」

「……こんばんは」

珍しく雄二が手枷を付けられていない。

うまい具合に言いくるめたのだろうか？

「雄二たちも参加してたんだね」

「まぁな。
それにしても、なんでこいつらはラジオ体操のリズムで踊れるんだ？」

ここに同志が一人いた。

「……好きな人とならどんなことをしても楽しい」

「そ、そうですよ！」

相変わらず霧島さんの発言は的を射ているようで明後日の方向を向いている…
そして姫路さんも変なふうに同調しないでいてもらいたいものだ。

「……だから雄二、早く私と踊る」

「あいだだだ！！
わかった！踊ってやるから一回手を離せ翔子！」

「……わかった」

そう言って離した手と別の方の手を握る霧島さん。
相変わらず積極的だなぁ…

「明久君、私たちも踊りませんか？」

「そ、そうだね。踊ろっか」

ダンスなんてものはわからないけど、周りの見よう見まね姫路さんをエスコートする。

なるべく足を踏まないように、バランスを崩さないように…
それでいて、相手のことを考えて先導していくというのは中々難しい…

「明久君、お上手ですね」

姫路さんがリズムをとりながら言う。

「そ、そうかな？
僕自身は足を踏んじゃいそうで気が気じゃないんだけど…」

「もう、明久君はロマンチックさの欠片もありません！」

なぜだか姫路さんがご機嫌斜めになってしまった。
なにか僕は悪いことを言っただろうか？
不機嫌の理由はわからないが、僕に否があるのだろう。なんとかしなきゃなぁ…
とそこで、ちょうどいいタイミングに曲がターンの伴奏へと差し掛かる。
できるかどうかわからないけど、勇気を振り絞って握った手を高く上げ、ターンの体勢をつくりあげる。

くるっ！

姫路さんは、いつの間にか変わっていた優雅な曲調に引けをとらないほど素晴らしいターンを決める。
不思議と一度大きなことに成功すると自信がでてくるもので、段々と余裕がでてくる。

くるっ！

姫路さんが再びターンを決める。僕はただ先導するだけだが、それでも楽しい。
姫路さんと同じ場所で同じ時を共有しているという事実がなによりも幸せだった。

「楽しいですね、明久君」

「うん、とっても楽しいよ」

姫路さんも同じ想いを共有しているという事実がより一層僕を高揚させていく。

この時間が永遠に続けばいい
この時間が終わることなく続けばいい

いつまでも姫路さんと共にいられれば…

僕は…いや、僕たちはほんの少しだけど僕の願った時間を延長させることができた。
今はまだ姫路さんは同じ想いを抱いていない。
だけれど、いつの日か本当の意味で隣を歩ける日がきてほしいと想う。
しかし、それを願うことしか僕にはできない。
そう、あの夜空から流れ落ちる一筋の光に…

第３０問　僕と後夜祭と流れ星（後書き）

清涼祭編も残すところ後１～２話となりました。
これからもよろしくお願いします。

第３１問　僕とお義父さんとオレンジジュース（前書き）

青龍さん、ＳＨＩＮさん、堕落者断さん、感想ありがとうございます！

第３１問　僕とお義父さんとオレンジジュース

明久ＳＩＤＥ

曲が一旦終了し、休憩時間にはいる。

「ふぅ…ちょっと飲み物とってくるね」

「それなら私も行きますよ」

「いいよ。二人分なら僕一人で充分だからさ」

僕のわがままで一緒に後夜祭に出てもらっているのだ。これ以上、姫路さんに迷惑をかけるわけにもいかない。

なにより、姫路さんは体力があまりないのだからダンスの後には休憩が必要なはずだ。

「じゃっ、行ってくるからここで待っててね！」

多少強引にしないと姫路さんは折れない時があるので、そのまま走り出す。

「えーと、ジュース、ジュース…」

無料でジュースが貰える場所があるのだが、その場所を見事に見失ってしまった。

「ちょっといいかね？」

いきなり肩に手をのせられ、声をかけられる。
ビクッとしながらも振り向くと、そこには大人の男性がいた。
ビシッとした営業職の人が着るスーツを着ているあたり、教師ではないだろう。

「すまないが、君が吉井明久君であっているかね」

「あっ、はい…」

なんでこの人は僕の名前を知っているん……須川たちのせいで来校者にも知れわたっているんだった…

「そうか、君が明久君か……」

スーツの男性が僕を品定めするようにまじまじと見る。

「あの、失礼ですがどちら様でしょうか？」

もしかしたら不審者の可能性も否めない。

「いや、大した者ではないんだ」

自分の素性を隠すとはますます怪しい…

「ところで、みず――いや、君と一緒に大会に出ていた娘とはどう

いった関係だい？」

なんで僕と姫路さんの関係なんかを聞いてくるんだろうか？
なにか姫路さんと関係のある人なのだろうか？

「ただの仲良くしてもらってるクラスメイトですよ」

僕の気持ちまで赤の他人に話す必要はない。
そう考え、深くは語らないようにする。

「なにか特別な感情は抱いていないということかね？」

「なっ…そ、それは…」

隠そうとしていたことの核心をつかれ狼狽えてしまう。

「そうか、そういうことか…
君になら瑞希を任せてもいいかもしれないね」

「えっ…？」

今この人は『瑞希を任せてもいい』と言わなかっただろうか？
瑞希とは当然だが姫路さんの名前である。
でも、なんでこの人がそんなことを……もしかして！？

「あっ、お父さん！」

聞き慣れた声が僕の疑問を確証へと変えていく。

「おう、瑞希じゃないか」

スーツの男性が手を振っている方向を見ると、姫路さんが走ってきていた。
ということは、この人は姫路さんの……

「あれ？明久君はお父さんと知り合いだったんですか？」

僕たちの所にたどり着いた姫路さんが不思議そうにたずねてくる。

「いや、今さっきばったり会ってね」（余分なこと言わないでくださいよ！）

姫路さんのお父さんに目で訴えかける。

「そうなんだよ。
父さんは道に迷ってそこにいる吉井君に道を聞いていたのさ」

姫路さんのお父さんナイスフォロー！
なんとかこれで危機は脱せそうだ。

「って、ことは今さっき知り合ったんですか？」

「う、うん…」

ごめん姫路さん。世の中には嘘も必要な時があるんだ…

「そういえば瑞希。転校の件だが――」

お父さんが一度僕の方を向く。

「はい…」

真剣な面持ちの姫路さん親子。
いくら僕たちが優勝して設備を買い換えたとしても、姫路さんのお父さんが了承してくれなければなににもならないのだ。

「あの話はなしにしようと思う」

「「本当ですか！」」

喜びのあまり、姫路さんと声が被る。

「Fクラスだからといって見下していた父さんが悪かった。
Fクラスだって充分素晴らしいんだ。人間は学力だけじゃない。
そしてなによりも瑞希はFクラスにいたいんだろ？」

「はいっ！」

重荷がとれた姫路さんの笑顔はとても輝いていた。
この笑顔だけで僕の苦労がすべて無かったことになってしまうくらいに。

「吉井君、これからも瑞希を頼むよ」

「任せてくださいお父さん！」

いったいなにを任されるかわからないし、僕が姫路さんのお世話になる方だと思うけれど了承する。

「それと私のことはお義父さんと呼んでくれて構わないよ」

「えっ？お父さんって呼びましたよね？」

もしかして聞こえなかったのだろうか？

「だからお父さんではなくお義父さんだと言っているだろう？」

「お父さん…ですよね？」

姫路さんのお父さんと僕のニュアンスが微妙に違う気がするが誤差の範囲だろう。

「まぁ、今はいいとするか。
いずれ、君は私のことをお義父さんと呼ぶことになるのだろうからね」

「？」

姫路さんのお父さんがなにを言っているかますますわからない…
っと、そんなことより一つ聞いておかなきゃいけないことがあったんだった。

「あの、お父さんは少しお時間ありますか？」

「そうだな…あまり長居はできないが少しぐらいなら構わないよ」

これは好都合だ。

「じゃあ、少しあちらで男同士の話でもいかがですか？」

「いいだろう。
瑞希、三人分の飲み物をとってきてくれないか？」

うん、姫路さんのお父さんは中々機転の利く人だと思う。

「はいっ！」

姫路さんがなにを疑うこともなく、飲み物をとりに走っていった。
あっ、僕が向かおうとしていた方向と逆方向だ……

「で、話とはなんだい？
かわいい跡取りの話とあってだから大概は許容してあげるよ」

僕はかわいくもなければ、どこかの跡取りになる予定もない。
というか話す内容が内容だけに、さすがに二つ返事で了承してもらえるとは思えない。

「えっと、ですね…
僕は姫路さんに日頃お世話になっているわけです。そして、今回の試験召喚獣大会でも姫路さんのおかげで優勝できました」

ここからどう切り出そうか？
建前は並べてみたけどいったいどうすればいいんだ！？
えぇい、こうなりゃ自棄だ！！

「要するに姫路さんにお礼をしたいので僕の家に招待してもいいですか！」

あれ？
僕はなんでこんなことを大声で叫んでいるんだろう…

いくらなんでも緊張しすぎというものではないだろうか？

「別に構わないよ」

「えぇぇぇ！？」

なんでこの人はかわいい一人娘をバカで不細工で甲斐性なしの僕みたいなやつに任せられるんだ！？

自分で言うのもなんだけど、普通は拳骨の２００や３００発ほどもらっても文句はいえないと思う。

「ただし、一つだけ条件がある」

「条件…ですか…」

やっぱりあるのか。

なんだか少しだけ安心した気もする。

「その条件とは…」

「条件とは……」

僕と姫路さんのお父さんの間に重苦しい空気が流れる。

「隙あらば既成じ「アウトォォォ！！」

僕の鍛えぬかれた危険察知能力が瞬時に反応して制止の言葉をいれる。

「なに言ってるんですか！実の娘ですよ、実の娘！！」

「吉井君こそ、なに言っているんだい？
いわば親公認でイチャイチャできるんだよ？」

「そういう問題じゃありませんよ！」

まったく、なんで僕の周りにはネジが数十本単位で抜けている人ばかりなのだろうか…

「ははは
冗談だからあまり深くは気にしないでくれ。ちっ」

「今この人『ちっ』って舌打ちしたよ！
実の娘のピンチが過ぎ去ったら舌打ちしたよ！」

もしかしたら姫路さんのお父さんは須川たちよりも質（たち）が悪いかもしれない……

「まぁ、ここまでの冗談はおいといてだ。
本当に吉井君の家に行くことは何も構わない。
第一、春休みなんて君の家にそれは入りびたってるかのごとく行っていたのだから、今さらどうということもないだろう」

春休み…
僕の記憶から完全に消えてしまっている空白の時間…
明希の力を借りても過ぎ去ってしまった記憶は取り戻せない。
あくまで、その日の記憶の一部だけを明日に引き継ぐだけなのだから…

「もしかしてタブーだったりしたかい？」

「いえ、これも僕が乗り越えていかなきゃいけないものなんです。ですから気にしないでいてくれて構いませんよ」

そう、いつかは嫌でもこの問題と直面する時がくるだろう。
その時までに僕は僕なりの答えを出しておかなければならない。
僕が僕自身であるために……

「だとしても傷口を抉るようなことをしてしまってすまなかった」

「いえ、本当に気にしなくて構いませんよ」

今さらどう足掻いても変わる事実ではないのだ。
姫路さんのお父さんに否があるわけではない。

「そう言ってもらえると助かるよ。っと、飲み物をとりに行ってくれた瑞希には悪いが、そろそろ時間だ。私はおいとまさせてもらうよ」

「あっ、はい。今日はありがとうございました」

「こちらこそいいものを見せてもらったよ。
吉井君、また会おう。あと、瑞希もよろしく頼むよ」

そう言いながら手を振って、姫路さんのお父さんは校門の方へと向かっていってしまった。
僕もそれに笑顔で手を振り返す。

「明久君、お待たせしました。
あれ？私のお父さんはどこに行っちゃったんですか？」

振り向けば姫路さんがオレンジジュースの入ったコップをトレイにのせていた。

「お父さんなら、たった今用事があるらしくて帰っちゃったよ」

「そうなんですか…」

姫路さんが残念そうに言う。

やはり、親子で話したいことも山ほどあったのだろう。

「姫路さん、僕はいいから今日は家に帰ってお父さんと話してくれば？」

たまに帰ってきたお父さんと話すことの方が僕のお礼なんかより大事な筈だ。

「明久君、なにか勘違いしているみたいですけど、お父さんはほぼ毎日帰ってきていますよ？」

「えっ…」

勝手に見た目から出張三昧で、ほとんど家に帰ってこれない人だと思ってた…

「ですから今日は明久君のお邪魔させてもらいますね」

「うん！ちゃんとお礼するから期待しててね」

僕の当初の目的が達成されるのは嬉しいのだが、疑問が一つ残る。

じゃあ、姫路さんはなんで残念そうにしていたのだろうか？
まさか僕のことをお父さんに紹介したかったとか……はないか…

「そういえばオレンジジュースが一つ余ってしまいますけど、どうします？」

姫路さんのお父さんが帰ってしまった事により、一つ余りがでてしまったのだ。

「僕と姫路さんで半分ずつにすればいいんじゃないかな？」

「そ、そうですよね」

なにを姫路さんはそんなに緊張しているのだろうか？

「では、いただきます」

そう言うと姫路さんは両手で紙コップを囲い、中身を飲み干す。
僕もそれにつられるように紙コップを一つ手に持つと、中身を口の中に流し込む。

「あっ、明久君の分です」

いつの間にか二杯目に差し掛かっていた姫路さんは半分だけ飲んだコップを僕に両手で差し出してくる。

「ありがとう姫路さん」

自分の飲みかけをトレイに置くと、姫路さんから紙コップを受けとる。

見ると、中身は半分より少し多かった。
差分はちょうど、僕が飲みかけていたのと同じくらいの量だ。

「はい、姫路さん」

さっきトレイに置いた分を姫路さんに差し出す。

「くれるんですか？」

「うん。姫路さんがくれたのは半分より少し多かったからあげるよ」

「あ、ありがとうございます！」

姫路さんはすごく嬉しそうに紙コップを受けとる。
ジュースをもらえただけで喜ぶなんて案外子供っぽい部分もあるんだなぁ…
みんなが知らない姫路さんの一面を知ることができて少し得した気分だ。
そう思いながら僕も姫路さんからもらった分を飲む。

オレンジ独特の甘さと酸味がいい具合に混ざっていておいしい。
だけれど、僕が飲んでいたオレンジジュースよりも少しだけ甘い気もする。
それがまた程よい具合で癖になりそうだ。
オレンジジュースって、こんなにおいしいものだったんだ…

「おいしいですね」

「そうだね」

姫路さんが今飲んでいるのは僕が飲んでいたやつだから甘さはこちらよりも控えめな筈なのに、とてもおいしいものを飲んでいるように笑っている。

「姫路さん、こっちの方が甘いから飲んでみなよ」

なるべくなら姫路さんにおいしい方を飲んでほしいと思い手渡す。

「そうなんですか？」

姫路さんは元の自分の紙コップを受けとると、それを傾ける。

「ふぁ……

本当においしいですね。でも、こちらもおいしいんですよ」

そう言って姫路さんは、元の僕の分を手渡してくる。

半心疑問に思いながらもコップを傾けてみると、たしかにさっきまで僕が飲んでいたのよりも甘かった。

「本当だ。すごく甘くておいしいね」

「こっちもおいしいですよ。また交換してみます？」

「うん」

再度、互いの分を交換して飲む。

そうすると、なぜだかさっきよりもまた甘くなっていた。

おかしいなぁ…

これではどちらが甘いかわからない。

「姫路さん、もう一度交換しよ？」

なるべく姫路さんにおいしい方を飲んでもらいたいと思い、提案する。

「は、はい！」

交換して飲んでみるが、結果は変わらずこちらの方が甘かった。

残りもあと僅かだが、その少量だけでもと思いまた交換する。

結局、コップの中身が無くなるまでそれは続いた。

結果から言えば、どちらが甘いかは不明瞭なまま。

姫路さんからもらう度に段々と甘くなっていき、それでいて酸味が消えることもなかったのだから。

『ピンポンパポーン

ただ今より後夜祭ダンスイベントの後半の部を始めます。

出場なさるペアはお早めに焚き火の近くにお集まりください』

ちょうどいいタイミングで放送が流れる。

「姫路さん、行こうか？」

「はい、行きましょう。明久君」

僕たちは互いに手を取り合い立ち上がる。

まるでそれが当たり前であるかのように…

第３１問　僕とお義父さんとオレンジジュース（後書き）

清涼祭編は次回＋座談会で終了となります。

第３２問　僕と制約解除と魔法の意味（前書き）

堕落者断さん、感想ありがとうございました！

第３２問　僕と制約解除と魔法の意味

明久ＳＩＤＥ

「失礼しまーす」

後夜祭も終わったので約束通り、ババァの所に訪れる。

「ノックぐらいしなよ、クソガキ」

入室早々、人を罵倒するのが教育者のやることだろうか？
いささか疑問だが、廊下で姫路さんを待たせているため文句は言わないことにしておこう。

「これが約束の腕輪ですよ」

ババァの机に優勝商品である2種類の腕輪を置く。

「でも、これってなになんですか？」

一応、効力ぐらいは知っておいてもよいだろうと思いたずねる。

「こっちが一人で召喚獣を2匹だせる腕輪。
で、こっちが教師なしでも召喚フィールドが作り出せる腕輪さね。
だけれど、残念なことに調整中だから低得点のやつにしか扱えないんだよ」

たしかに便利なものだが、低得点者にしか使えないのではあまり意

味がない。
第一、僕が前者の腕輪を使えば明希がどうなるかわからないし、後者にしても僕にとってはあまり意味のないものだ。

「じゃあ、代替景品はないんですか？」

さすがに、少しおこがましかもしれないが試召戦争で少しでも役に立つ物は貰っておきたいものだ。

「ある訳ない、と言いたいところだが、今回はあんたらに世話になったことだし特別にあげるさね」

腐っても教育者。ババァでも教育者といったところだろうか。

「１つ目は召喚フィールドを作りだせる方の腕輪をやるよ。坂本程度の点数なら不具合は起こさないだろうし、あいつならうまく使うだろうよ」

そう言って腕輪を一つ僕に手渡してくれた。
たしかに雄二はこういうのを使うのは得意そうだ。

「間違っても、あんたや姫路瑞希が使うんじゃないよ」

「姫路さんはともかく、なんで僕もなんですか？」

姫路さんは唯一、Ｆクラスで学年平均を越えているのだから当たり前だが、僕まで名指しされた意味がわからない。

「理由として二つ。
一つ目はあんたの召喚獣はイレギュラーでどういった不具合をおこ

すかわからないから。二つ目はあんたが学年の平均以上に達してるからだよ」

「えっ…？」

誰が平均以上に達してるって…？

「はぁ…

学力と中身は伴うもんじゃないようだねぇ…

あんたにもわかりやすくいえば、今のあんたは総じて平均並の点数をとっている。それでいて日本史があの点数なんだから、平均なんて越えて当たり前だろ？」

「……なるほど！

要するに僕はもうバカじゃないって訳ですね」

「そういう発想がバカだって言うんだよ」

「なっ…」

まさか平均点を越えてもバカ扱いされるとは思ってもみなかった…

「まぁ、あんたのバカさ加減はおいとくとして、二つ目の代替品の話なんだが、あんたの召喚獣に少し自由を与えてやろうと思う」

明希に自由…？

ババァは知らないと思うけど今でも明希はかなり自由奔放に生きていると思う。

「自由って言っても、あんたの考えてる自由とは違うよ」

考えが読まれた！？

「召喚獣っていうのは召喚フィールドがなければ存在できないだろ？だから、その制約を外す…いや、常にあの小生意気な召喚獣の周りに薄い召喚フィールドを張ってやるってことさね」

「それって明希がどんな所でも出てこれるってことですよね！？」

冗談じゃない。

昨日だって勝手に出てきてるところを考えると、明希はある程度自分の意思で出てくることができるはずだ。

それに召喚フィールドの制約が無くなってしまえば一日中だって出ているだろう。姫路さんに会うために……

そうなれば僕と姫路さんの数少ない憩いの時間すらも奪われてしまうことになりかねない。

とてもじゃないが、そんなのはありがた迷惑以外のなにものでもない。

「その件については慎んでお断りしますよクソババァ」

「ちっとも慎めてないじゃないかね！？」

せっかく人が誠意を込めて言ったのになんて言い種だろうか。

「でも、いいのかい？

この話の内容をあいつが聞いてたら、あんたに協力してくれなくなるかもよ？」

「うっ…」

悔しいけどババァの言う通りだ。
もし僕がここで断れば最悪、明希は記憶共有すら破棄しかねない。
それも姫路さんと過ごせる時間がかかっているのだから、確率は相当高い筈だ。

「わかりましたよ…
そのありがた迷惑な代替品ももらっていきます…」

「あからさまに嫌な顔するんじゃないよ。それに今すぐって訳じゃないさ。
そうだねぇ…大体強化合宿ぐらいには調整が済んでるだろうよ」

強化合宿というのは学力向上にAからFまで合同で行う勉強会の様なものだ。
まぁ、何はともあれ僕の悩みの種がまた一つ増えたわけだ……

〜下校中〜

「すごいですね！これで明希君ともたくさんお話しできます」

帰り道、明希の事を話してあげたら姫路さんは嬉しそうだ。

「う、うん…」

姫路さんには悪いが僕はあまり気のいい話ではない。

普段から明希と接するにしては癖が強すぎる性格をしているからだ。

「そういえば姫路さん、僕が後夜祭に誘った時に言いたかったことがあったみたいだけどなにかな？」

僕の用事は姫路さんを誘うことだったが、姫路さんからは聞けずじまいなのだ。

「そ、それはですね…わ、私の用事というのは…」

姫路さんの顔が段々と赤くなっていく。

もしかして体調が悪かったりするのだろうか？

「そ、そんなことより明久君、本当にありがとうございました」

深々と頭を下げる姫路さん。

はっきり言ってここまで不自然な切り返しは見たことがない。

「急にありがとうだなんてどうしたの？」

「だって明久君は私が転校をしなくてもいいように試験召喚大会に出てくれたんですよね？」

「ち、違うよ…

あの…ほら、たまたまだよ。僕は転校の話だって知らないんだしさ」

まさかあの不自然な切り返しから、ここまでの発言に繋げるとは思わなかった。

「前に言いましたけど明久君は嘘が下手ですよ。

だって、お父さんが転校を取り消してくれた時に明久君も私と一緒に驚いていたじゃないですか」

「えっと、それは…」

続く言葉が思いつかない…

それに、今度は僕の顔が赤くなっているだろうから姫路さんと顔を合わせることもできないし、よわったなぁ…

「そ、その話はおいといて早く僕の家に行こうよ！」

そう言って、僕は逃げるように走り出す。

「待ってください明久君！」

姫路さんも後ろから追いかけてくるのがわかるから、あまり離れ過ぎないよう速さを調整しながら走る。

だけれど、立ち止まって言える訳ない。

姫路さんのためなら、なんだってやれるだなんて…

～数分後～

今、僕はすごく後悔している。

こんなことなら一直線に家に向かうんじゃなかったと…

姫路さんにお礼をしたいからといって家に呼ぶんじゃなかったと…

「明久君、入らないんですか？」

「いや、ちょっとね…」

玄関のドアを開かないように押さえつけながら作り笑いを浮かべる。

～遡ること数秒前～

「ふぅ…やっと着いた…」

自分の家の壁に手をつきながら一息いれる。
姫路さんとの距離は５０メートル程だからそろそろ階段を登ってくるだろう。
せっかくだから少し脅かそうかな？
そう思い、ポケットから鍵を取り出し差し込む。

カチャカチャ

「あれ？」

なぜだか鍵が空いているのだ。まさか今朝閉め忘れたのだろうか？
いや、今朝は姫路さんと共に出てきたからそんなことはないはず…
疑問に思いながらもドアを開けるとそこには――

「おかえりなさいアキく――」

「人違いです」

ばたんっ！

勢いよくドアを閉めると、すぐに鍵もかけドアを手で押さえつける。
なんでだ！？
なんでこのタイミングで僕の家に姉さんがいるんだぁぁぁ！！

～現在～

ごんごん

「明久君、中に誰かいるみたいですよ」

「気のせいじゃないかな」

姫路さんを家にあげようとしてる事が知れたら僕の命はないも同然だ。
なんとかしてこの状況を脱しなければいけない。

「やっぱり、今日は姫路さんの家に――――」

ここまで言いかけて気づく。それこそ自滅行為なのだと…
姉さんには僕が今ここにいることを知っているのだから言い訳は聞かない。なによりも僕にはもう姫路さんのお父さんを相手にするだけの気力は残っていない。

『アキくーん、なぜ開けてくれないのですか？
姉さんを家の中に閉じ込めて楽しい年頃なんですか？』

実の姉を閉じ込めたくなる年頃とは何歳くらいなんだろうか…
僕には皆目検討がつかない。
なにより、冷や汗が半端なくでているはずだ。
姫路さんが変に勘ぐって嫌われでもしたらどうしよう…

「明久君、お姉さんが帰ってきてるみたいですよ」

案外、普通の反応だった…

「う、うん。そうだね…」

もうここは腹をくくるしかないだろう。
そして姉さんにこっぴどくしかられよう…
僕にとっては姫路さんへのお礼の方が大事だから逃げる事なんてできないのだから…

「ただいま…」

「お邪魔します」

姫路さんと共に家に入ると案の定、姉さんが待ち構えていた。

「ち、違うんだ姉さん！
これには深いわけがあって、決してやましい気持ちはこれっぽっちも――――」

「アキくんはなにをそんなに慌てているのですか？」
「えっ…？
だって姉さんは前、不純異性交遊は禁止だって…」

そう、これは僕が独り暮らしを始める際に姉さんが僕に課した条件。

「別に姉さんはえっと…」

「あっ、姫路瑞希です。
いつも明久君にはお世話になっています」

姫路さんの名前がわからない姉さんに姫路さんが挨拶をする。

「瑞希さん、いつもうちのアキくんがお世話になっています」

ぺこりと頭を下げる様はまるで普通のいい姉のようだ。
あくまで、ここだけを見ればの話だが…

「それで、姉さんは瑞希さんの事をアキくんを騙すような人だとは思ってません。
姉さんはアキくんがバカで不細工で甲斐性無しですから、アキくんに近づいてくる女の子はアキくんを騙そうとしていると思ってそれを言っただけですよ。
それとも瑞希さんとは不純な関係だというのですか？」

「そ、そんなことあるわけないじゃないか！」

僕が姫路さんと不純な関係な訳ない。
いや、そもそも純粋とか不純とかの問題の前に付き合ってすらいない。

「なら、姉さんは瑞希さんを信用してるからとやかく言いませんよ。
それに――――」

「それに？」

「花婿君と花嫁ちゃんの邪魔するわけにもいかないしね」

「へっ…？」

いきなり口調の変わった姉さんに唖然となる。

というか、このしゃべり方どこかで…

「あっ！もっ、もしかして…」

「アキくん正解です」

そう言って姉さんはバックからカツラといつもとは違う服等を取り出す。

それはどれも、あのお客さん（１９＆２３問参照）が身に付けていたものだった。

「じゃあ魔法っていうのも…」

「はい、姉さんが瑞希さんとの関係を認めてあげるということです」

まさか姉さんがあそこまで変装が上手いとは思わなかった…

第一、なんで僕は気づけなかったのだろうか…

悔しいような悲しいような気がするが、姉さんが姫路さんといても見逃してくれるというのは吉報だ。

「それにしても姉さん、よく姫路さんと初対面なのに許すね…」

正直、死も覚悟していたんだから驚きものだ。

「たしかに会うのは初めてですけど、面識はありますよ」

「えっ！？」

「私が明久君の記憶の状況をお姉さんに連絡していましたから」

「そうなんだ…」

なんだか僕の知らないところで二人が知り合いになっていた…

「じゃあ、このタイミングで帰ってきた理由は？」

「アキくんの事が心配でしたので仕事を前倒しにしてやってきました」

「明久君のこと、大事に思っているんですね」

「ええ、大切な弟ですから」

海外で仕事をしているのにわざわざ来てくれるだなんて、本当に心配してくれてたんだなぁ…

普段は破天荒な人だけれど、そういった気遣いがちょっぴり嬉しかったりする。

「まぁ、いつまでも玄関で話し込んでないであがろうよ。僕がご飯作るからさ」

「アキくんが作るとなるとパエリアですか？」

「そうだね。ちょうど材料もあるしパエリアにするよ」

「明久君のパエリアですか。楽しみですね」

「あははは、あまり期待されても困るよ」

その日の食事は正に家族団欒といった具合に楽しかった。
姉さんからの外国の話。僕と姫路さんの学校生活の話。
あと、姫路さんが前にした僕にパエリアを作ってくれるという約束を覚えてくれていたのには驚きだった。
飽きることもなく、そんな会話は続く。
その中で僕は口に出すわけでもなく、願い想う。

いつか、本当に姫路さんが家族になってくれれば毎日がこんなに楽しいのにな

第３２問　僕と制約解除と魔法の意味（後書き）

今回で清涼祭編の本編は終了となります。
次回は座談会。その次は拙作の特徴でもあるあの話をやる予定です。

特別問第２　座談会（清涼祭編）（前書き）

堕落者断さん、黒炉さん、ａｄｆｓｆａｆさん、感想ありがとうございました！

※前回の座談会に引き続き、メタ発言やパロネタなどが普通に出てくるのでそういったものに嫌悪感を抱かれる方はプラウザバックをお願いします。
ちなみに見なくても本編になんの支障もありませんので。

特別問第2　座談会（清涼祭編）

唐「って、ことで清涼祭編も終了したことだし座談会でも開くか」

希「明希だ。当然だが名字なんかないからな」

美「ハロハロー、島田美波です」

秀「木下秀吉じゃ。よろしく頼むぞ」

唐「前回は主要三人＋αでしたが、今回はどういった集まりで？」

希美秀「「「作者に文句があるんだよ（のよ）（のじゃ）！！」」」

唐「なんと、三人して文句とは！？
して、どういうふうに文句があるのかね？」

希「まずは俺からだ。
どうしてもっと俺と姫路さんの絡みをふやーーー」

唐「知らん」

希「てめぇ、人が話してる最中に知らんとはいい度胸じゃねぇか？」

唐「お前こそ作者に逆らおういい度胸だな？」

希「どっちが上なのかわからせてやるぜ！」

唐「そりゃ、こっちの台詞だ！」

秀「しばらくお待ちくださいなのじゃ」

美「まったく、なにやってるのかしら…」

～数分後～

希「はんっ、口ほどにもねぇな！」

唐「くそぅ…
なぜ作者である俺が負けるのだ…」

希「俺の名前は、ある高名な方からもらった名だからお前ごときの手中に収まらねぇんだよ」

美「あんたの名前は瑞希からもらったんでしょ…」

希「そりゃ作中の話だ。
俺の名前の原案は別作者さんからもらってるんだよ」

秀「にして、その者の名は？」

唐「さすがに俺ごときがこのふざけた場で話す訳にもいかんのでパスで…」

美「ふーん、まぁいいわ。

それよりウチと木下の文句も聞いてくれるかしら？」

唐「も、もちろん…」（目付きが怒っとる…）

美秀「出番が少ないのよ（じゃ）！」

唐「いや、それはね…
俺の文才の無さから招いた事態だから言い訳もできません…
でも、それはムッツリーニにだって言えるんじゃないかな？」

美「土屋は元々口数が少ないからいいのよ！」

秀「それにムッツリーニは原作とは違った個性的な動きをしておるから目立っておるのじゃ！」

唐「た、たしかに…」

美「しかもウチはまだ言いたいことがあるのよ！」

唐「まだあるのか…」

美「なんで瑞希は最初から『明久君』呼びなのにウチはいつまで経っても『アキ』呼び変わらないのよ！」

希「呼んだか？」

美「あんたのことじゃないわよ…」

唐「と、まぁ、こういう事態になるからだ」

美「でも活字なら判断つくでしょ！」

唐「活字ならとかメタ発言するなよ…」

美「大丈夫よ。だって前書きにその旨は綴ってあるからね♪」（ごきごき）

唐「♪つけながら腕をごきごき言わせるな…笑顔と相まって余計に怖いからさ…」

美「じゃあ、吉井がウチのことを『美波』呼びになるのは？」

唐「そういうのは自分でやってください」

美「やっても吉井の記憶に残らないでしょ！」

唐「そこは明希に頼んでください」

美「もう、いいわよ。ウチはウチで頑張るから…」

秀「（フラグを立てた身としてなにか言うべきなのじゃろうか…？）」

希（フラグとかメタ発言多すぎだろ…）

～作中の雰囲気について～

秀「そういえば、試召戦争編と清涼祭編では作中の雰囲気が随分と違うのぅ」

美「そうね。試召戦争編はどちらかと言わなくても重苦しい雰囲気だったけど、清涼祭は試召戦争編と比べると明るいわよね」

唐「それは明希がいることによって記憶の心配が減ったからじゃないかな？」

希「俺のおかげってわけだな」

唐「いや、君のせいで随分と厄介事も増えてるからね…」

希「主人（マスター）も随分と厄介事引っ提げてるけどな」

唐「自分のことを棚に上げるなよ…」

秀「まぁ、それはともかくじゃ。これから、この作品はどういった感じで進むのじゃ？」

唐「まずは強化合宿に入る前に閑話（かんわ）が入るな。で、強化合宿編はおそらく今まで誰もやっていないであろう話構成にする予定だけど？」

美「今でも充分他作者様の作品からズレてるわよ…」

唐「充分自覚してる」

希「やっぱり俺と姫路さんの絡みを――」

唐「お前はいっぺん黙れ！
というか、それ以外言うことはないのか！」

希「ないな」

秀「即答じゃな」

希「俺は姫路さんのために生きている！」

唐「んなこん自信満々で言われても…」

美「たぶん明希の性格は最後まで一貫してそうよね…」

唐「たぶんと言うより絶対だと思う…」

秀「クセが強すぎじゃ…」

～強化合宿編について～

美「強化合宿編は具体的にどんなことをする予定なの？」

唐「ある二人がとても怖がる内容」

秀「なんか容易に想像できてしまうのじゃ…」

唐「それと強化合宿編限定のオリキャラがでてくる」

希「俺はレギュラーオリキャラだけどな」

唐「正直言って君よりもそっちのオリキャラの方が動かしやすい」

希「言っただろ、てめぇの手中に収まるようなやつじゃねぇって」

唐「それ、ここで言うんだ…」

美「もしかしてと思うけどウチと瑞希が嫌いなアレじゃ…」

唐「さてどうかなぁ？」

美「いやいやいやいや！
今すぐ内容変えて！本当にウチはアレ無理なんだからやめて！」

唐「しかし、怖がる女の子というのは男側からしてみると可愛いものだ」

秀「いち男としてそれには賛成じゃ」

希（なにげに男アピールしやがった…）

美「ちょっと木下までなに言ってるのよ！」

唐「焦ってるところ悪いが、幽霊は出てこないぞ？」

美「そ、そうなの…？
って、別にウチは幽霊なんて怖くないわよ！」

唐「そうなんだ？
なら美波の肩に白い手が――――」

美「いやぁぁぁ！！」

唐「乗ってない」

美「殺すわ」

秀「まぁまぁ、二人とも落ち着くのじゃ」

唐「そういう秀吉の肩にも――――」

秀「わしは幽霊なぞ怖くないぞ？」

唐「いや、秀吉の姉さんの手が――――」

秀「いやじゃぁぁぁ！！
姉上だけは勘弁してほしいのじゃぁぁぁ！！」

唐「乗ってない」

秀「島田よ、こやつを殺らんか？」

美「その意見にはウチも賛成よ」

希「まぁまぁ、落ち着けって。ほんと、お前らって落ち着きないな」

唐「まぁ、そう言う明希の――――」

希「残念ながら俺はここの女達みたいに怖いもんなんかねぇぜ？」

秀「わしは男じゃと言うておろうに」

唐「いや、明希宛に姫路さんから手紙を預かってある」

希「なに！？早く見せろ！」

秀（わかっておったがスルーされたのじゃ…

唐「えっとなになに…

『明希君へ

あんまりにも暴言をはくので少し黙ってください♪』だとよ」

希「ひ、姫路さんに嫌われた…」（ズーン）

美「あんたしっかりしなさいよ。瑞希があんなこと言うわけないでしょ？」

秀「そうじゃぞ。大方、こやつの作った紛い物であろう」

希「でも本当に俺のことが嫌いだったら…」

美「だとしてもあんた宛なら吉井に渡すでしょ？」

希「そう言われてみりゃそうだな」

唐「あっ、バレた…」

希「クソ作者め。覚悟はできてるんだろうな？」

美「ウチらとたっぷり死合いましょ？」

唐（なにうえ某ナマハゲ風…？）

秀「わしらの恨みの深さを知るがいいのじゃ」

唐「秀吉はそんなキャラじゃないよね！？」

秀「お主はわしを怒らせ過ぎた…
ついでに言うと島田の言う通り、前書きに書いてあるからいくらパロってもＯＫじゃ」

唐「くっ…こうなったら…逃げる！！」

希美秀「逃がすか（さんのじゃ）！！」

唐「はい、逃げながら最後に強化合宿編にでてくるオリキャラを一部紹介！」

～境内院（けいだいん）　美娘（みこ）～

名前からわかるとおり巫女である。
ちょっとしたことから明久たちと交流をもつことになり、瑞希に迫るほどのどこか抜けちゃっている人。
それにしても、巫女さんがでてくるのに幽霊がでてこないとはおかしな話である。

～名前未定～
合宿先で出会うことになる謎の少女。明久のことを『吉井様』と呼ぶ。
今時には珍しく着物を着ており、性格は明るい部類に入る。
頭に着けている髪飾りを大変大事にしており、明希が暴言をはかない数少ない内の一人。

唐「んじゃ、この先は強化合宿編に入ってから！」

希「これからもよろしく頼むな」

美「ここがおかしいとか、こうした方がいいとかの意見もどんどん言ってやってね」

秀「もちろん、感想もお待ちしてるのじゃ」

特別問第2　座談会（清涼祭編）（後書き）

今回も作者の戯れ言につきあってくださりありがとうございました！
さて、名前の決まっていないオリキャラですが今のところ淡雪（あわゆき）、一夢（ひとつゆめ）、雅（みやび）の3案があります。
どれがいいか意見をくれるとうれしいです。
もちろん、皆様が考えてくださる名前なども募集してますのでよろしくお願いします！

閑話1　これが我らの日常（前書き）

堕落者断さん、ＳＨＩＮさん、黒炉さん、則次　火焔さん、感想＆amp;アンケート投票ありがとうございます。
ＰＶ２００，０００、ユニーク２０，０００を突破いたしました！
お読みになってくださる皆様には本当に感謝の念が尽きません。
これからも拙作をよろしくお願いいたします。

閑話1　これが我らの日常

？ＳＩＤＥ

今日はみなさんに我が異端審問会の素晴らしい活動の一部を紹介しようと思う。

～朝～

我々異端審問会の朝は、各々の武器を研ぐ事から始まる。

私、須川亮の武器はこの『断罪の鎌』である。

そこ、厨二臭いとか言わないように。

この鎌は今まで数々の異端者の血を吸ってきた謂わば私の相棒である。

しかし最近は人を傷付けるためではなく、大切なものを護るために使われることが多くなった。

その方が『断罪の鎌』も夢見がいいであろう。

「ふぅ…飯でも食うか」

『断罪の鎌』を研ぎ終えた俺は朝食のために階下へ――――

「っと、忘れるところだった」

最近、異端審問会にできた新たな決まりを遂行しなければな。

ぱんっぱんっ！

ある写真立ての前で正座をし、手を合わせる。

「いい加減くっつけドちくしょぉぉぉ！！」

朝っぱらから近所迷惑だと思う方もいるかもしれないが心配はいらない。

この付近は全住民が異端審問会に加入しているのだからな。

「見ててもやもやするんじゃぁぁぁ！！」

「どれだけの人の期待背負ってると思ってるんだ！！」

「でも、その甘酸っぱい距離感がまた堪らない！！」

俺の声にこだまする様に様々な方角から声が聞こえてくる。

ちなみに掛け声はなんでもＯＫだ。

我が異端審問会が神聖と認める二人に対する思いを叫んでくれればそれでいい。

～学校～

「集合！」

俺の号令により古参のメンバーが集まる。

この古参メンバーとは異端審問会が布教活動を始める前から俺と共に異端者狩りをしていた者たちのことだ。

「では、今日の報告を久保軍師から話してもらおう」

「はい」

そう言って一人の男子生徒が俺の隣に来る。

久保利光。成績は学年3位、男子では1位という頭脳明晰なガリ勉君だ。

本来なら彼のような古参ではないメンバーはこの場にいることも許されない。

しかし彼は別だ。

その優れた頭脳と異常なまでの執着心により我らが神の情報を集めてきてくれているのだ。

基本、古参にしか階級は与えられないが彼のように優れたメンバーには階級が与えられる。ちなみに

会長↓将軍↓軍師↓部隊長↓一級審問官↓二級審問官↓歩兵（ポーン）

といった具合に区分けされているのだ。

はいそこ、色々入り交じってるとか言わない！

まぁ、なにはともあれ我らの学校での朝は空き教室での集会から始まる。

～午前～

基本、午前中は我ら異端審問会が動くことはない。

異端者がいれば別の話だが、午前中は我らの神は両者とも勉学に励んでいるため活動内容はそれを事細かに記録するだけだ。

ちなみにその仕事はムッツリーニ将軍が担当している。

彼は写真技術をさることながら、手記の早さも尋常ではない。

その彼の功績もあって清涼祭では見事、二人のメモリアルブックを販売することができた。

当然だが即完売であったしまた我らの同志が増えたのは言うまでもないだろう。

しかも二人は清涼祭を経てまた一歩前進してくれたようだ。

うんうん、努力が報われるというのは嬉しいものだな。

～午後～

我々の活動は午後からが本領だ。

まずは忌々しいカップルが集まりそうな場所へと赴く。

あっ、ちなみにこの時に屋上へ立ち入る必要がないのは諸君らもわかっていると思うが一応言っておこう。

「会長、グランドの木陰でCクラスの藤本とDクラスの宮木さんが弁当を一緒に食べています！」

「ご苦労、横溝二級審問官」

横溝からの報告を受けて腰をあげる。

「野郎共、出撃の準備だぁぁぁ！！」

「「「「イエサーイエス！！」」」」

古参メンバーが各々の武器を持ち出し現場へと走る。

基本、異端者狩りは古参メンバーのみで行われる。

異端者狩りには固い結束が必要なため、新規加入者をおいそれと戦

場へと放り込むことはできんのだよ。

もちろん、入隊試験に合格すれば君も異端者狩りに参加できるからどしどし受けてみてくれ。

しかも今なら、二級審問官の称号付きでもらえるというサービスを実施しているぞ！

「会長、こちらが現場です」

おっと、諸君らに説明している間に現場に着いたようだ。

「では、早速だが異端者狩りを開始するぞ！」

「「「「異端者には死を！！」」」」

掛け声と共に藤本を取り囲む。

「うわっ、なんおまっちょ！？」

見事異端者を確保した我々は異端者をFクラスへと運び、十字架に縛り付ける。

「異端者、藤本圭作。なにか言い残すことはあるか？」

「ちょっと待てよ！これはなんなんだ！？ここはどこなんだよ！？」

異端者が見苦しくもがいている。

「我らは異端審問会。学園内の風紀を乱す輩を粛正する団体だ」

「俺がなにしたって言うんだよ！？」

「しらばっくれるな！！
貴様の罪状は既にあがっているんだぞ。
まず第一、貴様はＤクラスの宮木さんと二人っきりでいた。
第二、それでも飽きたらぬ被告はお弁当の中の卵焼きに手を出す。
第三、卵焼きに味をしめた被告はあろうことかエビフライにまで手をだす――」

そこからは淡々と罪状を読み上げていく作業が始まる。

これは中々しんどいものだが、私がここで放棄してしまえば学園内の風紀は更に乱れてしまうだろう。

そこのところ、ご理解願いたい。

「――――以上、十三個が被告藤本圭作の罪である。異論はないな？」

「ありまくりじゃ！
なぜ自分の彼女と弁当を食ってはいかん！？
それに罪状のほとんどが弁当の中身を食ったことについてじゃねえかよ！」

やれやれ聞き分けのないやつだ。

「では被告の訴えと罪状を照合し、みなの意見を聞こうではないか？」

「「「「異端者には死を！！」」」」

「ということで死刑が確定した」

「判決はやっ！？」

判決がでたというのにまだ足掻くのか…

「まったく男なら最期くら「須川会長、ムッツリーニ将軍から緊急指令です！」

「なに！？」

ムッツリーニ将軍は無闇やたらに緊急指令をだすような輩ではない。

ということはそれだけ重要なことが起きているわけだ。

「二人が急接近。至急、屋上に集まれとのことです！」

「よし、皆の衆行くぞ！」

こうしちゃいられない。事は一刻を争う事態だぞ！

「しかし会長、藤本被告はどうするのですか！？」

「んなもん、放置しとけ！逃げたけりゃ勝手に逃げるだろうよ」

「それもそうですね」

「ちょっと待て！

せめて十字架の拘束を解いてから出てってくれ！！」

後ろから異端者の叫びが聞こえるが気にすることはないだろう。

～屋上前の扉～

んでもって我らは屋上へと続く扉の前にやって来たわけだ。

我ら異端審問会が唯一許している神聖な二人、吉井と姫路さん＋その他の取り巻きはよく屋上で昼食をとっている。

そして姫路さんが吉井に弁当を振る舞っているまでは週に2、3回見ることだからさして珍しくはない。

だが、今日は弁当の盛り付けが違った。

ムッツリーニ将軍から得た情報ではなんと今日は白米にあのピンクの甘いやつでハートマークが描いてあるというのだ。

こっそりと屋上へ続く扉から様子を伺う。

するとどうだろう。あの吉井が恥ずかしがりもせずに食べているではないか！

「会長、どんな感じですか？」

「吉井が恥ずかし気もなく食べてる…」

「マジですか！？」

「しー、声がでかいぞ」

顔の前に人差し指を立てて福村を黙らせる。

「よし、順番に見ていこう」

「「「「はいっ！」」」」

「だから声がでかい…」

若干呆れながらも一度扉の前から離れることにする。

それにしてもハートマークの入った弁当を食べるとは吉井も遂にやってくれたか……

ここまで長い道のりだった。

我ら異端審問会は鈍感な二人をくっつけるために日夜苦労を重ねてきたのだが、遂に苦労が報われる時がきたか。

今まで様々なことをやってきたな…

いい雰囲気になっている二人を陰ながら（掃除ロッカーから）見守ったこともあった…

恥ずかしがって逃げる吉井を取っ捕まえてやり直しをさせたこともあった…

二人に新婚気分を味あわせてやろうと思ってクラスぐるみで画策したこともあった…

どれもこれも今となってはいい思い出だ。

いかん、感動のあまり涙が…

「ううっ…会長、遂にやりましたね」

「あぁ、やったな今川…」

お互いに嬉し涙を流しながら手を握りあう。

「……どうした？」

気づくとムッツリーニ将軍がこちらを不思議そうに眺めていた。

「いや、二人が遂にゴールインしたと思うと涙がな……」

周りを見れば各々が嬉し涙を流したり、喜びあっていたりしていた。

「さぁ、ムッツリーニ将軍も一緒にこの感動を味わおうではないか」

「……勘違いしているようだが言っておくが、あれは姫路の母が夫のために作った弁当」

ムッツリーニ将軍の発言によりその場が凍りつく。

「なっ、なんだって…？」

「……それを間違えて姫路が持ってきてしまって明久が食べてるだけ」

なっ…

ということはぬか喜びだったということなのか!?

我らは幸せを逃してしまったというのか!?

だが、俺はこれしきのことでは挫けぬ!

「ふっ…

みんな、落ち込むことはない!

逆に考えるんだ!これからも二人を応援していけるという幸せがあると!」

「そうだ会長の言う通りだ!」

「俺たちには希望がある!」

「異端審問会万歳!明久と姫路さん万歳!」

どうやらみんなも元気を取り戻してくれたみたいだ。

そう、我らは二人がいる限り滅びることはない!我らは不滅なのだ!

さぁ、みんなも異端審問会に入ってみないか?

今ならなんと入会費無料だ!

お申し込みの方は2年F組須川亮、または０９０－○△□×－●▽◇◎まで！

みんなの参加待ってるぜ！

シュー

ＤＶＤレコーダーから出てきたＤＶＤを手にとる。

「雄二、なにこれ…？」

「須川が異端審問会のメンバーを増やすために作った勧誘動画だな」

今までの映像を一緒に見ていた雄二がのんきに言う。

「そう意味じゃなくて、なんで異端審問会の勧誘動画なのに後半は僕と姫路さんのことだらけなのさ！」

もっと普通の活動（異端者狩り）を強調するべきだと思うのは僕だけだろうか？

「んなもん俺が知るか。
でも安心しろ。須川いわく、それの効果は使う前の１．５倍程度らしいからな」

「ちっとも安心できないよ！
使う前からあの異常な感染率なんだから、その１．５倍って相当なものだよ！？」

「そう言われてみればそうだな」

こいつは自分のことじゃないと本当にのんきなやつだ。

「これ割ってもいいよね？」

「偶然拾ったもんだし構わんだろ」

バリィィィン！

拾ってきた雄二の了承も得たので恨みを込めておもいっきり叩き割る。

「まっ、複製だから須川にとってもなんの痛手にもならないがな」

「最悪だ…」

僕の苦労だらけの日常はまだ続きそうである…

閑話1　これが我らの日常（後書き）

今回は一風変わって須川たちのお話でした。
原作の異端審問会とは似ても似つかないものですが皆様に楽しんでいただければ幸いです。
あわなかった方はすいません。
これも拙作のギャグ要素として目を瞑っていただければと。
前回のアンケートは強化合宿編が始まるまでを期間とさせていただきますので意見がありましたら是非とも投票していただきたいです。
では、次回もよろしくお願いいたします！

閑話2　俺の幸せはお前の不幸（前書き）

きるぐまー1号さん、感想ありがとうございました。
題名がどこぞのガキ大将みたいですが読んでいただければ分かるかと思います。

閑話2　俺の幸せはお前の不幸

雄二ＳＩＤＥ

「……着いた」

「あぁ…」

俺と翔子は今、如月ハイランドの入り口にいる。
ここをくぐったら最期、俺は如月ハイランドの企み通り、翔子と婚約を結ばされてしまうだろう。どうにかして翔子の気をそらせないものだろうか？

「翔子、前お前が欲しがっ「いらない」

くそっ…
今のこいつには目の前のことしか見えちゃいねえ。
どうすればこの状況を脱せられる？
俺は救いを求めて辺りを見回すと入り口で見知った顔を見かける。
あれは明久と姫路じゃないか。

「……雄二が見ていいのは私だけ」

「ぐあぁぁぁ！！目が目が抉るな翔子ぉぉぉ！！！」

少し目を離したぐらいでチョキで俺の目を抉るのはいかがなものだろうか？
っと、そんなことより明久と姫路がいるなら好都合だ。
悪いが利用させてもらうぜ？

「翔子、行くぞ…」

「……うん」

痛む目を押さえながらも僅かな視界を頼りに入り口へと向かう。

「プレミアムチケットでのご入場ですね。
ただいま、記念撮影のキャンペーンを実施していますので是非ともどうぞ」

入り口にいる係員が笑顔で言ってくるが、そんなのはありがた迷惑だ。

「けっこ「んしますので是非ともお願い」

おかしい…
俺は結構ですと言って断るつもりだったのになぜだか真逆の方向に進んでいる…

「では、お二方ともこちらへどうぞ」

呆然としている俺を他所に着々と作業が進められていく。

「じゃあ、二人とも笑ってください。はい、撮りますよ」

カシャッ

即席のカメラらしく写真がカメラから出てくる。

「記念に額縁に入れておきましたのでお二方ともどうぞ」

そう言って係員は俺と翔子に額縁に入った写真を手渡してきた。

どれどれ…

見れば翔子はいつものように俺の腕に抱きついて幸せそうな顔をしていた。

正直言って、顔を赤らめながらも幸せそうにしている翔子はかわいいと思う。

だけど、翔子にそういった感情を抱けば抱くほど俺の中の罪悪感は大きくなっていく…

俺が昔犯した罪が消えることもなく付きまとう。

俺にとってなによりも、誰よりも大切な人ともに…

「くだらねぇ。いくぞ翔子」

「……うん…」

たぶん、お前は俺の感想を期待していたんだろうが俺はその期待にはこたえられない。

一度でも許してしまえば、認めてしまえばお前は余計に俺に固執してしまう。

それはお前にとって不幸なことだ。

勘違いから始まったお前の不幸を、無駄な時間を余計に増やしてしまうだけだ。

『ならどうして明久からチケットを受け取ったんだ?』

あれはその時の場の空気で…

『違うな。お前はただ翔子とここに来たかっただけだ』

違う！

俺は決してそんなことは…

『本当に違うと言い切れるのか？』

そうだ。

俺は翔子の不幸なんて望んでない！

『あぁ、確かに翔子の不幸は望んでないだろうよ。
だけれど、それはお前がお前自身の幸せを望んでないという証拠にはならない』

なにが言いたいんだ！

『お前の言っていることは矛盾しているんだよ。
お前の言い分からすれば、お前自身の幸せは翔子の不幸ってことになる』

俺の幸せが翔子の不幸だと…？

『あぁ、見てみろよその写真を。お前の真実がそこにある』

自分自身の中の俺を達観している俺に言われた通りに写真に目を移す。

なっ…

そんな…バカなことは…

そこには翔子に抱きつかれ、嬉しそうに顔を赤らめ笑っている俺が写っていた。

『なっ？

俺の言った通り、お前は今の状況に幸せを感じている。

そしてお前は今の翔子の状況を不幸だと言った。

これが何を意味するかわかるな？』

俺の幸せと翔子の幸せは共有できない…？

『そういうことだ』

はんっ、ならちょうどいいじゃないか。

いつも俺に付きまとってくる迷惑な翔子を俺の幸せのために追い払えるんだろ？

俺にとっては願ったり叶ったりじゃねえか。

『そうやってまた自分に嘘をつくんだな。

お前は弱いよ。目の前の現実にすら目を向けられないお前は誰よりも…』

うるさい！少しは黙ってろ！

『ほら、そうやって目をそらす。逃げるんだお前は…

自分の都合の悪いことからはなにもかも目を背け、考えようともしない』

逃げてなんかいない！

これは俺が俺なりに出したこたえなんだ！

『確かにそのこたえを出した時はそれで良かっただろうよ。でも今は違う。
お前は昔のお前とは違うものを、決定的に違うものをもってしまったからな』

やめろ！やめてくれ！
これ以上俺を苦しめないでくれ！

『苦しいか？
苦しいなら助けを求めればいい。
もしかしたら昔のお前のように誰かが助けてくれるかもしれないぞ？』

昔の俺…
自分のために翔子を助けることさえ戸惑っていたあの頃の…

「たす…け…てくれ」

「雄二！」

助けを求めて伸ばした手は誰かによって受け止められた。
その安堵からなのか、はたまた別のなにかのなのか解らないが涙が止めどなく溢れてくる。

「……雄二、どうして泣いてるの？」

うつ向きながら涙を流す俺を翔子が覗き込んでくる。

「ごめん翔子…

だけど、しばらくそっとしておいてくれないか…」

「うん…
なにかしてほしいことがあったら言ってね。
私にできることならなんでもするから」

「ありがとな…」

翔子への罪悪感と自分の気持ちに葛藤をもったままベンチに座る。

俺はどうすればいいんだろうか…？

あいつの言った通り、俺は逃げているだけなんだろうか…？

俺が翔子を幸せにしてやることはできないのだろうか…？

「お客様、ご気分が優れないのですか？」

突然の声に顔をあげると係員と思われる人物がこちらを心配そうに見ていた。

「いや、気分が悪い訳じゃない。気にしないでくれ」

「左様でございますか。
ならば我が如月ハイランドが誇るお化け屋敷などはいかがですか？」

一々聞いてくるところがこの上なく怪しいが他に行くあてもない。

「お化け屋敷だってよ。どうする翔子？」

「……私は行きたい」

「そうか…
すまないが、そのお化け屋敷に案内してもらってもいいか？」

「えぇ、ご案内致しますよ」

～お化け屋敷前～

「……これ、大事なものだから持ってて」

「はい、わかりました」

係員が翔子から小さな包み受けとる。
そういえば今日の翔子の持ち物はアレだけだな。
いったい何が入っているのだろうか？

「ではご入場を」

「あぁ」

係員に進められてお化け屋敷に入場する。
中は薄暗く、正にお化け屋敷という感じだが、これといった仕掛けがあるわけでもない。どれも平凡な子供だまし程度のものばかりだ。

ガシャーン

「怖い」

どこかで物が崩れた音がすると翔子が腕に抱きついてきた。

「離れろ翔子。お前はこの程度で怖がる達じゃねえだろ」

そう言って無理やり腕を振りほどく。

翔子はいかにも残念といった具合に落ち込むが俺には関係のないことだ。

『そう言ってまた見栄をはる。偽りで自分を塗り固める。そんな事をしてお前は楽しいかい？嬉しいかい？それでいいと思ってるのか？』

またお前か。

いい加減にしろ。俺はこれ以上翔子に迷惑をかけるわけにはいかないんだ。

『はいはい、わかりましたよ』

ちっ、気分の悪いやつだ。自分の中の自分なのに無性に腹がたってくる。

『――こ―り――じの――む―おおき――』

どこからか不吉な言葉が聞こえてくる。

「……これ雄二の声」

耳をすましてみれば確かに翔子の言う通り俺の声だった。

『翔子より姫路の方が好みだな。胸もでかいし』

はぁ？

俺はこんなこと言った覚えないぞ？

「雄二、どういうこと」

やばい…

今は事の真意より目の前の脅威からどうやって逃げるかが先だ。

「ちょっ、待て翔子！あれは俺じゃない！」

「許さない」

くそっ…

ちっともこっちの話なんか聞いちゃいない。

……いや、待てよ。ここで俺が翔子よりも姫路の方が好きときっぱり言ってやれば、翔子は俺を諦めるんじゃないだろうか？

『なら言えばいいじゃないか？

お前は翔子の幸せと自分の幸せ、どっちをとるんだ？』

これは俺の問題だ。お前が口出しするな。

『ったく、頑固者も大概にするんだな』

大きなお世話だ。

ガシャン！

ようやくあいつを追い払ったところで何かが落ちてくる音がした。
見てみると翔子の目の前には釘バットがぶら下げられており、翔子がそれを手に持つ。

「待て翔子！早まるうわぁぁぁ！？」

釘バットをすんでのところでかわして思う。
だめだ、もう大人しく逃げるしかない！
俺は覚悟を決めて一目散に出口に向かって走っていく。

ん？
誰か前から走ってくる。ちょうどよかった。これで助けて――――

「ゆうじぃぃぃ！！」

って、明久かよ！？
しかもなんか怒ってないか！？
仕方ない、翔子か明久、どちらの方が突破しづらいか考えるまでもない。

「そこどけや、あきひさぁぁぁ！」

明久を押し倒す勢いでタックルを決めようとする。
しかし、俺の狙いはひらりとかわした明久によって外れることとなる。

「っと、うわぁ！？」

当然、狙いの外れた俺はバランスを崩し、床と接吻をするはめになってしまう。

「雄二、まさか君が裏切り者だとは思わなかったよ」

明久の野郎、本当に俺が姫路のこと好きだと思ってやがる…
それだけの行動力があるならささっと姫路に告ってこいバカが。

「雄二には教育が必要」

翔子はどす黒いオーラを纏い、釘バットで臨戦体勢に入っている…
たぶん、俺の命はここまでなんだろう…

「では、新郎のご登場です」

あれからどうにかして翔子と明久を説得した俺は今度はなぜだかスペシャルランチと称したウェディング体験に参加させられていた。
当然のごとくタキシードまで着せられている……
ちなみに明久と姫路は姫路の父さんが手に入れた割引券でやって来たらしい。

「新郎のご説明――は面倒なので省きます」

渋々出てきてやったのにこの待遇はいかがなものだろうか。

「続きまして新婦のご入場です」

司会者のコールと共に向かいからウェディング姿の翔子が現れる。
綺麗だ…
そんな本音が口から漏れそうになるのを必死に堪える。
「……嬉しい」
女子の中では比較的長身である翔子も俺を見る際は見上げるかたちとなる。
「ずっと夢だったから」
その上目遣いと今の姿に思わず理性を奪われそうになるのぐっと堪える。
「雄二のお嫁さんになるのが私の夢だったから…」
だから…だからこそ俺は踏み止まることができた。
翔子の純粋な想いを俺が受け取っていいわけがないのだから。
「ちょっとぉー、マジでありえないんですけど」
突然観客席からあがった頭の悪そうな声に振り向く。
そこにはいかにも頭の悪そうなカップルがいた。
よく騒ぎ立て催しをダメにするタイプのやつらだ。
「なんでそんなコーコーセーがウェディングなんかやってんの？
マジでありえないんですけど」

「いえ、こちらの二人は結婚を前提に付き合っていまして…」

おい司会者、そんな根も葉もないこと言うな。

「私たちも結婚前提に付き合ってるんだけど？
そんなコーコーセーよりも私らにやらせなよ。その方が盛り上がるって」

「しかし、そのお二方はプレミアムチケットを…」

「あぁん、お客様の言うことを聞けねえって言うのか？」

今度は男の方だ。
まったく、ちっとは周りの迷惑も考えろよな。
明久や姫路だって翔子のために我慢して観客席で大人しくしてるんだからよ。

「第一、お嫁さんになるのが夢とか笑っちゃうよね～」

「まったくだな。キャラ作りですかってな」

「私、お嫁さんになるのが夢なの～」

「がははは、似てる似てる」

ったく、呆れる野郎共だ。

「翔子気にするこ――――翔子？」

振り向けばさっきまでいたはずの翔子がいない。
ただそこには花嫁が頭に乗せる純白の布が落ちているだけだった。

「翔子…」

「雄二！」

「坂本君！」

自失していた俺の元に明久と姫路が走ってくる。

「とにかく霧島さんを手分けして探さなきゃ！」

「すいません。私たちが目を離さなければ…」

「いいんだ、明久や姫路のせいじゃない…」

そう、これはあいつを護ってやれなかった俺のせい。

あいつから目を離した俺のせい。

翔子にまっすぐに向き合わなかった俺に責任があるのだから……

～数分後～

「雄二、そっちはどう？」

「さぁな」

内心を隠し、素っ気なくこたえる。

「私の方にもいませんでした…」

「案外もう帰ったのかもな。

俺も用事があることだし、そろそろ帰るとするかな」

そう言い、明久と姫路に背を向けて歩き出す。

俺の真意がわかってか知らずか、二人とも俺を止めることはなかった。

「にしても傑作だったな」

角から探していた人物の声が聞こえてくる。

「そうそう、しかも泣いて逃げるとかチョーウケルんですけど」

翔子のやつ、泣いていたのか…

「おい、ちょっと待てよ」

曲がり角に立ちふさがるように立つ。

「あぁ？なんださっきのやつじゃん。俺らになんかよう？」

「もしかして花嫁の復讐とかぁ？

あんなキモい夢とかマジでありえないんですけど」

確かに翔子の夢は間違ってる。

あいつは不幸な思い違いで俺に…俺なんかに好意を抱いてしまったんだから。

だけど、間違ってるのはその想いの向く方向だ。

決して翔子の夢や想いは間違っていない。

況してや他人が…なにも知らない赤の他人がバカにしていいものなんかじゃない

だから俺はこいつらを許さねぇ。

翔子の純粋な想いを…俺の幸せを踏みにじったこいつらを決して…

拳をおもいっきり握りしめる。

「ちょっと、そこまでツラかせやぁぁぁ！！」

「翔子」

如月ハイランドに近い土手で座っていた翔子に後ろから声をかける。

「雄二…」

今まで泣いていたのだろう。まだ頬に涙がつたっていた。
俺は翔子の横に座ると、今まで翔子の見ていた夕日の映っている川の方を向く。

「すまなかったな。せっかくのタキシードぼろぼろにしちまった」

「ううん、雄二が私のために頑張ってくれた証拠だから嬉しい」

水面に翔子の笑顔が映る。

「やれやれ、お見通しって訳か…
だけど、俺だってお前のことわかってるんだぜ?」

「?」

「弁当食うぞ」

翔子がわきに抱えている今日、たった一つの持ち物を指さす。

「雄二は私のお弁当でいいの?」

「いいも何も腹が減ってしょうがないんだ。早くくれ」

「素直じゃない」

口を尖らせながらも翔子は弁当を開けてくれた。

「どうぞ、雄二」

俺に向けられた笑顔は水面に映った笑顔よりも何倍も輝いていた。

「うまいな」

俺が建前を忘れて本音を言ってしまう程に…

「翔子も食べてみろよ」

「雄二にあーんしてほしい」

「ばっ、バカ言え。誰がそんなことするか」

だけど翔子は目を瞑り、口をあけ俺が食べさせてくれるのを待っている。

ったく、本当になんでもお見通しなのな…

「仕方ないな。ほらよ」

弁当箱からエビフライを摘まんで翔子に食わせてやる。

「おいしい。雄二が食べさせてくれるならなんでもおいしい」

本当に翔子はなにを言ってるんだか…

そこからはなにを話すわけでもなく、ただ互いに沈む夕日を眺めながら弁当を食べ続けた。

「ねえ、雄二。私の夢って変？」

弁当を食べ終わると翔子が唐突にたずねてくる。

「変じゃねぇよ。お前の夢は胸をはっていいほど素晴らしいもんだ」

「だけどあのカップルが…」

「そんなの気にすることない。俺が保証してやる。
お前の夢は誰にも、どんな夢にも劣らない最高のもんだって。
ただ、想いの方向を修正する必要があるがな」

感極まったのか翔子は下を向いて両手をプルプルとさせ始めた。

「やっぱり私、なにも間違っていなかった！」

涙を含んだ笑顔って、こんなにも素晴らしいものなのか…
間近にある翔子の笑顔を見てそう思う。

ん？間近に…？

「ぷはぁ…」

翔子の顔が離れていく。

「しょ、翔子お前…」

あまりにも唐突すぎて思考が回らない。

「雄二、帰ろ？」

翔子に手を引かれながら、漠然と考える。

俺と翔子の幸せが共有できないって？

上等じゃねぇか。

なら、その不幸を感じられないくらいに翔子を幸せにしてやればいい。

俺といる時は幸せしか感じない程に全力で。

だから翔子、もう少し待っていてくれ。

俺がお前を幸せにできるその時まで…

閑話2　俺の幸せはお前の不幸（後書き）

こんな素直な奴は雄二じゃないとが面越しに思った人は正常です。
作者が正常ではないだけなのでご心配はいりません。
さて、次回から強化合宿編にはいる予定ですのでアンケートは日曜の終わりまでを期日とさせていただきます。
今のところは一夢と淡雪が同着ですのでフルネームで『一夢　淡雪』なんてのはどうだろうかなんて考えてたりしてます。
では、次回もよろしくお願いします！

第３３問　僕と未来予知とかわった巫女さん（前書き）

アスタリスクさん、感想ありがとうございました！

第３３問　僕と未来予知とかわった巫女さん

明久ＳＩＤＥ

清々しい朝だ。雲一つない晴天。初夏を思わせる輝く太陽。
こんな素晴らしい朝に姫路さんと登校できればなおよいのだが、生憎そうはいかない。そう都合よく道端で出会えるものではないのだ。

あれから姉さんはしばらく僕の家に住むこととなった。
実質的にまだ一度も被害にはあっていないのは不幸中の幸いと言うべきか。
そもそも姉さんは姫路さんの出入りを許可しているので被害にあうこともないのだが…

「きゃあ！？」

「うわっと！？」

曲がり角から急に飛び出してきた人影にぶつかってしまう。

「つたたた…君、大丈夫？」

僕とぶつかってしまって尻餅をついてしまっている女の子に話しかける。
姿は赤と白の典型的な巫女服に黒く長い髪をお団子にしているものだ。
出るところは姫路さんや姉さん程ではないが霧島さん並にはある。

「あいてて、うん私は大丈夫だよ～」

妙に間抜けした声に拍子抜けしてしまうが大丈夫そうでなによりだ。

「ん？んんん！？」

いきなり女の子が僕の方に急接近してきた。

「あの…僕の顔になにかついてますか…？」

「んにゃ、なにもついてないよ。ただ、憑かれてはいるけどね～」

憑かれてる？

憑かれてるってなにに？

普通は幽霊とかだろうけど、憑かれるようなことをした覚えはない。

「とり憑かれるようなことをした覚えはないんですが…」

「そー言われても内側から憑かれてるんだよ～」

いったい内側以外のどこにとり憑くというのだ…

「まぁ、お祓いしたかったら神社に来てよ。私の神社だから安くしとくよ～」

僕と同い年くらいなのに自分の神社をもっているのか…

だてに巫女服を着て歩き回っているわけじゃないということだね。

「今からは仕事があるけど、地図を渡すから…えーと地図地図…」

なんか勝手に話を進めて地図を探しだしたが、一つ言いたいことが

ある。

「ねぇ、首に下げている財布から見えてる紙が地図じゃないの？」

「あっ、ほんとだ！ちょっと待っててね……はいっ！」

女の子は紐を首から外して財布を僕に渡す。

「じゃあ、私は急いでるからまたね！」

手を振って走り去っていく女の子を見送っ……ちゃダメじゃないか！？

「ちょっと待ってよ！」

僕も走って必死に追い止める。

よかった、向こうも気づいて止まってくれたみたいだ。

「そうだった名前教えてなかったね～
私は境内院（けいだいいん）　美娘（みこ）だよ。よろしくね～」

「吉井明久です。こちらこそよろしくお願いします」

「んじゃ、今度こそバイバーイ♪」

「うん、またね」

……また、向こうの雰囲気にのせられてしまった…

キーンコンカーコン♪

おっと、ＨＲ開始１０分前のチャイムがなってる。急がなくちゃ！
しょうがない、この財布は放課後にでも届けてあげよう。
前から遅刻はする方ではなかったが最近はやけに寝起きがよいため、
ＨＲ開始５分前には着席しているのが日課となっている。
これも一重に姫路さんの席が隣でなるべく多く話したいという願望
からの行為なのだが、結果的には僕のためになっているのかもしれ
ない。
勉学の方も姫路さんが熱心に教えてくれるため、概ね順調だ。

ヒラッ

靴箱を開けると一通の封筒が落ちてくる。

『吉井様へ』

まさか！？
こっ、これはラヴレター！？
しかし、ここで僕の直感が叫ぶ。

違う。これはラブレターなんかじゃない。

おそらく中身は脅迫状で、僕のあられもない姿が同封されているの
だろう。

そして雄二も霧島さんに偽の録音で脅されてムッツリーニに頼るだ
ろう。

んでムッツリーニが僕を脅した犯人と霧島さんに録音を渡した犯人

が同一人物だと突き止める。

で、強化合宿中に僕たちは言われもない盗撮の罪で女子たちに責められて、こうなったら覗いてやろうじゃないかってノリになってそれを阻止せんとする教師陣＋女子と三回に渡って死闘を繰り広げるだろう。

ちなみに犯人は（尻に火傷の痕がある）清水さんってオチに違いない。

うん、我ながら中々の名推理だと思う。
さてと、脅迫状とわかったなら隠れて開ける必要もない。
堂々と開けるとするか。

『吉井様へ
私はいつも貴方を見ていました。
貴方の優しさ、強さ、なによりも側にいてくれる…それが私にとってなにものにもかえがたい幸せになのです。
強化合宿の五日目の夜、宿泊施設前のベンチで貴方を待っています』

へっ…？
これってラブレター…？
まっ、まさか僕に限ってそんなことあるわけがないよ。
第一、僕は差出人が誰かも……雄二辺りの悪戯か…
あいつめ、僕がモテないからってからかうなんて酷いやつだ！

「よぉ、明久。朝から難しそうな顔してどうした？」

でたな、諸悪の根元こと坂本雄二。

「雄二、こういう陰湿な嫌がらせはやめてくれないかな」
ラブレターをヒラヒラさせながら雄二に見せる。
「なんだそれは？」
「えっ…」
咄嗟にラブレターを隠そうとするが時すでに遅し。
僕の手にあったものは雄二に略奪されてしまっていた。
「なるほどな。
明久、安心していいぞ。これは女子が書いたものだ」
なぜだかこいつは勝手に鑑定を始めていた。ありえん…
「どうしてそんなことがわかるのさ」
「まず文字が女のものだ。
そして統計学的に『あなた』を漢字で書くのは女子の方が多い。
それに悪戯が目的ならば、比較的暇な二日目や三日目を指定する筈だからな」
雄二の意外な特技発見。
「そうなんだ。行った方がいいかな？」
「それはお前次第だろ。
あと、間違ってもこの手紙のことを姫路や島田に知られるんじゃないぞ」

「うん、わかったよ」

たしかに島田さんに知られたら僕はどんな折檻を受けるかわからない…

だけど、なぜ姫路さんにも知られたらいけないんだろうか？

キーンコンカーコン♪

「げっ、開始五分前のチャイムだ。急ぐぞ明久！」

「うん！」

今日はのんびり姫路さんと話す時間はなさそうだな。

そんなことを考えながら僕と雄二は教室を目指した。

第３３問　僕と未来予知とかわった巫女さん（後書き）

座談会で予告していた境内院美娘登場です。少しばかしプロフィールを

～境内院美娘～
性別　女
身長　１５２ｃｍ
体重　本人の希望により黙秘
好物　だし巻き卵

とある神社で巫女をやっている少女であり、家庭の事情から学校には通っていない。
どんな相手でも分け隔てなく接してるように見えて何も考えてなかったりする。
髪の色は黒であり、仕事のとき以外はおろしている。
巫女としての力量は確かなのだが……？

第３４問　僕と買い出しと温かな手（前書き）

ＳＨＩＮさん、ｄ．ｃ．２隊長さん、感想ありがとうございます！

第３４問　僕と買い出しと温かな手

明久ＳＩＤＥ

「はぁ…
今日は朝から色々と大変だったなぁ…」

「なにかあったんですか？」

六時間目の授業が終了し、一息つく僕に姫路さんが話しかけてくる。

「いや、今日の朝ちょっとね…」

登校中は変な巫女さんに出会うわ、財布は僕に渡したまんまにしとくわ、まさかのラブレターでてんやわんやなのだ。
だけど、姫路さんがこの事を知ったらなにかしら手伝おうとするだろう。
それでは姫路さんに悪いし、ラブレターの事はできれば知られたくない。

「朝…ですか？」

「うん…
だけど、大したことじゃないから気にしないで」

「そうですよね…
大したことなんかじゃないですよね…」

ん？

なんで姫路さんはどことなく悲しい顔をしているのだろう？

「どうしたの姫路さん？どこか具合でも悪いの？」

「あっ、いえ…なんでもないんです。本当に…なんでも…」

姫路さんはこう言っているけどなにかある筈だ。僕には言えないなにかが…

そう、例えばラブレターの送り主は姫路さんであるとか。

……いや、そんなことあるわけないか。

仮に姫路さんが書いたとすれば贈り名は『吉井様へ』ではなく『明久君へ』になるはずなのだから。第一、姫路さんが僕に好意を抱くという事自体ありえない。

「全員席につけ！」

ＨＲをやるために鉄人が教室に入ってくる。相変わらずでかい声だなぁ…

「今から強化合宿のしおりを配る。

各自熟読し、自分の必要なものは用意しておくように」

そう言って鉄人は各列の先頭にしおりを配っていく。

「あっ悪い、吉井のぶんないわ」

僕の前にいる福村君が言う。鉄人のやつ、配る冊数を間違えたな…

「て「西村先生と呼べ！」

なんという反応力…

普通『て』の一言で言いたいことがわかるやつはいない筈だ。

例えば『鉄〇２８号』の可能性だってあるのに…

「西村先生、僕のしおりがないんですが？」

しょうがないので渋々と西村先生と呼ぶことにする。

「ん？おかいしいな。

俺は人数分ちゃんと印刷してきた筈だぞ？」

さすがに鉄人がミスしたとは考えづらい。なら、なんで僕の分がないんだ？

僕にしおりが渡らなくて得する人なんて一人も――――

「しょうがないな吉井、姫路に見せてもらえ」

いた…

一人どころかこのクラスのやつらのほとんどが得する…

僕の分がなければ自ずと隣席である姫路さんに見せてもらうことになるだろう。

それは野次馬共からしてみればかっこうのエサだ。

事実、僕の列の先頭である須川がこちらを見てにやけている。

たぶん、こいつが僕の分を持っているに違いない…

「姫路さん、しおりを見せてもらってもいいかな？」

別に姫路さんに見せてもらうのが嫌な訳でないし、むしろ嬉しかっ

たりするので須川たちの思惑にのせられてみる。

「は、はい」

姫路さんはなにをそんなに緊張しているのだろう？

ことんっ

そんな木と木がぶつかり合うような音がした。

「その…こうした方が見やすいですよね…？」

見れば姫路さんが自分のちゃぶ台を僕のちゃぶ台とくっつけていた。

更に、それにあわせて姫路さん自身も僕に急接近してくるのだから

理性は崩壊寸前だ。

「まずしおりの３ページの持ち物を確認しておけ」

なになに持ち物は……

着替えと、勉強道具、それに体育着に姫路さんの甘い香りが僕の鼻

腔をくすぐって……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

「――以上で強化合宿の説明を終了する」

はっ!?

やばい、あまりの夢心地につい微睡んでしまっていた…

持ち物すらまともに把握してないぞ…

「明久君、西村先生の話、聞き逃してましたよね?」

「うん…

ごめんね、せっかく姫路さんがしおり見せてくれたのに…」

なんとも情けないことだ。

姫路さんの厚意をまさか自分で無駄にしてしまうなんて…

「いいんですよ。

そんなことより、明久君はしおりもないんですから一緒に準備しま

せんか？」

「姫路さんはそれでいいの？」

「いいと言うか、むしろそっちの方が…」

姫路さんの声が段々と小さくなっていき聞き取れなくなってくる。

なぜだか姫路さんはこういったことがたまにあるが、そんなに言いにくいことなんだろうか？

「じゃあ、よろしくね姫路さん」

「こちらこそよろしくお願いしますね明久君」

別に姫路さんに見せてもらわなくても須川から取り返したり、雄二から借りるという手もあるが今回は姫路さんの厚意に甘えよう。

「合宿は明後日ですから早速、今日の帰りに買い出しに行きましょう」

「えっ…今日はちょっと…」

「なにか用事でもあるんですか？」

境内院さんに財布を返す予定だっただなんて言える筈がない。

「う、うん…

だからさ、買い出しは明日でもいいかな？」

「でも明日はゲリラ豪雨の予報がでてますよ？」

ゲリラ豪雨の予報ってどんな予報だ…

「そっ、そうなんだ…」

でも、確かに今朝のニュースで明日は大雨だと言っていたなぁ…
そんな大雨の中、姫路さんを付き合わせるのは悪いから今日買い出しに行くしかない。それに境内院さんの所に行くのはそのあとでもいいだろう。

「わかったよ。今日の帰りに買い出しに行こうか？」

「はいっ！」

誰かと買い物に行くのが嬉しいのか姫路さんはとても笑顔だった。
後夜祭のオレンジジュースの件でも思ったが、案外姫路さんは子供っぽいところがあったりする。

「そういえば確か今日は冷凍食品が特売日だったなぁ…」

「そうなんですか？」

「うん。今まで一人暮らしだったから特売日については詳しいんだ」

あまり自慢にはならないが僕の数少ない特技の内の一つである。

「でも、あまり冷凍食品ばかり食べていては体に悪いですよ」

「そうだよね…
だけど、金銭的にも時間的にも冷凍食品以外の弁当がきつかったり

するんだ…」

「そうなんですか…
なら、私ので良かったら明久君の朝と夕のご飯も作ってきますよ」

できれば手放しで喜びたい状況だが、そうもいかない。

「それはいいよ。
姫路さんには姫路さんの生活があるんだし、僕は姫路さんにお弁当をもらえるだけで充分嬉しいよ」

そう、僕にはそれだけで充分なのだ。過剰な期待はしない。
そうしてしまえば、今の関係にさえ戻れなくなってしまいそうだから…

「私には私の生活……
そうですよね。いらないお節介をやいてしまってすいません」

姫路さんも姫路さんなりに思うところがあるのか、なにやら思案顔になってしまった。

「姫路さんが謝ることじゃないよ。それより、早く買い出しに行こうか？」

「そうですね。今日、雨が降ってくるとも限りませんから早く行きましょう」

～睦月スーパー～

放課後、僕と姫路さんは近所にある睦月スーパーに来ていた。
姫路さんと僕の家が近いということもあって姫路さんもよく来るようだ。

「えっと…
買わなきゃいけないのは雨具と飯盒炊飯用の容器ですね」

姫路さんがしおりを見ながら教えてくれる。

「なら5番レーンと13番レーンだね」

目的も決まったので僕たちは目的地へと進んでいく。

「あっ！
明久君見てください！これかわいくないですか」

姫路さんが容器売り場の近くにある箸売り場の前で目を輝かせていた。
見るとそこにはウサギの模様のはいった箸が売られていたのだ。
ウサギの髪飾りといい、姫路さんはウサギが好きなのだろうか？

「買ってあげるよ」

「い、いですよ…明久君に悪いですし…」

「いいって。
今日の買い出しに付き合ってくれたお礼ってことで買わせてよ」

本来なら姫路さんは僕に付き合う義理はないのだ。
ならばせめてなにか姫路さんのためになることをするのが普通ではないだろうか。というのは建前で本当は姫路さんの喜ぶ顔が見たかったりするだけだ。

「ね、僕にこのウサギの箸買わせてよ。きっと姫路さんに似合うと思うよ」

「なら…お願いしてもいいですか？」

姫路さんもやっと折れてくれたようだ。

「もちろん」

「ありがとうございますね、明久君」

嬉しそうに笑う姫路さんにはにかみながら笑い返す。

「初だね～」

突然のどこかで聞いたことのある声に振り向く。

「境内院さん！？」

「いやぁ、今朝方ぶりだねヨ・シークン」

誰だ、そのどこぞの政治家のような人物は…

「あの、すいませんがどちら様ですか？」

境内院さんを知らない姫路さんがおずおずとたずねる。

「私？

私は境内院美娘だよ。よろしくね～」

「姫路瑞希といいます。よろしくお願いしますね。

ところで明久君とはいったいどういった関係なんですか？」

「今朝ばったり道でぶつかっただけだよ？

大丈夫、安心して。別に私はみずちゃんの邪魔する気なんかないからさ」

邪魔って、いったいなんのことだろうか？

まさか買い物の邪魔をするわけでもあるまいし…

「みずちゃん…？」

「そう、瑞希ちゃんだからみずちゃんだよ～」

境内院さんは勝手に呼び名を決めたりするのが好きなのだろうか？

まぁ、なんというか相変わらずマイペースな人である…

「そういえば境内院さん、今朝の忘れ物だよ」

カバンから境内院さんの財布を取り出す。

「んにゃ、それはよっちゃんにあげるよ」

次はよっちゃんに呼び名が変わった…

「って、さすがに財布なんて貰えないよ！」

「いいから、いいから、開けてみなよ～」

「開ける？」

「そうそう、財布の小銭入れをパカッとね」

若干の罪悪感にかられながらも境内院さんに言われた通り、小銭入れを開ける。

そこには硬貨は一切入っておらず、一枚の紙が折り畳んで入っていた。

「魔除けのお札だよ。

よっちゃんは憑かれてるからその保険としてあげるよ～」

それはありがたい。ありがたいのだが…

「さすがにタダで貰うわけにはいかないよ」

「そう？

なら、お代として５００円くらい貰おうかな？」

５００円かぁ…

学生としては決して安い額ではないが、僕に憑いているのが悪霊だったりしたら嫌だ。

「はい、５００円」

自分の財布から５００円を取り出し、境内院さんに手渡す。

「ありがとね～
ふぅ…これで、なんとか一週間はもつよ…」

「「えっ…」」

境内院さんのとんでもない発言に姫路さんと声を合わせて驚いてしまう。

「もしかして美娘ちゃんは５００円で一週間暮らしてるんですか？」

「うん。
今日みたいな冷凍食品の特売日に買いだめしといて毎食一つずつ食すんだよ」

以前の僕にも退けをとらない程の食生活だ…
よくそれで霧島さん並に成長したものだ。
となると、島田さんは僕らが思いもよらない様な貧相な食生活を送っているに違いない…

「なんというか壮絶ですね…
今度なにか料理を作ってあげましょうか？」

「みずちゃんは優しいね…
だけど私は巫女だから人様の世話になっちゃダメなんだよ…」

そう言う境内院さんはとても悲しそうだ。
彼女の様な性格なら本当は色んな人と出会い、関わりたい筈なのに

家業でそれもままならないのだろう。

「そうなんですか…」

対する姫路さんもすごく悲しそうだ。
どうにかして境内院さんのためになるようなことはできないだろうか？

……

「そうだ！
境内院さん、僕らと友達になろうよ。そうすれば僕も姫路さんも境内院さんにご馳走してあげれるよ。
だって、友達にはそういう遠慮はいらないでしょ？」

「それは名案ですね。
私たちと友達になりましょ、美娘ちゃん」

姫路さんもこの案に賛成してくれるようだ。

「でも、それじゃあご飯のために友達になるみたいで悪いよぅ…」

「だ、か、ら、友達にそういった気遣いはいらないんだってば」

「そうですよ。
美娘ちゃんはもう私たちの友達ですから気遣いなんていらないんです。
それとも、私たちと友達では嫌ですか？」

「ち、違うよ！

ただ、私のこと友達って言ってくれるのは嬉しいけど…嬉しいんだけど…」

なにか昔にあったのか境内院さんは言いづらそうな様子だ。

「なんで境内院さんが渋ってるかわからないけど、境内院さんが友達になりたいなら今はそれでいいんじゃないかな？」

そう、いつまでも過去を引きづっていてもなにも変わらないんだ。
なにかのきっかけで少しずつでも変わっていかなきゃいけないんだ。
もう、過ぎ去ったものを取り戻すことはできないのだから…

「うん…
そうだよね。よろしくねよっちゃん、みずちゃん」

「はい、よろしくお願いしますね美娘ちゃん」

「じゃあ、今日はさっそく僕の家においでよ。
姫路さんと境内院さんにご馳走するからさ」

姉さんは今日、仕事で帰ってこないので境内院さんがいても問題ないだろう。

「なら私も手伝いますよ」

姫路さんの料理が食べられるなんて思わぬ朗報だ。
これは僕も退けをとらないようにしないとだね。

「私は料理なんてしたことないんだ…
役に立てなくてごめんね」

「だから気にしなくていいって。
じゃあ、早く買い出しを終らせて家に行こうか？」

「そうですね。まだ買わなきゃいけないものもありますから早くしましょう」

～数時間後～

「じゃあまたね。境内院さん」

「よかったら今度は私の家にも来てくださいね」

僕の家での食事を終え、その後に色々と雑談していたら8時を過ぎていたので境内院さんを見送り出す。

「うん。今日はたくさんご馳走になったよ。ありがと～」

手を振りながら帰っていく境内院さんは笑顔だった。

「満足してくれたようでよかったですね」

姫路さんの言う通り、境内院さんに満足してもらえたようでなによりだ。

「うん、本当によかったよ。それに僕もすごく嬉しかったしね」

「なにがですか？」

姫路さんの思わぬ発言に思わず転けそうになる。

「なにって…

姫路さんがパエリアを作ってくれたことだよ」

作ってくれると約束はしていたが、まさかこんなに早く覚えてくれるとは思わなかったのだから驚きだ。

そしてなにより、完成度が尋常じゃなかった。

それは何年も前から作っている僕ですらうなる程に。

だけど、そういったことの一つ一つが僕にとっては不安なんだ…

姫路さんは優しいから僕みたいなやつでも喜ぶなら、それを率先してやってくれる。それは嬉しいことなんだけど、同時に僕を不安にさせる。

いつか僕に疲れてしまうんじゃないか…

いつか僕なんかと関わりたくないと思われてしまうんじゃないか…

いつか…僕の知らない遠いところ……そう、僕の手の届かない遠いどこかに行ってしまいそうで…

それが怖くてしょうがないんだ。

僕の日常から君がいなくなる、その一つの事柄が僕にとってはなによりも…

「明久君、いつまでも外にいると風邪をひきますよ」

姫路さんは僕の手を握ると優しく笑いかけてくる。

「うん…」

夜風で冷えきった僕の手は温かな手に包まれ、何物にも代えがたい幸せを感じていた…

第３４問　僕と買い出しと温かな手（後書き）

どういう訳だか最近、パソコンの回線状況がおかしいです…
今回も苦肉の策として携帯からあげている始末ですし…
それはさておき、アンケートの結果ですが、なんと全て同着１位という状況になってしまいました。
ですので、再度アンケートを取り直したいと思います。
よろしかったらアンケートのみでいいので書き込んでやってください。
では、次回もよろしくお願いします！

第３５問　僕と心理テストと現地集合（前書き）

ＳＨＩＮさん、きるぐまー１号さん、感想ありがとうございました！
ネット回線の復旧にはしばらく掛かりそうです…
今回は心理テストがあるので、皆さんやってみてはいかがでしょうか？

第３５問　僕と心理テストと現地集合

明久ＳＩＤＥ

初夏の日差しに照らされ、僕、姫路さん、雄二、島田さん、ムッツリーニ、秀吉のいつもの六人は電車を待っていた。

「まさか現地集合だなんて思わなかったよ…」

しおりを見て知ったのだが、いくらなんでもおざなりすぎではないだろうか…

「まぁ、そんなことを今さら愚痴ってもしょうがないだろ」

「そうですね。それよりも今の状況を楽しみましょう」

「そうじゃのぅ。
わしらはＦクラスゆえにお金はかけてもらえんのだから諦めるしかないのじゃ」

「木下の言う通りよ。それにルートは自分で決められるんだからいいでしょ」

「……清貧」

どうやら僕以外のメンバーはこの状況をそこまで苦としていないようだ。
無論、僕としてもこの状況は嬉しいのだが、できれば姫路さんと二人っきりで…

っと、それはさすがに高望みをしすぎというものだろう。
だけどせめて、向かいか隣の席にはなれたらいいな。

「おい明久、置いてくぞ」

いつの間にか来ていた電車乗り込んでいた雄二が言う。

「あっ、今行くよ！」

僕は手荷物を拾い上げると電車に乗り込んでいった。

～電車内～

電車に乗り込んだ僕たちは運よく三人ずつ向かいで座れる席を見つけ、座っている。僕の正面には姫路さん、その隣には島田さん、秀吉と座っており、僕の隣には雄二、ムッツリーニが座っている。

「景色がきれいですね」

車窓から外を眺める姫路さんが楽しそうに言う。
どうやら合宿先はかなりの田舎らしく、既に田畑等の風景が広がっていた。

「確かにきれいだね。ここならのびのびと遊べそうだから安心したよ」

「遊びに来た訳じゃないんだから、しっかり勉強だってするのよ」

痛いところを島田さんにつかれてしまった…

「わかってるって…」

とは言ってみたものも、現地に着いたら勉強どころではないだろう。
なんとか鉄人たちの目を掻い潜って脱出しなければ…

「明久君、勉強中に抜け出しちゃダメですよ」

うっ…
姫路さんに考えてることが完全にバレてる…

「明久、一人で抜け駆けなんて許さないぞ？」

「……その話、一枚かませろ」

なぜ雄二とムッツリーニは便乗してきたんだ…
今の話の下り的には僕が謝る場面だよね！？

「もう、坂本君に土屋君もダメですよ。
私もできる限りはサポートしますから勉強してください！」

姫路さんのワンツーマン授業…
教師服を着た姫路さんが僕個人に手取り足取りの指導…
遊んでる場合じゃない！これはなんとしても個人レッスンをうけなければ！

「もちろん僕は真面目に勉強するよ」

右手でガッツポーズをとりながら高らかに宣言する。

「そのいきですよ明久君」

「不純じゃ…」

嬉しそうな姫路さんに対して秀吉は不満そうだった。

～数分後～

「そういえばウチ、おもしろいものを持ってきたのよ」

そう言いながら島田さんが嬉々として一冊の本を取り出す。

「それはなんの本じゃ？」

「なんでも深層心理の本らしいわよ」

「面白そうですね。みんなでやりませんか？」

楽しそうにしている姫路さんには悪いが僕はあんまり乗り気にはなれない。

もし、これで僕の気持ちが姫路さんにバレたりすれば一大事だからだ。

ここは柔らかく断っておこう。

「悪いが、俺とムッツリーニはパスだ」

「……秘密主義」

たしかにムッツリーニはバレてしまうとまずいことが色々とあるだろう。

今さらな気もしないではないけど…

しかし、二人が断ったことにより僕もこれに便乗するというかたちでいけば姫路さんをさほど傷つけないで済む。

「そうですか…

坂本君と土屋君はやらないんですね…」

うっ…

姫路さんの悲しそうな顔を見ると言い出しづらい…

「明久君は…やってくれますか…？」

「うん、もちろんだよ」

結局はすんなりと了承してしまった…

だけど僕がうまくごまかせばいいだけの話だ。

姫路さんの悲しそうな顔を見続けることなんて僕にはできないのだから…

「じゃあ参加者は瑞希に吉井、木下でいいわね？」

「なにうえわしが自然に入っておるのじゃ！？」

「だって女子で秀吉だ「それ以上は言わせんのじゃぁぁぁーー！！」

秀吉が目一杯に叫ぶ。
運よく、この車両に乗ってるのが僕たちだけでよかった…

「まぁ、吉井のバカはほっといて木下はやるの？」

「やるのじゃ。
ここでわしの演技力を披露してみなをぎゃふんと言わしてみせようぞ」

たぶん今時ぎゃふんと言う人なんていないんじゃないだろうか…
そんな定番的な突っ込みをこらえる僕を他所に島田さんが本をめくっていく。

「じゃあ、これにしましょう。
あなたは今、鳥になっています。どこまでも果てしない大空を飛んでいくと、ある一つの場所にたどり着きました。果たしてその場所は？」

鳥になって行きたい場所？
鳥といえば自由なイメージがあるから、きっと自分が一番行きたい所がわかる心理テストなんだろう。

「僕は学校かな」

これで僕の勉強嫌いでバカというイメージともおさらばだ。
それに学校は姫路さんと関われる数少ない場所の内の一つだからね。

「私も文月学園ですね」

「わしはカーニバルじゃな」

姫路さんは勉強が得意だし、学校にいる時はとても楽しそうだから予想通りだ。
秀吉はなぜカーニバルにしたのだろうか？
秀吉ならば演劇場とか選ぶと思ったのに…

「えーと、今あげた場所はあなたが建前をつくって行きたがってる場所です。
本当のあなたの目的はその場所のもつ側面以外の付属的な部分にあります」

裏をかいたつもりが墓穴を掘った気しかしない……

「どう、みんなあってる？」

島田さん、お願いだからこれ以上僕の穴を深めないで！

「私は、その…あ、あってます…」

「わしもあっておる…」

恥ずかしそうにもじもじする姫路さんと落胆する秀吉。
どうやら二人には僕の目的はバレていないようだ。
一先ずは危険回避といったところだろう。

「で、吉井はどうなの？」

島田さん、君は僕の身を破滅させたいのか！？

「まっ、まぁ…間違ってないんじゃないかな…」

「ふーん。じゃあ、学校に来る本当の目的は？」

どうして島田さんは目を輝かせて僕の破滅への布石を固めていくんだ！？

そんなに僕の人生が終了するのが楽しいの！？

「島田、その辺にしといてやれ。

明久でも秘密にしておきたいことの一つや二つあるだろうしな」

雄二、今君が最高に輝いて見えるよ…

「（明久、貸し1だ。合宿先での夕飯を2割よこせ）」

隣にいる雄二が対価を要求してきたが、それでもこの危機的状況から脱せられた代償としては破格の安さだ。

「（うん、わかったよ。助けてくれてありがとう）」

「（気にするな。これからも持ちつ持たれついこうぜ相棒）」（ここで明久と姫路がお互いの気持ちに気づいちまったら面白くないしな）

雄二の腹黒そうな顔が見えた気がするが気のせいだろう。

というか、気のせいだと思いたい…

「じゃあ、次の問題いくわよ。

あなたの好みの異性の特徴を3つ紙に書いてください」

島田さんから僕たち三人にメモ用紙と鉛筆が配られる。

好みの異性の特徴かぁ…
やっぱり優しさが一番だよね。

『優しい』

次はできれば包容力があった方がいいかな?

『胸が大きい』

いったい僕は包容力に対してどんな認識をもっているんだろう…
とっさに書いてしまった答えを消すために消しゴムを探すが見当たらない。
しょうがない、このまま続行するとするか。

他に特徴かぁ…
うーん…やっぱり髪は長くてふんわりとした感じがいいかな?

『髪はロングでふんわりとした感じ』

あっ、でも天然気質で護ってあげたくなるような女の子も魅力的だなぁ…

『天然気質で護ってあげたくなるような人』

いや、でも真面目でいて芯の強い人も中々いいかもしれない。

『真面目で芯が強い』

さて、この中から三つだよね。うーん、どれにしようか?

「吉井、後はあんただけよ。早くしなさい」

「あっ、うん！」

もう考えてる時間なんてない！

と、そこで僕に妙案が浮かぶ。そうだ、これなら…

「書けたら坂本に渡してね」

「ちょうど今できたよ」

島田さんに言われた通りに雄二に紙を手渡す。

雄二ＳＩＤＥ

どれどれ、あの三人はなにを書いたんだろうな？

まずは姫路から見てみるとするか。

『優しい人』『一生懸命な人』『周りを元気にしてくれる人』

これじゃあ、素直に明久って書いたのと同義だろ…

でも姫路本人はうまくごまかせたと思ってるんだろうな…

まぁ、今さらな気もするし次は秀吉のでも見てみるか。

『優しい人』『わしに暴力をふるわない人』『わしを男扱いしてく

れる人』

あいつも大変だな……

涙で紙が濡れてるところを見るとよほど思うところがあったのだろう。

さて、お次が大本命の明久だな。どんな珍回答を書いてることやら…

『優しい』

これはみんな書いてるな。

『胸が大きい』

結構ストレートだな…

『髪はロングでふんわりとした感じ』

要するに姫路ご指名ってこった。

『天然気質で護ってあげたくなるような人』

あいつ、三つ以上書きやがった…

というか、今まで全部姫路の特徴じゃねぇか！

『真面目で芯の強い人』

芯の強い人ってのも姫路の隠れた側面だからな…

もう、いいから姫路って書きやがれ！

ったく、明久も姫路もなにを考えてるんだか…

今なら須川たちの気持ちが少しはわかるな…

『全部まとめて姫路さん（本人には内緒にしといて）』

って、正直に書いてやがった!?

本当にあいつはなにを考えてるんだ!?

「坂本、見終わった?」

「あ、あぁ…」

若干の呆れと動揺をなんとか隠しながら返事をする。

「じゃあ、続きいくわよ。

さっき、書いてもらった特徴をすべて兼ね備えた異性が同時にあなたに告白してきました。二人の特徴はそれ以外全く別です。

さて、あなたはどの特徴をもった方と付き合いますか?」

たしかこの手の型は、ここで答えた特徴が一番重視してるってやつだったな。

余談だが、これを実験した学者の話では胸が大きい方が選ばれたらしいけどな。

「わしは家庭的な人がいいのじゃ」

秀吉は家庭的な人を求めてるわけか。

って明久、まるで秀吉を親の敵のような目で睨み付けるな。

別にお前と違って姫路を指名したわけじゃないだろ…

「私は誰かのために笑って、泣けて、一生懸命になれるような人が

いいです」

「僕も姫路さんと同じかな」

お前ら本当にお似合いだと思うよ。
そりゃ、お前らの共通点だってことわかって言ってるのか…？
まぁ、どうせわかってないんだろうけどよ…

ビリッ！

「「「「えっ！？」」」」

島田が急に本を破りだした。というか、本を真っ二つってどんな力してるんだ…

「しっ、島田さんどうしたの！？」

明久、どうしたのじゃない。お前の責任だ。
今のお前と姫路は端から見たらイチャついてる様に見えるんだよ！

「み、美波ちゃん落ち着いてください。
そっ、そういえばお弁当作ってきたんですよ。美波ちゃんもいかがですか」

バカっ、今の島田には逆効果だ。
姫路は良かれと思ってやっているから、こちらの心配を他所に弁当箱を開けていく。

「さ、さぁみんなで食べてください」

姫路、普段だったらナイス機転といいたいが今の島田が怒ってる理由を考えてくれ！

「相変わらずおいしそうなお弁当だね」

あきひさぁぁぁ！！

お願いだからこれ以上島田の神経を逆撫でしないでくれ！

島田の正面に座ってる俺の身にもなってみろ！

「はい、みんなの分のお箸です」

姫路がみんなに箸を配っていく。

「あっ、早速そのお箸使ってくれてるんだ」

「明久君に買ってもらった大切なものですから♪」

ウサギ柄がついた箸を持って姫路が嬉々として言う。

明久、せめて言うタイミングを考えてくれ…

そして姫路、お前も少しは周りを見てくれ…

お前らは場を和ますためにやってるかもしれないがちっとも和んでないからな！？

「……」ガタッ

無言で立ち上がった島田が別車両に走って行ってしまった。

「待つのじゃ島田よ！」

秀吉がいち早く島田を追いかけに席をたつ。

「島田さん！」

「美波ちゃん！」

明久と姫路も秀吉に続こうとするが、俺はふたりを手で制止する。

「お前らはここで待ってろ。今は秀吉に任せとけばなんとかなるさ」

「うん…」

「わかりました…」

二人とも申し訳なさそうな顔をして席につく。

「私が美波ちゃんを怒らせちゃったんでしょうか…」

「きっと僕が怒らせちゃったんだよ…」

別に誰が悪い訳じゃない。

明久と姫路が島田の怒っている理由に気づけなくて、島田は島田で自らやり始めたことで自爆しただけだ。ただ、不幸が重なりあっただけなんだ…

「あぁ、やめろ。辛気臭いのなしだ。

この件については島田が帰ってきたら話す。それでいいだろ」

「うん…」

「はい…」

とは言ったものの、島田のやつ帰ってくるかな…
俺らの合宿は初っぱなから雲行きが怪しかった。

第３５問　僕と心理テストと現地集合（後書き）

現地に着く前からハプニング！？
果たして明久たちは美波と仲直りできるのか！？

第３６問　わしと島田と自制心（前書き）

堕落者断さん、感想ありがとうございました！

第３６問　わしと島田と自制心

秀吉ＳＩＤＥ

「島田よ！」

わしは突然席をたってしまった島田を追いかけ、走り出した。
おそらく島田が席をたってしまった理由は自制が効かなくなったのが原因じゃろう。

「待つのじゃ！」

車両間で島田に追い付き引き止める。いくら島田と言えども所詮は女子。
追い付くことくらいわけはないのじゃ。

「……」

島田は無言のまま立ち止まる。

「ウチってバカよね…」

寂しそうに、だけれど自嘲気味に言う島田にわしはなにを言ってやればいいのじゃろうか？
どんな言葉でも今の島田には逆効果な気がするのじゃ…

「吉井と瑞希の仲がいいのは――うーん、二人がお互いのことが好きなのはわかりきってることなのに、つまらない嫉妬なんかしちゃって…」

わしは励ませばいいのか？
わしは打開策を授ければいいのか？
わしは一緒に悩んでやればいいのか？
その答えは今のわしにはわからんのじゃ。わしがどうしたいかのさえも…
「わかってた筈なのに諦められなかった…
もしかしたら心中ではウチのことを好いてくれてるんじゃないか、
そんなバカみたいなことを考えてあの問題をだしたのよ…」
島田は後ろを向いておるからどんな顔をしているかはわからん。
しかし、床に落ちていく滴がすべてを物語っていたのじゃ。
「でも結果はご覧の有り様よ…
結局、ウチは吉井と瑞希の仲を再度認識させられるだけだった…
笑ってくれて構わないわ。バカな幻想を抱いて自分を苦しめた愚かな奴って…」
「わしは笑わんのじゃ」
「えっ…」
島田は涙が伝う顔を振り向かせる。
「わしは笑わん。どうして真っ直ぐな気持ちを抱いておる者を笑えよう？

もし、そんな輩がおるならわしに言うのじゃ。わしがお主の力になろうぞ」

結果はどうあれ人の想いをバカにしていい事などあっていい筈がないのじゃ。

「だけれど無謀だって思うでしょ？」

「では、お主は無謀だからと言って諦めるのか？
自分の気持ちに嘘をついて今まで通り暮らしていけるのじゃろうか？」

「……」

「今すぐ答えをださずともよい。答えは考え、考え抜いてだしたものでよい。
早くに決めてしまえば、それは後に後悔をうむ結果となるのじゃから。
ただ、明久も姫路も悪気があった訳ではないのじゃ」

今のわしにはこれくらいしか言うことはできん…
これで精一杯なのじゃから…

「ありがとう木下…」

若干ながら島田の顔は晴れておった。

「帰ろうぞ。みなが待っておる」

「そうね、帰りましょ」

明久ＳＩＤＥ

電車が終点につく間近、秀吉が島田さんを連れ帰ってきた。

「みんなごめんね。ウチはもう大丈夫だから気にしないで」

そう言って気丈に振る舞う島田さんの顔はさっきよりは晴れていたが、まだ暗さが残っていた…

「ごめん、島田さん…」

「美波ちゃん、ごめんなさい…」

理由はどうあれ、僕が島田さんを傷つけてしまったらしいのだから謝るのは当然だろう。

「吉井に瑞希も気にしないで。さっきのウチはどうかしてたのよ。それに、ウチの方こそみんなに迷惑かけちゃってごめんね」

本当は島田さんだって辛い筈なのに、それでいて島田さんは自分に否があると言った。そこにどんな想いがあるのか僕にはわからないけど、僕に否がない訳じゃない。

「島田さんが謝ることないよ。それよりもぼ「それ以上言わないで…」

島田さんに突然、言葉を遮られてしまう。

「ここでこれ以上吉井が謝ったら、また八つ当たりしちゃいそうだから…
これ以上…吉井や瑞希に優しくされたら、また嫌なやつになっちゃうから…お願い…」

なにが島田さんをここまで追い詰めてしまったのか僕にはわからない。
だけれど真剣に悩んでその結果、僕に謝られたくないと言うなら僕はそれに従う他ないのだ。

「島田も島田なりに思うところがあるのじゃ。
じゃから、今は詮索せずにいつも通り接してくれるかのぅ？」

「もちろんだよ」

「私も美波ちゃんさえよければ…」

僕と姫路さんだって、それを望んでいるのだから断る理由がない。
むしろ、こちらからお願いしたいくらいなのだから。

「ありがとう、吉井、瑞希…」

手の甲で涙を拭く島田さんを見て胸が痛む。
僕は本当になんのわだかまりもなく、いつも通り接していけるのだろうか…
僕自身はそれを望んだとしても島田さんが本当は望んでいないのかもしれない。

もし、そうだとすれば僕はなにをしてあげられるのだろうか？

「さっ、もうこの話は終わりだ。電車も着いたことだし降りるぞ」

雄二に続くようにみんなが各々の荷物をもつ。

外に出てみれば豊かな緑が辺り一面に広がっていた。

相当な田舎なのか古い木造建築の家もかなりの数がある。

「あそこの家なんかオバケが出そうだな」

「へ、変なこと言わないでよ」

「そっ、そうですよ。オバケなんている筈がありません！」

雄二の冗談を真に受ける姫路さんと島田さんはオバケが怖いのか、体をぶるぶると震わせていた。よかった、一応はいつも通りみたいだ…

「雄二も冗談を言っておらずに合宿先を目指そうぞ」

「……時間厳守」

ムッツリーニの言う通り、集合時間までさほど余裕がない。

「じゃっ、行くとするか」

雄二を先頭に僕たちは合宿先を目指す。

第３６問　わしと島田と自制心（後書き）

私事ですが先日、テイルズオブエクシリアを買いました。
思いの他、父がはまってしまいプレイ時間的な意味で危険な状況です…

第３７問　僕と料理と不可欠な存在（前書き）

黒炉さん、感想ありがとうございました！

第３７問　僕と料理と不可欠な存在

明久ＳＩＤＥ

「ふぅ…」

合宿先の自室に荷物を置き一息つく。
この宿泊施設は文月学園が買い取ったもので、施設内ならばどこでも召喚獣を召喚できるらしいのだ。試しに召喚してみようかな？

「サモン！」

右手を振り上げ、明希を召喚する。

「ＺＺＺ…」

寝てた…
相変わらずフリーなやつだ…

「明希、起きて」

片手で明希を揺さぶるようにして起こす。

「ほわぁ…？
どうした主人（マスター）。今日から一週間は試召戦争はないんだろ？」

確かに明希には合宿のことを伝えてあるのだが、真っ昼間から爆睡とはいかがなものだろうか…

「いや、合宿先に着いたから一応明希も出しとこうと思ってね」

「そいつはありがたいな」

腕組みをしながらふんぞり返る明希に若干呆れながらも荷物の一部を明希の方に渡す。

「せっかくだから荷物整理手伝ってよ」

「けっ、俺はそのために呼ばれたのかよ」

悪態をつきながらもちゃんと荷物を整理しだしてくれる。素直じゃないなぁ…

「にしてもボロい部屋だな…」

明希の言う通り、部屋の中も相当な有り様だ。
姫路さんや島田さんには悪いけど、本当に幽霊とかが出そうな程に…

「それはしょうがないよ。なんでも築１２０年らしいからね」

「ったく、宿泊施設くらいまともなのにしとけよな」

明希の言いたいこともっともだが、破格の安さでの合宿であるから我慢するしかない。第一、ホテルなんかに泊まることになればともてもじゃないが資金がもたないのだから、僕にとってはこちらの方がありがたかったりするのだ。

「ん？
そういや、姫路さんやいつものやつらは？」

「あぁ、姫路さんなら島田さんと同じ５０１号室。雄二が５１６でムッツリーニが５１７、秀吉が５１８で僕らの今いる所が５１５号室だってさ。
なぜだか僕たち４人だけが個室なんだけどね…」

そう、どういった訳だか僕、雄二、ムッツリーニ、秀吉の４人はそれぞれに個室が用意されていた。できれば相部屋の方がよかった身としては残念だ…

「じゃあ、俺は姫路さんの所に――――って、離せ主人！」

「行かせるわけないよ！」

明希のしっぽを掴み、必死に進行を阻止する。

「俺は姫路さんの所に行くんだ！」

「だからダメだって！
姫路さんは島田さん以外とも相部屋してるんだから明希が行ったら話がこじれるでしょ」

一応、明希のことは僕の親しい人＋αしか知らないのだ。
そんな状況で一人でに歩き、喋る召喚獣が見つかったとあれば後々面倒なことになりかねない。

「だとしても俺は姫路さんに会いに行くんだ！」

自分の尻尾が切れるのではないかという程の力を込めて明希は進もうとする。

明希の痛みは僕にもフィードバックするのだからいい加減止めてほしい。
それにしても明希の姫路さん好きには困ったものだ。いったい誰に似た事やら…

「そりゃ、お前だろ」

突如、ドアの方から聞き慣れた太い声が聞こえてくる。

「あっ、雄二！」

「よっ、明久に明希。ところで、お前らなにやってるんだ…」

雄二が若干呆れ気味に言うのも無理はないだろう。
なんせ、ドアを開けたら自分の召喚獣の尻尾を掴んで引き止めてるという滑稽極まりない光景が広がっているのだから…
しかも、それが観察処分者特有のフィードバックを受けて尻尾を掴んでいる本人までもが痛みに顔をしかめているのだから相当なものだ…

「理由は後で説明するから雄二も明希を止めてよ！」

「普通に召喚解除すればいいんじゃないか？」

……言われてみればそうだ…
そんな簡単な事にも気づかなかった自分に若干自己嫌悪しながらも明希の召喚を解除する。

「そういえば雄二、どうしたのさ？」

「あぁ、そうだったな。
あまりにもアホらしい光景のせいで忘れるところだった。今から飯だ、行くぞ」

つまるところ、雄二は僕を迎えに来てくれたということだろう。

「あっ、うん。ありがとう雄二」

荷物整理はまだ終わっていないが、それは夕飯の後でもいいだろう。
そう考え、僕と雄二は夕飯の用意されている会食堂へと向かった。

～会食堂～

「あっ、姫路さん」

会食堂へ着くと、ちょうど姫路さんを見つけたので声をかける。

「明久君こんばんは。よかったら隣どうですか？」

「うん、ありがとね」

姫路さんの隣に座れたのはいいのだが、周りを見渡して思う。

僕にこれ以外の選択肢が用意されていたのだろうかと…

僕の座った席以外には軒並み『吉井明久のみ使用禁止』のメモ書きが置いてあった。

須川たちがやったのはわかりきっているいるが、一歩間違えばイジメではないだろうか？
もちろん、僕としては姫路さんの横で食事をするのは嬉しいのでなんの支障もないのだが、なんとも言えない複雑な気持ちだ…

「山菜がたくさんありますね」

「そうだね。やっぱり田舎ではこういった料理が主流じゃないのかな？」

姫路さんの言う通り、ざっと見渡しただけでもワラビ、ふきのとう、ゼンマイ、キクラゲ、ヨモギといった色とりどりの山菜が天ぷら等にされ並べられていた。

「おーい明久！飯持ってこっちに来い！」

僕の席から少し離れた所から雄二の声が聞こえる。
おそらく雄二は昼間に僕がつくった借りを返せと要求しているのだろう。
確か内容は夕飯の2割だったはずだから適当に見繕えばいいはずだ。
そう思い、僕はおかずをいくつか小皿に移して席をたつ。

「姫路さん、ちょっと雄二の所に行ってくるね」

「夕飯の時間も限られてますから、なるべく早く帰ってきてくださいね」

「う、うん」

早く帰ってきてなんて、なっ、なんだか新婚夫婦みたいだ…

っと、いけない、いけない。
こんなに顔赤らめたまんまじゃ、また雄二にからかわれかねないよ。
気を引き締めて雄二の所を目指すために周りを見渡すと、霧島さんの向かいに座る雄二を見つける。

「雄二、約束の品だよ」

「……明久、てめぇは喧嘩うってんのか？」

「やだなぁ、ちゃんと夕飯の2割用意したじゃないか」

いったい何が不満だというのだ。

「衣だけ山盛りにされて誰が嬉しいんだよ！」

「それでも、ちゃんと2割じゃないか！」

そう、天ぷらから一々衣だけを剥いで全体量の2割程度にしたというのになんの文句があるというのだ。

「こっちだって大変だったんだよ！」

「お前のその無駄な努力は別の方向に向けられないのか！？」

二人で眼のくれあいをしながら硬直する。

「……雄二、私の分あげるから我慢して」

そう言って霧島さんは雄二の口に自分の天ぷらを押し込む。

「ほひふぉうほ、ほへふぁほはへほふひはへほふぁふはほ」（おい翔子、これはお前の食べ掛けだろ！？）

なに、霧島さんの食べ掛けだって！？
って、ことは間接キスってことじゃないか！？

「異端者レーダーに反応があった！
被告、坂本雄二をただちに連行し異端審問会を開始する！」

そんな声がどこからともなく聞こえてくると、雄二は黒覆面の集団に取り囲まれ、連行されてしまった…
薄々は勘づいていたけど、やっぱり僕と姫路さん以外は異端者の対象なんだ…
ところで異端者レーダーってなんだろうか？
もしかして、そのはた迷惑な代物で僕と姫路さんの行く先々に現れてるんじゃ…
壊せるなら、なるべく早く壊しておいた方が良さそうだな…
そんなことを考えながら姫路さんの所に戻る。

「姫路さん、ただいま」

「ひゃぁ！？あっ、明久君…？」

なんで僕はそんなに驚かれているのだろうか？
多少疑問に思いながらも席に着く。

「そっ、その…少しおすそわけですけど、いりますか…？」

姫路さんがあのウサギの箸で自分のヨモギ天ぷらを挟みながら言う。
きっと僕が雄二に夕飯をとられたと思って気をつかってくれたのだ

ろう。

「僕は大丈夫だよ。それよりも姫路さんは自分の分食べなよ」

「そうですよね…」

姫路さんはあからさまに落ち込んだ様に箸を引っ込める。
そんなに僕におすそわけをしたかったのだろうか？

「ほら、もう時間もないし早く食べちゃわないとだよ」

雄二の所で一騒動あったため、夕飯の時間がほとんど残っていない。
そんな状況では姫路さんから貰ったものを食べきれる保証はない。
そうすればせっかくの姫路さんの厚意を踏みにじってしまう結果になるのだ。
それでは申し訳ないことこの上ないので僕は自分の分だけを急いで食べ始めた。

……なにかが足りない…

ふと、そんな考えが脳裏をよぎる。
おいしいはずのこの夕飯もなにかが決定的に足りない気がした。
その疑問は段々と大きくなっていき、確固なものとして僕の中に根付いていく。
なにが足りないかと聞かれれば答えることはできない。
それは僕にとって普通になりすぎていることなのか、はたまた気にする程でもないことなのかもわからない…
ただ、漠然とした違いを感じているだけだった…

「明久君…？」

姫路さんが心配そうに僕の顔を覗きこんでいる。

「どうしたの姫路さん？」

「どうしたのはこっちの台詞ですよ。明久君、さっきからお箸を持ったまま固まっていましたけどなにかあったんですか？」

僕は姫路さんに心配される程固まっていたのだろうか？

確かに疑問を抱いて箸を止めていた自覚はあったがそこまでとは思わなかった。

「いや、なんでもないよ。ちょっと考え事があっただけだから気にしないで」

「ならいいんですけど…

あっ、でも私で力になれることがあったらいつでも言ってくださいね」

「うん、その時はよろしくね」

姫路さんにそう言って、一つの可能性に気づく。まさか――――

いや、そんなわけないか…

例えそうだとしても、いつかはケジメをつけなきゃいけない時がくるんだ。

その時には、僕はそれを手に入れることはできないのだから、今の内に慣れておかなければいけないんだ。

君が作る料理以外に…

僕はその一つの可能性が怖かった。
僕にとって段々と君が欠かせない存在になっていくのが…
僕にとって君がなくてはならなくなっていくのが…
僕が君に依存してしまっているのがなによりも…
そうなってしまえば僕は来るべき結末に耐えられなくなってしまう。
それは僕にとってどんな未来を予期しているのかも物語っている。
だから今の内に慣れておこう。
僕の隣にいつもいてくれた君がいないことを…

第３７問　僕と料理と不可欠な存在（後書き）

ネット回線がようやく正常になりました。
ここまで長かった…（汗）

第３８問　僕とのぞきと来るべき災難（前書き）

黒炉さん、感想ありがとうございました！
ついにストーリー評価点数が１００ｐｔになりました！
これも一重に読んでくださるみなさまのおかげです。
これからも拙作をどうぞよろしくお願いします。

第３８問　僕とのぞきと来るべき災難

明久ＳＩＤＥ

「今日みんなに集まってもらったのは他でもない」

夕飯のあと、僕たちＦクラス男子は雄二の部屋に集合させられた。
はっきり言って個室にこの人数が集まると狭苦しいことこの上ない。

「あと十分で女子が入浴の時間となる！」

「なんだって！？」

「覗くしかないじゃないか！」

「レッツパラダイス！」

こいつらアホばっかだ…
まさかなんの警備もされていないと思っているのだろうか？

「しかも俺は覗きを成功させる方法を考えてきた！」

「さすが坂本だぜ！」

「準備よすぎだろ！」

「女子のＨＡ☆ＤＡ☆ＫＡ！」

このバカたちはほっといたとしても雄二がここまで覗きに意欲的な

のはおかしい。なにか裏があるに違いないな…

「そしてその作戦だが明久、お前の力を借りたい」

「嫌だね」

こいつが僕のことを頼る時はろくなことがない。

僕もみすみす泥舟に乗り掛かるほどバカじゃないから願い下げだ。

「そう言うなって。成功すれば姫路のＨＡ☆ＤＡ☆ＫＡを見れるぞ？」

「それでも嫌だね」

そんなことで姫路さんのＨＡ☆ＤＡ☆ＫＡを拝めたとしても、それは嫌われる原因にしかなりかねない。第一、どうやっても警備にあたる教師陣を抜くことは無理だろう。

「おーと、ここで余裕の発言が飛び出したぞ！

嫁のＨＡ☆ＤＡ☆ＫＡならいつでも見れるから、必要ないらしいですよ！」

これは試験召喚大会の時に聞き慣れた司会者の声だ…

たしか、君はＦクラスじゃなかったよね。なんでいるのさ……

というか相変わらずのこちらの意図を全く介さない解釈は止めてほしいものだ。

「さすが吉井、俺らとは格が違うな！」

「毎晩、見れるから必要ないってか！」

「まさかそこまでデキてたとは…」

こっちもこっちで相変わらずだ…

「明久…」

雄二が僕の肩に右手をのせる。今の雄二の目は真剣なことを話すときのものだ。

それだけ雄二にとって、この覗きは重要なことなのだろう。

「明希を召喚してくれないか」

「うん…

今は理由は聞かないよ」

「すまないな。すべてが終わったら話すさ」

これが僕と雄二の信頼関係。

お互いに悩んでいる時はなにも言わずに手を貸す。そんな悪友との固い結束。

「サモン！」

幾何学模様から明希が飛び出してくる。

「なんだこのむさ苦しい部屋は…」

まぁ、明希の言うこともごもっともだ。このボロくて狭い部屋に男子生徒が約５０人というのはむさ苦しい以前に人口密度が半端じゃ

なく多いのだから。

「明希、出てきて早々ですまないが俺らに協力してほしい」

「協力だぁ？」

いったい雄二は明希になにを頼むつもりだろうか？

「女子の入浴を覗く協力だ」

「はぁ？バカ言ってんじゃねぇよ」

明希が呆れるのも当然だろう。

いきなり覗きに加担しろと言われて首を縦に振るやつは――――

いっぱいいた……

自分のクラスを少し虚しく思いながらも、雄二と明希の会話に集中する。

「そんなこと言うなよ」

「嫌だって言ってんだろ。

そんなことして姫路さんに嫌われちまったら、どう責任とるつもりだ」

なんだろう、普段横暴な明希が正論を言ってると立派に見える…

よくある、『映画のジャイアンはいい奴』現象なんだろうけど……

「姫路のＨＡ☆ＤＡ☆ＫＡが見れ「協力するぜ」

切り返しはやっ！？
って、驚いてる場合じゃない。早く明希の召喚を解除しなきゃ！

……あれ？

召喚を解除したはずなのに明希が消えない。

「悪いな主人（マスター）、俺にはこれがあるから召喚解除は効かないぜ」

そう言って明希は自分の右腕に付いている腕輪を見せてきた。まさか！？

「ご名答。これはババァが作ってくれた俺用の腕輪だ」

ババァが作ってくれた腕輪……
それは試験召喚大会の優勝商品としてババァが作ると言っていたはた迷惑な品。
召喚フィールドがなくても明希に自由を与えてしまう最悪の効果をもつ腕輪だ。
強化合宿の頃にはできると言っていたけど、連絡がないからできていないと思ってたのに…

「でも腕輪の効果は召喚フィールドのなしでも明希に自由があるってやつじゃ…」

「確かにそうだが、召喚フィールド内なら召喚解除を拒否する機能もあるらしいぜ。まぁ、さっきは突然のことで追い付かなかったんだがな…」

さっきというのはおそらく、ここに着いたばかりのことを言っているのだろう。

「ほー、すげぇ効果じゃねぇか明希」

「まっ、これで合宿中の俺は晴れて自由の身ってこった」

そう、この宿泊施設全体に召喚フィールドが張られてるのと同じ作用が働いているのだから今日から一週間、明希は自由なのだ。

「じゃあ早速作戦会議を始めようぜ」

「そうだな」

明希はご機嫌で雄二の肩に乗ると二人でなにやら相談を始めてしまった。

まぁ、雄二がどんな作戦を考えてたとしてもあっちには鉄人や高橋先生がいるのだから心配ないだろう。僕はそう一人でに納得して自室に戻っていった。

そうだ、まだ荷物の整理をしていなかったんだっけ…

～自室～

「あれ…？」

部屋に戻ってきた僕は自分の目を疑った。

なぜなら、ちらけたままだった僕の荷物がきれいに片付いているの

だ。
もしかして旅館の人がやってくれたのだろうか？
だとしたらメモ書きとかが置いてあるかもしれない。
そう思い、僕は冷蔵庫の置いてある隣の部屋の扉を開けた。

「……」

「……」

赤い着物を着た少女と目があった。
黒い髪の毛に丸い瞳、歳は12～15といったところだろう。この子は誰だ？
旅館の従業員にしては小さすぎるし、この施設は文月学園が買い取っているのだから他の宿泊者の訳もない。

「えっと…君は誰？」

「私は淡雪。一夢（ひとつゆめ）　淡雪（あわゆき）」

なんだか人の名前としては不自然な感じがする。
それに気配もなんとなくだけど人とは違う気がした。

「それで淡雪ちゃんはここでなにしてるの？」

「私はここの主を災難から守りに」

ここの主…？
それは僕のことだろうか？

「一応、この部屋は僕のだけど」

「ならあなたを災難から守りにきました」
災難から守りにきたと言われても困ってしまう…
本当にこの子は誰なんだろうか？
「あなたの名前は？」
「吉井明久だけど？」
「吉井様ですか。
わかりました吉井様、以後私が座敷童子としてあなたをお守りします」
「あははは、よろしくたの――って、座敷童子！？」
あまりの事実に自分の耳を疑ってしまう。
だって座敷童子と言えば、よく妖怪系の話で出てくるあれのことだよね！？
「はい、座敷童子の一夢淡雪です」
どうやら僕の耳がおかしくなったわけではないようだ。
「えっと…座敷童子が僕になんの用かな？」
「ですから、あなたとあなたの大切な人たちに災難が迫っているのです。
私はそれからあなた方をお守りするためにやって来ました」

確かに座敷童子が家の主を災難から守ってくれるというのは聞いたことがある。
だが、だからと言ってこんな突拍子もない話をそう簡単にも信じられない。

「具体的にはいつぐらいにどんなことがおきるのさ」

「なにがおきるかは分かりませんが、明日に災難は訪れます」

明日とはまた急な話だ。

「ご心配なさらずに。
私をこの部屋においてくだされば吉井様をお守りできますから」

まぁ、部屋においておくぶんには困りはしないからいいだろう。

「じゃあ、よろしく淡雪ちゃん」

「私のことは淡雪と呼び捨てで構いません。
主である吉井様と対等であるわけにはいかないので」

「じゃあ僕のことも吉井とか明久でいいんじゃないかな?」

「いえ、主を呼び捨てで呼ぶなんて滅相もありません。
これは座敷童子の決まりでもありますのでご承認ください」

「わっ、わかったよ…」

意外とそこらへんについては厳格なようだ。
しかし幽霊が出そうな程おんぼろだと思ってたが、まさか妖怪が出

てくるとは…
世の中にはまだまだ不可思議なこともあるものだ。

「ところで淡雪はご飯とか食べるの？」

「いえ、基本的には食べなくても構いませんが、食を楽しむという概念は存在いたしますので貰えると嬉しいです」

要するに栄養的には必要ないが、味覚はあるから食べてみたいという事だろう。

「じゃあ、明日の朝食からここに持ってきてあげるね」

「お手数おかけしてすいません」

そう言って淡雪は正座のまま、床に手をついてお辞儀をする。

「そんなにかしこまらなくてもいいって」

「いえ、吉井様が私のためなどに動いてくださるのにその様な事では示しがつきません」

うーん、性格的には問題はないんだけど、どうも頑固な部分があるようだ。
妖怪だから古くからのしきたりを守ってるだけかもしれないけど、やりにくいなぁ…

「そういえば淡雪はどんなことができるの？」

「料理、洗濯、掃除、裁縫と基本的な家事はこなせるかと思います」

意外に家庭的な妖怪だなぁ…
って、僕が聞きたいのはそういうことじゃなくて！

「えっと、ほら、もう少し妖怪っぽいことってできないの？」

「一応、人から視認されなくなることと壁抜け程度はできますよ」

なんとも戦闘に不向きな能力だ。
それとも妖怪同士で争うことはないのだろうか？

「あっ、そういえば明日は食材を集めておいた方がいいかもしれませんよ」

「えっ、急になんで？」

「私はこの部屋は守れますが、この部屋の外に吉井様出られてしまった場合は保障できません。ですから籠城しても大丈夫なようにです」

なんだろう、一気に不安になってきた…
この部屋に籠城しなければならない程の災難が迫ってるなんて信じたくない…

「うん、じゃあ明日は色々と食材を集めておくよ」

一応、パーティー用お菓子も持ってきたからある程度の量で済むだろう。
にしても、明日はいったいどんな災難が待ってるって言うんだろうか…

できれば姫路さんやみんなは巻き込まないように解決したいものだ。

第３８問　僕とのぞきと来るべき災難（後書き）

いきなりの超展開！？
明久の身に迫る災難とはいったい…？
ちなみに今回でてきました座敷童子がアンケートで募集したものです。
みなさまからの投票の結果、一夢と淡雪が同着でしたので二つを合せた名前となりました。
ご投票ありがとうございます！

第３９問　俺とのぞきと呪いの電話（前書き）

きるぐまー1号さん、感想ありがとうございました。
ついに総合評価点が５００ｐｔ突破です！
ご愛読ありがとうございます。

第３９問　俺とのぞきと呪いの電話

雄二ＳＩＤＥ

ちくしょう…
翔子が勝手に作った婚姻届を手に入れるために、男子を使って女子たちの混乱を招こうと思ったんだが、まさか翔子が自室にいるなんて…
囮にしたやつらも全員教師陣に倒されちまって、明日は俺も含めて補習だよ…
明希のやつだけは召喚解除拒否を承認して逃げやがったけどな。

トゥルルルル

ん？
着信音か。なになに、非通知って、いたずら電話かよ。
まっ、大方明久だろうし暇潰しにでもでてみるか。

ピッ♪

「もしもし坂本だ」

「もしもし私メリーさん。今、あなたの部屋のゴミ箱の中にいるの」

いきなり近すぎだろ…
というか、なんで自らゴミ箱に入ってんだよ！？
そんな訳のわからないいたずら電話に呆れて通話をきる。

……

……

……

まぁ、所詮はいたずら電話だ。気にする方がどうか――――

トゥルルルル

また電話だ…
しかも今度も非通知…

「もっ、もしもし?」

「もしもし私メリーさん。今、あなたのいる旅館の前にいるの」

なんか遠ざかってる!?
それにしても声は女みたいだから明久のいたずらって線は消えたな。
そうなると、翔子辺りがさっきの仕返しにやってるのか?

「翔子、いたずらも大概にしろよ」

「ふふふ…」

ツゥーツゥー

あの野郎、不気味な笑い声だけ残して切りやがった…
しかし、相手が翔子とわかったのならなにも恐れることは――――あるな…
下手な妖怪や幽霊なんかよりも翔子の方が断然恐ろしい…

トゥルルルル

「もっ、もしもし…」

相手が翔子だとわかってしまうと余計に恐いものだな…
こんなことなら下手な詮索するんじゃなかった…

「もしもし私メリーさん。今、あなたのいる階にいるの」

いよいよ迫ってきやがったな。
でも待てよ、これが本当にかの有名なメリーさんだった場合、俺はなんらかの対象をしなきゃならないんじゃないか!?
……って、メリーさんの回避方法知らねぇぞ!
くそっ、こういう時は明久のやつが役に立つんだが――そうだ明久だ!
あいつの部屋に行けば仮に相手が翔子でも逃げられるし、万が一メリーさんだとしても対処方を知ってるだろう。

トゥルルルル

げっ、また携帯が鳴ってやがる…
出たくはないが、出なかったら出ないで悲惨な目にあいそうだな。

「もっ、もしもし……」

「もしもし私メリーさん。今、あなたの部屋の前にいるの」

やばい…
これで明久の部屋に逃げ込むって案は消えてしまった…
でも相手が翔子ならば逃げ切る方法がないわけじゃない。
これをやったらやったで後が大変になりそうだが、今お仕置きをされるよりはましだ。決意を決め、一呼吸いれる。

「俺はお前のことが大好きだぁぁぁ!!」

これで翔子は放心状態のはずだ。急いで携帯をきり、部屋から飛び出す。
そこには案の定翔子がいたのだが、なぜだか黒いオーラが出ていた。

「しょっ、翔子…？」

「……雄二、これは誰？」

翔子の指差す方向、すなわち俺の足元を見ると、そこには金髪の人形が立っていた。しかもなぜだかこちらを見て顔を赤らめてやがる…

「誰って、俺はこんな人形知らないぞ」

「ひどいっ、今さっき『大好きだ』って言ってくれたのに！」

うわっ！？
人形が喋りだしたぞ！？

「……雄二、どういうことか説明して」

「待て翔子！俺は本当にこんなやつ――」

ここで俺は一つの可能性に気づく。今さっき『大好きだ』って言った…？
そして翔子が放心状態になってないって事はもしかして……

「もしかしてお前がメリーさんなのか…？」

「そうよ、私があんたが『大好きだ』って言ってくれたメリーよ！」

金髪を振り回し、メリーは泣きじゃくった様に言う。
要するには俺への電話はいたずらじゃなくて本物のメリーさんからきていた。
そして俺が翔子対策に言った『大好きだ』をメリーのやつは真に受けちまったって訳か…

「……雄二、二人がどういう関係か説明してもらう」

「そうよ、あんたがこの女とどういう関係なのか説明してもらうんだから！」

そう言って翔子とメリーが俺に詰め寄ってくる。
メリーの方は背丈的に視界にいれなくてもすむが、翔子からは目をそらせない。
というかそらしたら殺される…

「まっ、待て翔子、メリー！俺の話を聞いてくれぇぇぇ！！」

～数分後～

「ったく、ひどい目にあったぜ…」

「……雄二が隠し事するのが悪い」

翔子が自分でつけた俺の傷に湿布を貼りながら言う。

「そうよ、隠し事なんかする雄二が悪いんだから」

メリーの方も小さいながらも湿布を貼ってくれている。

「んなこん言ったってお前らは話を聞かなかっただろうが…」

今は一応、両者ともお互いの存在に納得したようだからいいが、それまでが本当に大変だった…

翔子はいつものように俺に『お仕置き』をしてくるし、メリーはメリーでさすがは人を殺す妖怪とだけあってか小さな包丁を常備していて、それで攻撃されまくった…

「……それは雄二が浮気したから悪い」

そもそも俺はお前の彼氏じゃない。

「違うわよ！
雄二は私に『大好きだ』って言ったんだからあんたが浮気相手でしょ！」

そしてメリー、お前の彼氏でもない。

「……私と雄二の方が長く一緒にいる」

だからなんだってんだ…

「そんなの関係ないわよ！
大切なのは愛の大きさなんだからね！」

前半部分だけは肯定しよう。

「……第一あの言葉は私がもらうはずだったもの」

確かにそうだが、それは逃げるための手段だ。

「そんなの負け犬の遠吠えよ！」

あたかも自分がかったかのごとく言うな。

「……そんなことない」

「なら雄二に聞けばいいじゃない」

お願いだから俺を厄介事に巻き込まないようにしてくれ…

「「雄二どうなの！」」

「あぁ！俺を巻き込むな！俺は寝る！寝るからな！」

そう言って俺は布団を被るとだんまりを決め込む。

「……雄二は今日も照れ屋さん」

「まったく、男ならハッキリしなさいよ」

悪態をつきながらも二人は俺の部屋から出ていったようだ。

はぁ……

今日は疲れたな。まったく、なんでこんなことになっちまったんだろうな…

そう、独りでに落ち込みながら俺は眠りについた。

第３９問　俺とのぞきと呪いの電話（後書き）

雄二のところにはメリーさんが！？
いったいこの旅館はどうなってるのか！？

第４０問　僕と信用と頼られたい想い

明久ＳＩＤＥ

「あっ、雄二おはよう」

朝食を食べに会食堂に向かう途中の廊下で雄二と出会う。

「おう…明久か…」

見るからにやつれている印象を受ける雄二がこたえる。
大方、昨日ののぞきが失敗して霧島さんにこってりとお仕置きされたのだろう。
まぁ、自業自得だから同情の余地もない。

「そういえば明希が戻ってきてないんだけど知らない？」

「明希ならのぞきが失敗する直前に召喚解除を承認して逃げ帰ったぞ」

あの腕輪はそんな臨機応変に使えるのか…
ますます明希がめんどうなことになりそうだ…

「そういえば雄二はなんでのぞきなんてしようと思ったのさ？」

「あぁ、それはのぞき騒ぎで女子を混乱させて、その隙に俺が翔子の部屋にある婚姻届を回収する予定だったんだ。
だが、結果はこっちの惨敗だ。男子共は鉄人たち教師陣に倒され、

肝心の俺の方も部屋で翔子に待ち伏せされてたわけだ…」

「そうなんだ……」

婚姻届というのは霧島さんと雄二の名前が書いてあり、更には両者の実印まで押してあるという代物だ。当然ながら雄二は判を押した覚えはないと言っている。

少し前から雄二はそれを手に入れようと躍起になっていたけど、まだやってたんだ…

「まったく、雄二だって本当は霧島さんの「言うなぁぁぁ！！」言いかけのところで雄二に右手で口を塞がれてしまう。

「ふむへふうひ！」（離せ雄二！）

「明久、お願いだからめったなこと言わないでくれ。もし、あいつに聞かれてたらなにされるかわからないんだ」

雄二がせわしなく辺りを見回しながら言う。

って、やばい……段々と息が苦しくなってきて…

「ひわはい、ひわはいはらはまふへ！」（言わない、言わないから離して！）

雄二の右腕を叩きながら苦しいことをアピールする。

「あっ、すまなかったな…」

どうやら僕の意図がわかってくれたらしく雄二は手を離してくれた。

はぁ…苦しかった……

「ところでなににそんな怯えてるのさ？」

「分かりやすく言えば、翔子並に面倒なのが一人増えた」

「？？？」

雄二がなに言いたいのかちっともわからない。

「お前はわからなくていいんだよ。
それよりお前って、メリーさんの対処法知ってるか？」

なぜここでメリーさんの対処法なんだろうか？

「まぁ、一応は知ってるよ」

「ほんとか！？
朝食のおかず全部やるから教えてくれ！」

雄二の顔が途端に輝く。もしかして……

「確か、メリーさんから電話がかかってきたら壁伝いに移動して全身が映る鏡を二台用意する。そうしたらそれを合わせ鏡にして素早くその間に入る。
後はそこで待ってれば、メリーさんが最後にくる後ろがわからなくなって来れないらしいよ。ちなみに、壁伝いに移動するのも後ろをとられないためだよ」

「そうかありがとな――――って、もう手遅れじゃねぇかぁぁぁ！！」

やっぱり予想通りか…

「雄二、メリーさんから電話きたんだね…」

「そっ、そんなことあるわけないだろ…」

雄二、もう顔が完璧なまでにひきつってるよ…

「そんなこと隠さなくてもいいよ。僕だってさ……」

「もしかしてお前もメリーから電話がきたのか！？」

ここで雄二がボロをだしたのは黙っておいてあげよう。

「いや、僕の場合は座敷童子と同じ部屋に住むことになった」

「座敷童子ならいいじゃねぇか！
こちとら殺人妖怪だぞ！機嫌損ねると常備してる小型ナイフ振り回すんだぞ！？」

あれ？
なぜだかあまり怖い情景が思い浮かばないんだけど…

ところでメリーさんと座敷童子って、この旅館に大御所が二人もいるとはどういうことなんだろうか…

「ところでそっちの座敷童子はどんな状況なんだ？」

「性格自体には難はないんだけど、僕のことを『吉井様』って呼んだり座敷童子のしきたりに関しては頑固だったりするよ…」

「ならまだいいじゃねぇか…
こっちなんてどういう訳だかメリーのやつに馴つかれちまったんだよ…」

メリーさんに馴つかれるっていったいなにをしたんだろうか…？

「ま、まぁ、お互い頑張ろうか」

「そうだな…」

僕たち二人は朝からブルーだった…

～会食堂～

「明久君おはようございます」

「おはよう姫路さん」

昨日と同じ席に座り、隣にいる姫路さんに挨拶する。

「明久君は今日の予定ありますか？」

「特にはないけど、近くの山に行ってみようかな？」

本当は淡雪に言われた食材を集めにいくのだが、姫路さんを巻き込むわけにもいかないから嘘をついておく。

「山ですか。
確かに山菜や小動物とかがいて楽しそうですね。私も行ってもいいですか？」

「えっ、それはちょっと……
ほら、今日はＡクラスの人たちと合同勉強会があるから姫路さんはそっちにでなよ」

そう、今日は強化合宿の学園側の目的である学力向上のための合同勉強会があるのだ。姫路さんは勉強熱心だから、これで退いてくれるだろう。

「なら明久君もそれにでるべきです。
それに連れてってくれないなら先生に言っちゃいますよ」

「そんな…」

弱ったなぁ…
どう考えても八方塞がりな気がしてきた…

「なんて言うのは嘘ですよ」

「えっ？」

見れば姫路さんはいたずらっぽく笑っていた。
僕はからかわれていたのだろうか？

「でも明久君が悪いんですよ。
また私に秘密にしてなにかしようとしてるんですから…」

そう言う姫路さんは少し怒っているような、それでいて悲しさも含んでいるような表情をしていた。

「私は明久君にとってそんなに信用できない人なんですか。
なにかを隠さないと話しもできないような人なんですか。
私じゃ…明久君に頼ってもらうことすらできないんですか……」

「姫路さん…」

そうだ、姫路さんは悲しんでいるんだ。
僕が今まで良かれと思った行動も姫路さんにとっては辛かったのかもしれない。
秘密を作ってしまうこと、頼らないこと、それは相手を信用していないことと同じなんだ…
例え、それが姫路さんの為だとしても悲しませてしまっているなら本末転倒だ。

「ごめん、姫路さん…」

だから僕は謝ることしかできない。ただ、頭を下げることしか…

「いえ、私の方こそすいません…
わかってるんです。
明久君が私のために、私たちのために動いてくれてることを。
わかっているのに…わかってたはずなのに……こんなこと言っちゃうなんて私、最低ですね…」

姫路さんの目には涙が浮かんでいた。
それだけ思い詰めていたということなのだろう。
僕がそれだけ悲しませてしまったということなのだ。

「そんなことないよ。
人は誰かに頼られたいし、誰かに信用されたいんだ。だから、姫路さんがそう思うのはなにも悪いことじゃない。それに僕は嬉しいよ」

「嬉しい…ですか？」

姫路さんが涙で濡れた顔をあげる。

「うん。
姫路さんが僕に頼ってほしいって、信用してほしいって思ってくれたことがね」

「明久君…」

「ほら、涙拭きなよ」

ポケットからハンカチを取り出すと姫路さんに手渡す。

「ありがとうございますね」

姫路さんはそれを受けとると涙を拭き取っていった。

「本当にごめんなさい、明久君…」

「僕の方こそごめん…
まさか姫路さんがそこまで思い詰めてるなんて思わなかったんだ…」

だけど、それは僕にとってはかなり嬉しいことだ。僕が思い描くものには程遠いとしても、僕はそれだけ姫路さんにとって大切な存在になれているのだから。
それが、それだけで僕は幸せだった。

「姫路さん、一緒に山に行こうか」

だから、その幸せをもう少しだけ…
巻き込みたくはないけど、姫路さんを悲しませるのはもっと嫌だから

「いいんですか…？」

「うん、一人で行くよりも二人で行く方が楽しいよ」

「でも合同勉強会の方はどうするんですか？」

そうだ、姫路さんを連れていくかぎり抜け出すわけにもいかない。

「うーん、後で鉄人に話しとくよ。それで許可がとれたら行こうか」

「はいっ♪」

笑顔で言う姫路さんはいつにも増して嬉しそうだった。

第４０問　僕と信用と頼られたい想い（後書き）

今までもそうですが、今章も早速原作に似ても似つかないものに…
本当に私は原作に沿う気があるのかどうか自分に聞きたくなりますね…

第４１問　僕と君と花言葉（前書き）

心葉さん、感想ありがとうございました！

第４１問　僕と君と花言葉

明久ＳＩＤＥ

「わぁ……
きれいな山ですね。木立の間から流れる風が涼しげで気持ちいいです♪」

姫路さんが目を閉じ、両手を広げるようにして深呼吸する。

「そうだね。緑はきれいだし、涼しいしでここはいいところだよ」

僕も姫路さんを真似て深呼吸をしてみると体中が浄められていくような感覚がする。

「ふぅ…
って、こんなことしてる場合じゃなかったんだ。
姫路さん、もっと奥の方に行ってみようよ」

「はいっ♪」

いくら鉄人に許可をとってあるとしても、長居をするわけにはいかない。
それに今日、僕に災難がやってくるのだから、いつまでも姫路さんと一緒にいるわけにもいかないのだ。

「朝食の時からやけに上機嫌だけどなにかあったの？」

「そ、そうみえますか…？」

「うん、なんだかいつも楽しそうに見えるよ」

でも、それは僕の錯覚なんだろう。

姫路さんが僕といてくれる時間を楽しみに、大切に、僕が想うのと同じように感じていてほしいと思うバカな男の妄想にすぎない。

それでも、妄想だとわかっていても聞かずにはいられなかった。

もしかしたら、可能性があるのかもしれないのだから…

おこがましいと思われるかもしれない、バカだと嘲られるかもしれない、そんなことはないと現実をたたきつけられるかもしれない。

それをわかっているのに聞かずにはいられない僕はもう戻れないのだろう。

昨晩の夕飯の際に気づいてしまった君の大切さに、僕の中での君の大きさに…

君にとって僕は僕の思い描くような人じゃないかもしれないけど、僕にとっては誰よりも、なにを差し置いてでも護りたいほど大切な人なんだ。

だけど、君の甘さにつかまってしまった…いや、自らつかまりにいった僕は引き返すことも振り向くこともできない。

ただ、まっすぐに進むことしかバカな僕にはできないんだ。だから

――――

「それは明久君と一緒にいられるからですよ♪」

君の言ったことが信じられなかった。

まるで告白のような言葉に耳を疑ってしまった。

「明久君と一緒に同じ時を過ごせるのが嬉しいからです♪」

気が動転してしまいなにを言っていいかもわからない。
もしかしたら僕の思い描くものが側にあるのではないのか。
そんな錯覚にも陥ってしまいそうなくらいに現実味を帯びた言葉。

僕と一緒にいることが姫路さんにとって楽しい……
それは僕が姫路さんに幸せを与えられてるということなのかもしれない。
僕にとっての幸せは姫路さんの中でも共有されているのかもしれない。
例え、僕が想うより程遠いとしても姫路さんは今の時を大切にしてくれている。
それが僕にとって幸せで、嬉しくて、それでいてむずがゆかった。

「ひめ「明久君、早くしないと西村先生に怒られちゃいますよ？」

ようやくでかけた僕の言葉は姫路さんによってかき消されてしまう。
少し前に立つ姫路さんは振り返りながら僕に笑顔を向けてくる。

今はこれでいい。
僕の想いも姫路さんの言葉の意味も。
自然とそう思えるほどに僕は今の時を大切にしたいと思った。
姫路さんと過ごせるこの時がなによりも大切なのだから。

～数分後～

「姫路さん、それは食べられないよ」

「そうなんですか…」

姫路さんが成長したワラビに伸ばしかけた手を引っ込める。

「タケノコと一緒でワラビも成長しすぎると食べれなくなっちゃうんだ」

正確言えば食べれないこともないが相当まずいんだよね…

「明久君は物知りなんですね」

「金欠の時なんかの貴重な栄養源だから自然と覚えたんだ」

特にヨモギは道端に生えていることもあるため、主食にまで昇華したこともあったのは秘密だ。

「もう、ちゃんと栄養とらないとダメですよ」

「大丈夫だよ、今は姫路さんのおいしいお弁当が食べられるからね」

「な、なに言ってるんですか！？
ちゃんと私のお弁当以外でも栄養とらないといけません！」

途端に姫路さんは顔を真っ赤にさせてしまった。
それに怒ってるみたいだけどなにか気に障るようなことを言ってしまったのだろうか？

「じゃあ姫路さんが僕の家で作ってくれる手料理でも栄養とるよ」

「そ、そういう意味じゃありません！」

「だって姫路さんの料理がおいしすぎるから、どうしても食べたくなるんだよ」

「あぅ…

明久君はズルいですよ…」

なぜだか姫路さんは真っ赤にした顔をうつむけてしまった。

さっきまで怒ってた（？）みたいなのにどうしたんだろう？

「（私ばかりがドキドキさせられっぱなしなんて明久君はズルいです…）」

「ん？

姫路さん今、なにか言った？」

「なっ、なんでもありません！」

どうも今日の姫路さんはいつもと違う気がする。

なんというか僕と同じで緊張しているような感じだ。

当然だが、僕の方は姫路さんと二人っきりなのだから心拍数がとんでもないことになっている。一応、平静を装っているがいつまでもつことやら……

「あっ！

明久君見てください。あの花かわいいですよ！」

姫路さんが嬉々として指差す方向を見ると確かに一輪の花が咲いていた。

正確には一輪と表するべきではないのだろうが、白いハンドベルの

ような形をした花が咲いている。あれは確か甘野老(あまどころ)だったかな？
甘野老の花言葉は――

「姫路さん、ちょっと待っててね」

「明久君、まさかとってくるつもりですか！？」

姫路さんが驚くのも無理はないだろう。
なんせ甘野老が咲いているのは急斜面になっている崖だ。
だけど、少し回り道をして上の方に行けばとってこれないものではない。

「大丈夫だよ。上からとってくるからさ」

「そんなことしたら転げ落ちちゃいます！」

まぁ、確かにその可能性もなきにしもあらずだ…

「きっと大丈夫だよ。だから、姫路さんはここで待っててね」

僕はそれだけを言い残すと走り出した。

瑞希ＳＩＤＥ

「はぁ……」

走り去っていく明久君の後ろ姿を見て思わずため息が出てしまいま

す。
明久君が私のためにあの花をとってきてくれるのは嬉しいんですが、それよりも明久君と一緒に行動したかったです…
頑張ってアピールしたつもりなんですけど、やっぱり明久君は私なんか眼中にないんでしょうか……

そういえば、あの花は確か甘野老という花でしたよね。
根が甘いからそういう名前がついたらしいんですけど、花言葉は……
うーん、なんでしたっけ？
５／２３の誕生花だということは覚えているんですけど…

「おーい、姫路さーん！」

「あっ、明久君！」

崖の上から手を振っている明久君に手を振りかえします。あれ？
なにか別の花を持っていますね。

「明久君、その右手に持っている花はなんですか？」

崖の上にいる明久君に聞こえるよう、なるべく大きな声で出してみます。

「これはヒヤシンスって花だよ。さっき、そこで見つけたんだ！」

ヒヤシンスですか。
確か、色によって花言葉が大きく変わった筈です。
明久君が持ってるのはピンクと紫、それに黄色ですね。
残念ながら私はどの色がどんな花言葉か覚えていないんですが、明久君は知ってるんでしょうか？

知っていてとってきてくれているなら、ちょっと嬉しいです。

「姫路さーん、今から降りるね」

「気をつけてくださいよ」

私の心配を他所に明久君は斜面に足を踏み入れました。

明久ＳＩＤＥ

僕はヒヤシンスを片手に持ちながら崖を慎重に降りていく。
ヒヤシンス。花言葉は色により多数あれど僕の伝えたい想いは黄色の言葉。
甘野老。その花言葉は君にぴったりな花言葉。
僕が君のことが大好きな理由の内の一つ。
僕はその想いに何度触れ、何度助けられたのだろう…
そして後何度、僕がそれに触れられる機会があるのか…

「明久君！」

それに気をとられてしまっていた僕は自分が足を踏み外しているのを今知る。
まずい、斜面は土肌がむき出しになっているから一度滑りだしたら止まらない！
それに転げ落ちてしまえば、また下にある崖に落ちかねない！
とっさになにか掴まるものはないか辺りを見回すが、特に見当たらない。

くっ、もう踏ん張るのも限界だ……

「うわぁぁぁぁぁぁ！」

「明久君！」

姫路さんが僕の落ちる場所に走りよってくるのが見える。
来ちゃダメだ。そうすれば姫路さんまで巻き込むことになってしまう！
だけど斜面を転がる僕はろくにしゃべることもできない。

僕はこのまま落ちていくのか……？
姫路さんを巻き込んでしまうのか…？
いやだ。そんなのは…それだけは！

覚悟を決めて、むき出しの地肌に左手をつける。

「うっ…」

地面からとびだしている石の尖端が手を傷つけていく。
まず出血は免れないだろう。もしかしたらそれ以上になるかもしれない。
痛みも相当なものだ。だけど、段々と速度が緩まってきている。この調子なら…

「つっ！？」

一際鋭利な石に手をすってしまい、思わず手を地面から離してしまう。
当然、滑り止めを失った僕は再度転げ落ちる速度を増していった。

「明久君、明希君です！明希君を召喚してください！」

そうか！

今の明希ならババァの作ったはた迷惑な腕輪のおかげで召喚フィールドなしでも出てこれ――って、無理無理！

一回転する度に砂が口の中に入ってしゃべりづらいのに『サモン』なんて言えないって！

明希を召喚するのを諦め、なんでもいいから掴む物をと思い手を伸ばす。

「えっ…？」

回転が止まった…

疑問に思い、なにかを掴んでいる左手を見上げると、そこには甘野老があった。

また、僕は助けられたんだね…

『心の痛みが分かる人』

それが甘野老の花言葉。

僕の大好きな人にぴったりな言葉。

「明久君、大丈夫ですか！？」

下から姫路さんが心配そうに聞いてくる。

「うん、甘野老に助けられちゃった」

甘野老を支えにして体勢を立て直す。

「もう、心配させないでください…」

「ごめん、ごめん。今から降りるからそこどいてね」

「今度は気をつけてくださいよ」

「わかってるって」

慎重に甘野老を抜くと、斜面を下っていく。
今度は大事に至らずにすんだようだ。

「お待たせ、姫路さん」

「お待たせじゃありませんよ！
明久君になにかあったらどうするつもりだったんですか！」

普通、あんな危ないことしたら怒られて当然だよね…

「ですけど、明久君が無事でよかったです」

「心配してくれたんだね。ありがとう、姫路さん」

「ほんとに……ほんとに心配したんですから…」

今にも泣き出しそうに姫路さんが言う。
僕はこんなにも心配をかけてしまっていたんだ。
僕はこんなにも心配されていたんだ。
それだけ僕は想われているのかもしれない…

「ごめん、姫路さん…」

「いえ、明久君が無事ならそれでいいんです」

そう姫路さんは笑顔で言う。

「はい、まずは甘野老」

その想いに何度も助けられた僕から君にぴったりな花を送ろう。

『心の痛みが分かる人』

「次はピンクのヒヤシンス」

君のかわいさを象徴するかのように。

『しとやかなかわいらしさ』

「紫のヒヤシンスもね」

僕の想いがいつまでも……

『初恋のひたむきさ』

「最後に黄色のヒヤシンスだね」

僕が一番伝えたい想い、気持ち、言葉。

『あなたとなら幸せ』

「こんなたくさんのお花ありがとうございます。
帰ったらお部屋に飾っておきますね」

両手いっぱいに花束を持つ姫路さんはとても幸せそうだった。
やはり女の子は花を貰うという行為に憧れをもっているのだろうか？
事の真偽はわからないが、なにはともあれ受け取ってもらえてよかった。
僕の気持ちを受け取ってもらえた訳じゃないけど、それでも……

「あっ、明久君！
その…明久君もこのお花、部屋に飾りませんか…？」

そう言って姫路さんは黄色のヒヤシンスを……そう、僕の伝えたかった想いを半分手渡してくれた。

「いいの？」

「はい、私があげれるわけじゃありませんけどせめて……」

「せめて？」

「と、とにかく明久君も一緒に部屋に飾りましょうね」

「う、うん…」

姫路さんからヒヤシンスを受け取り思う。もしかしてこれは――

ガサガサガサ

「「なっ、なに!?」」

突然、近くの草むらから音が聞こえる。

「もしかしてイノシシでしょうか？」

「それはないとは思うけど…」

警戒しながらも少しずつ草むらに近づいていく。

「「！？」」

そこにいたのはここにいない筈の――――

第４１問　僕と君と花言葉（後書き）

作中で瑞希の考えていたとおり５／２３は甘野老の誕生花です。
そして５／２３はある日なんですがみなさんお分かりでしょうか？

第４２問　僕とカカシと空想壁（前書き）

黒炉さん、ｄ．ｃ．２隊長さん、感想ありがとうございました！

第４２問　僕とカカシと空想壁

明久ＳＩＤＥ

「境内院さん！？」

「美娘ちゃん！？」

姫路さんと共に、茂みの中で倒れている境内院さんに駆け寄る。

「美娘ちゃん、しっかりしてください！」

「お……」

姫路さんの呼び掛けに境内院が何かを言おうとする。

よかった、どうやら意識はあるみたいだ。

「お……へ……」

目立った外傷はないが、かなり衰弱している。まさか……

試しに境内院さんの前にワラビを一本出してみる。

「食べ物！」

指ごと食われた…

っていうかやっぱり…

「お腹すいてたんですね…」

「いやぁ、山でまよげほっげほっ」

境内院さんがアクを抜いてないワラビを食べたせいでむせている。
いや、あげたのは僕だけどあれは仕方なかったというかなんというか…

「大丈夫ですか美娘ちゃん!?」

「うん、なんとか…」

なんだろう、すごい罪悪感が……
でもあの場でワラビをあげていなかったらいなかったで罪悪感が……

「酷いよ、よっちゃん。
こうなるのわかってて食べさせたでしょ」

「でもあげていなかったら、それはそれで困るでしょ?」

「確かにそうだね…
じゃあ、この件は恨みっこなしにしようね～」

「あはは、そうしてもらえると助かるよ」

境内院がお気楽な性格で良かったと心底思った瞬間だった…

「そういや、なしてよっちゃんもみずちゃんもこんな山ん中いるの?」

「あぁ、それは「ストープッ!ふふっ、私わかっちゃったよ」

僕の言葉を遮って境内院さんが得意気に言う。

「きっとこんな感じに違いない！」

～以下、美娘の想像と共にお楽しみください～

「姫路さん、僕のことはいいから逃げて！」

「それじゃあ明久君が！」

明久の背中に護られるように隠れている瑞希は首を縦に振らない。

「明久、愛しい彼女との別れはすましたか？」

文月学園を牛耳るギャング、雄二が明久に拳銃を構えながら言う。
彼は自分の権力を盾に文月学園で容姿、学力共にトップを争う程の才女である霧島翔子をものにしただけでは飽き足らず、明久の許嫁である瑞希にまで手をつけようとしていたのだ！

「あばよ、明久」

雄二の銃口から弾が射出される。明久は端（はな）からよける気はない。
自分の大切な人を護るために、ただそこに立ち雄二に狙いを定める。

「例え、同士討ちだとしても姫路さんを護ってみせる！」

明久も引き金を引き、最期の弾を撃ちだす。
それは狙いを寸分違わず捉えた。

バタッ！

「やるじゃねぇか明久……」

拳銃を構えたまま、雄二は倒れる。

「明久君、私たち…」

「うん、勝ったんだ。だから――」

「っ！」

振り向いた明久の顔を見て瑞希は気づいてしまった。
この顔は明久が自分を圧し殺して無理を言っている時の顔だと。

「だから「イヤです！！」

泣きながらいう瑞希の頭に明久が優しく手をのせる。

「もういいんだ。
僕はもうすぐに死んじゃうし、雄二の恐怖は去った。
どこにでも好きな所に行って人生をやり直すといいよ。
大丈夫、姫路さんならきっといい人が見つかるからさ…」

雄二の弾が貫いた自分の胸を押さえながら明久が言う。
急所からは僅かに外れているが、もう助かる命ではないだろう。
明久もそれを悟ったうえで瑞希に諭しているのだ。

「なら私はここに、明久君の側にいます！
私の好きな場所は明久君の側です！
私にとって明久君以上の人なんかいないんです！
だから……だから、私はずっと、ずっと明久君の側にいます！」

「わがまま言っちゃダメだよ…
もう僕は無理なんだ。長くないってもんじゃなくて今すぐにでガハッ！」

明久が血ヘドを吐く。
もはや立っていること自体、奇跡に近いのだ。
そんな中、意識を集中させながら話すことなど無理に等しい。

「明久君！
しっかりしてください明久君！」

瑞希の呼び掛けに応えるだけの気力は明久には残っていない。
ただその場に倒れ込み、己の愛しい人を最期まで目にやきつけておくことしか…

「イヤです…
死んじゃイヤです明久君！
一緒にお買い物行こうって約束したじゃないですか！
海に連れてってくれるって約束したじゃないですか！
まだ、私の作ったパエリア……食べてくれてないじゃないですか…」

明久はなにも言うことはできない。
どれだけ瑞希の想いが、気持ちが届いたとしても応えることができないのだ。

だから彼は精一杯笑った。彼女が自分を思い出す時は笑顔でいられるようにと。
それが何一つ応えることができない彼なりの返事。
最期まで一人の少女のために生きてきた彼からの最後の贈り物。

『僕のことを思い出してほしいなんて言わない。
だけど、もし君が僕のことを思い出してくれる時があったなら、せめて最期の笑顔を思い出してほしい。これが君に迷惑をかけ続けたバカな男の最期の願い…』

～想像終了～

「と、まぁこんな感じに違いない！」

「いや、どっこも当ってないから。
それに突っ込みどころしかなくて、どこから突っ込んでいいかわからない…」

「なら突っ込みはしなくていいんじゃないかな～」

もはやそういう問題でもないと思うんだけど…

「姫路さんからもなにか言ってよ…」

「そ、そうですね。
美娘ちゃん、その後私と明久君はどうなったんですか？」

「そんなこと聞いてどうするのさ！」

まさか姫路さんは境内院さんの茶番に付き合うつもりなんじゃ……

「うんうん、その後はね悲しみ明け暮れているみずちゃんのところに忍者の末裔であるスケ君がくるんだ。
そしてよっちゃんを生き返らせる秘薬を探すために辺境の山岳地帯に」

なんで無駄に話が繋がってるんだ……
というかスケ君って誰？
もしかしてスケベの意味のスケ君でムッツリーニのことだろうか？
だとしたら、どこから僕の交遊関係の情報を仕入れたのか問いただしたい。

「それで明久君と私はここにいるんですね」

「そうそう。んで、今からはギャング雄二の残党との戦いがあるんだよ～」

雄二が完璧に死人扱いされてる…

「しかも、その残党の中にはギャング雄二に捕らえられていた筈の霧島翔子までいたんだ！」

「翔子ちゃんと戦わなきゃいけないんですね…」

もうダメだ…
ボケが飽和しすぎてて、突っ込む気力すらなくなってきた…

「その話はそこまでにしといてさ、なんで境内院さんはここにいる

の？
もしかして、こんなド田舎に観光とか？」
話を切り返すために話題を投げ掛ける。
「んにゃ、私は仕事で来ただけだよ～」
仕事といえばお祓いの類だろうか？
「山の中でお仕事なんですか？」
「いやぁ、それがさお金が無くて歩いてきたら迷っちゃったんだよね～」
姫路さんの問いに境内院さんはあっけらかんと応えるが、要するには行き倒れていた訳だ。にしても、電車賃もないとは相当貧乏なんだなぁ…
「大変でしたね…
それで、お仕事の場所はどこなんですか？」
「それはこの近くの旅館だよ～」
「「えっ……」」
あまりのとんでも発言に姫路さんと共に固まってしまう。
だって、この近くの旅館っていえば一つだけで……
「あ、明久君、もも、もしかして…」

「うん…もしかしなくてもだと思うよ…」

実際、座敷童子やらメリーさんやらがいるのだからお祓いに来られてもなんら不思議はない。いや、むしろ呼ぶべきだと思う。

「もしかして二人は旅館の場所を知ってたりするのかな？」

「知ってるもなにも僕たち、そこに宿泊してるんだ」

「学力の向上を狙った強化合宿なんですよ」

僕たちはそれをほったらかしてここにいるんだけどね…

「ほほう、じゃあ道案内お願いしてもらってもいいかな？」

「もちろんだよ」

「でも美娘ちゃんはどこの部屋に泊まるんですか？」

姫路さんの疑問ももっともだ。

あの旅館は文月学園が管理しているため、一般の客が泊まる部屋はないのだ。

「それなら心配無用だよ。

私用の部屋が用意されてるみたいだからね～」

「それなら安心ですね」

「うんうん、そういうことで旅館に向けてレッツゴー！」

右手の拳を上げて境内院さんが楽しそうに言う。相変わらず元気だなぁ。

～数分後～

「おかしいなぁ…
そろそろ、ふもとに出てもおかしくないはずなんだけど…」

確実に行きよりも帰りの方が長く歩いてる気がする。

「そうですね…
まるで狐につままれた気分です…」

本当にそんな感じだ。
なんだかさっきから同じ風景をぐるぐる回ってる気がする。

「もしかしたらタヌキに化かされてるのかもしれないよ」

「この山にはなにかいるんでしょうか？」

「いるとしてもあんなのしかいないよ」

姫路さんの疑問に進行方向の少し先にいるものを指さして応える。

「そうですよね。あんなのしかいませんね…」

「そうそう、あんなの気にすることないよ」

境内院さんの言う通り、カカシのような格好に赤い布の中に綿を詰めたような顔のあんなのなんか――

……

……

……

「姫路さん、境内院さん逃げるよ！」

「なんであんなのから逃げなきゃいけないんですか？」

「そうだよ。よっちゃん、焦りすぎだよ～」

二人はいったい何を言ってるんだ！？

カカシが動いてるってことだけでも無気味なのに『あんなの』なんて！

『あんなの』……？

そうだ、僕も最初はあれに疑問をもたなかった。

そこにいて当然だと思っていた。あんなにも無気味な存在だというのに…

ということはもしかして！？

「姫路さん！境内院さん！」

一つの可能性を示唆し、僕は二人の手を掴んで走り出した。

「フォンフォンフォン！」

カカシの方もやけに陽気なリズムをとって僕たちを追いかけてくる。

僕の考えが正しければ、姫路さんも境内院さんもあのカカシになんの疑問をもっていないだろう。たぶん、それがあいつの妖怪としての能力。

相手に存在を認知させない能力。

そんな能力をもってるやつが淡雪みたいに友好的な妖怪なわけない！

とにかく逃げなきゃ！

その一心だけで必死に逃げる。

幸い、二人とも疑問をもちながら僕のひく手についてきてくれている。

「フォンフォンフォン！」

段々とカカシとの距離が縮まってくる。

一本足で跳ねているだけなのになんて速さだ！

せめて二人が正気に戻ってさえくれれば僕があいつをひきつけることができるのに…

僕がもう一人いれば……そうだ！

「サモン！」

お馴染みの幾何学模様から明希が飛び出してくる。

「フォンフォンフォン！？」

さすがのカカシもいきなり出てきた明希に驚いているようだ。

「主人（マスター）なんだこのカカシは？」

よかった、どうやら明希はちゃんとあのカカシを認識できているみたいだ。

「とにかくそいつを倒して！

なんか色々とヤバそうなんだよ！」

「まぁ、ヤバそうなのはわかるなよっと！」

明希が素早くカカシに迫ると、一太刀くれてやった。

「フォッフォフォーン！」

あっ、逃げてった…

一発くらっただけで逃げてくなんて案外弱いんだなぁ……

「なんなんだあいつは…」

木刀を腰に納めながら、明希は呆れたように言う。

「さぁ？

よくわからないけど、少なからずこちらにプラスになる存在じゃないよね」

「それには同感だな」

本当になんだったんだろうか？

できればもう会いたくないけど、正体をつきとめてみたい気持ちもある。

まぁ、なにはともあれまずは宿に――って、あれ！？

「なんで旅館の目の前にいるの！？」

「山下ってたんだからそれが普通だろ」

確かに明希の言う通りなのだが、あれほど時間がかかったのにいともあっさりと山をでられるなんて……

これもあのカカシの能力なんだろうか？

「まっ、ささっと姫路さんたちを運ぼうぜ」

「そうだね」

僕はいつの間にか僕の肩に寄りかさるように寝てしまっている二人を背負うと旅館に入っていった。

第４２問　僕とカカシと空想壁（後書き）

それにしても凄い雨ですね。
学校に行ったのに友達とだべってきた以外なにもしないで帰らされましたよ…

第４３問　僕と悲鳴と一つの可能性（前書き）

～冒頭雑談～

明「えっ！？
なにこの突拍子もない企画！？」

唐「本編に全く関係ありませんのでとばしてもらって一向に構いません」

明「誰に向けて話してるの！？」

唐「こんな駄作者につきあってくれている心優しい読者様に」

明「駄作者だというのは認めるよ」

唐「ところで何か言いたいことある？」

明「うーん……
じゃあ、前々から聞きたかったんだけど原作3巻の内容やる気ある？」

唐「強化合宿はやってるけど、そのほかは原作と大きく離れるよ」

明「だよね…
妖怪がでてる時点で3巻関係ないもん…」

唐「ただ心配なことがある」

明「いったいなんなのさ?」

唐「こんな突拍子もないことやって受け入れられるか…」

明「そんな心配するなら端かっらやらなければいいじゃん!」

唐「それでもオリジナルティがほしかった」

明「もう知らん…」

瑞「こんな作者ですがよろしくお願いしますね」

希「このバカに言いたいことがあったら何でも言ってくれ」

明「ちなみに恋愛パートがしばらくないから、そっちが見たい人は５６問にＧｏ!」

唐「話が多少わからなくなるかもしれませんのでご注意ください」

第４３問　僕と悲鳴と一つの可能性

明久ＳＩＤＥ

「これだけあれば、ある程度大丈夫でしょう」

僕が採ってきた山菜を見ながら淡雪が言う。
量的には三日分ほどあるから困ることはないだろう。
ちなみに姫路さんと境内院さんは各々の部屋に送り届けた後だ。

「そういえば淡雪、山で変なやつを見かけたんだけど…」

「どんなのでしょうか？」

「カカシみたいな姿をしてて、顔にあたる部分が赤い布に綿を詰めたような感じのやつ。『フォンフォン』言いながら追いかけて来たんだ」

あの無気味なカカシのことを思い出しながら淡雪に説明する。

「特徴からいけば瀬良案山子（せらガカシ）と同じですが、彼らはしゃべったりはしないはずなのですが…」

「じゃあ何をする妖怪なの？」

「気づかれぬように人についてゆき、一人になったところを連れ去る妖怪だと言われています。連れ去られた人は瀬良案山子になってしまうとも…」

なんともおぞましい話だ。それに、増やし鬼の要領で増えていくとは質が悪い…

「気をつけた方がいいかな？」

「一人でいる際にはお気をつけください。
もっとも、この部屋の中なら私の守護がありますので心配無用ですが」

淡雪の力は意外に強いらしい。さすが有名妖怪といったところだろうか。
さて、一人になる可能性が高い人は……

姫路さんは島田さんと相部屋だから大丈夫。
雄二もメリーさんがいるから大丈夫だろうし、ムッツリーニなら捕まるようなヘマをしたりしないだろう。となると、秀吉が一番危険となる。

「ちょっと秀吉になるべく一人にならないよう伝えてくるよ」

「お気をつけて」

正座しながらペコリと頭を下げる淡雪に苦笑しながらも扉を開ける。

「フォンフォンフォンフォン！」

バタンッ！

速攻で扉を閉め、鍵をかける。

「淡雪！もうすぐそこまで来てるよ！？」

あぁ、どうしよう！
もしかして、もう誰か犠牲になっちゃったんじゃ…
もしかしたら、今の瀬良案山子が僕の知ってる誰かかも知れない。
このままじゃ犠牲者が増えてく一方だよ！いったいどうしたらいいんだ！？

「今のは瀬良案山子ではありませんね」

「そんなのはどう――――えっ？」

淡雪は今、瀬良案山子じゃないと言わなかっただろうか？

「ですから、あれは瀬良案山子ではなく山の神の遣いなのですが」

「って、ことは恐がらなくても大丈夫ってこと？」

「はい。なにか私に話があるようですので入れてあげましょう」

淡雪がそう言うと、鍵をかけた筈の扉が独りでに開き、僕の部屋にカカシが入ってきた。

「フォンフォンフォフォン！」

「ふむふむ」

「フォーフォンフォンフォンフォン！」

「そうなんですか」

見事に僕一人、蚊帳の外だ。
妖怪同士がなに話しているかなんて全くわからない。
というか、淡雪は本当にわかっているんだろうか？
なんだか適当に相づちを打ってるようにも見えるんだけど…

「フォンフォンフォフォン！」

「了解しました」

どうやら二人の話は終了したようだ。

「吉井様、どうやらこの者は捕らえられた同胞を探しているようです」

「仲間を探してる…？」

山の神の遣いだというのに捕まったりするのだろうか？
第一、こんな悪趣味なカカシなんて捕まえてどうすることやら…

「はい、この旅館のどこかにいるらしいのです」

「だけど、この旅館は文月学園が管理してるんだよ？」

「そこは妖怪同士のいざこざですから、一般の方々の管轄外かと思います」

妖怪が山の神の遣いを捕らえてるのか…
なんだか、とんでもないことにも巻き込まれてる気がする……

「まぁ、とにかくこのカカシは害がないんだよね？」

「はい、山の神の遣いですから害があるわけありません。
それとカカシではなくフォンという名前があるそうなのですが…」

フォンっていうのか。ところで『フォンフォン』しゃべるからフォンなのか、フォンだから『フォンフォン』しゃべるのかどっちだろうか？

「ならよかった。よろしくねフォン」

まぁ、そんな疑問はおいておき、フォンに挨拶をする。

「フォンフォーン！」

「うわぁ！？」

返事のつもりなのか、フォンはおもいっきり僕に体当たりしてきた。
僕はそれを寸でのところでかわしたのだが、危ないところだった…

「こらフォン、吉井様に迷惑かけてはいけません」

「フォーン…」

淡雪にしかられたフォンは悲しそうに返事をする。

「吉井様もなにとぞ理解ください。
フォンはまだ遣いとなってからの年月が短いのです…」

なんだかこうみると淡雪がフォンのお姉さんみたいだ。

「僕はぜんぜん気にしてないからいいよ。
それよりフォンはなんで山の中で僕たちを追いかけてきたの？」

「フォンフォンフォーン！」

「久しぶりに見た人間だからつい、嬉しくなってついてきちゃったみたいです」

「そんなことなの…
必死で逃げてきて損したよ…」

まさしく骨折り損のくたびれ儲けというものだろう…
まぁ、結果的に誰も被害にあってないからいいんだけどね…

「きゃあーーー！！」

安堵したのもつかの間、廊下から悲鳴が聞こえてきた。
僕は急いで廊下にでるが、悲鳴をあげたとおぼしき人は既にいなくなっていた。
代わりといってはなんだが、各部屋からぞろぞろとみんなが出てくる。

「なんの騒ぎだ？」

後ろから聞こえてきた声に振り向くとそこには雄二がいた。

「なんか廊下から悲鳴が聞こえたんだけど、誰もいなくてさ」

「大方誰かのイタズラに決まってるわ」

雄二の肩に乗ってる金髪の人形が言う。

「雄二、これがメリーさん？」

「あぁ、こいつがメリーだ…」

雄二がメリーさんをつまみあげてこちらに見せてくる。
襟の部分を持たれてしまってるため、メリーさんは抵抗もできずにつるさがる型となっている。はっきり言って哀れだ…

「雄二、離しなさいよ！」

「嫌だ」

「雄二…
そんなに私のことを離したくないなんて嬉しい」

顔を赤らめながら言うメリーさんを見て思う。確かにめんどくさい…こういうのをなんていうんだっけ……たしかメンヘラ？
まぁ、雄二は御愁傷様ということにしておこう。

「明久君！坂本君！
いったいこれはどうしたんですか？」

振り向けば姫路さんと島田さんがこちらに走ってきていた。

「目がさめたんだね姫路さん。無事でよかったよ」

「私のわがままでついていったのに明久君に迷惑かけてしまってす

いません…」

姫路さんは申し訳なさそうに言う。
おそらく僕がおぶって帰ったことを島田さんに聞かされたのだろう。

「別に気にしてないからいいよ」

「吉井、ウチは誘われてもないんだけど」

ヤバい…
島田さんが相当不機嫌だ。そんなに山菜採りに興味があったのか…
いや、もしかしたら山菜が好きなのかもしれない。
どちらにしろ島田さんには悪いことをしてしまったのだから謝ろう。

「島田さんごめん。そんなに島田さんが山菜好きだとは思わなかったんだ…」

「はぁ……やっぱり吉井は吉井ね…」

「???」

島田さんがなにを言いたいのかいまいちわからない。
もしかして山菜が好きなのではなく山登りが好きなのだろうか?

「まぁ、話を戻して状況説明だが明久、お前はなにかを知ってるんだろ?」

さすが雄二といったところだろう。事実、僕には一つの仮説が存在している。

「うん。悪いけど僕の部屋まで来てくれないかな？」

「俺は構わないぞ」

「おじゃましますね明久君」

「ウチも行くわ」

第４３問　僕と悲鳴と一つの可能性（後書き）

さて、前書きにもありますが今章は原作と大きく離れます。
具体的には○○○は３８・３９問以降はないかと…
そこでみなさんに質問なのですが、このままつっぱしていいのか、はたまた数話前から書き直したほうがいいのか聞きたいです。
一つ注意事項（？）を言っておきますと、どちらにせよ前章までのノリ通り拙作は明瑞を貫き通します。
では、よろしかったらご意見などいただけるとうれしいです！

第４４問　僕と人質と妖怪大戦！？（前書き）

きるぐまー1号さん、ＳＨＩＮさん、感想ありがとうございました！
アニメ二期の方も今週でラストですね。
内容は６巻ですから今期の最後も明瑞展開が見れそうで嬉しいです。

第４４問　僕と人質と妖怪大戦！？

明久ＳＩＤＥ

「みんな入ってよ」

話し合いをするため、姫路さん、雄二、島田さんを僕の部屋に入れる。

「おじゃましますね」

ペコリと頭を下げながら入室する姫路さん。相変わらず礼儀正しいなぁ…

「明久の部屋らしくボロっちいなぁ…」

まぁ、雄二に礼儀正しさとか求めたら負けだと思う。
というか、内装ってどこも同じはずだよね！？
お願いだからそうであってほしい…

「でも吉井の部屋にしては片付いてるじゃない」

島田さん、あんたは僕のことを余程不摂生な人だと思ってるでしょ…
否定はしないけど、正直傷つくからあまり言わないでほしい。

ガラガラ

って、姫路さんなに勝手に奥の部屋に進んでるのさ！？

「……」

「……」

お互いに目線を合わせたまま固まってしまっている姫路さんと淡雪。
気まずい！これは相当気まずいよ！！

「あのぅ、すいませんがどちら様ですか？」

まぁ、招待された部屋に知らない人がいたら普通疑問に思うよね…

「一夢淡雪と申します。
今は吉井様に遣えておりますのでどうぞよろしくお願いします」

「あわゆきぃぃぃ！！
その勘違いを生み出すような自己紹介はやめてくれない！？」

せっかく最近は姫路さんと距離が縮まってきたと思うのに逆戻りしかねないよ！
って、言わんこっちゃない！
姫路さんは明らかに動揺してるし、島田さんは僕に向かって臨戦体勢に入ってるって！

「ほぅ、これが明久の言ってたやつか」

雄二がこの状況を見ながら面白そうに言う。

「坂本君はなにか知ってるんですか？」

おっ、姫路さんがくいついてくれた。これで誤解は解けそうだ。

「あぁ、こいつは座敷童子らしくてな明久を災難から守ってくれるんだと」

「と言いましても、この部屋にいてくださなければお守りできませんが」

「けど、明久君を守ってくれてるんですよね？」

「なら、いいやつなのかしら？」

どうやら二人の誤解もこれで解けそうだ…

「善か悪かの判断は皆様に任せますが、私は吉井様に危害を加える気はありません。ところで皆様は吉井様とどういった関係で？」

そういえば淡雪には僕の交遊関係を全く説明していなかったなぁ…

「俺は坂本雄二。
明久とは一年からのクラスメイトで今は代表をやらしてもらってる」

「坂本様ですね」

どうやら人に対してはほとんど様をつかうらしい…

「ところで少々伺いたいのですがなぜメリーと一緒にいるのですか？」

「「バレた！？」」

雄二とメリーさんの声が見事にハモる。

「久しぶりですねメリー」

「いやいやいやい

「えっと、まだお二方の自己紹介が済んでいませんのでお願いできますか？」

「じゃあウチからいくわ。
ウチは島田美波。吉井とは坂本と同じで一年からのクラスメイトよ。
後は木下秀吉と土屋康太って人が一年からのクラスメイトだわ」

これからのことを考えて事前に秀吉とムッツリーニのことを説明してくれたようだ。以外に島田さんも気が利くところもあるんだなぁ…

「島田様に土屋様、それに豊臣様ですね」

「豊臣じゃなくて木下だからね！」

「しかし秀吉といったら豊臣様なのでは？」

そうだ…
淡雪は妖怪だからすごい昔のことだって知ってるし、生きてきてるんだった……

「まぁ、とにかく豊臣じゃなくて木下なんだよ」

「なるほど、豊臣様は旧姓を名乗るようにしたのですか」

なんか一人合点いったようだけど、なにを言ってるのかさっぱりわからない…

「えっと、最後に私ですね」

「はい、自己紹介をお願いします」

淡雪に促されて姫路さんが自己紹介を始めようとした瞬間――――

バンッ！

「「「「その役目、我らが引き受けよう！」」」」

勢いよく扉を開けて須川たちが僕の部屋になだれ込んでくる。

「彼女は姫路瑞希！
品行方正、才色兼備の完璧なお嬢様だが、不運な事件からFクラスに所属している」

マイクを持ちながら説明を始めるのは例の司会者だ。
君はクラスでやることとかはなにもないのか……

「そして淡雪さんの主人である吉井の小学生からの幼馴染みであり許嫁だぁぁぁ！！」

はいきた。いつものパターンだよ…

「ふむふむ、吉井様の許嫁ですか。よろしくお願いします妃様（きさきさま）」

「淡雪ちゃん勘違いですよ！」

「そうだよ淡雪、僕と姫路さんはそんな関係じゃないって！」

さすがに真に受けられると色々と困るから淡雪に制止をいれる。

「しかも二人の家は近所だというんだから最初からフラグが立って

たんですよ！
更に二年になった際に同じクラスになるやいなや互いを支えあい、
数々の困難を乗り越えてきたのだ！
そして我らはそんな二人を応援する集団。名を異端審問会と言う！
今や学園内の加入率は二年で八割、一年と三年にも四割と勢力を拡大中だ！」

あぁ！
なんでこんな姫路さんに嫌われるような説明しかできないんだ！？
それにちゃっかり自分たちの自己紹介まですましちゃってるよ！
しかも加入率ってそんなに多かったの！？
やけに色々と筒抜けなわけだよ……
たぶん、こんなに納得と驚愕が入り交じった自己紹介は生まれて始めてだ…

「以上のような事実がありますが本当に許嫁ではないのですか？」

「い、いえ、本当に違いますよ…（でも本当にそうなら…）」

なにかを小声で言う姫路さんを見て淡雪がしばらく考えこむように見つめる。

「やはりあなたのことは妃様と呼ばせていただきます」

「なんで！？」

「吉井様はそんなこともわからないのですか？」

淡雪はかわいそうな人を見るような哀れみの表情で僕の方を見る。

「いやいや、淡雪こそ一連の会話聞いてた!?」

「はぁ…

吉井様は色々と鈍いんですね。もちろん妃様もですけど…」

「「???」」

淡雪の言っている意味が解らず、僕と姫路さんは頭上にクエスチョンマークを浮かべるだけだ。

「すまないな淡雪。

こいつらのこれは今に始まったことじゃないから話を進めてくれ」

雄二が呆れたように言うが、一応は助けてくれたのかな?

って、あれ?

いつの間にか須川たちがいなくなってる。

からかい終わったから満足したのかな?

「わかりました。かい摘まんで説明しますとこの旅館には多くの妖怪がいます」

「「きゃあぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」」

いきなり姫路さんと島田さんが叫び声をあげる。

「ど、どうしたの二人とも!?」

「私、オバケとか妖怪とかそういったのはダメなんです…」

まぁ、姫路さんらしいこたえだよね…
確かに姫路さんはこういったのは苦手そうなイメージあるし事実、如月ハイランドの時のお化け屋敷では終始怖がってた記憶がある。

「ウチは平気だけどなんとなくよ…」

こっちは見栄を張ってるね。
なんというかとても分かりやすい見栄のはりかただと思うけど…

「妃様に島田様、私やメリーも一応妖怪の類なのですが…？」

淡雪の疑問ももっともだ。
この二人（？）だって妖怪なのになぜ姫路さんも島田さんも平気なのだろうか？

「淡雪ちゃんやメリーちゃんは見た目が可愛らしいからいいんです！」

「そうよ、他のやつらみたいに化け物じゃないからいいのよ！」

なんだろう、解るような解らないような見解だ…

「いまいちふに落ちませんが話を進めるとしましょう。
今のところは旅館にいます妖怪は潜んでいますから、こちらから仕掛けない限り危害を加えてはきません。しかし――」

「誰かがなにかをされた可能性が高い。それも連れ去られた可能性がだ」

淡雪の言葉を引き継ぐように雄二が続ける。

フォンの事情なしに答えを出せるのはさすが雄二といったところだろう。

「ってことは私たちもオバケに連れてかれちゃうんですか……」

姫路さんが身を縮こませるように震わせ淡雪にたずねる。

こういった一つ一つの動作が相変わらずかわいいなぁ…

「おそらくそれはないでしょう。

むこうもできれば人に存在を気付かれたくない筈ですから」

「じゃあ、なんで今回は目立つ誘拐なんて手をとったんだ？」

「それは私にもわかりません。

ですが、妖怪を見かけたとしても刺激をしませんように」

雄二の的確な質問にさしての淡雪もお手上げのようだ。

やはり、妖怪同士だとしてもわからないことがあるのだろう。

「できれば妖怪には会いたくないです…」

「ウチもよ…

瑞希、もしものことを考えてこれからは極力一緒に行動しましょ」

「そうですね。美波ちゃんが一緒なら心強いです」

淡雪の話では二人以上いる場合は狙われないらしいから、これで二人は安全だろう。

「雄二に近づいてくる不埒な輩がいたら私が成敗してあげるから！」

「好きにしてくれ…」

手持ちの小さな刃物を振り回して意気込むメリーさんとは対照的に雄二は呆れからか、はたまた疲れからか冷めていた。

「では、今宵はこれにて」

淡雪は丁寧にお辞儀をするとすぅと消えていった。

「消えちゃいました…」

「やっぱり妖怪なんだな」

「妖怪というより魔王…」

メリーさんはボソッと呟いたあと、しきりに辺りを見回している。

そんなに怖いなら最初から言わなければいいのに…

「瑞希、ウチらも帰りましょ」

「そうですね。明久君、おじゃましました」

入る時と同様に姫路さんはペコリと頭を下げる。

「うん。おやすみ姫路さん、島田さん」

僕は手を振って二人を見送る。

「じゃあ、俺も帰るな」

「あぁ…
遂に雄二と初夜なのね。ドキドキするわ」

「黙れ。というか、変なことばっか考えてるな」

「まぁ、二人ともまたね」

雄二の言っていた『面倒なやつ』の意味を再確認しながら雄二に手を振る。
さて、僕もそろそろ寝るかな。

～翌日（強化合宿3日目）～

「吉井様、朝ですよ」

「うーーん……おはよ…淡雪…」

淡雪に起こされ、まだ眠気の残る体をおこす。

『ピンポンパンポーン
緊急連絡だ。繰り返す緊急連絡だ』

ボーとする頭に館内に取り付けれた放送機材から鉄人の声が響く。
朝から鉄人の声を聞かされるなんて最悪だ…
これが姫路さんのモーニングコールだったらどれだけ幸せなことだ

ろうか。

『昨日、とある神主がここにやってきて話があるらしい』

神主って境内院さんのことかな？

こんな朝早くからなんて、そんなに重要な話なんだろうか？

『こほんっ、文月学園の生徒さんにお知らせします』

いつもの間延びした声じゃないが、これは間違いなく境内院さんの声だ。

まさか、なにか霊的な関係なんだろうか？

『この旅館の廊下は完璧に妖怪に占領されました。

なので事が片付くまで廊下に出ないでくださいね』

えっ……？

妖怪に占領されたって？

そんなバカな。

疑問に思い、扉を開けるとちょうど通りかかったナマハゲと目があった。

しかも、その後ろには一反木綿やら貧乏神らしいのまでと数多の妖怪がいた。

バタンッ！

勢いよく扉を閉めると淡雪の所に駆け寄る。

「淡雪！

外が大変なことになってるよ！」

「放送を聞いていましたのでそれくらいはわかっています。それよりもなぜ扉を開けたのですか？」

「いや、なにかの冗談だと思ってさ…」

というか、普通はあんなの冗談だと思うのが普通の気が…

『なお、妖怪たちは部屋の中には入ってきませんのでご安心ください』

「一応は姫路さんたちも安全だよね」

放送に安堵しながら淡雪に言うが、淡雪は難しい顔をしていた。

「もしかしたら妃様たちはピンチかもしれません」

「えっ？

だって、妖怪は部屋に入ってこないって…」

「今は、の話です。

おそらく妖怪たちの動きが活発になったのは巫女様が館内に入ったためでしょう。人質をつくって巫女様に対抗する筈ですから…」

ということは姫路さんたちが！？

「淡雪、今すぐ姫路さんたちを僕の部屋に連れてこよう！」

そうすれば淡雪の守護で安全なはずなのだから。

後は境内院さんがなんとかしてくれるだろう…

「それは無理な話です。
あの妖怪の大群の中をどういくのですか？」

「だけどこのままじゃ姫路さんが！！」

きっと今ごろ放送を聞いて怯えているはずなのに！

「……吉井様は本当に妃様のことが大切なのですね。
わかりました。今から私の守護を吉井様の周りに展開できるようにします。
しかし、そのためにはこの部屋にある結界を解かなければなりません。それでもよろしいですか？」

「当然だよ」

僕の頑張りで姫路さんが少しでも救われるというなら――

「結界が解けたとなれば妖怪たちは積極的に入り込んできますが、三十分ほど耐えてください」

「わかったよ。サモン！」

役立つかわからないが一応明希を召喚しておく。

「説明なんかいらねぇよ。姫路さんのためってならもちろん協力するぜ」

「よろしくね」

木刀を構える明希も俄然やる気のようだ。

「では、結界を解きます！」

「「姫路さんのために絶対負けない（ねぇ）！！」」

第４４問　僕と人質と妖怪大戦！？（後書き）

さて、次回から本題（？）である妖怪たちとの戦いが始まります。
果たして明久たちは瑞希たちを救えるのか！？
次回もよろしくお願いします。

第４５問　僕と明希と隠し通路（前書き）

黒炉さん感想ありがとうございます！

第４５問　僕と明希と隠し通路

明久ＳＩＤＥ

「おらよっと！」

明希が木刀で部屋に入ってきた一反木綿を攻撃する。

Ｆクラス吉井明久　日本史２９８点

一反木綿　ＵＮＫＮＯＷＮ　１２６点

「はぁ？
なんでこいつらに点数なんてあるんだよ…」

「さぁ？
でも点数があるってことは召喚獣で倒せるんだから好都合じゃない」

召喚システムは科学とオカルトでできているから、そのオカルトの部分がなんらかのかたちで作用したのかもしれない。
しかし、今はそんなことを気にしてる場合ではない。
結界の名残から一斉に妖怪が部屋になだれ込んでくるということはないが、休みがない連戦状態だということにはかわりないのだから。

「主人（マスター）も少しは戦ってくれ！」

一反木綿の攻撃をいなしながら明希が言う。

「生身の人間がどうやって妖怪相手に立ち回れって言うんだよ！」

明希はオカルト作用のおかげでダメージを与えられるが、生身の人間である僕は妖怪はもちろん、物理干渉ができる召喚獣以外にダメージを与えられるわけがないのだ。

「ちっ、しょうがねぇな。ダブル！」

明希の掲げた右腕に付いている例の腕輪が輝きだす。
その光は明希をも包み、明希の姿を完全に隠していた。

「主人、副獣の操作は任せたぜ」

そう言うと明希は再度一反木綿の方へ走っていった。
ところで副獣とはなんのことだろうか？
そう思い、明希の元いた所に目を移すと明希がいた……

……

……

……

……

……

……

……

……

「明希、ドッペルゲンガーが入り込んでるんだけど…」

……

よりによって明希に変身するとは…
今さっきまで明希と話してたんだからバレるに決まってるじゃないか。
まったく、バカなドッペルゲンガーもいたもんだね。

「バカは主人だ！
そいつは副獣っていって、全てが主人の操作に従って動く所謂(いわゆる)普通の召喚獣なんだよ！」

「なるほど！」

ババァはこちらに迷惑をかけるだけじゃなくて便利な機能までつけてくれたようだ。今回は純粋に感謝しておこう。

「でも手数二倍って反則級だよね…」

単純に考えても二倍の点数の強さ。
実際は連携などのことを考えれば三倍、四倍の強さを発揮するだろう。

「そこら辺は安心しろ。点数が半分だからな」

「えっ…？」

Ｆクラス吉井明久　日本史１４９点
召喚獣　明希　日本史１４９点
一反木綿　ＵＮＫＮＯＷＮ　１２６点

「本当だ……」

まぁ、半分になったとしても前述の通り明希一人の時より格段に強さは上がってるだろう。

「それは主人がちゃんと操作できればの話だけどな」

「観察処分者をなめないでよね」

伊達に教師たちの雑用をさせられてきたわけじゃない。
召喚獣の操作なら誰にも劣らない自信がある。
だけど、なんでさっきから明希に考えてることが筒抜けなんだろうか？

「主人いったぞ！」

明希の声で召喚獣に意識を集中させる。
一反木綿は明希には敵わないとみたのか、僕の召喚獣に巻き付こうとしている。

「僕もなめられたもんだね」

召喚獣を中心にとぐろを巻くように巻き付けようとしてくる一反木

綿に木刀を一突きする。
一反木綿と言えども所詮は布の様なもので、突いた場所に隙間ができる。
召喚獣をそこから飛び出ささすと反転して一太刀くれてやる。

「明希いまだ！」

相手が体勢を崩したのを確認すると明希に合図をだす。

「おう！」

明希は大きく跳躍すると一反木綿の真上に位置どった。

「「くらいやがれぇぇぇ！！」」

僕は下から切り上げるように、明希は上から両手で掴んだ木刀を突きだしながら急降下する。

ザシュッ！

一反木綿は明希と僕の召喚獣に切り裂かれ地に伏っしる。

一反木綿　ＵＮＫＮＯＷＮ　討死

妖怪に討死もなにもあるんだろうか…？

「まずまずじゃねぇか主人」

「明希の方こそ」

互いに励ましあい、次の相手に備える。

「わりぃ子はいねぇかぁぁぁ！？」

「「ナマハゲきたぁぁぁ！！」」

明希と珍しくハモったのには訳があり、以前明希と一緒にやったゲームにナマハゲにそっくりな敵キャラがいて、そいつにボコボコにされたのだ……

「明希、ガードも後退も許されないよ…」

「もちろんアイテムなんか使ったら即死だな…」

二人して恐怖に震える中、ナマハゲの点数が表示される。

Ｆクラス吉井明久　日本史１４９点

召喚獣　明希　日本史１４９点

ナマハゲ　ＵＮＫＮＯＷＮ　２５５点

教科が日本史に設定されてて本当によかったと思う。

世界史でもいいのだが、その他の教科ではよくて１５０点前後だ。

特に英語は１００点前後を未だにさまよっているため、英語になった瞬間に即死する可能性だってあるだろう。

「わりぃ子にはお仕置きだぁぁぁ！」

手に持っているドスを振り上げ、ナマハゲが僕の召喚獣と明希の方

へ襲いかかってくる。

「んな大振り当たるかよ！」

明希はサイドステップでナマハゲの右方向へとよける。

「楽勝だね」

僕も召喚獣をスライディングさせ、ナマハゲの足元をくぐらせる。

「今度はこっちからいかせてもらうぜ！」

そう言うと明希は相手を撹乱するように左右に移動しながら迫っていく。

木刀を短く持っていることから、この一撃で決める気はないのだろう。

あくまで連撃の一手といったところとみるのが無難だろうか。

「ちょこまかとうっとうしいぞ！」

ナマハゲが片手に持っている木製のオケの様なものを明希に投げつける。

「はんっ、こんな攻撃――――！？」

明希は体を９０。回転させることでオケを避けるが、それに気をとられてたせいでナマハゲの接近に気づいていなかった。

「お仕置きだぁぁぁ！！」

「うわぁぁぁ！！」

「明希！？」

カバーに入るために召喚獣を走らせるがもう遅い。
明希はナマハゲが切り払ったドスの衝撃をうけて飛んでいってしまった。

召喚獣　明希　日本史１０３点

「これくらい……どうってことはない…」

血がにじむ右足を木刀で支え、明希が立ち上がる。

「っ……！」

フィードバックで僕の右足にも痛みがはしるが明希の痛みはこんなもんじゃないはずだ。そんな中、明希が頑張っているのに僕がやらなくていいわけがない。

「明希は下がってて。ここは僕に任せてよ」

「主人、バカなこと言うのはよせよ。相手は１００点以上も差があるんだぞ」

「そうだね。だけど、１００点以上の差なら以前にも経験したから大丈夫だよ」

試召戦争の時に根本君と戦った時のことを思い出す。
そういえば、あの時は姫路さんに『いつもの僕じゃない』って怖が

られちゃったんだった…

「そういえば前にんなこんもあったな」

どうやら明希の記憶にはあるらしい。たしか、自我が生まれたのは根本君と戦う直前だと言っていたから最初の記憶ということになるだろう。

「ってことでここは任せさせてもらうよ。僕だって姫路さんたちのために頑張りたいしね」

「わりぃな。ここは主人に任せるわ」

明希も了承してくれたようで、その場に座り込んで休んでくれた。

「待たせたね」

ナマハゲの方を睨みながら言う。

「人の話を邪魔するのはわりぃ子がすることだからな」

なんか妖怪って結構律儀なやつが多いなぁ……

って、オケを投げてフェイントをくらわすのは悪いことじゃないのかな…？

「じゃあ、いくよ！」

とっさの防御にも対応できるように木刀を構えて召喚獣は走り出す。

ズテンッ！

「あっ……」

召喚獣がさっきナマハゲがドスで空けた穴に引っ掛かって転んだ…
でもナマハゲならこれはみのがし――

「いまだぁぁぁ！！」

「不慮の事故にあったやつを攻撃するのは悪いことじゃないのかぁぁぁ！？」

「勝負に情けは無用だぁぁぁ！！！」

めちゃくちゃだ！
予想以上にめちゃくちゃなやつだ！

って、そんなこと考えてる場合じゃない！
なんとかしてよけないと討死になっちゃうって！
必死に召喚獣を動かそうとするが穴にピッタリはまってしまっていて抜けだせそうにない。まさにジャストフィットというやつだろう…

とにかく防御をしようと木刀を横に持ちガードしようとするが、いつまでもナマハゲがドスを振り下ろしてこない。それどころかさっきから固まったままだ。

「ったく手間かけさせんなよ」

聞き慣れた声と共に雄二がナマハゲの後ろから現れる。

「雄二なんでここにいるのさ！？」

「助けてやったのにその言葉とは大層な身分だな」

「えっ！？」

ナマハゲ　ＵＮＫＮＯＷＮ討死

そう表示されるとナマハゲは消えていき、ナマハゲのいた場所には雄二の召喚獣がいた。

「あ、ありがと…
でも、どうして僕の部屋に？」

「あそこから入ってきたんだ」

雄二の指さす方向に目を向けると、そこには開いたタンスがあった。

「まさか、雄二の部屋とあのタンスは繋がってるの……」

「あぁ、どういうわけだか俺の部屋のタンスと繋がってる」

とんでもない欠陥住宅だが、廊下を自由に移動できない今はむしろ好都合ではないだろうか？

「その顔はお前も気づいたようだな」

「うん。これをうまく利用できれば姫路さんたちを助けられるかもしれない」

要するには他に隠し通路があれば、それを転々としていき姫路さん

の部屋に辿り着く寸法だ。

「やっぱりお前は姫路のために動くんだな」

満足したように雄二が言う。

「うん。僕で姫路さんの力になれるならね」

「明久らしいな。ただ、この作戦には問題点がある。」

「わかってる。僕か雄二の部屋から続く隠し通路の先に姫路さんの部屋があるとは限らないってことだよね」

その場合は――

「廊下に出なきゃいけなくなるな」

「そこは心配いりません。
たった今、結界が完成いたしましたから廊下に出ても大丈夫です。
複製ならすぐに作れますから坂本様の分もただちにお作りしますから」

淡雪の言う通り、淡雪の結界があれば廊下に出ても安心だろう。

「そうか、悪いな」

「ちょっと淡雪、私の雄二を恩を売ろうたってそうはいかないんだからね」

雄二の肩に乗るメリーさんが淡雪を牽制する。

「メリー、あなたも妖怪の端くれなら主人を守りなさい」

「ちょっと待て！
俺がメリーのだってのはスルーか！？」

「坂本様には吉井様にとっての妃様のよう方がいるのですか？」

見事に霧島さん一択。

「いっ、いるわけないだろ！」

「わかりやすいですね。
ということですから、坂本様のことは諦めなさいメリー」

「翔子とは雄二の魅力を語り合う仲だから大丈夫よ」

「俺はそんな事実知らないぞ！？」

どうやら雄二の知らないところで霧島さんと結託していたようだ。
それにしても、よくあの霧島さんが雄二の側にいることを許したなぁ…

「そんなこと話してる間に坂本様の分もできましたよ。
ただし、極度に攻撃を受けますと結界が破れますので極力廊下を通らないでください」

「わかったよ」

そう言った瞬間、僕と雄二を包み込むように薄い透明の幕のような

ものが張られる。
腕を伸ばしてみると、それにつられて幕も変形するのだから中々の高性能だ。

「では、通路探しといきましょう」

「その必要はないぜ」

声のした方を向くと明希が畳をひっくり返していた。

「これで借りは無しにしようぜ主人」

畳の下にある空洞を指さして明希が自慢気に言う。
あの空洞は明らかに人工的に作られたものだから隠し通路とみて間違いないだろう。

「僕たちの中に貸しだの借だのなんてないよ。だけどありがとう、明希」

「まっ、まぁ、これくらい普通だって…」

少し頬を赤らめながら明希が言う。相変わらず素直じゃないなぁ…

「じゃあ、行くとするか」

「「「「うん（おう）！！」」」」

雄二の合図で僕たちは床下へと入っていった。

第４５問　僕と明希と隠し通路（後書き）

『僕（私）と月明かりと恋い煩い』の制作に移りますのでしばらく更新が停滞するかもしれません。
なるべく早く仕上げるつもりですが、ご理解のほどよろしくお願いします。

第４６問　僕と一般人と立ちはだかる壁（前書き）

桃色さん、きるぐまー1号さん、感想ありがとうございます！
ＰＶ３００，０００・ユニーク３０，０００を突破していました。
ご愛読ありがとうございます！

第４６問　僕と一般人と立ちはだかる壁

明久ＳＩＤＥ

「淡雪、そういえばフォンはどうしたの？」

畳の下にあった隠し通路を通りながら淡雪にたずねる。
この通路は立って歩くだけの高さがないため、手をついて進まなければならない状況なのが辛い…

「フォンは一度山に帰って、仲間と打ち合わせをすると言っていました」

やっぱりフォンみたいのが何匹もいるのか…
いくら悪いやつじゃないってわかっていても、あまり好ましい絵面じゃない…

「明久、フォンって誰だ？」

「フォンは山の神の遣いらしいんだけど、カカシの頭が赤い布に綿をつめたような不気味なやつなんだ。喜作なんだけど本当に不気味だよ…」

たぶん見たことのある人にしかあの恐さは解らないだろうけど、雄二に説明をする。というか、この地下通路って意外に長いなぁ…
いったいどこに繋がってるんだろうか？

「明久の頭でも恐怖を感じられたなら余程不気味なやつなんだろう

な」

「そうそうって、僕を今バカにしたよね！？」

とっさに振り向くと、あわゆく頭を天井にぶつけそうになり頭を下げる。

「違うぞ。
明久の行動力が有り余る思考回路でも尻込みすることがあるんだと思ってな」

「なんだ、褒められてたのか。それならいいよ。行こうか」

もう一度向き直り、再び奥に進んでいく。

「（やっぱりこいつはバカだな…）」

～数分後～

「二人とも止まって」

僕の後ろに続く淡雪と雄二に制止をかけながら、頭上にあるマンホールの出口のようなものを指さす。
ちなみに明希は足の治療のために一旦、召喚獣の世界に戻っており、メリーさんは相も変わらず雄二の肩に乗っている。

「場所的には結構端まで来ましたが、いったいどなたの部屋でしょ

うか？」

「翔子の部屋とかは勘弁してくれよ…」

たしかにメリーさん＋霧島さんは雄二にとって拷問に等しいだろう。

「まぁ、とにかく開けるよ」

「「あぁ（はい）」」

できれば知ってる人がいますようにと願いながら出口の取手を掴みながら上に押し上げる。

ガンガン！

「あれ？」

一瞬、開きかけたのだがまるで上から押さえつけられているように重みがかかって開かなくなってしまった。

「雄二、手伝って」

「ったく、やわなやつだな」

愚痴りながら雄二も一緒に出口の取手を押す。

「んんん！？

なんでこんなに重いんだよ！」

「この上に鋼鉄の塊とかあったりして」

「旅館にんなもんあるかぁぁぁ！！」

ギギィ……

雄二が一際力を入れると、やっと出口がおもむろに開いた。

「今だ！」

僕たちはなだれ込むように出口に向かう。

「ふぅ…
なんとかでれたぁ…」

「どうやら俺の写真がないし、翔子の部屋じゃないみたいだな…」

たしかに霧島さんならそれくらいは平気でするだろう。

「おまえらぁ…」

かわいらしさの欠片もない図太い声が押し上げた畳の下から聞こえてきた。

まさか、もうここは妖怪に占領されてしまったんだろうか…

畳が徐々に持ち上がっていく。

畳の陰になってどんなやつが持ち上げてるのかはわからない。

畳がちょうど人の背丈ほどまで持ち上がった時、突如それはこちらに向かって投げられた。

「うわぁっ！？」

とっさに回避するが危ないところだった…
速度からして当たったら、気絶だけではすまされないだろう…
こんなことができるのは妖怪の中でも相当な力持ちか鉄人くら――
―あっ！

「鉄人！」

畳を投げた張本人である鉄人を指さしながら叫ぶ。

「西村先生だ」

いつもの決まり文句を鉄人が言う。いちいち返答しなくてもいいと思う。

「鉄人、どうして俺たちの邪魔をした？」

「単純に床下から妖怪が侵入してきたかと思ったからだ」

鉄人が押さえつけてたから中々開かなかったのか…
というか、少し畳が浮かび上がっただけで反応できる神経は相変わらず人間離れしていると思う……

「だけど畳を投げる必要はないよな？」

言われてみれば畳を投げる際、鉄人からは僕たちの顔が見えていたのだから攻撃される謂れはないはずだ。

「床下で遊ぶという悪さをした生徒を指導するのは教師の役目だ」

「それは誤解ですよ！

僕たちは廊下が妖怪のせいで通れないから、隠し通路を使って姫路さんたちを助けようとしただけです！」

「そうだ！
俺は姫路からの明久株ＵＰを手伝わされてるだけだ！」

雄二！
君はいったいなに根も葉もないことを口走ってるの！？

「そうですよ！
吉井様と妃様の邪魔をするというならただじゃおきません！」

淡雪！
君は僕を守護するどころか貶めようとしてない！？

「すまんが、どちら様だ？」

淡雪を見ながら鉄人が至極まっとうな質問をする。
そりゃ、学園管理の旅館に部外者がいたら疑問に思うよね…

「私は――――」

はっきり言って、淡雪の自己紹介にも飽きてたので割愛させてほしい。

「納得していただけましたか鉄人様？」

「俺は西村宗一なんだがな…
まぁ、そちらの事情には納得した」

どうやら一件落着のようだ。

「事情が理解できたなら当然ついてきてくれるよな？」

雄二がなぜだか挑発気味に言う。なにを企んでいるのだろうか？

なにはともあれ、鉄人がついてきてくれれば妖怪など恐れるに足らずだろう。

たぶん、召喚獣なしでも廊下を制圧できる……

「いや、それはだな…」

鉄人にしては珍しく歯切れが悪い。

なにか思うところでもあるのだろうか？

「坂本様、すいませんが鉄人様にはここにいてもらわなければなりません。

私やメリーが居着いたお二人の部屋ならいず知らず、一般人しかおりません部屋を空にすれば妖怪の拠点を部屋を増やすことになりかねませんから」

「「なら安心だよ（な）」」

「お前ら、それはどういう意味だかじっくり聞かせてもらおうか？」

どういう意味もなにも鉄人は一般人じゃないってだけの話に決まってる。

「そんな話はおいといてだ、結局は一般人じゃいてもいなくても変わらないんじゃないのか？」

たしかに雄二の言う通りだ。鉄人ならまだしも、一般人にどうしろと言うのだ…

「いえ、人が部屋の中にいることによって妖怪たちは部屋に入りにくいのです。
もともと、人目につかないように行動している者がほとんどですから、結構人がいるところにはめったなことがない限り現れません」

恥ずかしがり屋なら人拐いなどしないでほしいものだ…

「じゃあなんで、僕と雄二の部屋は空けてもよかったのさ？」

「妖怪は基本的に相手の領地に入ることはしませんから安心というわけです」

領地とか犬かなにかか……

「まぁ、妖怪にも色々あるのです」

「それはわからなくないこともないけど…」

正直言ってめんどくさいことこの上ないやつらだと思う。

「明久、長居は無用だ。行くぞ」

「うん」

「急ぐのは構いませんが、一度廊下に出てみませんか？
もしかしたら妃様の部屋がそばにあるかもしれませんから」

「そうだね」

淡雪の言う通り、姫路さんの部屋が近くにあるなら多少のリスクを背負ってでも廊下を突っ切った方が早いだろう。

「いくよ」

扉に手をかけ、三人に振り返る。

「おう！」

「いいわよ！」

「はい！」

ガチャ

四人で一斉に廊下に出る。

「「「「……」」」」

思わずみんな揃って絶句してしまった。

というか、廊下の筈なのに部屋が前方、左右が壁に塞がられていたら驚くのが普通だろう…

「塗り壁ですね」

淡雪が右方向にある壁に手をつけて言う。

「私の邪魔するなんていい度胸じゃない！」

メリーさんが小さなナイフを取り出して構える。

「メリーやめときなさい。
あなたのナマクラでは塗り壁に傷一つ付けられませんよ」

「うっ…」

メリーさんは渋々といった感じに取り出した刃物をしまう。

「塗り壁ってどいてくれないの？」

「道を塞ぐのが目的なので無理かと思われます。それにしても弱りましたね…」

「なにか都合でも悪いのか？」

雄二が思案顔の淡雪にたずねる。
いや、普通に姫路さんの所に直行できないことが都合悪いんだけど……

「おそらく塗り壁はこれ一匹ではないはずですから、妃様の所にたどり着ける道が極端に限られてくるのです」

「最悪、姫路の部屋とその向かいの部屋からしか行けないなんて事もありえるってことか…」

「それってまずくない…？」

もし隠し通路がそのどちらにも繋がっていないとしたら姫路さんは

……

「これは一度、作戦を練り直した方がいいかもしれませんね」

たしかに淡雪の言う通り、無策に動き回るよりもそちらの方がいいだろう。

「すまんが、俺は一度部屋に戻って飯を食いたいんだが？」

「たしかに朝食も昼食も食べてないから、一度僕の部屋に戻ろうか。山菜でよかったらわけてあげるし」

淡雪の言う通りに山菜とりに行っててよかったと思う。

妖怪騒動がいつまで続くかわからないが山菜がない場合、下手したら飢え死にしかねないと思う…

「それは助かるな。じゃっ、一回明久の部屋に戻るとするか。つうわけだ、じゃあな鉄人」

「バイバイ鉄人」

「鉄人様、ご縁ありましたらまたお会いしましょう」

「結局呼び名は変わらんのか…」

第４７問　私と美波ちゃんと想いの資格（前書き）

最近、更新が滞っていてすいません。
就活が忙しく他作者様の作品も見れていない状況です…
※今回は少し人間くささのある話ですので人の汚い部分が嫌いな方はとばしてもらって構いません

第４７問　私と美波ちゃんと想いの資格

瑞希ＳＩＤＥ

「瑞希、絶対に廊下に出ようなんて言わないでよ…」

「わっ、わかっています…
私だって好き好んで妖怪の中に突っ込みたくなんてありませんし…」

朝のあの放送から早三時間。
私たちは廊下に出るのも恐くて部屋の中に籠城していました。

「そ、そういえば瑞希ちゃんの夫はどうしたの？」

「ふぇ！？
ち、違うんですよ。私と明久君はそんな関係じゃ……」

相部屋になっているＢクラスの律子ちゃんの発言にドキドキしながらも返答します。ちなみに捕捉すると、彼女は召喚大会の時に一回戦で戦った方です。

「律子は吉井君なんて一言も言っていないわよ。
やっぱり瑞希ちゃんだって意識してるんじゃない」

「あぅ……」

律子ちゃんの相方の真由美ちゃんにダメ出しに返す言葉もありません。

たしかに意識してないといえば嘘になりますけど、明久君にとって私はただの友達……いえ、友達と思われてるかどうかすら…

「いい加減に白状しちゃいなよ。本当はどこまでいったの？」

「いえ、本当になにもないんですよ…」

あるわけないんです。私には気持ちを伝える勇気も明久君に想われる資格も…

「隠さなくたっていいじゃない。私と恭二なんて異端審問会だかっていうのにびくびくしながら会わなきゃいけないのよ。その点、姫路さんと吉井君は公認なんだから胸はってなって」

こちらはBクラス代表の根本君の彼女の友香ちゃんです。根本君には二学年始まって早々の試召戦争で酷いことをされましたが、最近は明久君たちと仲良く話しているところを見ます。試験召喚大会の時に明久君が「まだ許した訳じゃない」って言ってましたが、今はそのわだかまりもないみたいで良かったです。

「なんだかFクラスの人たちが迷惑かけちゃったみたいですいません…」

「別に姫路さんのせいじゃないからいいのよ。それよりもさ、なんでもいいから吉井君とあったこと話してよ」

「だ、だからなにもないって言ってるじゃないですか！」

「いい加減しなさいよ。瑞希がなにもないって言ってるんだからやめなさいよ」

美波ちゃんの一言でみんなが静かになります。
だけど美波ちゃんの様子がどこか変です。なんというかイライラしてる様な…
美波ちゃんは友達想いですから私が困ってるのに気づいて注意してくれた。
そして私を困らせた三人にイライラしている……違います。
美波ちゃんがイライラしているのには別の理由があるはずです。
行きの電車の中でも考えたことですけど、もしかして――

「美波ちゃん、ちょっといいですか？」

「うん…」

「美波ちゃんと少しお話がありますから、少し待っててくれますか？」

「いいわよ」

「待ってるね」

「こっちは気にしなくていいわよ」

私と美波ちゃんは立ち上がると寝室である隣の部屋に行きます。

「「……」」

無言でふすまを閉じると美波ちゃんと向かい合います。

「今から言うことが間違いだったらすいません」

「……」

美波ちゃんは無言のままです。
おそらくこれから私の話すことにも薄々気づいているのでしょう。

「美波ちゃんは……いえ、美波ちゃんも明久君の事が好きなんですね」

「瑞希もなのよね…」

これは肯定の意として受け取っていいはずです。
やっぱり美波ちゃんも明久君のことが好きだったんです。私と同じで…

「はい…」

美波ちゃんも明久君のことが好き…
ですけど私だって明久君を諦めたりはしません。

「わかってる。瑞希が吉井のことを諦めないって。
だけどウチだって一年越しの想いをそう簡単に諦められないわよ」

美波ちゃんも明久君への気持ちを諦める気はない。
それはいつか二人の内どちらかが泣かなければならない結果になるということ。
最悪の場合、どちらも受け入れられない可能性だって存在するんです…
ですけど――

「私だって諦めれるわけありません。
私は明久君のことが好きです。大好きなんです。
美波ちゃんは一年越しと言いましたが私はそれ以上に……ずっと前から明久君のことが好きだったんです！」

美波ちゃんには悪いかもしれませんけど、私だってずっと明久君のことが好きなんです。

「瑞希の想いだって知ってるわよ！
だけどウチの方が期間が短いとしても想いの大きさは変わらないはずよ！」

「変わりませんよ！
いくら私たちが明久君を想っても明久君がなにも感じてくれなければ、なにも変わるわけないじゃないですか！」

「うっ…」

叫ぶように言って美波ちゃんを脅かしてしまった自分に若干自己嫌悪しながらも言い続けます。
ここで止めてしまったら美波ちゃんを突き放すのと同じなんです。

「ですから私と美波ちゃんは同じなんです。
重要なのは明久君への想いの強さとか長さとかじゃなくて明久君にどう想われているか。当然、私たちの想いだって大事ですけどね」

そう、誰かを想う気持ちに優劣があっていいわけがない。
さっきは感情的になってあんなこと言ってしまいましたが、誰かが他人の想いを否定する資格なんてないんです。
ただ、その想い人に相応しいかどうかは必要になってくる…

明久君は周りを明るく、元気付けてくれますし心配性なくらい他人想いです。
対して私は鈍いし、みんなの足は引っ張ってしまいますし、坂本君と翔子ちゃんに言われるまで自分の料理の酷さにも気づかなかったでとても釣り合いません…

「それって、瑞希はウチのこと認めてくれるってこと…？」

「はい、明久君にとって私も美波ちゃんもまだ特別ではありませんから同じなんです。同じスタートラインにいるんですよ。だからと言って負ける気はありませんよ」

空元気でもしておかなければ押し潰されてしまいそうな重圧感。
自分で考えて答えですけど、改めて考えれば考えるほど悲しくなってきます…

「ウチだって負けないんだから」

そう言う美波ちゃんの顔は久しぶりに見た晴れ晴れとした本当の笑顔でした。
一人で抱え込んでいた重荷がやっと下ろせたかのような晴れた笑顔。
美波ちゃんが今までどれだけ悩んできたかの証拠。

「今まで美波ちゃんの気持ちに気づいてあげれなくてごめんなさい」

たぶん、今まで何度も気づかない内に美波ちゃんを傷付けてきた。
それがどれだけ美波ちゃんの心を傷付けてきたか…

「いいのよ。これはウチ個人の問題だったんだから。
それにずっと一人で抱え込んでいたわけでもないから安心して」

「誰かに相談したんですか？」

「うん、ちょとね。二回ほど相談にのってもらったの」

名前を直接出さないということは言いづらいことなんでしょうから深く追求するのは止めておきましょう。

「じゃあこれからも友達として、そして恋の好敵手（ライバル）として仲良くしてきましょうね」

「瑞希はウチなんかと仲良くしていいの？」

「なに言ってるんですか、いくら美波ちゃんが私のライバルだとしても美波ちゃんが私の大切な友達であることは変わりないですよ」

そんな簡単に友情は消えるものではありません。

友情だって誰かを想う気持ちなんですから…

「ありがとう瑞希……

ウチの方こそ瑞希の友達として、そして好敵手としてよろしくね」

「はいっ！」

ここに一つ美波ちゃんと私の間に新たな関係が生まれました。

だけど今までの関係が崩れることはない。そう、今はそう思っていたんです……

第４７問　私と美波ちゃんと想いの資格（後書き）

さて、疑問に思った方もいたかもしれませんが、拙作の瑞希は今まで美波の想いに気づいておらず今話でやっと気づくことになっております。

では、次回もよろしくお願いします

第４８問　僕とみんなと第2ラウンド！（前書き）

うーん……

最近、三日に一回のペースでの更新になっています…

申し訳ありません

第４８問　僕とみんなと第２ラウンド！

明久ＳＩＤＥ

「まずは灰汁を抜いてと……」

昨日、水をはったボールに入れておいたワラビを取り出すと大皿に移す。
その後、備え付けの冷蔵庫からマヨネーズに醤油、オカカを取り出してワラビとあえる。

「案外手慣れてるんだな」

「貧困生活の時はよく食べてからね」

姫路さんに言ったことと同じ内容を雄二にも言う。

姫路さん……今ごろどうしてるかな…
どうすれば姫路さんを助けられるんだろう…
昨日、僕の部屋に泊めてあげればよかったんだろうか…？
いいや、そんなこと言い出したら姫路さんに距離をとられてしまうだろう…

「明久……
今は辛いかもしれないが我慢してくれ。
俺たちが焦ったら助けられるもんもできなくなっちまう。俺だって辛いんだ…」

「雄二……ごめん…」

そうだ、雄二だって霧島さんが心配なのを我慢しているんだ。
僕と違って本当は相思相愛の雄二が我慢してるんだから僕だって我慢しなきゃ…
本当に姫路さんのことを想うなら今は我慢しなきゃいけないんだ。

「まっ、考えても仕方ないし食うとするか」

「そう…だね」

小皿に雄二と僕の分を移す。
ところで、なんでこの旅館は無駄に各部屋の日用品が充実してるんだろう…

「食事の時間ですか？」

さっきまで姿を消していたのに目ざとくでてきた。
案外食い意地がはってるよね…

「うん、淡雪も食べる？」

「はい、ご賞味させていただきます」

今日半日お世話になった淡雪にもワラビを盛り付け、手渡す。

「主人（マスター）俺の分はなしかよ」

お次は召喚獣の世界から勝手にでてきた明希だ。
まったく、ババァも本当に人騒がせな機能をつけてくれたもんだよ…

「ちゃんと明希の分もあるよ。はい」

「サンキュー」

明希にあった小さな小皿を明希の目の前に置いてあげると明希はがっつくように食べ始めた。こういうところだけ見ると子供だよね。

「そういえば右足は大丈夫なの？」

「あぁ、どうやら選択科目が変わったらしく完治したぞ」

そう言って明希は傷一つない右足を見せてくる。

たしかに選択科目が変われば点数を消費していない限り、全快の状態と考えてもいいはずだ。

「よかったよ、明希がナマハゲにやられた時には心配したんだよ」

「けっ、俺はそう簡単にくたばるほどやわじゃねえよ」

相変わらずの憎まれ口は治らずじまいか…

「たしかにね。でも一人で頑張りすぎちゃいけないよ。僕も雄二も淡雪もメリーさんだっているんだから、仲間を頼ろうよ」

「そ、そうだな…

仲間…だし頼ってみるのもいいかもな…」

前言撤回。最近は少しずつ素直になってきてるようだ。

「にしてもワラビって結構うまいんだな」

「はい、これはここら一帯の山を私の領地にしたいくらいですね」

「まっ、まずくはないな」

「雄二のくわえたお箸。はぁはぁはぁ…」

普通なのが一人、異常なまでの食欲を見せてるのが一人、やっぱり素直じゃないのが一人、そして変態も一人……

なんで僕は強化合宿に来てるのにこんなカオスな状況にいるのだろうか…？

本来なら意中の人とちょっとむず痒くなるようなイベントを期待してもいいんじゃないんだろうか？

それとも僕はバカだからそんなイベントすら見逃してたとか…？

がらがら

「ふぅ……次はどこだ？」

突然壁がスライドしたかと思うと須川君たちが入ってきた…

「こんにちは須川君…」

「おぉ、ここは吉井の部屋か！」

須川君の方も隠し通路を使いなれているらしく特に驚いてる節もない。

この様子だと他の人たちも隠し通路に気づいてるころだろうか？

ペラッ（掛軸がめくれる音）

サァー（天井が開く音）

ガラガラ！（んでもって、押し入れが開いた音）

「平賀君!?根本君!?久保君!?」

なんか色々と入ってきた…

いったい、僕の部屋はどれだけ隠し通路に繋がってるんだろう…

「吉井かお邪魔してすまないな」

「いや、気にしなくていいよ…」

この非常事態だというのに平賀君も随分と冷静だ。

伊達にクラス代表をやってるわけじゃないってところだろうか。

「すまない吉井、友香を見なかったか?」

「たしか小山さんなら姫路さんと同じ部屋にいるはずだけど」

根本君は本当に変わったよ。

今も彼女である小山さんのために隠し通路を練り歩いてきたのだろう。

その姿はBクラス戦の時や以前まで言われていた『卑怯な根本』はではなく、『優しい本来の根本君』だった。

「ということは僕に吉井君、根本君の目的は一緒ってことだね」

「ん?

僕と根本君は目的地が同じだけど久保君は違うよね？」

久保君が岩下さんや菊入さんと付き合ってるなんて話を聞いたことはないし…

久保君はいったいなんの目的はあるというのだろうか？

「それはだね、吉井君――」

久保君が中指で眼鏡を押し上げると眼鏡がキラリと光る。

さすがは学年次席（本当は三位だけど…）の久保君だ。

僕やバカな雄二ではとても思い付かない様なすごいことを考えてるに違いない。

「軍師としての務めを果たすためだよ」

「？？？」

久保君は再度眼鏡を光らせてやりきった感満々でいるが僕はなんのことだかさっぱりわからない。

「明久諦めろ、いつものパターンだ」

僕の肩に手をおき、雄二は悟ったように言う。

「あぁ、いつものあのパターンね……」

ここまで言われてわからないほど僕もバカではない。

要するにいつものパターンなのだ。それ以上説明する必要もないだろう…

そういえば清涼祭の時に霧島さんから見せてもらったビデオカメラ

で久保君は異端審問会のみんなから『久保軍師』って呼ばれてたなぁ……

「久保軍師、これから我らはいかなる行動をとるべきなのでしょうか？」

いつの間にか異端審問会の面々が久保君の周りに集まってきていた。
須川君たちについてきた人も何人かはいたけど、明らかに人数が増えてる……

「そうだね…
おそらく、この旅館には数多の隠し通路が存在する。
それを一つずつ回っていっては埒があかないから二人一組の編成を組み、吉井君の嫁（姫路さん）を見つけ次第ここまでお連れするんだ」

「「「「イエサー、イエス！」」」」

「なにさらっととんでもないこと行ってるのさ！
確実に字と読みが間違ってるよね！？」

もうある程度のことは突っ込まないようにしようと思っていたが、『吉井君の嫁』と書いて『姫路さん』と読むのは色々と姫路さんに失礼ではないだろうか。

「吉井君、君はもう少し勉強をした方がいいと思うよ」

「そうだぞ吉井、『吉井君の嫁』と書いて『姫路さん』と読むなんて俺の近所の小学生でも読めるぞ」

「もうみんな嫌いだぁぁぁ！」

どうして久保君まで僕を貶めようとしてるの！？
やっぱりこの学園に僕の味方はいないの！？
それに、いくらなんでも小学生が読めるなんてことはないよね！？

「明久」

雄二が再度僕の肩に手をのせる。

「雄二……できれば言わないで。オチが読めるから」

どうせまた『いつものパターンだから諦めろ』と言う気なのであろう。

「俺の近所の小学生も読めてたから諦めろ」

「言わないでって言ったのに追い討ちかけないでよ！
というか、本当に小学生が読めている事実に驚きだよ！？」

僕の予想の斜め上をいっていた…
たぶん、文月学園の周り一帯に僕の仲間なんていないのだろう……

「まっ、明久はおいとくとしてだ。たしかにこれだけの人数がいれば姫路のところにも早くつけるだろう。だが問題がある」

「これだけの人数の中に女子が一人もいない」

雄二に続くように久保君が言う。
たしかにざっと３０人ほどいるのに女子が一人もいないのはおかし

い。

「それにムッツリーニがいないのも気になる」

雄二の言う通り、ムッツリーニならば隠し通路などの仕掛けにはいち早く気付き、行動してるに違いないからおかしな話だ。

まぁ、秀吉は男子じゃないから不思議じゃないけど。

「単純に考えれば、なにか強大な妖怪に行方を阻まれているか、恐くて部屋から出ていないかのどちらかだろう」

「強いやつがいようと姫路さんの所に行くのは邪魔するなら倒すだけだ。そうだろ主人？」

明希が試すようにこちらを見る。

まったく、明希もわかりきったことを聞くなんて不粋だなぁ。

「うん。どんな困難な目にあっても姫路さんを助け出してみせる」

僕のできるすべてをかけてでも。

「よく言った明久。

よし！行くぞ野郎ども！！

ここを活動拠点とし、女子たちを救い出せ！！」

「「「「おぉーーー！！！」」」」

雄二の掛け声にみんなが同調する。

さぁ、第二回戦の開始だ！

第４８問　僕とみんなと第2ラウンド！（後書き）

明瑞分が足りない…
今までが明瑞成分が強すぎたせいか数話絡みがないだけで物足りなく感じてます。
よし！再会させたら目いっぱいイチャイチャさせることにましょう
（笑）

第４９問　私と明久君と大好きな笑顔（前書き）

ＳＨＩＮさん、感想ありがとうございました！

第４９問　私と明久君と大好きな笑顔

瑞希ＳＩＤＥ

「いくら外に出れないっていっても何もしないと暇よね……」

友香ちゃんがぼやくように言います。

「だけど廊下にも出れないんだからどうしようもないでしょ？」

美波ちゃんの言う通り廊下に出ることはできません。

いえ、物理的に出れないわけではなく出たら妖怪がたくさんいて恐いんです…

「こんな事ならトランプでも持ってくればよかったよね…」

「真由美の言う通りね。誰かトランプとかＵＮＯ持ってない？」

トランプとかＵＮＯですか……

私は持ってきていませんし、行きの電車で取り出していないということは美波ちゃんも持っていないはずです……あっ！

「トランプやＵＮＯじゃないですけど百人一首なら持っていますよ」

「「「「ほんと！？」」」」

皆さんの目の輝きがちょっと怖いです…

よほど暇を持て余していたんですね…

「はい、勉強会で使えるかと思って持ってきたんです。
押し入れの中に置いてあるカバンに入れてありますから取ってきますね」

「やったーこれで暇しないですむわ」

「暇しないのはいいけど、ウチは百人一首って苦手なのよね…」

たしかに美波ちゃんは読めない字がありますし、百人一首は古典的なものですから苦手かもしれませんね。なにかハンデをつけた方がいいでしょうか？

ガラガラ

そう思いながらカバンの入れてある押し入れを開けます。
すると押し入れの中の壁についてる目が一斉にこちらを――

「……きゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

「どうしたの瑞希！？」

すぐに美波ちゃんが走って頭を抱え、うずくまる私のそばにきます。

「目です…
壁に目がたくさんついてます…」

「壁に目？
それなら一目蓮じゃないかしら？」

美波ちゃんの後に続くようにやってきた律子ちゃんが冷静に言います。

「大丈夫よ。一目蓮は人に害を加えないし、もうどこかへ行っちゃったから」

「ほんと…ですか…？」

恐る恐る押し入れの方へ目を向けるとたしかに普通の壁でした。
さっきまでたくさんの目が張り付いていたのに何事もなかったかのように…

「本来は障子に張り付いて出てくる妖怪なんだけど障子が減って居場所がなくなっちゃったんでしょうね」

もうお寺に行きたくないです…

「なんで岩下さんはそんなに詳しいのよ…」

「親戚に住職がいて小さいころよく遊びに行ったの。
それで一目蓮なんてよく出てきたから慣れっこなの。
一目蓮以外の妖怪はてんでダメだけどね…」

友香ちゃんの疑問に律子ちゃんは苦笑しながら応えます。
たぶん、私は何度見ても耐性がつくとは思いません……

「でも危害がないとしても妖怪がいるって事は部屋の中も危ないんじゃない？」

「たしかに美波ちゃんの言う通りですね。
いざというときの脱出経路を見つけとかないといけませんし」

「そんなこと言っても隠し通路があるわけじゃないんだから逃げ道なんて入り口しかないわよ…」

「結構シビアな問題ね…」

みんなで考え込んで黙ってしまいます。

ガチャッ！

私たちは一斉に開いた扉の方へと視線を向けます。
そこにはカッパに似たなにかがいました…

「ゲラゲラゲラゲラ！」

「「「「「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」」」」」

みんなで一斉に部屋の奥に逃げ込むように走り出します。
部屋に入ってきて早々に笑うなんて不気味すぎます！

「ゲラゲラゲラゲラゲラゲラゲラ！」

笑いながらもカッパに似たなにかは一歩、また一歩と着実に私たちの方へと歩みよってきます。
私たちは壁に張り付くようにしてるのでこれ以上逃げることもできません……

「うぅ……」

「いやいやいやいや！」

「こ、これ以上近づいたらタダじゃおっ、おかないわよ！」

「もうダメよ…」

恐がる私たちを他所にカッパモドキは残り数歩というところまで迫ってきました。明久君、助けてください……

私は来るはずもない想い人をまぶたの裏に浮かべ、目を瞑ります。

「ゲラゲラゲラッ！？――――」

バタッ！

カッパモドキの笑い声が収まったかと思うとなにかが倒れる音がしました。

恐る恐る目を開けると、そこには――――

「大丈夫、姫路さん？」

「明久……君…」

いるはずのない明久君がいました…

更に私と明久君の間にはカッパモドキが倒れています。

「誰も怪我していないようでよかったよ」

そう言って明久君はいつものように笑います。そう、いつもと同じように……

「助かったぁ…」

「姫路さんと相部屋でよかったよね」

「うんうん、姫路さんと相部屋じゃなかったら吉井君は来てくれなかったしね」

友香ちゃん、真由美ちゃん、律子ちゃんが安堵したように言います。ですけど私と相部屋の事と明久君の来てくれた事の関係性がいまいちわかりません…

「三人ともからかわないでよ。っと、それよりもここは危険だから僕の部屋まで逃げよう。案内するよ」

「吉井がどうしてもって言うなら着いていくわよ」

「でも待って。外には妖怪がいるんでしょ？」

律子ちゃんの言う通り廊下には妖怪がたくさんいるはずです。その中をくぐり抜けるなんて、とてもじゃないですけど無理ですよ…

「その点は心配いらないよ。どういう訳だか妖怪は召喚獣で倒せるからさ」

ということはさっきのカッパモドキは明希君が倒してくれたんでしょうか？

なら今度お礼を言わないとですね。

「吉井君もいることだし、それなら安心かな」

「うん、僕も出来る限りみんなを守るから早く行こうよ」

「吉井君もそう言ってることだし行きましょ」

真由美ちゃんにつられるようにみんなが立ち上がります。
だけど私はどこかに違和感を感じ、立ち上がることができません。

「どうしたの姫路さん？
みんなを待たせちゃいけないから早く行こうよ？」

そう言って明久君は手を差し出してきます。
私はほとんど無意識にそれを掴むと明久君につられて立ち上がります。

「じゃあ、廊下に出るよ」

明久君はそう言って入り口を開けると私の手をひいて廊下に飛び出しました。
後ろには私たちに続くように四人がついてきています。

「ふぇ……？」

廊下に出て周りを見渡した私は思わず唖然としてしまいました…

「なんで通路がないのよ…」

美波ちゃんの言う通り正面には向かいの部屋があるのですが、廊下の左右の通路が壁で塞がれていました…

「これはぬりかべってやつで召喚獣でも倒せないから気にしないで」

「でも吉井はどうや――――きやぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

『どうやってきたのか』と言いかけた美波ちゃんの目の前に急に天井から逆さまに女の人が出てきました。しかも天井にぶら下がったままです。

「島田さん、しっかりして！
そいつは逆さ女ってやつで、背後が弱点だから早く召喚して！」

「うっ、わかったわよ……さ、サモン！」

例の幾何学模様から美波ちゃんの召喚獣が現れます。
そういえば、この旅館内全域に特殊な細工を施してあるので、先生の承認なしにどこでも召喚できるんでしたね。

「「「サモン！」」」

三人も美波ちゃんに加勢するように召喚獣を召喚します。よし、私だって！

「サモ――――」

私は言葉を言いきることができませんでした。
明久君が後ろから手で私の口を抑えているため、声が発せられないのです。

「はにふふんへふか！」

美波ちゃんたちは私と少し位置が離れてますし、恐怖と集中力で私の状況に気づいてません。

「姫路さんはこっちだよ」

明久君は私の耳元でささやくと私の口を抑えたまま後ろの壁へと後退りしていきます。このままじゃ壁に当たっちゃいます！

そう思って目を瞑りますが、いつまでたっても痛みがやってきません。

疑問に思って目を開ければそこは私たちがさっきまでいた部屋とそっくりな部屋でした。ただ決定的に違うのは扉がどこにもないということ……

「姫路さん、やっと二人っきりになれたね」

明久君と二人っきり……

本来なら、それを考えただけで幸せな気持ちでいっぱいになれますが、今は違います。むしろ恐いんです。他の誰でもない、明久君が……

「僕、ずっと姫路さんに言いたいことがあったんだ」

そう言いながら明久君は後ろから私を包み込むように抱き締めてきます。

「私も…あなたに言いたいことがあります」

「あなただなんて変な呼び方しないでよ」

「変じゃ…ありませんよ！」

私は私を抱き締めている彼を振りほどくようにして距離をとろうとしますが、あともう少しというところで片腕を捕まれ強制的に向かい合う形にされてしまいます。

「だって今まで明久君って呼んでくれてたのに急に『あなた』だなんて変だよ」

そう言って私の知っている明久君の顔は困ったように笑います。

「いいえ、あなたは明久君じゃありません」

これだけは確実に言えること…

「なに言ってるんだよ。この顔が僕以外の誰のものだっていうんだい？」

「たしかにそれは私の知っている明久君の顔です。
ですけど……私の大好きな明久の笑顔じゃありません！
私の大好きな明久君はみんなが困っているときはいつも通りは笑わないんです！
みんなの不安を取り除くような、そんな温かな笑い方をするんです！
でもあなたの笑顔は違った。
あれはいつもの笑顔です。明久君が楽しい時に見せるいつもの笑顔なんです！」

これが私の感じていた違和感の正体。
明久君じゃないのだから違和感を感じて当たり前なんです。

「あなたはいったい誰ですか……」

第４９問　私と明久君と大好きな笑顔（後書き）

瑞希を謎の個室に連れ出した明久の正体とは果たして！？

今回出てきたカッパモドキですが正式名称は水虎といいます。

カッパに似た見た目でつられて笑った人は死んでしまうそうですよ。

では、次回もよろしくお願いいたします！

第５０問　僕と妖怪と召喚獣！？（前書き）

黒炉さん、感想ありがとうございました！

第５０問　僕と妖怪と召喚獣！？

明久ＳＩＤＥ

「いくよ明希！」

「おう、合わせろよ主人！（マスター）」

ズシャッ！

僕の召喚獣と明希が同時にたんたんころりん（柿のお化け）を斬りつける。

たんたんころりん　ＵＮＫＮＯＷＮ討死

お馴染みの表示がでて、たんたんころりんが消滅していく。

「手応えがねぇなぁ！」

「下手に手こずるよりはマシだけどね……」

木刀を振り回しながら戦い足りないことをアピールする明希に若干呆れながらも周りを見渡す。どうやらさっきので一区切りついたらしく後続は見当たらない。

それにしてもいつになったら姫路さんの部屋につけるのだろうか？

かれこれ十部屋ほど回っているが姫路さんはおろか女子すら見つかっていない。

「主人、もたもたすんなよ。次行くぞ」

「わかってるって」

そう言って戦場である廊下から部屋に入っていく明希を追いかけていく。

「止まれ主人！」

「えっ！？」

明希の制止により部屋の入り口で僕は立ち止まる。

「ボスクラスのお出ましってわけか」

臨戦態勢に入っている明希の見据える先に視線を移すと、そこには炎をまとった人力車で使うような車輪がいた。たしかこいつは火車という妖怪のはずだ。

「ガハハハ、マタイケニエガキオッタワイ」

車輪の中心についている顔が高らかに笑いながら言う。

「明希、生け贄って…」

「んなもん、こいつ倒しゃわかるこんだろうよ」

たしかに明希の言う通りだが、本来部屋に入ることがない妖怪が部屋を占領しているのだから一筋縄ではいかないだろう。

「イセイガイイジャネェカボウズ！カカッテキナ！」

火車がそう言うと共にお互いの点数が表示される。

Ｆクラス吉井明久　世界史１３８点

召喚獣　明希　世界史１４２点

火車　ＵＮＫＮＯＷＮ　４８８点

雄二たちと別行動をとってから僕も明希もほとんどダメージを受けていないため、点数の消費はほとんどない。だが、それでも２００点差もある……

「イクゾボウズドモ！」

そう言い放った直後、火車の炎がより一層強くなり猛スピードでこちらに突っ込んできた。

「あぶねっ！」

「せっ、セーフ…」

僕の召喚獣と明希は間一髪のところでかわすが危ないところだった。スピードもさることながら、あの点数での攻撃を受けたら一堪りもないだろう…

それに畳だって焦げて……焦げてる…？

なんでだ？

なぜ、炎をまとっているのに畳が焦げるだけですんでるんだ？

……なにかある。この妖怪騒動の裏に僕たちの知らないなにかが…

「主人、そっち行ったぞ！」

明希の声に正面を向くと火車が僕目掛けて突っ込んできていた。
僕自身は淡雪の張ってくれた結界のおかげでよける必要はない。なら、試してみる価値はある！

召喚獣に木刀を構えさせると火車の進行方向から少しずらす。
あれだけの速さが出ているのだから途端に進行方向を変えるのは無理だろう。

「はぁぁぁ！」

案の定、そのまま突っ込んできた火車を掬い上げるように木刀で弾く。

「ソンナコトシテモイミガナイゾ！」

宙に舞う火車が僕目掛けて落下しながら言う。

「いいや、意味ならあるさ。明希！」

「おうよ！」

明希が自身の木刀を僕目掛けて投げてくる。
さすが僕の片割れだけあってやることがわかってるじゃないか。

「ふっとべぇぇぇ！！」

受け取ったちょっと小さめの木刀で火車を野球ボールを打ち返すよ

うに打つ。

火車　ＵＮＫＮＯＷＮ　４４９点

「ガハハハ、ソノテイドノチカラジャワシハシナンヨ！」

高らかに火車が笑うが、たしかに火車の言う通りだ。
だけど、目的は火車を倒すことじゃない。

「受け取って明希！」

体勢を立て直した僕の召喚獣が明希目掛けて木刀を投げる。

「チェックメイトだ！」

空中で木刀を受け取った明希は、そのまま僕に打たれ明希の頭上をとんでいる火車を加速させるように打つ。
召喚獣は人の何倍もの力があるからその加速力も中々のものだ。

火車　ＵＮＫＮＯＷＮ　３８６点

「ナカナカノコウゲキダガマダマダジャナ！」

「「いいや、僕（俺）たちの狙いそこじゃない！」」

「ン？マッ、マサカ！？」

火車も今頃気づいたようだがもう遅い。火車は減速せずに窓にぶつかると、そのまま窓ガラスを突き破り旅館の外へと消えていった。

「さてと、真実を確認するとするか」

「そうだね」

明希と共に火車の落ちていった窓から下を見るが、案の定なにもいなかった。

「やっぱり召喚システムの内の一つだったんだね」

だから召喚フィールド外である旅館の外に出てしまったから消えてしまった。

「まったく、ハバァも手の込んだことやってくれるぜ」

おそらくは一定パターンの組み込まれた自立式の召喚獣なのだろう。妖怪の姿をしていたのは大方、召喚システムの一環だということがバレないためのカモフラージュ。ついでに女子陣に対する牽制ってところだろうか。

しかし狙いがよめない。

なんのためにこんな大がかりでめんどくさいことをやっているのだろうか？

それに住職である境内院さんも僕たちを騙すためだけに呼ばれたのか？

たぶん、そうじゃない。まだ僕たちが知らないなにかがあるんだ…

「とにかくハバァの所に行くとするか」

「その前に火車の言ってた生け贄ってのが気になるんだけど……」

さすがに召喚システムの一環である火車が人を殺すとは思えないし、

観察処分者以外の召喚獣は物理干渉ができないのだから無理だろう。

「大方、押し入れの中にでもいるだろうよ」

そう言って明希が押し入れの扉をおもいっきり引く。

「きゃっ！」

押し入れの中にいた女の子が驚きの声をあげる。残念ながら僕が知っている人ではないが、初めての女の子だから他の女子がどうなってるか聞ける――――！？

「うわぁ！？」

突然持ち上がった足元の畳によろけながらも体勢を立て直す。

「これで地図は完成したな」

そんな聞き慣れた雄二の声と共にぞろぞろと床下からみんなが出てくる。

その中にはムッツリーニや秀吉、女子たちもいた。ただ――――

「雄二、姫路さんは…？」

そう、ただ一人姫路さんだけがいなかった…

「『姫路さんは？』じゃないわよ！

吉井、あんたこそ瑞希をどこに連れてったのよ！」

応えたのは雄二ではなく島田さんだ。

よくわからないことを言ってるし、なぜだか怒ってるみたいだけど……

「姫路さんがどこにいるかは僕が聞きたいんだけど…」

「よくもそんな白々しいことが言えるわね！
吉井が瑞希を連れてウチたちの前からいなくなったんじゃない！」

僕が姫路さんを連れて島田さんたちの前からいなくなった？
島田さんの言ってることがますますわからない。
第一今日は姫路さんに会ってすらいないというのになにを言ってるのだろうか？

「島田もいっぺん落ち着け。明久の方もなにがなんだかわかってないらしいぞ」

「そうだよ。僕は今日、姫路さんに会ってすらいないんだよ」

雄二の助け船に便乗するように島田さんに言う。

「瑞希に会ってない？
どういうことよ。ちょっと前にウチたちの部屋に来たでしょ？」

「行ってないよ。
それに僕は姫路さんの部屋を探してたんだからさ…」

「なによ…
それじゃまるで吉井が二人いるみたいじゃない…」

「おそらく、その可能性が高いでしょう」

今まで静観していた淡雪が言う。
おそらく全員分の結界も作り終わったから誰かに同行していたのだろう。

「僕が二人…？」

「ええ。
正確には吉井様の偽者であるドッペルゲンガーがいることになりますが」

ドッペルゲンガー…
特定の人と同じ姿をとり、あたかも本人のように振る舞う妖怪…

「仮にドッペルゲンガーだとしてなぜ姫路を拐う必要があるんだ？」

「妃様の拐った正確な理由はわかりませんが、人質と考えるのが妥当かと」

姫路さんを人質だって…？
いくらなんでも手が込みすぎじゃないか！
なんで召喚システムの一環ごときに……召喚システム？
ならどうやって姫路さんを拐ったんだ？
物理干渉のできないはずの召喚獣がどうやって……
……いや、一つだけ可能性がある。ドッペルゲンガーが姫路さんに触る方法が…

「淡雪、メリーさん、君たちは本当に妖怪なの……？」

「ええ、私は座敷童子ですから妖怪ですよ」

「私なんか名前そのままだけどね」

ここまでは想定済みの答えだ。

「それはそういう設定の召喚獣じゃないってことでいいんだよね？」

「明久、なに言ってるんだ？」

雄二が訳がわからないという風に言う。

やっぱり雄二でも気付いていなかったのだろう。

いや、僕だって焦げに気付かなければ気づけなかったかもしれない…

「ここでさっきまで僕と明希は火車と戦っていた。

だけど、あそこの窓から……いや、召喚フィールドから出したら消えたんだ」

「……じゃあ妖怪は全部、召喚システムでできてるってこと？」

雄二の隣にいる霧島さんが小首を傾げながら尋ねてくる。

「うん。少なからず今まで僕たちが今まで戦ってきた妖怪はね」

「……じゃあメリーも？」

霧島さんが悲しそうにメリーさんの方を見る。

きっとメリーさんの言っていた通り、仲良くなっていたのだろう…

「たぶん、メリーと淡雪は違うと思う」

「なぜそう思われるのですか？」

淡雪は自分のことなのに僕を試すように尋ねてくる。

「まず一つ目の理由として明希並の自我をもっていること。明希用の腕輪を作るのに精一杯なババァにそんな芸当ができるとは思えない。

二つ目に他の妖怪には逐一点数モドキが表示されてるのに淡雪たちには一度も表示されたことがないってことかな」

「答えとしては充分ですね。

そこまで導きだせるのなら隠したところでじきに見破られるのが関の山。

教えしましょう。私の知っていることすべてを」

そう静かに言うと淡雪は周りを見渡す。

「すみませんが、ここからは本当の意味で人知を越えた範囲ですので覚悟のない方は別室に移っていただきたいのですが」

これは淡雪なりの配慮。関係ない一般人を巻き込みたくないという…それだけ重大かつ、恐ろしいことなのだろう。

「僕は当然残るよ」

それが今、僕が姫路さんにしてあげられることだから……

「俺なんか既に人知越えてるんだから関係ないぜ」

たしかに明希は人が考えた召喚システムの枠を越えた存在だから充

分人知を越えているだろう。だけど、これはそういった問題なの…？

「俺に喧嘩を売ろうってなら妖怪だろうと容赦しないぜ」

「……瑞希を助ける」

雄二と霧島さんも参戦表明する。

「友達を助けるのは当然のことじゃ」

「……ドッペルゲンガー、殺すのは惜しいが許さん」

少し離れたところでなにやら話し合っていた秀吉とムッツリーニもやってくれるようだ。

ところでムッツリーニ、君はドッペルゲンガーをなにに使おうっていうんだい？

はなはだ疑問に思いながらも島田さんの方へと目線を移す。

いつものメンバーで後は島田さんだけだけど幽霊とか妖怪とか、そういった類いが苦手らしいから無理にでる必要はないだろう。

「……ウチも行くわ…」

「島田さん無理しなく「いかせて！」

島田さんの訴えかけるような口調に思わず僕は黙ってしまった。

「ウチもいかせて！

目の前にいた瑞希が拐われるのも気付かなくて、吉井にあらぬ疑いをかけて……

このままじゃイヤなのよ！ウチだけなにかを知らないままなのはもうイヤ……」

半泣きになりながらも島田さんはしっかりと話す。
島田さんは島田さんで思い詰めていたのだろう…
だけど、その言葉は今回の件に対してだけじゃない気もするし、秀吉も島田さんの言葉を聞いてうつむいてしまった。
もしかしたら二人はなにか共通で知っていることがあるのかもしれない。

「吉井様、それだけの決意があれば充分ではないでしょうか？」

「そうだね…
じゃあ、島田さんもお願いね。
だけど、恐かったら隠れてもいいんだよ。
島田さんがついてきてくれるだけで嬉しいんだからさ」

「う、うん…」

なににせよ、他人のために自分の殻を破ることはすごいことだと思う。
それが自分の大切な人のために破ってくれるなら同時に嬉しさともなる。
やっぱり姫路さんはみんなに好かれてるんだよね…
僕には遠すぎる存在だよ…

「メンバーは決まりましたね」

「ちょっと待ってくれ。俺たちだって行く覚悟くらいあるぞ」

須川君が淡雪に抗議するように言う。
僕のエゴかも知れないけれど、きっと文月学園のみんななら誰一人欠けることなくついてきてくれるだろう。そんないい人たちばかりだから――――

「悪いけど須川君たちには残ってほしいんだ。
あまりにも大所帯で行ったらむこうも警戒するだろうし、いざという時のために避難経路を確保しておいてほしいからさ」

「避難経路？」

「うん。たぶん、ドッペルゲンガーは本当の妖怪で僕たちを殺してこようとするかもしれない。だから、その時のためのね」

本当はそんなことすら意味がないことはわかってる。
だけど須川君たちの厚意を無下にはできないし、巻き込みたくもない。
それを言えば雄二たちも巻き込む訳にはいかないのだろうけど、たぶん退かないと思うだろうし、正直な話僕一人だと心細くもある。

「わかった。俺たちは出口までの道を確保しとくぜ」

そう言ってみんなは部屋から出ていった。

「甘いのですね」

「自分にね……」

僕は淡雪の言葉に自嘲気味に繋げる。

「やはり甘いですよ。吉井様は……」

淡雪はそう言うと、きびすを返して雄二たちの方に向き直る。

「では残ってくださった皆様にお話しましょう。
なぜドッペルゲンガーがここにいるのか、そして私の過去を」

第５０問　僕と妖怪と召喚獣！？（後書き）

次回、ついに強化合宿編が佳境に！
そして明かされる淡雪の過去とは！？
次回もよろしくお願いします！

第５１問　私と秋夜様と大切なもの（前書き）

今回は短めですがどうぞ

第５１問　私と秋夜様と大切なもの

ここは…どこ…？
周りを見渡せし、目に映るものは全て古びた物ばかり。
天井にも亀裂が入っており、一目でこの部屋の主が貧乏だという事がわかった。
しかし、なぜ自分がここにいるのか、はたまた来たのかわからない。
なにか大切なことを忘れているような気がする…
自分自身の存在を証明するほどに大切なにかを……

ガラガラ

ふすまが開き、一人の男性が入ってくる。
歳は二十いくかどうかというところではないだろうか。
全身黒づくめであるが不思議と怪しさは感じられない。

「……」

私がなぜここにいるのかを知っているであろう男性は私の方を凝視したまま固まってしまっている。もしかして私の顔になにかついているのだろうか？
だとしたら言ってほしいものなのですが……

「あの…その……えっと……」

やけに男性はそわそわしながらも、私の方をチラチラと見ながらなにかを言いたげにしています。

「なにかご用ですか？」

「うん…その、君はだれ？」

「……えっ？」

予期せぬ返答にしばらく固まったあげく間抜けな返答をしてしまいます。

彼は私が誰だか知らない…？

じゃあ、私はなんのために知らないここにいるの……

「いや、だから君は誰だか聞いてるんだけど…」

「……私もわかりません…

自分が誰なのか、また、なぜここにいるのかも…」

「えっ……」

困りましたね…

どちらとも私の素性がわからない以上、追い出されることは必須。

おそらく、この部屋から出たとしても見知らぬ世界が広がっているでしょうから手のつけようがありません……

目先の問題としては住みかと食料ですよね。

当然というか、私は一文なしですし行く宛すらありません…

これは弱りましたね…

俗に言う『絶体絶命』というところでしょうか？

「ねぇ、なにか考え込んでるところ悪いんだけど、君さえよかったらここにいてもいいんだよ？」

「わかっています。私も追い出されることくらいは――――えっ？今なんと？」

私の聞き間違えでなければ『ここにいていい』と…

「だから、君さえよければここにいてもいいって言ってるんだよ」

「見ず知らずの私をおいてくれると？」

そんな虫のいい話があるわけない。

そんなことしても彼にはなんの得などないのだから…

「自分のことすらわかってない人をほっておけないよ」

「素性のわからない私でも？」

それを受け入れるなんてお人好しを通り越してバカだ。

「君だって僕のことをなにも知らないでしょ。なら条件は一緒だよ」

「…あなたは……優しいんですね」

損得勘定をせずに無償の優しさをくれるなんて…

「甘いんだよ」

「甘い？」

「うん。僕は自分に甘いんだ」

「よくわかりません…
でも、暫くはここに泊めてもらってもよろしいということでしょうか？」

「だからいいって言ってるじゃないか」

そう言って彼は屈託なく笑いました。
それは私から彼に対する不安を取り除くには充分すぎるくらいの明るい笑顔…

「では、暫くお世話になります。えっと……」

「秋夜（しゅうや）。月島秋夜だよ」

「はいっ！
では、改めてよろしくお願いします秋夜様」

私は今、自然に笑えているだろうか？
見ず知らずの私を受け入れてくれた秋夜様に不安をもたせないように……

「普通に秋夜でいいよ」

「いえ、居候の身ですから秋夜様と呼ばせていただきます」

なぜだかそうしないといけない気がした。もしかしたら空っぽの私に唯一残っていたものかもしれないのだから、これだけは譲れないのだ。

「うーん、君がそういうなら仕方ないか…

ところで君はなんて名前なのさ？」

「名前……
あったのかもしれないですけど、わかりません…」

「そうか……」

そう言うと秋夜様はまるで見定めでもするかのように私をまじまじと見詰めてきます。

「あんまり見詰められると恥ずかしいです…」

「あっ、いやこれ違うんだ！
その、君の名前を決めようと思ってさ。
ほっ、ほら、その白い着物に君の柔らかい感じで淡雪なんてどうかなぁなんて……」

「淡雪……
いい名前ですね。淡雪…私の名前は淡雪ですっ！」

これが私が秋夜様から初めてもらって今も残っているたった一つのもの…
私の一番大切な秋夜様からのプレゼント。今はもういない秋夜様からの……

第５２問　私と秋夜様と晴香さん（前書き）

過去話という都合上、仕方のないことですが明久たちは今回も出番なしです…

第５２問　私と秋夜様と晴香さん

「秋夜様、秋夜様！
朝ですよ。もう朝ごはんもできています！」

朝食の支度を終えた私は布団の中で気持ちよさそうに寝ている秋夜様を揺さぶり、起こそうとしますが一向に起きる気配がありません…

「秋夜様！」

「……うっ…晴香…」

「……」

またです…
寝ている秋夜様が時折口にする『晴香』という名前…
秋夜様となんらかの関係がある方とは思いますが、私は見た目すら知りません…
また寝ている秋夜様に呼ばれる、見知らぬ『晴香』という方に嫉妬の念を抱いたこともあります。私は一度も呼ばれたことないのに……
私にとって、この『淡雪』という名前が私である唯一の証明なのに……
居候の身。それで多くのことを望むのはお門違い。
それくらいはわかっています。わかっていますけど……一度くらいはせめて…

「ん……ふわぁ～～～
……あっ、淡雪おはよう」

ようやく秋夜様が目を醒ましました。

「おはようございます秋夜様。もう朝ごはんできますよ？」

まだ寝惚け眼の秋夜様に心中を気付かれないように、できる限りの笑顔で接します。

「……淡雪、調子悪いの？」

じっと私の方を見ていた秋夜様は私の額に手を当ててきました。

「ひゃぁっ！？
しゅ、秋夜様なにしてるんですか！？」

たぶん私は今赤面しているのだと思います。身体が火照ってあついです…

「なにって、熱がないか確かめただけだけど？」

「熱？」

「そうか、熱がなになのかもわからないのか……
熱っていうのはね、菌やウィルスが身体に入り込んで身体が熱くなることだよ」

では、私は熱があるのかもしれませんね。
だって身体がこんなにも熱く、心臓がドキドキしてるのですから。

「そう…なんですか…」

これで秋夜様に説明してもらうのも何回目になるでしょうか…
ここに来て早一週間、私には世間一般的な知識が足りていないらしく、秋夜様にその都度説明してもらってる有り様です。

「少し顔も赤いし、額も熱いから今日は寝てなよ」

「だ、大丈夫です！」

私は小さくガッツポーズをとって自分が健康であることをアピールします。
それに、これが熱ならば悪くないです。こんなに心地よい温かさなら…

「本当に大丈夫？」

「はいっ！」

だからもう少しだけ私に……私だけにその温かさを……

～数分後～

「うん、今日も淡雪の料理はおいしいね」

朝食である味噌汁をすすりながら秋夜様が言います。

「そんなことありませんよ」

私は褒められたことが嬉しくて、つい頬が緩んでしまいます。
もっと秋夜様に褒めてもらいたいです。
そうだ、この前『てれび？』だかという人が閉じ込められている珍妙な箱で、中の人が言っていた鮭の塩焼きというのを作ってみましょう。
ニホンジン（秋夜様もこれに属するらしいです）のほとんどは好きだと言っていましたから、きっと秋夜様も喜んでくれるはずです。

「楽しそうだね淡雪。なにかいいことでもあったの？」

「はいっ！
明日は秋夜様を喜ばせてあげますから」

それが私にとっての幸福です。

「よくわからないけど淡雪が楽しそうだしいっか…
っと、そういえば今朝はなにか考えてたみたいだけどなにがあったの？」

おそらく秋夜様は私の心情の変化に気付いているのでしょう。
その内容は定かでないとしても、なにかを悩んでいることくらいは…

「たしかに今朝方、悩みはありましたが、もう解決したからいいんです」

だって、あなたが起きて初めて呼んだのは私の名前だから。
昨日も一昨日もそのまた前の日も一番に私の名前を呼んでくれたから…

「そうか…
まぁ、僕でも力になれることがあったら言ってよ」

「はい、もしその時はよろしくお願いしますね」

だけど、あなたにこの胸の悩みを打ち明けることはできない。
打ち明けてしまえば終わりだから…
そこで終わってしまうから…
あなたは私から離れていってしまうから……

「じゃっ、そろそろ学校に行ってくるよ」

そう言って秋夜様は初めて会った時と同じ黒づくめの服に着替えにいきました。
どうやらあの黒づくめの服は『ガッコウ』という場所に行く際には着なければいけないようです。

「じゃあ、行ってくるね淡雪」

「はい、いってらっしゃい秋夜様」

私は『えぷろん』というものをつけたまま秋夜様に手を振ります。
秋夜様の方もはにかみながらも手を振り返してくれます。

さてと、私も明日のために鮭を買いに『おつかい』に行かなければなりませんね。これについての知識も『てれび』で得ているので大丈夫です。
たしか『は○めてのおつかい』という番組で小さな子供たちが『おつかい』をしていたのを見ていましたから抜かりはありませんよ！

秋夜ＳＩＤＥ

憂鬱だ……

家にいる時は淡雪が屈託のない明るい笑顔を向けてくれるから気持ちも晴れるが、学校にいると友達と話してるのも億劫になってくる…思えば淡雪があの日、突然僕の部屋に現れたのは偶然なのか、はたまた必然なのか。少なからず、あの時の僕は癒しを求めていた。誰かが傍にいてほしかった…

彼女だった晴香にフラれてしまったあの日は……

だから、見ず知らずの淡雪も家においてしまった。

本当に淡雪のことを考えるべきなら親や親類を探してやるべきなのだろう。

だけど、僕自身が癒されたいがために淡雪を家におき続けてる。

すべては僕の『自分自身に対する甘さ』からきてしまった事態だというのに僕はどうすることも……いや、今のままでいたいと思っているんだ。

最悪だよね……

彼女にフラれたからって、見ず知らずの女の子を代わりみたいに扱うなんて…

こんなんだから晴香にもフラれちゃったんだろうな……

「ねぇ！秋夜、人の話聞いてんの！」

「いたっ！」

突然、頬をつねられる。

「『いたっ！』じゃないわよ！あんたは私の話聞いてんの！？」

顔を上げればそこにいたのは晴香で――――

「って、晴香！？」

「なに今頃驚いてんのよ。
さっきからずっと話かけてたでしょ」

晴香は一週間前以前のように呆れた風に言う。

「あっ、いやごめん…
それで要件はなにかな？」

「はぁ…
やっぱり聞いてなかったんじゃない。
まぁいいわ、単刀直入に言うから。今日私の家に来なさい」

「えっ…？」

今更晴香はなにを言っているのだろうか？
もう僕たちは恋人同士じゃないというのに家に呼ぶなんて…

「鈍いわね。
私はあんたとよりを戻したいって言ってるのよ。当然来てくれるわよね？」

「うん…」

いまいち腑に落ちないが、一応了承しておく。
晴香がなにかを企んでいるのかもしれないけど、もし本当に仲を戻せるなら……

「じゃあ、家で夕飯作って待ってるから」

それだけを言い残すと晴香は自分の教室に戻っていってしまった。

「本当に僕たちは仲直りできるんだろうか…」

誰に言うでもなくポツリと呟くが当然反応してくれる人はいない…

淡雪ＳＩＤＥ

「♪♪♪」

私は今、カレーを作っています。
カレーは秋夜様の好物ですから今日のお夕飯は喜んでくれるはずですよ。

「ふふっ、楽しみですね」

私は鼻歌を歌いながら調理を続けます。早く秋夜様に帰ってきてほしいです♪

第５２問　私と秋夜様と晴香さん（後書き）

次回くらいには過去話が完結すると思いますので今しばらくおつきあいください

第５３問　僕と淡雪とかけがえのないもの

「はぁ…
秋夜様、遅いですね…」

準備の整ったテーブルに座りながら私は一人、秋夜様の帰りを待ちます。
時計を見れば既に短い針が１０を示していました。
いつもなら、遅くても８と９の間には帰ってくるのに……

ピッ

傍にあった『りもこん』で『てれび』の電源を入れると男女が楽しそうに『れすとらん』という場所で食事をしていました。たしかこれは秋夜様もたまに見ている『どらま』というやつですね。
私も早く秋夜様とご飯を食べたいです…

外で食べたいなんて言わない
豪華なものがほしいなんて言わない
食事をつくってほしいなんて言わない
だから、せめて一緒に食べたいです…
私のつくった料理を二人でいつもみたいに……

秋夜ＳＩＤＥ

ピンポーン

補習が終わり、約束通り晴香の家までやってきた僕はチャイムを押す。

ガチャッ

「あ、秋夜。さっ、早く入って」

「うん…」

エプロンをつけた晴香に促されるまま家に入っていく。

家の中には肉を焼いていたのかおいしそうな香りが漂っていた。

「先にリビングに行ってて。私は料理持ってくるから」

「あっ、僕も手伝うよ」

さすがに料理まで作らせておいて何も手伝わないのでは酷いと思う。

「いいわよ。秋夜は早く席についてて」

「そうか…

わかった。先に席についてるよ」

そう言って料理の椅子に座るが、どうも腑に落ちない。

一週間前はあんなに怒ってたのに、急によりを戻したいと言ったかと思ったら家にまで呼んで夕食を振る舞ってくれるなんて不自然すぎやしないだろうか？
たしかに呼んでくれたのは嬉しいし、できることならよりを戻したい。
だけど、晴香に淡雪のことをなんて説明するんだ？

……淡雪には晴香のことをなんて説明するんだ…？

「秋夜お待たせ♪」

陽気な声と共に晴香が料理を運んでくる。

「豪勢だな…」

思わず圧倒されてしまいそうな程の料理を目の前にして言葉が漏れる。
次々と並べられていく品は七面鳥の丸焼き、海鮮サラダ、ビシソワーズ（要するに芋汁）とどれも豪勢なものばかりだった。

「これ全部、晴香がつくったのか？」

「こう見えても私、結構料理には自信があるんだからね」

そう言って晴香は自信たっぷりに胸をそらす。

「たしかに弁当もらった時はうまかったけど、ここまでとは…」

「ふふっ、ちょっとは私のこと見直したかしら？」

「見直したもなにも最初から軽視なんてしてないんだけどね…」

こうやって晴香と他愛ない話をするのも懐かしく感じる。
たった一週間の間があいただけだけど、それが僕にとっては長かったのかもしれない。淡雪と出会ってからの一週間が……

淡雪…

さすがにもう一人でご飯、食べてるよね…
できれば連絡しておいてあげたかったけど学校から家までは十駅も離れてるし、まだ淡雪には電話の出方を教えていないから仕方ないだろう。
そう、仕方ないんだ…

「ちょっと、なにボーッとしてんのよ。冷めないうちに早く食べなさい」

「あっ、うん。いただきます」

手を合わせて七面鳥の丸焼きをフォークで適量に切っていく。
うん、肉汁が染みだしてきておいしそうだ。

「ねぇ秋夜、一つ聞きたいことがあるんだけど?」

「なに?」

向かいの席に座った晴香に返答する。

「そのね…
聞いた話なんだけど、秋夜の家に……その…白い着物を着た女の子

が…出入りしてるってほんと…？」

「えっ…？」

白い着物を着た女の子。間違いなく淡雪のことだろう。
だけど、なにをどう説明するんだ！？
それに淡雪と一緒に外出したことは――――っ！
そうか、淡雪が買い物に出かける時に見かけられたのか…
まずい、ここで本当のことを話せば間違いなく晴香との関係は悪化するだろう。
だけどはぐらかして説明すればどうなる？
晴香のことだ、間違いなく僕の家まで来て淡雪を追い出そうとするだろう。

淡雪か晴香か……

「ねぇ秋夜！」

いつの間にか晴香が僕の隣まで迫ってきていた。
僕はその剣幕に思わずたじろいでしまい席から壁に逃げるように後ずさる。

「秋夜の家に女の子がいるなんてことはないわよね…」

さっきまでの剣幕とは打って変わって晴香の目には涙が浮かんでいた。

「お願いだから秋夜に家に女の子なんていないって言って…
私は今でも秋夜のことが好きなの。
一週間前に『優しすぎる』って言って別れ話を持ち出したのも秋夜

の気を引きたかっただけなの……」

「晴香…」

頬に伝う雫を拭きながら晴香が一歩ずつ近づいてくる。
そして、僕の目の前までくるともたれ掛かるようにして服に顔を埋めた。

「お願い……今日は私の家に泊まってって…
そうすれば…秋夜も思い直してくれると思うから…」

『明日は秋夜様を喜ばせてあげますから』

「……」

「えっ…」

晴香の肩をそっと掴み、引き離す。

「ごめん晴香、やっぱり僕帰るよ」

「どう…して…」

「僕は帰らなくちゃいけないんだ。
待ってる人が……約束があるから…」

僕の大切な人がいるから、そこに…

「私がいるじゃない！
なのに…どうして……どうしてなのよ！」

「……淡雪は晴香の代わりじゃないんだ」

そう、誰の代わりでもない淡雪は淡雪なんだ。
この長い一週間……たった一週間だったけど、淡雪が僕に見せてくれた笑顔、優しさは僕にとってかけがえのないものなんだ。
乗り換えた。悪く言えばそうかもしれない。
だけど他人になんと言われようともいい。
僕にとって淡雪はそれほどかけがえのない存在だから！

「淡雪をこれ以上待たせるわけにはいかないんだ」

それだけを言い残すと、僕は晴香の家から出ていく。

「ちょっと秋夜！
どういうことよ！全然意味がわからないんだから！」

後ろから晴香の声が聞こえてくるが立ち止まる気はない。

待ってて淡雪。今すぐ帰るから！

～秋夜の家～

「（ただいま）」

玄関の鍵を開けてそっと入る。
僕は独り暮らしだから門限とかはないが、これからは淡雪のために早く帰ろう。
まぁ、今日はもう寝ちゃってるだろうけどね。
腕時計を見ればもう１１時を過ぎていた。
さすがにこの時間帯まで淡雪が起きてるとは思えないし、僕自身に過失があるのだから文句は言えない。

ガチャッ

晴香の家では結局、食べ損ねたので何かを食べようと思いリビングへ向かう。

「ふみゅ……秋夜…さま…」

淡雪が用意がすんだテーブルに倒れ込むようにして寝ていた。
まさかずっと待っていたのか…？

いつ帰ってくるかもわからない僕を……

いつものように用意された食卓で僕を迎えいれようと……

「ごめんね淡雪…」

ソファーから毛布を取ってくると淡雪にそっとかける。

「秋夜…さま…？」

どうやら淡雪を起こしてしまったようだ。

「ただいま淡雪」

「お帰りなさい…しゅ……や……」

淡雪は言い終える前にまた寝入ってしまった。

たまには寝ている淡雪を見ながら食事なんてのもいいかもね。

そう思い、淡雪のつくってくれた料理を盛り付けるために台所にいく。

「今日はカレーか……」

以前に話した僕の好物を淡雪が覚えていてくれたのかはわからないけど、今日はたくさん食べたいと思っていたからちょうどいい。

カレーを白米を入れた皿に盛り付けると淡雪のいるリビングに戻る。

「いただきます」

スプーンで一口すくうと、それを食べる。

「おいしいよ、淡雪」

時間がたってしまっているけど

豪勢な料理じゃないけど

淡雪がいる、ここで食べられることが僕にとっては何物にも代えがたいことなんだ。淡雪、君は誰の代わりでもない。

だけど君の代わりは誰にもできないんだよ……

第５３問　僕と淡雪とかけがえのないもの（後書き）

ということで、過去話は後もう一話続くこととなります。
前回、今回で過去話終わりのようなことといってすいません。
基本、思いつきで書いているので計画性が皆無なんです…
では、謝罪も込めまして次回もよろしくお願いします

第５４問　僕と過去と二人の宿敵（前書き）

ついに過去編ラスト！

第５４問　僕と過去と二人の宿敵

淡雪ＳＩＤＥ

「きれいですね…」

私は窓の外に映る夜景に目を輝かせながら呟きます。

「気に入ってもらえたかな？」

「はいっ！」

秋夜様の問に元気よく応えると再び徐々に移り変わる景色に魅入ります。

秋夜様が遅くに帰宅なさった翌日、秋夜様が突然『ゆうえんち』という場所に連れてってくれると言ったので来てみると、そこは見たこともない乗り物でいっぱいでした。

そして、たくさん遊んだ私たちは最後に『かんらんしゃ』という物に乗ることにしたのですが、これはすごい乗り物です。

最初は低い位置にあるのですが、徐々に上に上がっていくと『ゆうえんち』全体のライトが夜に映えてとてもきれいに見えるのです。

「淡雪はなにが一番気に入った？」

「そうですね…

『じぇっとこーすたー』は速すぎて少し苦手でしたけど面白かったですし、『こーひーかっぷ』はくるくる目が回りましたけどそれが楽しかったです。

だけど、一番はこの『かんらんしゃ』というやつですね」

だって、こんなきれいな景色を秋夜様と二人っきりで見れるのですから…

「なら、僕と同じだね。よかったよ」

そう言って少し恥ずかしそうに笑う秋夜様の顔が窓ガラスに映ります。

そして、そこには幸せそうな私の顔も……

もうこの時間以外いらない。この時間さえ続けばそれでいい…

私がなんなのか、どこから来たなんかどうでもいい。

だから少しでいいから、この時間だけを長引かさせて…

「そろそろ着くね…」

「そう…ですね」

だけど、そんなことは無理だから…

時間は戻ることはなく着実に進み続けるのだから…

一歩踏み出したい。

だけど私にはそんな勇気もないし、秋夜様を困らせてしまうだけ…

だから、結局は流れゆく時に身を任せるしかなかったのです。

秋夜ＳＩＤＥ

淡雪と遊園地に行った休日の明けた月曜日、僕は重い足取りで学校

に向かっていた。

「はぁ…
晴香になんて言おうかな…」

金曜日は勢いだけで晴香の家を飛び出してきてしまったが、今日は謝らなくちゃならない。しかし、淡雪のことをなんて説明したらいいかわからないし、なんて謝ったらいいかもわからない。
そんなことを考えながら歩いていると前方に中学時代からの親友である優希を見つける。

「よっ、優希！」

いつものように優希の背中をパンッと叩きながら話しかける。

「なんだ秋夜か。俺に話しかけんなよ」

なぜだか優希は不機嫌な態度を丸出しにしてさっさと歩いていってしまった。
なにか優希の気に障るようなことでもしただろうか？
特に心当たりはないから、もしかしてただ単に虫の居どころが悪かったのだろうか？
それだといいのだが、どうも僕に敵意を向けていた気がする…
まぁ、気にしても仕方がないので学校へと向かって歩いていく。

～学校～

まいった…
教室に入る前に一番会いたくない人と鉢合わせてしまった…
いや、でもいつかは言わなきゃならないんだし…

「あの、はる「うるさい！私に話しかけないでよ！」

そう言うと晴香はもと来た道を戻っていってしまった。
僕が悪いのだが、当然ながら不機嫌なオーラを体中から発している…
こりゃ、本格的に嫌われちゃったかな…
無理もないよね。食事に招待してくれたのに食べずに帰っちゃったんだから。
あの時は思い付かなかったが、もっとうまく事を運べたのではないだろうか？
今ではそう悔やまれる。
悔やまれるのだが、今さらどうしようもないことぐらいはわかっている。

「はぁ…
今日はなんか憂鬱だなぁ…」

そう愚痴るように言いながら教室の扉を開ける。
するとクラス中の視線が一度僕に注がれ、みんな明らかな嫌悪を示してそっぽを向いてしまった。いったいどうなってるんだろう…
晴香だけならまだしもなぜみんなまで……？

うっ、みんなの視線が痛い…
あぁ、なんでこんなことになっちゃったんだろう…

～放課後～

「はぁ……
今日は一日散々だったなぁ…」

これで今日、ため息をつくのは何回目だろうか？
数えきれないほどしたかのようにも思えるし、数えるほどしかしていないのかもしれない。そんなこともわからないほど気が滅入ってしまっているのだ。
昼時にはいつものメンバーから仲間外れにされるし、部活ではいつの間にか顧問に辞表届けが出されているという陰湿な嫌がらせを受けるわで最悪だ…

ガラガラ

そんな沈んだ気分のまま帰宅する。

「お帰りなさい秋夜様。今日はおでんですよ」

「うん、ありがとう淡雪」

よかった…
淡雪は僕に今まで通り接してくれるよ。

「秋夜様『がっこう』で何かあったのですか？」

「うん…
なんでか知らないけど、みんなが口も聞いてくれないどころか嫌がらせばかりするんだ…」

もう、僕の休まる場所は家だけ……いや、淡雪と一緒にいるときだけだ…

「大丈夫ですよ」

小柄な淡雪が玄関先でうなだれる僕を包み込むように抱き締めてくる。

「大丈夫ですよ。私は秋夜様を決して裏切ったりしませんから。私はいつでも秋夜様の味方ですから安心してください」

「淡雪……」

女の子に抱き締められて泣くなんて情けない。

情けない姿を好きな人の前で晒すなんて嫌だけれど、今は泣きつくことしかできなかった……

淡雪ＳＩＤＥ

昨日の秋夜様、明らかに精神状態が不安定でした。

今朝は一応、いつも通りに発たれましたけど心配です…

なにか秋夜様を元気付ける方法はないでしょうか？

私は秋夜様の友人関係を知っている訳ではないですから、そちら方面での助力は無理ですし……そうです！

秋夜様にとびっきり美味しいものを食べてもらいましょう。

そうすればきっと笑顔になってくれる筈です。

そうと決まれば早速買い出しにいかないとですね。

秋夜ＳＩＤＥ

「最悪だ…」

放課後、なにをするわけでもなく早々に家路につきながら自分を悔やむ。
なにがあったのか話すのも億劫なくらい嫌なことだらけだ…
早く…早く家に着いて淡雪と話したい。
淡雪なら僕の話を聞いてくれる。
淡雪なら僕と話してくれる。
淡雪なら僕と笑いあってくれるんだ…
半ば自嘲気味になりながらも帰宅をする。

「ただいま…」

……あれ？
いつもなら元気に迎えてくれる淡雪の声がしない。
それどころか部屋の電気が全て消えていた。まさか…まさかそんな事ないよね…

だって淡雪は僕を裏切らないって…

だって淡雪は僕の味方だって…

だって淡雪はいつも僕と向き合ってくれたじゃないか…

そんな希望的観測を持ち、リビングに向かう。
そこにはテーブルに乗った一通の手紙があった。

『秋夜様へ
今までお世話になりました。
正直な話、もうあなたといるのは退屈でつまらないので家を移らせていただきます。あなたには会いたくありませんから、どこか遠い所に行きます。
では、顔も見たくありませんので絶対に探さないようお願いいたします。
淡雪より』

しばらく状況が飲み込めず漠然とその場に立ち尽くすしかなかった。

淡雪が僕を見捨てた…？
裏切らないって言ったのに…
僕にはもう淡雪しかいないのに…
終わった…
なにもかもが、全て…

淡雪ＳＩＤＥ

「ただいま戻りました！
秋夜様、今日は肉じゃがにしましょう！」

ジャガイモにニンジン、ひき肉を入れたびにーる袋を持ちながら帰

宅します。
あれ？
秋夜様の靴はあるのに家の中が真っ暗なままですね。
もしかして、秋夜様はもう寝ちゃったんでしょうか？
そんな疑問をもちながら私はリビングへと入り、電気をつけます。

「っ！？」

思わずなにも声になりませんでした。
そこにある光景が信じられなかった。いえ、信じたくなかったんです…

秋夜様が死んでいたなんて……

リビングには横たわる秋夜様。一見すると寝ているようにも見えますが、なぜだか死んでいるということが確信できたんです…
私は茫然としながらも秋夜様の亡骸に泣きつくようにします。

「秋夜様！秋夜様！！
どうしてなんですか……
私じゃ…だめだったんですか……
私じゃ…秋夜様の力にはなれなたかったんですか…」

こんなことを言っても意味がないことはわかっている。
冷たくなった骸は再び動きだすことはない。
だけど、こうでもしなければ自分を保てない気がした。
私にとって唯一の存在だった秋夜様を失ったからっぽの私は……

「絶望してるかい？」

突然の後方からの聞き慣れた声に振り向く。

「訳がわからないって顔してるなぁ？」

そこにいた人物の言う通り、訳がわからない。本当に訳がわからない…
なんで秋夜様が二人いるの…？

「あなたは誰なんですか…」

ただ言えることはそれだけ。
この人物が秋夜様ではないということ。

「ククク。
誰って、お前の大好きな秋夜様だぜ？」

「嘘です！
秋夜様はそんな下卑た笑い方はしません！」

なによりも秋夜様に感じた温かさが感じられない。

「下卑ただなんて酷いこと言ってくれるねぇ、一夢（ひとつゆめ）」

一夢？

この人物はなにを言っているのでしょうか？

「ククク。

そうだ、今は淡雪って名前だったなぁ、座敷童子よぉ？」

「座敷童子…」

「それすらも忘れちまったってか？

こりゃ傑作だ。いいこと教えてやるぜ。

お前は俺から秋夜を守るために遣わされた座敷童子だ。

記憶がないのも今回が初めての主人なんだから当然なんだが、まさか自分が座敷童子だってことまでわすれてるとはな。

まっ、どの道お前が秋夜を護れなかったから秋夜は死んだんだ」

「私が…秋夜様を…」

私が悪いんだ…

座敷童子である私が人を好きになるべきじゃなかったんだ…

私が役目も思い出さずにうつつを抜かしてたから秋夜様は……

「ククク。いいねぇ、もっと絶望しな！

そしてからっぽになりやがれ！」

言われなくても私はもうからっぽだ。

からっぽの私はもうなにをすることもできないし、する気もおきなかった…

明久ＳＩＤＥ

「その後、いつの間にか私を秋夜様の元へと遣わせた、いわば座敷童子の主である方の元へと連れ戻されていました。
そして私はそこで私自身の真名と秋夜様の想い、行動を聞かされたのです」

そう言って淡雪は話を締める。周りを見れば、みんな一様に暗い顔をしていた。
あれだけの話を聞いたのだから無理もないだろう。
それなのに淡雪は嫌な顔一つせず、僕らに……いや、きっと淡雪はいつでも笑っていたいんだ。天国にいる秋夜さんが好きだった笑顔を絶やさないために。

「お察しの方もいるかと思いますが、秋夜の偽物が妃様を拐ったドッペルゲンガーです。そして秋夜様のフリをして、秋夜様を孤立させたのも……」

「だが、秋夜の時も今回もそいつはなにがやりたいんだ？」

さすが、雄二は切り替えが早いなぁ…
僕なんて未だにブルーな気分だよ……

「秋夜様の時は居場所を食べるのが目的でした。

ドッペルゲンガーは狙った人を孤立させ、その人のいるはずだった居場所に空いた穴をいわば栄養源としているのです。
そして今回狙われたのが吉井様なんです」

「なら、なんで姫路さんが…」

また、僕のせいで姫路さんに迷惑かけちゃってるんだ…

「おそらく妃様を拐うのが一番効果的だとふんだのでしょう」

「……納得できる」

霧島さん、そこ納得するところじゃないからね！
霧島さんも最近、順調におかしくなってきてる…

「じゃが、なぜ明久が狙われておるのじゃ？」

「それは秋夜様と吉井様が似ているからだと思われます。
やはり、ドッペルゲンガーの方にも好みというものがあるのでしょう」

僕と秋夜さんが似ている？
確かに話し方とかは結構似ていたけど…

「はた迷惑な話ね。
ところで、あんたはずっとドッペルゲンガーを追いかけてるの？」

「いえ、私が吉井様の配属になったのは偶然です。ですが――」

淡雪が一旦合間をいれる。

「絶対にここで仕留める。だよね？」

「はい」

僕の答えに満足いったのか淡雪は笑顔でこたえてくれた。

「話は聞かせてもらったさね」

突然、しわがれた声と共にババァと教師陣が入室してくる。

「「ババァ、なんでここに！？」」

雄二と僕の声がきれいにハモる。

「あんたらの仲間が私を呼びにきてね」

「仲間？」

頭の上に疑問符を浮かべる僕達をよそに教師陣の間から須川君たちがでてくる。

「一応、これでも吉井のことわかってるつもりだぜ？」

「なんでも抱え込もうとするなよ」

「友達に気遣いはなしだろ？」

「みんな……」

僕の気遣いはみんなにバレていたんだ…
いや、気遣いなんかじゃなくて、わがままが。
それでもみんなは僕たちのために教師を呼んできてくれたんだ…

「ババァ、後でたっぷり話してもらいたいことがあるが今は姫路が先だ」

「わかってるさね。館内の妖怪システムはすべて停止させといたよ。それに本来は私ら教師陣が行くべきなんだろうけど今回はあんたに任せたよ」

そう言ってババァは僕の方を指さす。

「いいんですか…？」

ババァにとっても成績優秀な姫路さんは必要な人材の筈だ。それを僕なんかに…

「どうせ止めたって聞きやしないだろ？」

「そうですね」

もともと僕一人でも姫路さんを助ける予定だったのだから当然だ。

「だろ？
それに私はあんたを結構評価してるんだよ。
殊更、姫路瑞希のことに関してはね。
行ってきな吉井明久！」

「はい！」

ババァに激励されて僕は部屋を飛び出す。
僕に続くようにいつものメンバーも着いてくる。

「雄二と霧島さんは右を！
秀吉にムッツリーニ、島田さんは左を！
明希と淡雪は僕に着いてきて！」

「「「「「「「「「おう（はい）（うむ）（ええ）！」」」」」」」」」

僕の指示でみんなが散り散りに別れてく。
ぬりかべも消えているため、廊下を使うのにも何の不自由もない。
この勝負、淡雪のためにも秋夜さんのためにも、なにより姫路さんのために負ける訳にはいかないんだ！

第５４問　僕と過去と二人の宿敵（後書き）

次回、やっと瑞希の出番があります。
ここまで長かった…

あと、私事ですが本日就職試験がありました。
受かってるといいのですが、不況ですので心配です…

第５５問　僕と決着と二重協奏曲（前書き）

夜兎さん、來霧さん、感想ありがとうございました！

第５５問　僕と決着と二重協奏曲

明久ＳＩＤＥ

淡雪と明希と走りながら考える。
僕は淡雪のことを妖怪なのに食い意地はってる変なやつと思ったこともあったけど、本当は違ったんだ。秋夜さんとの思い出を……自分が座敷童子ではなく、淡雪だということを忘れないために必要のない食事をとってきていたのだ。
名前にしてもそれが当てはまる。淡雪は僕に『一夢淡雪』だと名乗った。
名字は引き継ぐもの。それに引き換え、名前は自身を表すもの。
淡雪が自分の真名と『淡雪』という秋夜さんからもらった名前、どちらを大切にしてるかなど考える必要もない。

「淡雪、絶対に勝とうね」

「はい。私も非力ながら尽力いたします」

「とっ、意気込んでるところわりぃが、ビンゴらしいぜ」

明希の声に前方に視線を向けると、そこには通路が二つに別れていて左右に灯籠が置いてあった。妖怪システムをＯＦＦにしているのに、灯籠が館内にあるのだから一目瞭然だろう。

「化け灯籠ですね。
元来は旅人をあらぬ道に迷わせる妖怪ですが、おそらくヤツに使役されているのでしょう」

淡雪がいつものように解説してくれるが、今は姫路さんのもとへいち早く着きたいんだ。そう思い、まっすぐに進み続ける。
二つの別れ道をまっすぐに進む。それはいわば――

「主人（マスター）壁にぶつかるぞ！」

「いえ、これでいいんです」

僕は腕で顔を守りながら壁におもいっきりぶつかる。

目を開けるとそこは、みんなが使っている個室と同じ部屋だった。
ただ一つの相違点は窓を含めた出入口が存在しないということ。
それでいて、どういう訳だか周りをちゃんと見渡せる。
大方、これもドッペルゲンガーがなにかを仕組んだのだろう。

「よっと！」

「ふぅ…」

後ろの壁から明希と淡雪も部屋に入ってくる。

「驚きました。まさか吉井様が化け灯籠の性質を知っているなんて…」

「知らないよ」

僕は僕の思う通りに行動しただけなのだから。

以前、雄二が僕に言ってくれたように…

「えっ？

じゃあ、どうして壁に突っ込んだりなんかしたんですか？」

「そこに姫路さんがいた気が……姫路さんへの近道だと思ったから。

なら、せめて自分の想いくらいはまっすぐにってね」

なぜだかそれが最善の策だと確信できたから。

僕が姫路さんにしてあげられることだと思ったから、なにも恐くなかった。

「……不思議な方ですね。ほんとに…

真実を見極める力があるのか、あるいは想いの力なのか…

私も、私たちもそれだけの関係になれていれば……

いえ、すべては遅すぎたんですよね…」

秋夜さんのことを思い出しているのか、淡雪は暗い顔でうつむいてしまった。

「遅すぎたなんてことはないよ。

秋夜さんは淡雪のことが大切だったから…本当に大切だったから拒絶されたと勘違いして……それが堪らなく辛かっただけなんだ。
それだけ淡雪のことが好きだったんだよ」

僕だって姫路さんに拒絶された時は悲しかった…辛かった…
秋夜さんの気持ちがすべてわかるなんておこがましことは言わない。
だけど、少なからず好きな人に拒絶される気持ちはわかっているつもりだ。
そう、姫路さんに初めて拒絶されたあの日の気持ちは今でも僕の中で残っているのだから……
僕の中で確固なる恐怖として。それは残っていることがおかしい記憶なのに…

「私は…秋夜様のお役にたてたのでしょうか…」

「うん、きっと秋夜さんは淡雪といられて…会えて…関われて、とっても幸せだったんだと思うよ」

僕も姫路さんに同じ想いを抱いている…
その想いの向かう先は違えど似たような感情を秋夜さんも抱いていたのだろう。

「ありがとうございます…」

「どういたしまして」

いくらか明るさの戻った淡雪にほっと安堵する。
と、その時、前方の壁が歪んだかと思ったら、そこから姫路さんが走り出してきた。

「明久君！」

僕を見つけた姫路さんは安堵した表情で僕の方へ走りよってくる。
久しぶりに見る姫路さんの姿。一日も間が空いた訳ではないが懐かしく感じる。だけど、だからこそ――

「止まれ」

ささいな違いにすら敏感になってしまうんだ。

「明久君、どうしたんですか？」

姫路さんの姿で声でそいつは僕にしゃべりかけてくる。

「その声でしゃべるな！虫酸がはしるんだよ！」

「ひどいです明久君…
明久君は私のことを嫌いになっちゃったんですか…？」

姫路さんの姿をしたそいつは手の甲で涙を拭くようしながら言う。

「姫路さんのことは好きだ。大好きだ！
だけどお前は姫路さんじゃない。
いや、僕の知っている姫路さんの姿をしてるし声も同じだ。
だけどそれは全部、僕の知っている姫路さんであって僕の好きな姫路さんじゃないんだ！」

姿形だけを真似したところで騙されるものか。
そんなので騙されるくらいなら最初から姫路さんを好きになる資格なんてない。

姫路さんのことが好きだからこそ、冷静な判断ができるんだ。

「ちっ、どいつもこいつもウザッテェなぁ！」

そいつはさっきまでの姫路さんの声とは打って変わった低くどすのきいた声をだす。

「いい加減、姫路さんを返してもらうぜ」

「秋夜様の仇、ここでとります！」

二人も臨戦体勢に入る。

「ククク。やけに威勢がいいじゃねぇか一夢？」

「黙りなさい！
私は一夢ではなく淡雪です！」

「いまだにその名前を引きずってるとは、よほど秋夜様にご執心らしいなぁ」

「てめぇ、人の想いをバカにしてんじゃねぇぞ！」

淡雪が木刀を構え、ドッペルゲンガーに斬りかかる。
よし、この間合いなら避けられることはない！

「なっ！？」

当たったかのように見えた木刀はまるで空を斬るかのようにドッペルゲンガーを通り抜けた。

「ククク。
お前ら、霊体に物体が通用するとでも思ってるのか？」

くっ…
今までの妖怪は召喚獣システムの一部だったから特に気にならなかったが、相手は本物の妖怪だ。正攻法で勝てるわけがない…

「ダブル！」

だけど、なにもしないわけにもいかないので一応は副獣を召喚しておく。

Ｆクラス吉井明久　世界史１３８点
召喚獣　明希　世界史１４２点

「ククク、またそれかよ。
ほんと、お前ら人間ってバカばかりだよな。
さっきの女だって同じことするわ、『明久君はどこなんですか！』ってぎゃあぎゃあうるせぇし、ほんとバカばかりだぜ」

「誰が…バカだって……？」

召喚獣ではなく、僕自身が走り出す。

「お前に姫路さんのなにがわかるっていうんだ！！」

おもいっきり拳を振り上げる。

僕がバカ扱いされるのは構わない。事実、バカなんだから。
だけど、姫路さんを……誰よりも努力している姫路さんをバカ扱いだなんて許せるわけないじゃないか！
勉強にしても、試召戦争にしても、苦手なスポーツにだって真剣に取り組んでいるんだ。それなのに…それなのに…

「そんなことすらわからないお前がバカなんだよ！！」

バゴッ！

「なにっ！？」

自分の体に僕の拳が当たったことが理解できないのかドッペルゲンガーは目を見開きながら驚く。……って、えっ！？
なんで僕、ドッペルゲンガーに触れてるんだ！？
姫路さんのことをバカにされて後先考えずに殴りかかったのだから、なにか策があったわけではない。当然、疑問が残る結果となる…

「霊体密度を上げれば物質は霊体に触れることができる」

僕の後方で淡雪が静かに言う。
さっき殴った拳を見てみれば不可思議な靄のような光をまとっているから、おそらくはこれのことだ。

「しゃらくせぇ！
触れられるようになったからってテメェらが勝てる理由にはならねぇんだよ！」

そう言いながら、ドッペルゲンガーは右手を頭上に上げる。
そこにはまるで力が集約されていくかのように黒い球体が膨張して

いっていた。

「消し飛びやがれ！」

ドッペルゲンガーが右腕を振り下ろすと、球体は僕のほうに向かって飛んでくる。大きさも速さもさほどある訳ではない。だけど、さっきから足が動かないんだ…まるで麻痺してしまったかのように…

「吉井様！」

叫び声と共に淡雪が僕を庇うように立ち塞がる。

「淡雪！」

「なに考えてやがるんだ！」

明希も足が動かないのか叫ぶだけだ。
そんな僕たち二人に淡雪は顔だけを振り向かせる。

「あなたたちは私の希望ですから…」

最期まで笑顔で…
一人が愛した笑顔で……
たった一人のための笑顔を残して淡雪は消えていった。

「ククク、こりゃ傑作だ。
霊体密度の操作もできない人間だけを残して自分が犠牲になるとはな」

「犠牲なんかじゃないさ」

僕の右腕が白く淡い光が包み込まれる。
それは輪の型をとり、一つの腕輪となった。
淡く白く光るその腕輪が僕に力を与えてくれるのがわかる。

「二重協奏曲！（ダブルコンチェルト）」

僕が起動ワードを唱えた瞬間、副獣が消滅した。
……違う。僕が副獣と一体化したんだ。
その証拠に僕の左手には僕にあったサイズの木刀が握られていた。

「お前が木刀を握ったくらいでどうにかなると思うなよ」

「「それはどうかな」」

明希と共に息をあわせて一瞬で相手を挟み込む。
そして相手が目移りしている隙に駆け抜け様に居合い斬りを放つ。

ザシュッ！

ズバッ！

「バカな…
一夢はもういないはずなのになぜお前らは俺に触れられるんだ」

斬られた部分を押さえながらドッペルゲンガーは苦しそうに言う。

「お前には理解できこっねぇぜ！」

明希が押し出すように相手をつく。

「人の想いを利用し、踏みにじるようなお前には！」

僕はそれを柄の部分で受け止めるようにしながら突き返す。

「「これがお前のバカにしてきた想いの力だ！！」」

腹を抱え、うずくまるドッペルゲンガーを二人で一閃する。

その軌跡には淡く儚い白光がひかれていた…

「この俺が人間ごときに負ける…だと…？」

ドッペルゲンガーはそのまま、その場に倒れ込む。

「さぁ、早く姫路さんを解放しろ」

木刀を相手の顔面に突きつけて脅す。

「ククク。なにか勘違いしていないか？

俺たち妖怪は真名を知られない限り死ぬことはないんだよ」

「フォン」

ただ一言、あの陽気なカカシの妖怪の名前を口にする。

「なっ……」

「おかしいと思ったんだよ。どうして一度も会ったことのないドッペルゲンガーが僕にとって姫路さんが有効って知ってるのかって。

なんてことはない。山で僕たちの行動を見ていただけなんだろ？
それにドッペルゲンガーは認識を狂わせる妖怪だ。フォンに違和感
をもたなかったのもこれでつじつまがあう」

「お前はいったい…」

「ただのバカな学生だよ」

「ただし、姫路さんを拐ったのが運の尽きってな」

僕に続くように明希が言う。

「姫路さんは無事なんだろうな」

「あぁ。この壁の奥だ。
あいつは返してやるから見逃してくれよ」

壁といえば、こいつが出てきた場所だろう。

「そう…
なら見逃してあげてもいいよ」

「ククク。恩にきるぜ」

そう言うとドッペルゲンガーはフォンの姿に戻り、僕たちの入って
きた壁から出ていった。

「逃がしてよかったのかよ…」

「大丈夫だよ。

だって外には境内院さんがいるし、僕たちはちゃんとした滅し方わからないでしょ？」

「えげつねぇ…」

明希が多少軽蔑混じりの視線を僕に向けてくるが理には叶ってるはずだから問題ないだろう。
それに、半端にやって取り逃がしたとなれば淡雪に申し訳がたたない。

「まっ、最後の詰めといこうか」

「だな」

奥の壁に触れると、ぐにゃりと壁が歪み中に入れるようになっていた。
その奥に進んでいくと、姫路さんはすぐに見つかった。
どうやら気絶しているようだが、目立った外傷はない。

「よいしょっと」

できれば再会を喜び合いたいが、起こすのもはばかれたので担いだまま謎の部屋から出る。

「よっ、明久。お姫様の救出ご苦労さん」

廊下に出れば雄二が笑いながら話しかけてきた。
雄二の後ろにはみんなもいる。

「雄二、みんな……」

あれ…？
みんなの顔見たら安心してきて……
バタッ！

第５５問　僕と決着と二重協奏曲（後書き）

次回はついにラブコメパート！
そろそろ強化合宿編も終了です。

第５６問　僕と祭りと招待券（前書き）

きるぐまー１号さん、感想ありがとうございました！

第５６問　僕と祭りと招待券

明久ＳＩＤＥ

「――――――んっ…」

「目が…覚めましたか？」

「姫路さん…」

目を開けると、姫路さんが僕のことを心配そうに覗き込んでいた。

「僕はたしか……」

「姫路を助けた後に気絶したんだ」

声がした方を向くと姫路さんから少し離れたところに雄二がいた。

「あっ、雄二いたんだ」

「お前をここまで運んでやったのにその言い種か？」

雄二が呆れ半分、怒り半分といったふうに言う。

たしかに、いくら相手が雄二でもお礼は言わなきゃだよね。

「そうなんだ…

姫路さんの安全を確保してくれてありがとう」

「ったく、お前らしいこたえだな…」

なぜだか雄二は嬉しそうに納得している。
僕らしいっていったいなんのことだろうか？
僕は普通のこと言ったつもりなんだけどなぁ…

「明久君」

姫路さんが僕に優しく諭すように語りかけてくる。
僕はそれに合わせるように姫路さんへ視線を戻すと、なぜだか姫路さんの頬にはうっすらと涙の痕があった。

「明久君はもっと自分を大切にしてください。
私の心配をしてくれるのは嬉しいですけど、私にとっても明久君は大切な人なんですよ。だから、もっと自分を大切にしてください」

「ごめん…」

たしかに姫路さんの言う通り、僕は少し自分を雑に扱っている節があるだろう。
だけれど、これは僕自身がだした答えなのだから今さら覆す気もない。
姫路さんのためなら僕はなんにだって――

「そうやって、また嘘をつくんですね…」

「えっ…」

そうやって姫路さんはまた僕の嘘を見抜くんだね…
どうして僕の隠したいと思ったことばかりいつも……

このままじゃ、いずれ僕の想いすら察せられてしまいそうだ…

「言葉ではわかったフリをして、本当はなにもわかっていないじゃないですか！
どうして……どうしたら明久君は自分を大切にしてくれるんですか！」

「おい姫路、そこまでにしとけ」

「いいんだ雄二…」

姫路さんを止めにはいろうとした雄二を僕が制止する。

「姫路さん…
姫路さんの言いたいこともわかるよ。
だけれど僕には僕なりのやり方があって、それで大切な人のなにかを護れるなら僕はそれでいいんだ」

大切な人が君だなんて言えない。
言ってしまえばこういった会話すらできなくなってしまうから…

「なら私のたい「差し入れ持って来たぞ」

突然、部屋の扉が開いて鉄人が入ってきた。この上なく間が悪い……
当然だが、三人の視線が鉄人に集まるわけで…

「こほんっ…
えっと…なんだ、すまんな。これは好きに食ってくれ」

そう言って透明タッパーに入った焼きそばを三人分置いていってく

れた。

「なんで焼きそば？」

「そうか、明久は寝込んでたから知らなかったんだな」

「なんでも、ふもとの村でお祭りをやっているそうですよ」

祭りか…

姫路さんの浴衣姿はさぞかわいらしいんだろうなぁ…

というか、姫路さんならなに着ても似合うと思うけどね。

「そうなんだ……って、今日合宿何日目！？」

「五日目だ」

はっとなり、窓の外を見ればもう夕暮れ時の空だ。あれ？

寝ながら夕暮れ時の空を窓から見るなんてデジャブ？

って、そんなことはどうでもいいって！

それよりも僕の意中の人と温泉ピンポンしたり、気になるあの娘と内緒話をしたり、姫路さんと星空を見上げながら語り合う計画が台無しじゃないかぁぁぁ！

「（段々と人物が特定できるようになってるどころか、最後は名前だしてやがる…

というかぱっと見、明久が三股野郎に見えるのは気のせいか？

いや、あいつに限ってそれはないから単純に明久の言語能力の低さだろう）」

なにか雄二がさっきからぶつぶつ言っているが特に気にすることは

ないだろう。
それよりもどうやって残り少ない時間で姫路さんとの時間を確保するかが重要だ。

「雄二、祭りのやってる場所詳しく教えて」

「この旅館から西に２００メートル程の所でやってるが、招待券がないと無理だぞ」

「招待券？」

小さな村祭りのはずなのに招待券が必要なんて何様のつもりだ…

「これのことですよ」

そう言って姫路さんは胸ポケットから紙でできた招待券を取り出した。ん？
あれってたしか……

「あっ！
それなら僕も持ってるよ！」

はっと思いだし、バックから姫路さんのもっているものと同じものを取り出す。

「この中で持ってないの俺だけかよ…
ところで、二人ともどこでそれを手に入れたんだ？」

「たしか…
姫路さんと雄二と変な人が出てきた夢を見た次の日の朝、枕元に置

いてあったんだけっかな」

「私も同じです。
明久君と坂本君、それに知らない方が出てきた夢の翌朝でした」

「なんだよそりゃ…」

雄二が呆れたように言うが、僕だって理由がさっぱりなのだから仕方ない。

「まっ、逆に俺は招待券なんて持ってなくてよかったかもな。
そんな限られたやつしか参加できない祭りに参加したら翔子になにされるかわかんねぇから……」

「安心してください、坂本君。
この招待券、一枚で二人入場できるらしいですから」

雄二に対する死刑宣告を姫路さんが嬉々として言う。

「そうか、よかったな明久。お前ら二人で祭りに二回参加できるじゃないか」

雄二はあくまでも目の前の現実を認めないつもりのようだ。
へそまがりもここまでくると霧島さんがかわいそうである。

「雄二、招待券を見ると祭りは今日限りで一枚でその日、何回でも入退場できるらしいよ。だから、これは霧島さんにあげるね」

「……ありがとう。吉井はいい人」

雄二の隣に座っている霧島さんは招待券をもらって嬉しそうだ。
うんうん、やっぱり誰かのためになることをすると気持ちがいいね。

「翔子、一つ聞いてくれるか？」

「……エッチ」

「その反応はおかしいだろ！」

頬を赤らめる霧島さんと自棄になる雄二。この二人も相変わらずだなぁ…

「……雄二が私に言うことを聞かせようとしてくる。きっといやらしいこと」

「そんなこと聞きたいわけじゃねぇ！
ただ、なんでお前がさも普通というふうにここにいるのか聞きたいんだよ！」

「……呼ばれた気がしたから」

「明久、てめぇの責任か！」

そう言って雄二が敷き布団に座っている僕の襟元に掴みかかってくる。

「待ってよ雄二！
なんでもかんでも人の責任にするのは良くないって！」

「……吉井の言う通り。

私は雄二の心が私に会いたがってたから来ただけ。
だから雄二のお望み通り、今から二人でお祭りにいく」

あっ、霧島さんが雄二にアイアンクローを決めた。
あまりの早業に思わず惚れ惚れしそうだよ…

「うわっ！？
離せ翔子！助けてくれ明久！姫路！」

まぁ、当然ながら僕と姫路さんはそれを苦笑しながら見ているしかないわけで…

「いっちゃいましたね」

「そうだね…
姫路さんも誰か誘って行ってくれれば？」

姫路さんが楽しめる機会を僕のなんかのために潰してほしくない。
せめて合宿で楽しいこともあったと言えるようにしてあげたいから…

「じゃあ、明久君……
私と一緒にお祭り出てくれますか？」

姫路さんが僕に気遣って、こう聞いてきてくれることも今まで経験から予想の範囲内だ。

「ありがとう姫路さん。
だけど、僕は姫路さんに祭りを楽しんできてほしいんだ。
だから、姫路さんが一番楽しめる人を誘いなよ」

ここで僕が選ばれる可能性はないだろう。
最近、少しだけ近づいてきた感覚はあるが流石にそこまでの関係になって――

「姫路さん…？」

僕の右手に伝わる温かな感触。
それは小さく、儚く、僕の大切な人の手で……

「私は明久君と行きたいんです。
明久君とお祭りに行けるのが一番楽しいんです。
だから、私と一緒にお祭りに行ってくれませんか？」

「僕なんかでいいの？」

繋がれた手から姫路さんに視線を戻せば、僕の探していた笑顔がそこにあった。

「明久君でいいんじゃなくて、明久君じゃなきゃダメなんですよ」

そう言う姫路さんの笑顔を見て思う。
そうか……これは姫路さんなりの恩返しなんだ。
まがりなりにも姫路さんを助けることのできた僕への…
また、僕の中のバカな僕が勘違いをおこしてしまいそうな状況が偶然できあがってしまってるだけなんだ。
なら、そのことを念頭において恩返しを受け入れればいいじゃないか。
結局、束の間の夢とわかっていても、その誘惑に勝てないのだから…

「うん、ありがとう姫路さん。

じゃあ、日も落ちかかってるし早く行こうか」

たぶん、今からじゃどんなに急いでも夜の祭りを楽しむ事になっちゃうけどね…

「では、着替えてきますから先に玄関で待っていてくれますか？」

「うん」

僕の反応を確認すると姫路さんは、さも僕と行く祭りが楽しみで仕方ないというふうに出ていってしまった。って、しっかりするんだ僕。

さっき、自分を律したばかりじゃないか。

姫路さんは『僕といく祭り』が楽しみなわけじゃなくて『祭り』そのものが楽しみなだけなのだから。

「はぁ…

僕のバカさ加減にもほとほと呆れてくるね……」

第５６問　僕と祭りと招待券（後書き）

次回は二人でお祭り！
の予定です。

第５７問　僕と甘さと優しさに必要なもの（前書き）

青龍さん、感想ありがとうございました！

第５７問　僕と甘さと優しさに必要なもの

明久ＳＩＤＥ

「お待たせしました明久君」

「あっ、ひめ――――！？」

落ち着け、落ち着くんだ僕。
開始数行目で鼻血を出す主人公なんてお笑い草もいいところだぞ！

「どうしたんですか明久君？」

必死で鼻をつまんで抑えている僕に疑問をもったのか姫路さんが前屈みでたずねてくる。見える！あと少しで浴衣の間からその柔らかそうな――うっ！？
収まりかけたものが再び再来してきてるって！

「な、なんでもないんだ姫路さん」

平静を取り繕っている暇もない…
それにたぶん、本人は自身が生物兵器になっている自覚がないのだろう。
僕もある程度は予想していて取り乱さないように精神を集中させていたというのに、その研ぎ澄まされた精神も一瞬にして崩壊してしまったのだ。
恐るべし姫路さん…

「姫路さん、ここに来るまでに誰かに会った？」

もし会ったなら、その人の記憶から姫路さんのこの姿を消さなければいけない。

さもないと、僕のライバルが余計増えるはめに…

「会ったのは木下君となぜだか鼻血をだして倒れていた土屋君だけですよ」

ムッツリーニ、君の気持ちはよくわかるよ。

僕だって危うく天に召されるところだったんだから…

まぁ、秀吉は姫路さんに変な気をもつことはないと思うから安心かな。

「そろそろいきましょ、明久君♪」

「うん、あんまり遅くなると鉄人に怒られちゃうからね」

鼻血の方もようやく収まってきたので姫路さんと並んで歩きだす。

ここに来る前に鉄人に出かける許可を得にいったのだが、案外すんなり了承してもらえて幸いだった。なんだかすんなりいきすぎな気もするけど……

「そういえば姫路さん、体の方は大丈夫？」

「はい、特に負傷したわけでもありませんから大丈夫ですよ。ただ――」

途端、姫路さんの顔に陰が落ちる。

「どうしたの？」

「その…
淡雪ちゃんのことを……」

「……知ってたんだ」

「はい…
明希君が話してくれました。明久君のことも淡雪ちゃんのことも全部……」

明希のやつもお節介がすぎるよ…
こんなことするやつじゃないと思ってたのになぁ…

「すみません。私のせいで淡雪ちゃんが……」

たぶん姫路さんは自分が拐われたから淡雪もあんな目にあったと思って気に病んでいるのだろう。だけど、それは――

「違うよ」

「えっ？」

姫路さんが涙で濡れた顔をあげる。

「姫路さんの責任なんかじゃないよ。
僕にも淡雪にも自分のやるべきこと、成すべきこと、譲れないものがあった。
それをただやり通しただけなんだ。
だから、きっと淡雪は誰も恨んでないと思うし、誰のせいでもない」

本当のところはどうかわからない。
これは僕の勝手なエゴなのかもしれないのだから…
だけど、淡雪が僕たちを庇ってくれた時のあの笑顔。
あれは僕の大好きなそれと似ていた。
見るものに癒しと安らぎを与えてくれる笑顔。
そんな笑顔を憎しみをもった相手に向けることはないと思うから。

「ですけど、明久君にもみんなにも迷惑をかけてしまったことには変わりありませんし…」

「姫路さんは気にしすぎなんだよ。
一人で抱え込まないで。僕でよかったらいつでも相談にのるからさ」

姫路さんを安心させるように、いつものように笑いかける。

「その言葉…」

姫路さんがはっとしたようになる。
そう、これは姫路さんが僕に言ってくれた言葉だ。
僕が考え、思い直すことになったきっかけである言葉。
僕はこの言葉に……いや、何度も姫路さんに救われてきたんだ。
目に見える表面的なものじゃない。目に見えないもっと大切なところで。
だから、せめて目に見える事だけでも精一杯姫路さんの力になりたいと思った。
他の誰でもない僕が姫路さんの力に、助けに……

「僕は迷惑だなんて思ってないよ。むしろ姫路さんを助けられて…
僕が助けることができてよかったと思ってるんだ」

「明久君は…優しいんですね…」

「優しいんじゃないさ。自分に甘いだけなんだ…」

淡雪が二人の人から聞いたあの台詞を言う。
秋夜さんの真意はわからないけれど、僕のは優しさじゃない。
優しさとは無償で相手のことを思いやれることをいうんだ。
僕はただ、自分のために姫路さんを助けたにすぎない。
僕がそうしたいから行動した。それは決して優しさじゃない。
僕の自制が効いていないだけ……
自分に甘いから、こんなことになってしまうんだ。

「自分に甘いことは…自分に優しいことはいけないことなんですか…？」

「それは…」

思わず答えに困ってしまう。
自分に優しいことがいけないことかどうかなんて考えたことなかった。
ただ、姫路さんが僕のことを優しいと言ってくれることに負い目を感じていただけで……

「私、思うんです。誰かに優しくできる人は自分にも優しいんだって。
だって、優しさを知らない人はどうやって人に優しくしたらいいかもわからないはずなんですよ。だから、明久君はやっぱり優しいと思うんです」

いつものように姫路さんは僕に諭すように優しく言ってくれる。

「優しさを知らないと優しくできないか…
そうか…そうかもね。ありがと姫路さん。おかげでなんだか前向きになれたよ」

「こちらこそありがとうございますね」

僕の甘さは優しさを知るための甘さ。決して傲るつもりはない。
だけど姫路さんの教えてくれたことによって、また僕の枷が一つとれた気がした。僕が姫路さんに辿り着くための枷。
自分で自分を律するためにつけたはずだったのに君と関わるとこうも簡単にとれてしまう。すべて取り去った時に僕の前に君はまだいてくれるだろうか？
僕が自分を制するのが先か、君が僕に見切りをつけてしまうのが先かは今はまだわからない…
わからないけれど、諦めるつもりなんてない。
僕はバカだからと君との距離もわからないんだ。
そんなみえすいた嘘で今日も僕は自分を騙し続けている……

第５７問　僕と甘さと優しさに必要なもの（後書き）

なんだか祭りにいくまでが長くなってしまいましたね…
自分の計画性のなさに泣きたくなります…

第５８問　僕と祭りと花火にのせた言葉（前書き）

ＳＨＩＮさん、ハム信者さん、感想ありがとうございました！
見逃していましたが、ユニーク４０，０００突破です！
皆様のご愛読、心より感謝しています。

第５８問　僕と祭りと花火にのせた言葉

明久ＳＩＤＥ

「わぁ……
見てください明久君！
たこ焼きにたい焼き、綿菓子やリンゴアメもありますよ」

子供みたいに目を輝かせて楽しそうにする姫路さんを見て苦笑する。
清涼祭の時も感じたが、姫路さんは祭りに対して特別な感情があるのか子供っぽくなることがある。まぁ、そこもかわいいんだけどね。

「ははは、確かにどれもおいしそうだね」

「うぅ、笑うなんてひどいです…
さては明久君、私が食いしん坊だと思ってますね…
（たしかにお腹まわりは少し太ってますけど、決してそういうものの食べ過ぎというわけじゃ…）」

なにやら姫路さんがぶつぶつと言ってるけど、周りの喧騒でなにを言っているのかいまいち聞こえづらい。

「まぁ、姫路さん、まずはかき氷でも買ってかない？」

「そうですね。
夏の夜にはぴったりです」

どうやら姫路さんもかき氷でいいらしいので、かき氷の屋台の前まで行く。

「なになに……
味はイチゴにメロン、レモン、ブルーハワイ、コーラか。
姫路さんはどれにする？」

「私はイチゴ味がいいです」

「僕はブルーハワイかな」

なぜだか知らないけど祭りでのかき氷っていうとブルーハワイを食べたくなるんだよね。ところであれの原料ってなになんだろう？

「すみませーん」

屋台ののれんをくぐり中に入る。

「いらっしゃい～」

「……なにやってるの境内院さん…」

独特の間延びした声で僕たちを迎えてくれた境内院さんに言う。

「なにって、かき氷屋だよ？」

「最近の住職さんは夜店もやるんですね…」

姫路さん、それは絶対ないと思うから…
あたかも境内院さんが住職さんの代表みたいな考えはやめてほしいものだ。

「そういう意味じゃなくて、なんで境内院さんがかき氷屋をやってるのか聞いてるんだけど…」

「ボランティア？」

「なんで自分のことなのに疑問系なのさ……」

なんだか境内院さんと話すと調子狂うなぁ…

まぁ、他も見て回りたいから早くかき氷作ってもらおっと。

「とにかく…イチゴとブルーハワイを一つずつお願いね」

姫路さんの分も奢ってあげようと思い、財布をとりだす。

「二つで合わせて千円だよ～」

「たかっ！？

なんでそんなに高いのさ！？」

かき氷が二つで千円なんてぼったくりもいいところである。

これでは、境内院さんが知り合いでもさすがに首を縦に振るわけにはいかない。

「おっと、そういえば今はサービス中なんだよね～」

「サービスですか？」

姫路さん、嫌な予感しかしないからできれば聞かないでほしいんだけど……

「そうそう、カップル割引サービスだよ～
なんと、今ならカップルでご購入の方はかき氷が無料だよ！」

「「無料！？」」

姫路さんときれいにハモりながら驚く。
千円なのが無料って一体どういう待遇なのさ……

「で、よっちゃんとみずちゃんはカップルなのかな？」

「えっと、それは……」

「（姫路さん、悪いんだけどここはカップルってことにしとかない？）」

そう姫路さんに耳打ちする。
姫路さんには本当に申し訳ないが、特になにかする訳でもないからいいだろう。

「（そ、そうですね）」

姫路さんも僕の意図を理解してくれたのか頬を赤らめながらも了解してくれた。
頬が赤いのは女の子がカップルという言葉に憧れをもっているからだろう。

「も、もちろん僕たちはか、カップルだよ」

「そ、そうです。私と明久君はこ、恋人なんです」

姫路さん！？
なにも恋人だなんて言わなくていいよ！
いや、結果的にはカップルも恋人も同じ意味だけど、恋人って言われるとなんだか恥ずかしさが増してくるって！

「ほほぉー
二人はカップルなんだね～
じゃあ、このかき氷はタダであげるよ」

そう言って境内院さんはイチゴとブルーハワイのかき氷をテーブルの上に置く。

「ただぁーし、カップルである証拠として『はい、あーん』をやってもらうからね～」

「「えぇぇぇ！？」」

『はい、あーん』とは、ラブラブのカップルにのみ許される神聖な儀式であり、主に女性が男性に手作り弁当等を食べさせてあげるアレである。
仲の良いカップルがそれをやれば二人だけの世界を作り出すこともできるが、それ以下の者がやろうと迫れば気まずくなること必須である。
もちろん、僕と姫路さんはカップルではないのだからそんなことができるわけがない。仮にやれば前述の通り、待っているのは破滅のみである。

「や、やりましょう明久君！」

見れば姫路さんは頬をより一層赤らめながら目をつぶって、僕の方

にストローでできたスプーンを差し出してきていた。
その上には当然だが、姫路さんのイチゴ味のかき氷が乗っている。

「姫路さん落ち着いて！
なにも、かき氷が必須な訳じゃないから！」

「もう作っちゃったんだから、カップルじゃなかったらお代はしっかりもらうよ～」

うっ…
まさに八方塞がりだ。
金欠の身にたかだか、かき氷ごときで千円払うのは痛すぎる…
かといって、ここで姫路さんを受け入れたら……あれ？
よくよく考えたら姫路さんがやってもいいって言ってるんだからいいのではないだろうか？
姫路さんが嫌がっているのに強要したらまずいのであって、姫路さんがいいと言っているのだからまったく問題はないはずだ。
なら、多少恥ずかしくもあるが、ここは姫路さんの厚意に甘えよう。

「いただきます？」

なにを言っていいのかわからないが一応は食前の挨拶をしてかき氷を口に含む。

「おいしい…ですか？」

片目を開けた姫路さんがたずねてくる。
うっ…
片目での上目遣いって案外威力でかいなぁ…

「も、もちろんおいしいよ」

嘘です、すいません…

本当は緊張して味なんかわかっていないんだよ…

「さぁさぁ、次はよっちゃんがみずちゃんに食べさせてあげる番だよ」

「それもやるの!?」

「当然だよ～」

くっ…

絶対、境内院さんはこの状況を楽しんでいるに違いない。

なんで、こう僕の周りには人で遊ぼうとする人ばかりなのだろうか……

「明久君／／／」

姫路さんが目を瞑り、小さく口を開けながら待っている。

僕は姫路さんに自分のかき氷を食べさせてあげればいいんだ。

そう、たった一口でいいから姫路さんに食べさせてあげれば……

そ、そうすれば僕と姫路さんは間接キスをすることに／／／

って、ダメだダメだ!

今は目の前のことだけに集中するんだ僕!

「い、いくよ／／／」

一度深呼吸を入れた後、意を決して姫路さんの口へかき氷をのせたスプーンを運んでいく。

パクッ

それは思った以上にすんなり入った。入ったのだが……

「……」

緊張からなのか羞恥からなのか、姫路さんは僕のスプーンをくわえたまま離さなくなってしまった。

カシャッ

僕たちの後ろでシャッターなんかたかれてないし、ムッツリーニが走り去っていくのが横目で見えてなんかしてないぞ。

なにもない。なにもなかったんだ。

そう自分に言い聞かせながら姫路さんの口からスプーンを引き抜こうとする。

しかし、さっきにも増して姫路さんはスプーンを離さず、食いついているといわんばかりの状態だ。

「姫路さん、離そうよ」

「……」

ダメだ…

完全に意識が別次元にとんでいってる…

仕方がないのでスプーンから手を離し、姫路さんの両肩を揺さぶる。

「姫路さん、しっかりして！」

「ふぇ……明久……君？」

よかった…

ようやく意識が戻ってきたようだ。

「おっと！」

姫路さんが意識まばらのまま口を開けたので、スプーンが落下しそうになったところをかき氷のカップをだして受け止める。

「あっ、すみません…」

「大丈夫、気にしないでよ。それよりも他のところも見て回ろうか？」

早くここを立ち去りたい気持ち半分、本当に見て回りたい気持ち半分で言う。

「そうですね」

「まったね～」

境内院さんものんきなものだ…

僕なんかもう気が気じゃないよ。

シャクッ

金銭的にはタダだが高いかき氷を口に含む。うん、たしかにおいしい。

だけどそれ以上に、姫路さんとの間接キスだという事実が…／／／

姫路さんの方はどうしているだろうかと思い、横を見るとまたスプーンをくわえたままボーッとしていた。

「姫路さん？」

「ひゃぅ！？

あっ、明久君！？

いっ、いえなんでもないんです…」

なんか凄い驚きようだけど今は僕もボロがでそうだから追求するのはやめよう。

それにしても、さっきまで傍にいたのに驚かれるなんて…

僕って、姫路さんにとってそこまで存在感ないのかな……

「ちょっと、そこの兄ちゃんに嬢ちゃん、たこ焼きはいかがかね？」

ショックでうつむいている僕にたこ焼き屋の店主が声をかけてくる。

「姫路さん、たこ焼き食べる？」

「私一人では食べきれないので明久君とで一パックなら食べたいです」

そう言いながら姫路さんは一度自分の腹部へと視線を落とした。

もしかしてカロリーのことでも気にしているのだろうか？

なら、そんな必要ないのになぁ…

姫路さんはちっとも太ってないし、仮に少し太ってたとしても健康的でいいと思うのに。だけど、こういうことを女の子に言っちゃダメなんだよね。

前、テレビで言っていたことを思い出しながらのれんをくぐる。

「たこ焼き一パックください」

「へい毎度。カップルはタダだからお代は結構だよ」

いったい、この村はカップルにどれだけ優しいと言うのだ…

「……」

無言でたこ焼きを詰めている店主を見て思う。

「どこかで会ったことありましっけ？」

「ば、バカ言っちゃいけねぇ。俺とあんたは初対面だぜ？
っと、たこ焼きお待ちどうさん」

僕の話を流すように店主がたこ焼きの入ったタッパーを差し出してくる。

「ありがとうございますね」

たこ焼きを受け取った姫路さんはご満悦の様子だ。

「今からなら向こうの丘からいい花火が見れるぜ」

「花火ですって！いきましょう明久君！」

「う、うん」

あまりの姫路さんの食い付きに多少焦りながらも返事をする。

「じゃあ店主さん、たこ焼きありがとうございました」

「花火の情報もありがとうございますね」

「楽しんできてくれよ！」

僕と姫路さんは店主さんに手を振りながら小高くなっている丘を目指して歩き始めた。ん？

今、たこ焼き屋の屋台に福村みたいな人が裏口から入っていったような気がするけど気のせいだよね。

～丘の上～

僕達が丘の上に着くと、穴場なのか両手で数えられる程の人数しかいなかった。

「どこかに座りませんか？」

「そうだね」

丘の上の広さは中々あるので、なるべく近くに人がいないところを選んで座る。

ひゅ～～～～ドーーーーン！

「きれいです…」

姫路さんが花火を見上げながら呟くように言う。
僕は花火に照らされて、よく見えるようになった姫路さんの顔を横目で見ながら花火で楽しむ。
そこで、何の気なしにポケットに手を入れると手になにかが触れた。
取り出さなくてもわかる。これは合宿前に僕の靴箱に入っていたあの手紙だ。
合宿の五日目の夜。
すなわち今、旅館前のベンチで僕を待っているという内容のもの。
差出人はわからない。
わからないけど、確認する気もなければ行く気もない。
今、姫路さんと共にいられる。それだけで、それこそが幸せだから。
そこに行けば、僕とその子は付き合うことになっていたかもしれない。
だけど、やっぱり僕にとってここ以上の幸せなんてないと思うから。
伝えたい想いは幾千も。
言いたいことは一つだけ――

ひゅ～～～～ドーーーーン！！！

「大好きだよ、姫路さん」

一際大きな花火に僕の、耳をすましても聴こえないような小さな声はかき消されてしまった。

第５８問　僕と祭りと花火にのせた言葉（後書き）

おそらく次回で強化合宿編終了となります。
次回もよろしくお願いします。

第５９問　僕と腕輪と再会の時（前書き）

パンデモニウムさん、感想ありがとうございました！

第５９問　僕と腕輪と再会の時

瑞希ＳＩＤＥ

「……瑞希、手紙どうだった？」

合宿の帰り支度をしている私に翔子ちゃんが小さな声で話しかけてきます。

「結局は無駄になっちゃいました」

私はそう言いながら苦笑します。

『吉井様へ』、そう記した手紙。

差出人が私だとわかったら明久君はきっと私に気を遣って来てしまいますから、わからないように他人行儀で書いたあの手紙。

「だけど私にとって手紙にこたえてくれることよりもいいことがあったからいいんです」

明久君と一緒にいけた、あの祭り。

私にとって一生忘れることのできない大切な思い出。

ちょっと恋人同士みたいなこともしたドキドキな経験。

一緒に花火を見上げた時、聞こえた気がしたかすかな声。

私の思い違いだということくらいはわかっています。

それでも、私にとってはそんな勘違いすら大切な思い出なんです。

「……たまに瑞希も吉井もよくわからないことを言う」

「いくら翔子ちゃんでも秘密ですよ。

それより、翔子ちゃんは坂本君となにかあったんですか？」

「……うん。昨日は雄二が――――」

明久ＳＩＤＥ

「やっと着いたね」

電車から降りて、後ろにいる姫路さんに話しかける。

「合宿、楽しかったですね」

よかった…

姫路さんも合宿でいい思い出ができたようだ。

もちろん僕にとってもいい思い出ができたのは言うまでもないだろう。

「じゃっ、今日はもう解散とするか」

「うむ、あまり遅くなれば家の者も心配するであろうしのぅ」

いつものように指揮をとる雄二に秀吉が賛同する。

僕個人的にはこの後、みんなで遊ぶのもいいけどあまり遅くなれば秀吉の言う通り、家の人に心配をかけてしまうだろう。

特に姫路さんや島田さんといった女の子の家ならなおさらだ。

「ウチと木下、土屋はこっちだから。また明日ね」

「皆の者、さらばじゃ」

「……また会おう」

時々思うけど、なんかムッツリーニがかっこよく見えるよ…

「俺と翔子はこっちだからじゃあな」

「……また明日」

今さら、なんで霧島さんがいるかなんてツッコミはいれないよ…

「バイバイみんな！」

「また明日、学校で会いましょう」

僕と姫路さんはそれぞれの方向へ帰っていくみんなに手を振る。

「じゃあ、僕たちも帰ろうか」

「はいっ！」

姫路さんと共にならんで帰路をたどりながら出発前のことを思い出す。

姫路さんと祭りの翌日の昼過ぎに僕はババァに呼び出された。

ババァが言うには妖怪騒動の発端はババァが作り出した半自立式召喚獣であり、僕たちの団結力を高めるために仕向けたらしいのだ。

まったく、明希から得た情報を変なことにつかわないでほしいよ。

まぁ、それは置いとくとして、ババァもまさか本物の妖怪が入り込

んでいるとは思いもよらなかったらしい。
その時、自身も妖怪なのだからどうにかならないものかと言ったら、すごい形相で睨まれたけど弱みがあるので強くは言ってこなかった。
それに今思えば、鉄人の歯切れが悪かったのも旅館内が隠し通路だらけだったのも全ては召喚獣による妖怪騒動の内の計画だったのだろう。
結局は姫路さんを僕が助けだして境内院さんの方からも無事ドッペルゲンガーを退治したとの報告があったので、万事解決ということにはなっている。

「見つけた！
よっちゃん、みずちゃん、こっちだよ！」

思考の海をさ迷っていた僕の頭にもしっかりと響く元気な声。
こんな独特の呼び方をするのは境内院さんしかいない…
若干呆れながらも辺りを見渡せば曲がり角から境内院がこちらに走ってきていた。

「美娘ちゃん、どうしたんですか？」

「いやぁ～
よっちゃんとみずちゃんをあるところに連れていきたくね」

昨晩のこともあって嫌な予感しかしない…

「まっまっ、早く来てよ」

「うわぁ！
境内院さんストップ！」

「美娘ちゃん急に手を引っ張らないでください！」

～数分後～

「「はぁはぁ……」」

姫路さんと共に荒い息を整える。
体力にはそこそこ自信はあるが、自分で走るのと人に引っ張られるそれでは話が違う。元々体力のない姫路さんはなおさら疲れてるだろう……

「姫路さん、大丈夫？」

「は…はい……私は大丈夫です…」

口ではこう言ってるが、無理をしてりことは見え見えである。
ふと周りを見渡せば、どうやらここは墓地らしくたくさんの墓があった。

「ったく、境内院さんもいったいなんなのさ…」

「いや、ごめんね…
どうしても二人にこれを見せたくてさ」

そう言って境内院さんは一つの墓を指さす。

「お墓なんか僕たちにみせ――――！？」

言いかけた僕はそこで自分の目を疑ってしまった。
姫路さんも明希から事情を聞いているためか固まっている。

「なんで秋夜さんの墓が……」

そうそこに記されていたのは『月島秋夜』という名前。
淡雪の最初の主人であり、淡雪が好きだった人の名前だ。

「私の家が神社だっていうのは前話したよね？」

「うん」

「それで私たちの家は少し変わっていて、妖怪絡みで他界しちゃった人たちの霊が無事に成仏できるように全国から引き受けてるんだ。普通のお墓だと負の念から化けたり妖怪になったりするからね」

なるほど、それで秋夜さんの墓がここにあるというわけか…

「じゃあ、美娘ちゃんは秋夜さんの仇討ちに来てたんですか？」

「うん。
みずちゃんたちの学校の学園長に呼ばれたというのもあるけど、元々親戚の仇くらいはとるつもりだったよ…」

あのババァも妖怪騒動に真実味をもたせるために境内院さんを使うなんて性根が……ん？　親戚？

「美娘ちゃん、親戚って…」

「あっ、気にしないでいいよ。
元々、すごく遠い親戚だし小さいころに一度あったきりだから……」

そう言う境内院さんの頬には涙が伝っていた。
きっと、その一度きりの出会いが境内院さんの中では色濃く残っているのだろう。だから、他の家族に頼らず一人で退治しにきたのかもしれない。

「まっまっ、ほんと大丈夫だから気にしないでよ。
それよりもよっちゃんとみずちゃんも手を合わせていってくれないかな？」

「「うん（はい）」」

僕と姫路さんはお墓の前にたつと祈るように手を合わせる。

秋夜さん、淡雪はあなたのことが大好きだったんですよ。
あなたのことが好きで、あなたのために生きてきた。
あなたが好きだったものを守るために戦った。
あなたが好きだったものを忘れないために自分を淡雪でいた。
あなたが好きだったものを残すために笑っていたんです。
だから、淡雪がそちらにいくことがあったら温かく迎えてあげてください。
その儚い冷たさが溶けてしまうように…

「淡雪は……秋夜さんのところにいるべきなんだ」

僕は自分の腕から淡く白い光を放つ腕輪をとると墓の前におく。
二重協奏曲（ダブルコンチェルト）が使えなくなるのは痛手だが、これは元々僕の力じゃない。なにより、淡雪には秋夜さんのそばにいてほしかったから…

「秋夜さんと淡雪ちゃん、会えるといいですね」

「会えるよ。
だって、二人は互いにのために悩んで苦しんで、それでもこたえをだしたんだから。二人は一緒にいられるだけで幸せなんだ」

そう言いながら天国にいるであろう二人を見上げるように空を見る。

「「「あっ…」」」

三人の声が重なる。その原因は空から降ってくるものだった。
暑さもこれから本格化していくであろう初夏に降る季節外れの雪。
暑さで溶けてしまいそうだけれど、それらは溶けずにちゃんと地についてゆく。
そしてそれらは秋夜さんの墓の周りに降り積もるよう降っていく。
だけれど、決して降り積もることはない。
地につくとまるで寄り添うに消えてしまうから。
でも表面的な意味じゃなく、もっと大切なところで繋がっているんだ。
そう確信できる儚く、優しいそれは――

「淡雪だ……」

第５９問　僕と腕輪と再会の時（後書き）

これにて強化合宿編終了です。
次回は恒例の座談会となります！

特別問題３　座談会（強化合宿編）（前書き）

いつもの座談会と同じ注意事項を留意し、お読みください！

特別問題3　座談会（強化合宿編）

唐「お馴染みの座談会始まります！
今回のゲストはムッツリーニに美娘、淡雪でーす！」
ム「……ハーレム」（ぶしゃぁぁぁ！）

唐「自己紹介もままならずに一名ダウンしましたが、気にせずに続けてください」

境「こんにちは～
境内院美娘だよ。よろしくね～」

淡「一夢淡雪です。
どうぞよろしくお願いいたします。ところで土屋様、大丈夫ですか？」

ム「この程度、問題ない」

唐「カッコつけてるけど自滅だからね…」

境「まぁ、そんなことよりも議題を話し合おうよ」

淡「なにを話されるのですか？」

唐「じゃあ、三章について質問なんかでいいや」

ム「……適当」

境「じゃあ、私からいくね～
三章の後半でよっちゃんとみずちゃんが妙な夢を見たと言ってたけど詳細は？」

唐「あっ、それはここのことなんだよね。
詳しくは第一回座談会参照ということで」

淡「では、次は私ですね。
吉井様と妃様がいったあの祭り、なんかおかしくなかったですか？」

唐「それはそうだよ。
だって主催者はすが――――おっと、黙秘するように頼まれてたんだったよ」

ム「……あいつらも物好き」

境「私もボランティアで参加してたからね～」

唐「まぁ、まる一日彼らは暇を持て余してたんだからなにかは企むって…」

ム「……俺も。
三章の一番最後で美娘と秋夜との関係について触れたがフラグか？」

淡「秋夜様は私のものです！」

唐「まぁまぁ、それは本人談ってことで境内院さんよろしく！」

境「秋夜さんと遊んでもらったのは一回きりだったから特に恋愛感情とかはないよ。ただ、優しかった。それだけは覚えてるんだ」

唐「だそうです」

淡「よかったです…」

ム「……つまらん」

淡「人の不幸で遊ばないでください！」

～反省点～

唐「反省をしよう」

ム「……珍しい」

唐「いや、こっちも色々と考えているわけですよ…」

淡「で、具体的な反省点はどのようなことで？」

唐「三章って、思ってた以上にグダっちゃったからさ…」

境「それって自分のせいだよね？」

唐「おっしゃるとおり、作者の文才の無さが招いた事態です…
ですから、そんなグダった状況でも読んでくれた方々、どうもありがとうございました！」

～今後について～

唐「ということで、重大発表がある」

ム境淡「「「なんだ（なに）？」」」

唐「次は閑話の前に番外編をやろうと思ってるんだ」

ム「閑話となにが違う？」

唐「閑話は比較的まだまともな話だし、物語に関わってくる。
その点、番外編は物語に深く関わらないし結構フザケ気味かな？」

淡「具体的になにをやるのですか？」

唐「ある作者様と考えた遊〇王大会とかだよ」

境「じゃあ、私にも出番があるかもだね～」

唐「文月学園内でやるけど出番あるかもね」

淡「じゃあ私も！」

唐「いや、さすがに死んじゃった人は蘇生させられないよ…」

淡「じゃあ、なんでここにいられるんですか？」

唐「座談会だから、なんでもＯＫ」

ム「……少しはメタ発言自重しろ」

唐「座談会だからオールＯＫ」

境「ネタに走ったってことは話のタネがなくなったんだね～」

唐「笑顔で痛いところ、つかないでほしいなぁ～」

ム「で、本当に話すことないのか？」

唐「一応あるからちょっとした雑学でも話そうか。
淡雪が苗字として使っている一夢、あれって『儚い』って意味なんだよ」

淡「知りませんでした…」

境「でも、辞典に一夢なんてのってないよ～」

唐「それはそうだよ。
『儚』の成り立ちを調べると人偏は『一』が元らしいからね」

淡「それで一夢ですか…」

ム「……他の候補の成り立ちは？」

唐「その場のノリ」

ム「……やっぱり適当」

唐「と、まぁ本当に話すことがなくなったからお開きといこう。最後になにか言いたいことある？」

ム「……特になし」

境「私はあるよ～
いつになったら、よっちゃんとみずちゃんはくっつくのかな？」

淡「それ、私も気になります！」

唐「あの二人の恋についてはこの物語の本筋でもあるから中々くっつかないかな？」

淡「たしかに恋愛パートとバトルパートだと同一人物が書いてるとは思えないくらい執筆速度に差がありますからね」

唐「バトルの描写って苦手なんだ…」

ム「……別に心情描写がうまいわけでもない」

唐「うぐっ……
そうやって、痛いところつかないでよ…」

境「一言なのに結構話し込んだよね～」

唐「基本、計画性皆無の作者が書いてるからね。ということで今度こそお開き」

淡「出番はこれっきりかと思いますが、さようなら」

境「雪ちゃん暗いって…
きっとまたチャンスはあるから元気だして！」

淡「境内院様、お慰めありがとうございます」

境「気にしないでいいよ～
ということで、私の方からもバイバイね～」

ム「……さらばだ」

唐「だから無駄にカッコつけて言うなよ…
なにはともあれ、これからも拙作をどうぞよろしくお願いします！」

特別問題3　座談会（強化合宿編）（後書き）

ということで次回からしばらくは明久たちに遊戯王をやってもらいます。
オリカなども数枚でる予定ですのでお楽しみに！

番外編1　僕と君は決闘者（前書き）

來霧さん、ソニックケイさん、感想ありがとうございました！
※番外編はパロネタなどが入っているので注意してください！

番外編１　僕と君は決闘者

明久ＳＩＤＥ

「まずい！」

カチカチ！

急いで回避行動をとろうとするが雄二は既に僕の懐に入り込んでいた。

「めぇ、かっぽっじってよく見てな！
これがおたくの最期の光景だ、エクスペンダブルズプライド！」

雄二の操作する『アルフレ○』というキャクターが僕の操作する『終盤は主人公します』に向かって銃を滅多撃ちにする。
そしてトドメといわんばかりに上空から炎をまとった急降下を放つ。
これだけ喰らえば即死は免れないだろう……

『２Ｐ　ＷＩＮ』

画面にそう表示され、僕の負けが確定する。

「やっぱり雄二の使うアル○レドは強いよ…」

「明久、隠しきれてないぞ…」

おかしいなぁ…

よし、やり直してみよう。

「じゃあ、〇ルフレドかな？」

「もう伏せ字の意味がねぇよ……」

「じゃあ、ア〇ヴィンでどう？」

「もうこれ以上はやめてくれ…
下手すると俺たちが抹消されかねないし、ネタがわかるやつがいるかも怪しいんだからよ…」

雄二が懇願するように言う。
たしかに僕も消されちゃうのはイヤだから気をつけないとね…

「二人とも、なにをやってるんですか？」

後ろから聞こえてきた柔らかな声に振り向けば、そこには――

「あっ、姫路さん。
今は雄二と通信対戦してたんだ」

そう言って姫路さんに手持ちのＰ〇Ｐを見せる。

「どんなゲームなんですか？」

「これは、尻尾シリーズっていうＲＰＧのキャクターたちが戦うゲームだよ」

ちなみに僕と雄二が使っていたのはどちらも最新作のキャクターだ。

ヒロインが主人公をしてると専らの噂である。

「尻尾シリーズがどんなのかは知りませんが楽しそうですね」

「うん、今度姫路さんにも貸してあげるよ」

姫路さんはあまりゲームが得意なイメージはないが、一緒にできたら楽しいだろうな。それに僕が姫路さんに一から教えてあげるのもいいかもしれない。

「ありがとうございますね。

……あっ、そうです！

明久君と坂本君に聞きたいことがあって来たんでした」

「僕でよかったら力になるよ」

「俺もいいぞ」

姫路さんが僕と雄二に聞きたいこととは珍しいが、そんなに難題なのだろうか？

というか、姫路さんに解けない問題が僕と雄二に解けるとは考えづらい…

「では早速なんですが、坂本君はいつから王様になったんですか？」

「「？？？」」

姫路さんのあまりにも突拍子もない質問に僕と雄二の頭上にはクエスチョンマークが浮かぶばかりだ。

「……瑞希、順番を追って話さないとわからない」

いきなりの霧島さん登場。
当然、逃げようとする雄二。それを捕まえる僕。
姫路さんはそれを見て苦笑している。うん、なにもおきていない平和な毎日だ。

「離せ明久！」

「雄二、あまりこういったことに時間割いてられないんだから大人しくてして」

「……吉井の言う通り。私たちにはわからない大人の事情がある」

「はい、霧島さん」

あまりにも雄二が暴れるので霧島さんに預けることにする。

「明久！裏切るのか！？」

「裏切るもなにも僕は最初から霧島さんの恋を応援してるんだよ？」

「「「「我々は吉井と姫路さん、二人の仲を応援してるぞ！」」」」

僕はなにも見てないし聞いてないよーーー
須川君たちの声なんてきこえてないよーーー

「まぁ、なにはともあれ姫路さん、順番を追って説明してくれるかな？」

「はい。このポスターを見てくれればわかると思うんですが…」

そう言って姫路さんは一枚の紙を取り出した。

なになに、そこに記されている内容はえーと……

『文月学園生徒決闘大会

主催者　須川　亮

提　供　妖怪ババァ

時はきた！

立ち上がれ決闘者（デュエリスト）よ！

今週火曜日に行われる二人一組のＹｕ－ｚｉ－ｏｈ！大会で勝ち上がれ！

上位入賞者とそのクラスには素敵な景品もあり！

皆さまの応募、ふるってお待ちしております』

「たしかに雄二が王様になってるね…」

見落とした方はよくローマ字を読んでほしい。

雄二がコン○イに喧嘩をうっているのがよくわかると思う……

「大方、須川辺りが書き間違えたんだろ…

にしても面白そうだな」

「あっ、雄二もそう思う？」

実を言うと僕、ＯＣＧをやっていたりする。

まぁ、雄二や秀吉、ムッツリーニとはよくやるから知ってるだろうけどね。

「明久、俺と「坂本を殺せぇぇぇ！！」

黒装束を身にまとった異端審問会の面々に連れていかれる雄二。
たぶん、雄二は霧島さんから逃れるために僕を誘おうとしたのだけど、どうやら須川君たちの逆鱗に触れてしまったらしい…

「えっと、結局坂本君は王様じゃないんですか？」

「うん、たぶんあれは書き間違えだよ…」

なんとも紛らわしくはあるけどね…

「そ、それでこの大会ですけどわ、私と一緒に出てくれませんか…？」

そう言って上目遣いになる姫路さん。
おそらく本人は意図してないだろうけど、破壊力抜群だ。
というか姫路さんにここまでやらせといて断るやつがいたら見てみたいものだ。
余裕でぶっ飛ばしてやる自信があるからさ♪
っと、それはさておき、そんなうらやましい状況になっている人の返事がいつまでも聞こえないのはなぜだろうか？

「やっぱり…私なんかじゃダメですよね…」

くそ、姫路さんをこんなに悲しませてるのはどこのどいつだ！
今すぐ明希と共におもいっきり殴ってやる！
そう思って辺りにそれらしい人を探すが、この教室には貼り付けにあっている雄二とそれに制裁を加えてる霧島さんと須川君たちしかいなかった。

「明久君、せめてこちらをむいて話を聞いてほしいです…」

「えっ、僕？」

「さっきから明久君に話していたんですけど…」

さっきから姫路さんは僕に話していたということは、うらやましいやつ＝僕＝明希に殴られるやつ。

「サモン！」

「急にどうした？」

「明希、なにも言わず僕を殴って」

「おらぁぁぁ！！」

「ぐはっ！」

僕は見事に宙を舞っています。
明希のやつめ、躊躇も手加減もしなかったな…

バタンッ！

「明久君！」

畳に叩きつけられた僕に姫路さんが駆け寄ってくる。

「姫路さん、一緒に大会でよ……」

僕は痛む体をさすりながら、これだけを伝えたのだった。

番外編1　僕と君は決闘者（後書き）

ということで次回から明久たちは決闘を始めます。
誰がどのデッキかはこうご期待ということで！

第６０問　僕と君と想いのかたち（前書き）

來霧さん、感想ありがとうございました。
※携帯が壊れてしまい、番外編のデータが全てふっとんでしまったので、しばらく番外編はお休みとさせていただきます。
楽しみにしていてくださった方々、どうもすいません。
活動報告でも報告しましたが、その際は神代美樹さん、黒炉さん、ナハト・リコリスさん、どうもありがとうございました。

第６０問　僕と君と想いのかたち

～たまにくるバカテスト～

『日本人の結婚適齢を答えなさい』

～姫路瑞希の答え～
男性１８歳　女性１６歳

～教師から～
正解です。
しかし、最近では女性も１８歳にするべきだという意見もでているので姫路さんが結婚できる日が遠くなってしまうかもしれませんね。

～教師コメントについて異端審問会から～
吉井だけ結婚できるのを１６歳にすることを提案します！

～土屋康太の答え～
できちゃった結婚という言葉がある

～教師から～
そんなことは聞いてません

～霧島翔子の答え～
想像妊娠という言葉もある

～教師から～
だから、そんなことは聞いてません！
というか、もう結婚関係ないじゃないですか！

～吉井明久の答え～
二年も間があるなんて……
もう、ダメだ…
きっと姫路さんはその二年の間でいい人を見つけちゃうんだ…

～教師から～
テストに私情を持ち込まないでくださいと言いたいですが、先生は吉井君の味方です。いっそのこと、想いを伝えてみてはどうですか？

～教師コメントに明久から～
先生も僕を破滅の道に誘おうとするんですね…

～明久コメントに雄二から～
ここまでくると勘違いも滑稽だな

明久ＳＩＤＥ

「ごめん、やっぱりムリだよ…」

夏風の吹く屋上で僕は目の前にいる少女に告げた…

～さかのぼること一週間前～

「おじゃましまーす」

合宿から帰ってきた翌日である土曜日、僕は姫路さんの家に赴いていた。

理由は姫路さんの両親に謝るため。

結果的にはなにもなかったとしても姫路さんには怖い思いをさせちゃったし、僕なんかが姫路さんと祭りに出たことを知っておいてもらった方がいいだろう。

「おぉ、吉井君か。瑞希は買い物に行ってしまっているがあがってくれ」

「失礼します」

快く出迎えてくれた姫路さんのお父さんに感謝しながらも家に入る。

それに姫路さんがいないならむしろ好都合だ。

仮にも合宿のことを話しに来たのだから、できれば嫌な思い出のある姫路さんは話に交ぜさせたくない。

言葉にしなくても恐かったことも辛かったこともあったのだろうから…

「合宿から帰ってきて早々に未来の我が家に来たということはなにかあったのかね？」

居間の椅子に腰を掛けながら姫路さんのお父さんが言う。
今は僕も向かいの椅子に座らせてもらっている状態だ。

「一部おかしな文面が混ざってますが、話があるのはたしかです」

相変わらずな姫路さんのお父さんは、さておいて話を進めることにする。

「そうか…
瑞希と共に一夜を過ごしたか…」

「なっ！？
な、なんで知ってるんですか！？」

まさか姫路さんと一緒に夜、祭りに行ったのを知られてるとは思わなかった…
あの日は帰るのがつい遅くなってしまったから、一夜を共に過ごしたと言っても過言ではないだろう。
しかし、情報の出どころは誰だ？
姫路さんが話したとは考えづらいし……

「すいませんが、そのことを誰から聞いたんですか？」

「なに、跡取りになる子のことくらい、顔を見ただけでわかるさ」

恐るべし姫路さんのお父さん…
伊達に姫路さんのお父さんじゃないってことか。

「そうですか…
その…なんというか、すいません…」

「吉井君が謝ることないさ。
それよりもちょっとだけでいいから状況を聞かせてくれないかい？」

ここで断ることもできるだろう。だけど、それではせっかく目をつぶってくれている姫路さんのお父さんに失礼だというものではないか。

「えっと、ですね…
場所はちょっと小高くなった丘でして…」

「なに！？
そ、外なのかい…？」

なんで姫路さんのお父さんはこんなに驚いているのだろう？
僕は当たり障りのないように花火のことを話そうと思っただけなのになぁ…

「はい、そりゃ外ですけど？」

「……以外に君はハードなんだね…
で、瑞希は君の期待にそえたかね？」

「僕の期待って、そんな大層なものじゃありませんよ。
ただ、合宿に行く前と今では心持ちが違うとだけ言っておきます」

そう、合宿に行く前から僕自身の姫路さんへの好意は自覚していた。

いや、していたつもりだったんだ…
漠然と『姫路さんが好き』だと。だけど、今は違う。
合宿先で食事をした時、一緒に山菜採りに出掛けた時、姫路さんを助けようと奮闘した時、一緒に花火を見上げ時、そして姫路さんが僕に言ってくれたあの言葉……

『自分に甘いのは優しいということ。
他人に優しい人は自分にも優しくできると。
なぜなら、優しさを知らなければ優しくできないから…』

それらの中で実感した。
僕の姫路さんに対する感情は『好き』なんかで表せないほど大きいと。
それは有り体に言うならば『愛してる』や『大好き』だろう。
僕らしく言うならば、そう――

『誰よりも傍で力になりたい。
そして、ずっと僕の傍で笑っていてほしいと』

きっとこれが一番僕らしいんじゃないかと思う。
臆病でバカで一歩踏み出す勇気もない僕ができることを表していると。
傷つかずに姫路さんと関わるための言い訳。
それは姫路さんから見たら『優しさ』
僕自身からしてみたら『甘さ』
それが、この感情の本質なのだと…

「そうか……」

姫路さんのお父さんが僕の顔をじっと見つめてくる。

「そうだね、清涼祭の時よりも清々しくなっているじゃないか」

「僕なりに吹っ切れたってことですよ」

少し生意気とわかっていながら、からかい混じりに言う。

「だけど、瑞希とハードな一夜を過ごした罪は背負ってもらうよ」

「うっ…
なるべく善処しますけど、なにをするんですか…」

案外、姫路さんのお父さんはしっかりと物事を覚えている人だなぁ…
姫路さんの記憶力のよさもお父さん譲りだったりするのだろうか？

「まず第一に私のことを『お義父さん』と呼びなさい」

「わかりましたお義父さん…」

もはやここまで来てしまったら折れるしかないだろう…
それにしても本当に目ざとく覚えている人だなぁ…

「次に私の持っている株主優待券で瑞希と食事でもしてきなさい」

「はい……って、それは罰じゃありませんよね!?」

姫路さんと一緒に食事に行けるのが罰なわけない。
むしろ、ご褒美ではないだろうか？

「これをどう捉えるかは君次第だ。
ただ、私はそろそろ有効期限が過ぎる、この優待券を使いたいだけだ。
もらえるものはもらっておかないと損だろ？」

そう言いながらお義父さんは二枚の優待券をヒラヒラさせる。
僕をからかっているのか、試しているのか、本当にこの人は読めない…

「ところで、吉井君は行ってくれるのかい？」

お義父さんがわかりきったこたえを聞いてくる。

「当然ですよ」

ここで僕に断る理由なんてない。
ただ一つ、気掛かりなことがあるだけで…

「ただ、姫路さんが僕なんかとそんな所に行っていいのか気になっ

て…」

「そのこたえは瑞希に聞いてみるんだね」

姫路さんがもっているこたえ…

聞くのが恐い。

いつもそうだ。僕はこたえを求めているのに傷つくのが恐くて、拒絶されるのが堪えられなくて逃げてばかりなんだ。

想いを自覚しながらも、いつも逃げ道をつくっていた…

自分が傷つくのが嫌で自分で自分を傷つけていたんだ。でも――――

もうやめよう。

逃げるのも、自分を傷つけるのも全部。

ただ、まっすぐに自分の想いに向き合おう。

バカでも前がどちらかぐらいは解るはずだから…

君のいる場所なら見つけられるはずだから…

「ただいま♪

あっ、明久君が来てるんですか！」

玄関から姫路さんの声が聞こえてくる。

僕がいるのは、おそらく靴から判断したのだろう。

「ちょうどいいタイミングじゃないか。いってきなさい吉井君」

「はい、お義父さん……」

お義父さんに促されるように僕は玄関に向かう。

そこにはエコバックを傍らに置いて、靴を脱いでいる姫路さんがい

た。

「明久君、こんにちは」

「こんにちは、姫路さん」

いつものように明るい笑顔を向けてくれる姫路さんにこちらも精一杯の笑顔で返す。

「あのさ、姫路さん……
少し話があるんだけどいいかな？」

この時、僕の新たな歯車が回り始めたんだ…

第６０問　僕と君と想いのかたち（後書き）

次回は瑞希と外食！？
もしかして彼らにとっては初デート？

それと私事なんですが、代替品として貸してもらっている携帯がとてつもなく使いにくいため、更新がスローペースになってしまうかもしれません…

第６１問　僕と君とカップルジュース（前書き）

ＳＨＩＮさん、感想ありがとうございました！
それと、前回書き忘れましたが今章は章の題名からもわかるとおり、恋愛中心のオリジナル構成となります。
明久たちを取り巻く恋愛事情はどうなるのかお楽しみください。

第６１問　僕と君とカップルジュース

明久ＳＩＤＥ

僕は今、すごく後悔している。
なにがかと言われれば、世の中に甘い話なんかないということを忘れてた事だ。
姫路さんと食事なんて虫のいい話だと思ったよ…

「あっあ、明久君はな、なにを食べますか」

姫路さんも緊張の余りか、メニュー表を上下逆さまに持っている状態だ。

「ぼっぼ、僕は懐石セットにし、しようかな」

「わ、私もそれにします」

かく言う僕も緊張しっぱなしである。
というか、この状況で緊張するなって言う方が無理だよね！？
だって今、僕と姫路さんがいる場所は高層ビルの中に建てられた一流レストランだよ！
周りを見渡せばカップルばかり……
外を見れば夜の街並みがきらびやかな光をはなっている。
そんな状況の中、姫路さんと一緒で緊張しないわけがないよ！
あぁ！お義父さんからあんな話、引き受けるんじゃなかった…

「お客様、ご注文はお決まりでしょうか？」

そんな最中、これまた一流レストランに相応しい出で立ちのウェイターが注文をとりにきた。

「か、懐石セット二つで…」

「かしこまりました」

丁寧に礼をするとウェイターは厨房に戻っていく。

あれか、お義父さんはここで僕に恥をかかせて、ただてさえ低い姫路さんからの僕の評価を底辺にまで堕とす作戦か…

そりゃ、大事な一人娘を僕みたいなバカで不細工で甲斐性なしに任せられないよね…

はぁ…今さらながら、すごく惨めな気分になってきたよ…

「み、見てくださいあ、明久君、や、夜景がきれいですよ?」

姫路さん、厨房の方に夜景は広がってないよ…

平静ならばそう言えるのだが、僕の方も気が気でないため、そんな余裕はない。

「そっ、そうだね…」

結局、僕は僕で入り口の方を見ながら言っている状況だ。

当然ながら、夜景なんか見えちゃいない…

「お待たせしました。まずはお飲み物となります」

そう言って、僕らの前に差し出されたのは一つのグラスに二本のストローがささっているという、いわゆるカップルジュースだ。

中に入っているのはメロンソーダみたいだけど、飲めるわけがない。

そんなことをすれば、姫路さんに嫌われること間違いなしだろうから…

「……」

「……」

姫路さんとの間に気まずい沈黙が流れる。どうする!?
どうすればいいんだ!?

「あっ、明久君は飲まないんですか？」

「じゃ、じゃあ飲もうかな？」

って、なに言ってるんだ僕！
なんで自分から破滅への一歩目を踏み出してるんだぁぁぁ！！

「い、いただきます…」

飲むと言ってしまった手前、退くわけにもいかないのでストローに口をつける。

「わ、私もいただきます！」

そう言うやいなや、姫路さんは反対側のストローに口をつけた。

「！？」

待つんだ姫路さん！！
そう言いたいのは山々だが、緊張のあまり、ストローから口が離せ

ない。
こっ、こうなったら仕方ない…
僕は姫路さんがしているのと同じように目をつぶると、ジュースを飲むことに集中する。

「……」

「……」

ちっとも飲めやしない…
いや、緊張してとかそういう意味じゃなくて物理的に飲めていない…
どうなっているのかと疑問に思い、片目をうすっらと開けて視線をストローの先に移すと……あれ？
ストローの先がない？
しょうがないので、更に目で追っていく。
えっと、一回転して、交差して、ジグザグになって……
……姫路さんと目があいました…

「……」

「……ごめん！姫路さん！！」

反応が数秒遅れたが、なんとかストローから口を離すことができた。
それにしても――――

「ちょっと店員さん！
これはいったいどういうことなのさ！」

一本に繋がって、それぞれが飲み口となっている意味不明なストローを指さし、近くにいた店員を呼び寄せる。

「そちらは当店自慢のカップルジュースでございます」

「これじゃあ、ちっとも飲めないんだけど…」

「ではお二人で吸いあってくれて構いません」

「できるかぁぁぁ！！」

あまりにも大きな声がでてしまったので、周りからの視線が僕たちに集まる。

「ごめん姫路さん…」

視線が集まっていることへの恥ずかしさからか、姫路さんは顔を真っ赤にしてうつむいてしまっている。

「い、いえ…
私の方こそ明久君に迷惑かけちゃったみたいでごめんなさい…」

申し訳なさそうに言う姫路さんを見て胸が痛む。
お義父さんの提案といえども、半ば僕のわがままで姫路さんを連れてきたというのに、僕はなにもしてあげれてないじゃないか…

「そんなことないよ。
僕はちっとも迷惑だなんて思ってない。
むしろ、姫路さんが僕と食事に来てくれて嬉しいよ」

たしかに今の状況は客観的に見れば好ましくないだろう。
だけど、僕はそれでもよかったんだ。

姫路さんが僕の誘いを受け入れてくれたことが嬉しかったから。
姫路さんが僕を少しでも親しい仲だと思っていてくれることがわかったから…

「明久君…うぅ……」

「ひ、姫路さん！？」

突然、泣き始めてしまった姫路さんに困惑しながらも隣に急いで移動する。
そして――――

第６１問　僕と君とカップルジュース（後書き）

明久のとった行動とはいったい…？
次回もよろしくお願いします！

第６２問　僕と君と鏡あわせの恋心（前書き）

黒炉さん、感想ありがとうございました！

第６２問　僕と君と鏡あわせの恋心

瑞希ＳＩＤＥ

「そんなことないよ。
僕はちっとも迷惑だなんて思ってない。
むしろ、姫路さんが僕と食事に来てくれて嬉しいよ」

明久君がそう言ってくれた時、私の中で色々なものが込み上げてきました。

明久君は私とこんな所に来ても楽しくないんじゃないか

私なんかとじゃなくて、本当は別の人と来たかったのになんらかの理由で私を誘ったんじゃないか

緊張しすぎて変なことばかり言っている私に幻滅したんじゃないかって……

だけど明久君はそんなことを気にしてないふうに言ってくれたんです。

『私と来れたのが嬉しい』って…
それは私の望む意味の言葉でなく、友人としてだということもわかっています。
ですけど、私にとってはそれが嬉しかったんです。
明久君が私に優しさを向けてくれることが…
私を親しい人と感じていてくれることが…

「明久君…うぅ……」

泣いたらまた明久君に迷惑かけちゃいます…
そう頭ではわかっているのに涙が止まりません。
明久君の優しさが嬉しくて涙が止まらないんです…

「姫路さん!?」

明久君はいつものように私を気遣って席を離れてきてくれます。
私が困っている時、助けてほしい時、明久君はいつも傍にいてくれましたね。
誰よりも傍にいて、こんな私のためにがんばってくれたんですよね…
それなのに何もしてあげられない私を許してください…
好きになってほしいとは言いません。
だから、せめて嫌いにならないでください……明久君…

明久ＳＩＤＥ

「帰ろうか姫路さん」

もう、いいんだ…
これ以上、姫路さんにムリをさせられない。
これ以上、姫路さんの悲しむ姿を見たくないんだ…
たとえ、その原因が僕だとしても…

「明久…くん……
すいません…私、なにも言いませんから…いかないのでください」

どうして君はそんなにも僕に気を遣うんだ…
どうして僕なんかのために時間を使っちゃうんだ…
どうして…僕にそこまで優しくしてくれるんだ……姫路さん…

瑞希ＳＩＤＥ

「帰ろうか姫路さん」

明久君が私に諭すように言います。そうですよね…
いくら明久君が優しくても私なんかと一緒じゃイヤになりますよね…
私じゃ明久君と釣り合わない。そんなことはわかっているんです…
わかっていても諦められないんです。
明久君の優しさにふれる度、何度でも好きになってしまいますから…
何度でも明久君に…明久君にだけ恋をしてしまうから…
だから、せめて明久君の言ったことくらいには従いましょう。
明久君が帰りたいと思っているなら、私は――――

「……姫路さん」

「っ！？」

明久君！？
どうして私を抱きしめて……
ダメです……頭に靄がかかったようになってなにも考えられません…
明久君の温かさ

明久君の優しさ

明久君がそこにいてくれるという事実

その全てが私にとって甘美な響きとなって私の思考を鈍らせていきます。

全てのことがどうでもよくなるような甘い誘惑。

今、ここにあるものがあればなにもいらないほどの幸せ。

私にとっての全てがここにあるという錯覚さえおこしてしまいそうです…

でも…だからこそ、現実を見るのが辛いんです。

虚像だとわかっていても……明久君が本当にしたいことじゃないとわかっていても離れられないんです…

余計に明久君に依存しちゃうんです…

ダメなのに……明久君から離れられないんです…

明久ＳＩＤＥ

「ごめんね、姫路さん…」

帰り道、僕は君を背負いながらそっと呟く。

空を見上げれば星の輝きが見えないほどにネオンが光り輝いている。

その中でも月だけは今日も僕らを照らしていた。

その優しい光で僕を慰めるように…

「ごめんね、姫路さん…」

もう一度、さっきと同じ言葉を繰り返す。
姫路さんが泣き始めてしまった時、僕はとっさに抱きしめてしまった。
なぜだかそれが正しい気がしたから…
正解なんてありはしないけど、それが姫路さんのためになる気がしたんだ…
独りよがりだってわかってる……わかってるさ……
事実、気づいたら姫路さんは寝てしまっており、頼んだ注文もキャンセルして今にいたる。食事の前に寝ちゃうなんて、よほど退屈にしていたのだろう。
……いや、僕が退屈にさせてしまったんだ…

ねぇ、君はなにをしてあげたら喜んでくれるの…？
なにをしてあげたら笑っていてくれるの…？

どうしたら君を好きでいる資格があるの……

僕は君が……姫路さんがいてくれるだけでいいんだ…
だから、ちっぽけな僕のバカらしい質問に答えをほしい。

『もう少し…君の傍にいていいですか？』

瑞希ＳＩＤＥ

明久君…
気づくと私は明久君に背負われていました。温かい……
夏の夜の冷たさも明久君と一緒ならへっちゃらです。

「ごめんね、姫路さん…」

私の意識が戻ったことを知らないのか、明久君は呟くようにそっと言います。

どうして謝るんですか…
どうして明久君が謝るんですか…
謝らなきゃいけないのは私なのに……
明久君に迷惑をかけ続けた、私が謝らなきゃいけないのに……
だけど、私にはそれすら言い出す勇気がないんです。

『ごめんなさい、明久君…』

そう言えたら、どんなに楽でしょうか…
でも言えないんです…
私には現実を見据えるだけの勇気も決意もないんです…

明久君を失うのが恐い

明久君が私の前からいなくなってしまうのが恐い

明久君が私を見てくれなくなってしまうのが恐いんです……

こんな臆病で卑怯な私にでも答えをくれますか？
私を見て答えをくれますか？

『私は…明久君の傍にいていいんでしょうか？』

明久ＳＩＤＥ

「よいしょっと」

背負っていた姫路さんを近場の公園のベンチに寝かせる。
姫路さんが起きるまでしばらく待とう。
そう思い、夜空を……いや、月を眺める。

いったい僕はどうすればいいんだろう…
この想いを伝えられるだけの勇気はない。
かと言って、このままじゃいつか姫路さんが僕から離れていく日がくるだろう。いつか姫路さんに相応しい人が現れる日が……

僕はその時、笑顔で祝福してあげられるだろうか？

その相手に嫉妬してしまわないだろうか…？

姫路さんのことを考えずに、ひどいことをしてしまわないだろうか……？

ははは…
おかしいよね…
僕って本当にバカだよ……
だって、好きな人の幸せすら願ってあげられないなんてバカげてるだろ。

どんなに取り繕ったって所詮僕は、わがままで卑怯で自分の幸せが一番の最低な人間でしかないんだ……

「バカなんだよ…」

自分で自分に言い聞かせるように言う。僕にぴったりな言葉だ…愚かで愚直で最低な僕に……

「そんなことありませんよ」

「っ！？」

突然、視界が暗転して温もりに包まれる。

温かい…

気持ちいい…

幸せだ……

そうか…僕は姫路さんに抱きしめられているんだ…

「明久君はバカなんかじゃありませんよ。
たしかに、ちょっと勉強が苦手かもしれませんけど、そんなことは些細な問題になってしまうほど明久君は優しいんです」

姫路さん…

君が優しいと思っている人は好きな人の幸せすら願えないんだよ…

自分勝手な想いを優しさで偽ろうとしているんだよ…

「私はその優しさが大好きです」

情けないな…
姫路さんにこんなこと言わせといて、僕は返す言葉一つ持ってないなんて…

「明久君のくれる優しさが大好きなんです」

僕だって好きだよ……大好きだよ！
姫路さんのくれる優しさが…
僕のとは違う本当の優しさが……姫路さんのことが！

「それで…その……明久君に今日のお詫びがしたいんです…」

お詫びって…
僕はなにもしてあげれてないじゃないか。
むしろ、僕が姫路さんになにかしてあげなきゃいけないのに……
退けない。ここで…ここは退いちゃいけない気がするんだ。

「それなら…
お詫びなら……僕がするよ」

「そんなことできません！
だって、私は明久君に迷惑かけてばか「迷惑なんかじゃないよ！」

「……」

……

姫路さんは黙ってしまった…
少し、強くいい過ぎただろうか…

「さっきも言ったけど、僕は迷惑だなんて思ってないよ」

今度は強く言い過ぎないよう、慎重に言っていく。

「僕は今日、姫路さんと来れて楽しかった。
だから、姫路さんになにかしてあげたいんだ」

「私も同じです…
私も今日、明久君といられて楽しかったです。
だから、明久君になにかしてあげたかったんです…」

僕と姫路さんは一度離れると目をあわせる。それでわかってしまった。
あぁ、この目は僕と同じことを考えてるなと。
僕たちが共通して得意なことをしてあげようとしていると。
僕たちはまるでタイミングを見計らうかの様に互いを見つめ合う。
そして――

「「姫路さん（明久君）帰ったらご飯作ってあげるよ（ますね）」」

第６２問　僕と君と鏡あわせの恋心（後書き）

次回は一緒に手作り料理♪
彼らはいったい、なにを作るのか？
次回もよろしくお願いします！

第６３問　僕と君とお義父さん（前書き）

青龍さん、感想ありがとうございました！

第６３問　僕と君とお義父さん

～姫路家～

明久ＳＩＤＥ

「お待たせ、姫路さん」

一足早く調理を終え、リビングで待っている姫路さんに料理を運んでいく。

「明久君はなにを作ってくれたんですか？」

「開けてみてのお楽しみだよ。

それより、姫路さんはなにを作ってくれたのかな？」

「私の方も開けてみてのお楽しみです♪」

そう言いながら姫路さんはいたずらっぽく笑う。

「じゃあ、一緒に開けようか？」

「はいっ！明久君がなにを作ってくれたか楽しみです♪」

「僕も姫路さんがなに作ってくれたか楽しみだな」

楽しそうに微笑む姫路さんに僕も笑顔で返す。

なんだか、こうしているとまるで――――

「（恋人同士みたいです…）」

「ん？
なにか言った？姫路さん？」

「あっ、いえなんでもないんです。そ、それよりも早くご飯を食べましょう？」

姫路さんは困った様な顔しながらそう言うと、僕の持ってきた鍋に手をかける。

「ダメだよ姫路さん。
一緒に開ける約束だったでしょ？」

姫路さんの手に僕の手を重ねて制止する。

「そ、そうでしたね…
では――――」

「「せーの！」」

カパッ！

互いに互いの蓋を開ける。
姫路さんが作ってくれたのは――――

「「パエリアだ（です）！」」

二人の声がきれいに重なる。

「姫路さん、パエリア作れるようになってたんだ」

「はいっ！
明久君の好物だって聞いた日から練習してたんです」

えっ…？
それって…

「……もしかして僕のために…？」

なんてわけないよね…
いったい僕はなにを聞いているんだろう、あははは…

「……はい…明久君のためです…」

「へっ…」

姫路さんが僕のために…？
いやいや、きっとこれはなにかの間違いだ。
惑わされるな、吉井明久。
またお前は自分にとって都合のいい解釈をしているだけなんだ。

「明久君に喜んでほしくてがんばったんです…」

どうやら勘違いじゃないらしい…
それにしても、おかしい…
姫路さんがなぜ僕のために…？

……あぁ、あ

れか。
試験召喚大会決勝戦後の時に言っていた『お礼』のためか…
姫路さんもそんな約束、律儀に守らなくてもいいのになぁ…

「ありがとね姫路さん。
その…実を言うと僕も姫路さんに気に入ってもらえるように改良を加えたんだ」

少し言いにくかったが、意を決して伝える。

「明久君が…私のために…」

って、まずい！
僕はなにを口走ってるだ!?
このままじゃ僕の本心がバレかねないって！

「ほ、ほら…
姉さんも姫路さんのこと気に入ってたみたいだから、また一緒に食事したいなぁなんて思ってさ。あははは……」

よけいにまずい…
なんか更に墓穴を掘り進めた気しかしないよ…

「そ、そうですね私もまた玲さんと一緒にご飯食べたいです」

あれ？
なんかうまく話題をそらせてるのかな？

「じゃ、じゃあ、そろそろ食べようか」

「そ、そうですね」

そう言うやいなや僕たち二人はそそくさと席につき、茶碗に自分の分量を移す。

「「いただきます」」

パクっ

姫路さんが若干焦り気味に僕の作ったパエリアを口に運ぶ。
急いで食べるほど、空腹だったのかな？

「ほわぁ…
やっぱり、明久君の作る料理はおいしいです…」

「姫路さんに気に入ってもらえたみたいでよかったよ」

姫路さんがうっとりとした表情で言う。
これなら改良を加えたかいがあったってもんだね。

パクっ

僕も姫路さんの作ってくれたパエリアを一口食べる。

「うん、アサリやエビの出汁がきいていておいしいよ」

これならいくらでも食べられそうだ。

「明久君に誉めてもらえると嬉しいです♪」

「あはは…
僕なんかに誉められたってなんにもないよ」

なんだか僕が誉められてるみたいでこそば痒い気分になる。
……ん？
いや、事実、僕は誉められてるのだろう。
なにもかもできる姫路さんが、なにもできない僕を誉めてくれたんだ…

「（ありがとう…）」

姫路さんに気を遣わせないように、そっと小声で呟く。
こんな、なにもできない……してあげれない、僕を見てくれて…
僕にその笑顔を向けてくれて…

「明久君…
もしかして、おいしくなかったですか…」

考え事をしていて食が進まない僕を疑問に思ったのか、姫路さんは申し訳なさそうにたずねてきた。

「そんなことないよ。ちょっと考え事をしてただけだからさ。
それに、こんなおいしいパエリア残せるわけないよ」

「／／／／」

あれ？
姫路さんがなんか赤面しちゃった…

「姫路さん大丈夫？」

「だ、大丈夫でしゅ！」

いや、ちっとも大丈夫に見えないんだけど…

「そ、それより、早く食べちゃいましょう。お父さんが帰ってくるまでには洗い物も終わらせたいですし」

「そうだね」

たしかにお義父さんが帰ってくる前に片付けてしまった方がいいだろう。

仮にも優待券をもらっているのだから、家で食事をしていたら失礼というものだろうから。

「ところでお義父さんはどこに行ってるの？」

「おとうさん…？」

しまった…

姫路さんには『姫路さんのお父さん』というべきだった…

「いや、姫路さんのお父さん、お父さんね」

お義父さんではなく、お父さんを強調して言う。

というか、これって言ってる僕以外に区別つく人っているのかな…？

「お父さんですよね、お父さん…」

「うん、お父さん…」

二人して『お父さん』を連呼って…
なんかすごく滑稽な会話をしている気がしてきたよ…

「で結局、姫路さんのお父さんはどこに行ってるの？」

「あっ、そうでしたね。
私のお父さんは今、仕事に行ってるんです。
いつもならそろそろ帰ってくるはずなんですけど…」

そう言えばお義父さんはなんの仕事をしているんだろう？
初めて清涼祭で会った時は営業スーツを着ていたから営業職だろうか？
まぁ、その話は本人にでも聞けばいいだろう。
それよりも今は早く食事を終えなきゃね。そう思った最中――――

「ただいまー」

やばっ！？
お義父さんが帰って来ちゃったよ！

「どうしよう姫路さん！？」

「れ、冷静になってください！
お父さんをリビングに入れなければいいんです！」

姫路さんも冷静になってほしいというツッコミはさておいて、姫路さんの言うことには利にかなっている。
なぜなら、姫路さんの家は玄関から二階まで上がるのにリビングを通る必要がない。ならば、お義父さんをリビングに入れないよう、

二階に誘導すればバレずに済むという算段だ。

「姫路さん、早く玄関に行こう！」

「はいっ！」

僕と姫路さんは席をたつと、大急ぎで玄関に向かう。

「なんだ瑞希に吉井君、もう帰っていたのか」

「あはは…
おじゃましてます、お義父さん」

たぶん、僕の顔は愛想笑いもできていないほど引きつっているだろう。
というか、僕と姫路さんのコンビで嘘を貫き通せるのか！？

「お父さんも疲れてるだろうから、二階の書斎で休もう？」

「瑞希、休むのはいいんだが母さんはどこに行ってしまったんだい？」

たしかに今朝から姫路さんのお母さんを見てないなぁ…
どこに行ってしまったんだろうか？

「もう、お父さんったら…
お母さんは今日、高校の友達と同窓会に行ってるって言ったじゃない…」

へぇ…

高校の友達と同窓会かぁ…
僕も大人になったらやりたいなぁ。
雄二や秀吉、ムッツリーニに島田さん、そして姫路さんを呼んで…
きっと、その頃にはみんなにいい相手が見つかってるだろうね。
もちろん、姫路さんにも……

「そういえば、そうだったな。
じゃっ、書斎で休むとするから吉井君も来なさい」

「僕ですか…？」

物思いに耽っていたため、突然の指名に少し間が抜けてしまう。

「この場に君以外の吉井君がいるのかね？」

「そりゃ、いませんけど…」

『大丈夫だから安心して』

僕の隣にいる姫路さんにそう目で合図をする。

「じゃあ、行こうか」

「はい」

お義父さんの後ろに着いていく僕を見る姫路さんの目は不安そうだった…

～書斎～

「単刀直入に聞こう」

お義父さんが書斎のチェアに腰掛けながら言う。
こう見ると、改めてただ者ならぬ雰囲気を感じる…

「瑞希のパエリアはおいしかったかね？」

「へっ…？」

また、間の抜けた返事をしてしまった…

「だから、瑞希のパエリアはおいしかったか聞いているのだが？」

「おいしかったですけど、なんでそのこ「そりゃ、跡取り「わかりました」

僕の言葉を遮ったお義父さんの言葉を再度僕が遮る。

「なら、瑞希を嫁にもらいたいとは思わんかね？」

「ひ、姫路さんを！？」

お義父さんの爆弾発言に取り乱してしまう。
ひひひ、姫路さんがぼぼぼ、僕の嫁だなんて。

「む、無理ですよ。そんなの…」

「ふむ…
私自身、今の瑞希ならばどこにだしても恥はかかないと思っていたがまだ不満かね？」

「その逆ですよ！逆！
僕と姫路さんじゃ、僕が見劣りしすぎて釣り合わないんです…」

何度も僕を悩ましてきた事実。
決して覆されることのない現実…
いくら目をそむけても避けることはできないんだ…

「なるほど、君にもそういった悩みがあったということか。
いやはや、これは失礼な質問をしてしまってすまないね。
しかし、これだけはわかってやってくれ。瑞希は暇さえあればパエリアを作れるように励んでいたんだよ。『明久君に喜んでほしい』ってね」

「僕に喜んでほしい…」

その言葉を反芻するように飲み込んでいく。
姫路さんが僕のためにパエリア作りに励んでいたのは本人から聞いていた。
だけど、そこまで積極的に…自分の時間を使ってまでやっていなんて……
いったい、僕はそれに対してなにをしてあげれたんだ？
姫路さんの貴重な時間を使わせてしまった僕はなにができたんだ？
なにも…できていないじゃないか…
なにも……してあげれてないじゃないか…
いつだってそうだ。
僕は姫路さんの優しさに…厚意に甘え続けてきた。

ただ享受し続けてきただけじゃないか。

「ところでレストランはどうだったかね？」

「あっ！

ええ、とてもおいしかったかですよ」

「ふむ、瑞希の言っていた通り、君は嘘が下手なようだ」

バレるとは思ったけど、まさか探りもいれずにバレるとは思わなかった…

「ごめんなさい…」

「なに、気にすることはない。

元々、こうなることくらい予想済みだからね」

そう言うお義父さんは悪戯が成功した子供のように笑う。本当に読めない人だ…

まるで僕の考えがわかっているような…

まるで自分自身、同じ境遇に立ったことがあるような感じがする。

……って、まさかね。そんなことあるわけないよ。

だって、そうだとすれば姫路さんは僕のことを――――

「さて、私はそろそろ明日の予定をたてなければいけないから退室してもらえるかな？

君も堅苦しい食事よりも家庭的な味の方が好きだろう？」

まったく、本当に読めない人だ…

いったい、どこまで僕のことを見透してるというのだろう。

「そうですね。僕には豪勢な食事よりも質素なものの方が合いますよ」

それだけを言い残すと、僕は書斎を後にした。

～リビング～

「あっ、明久君…」

リビングに戻ってきた僕を見る姫路さんの目は不安の色が漂っていた。

「大丈夫。姫路さんのお父さんは気づいてないよ」

姫路さんを心配させまいと嘘をつく。

まぁ、実のところお義父さんは特に気にしていないようだから問題ないだろう。

「そうですか…

バレなくてよかったです…」

安堵して肩の力が抜けたらしく、姫路さんはほっと一息つく。

「姫路さんのお父さんは今から明日の予定を練るらしいから、今のうちに食べちゃわないとね」

「そうですね」

僕も席につくと再び食事を開始する。

パクっ

「うん、おいしいよ」

「明久君のもおいしいですよ」

二人で笑いあって他愛ない話をしながら食事をする。

本当においしいよ……

今日、僕は気づいたんだ。

いや、お義父さんはこれを気づかせたかったのかもしれない。

どんな豪勢な料理も場所もいらない。

君の作ってくれた料理と君がいれば、それはなににも勝るほどのごちそうなのだと

第６３問　僕と君とお義父さん（後書き）

さて４章に入って早４話目ですが、明久と瑞希とお義父さんしかでてきてないという状況です…
このままじゃ、雄二まで空気化しかねないですね…
次回あたり、なにがなんでも他キャラを出したいです。

第６４問　僕と君と理想郷（前書き）

黒炉さん、感想ありがとうございました！

第６４問　僕と君と理想郷

雄二ＳＩＤＥ

「……雄二、おはよう」

これが今日、俺の一番始めに聞いた言葉だった…

「翔子、一応聞こう。
なぜ、俺のマウントポジションをとっているんだ？」

「……恥ずかしいから言わせないでほしい」

そう言って俺の幼なじみは頬を染める。
いや、こいつの場合は頬を染める真似をしているだけだ。

「ありもしない事実を捏造しようとするな」

「……あんなことまでして、あんなことも言ってくれたのに冷たい」

ったく、なんで翔子はこういつもマイペースなんだか…
同じ幼なじみと言っても明久の幼なじみだが、姫路とは大違いだな。

「……雄二、瑞希は吉井のもの」

「とりあえず、なんで心が読まれてるかは置いといて、わかっているから安心しろ」

さすがに俺も学園中を敵に回すつもりなんて毛頭ないければ、姫路の恋は応援しているつもりだ。あくまで姫路の恋だけだけどな。

「……ならいい。それと本題」

そう言って翔子は一枚のチラシを見せてくる。

なになに……ほぉ…

「ふっ、もってこいだな」

「……私もそう思った」

そう言って俺と翔子はクスッと笑う。

如月ハイランドの借り、返してやるか…

明久ＳＩＤＥ

トゥルルル♪

「ん……」

携帯の着信音で目が覚める。今日は日曜日。姫路さんと食事をした次の日だ。

「なになに…」

まだ朝の六時半だというのに、いったいどこのはた迷惑なやつがメールを出してきたというのだろう。

『Ｆｒｏｍ　雄二
今日の１０時から夏らしく水無月町の市民プールに行くんだが明久もどうだ？
ちなみに、翔子は姫路を誘ってたぞ！』

うん、さすが僕の親友だ。
今まで悪友だのなんだの言ってたのは気のせいだよ？
やっぱり、雄二は僕の大切な親友だね。

「準備、準備っと…」

はやる気持ちを抑え、水着の準備をする。

コンコン

「はーい」

部屋のノックに対して返事をする。
今、家にいるのは姉さんと僕だけだからノックしたのは当然姉さんだろう。

「アキくん、朝ごはんができましたよ？」

僕に対する死刑宣告だ…
どうする！？
こんな大事なイベントがある日に腹痛でいけないなんて話にならな

いぞ！？
落ち着け、落ち着いて状況を整理しよう。
姉さんの料理を食べる→腹痛にあえぎ、プールを断念→姫路さんの水着が拝めない→人生終了
姉さんの料理を食べない→姉さんに脅される→仕方なく食べる→（中略）→人生終了
うん、どっちにしても今日は僕の命日らしい…
えっ？
なんで人生終了かわからないって？
そりゃ、今日みんなが姫路さんの水着を拝めるのに僕だけできないとなったら死活問題間違いなしだよ。
「主人力（マスター）を貸すぜ！」
突然、幾何学模様から飛び出してきた明希が言う。
おそらく、ババァからもらった腕輪を使ったのだろう。
「ムリだよ！
明希にだって姉さんの料理は攻略できないって！」
「誰も正攻法でいこうなんて思っちゃいねぇ。これを使うんだ」
そう言って明希は小さなビンを見せてくる。
「なにこれ？」
「解毒剤だ」

「そんなもの姉さんの前で飲んだら失礼だよ！」

姉さんの料理が危険だといえども、さすがにそれは良心が痛む…

「だから正攻法でいかねぇって言ってんだろ？」

「……あぁ！そういうことか！」

明希の考えがようやく理解いった僕は納得する。

要するに明希の言いたいことはこうだ。

明希と僕はお互いにフィードバックする。

そして、それは痛みに関わらずほとんどのものに共通してるといっても過言ではない。（事実、以前明希が姫路さんに頭を撫でられている時にもフィードバックが起きていた）

ならば、解毒にも同じことが言えるのではないだろうか？

当然、効力は落ちるが、端から本当の毒を食すわけではないのだ。

フィードバック程度でも充分だろう。

「明希、僕なんかのためにありがとう…」

「主人に倒れられると俺も姫路さんの水着が見れないからな」

うんうん、そんなこと言っても本当は僕を心配していてくれてるんだよね。

だって、明希はその気になれば勝手に行動できるんだから、僕が倒れてようと関係ないはずなんだからさ。

「そういや、言い忘れてたが、なにがあっても絶対に気絶すんなよ？主人が気絶すると俺も元の場所に強制返還なんだからよ」

前言撤回。

やっぱり明希は自分の利益優先だった…

要するに明希からしてみると、僕が姉さんの料理で気絶してしまうと自身も召喚獣の世界から出られなくなってしまい、姫路さんの水着を拝めなくなるから僕を助けているだけなのである。

「まぁ、とにかく任せたよ…」

「あぁ、逝ってこい主人！」

色々と不満は残るが、今の僕が助かるにはこの道しかない。

そう諦めて、僕は死地（台所）へと赴いた。

～３０分後～

「こりゃ、大ハズレみたいだな」

「うぅ……」

明希が解毒剤を飲んでいてくれたおかげで少しは腹痛も和らいでいるが、今回の姉さんの料理はそれを凌いでいた…

「やば…

なんか俺まで腹がぁぁぁ！？」

僕の方からのフィードバックがいったのか、明希ももがき始めた…
似たような姿をしたやつらが揃って腹を押さえて苦しんでいるのは端から見たら滑稽かもしれないが、本人たちにとっては二重の意味で危機的状況だ。

「主人！
なにか！なにか幸せなことを……そうだ！
今日、姫路さんが着てくる水着のことを考えれば！」

明希が言いたいのはそれで気を紛らせということだろう。よし、試してみよう。

姫路さんの水着かぁ…
どんなのだろうなぁ…？
やっぱりおとなしめの白や水色だろうか？
それとも大胆にビキニとか……ヤバい、鼻血でそう…
まぁ、どちらにしても姫路さんなら似合いそうだよね。
きっと眼福ものなんだろうなぁ…
早く拝んでみたいものだ。
うん、こういうこと考えてると幸せな気分になれるよね。

「治った！」

「マジでかよ！？」

さすがの明希もビックリしたらしい。
というか僕自身、それだけで完治するのだから余程単純なのだろう…
下手したら変態の一歩手前である……

「さてと、腹痛も治まったことだしそろそろ行こうか」

「まだ待ち合わせまで一時間程あるぞ？」

明希がベッドの脇に置いてある目覚まし時計を見て言う。

「せっかく来てくれる姫路さんを待たすわけにはいかないでしょ？」

「たしかにな」

明希も水泳用バッグを持って、出発の準備を――――――

「ねぇ…

どこからそのバッグ出したの？」

「前にババァに頼んだらくれたものの中に入ってただけだ」

明希は平然と言うが、一召喚獣をここまで優遇してしまっていいのだろうか？

他の生徒から不満がでないといいんだけどなぁ…

「まぁ、いいや。朝食の時に姉さんには話をつけてあるし、そろそろ行こうか」

「そうだな。じゃっ、せーの」

「「Ｌｅｔ'ｓ　ｇｏ　理想郷！！（アガルタ）」」

第６５問　僕と君と感じる距離感（前書き）

きるぐまー１号さん、感想ありがとうございます！

第６５問　僕と君と感じる距離感

明久ＳＩＤＥ

「もう誰か来てるかな？」

「さすがに一時間前じゃ誰もきてないだろ」

僕の肩に乗る明希がしれっと言う。

「だよね…
さすがに早く来すぎちゃったかな？」

「まっ、遅れるよりはマシだろ？」

たしかに明希の言う通りなのだが、バス停前で待つというのは退屈なものである。こんなことならバッグの中にＰ○Ｐでも入れとけばよかったよ…
そんなことを考えながら歩いていると、バス停のベンチで誰かが座っているのが見受けられた。ふわっとした桜色の髪に保護欲が駆り立てられる容姿。

「ひっめじさーん♪」

当然だが明希は大歓喜で走っていった。

「あっ、明希君」

姫路さんも明希を確認すると手を差し出して膝に乗せてあげている。
うらやましい…
僕も召喚獣だったら膝に乗せてもらえたかな？

「姫路さん、おはよ」

「あっ、明久君！？」

あからさな驚きを見せる姫路さんにこちらまで狼狽してしまう。
なんで明希の時は驚かなかったのに僕の時だけこんなに驚くんだろう？
やっぱり嫌われてたりするのかなぁ…

「そりゃ、明希がいれば僕だっているよ？」

内心を悟られないように作り笑いをするのが難しい。
いや、本当はしたくないだけなんだ…
君には嘘偽りなくまっすぐに接したいというのに、それすらできないなんて…

「そ、そうですね」

そう言う姫路さんの顔にも一瞬、陰がおちた気がするが気のせいだろうか？

「そういえば、姫路さんはいつからここに？」

「私もほんの五分前に着いたばかりですから気にしないでください」

「だけど一人で五分は退屈だったよね？」

明希が姫路さんを見上げるようにたずねる。

「そんなことありませんよ」（今日、明久君と遊べることを考えていたら、あっという間だったなんて言えません／／／）

「だけど、待たしちゃってごめんね」

「い、いえ、ほんと大丈夫ですから気にしないでください」

うーん…

やっぱり姫路さんに気をつかわせちゃってるのかな…

「そう言えば、明久君たちも今日は早めの集合でしたね」

「姫路さんに会いたかったからだよ」

「ふふっ、私も会いたかったですよ明希君」

そう言って明希ににこやな笑みを向けた姫路さんは僕の方を見てくる。

「明久君はなにか用事があったんですか？」

「い、いや……僕はそう、あれだよあれ。家にいるのもなんだと思ったから早めに出てきたんだ。姫路さんは？」

これ以上追及されると支離滅裂になりかねないので、ひとまずは話題をふる。

「わ、私ですか…
ほ、ほら私はその…あれです。
明久君と同じで家にいるのもなんですから…」

そう言う姫路さんは伏し目がちでこちらをチラチラと見てくる。

「なにか聞きたいことでもあるの？」

「い、いえ…」

うーん…
今日の姫路さんはやけに歯切れが悪いなぁ…
なにか言いづらいことがでもあるのかな？

「遠慮しなくてもいいよ。僕でよかったら力になるからさ」

「そう…ですか？
その……変な質問なんですけど…」

「そんなこと気にしないし、どんな質問でも笑ったりなんかしないよ」

「なら……」

そこで姫路さんは一旦、深呼吸をするようにして間をとる。

「明久君にはその……す、好きな人とかいますか…？」

……

……
……
……
……
……
……
おかしい…
処理落ちしかけてたけど、これは世間一般的には僕のことが好きな人が聞いてくる質問だ。だが、相手は姫路さん。
そんな夢絵空事みたいなことがおきるわけない。
なら、残る可能性は一つ……

ドッキリか…

「まったく……雄二も人が悪いよ。出てきたら？」

適当に茂みに向かって話しかける。
ここにいないとしても、おそらくこの付近にはいるだろう。

「明久君？」

「姫路さん、少し静かにしてて。雄二がどこかに隠れてるはずだからさ」

「坂本君がですか？」

姫路さんが首を傾げて理解がいかないというふうにする。

「まぁ、見ててよ。くらぇぇぇ！」

さっき話しかけた茂みにおもいっきり蹴りをいれる。

まぁ、さっき反応はなかったからここには「いてぇぇぇ！！」

あっ、誰かに当たった…

「なにするんだ吉井！」

そう大声をあげながら茂みから須川君が木の葉を撒き散らして飛び出てきた。

「いや、須川君こそなにやってるのさ！？」

「バードウォッチング」

須川君は親指を立たせ、自慢気に言ってくる。

「白々しい嘘をつくなぁぁぁ！」

「いや、本当に須川はバードウォッチングをしていたんだぞ！」

福村君、なんで当然といったふうに茂みから現れてるのかな？

「そうだ、俺たちはバードウォッチングをしていただけだ！」

横溝君、君は木の上にいたんだね。

「我らに幸せ（悶え）を運ぶつがいの鳥のな」（歯キラーン）

「……って、結局いつもと変わってないじゃないかぁぁぁ！！」

「そう言うお前も相変わらずだな、明久」

突如聞こえてきた後方からの声に振り向くとそこには雄二がいた。

「あっ、雄二来てたんだ」

「今来たばかりだけどな」

「……私もいる」

雄二の背中から霧島さんがひょっこりと顔をだす。

「おはようございます坂本君、翔子ちゃん」

「……おはよう瑞希。話があるからちょと来て」

「しょ、翔子ちゃん！？」

言うないなや、霧島さんは姫路さんの手を引っ張り、僕たちと少し

離れたところまで連れていってしまった。

「姫路さん…」

まだあの言葉の真意を確かめていなかったのに……
どうして姫路さんは僕の好きな人が気になるの…？

「諦めろ主人」

姫路さんの膝から半強制的におろされた明希が言う。

「まっ、俺も明久に話があるんだから明希の言う通り、諦めるんだな」

「僕に？」

雄二が僕に話ってなんだろう？

「あぁ、話したいことは二つだ」

いつになく真剣な面持ちの雄二に僕も固唾をのむ。

「まず一つ目だ」

「うん」

こんな真剣な雄二との会話はいつ以来だろう。
はっきり言ってボケたい…

「今日のこれはお前のために計画してやったんだ。

ここまでお膳立てしてやったんだから一つくらいアクション起こせよ」

「……据え膳喰わぬは男の恥」

「なんでムッツリーニが会話に混ざってるかはおいとくとして、僕はなにをすればいいの？」

雄二がなんのお膳立てをしてくれたかもさっぱりなため、なにをすればいいのか皆目検討がつかない。

「お前、本当にバカだな…
要するに今日のプールはお前のために計画してやったってことだよ」

「雄二……君ってやつは…」

雄二の考えに涙が出そうになる。

「そこまでして僕が自爆するのを見たいか！」

「お前…
なんでそういう思考回路しかしてないんだ？」

「だって雄二が素直に僕を助けてくれるわけないでしょ？」

絶対に狡猾な罠を用意しているに違いない。
それで姫路さんに見捨てられた僕を嘲り笑うつもりなのだろう。

「あのなぁ……
お前が俺のことをどう思おうと勝手だが、俺だって恩ぐらい感じる

んだよ」

「雄二が僕に恩を「如月グランドパーク」

雄二が僕の言葉を遮るように言葉を被せる。

如月グランドパーク

それは召喚大会の優勝景品としてプレミアムチケットが用意されていたところだ。そして、優勝した僕が雄二に譲ったものでもある。

「翔子の前じゃ言ってなんかやらねぇけど、俺はあそこに行けたことで色々なことに気づけたし、楽しかったんだ。他の誰でもない。翔子と行けたことが…」

そう言う雄二の目は少し離れた場所で姫路さんと話している霧島さんをしっかりと見据えていた。

「だから、そのお礼にってこと?」

「そうだ」

「なら…それは受け取れないよ」

「なんでだよ!」

雄二が怒気を含んだ声で叫ぶ。

怒っているそれとは違う。

おそらく、恩を返せない自分が惨めで腹だたしいだけなんだ。

「僕にはあれは相応しくなかった…

僕が姫路さんと行くには相応しくないんだよ。
だから、あれを必要としている雄二にあげただけなんだ」

「どうして……」

雄二がうつむき、拳を震わせながら言う。

「どうしていつもお前はそうなんだ！
どうして優しさを認めようとしない！
どうして誰よりも他人に優しくできるお前が自分の優しさからは目を背けるんだよ！」

「違う！
僕はただ自分に甘いだけなんだよ！」

でも、これは姫路さんによって一つの答えが出ている。
出ているけど、僕が自分に甘いという事実には変わりない。
あくまで、自分に甘いことへの答えを見つけたにすぎないのだから…

「違う！
お前は逃げているんだ！
お前が優しいと思っている姫路と並ぶのが恐いだけなんだよ！」

「それじゃ……それじゃいけないの！
恐いよ！僕が僕なんかが姫路さんと並ぶなんて…」

なにが起きるか…
もしかしたら最悪の結果にだってなりかねない。

「どうしてなんだよ！

どうしてお前はそこまでして自分を受け入れられない！
どうして姫路の気持ちを考えてやんないんだよ！」

「姫路さんの気持ち…？」

その一言が僕に冷静さを取り戻させてくる。

「そうだよ！
お前は姫路の気持ちを考えたことがあるのかよ！
誰とでも分け隔てなく接するお前が自分だけとは距離をとっている。
それを実感した時の姫路の気持ちを考えたことがあるのかよ！！」

僕が姫路さんと距離をとっている？

「お前にとっては特別扱いかもしれないけど姫路にとってはどうだ？」

雄二も段々と落ち着いてきたのか、普段の声色に戻ってきている。

「姫路はそれで、お前と距離を感じているのかもしれないぞ？」

雄二の言葉が僕の中で反芻される。
僕がよかれと思ってやっていたことは姫路さんに気を遣わせてしまう要因となっているのかもしれない。そこまでは考えたことがあった。
だけど本当はそれ以上に姫路さんは距離を感じてしまっていたんじゃないだろうか？
僕なんかでも友達とは思ってくれているだろうから、それで辛い想いもさせてしまったのだろう…
なんだか空回りばかりだな…ほんとに……

「雄二、ありがとう。おかげで目が覚めたよ。」

「気にすることはないぜ。
俺だってお前のおかげで大切なものに気付けたんだからよ。
ところで俺のお礼、受け取ってくれるよな？」

そう言う雄二の顔は以前とは明らかになにかが違った。
それが傍目にもわかるのだから雄二の中でも相当な変化があったのだろう。

「そうだね。
今回はありがたく受け取らせてもらうよ」

きっと今の僕の顔もさっきよりは晴れてるよね…

第６５問　僕と君と感じる距離感（後書き）

雄二がまともなやつ、第３段でした。
雄二の言葉の詳しい真意は閑話２をどうぞ！

では、次回もよろしくお願いします！

第６６問　僕と君と市民プール

明久ＳＩＤＥ

『次は市民プール前、市民プール前』

バスの中にアナウンスが響き渡る。

「やっと着いたね」

僕は背伸びをするようにして、隣に座っている雄二に話しかける。

「そうだな。
ところで明久、例の件わかってるんだろうな？」

「それくらいわかってるよ」

僕はあの後、雄二と話したことを思い出す。作戦はこうだ。
まず、僕たちは普通に市民プールで遊ぶ。
その後、頃合いを見計らった雄二が更衣室に戻り、不良に変装する。
そして姫路さんに絡んだ雄二を僕が成敗して姫路さんからの評価をあげるという寸法だ。

「ねぇ雄二…」

「なんだ？」

「これって、とんでもない茶番劇だよね？」

「安心しろ、姫路が俺だと気付く可能性はゼロに等しい」

こいつ…

さては姫路さんを相当なバカだと思ってるな…

「本当に大丈夫なのかな…」

「大丈夫だ。俺を信じろ」

そう胸をはって言う雄二は頼もしくあるとともに脆く見えた…

瑞希ＳＩＤＥ

「……瑞希、作戦わかってる？」

「はい…

わかってはいるんですけど…」

翔子ちゃんが私に提示してきた案はこうです。

まずは、普通に市民プールで遊びます。

その後、頃合いを見計らった翔子ちゃんが他の男性を連れてきて私にナンパの真似をしてもらう。

それで明久君にやきもきをやいてもらうという作戦なのですが…

「明久君がこんなことでやきもきをやいてくれるんでしょうか…」

それはやいてもらえれば嬉しいですけど、同時に見向きもされなかったらと思うと……

「……安心してほしい。吉井は必ずやきもきをやいてくれるから」

「……」

私は翔子ちゃんに対して返す言葉がありませんでした。
明久君が私のことをそこまで気にかけていてくれるわけがないという、自分を律する心。その反面、そこまで気にかけていてほしいと……明久君にとって私がそれほどの存在でありたいという本音……
私はいったい、どちらに従えばいいんでしょうね…

明久ＳＩＤＥ

「よーし、男子は全員集合したな」

「うむ、わしも男子じゃから集合じゃ」

秀吉がきっちりと自分が男だということをアピールする。
まぁ、今回は係員に捕まるようなこともなかったし大丈夫かな？

「……今から楽しみ」

妄想だけですでに輸血パックを二つ消費したムッツリーニが言う。
たぶん、ムッツリーニが一番最初の脱落者だろう…

「そう言えば今日は工藤さんと一緒じゃないんだね」

「……工藤愛子などに興味はない」

いや、フルネームで呼んでるあたりめちゃくちゃ意識してるよね？
そう言おうと思ったのだが、プールの中に面白いものが見えたため言葉を飲み込む。

「……どうしたあき――うぉ！？」

ザバーン！

ムッツリーニがプールから飛び出してきた工藤さんによってプールに引きずり込まれていった…
相変わらず工藤さんは芸が込みすぎているなぁ…

ザバーン！！

「……防水機能」

プールから勢いよく飛び出してきたムッツリーニはカメラを誇らしげに見せてくる。

「カメラ、大丈夫なんだ…」

「……当たり前」

しかし、よく市民プールにカメラを持ち込めたものだ。
下手したら警察送りになっても文句は言えないだろう…

「……ところで工藤愛子、なぜお前がここにいる？」

ムッツリーニが工藤さんが潜っている場所にしゃがみこんでたずねる。

ムッツリーニ、そんなことしたらまた…

ザバーン！

言わんこっちゃない…

案の定、再度ムッツリーニを沈めようと工藤さんがプールから飛び出してきたのだ。

「甘いな」

そう言うと、ムッツリーニはヒラリと工藤さんの手をかわす。

「もう、引っ掛かってくれないとつまらないよ」

いや、それで沈められるムッツリーニの身にもなってあげなよ…

「……一度見た攻撃が二度も通用すると思うな」

はい、でたよムッツリーニの無駄にかっこいい台詞。

「ふーん、残念だなぁ…

せっかくムッツリーニ君にプールのなかで（自主規制）や（放送禁止事項）をしてあげようと思ったのに」

「な…なんだと！？

惜しいことを……いや、俺はとんでもない過ちを…」

そう言ってムッツリーニは（鼻）血の（混じった）涙を流す。

「見損なったのじゃムッツリーニ！
お主なら…お主なら、鼻血を出して倒れてくれる思っておったのに！」

秀吉！
いくらここ5話まったく出番がなかったからって、そういうボケは辞めようよ…

「立て！
立つんだムッツリーニ！
お前にはまだやり残したこと（姫路さんの写真を撮る）があるだろう！？」

明希！
なんで君までボケに回ってるのさ！

「いや、ムッツリーニはちゃんとたっ「言わせるかぁぁぁ！！」

頼みの綱である雄二までもがボケに回ろうとしたので、おもいっきりプールに向かって蹴り落としてやった。
まったく、なんでこのごに及んで下ネタを言おうとするんだか…
後で霧島さんに雄二がナンパしてたって言ってやろっと。

「明久、てめぇ！」

ザバーン！！！

雄二がムッツリーニ以上の水しぶきをあげて飛び出してきた。
さすが赤ゴリラ、しぶといやつだ…

「……雄二、おいたはめっ」

まっ、僕は霧島さんがいるから安全なんだけどね（笑）

「翔子、いつの間に…」

「……着替え終わったから来ただけ」

そう言う霧島さんは雄二がおさまったのを確認すると、僕の方に向き直る。

「瑞希はもう少しでくるから吉井は待ってて」

「うん…」

正直、なんて答えたらいいかわからない。
期待してるよなんて言ったら変態だし、無言なのは失礼だし…

「……ところで雄二、私の水着どう？
脱がしたくなった？」

「なるか！
というか、俺を変態に仕立てあげるつもりか！？」

この二人はいつも楽しそうでいいなぁ…
なんて言うんだろう？
互いが互いのことを一番大切に思っている。

たぶん、そんなところじゃないだろうか？
僕もいつか姫路さんとそんな関係になれたらいいのにな…

「（雄二、手筈は整ってる？）」

「（任せろ、バッチリだ。翔子の方こそしくじるなよ）」

「（うん。瑞希のためにがんばる）」

なにやら雄二と霧島さんが小声で話している。
さては雄二のやつ、どさくさに紛れて水着の霧島さんと密着するつもりだな？

「……ところで愛子、どうしてここに？」

「ほら、私って水泳部でしょ？
それで大会が近いから自主練をしてたんだよ。代表たちは遊びに来たのかな？」

プールの中から霧島さんを見上げる工藤さんがたずねる。

「……うん。
愛子は予定が入ってるって言ってたから誘えなかったけど一緒に遊べて嬉しい」

「そう言ってもらえると嬉しいけど、私も自主練があるからね」

そう言う工藤さんは少し悲しそうだった。
霧島さんの誘いを断ってしまったため、いくら居合わせたとしてもバツが悪いのだろう。

「……工藤愛子、俺も練習に付き合ってやる」

「えっ…」

いきなり立ち上がったムッツリーニに工藤さんは驚きを隠せないで呆然としている。

「……一人じゃ寂しいだろうから」

そう言ってプールに入っていくムッツリーニの眼はいつもの下心は見えず、純粋に工藤さんに寂しい思いをさせたくないという気遣いが見てとれた。

「ありがとう……康太君…」

恥ずかしそうに言う工藤さんをムッツリーニはエスコートしていくように僕たちから離れていった。

「意外じゃな」

「うん、まさかあのムッツリーニがね…」

「……二人もお似合い」

「だけどムッツリーニのやつ、工藤と二人っきりで大丈夫か？」

「あっ……」

たぶん、雄二の不安は的中することになるだろう。

そう、あの遠くに見える血飛沫とともに……

第６６問　僕と君と市民プール（後書き）

雄二の考えた作戦、果たして成功するのか？
次回もよろしくお願いします！

第６７問　僕と君とペア決めクジ

明久ＳＩＤＥ

「ムッツリーニ……
今…僕もそっちにいくよ……」

そう言うと、僕は自らの血の海へと身をゆだねた…

「明久君!?」

「ダメだ姫路。今のお前は明久に近づくな」

雄二が僕の方に駆け寄ってこようとした姫路さんを制止する。
たぶん、姫路さんは自分のせいで僕がこうなっているのがわかっていないのだろう…

「でも明久君が!」

雄二の制止をふりきろうとする姫路さんのパレオがふわっとめくれる。

「もう…だめ……」

それだけを言い残すと、僕は血の雨にうたれ意識を手放した…

～数分後～

「ん……」

目を開けると、そこには市民プールの天井が広がっていた。
どうやら僕はベンチに寝ているようだ。
ご丁寧にも僕の下にはタオルも敷いてある。

「おっ、ようやく目が覚めたみたいだな」

明希の声がしたので首を曲げると、僕の腰辺りに明希がちょこんと座っていた。

「やぁ、明希…
明希はみんなと遊ばなくていいの？」

「けっ、さっきまで理想郷（アガルタ）にいたくせにいいご身分だな」

「理想郷？」

たしか理想郷と言えば家を出る前に明希と言っていたはずだ。

「今は主人（マスター）のために飲み物買いにいっちまってるが、さっきまで姫路さんは主人に膝枕してたんだぞ！殺したいほどに妬ましい！」

そう言って明希は僕に木刀を構えてくる。

「明希！
ちょっと待って！話せばわかるよ！」

反射的にベンチから飛び去った僕は明希と距離をとる。

「問答無用！」

「あっ、明久君目が覚めたんですね」

明希が飛び掛かってくる直前に姫路さんの声が聞こえてくる。
明希の方も姫路さんがいるとわかると臨戦体勢を解いてくれた。
この猫かぶりめ…

「あはは…
心配かけちゃってごめんね、姫路さん」

「いえ、明久君が無事でよかったです」

とても言いにくいんだけど、僕は姫路さんのせいで血まみれになってたんだよ？
危うくムッツリーニの仲間入りを果たすところだったんだよ？
だから、もう少し自分の魅力に気づいてほしいものだ。
僕は常に気が気じゃないというのに…

「はい、明久君。水分補給も大切ですよ」

しかし、僕の願いも虚しく姫路さんはいつもと同じよう、僕に接してくる。

「うん、ありがとう」

だから、僕もなるべく平静を装おい違和感がないように水を受けと

る。

「（今回くらい……譲ってやるよ）」

突然、明希は僕にだけ聞こえる小声で言うと、みんなのいる方へ走っていってしまった。まさか明希にまで気を遣われるなんてね…

「明希君、どうしたんでしょうか？」

「せっかくのプールだから遊びたかったんじゃないかな？」

みんなが遊んでいるのを羨むような、悲しいような目で見る姫路さんに言う。

「姫路さんはみんなと遊ばないの？」

せっかくの休日なのだから、姫路さんにもできるかぎり楽しんでほしい。

僕なんかに掛かりっきりで終わるよりもその方が僕も嬉しいから…

「いいんです。

みんなと遊びたくないと言えば嘘になりますけど、だからといって明久君をほおっておけませんから」

そう言って姫路さんは少し恥ずかしそうにはにかむ。だけど……

いつもは嬉しいその笑顔が

僕に力をくれるその笑顔が

今は僕を苦しめるんだ…

僕のせいで姫路さんが楽しめない。その事実があるかぎり僕は……

「僕は…僕なら大丈夫だから、みんなのところにいこうよ」

「でも…」

「大丈夫だって、さぁ！」

僕は多少強引に姫路さんの手を掴むと、みんなの方へと向かっていった。

「明久君!?」

姫路さんの方も驚いはいるが、嫌がらってはいないようだ。

僕はそれを確認すると雄二たちに手を振る。

「おぉ、明久よ。目が覚めたのじゃな」

一番最初に気づいた秀吉が僕に手を振り返してくる。

「ウチが来た時にはもう倒れてるんだからびっくりしたわよ」

どうやら島田さんも僕のことを心配してくれたようだ。

正直、なにか企んでるじゃないか恐い…

「よしっ、メンバーも揃ったことだしチーム決めでもするか？」

「「チーム決め（ですか）？」」

事情が飲み込めない僕と姫路さんの声が重なる。

「そういや、二人には説明していなかったな。
まぁ、要するには今から騎馬戦をやるからそのチームを決めるんだ」

「でもここは市民プールですから他のお客さんの邪魔になるんじゃ…」

たしかに姫路さんの言う通りだ。
学校のプールや貸し切りならいざ知らず、ここは公共の施設である市民プールだ。無関係の人を巻き込む可能性のある騎馬戦などできるわけがない。

「その点は心配ない。
ここの市民プールには騎馬戦専用のプールがあり、今日は俺が貸しきっているからな」

「ごめん雄二…
どこからツッコミを入れてあげたらいいかわからないよ…」

「明久よ、否定したい気持ちもわからんでもないが、あれを見るのじゃ」

そう言う秀吉の指さす先には大プールとは孤立したプールと看板があった。

「『騎馬戦専用プール　本日は坂本様が貸し切り』と書いてありますね」

看板のそばにいった姫路さんが読み上げる。
まさか本当に騎馬戦専用のプールがあっただなんて…
それに雄二に貸し切るだけの資金が……霧島さんか…
霧島さんの家はすごいお金持ちだから市民プールの一角を貸し切るくらい余裕だろう。

「ということで男女にわかれて割り箸クジを引いてもらう。
そこで同じ数字が書かれてるやつがペアだ。
女子のクジは翔子に任せるからな」

「……わかった」

雄二から霧島さんが三本の割り箸を受け取る。
ん？
今、雄二が一瞬にやけた気がしたの気のせいかな？

「よし、まずは明久から引け」

「いいよ。まずは秀吉から引きなよ」

雄二が僕を先に引かせてくれるなんておかしいから秀吉に譲る。

「明久よ…」

それに対して秀吉は真剣な面持ち僕と目を合わせる。

「わしは『クジを最初に引くとダメなアレルギー』なのじゃ」

「なら仕方な……って、騙されないよ！
どうせタキシードアレルギーと一緒でそんなのないんでしょ！」

「つべこべ言わずに引けバカ！」

「イタッ！」

雄二に殴られた頭を押さえる。

ったく、こうなったら二人はなにがなんでも僕から引かせる気なのだろう…

「わかったよ…

僕から引けばいいんでしょ引けば…」

しぶしぶながら引いて、書いてある番号を見る。どうやら僕は1らしい。

「明久は1だな」

雄二のやつめ、僕の番号を確認せずに言いやがった…

さては最初からあの中には1しか入っていないな?

でも、1だからといってなにか不幸があるわけじゃないしいいか。

僕のペアは誰になるんだろうなぁ…

瑞希ＳＩＤＥ

「……瑞希、早く引いてほしい」

じっと割り箸を凝視していた私に痺れをきらしたのか、翔子ちゃん

が催促してきます。

「明久は1か」

そんな中、明久君の番号が決まったらしく坂本君の声が聞こえてきました。

明久君は1ですか…

この三本から引ける可能性は1／3…

決していい確率とは言えませんが、悪い確率ではありません。

「瑞希が引かないならウチから引くわよ」

「あっ…」

いつまでも引かない私が悪いのですが、美波ちゃんが先に引いてしまいました。

「……」

引いた割り箸を見つめたまま美波ちゃんがしばらく静かになります。

もしかして美波ちゃん、1を引いちゃったんでしょうか？

翔子ちゃんだったら坂本君の番号と交換してもらうという手もありましたけど、美波ちゃんではその方法もできません…

「……ウチは……2よ」

美波ちゃんが割り箸を握ったまま言います。

でも、なんというか複雑な気分です…

明久君とペアになれる確率は増えた。

だけれど、美波ちゃんの不幸を喜びたくはないと…

「……じゃあ次は私が引く」

そう言って翔子ちゃんが割り箸を一本、取り出します。

「……私は3」

って、ことは…

「……瑞希が吉井とペア」

「悔しいけど今回は譲るわ。だけど勝負は譲らないわよ」

「はいっ！

私だって負けませんからね！」

第67問　僕と君とペア決めクジ（後書き）

次回でプールは終わりの予定です。

第６８問　僕と君と騎馬戦勝負（前書き）

今回は清涼祭以来のあれ発症！？

第６８問　僕と君と騎馬戦勝負

明久ＳＩＤＥ

「ルールは簡単だ。
騎馬の上に乗ってるやつが落ちるか、頭に着けたこのハチマキを取られたら負けとなる」

雄二がグループの男子にハチマキを渡しながら言う。
女子に渡さないのは、ただ単に既に遊泳を始めているからである。
ちなみにグループは僕＆姫路さん、雄二＆霧島さん、秀吉＆島田さん、そしてついさっき戻ってきたムッツリーニ＆工藤さんだ。
僕たちがクジを引き終わるのを見計らって戻ってくるなんてムッツリーニも中々やるね。

「雄二、それ以外のルールは特にないの？」

「そうだな…
じゃあ、下のやつが鼻血を出しても負けとするか」

「……卑怯な」

「そうだよ雄二！
それじゃ、僕とムッツリーニが開始五秒ももたないじゃないか！」

実際、今の状態（水着）の姫路さんを上に乗せたら開始前に倒れることも覚悟しなければならない。

「安心しろ明久、ムッツリーニ。お前らが五秒ももつわけない」

「……失敬な」

「ひどい！
自覚してたけど、指摘されると腹がたつよ！」

いや、正確に言うと雄二に指摘されることが腹立たしい。

「ならお前らが立派な自制心の持ち主だということを見せてみろ」

「「当然だ！」」

「お主ら、見事に不利な条件をのんだことに気づいておるかのぅ？」

「「あっ……」」

ムッツリーニも僕も秀吉に指摘されて初めて気づくがもはや後の祭りだ。
自信満々に言い放ってしまった手前、今さら退くことなどできない…

「まぁ、バカ二人はほっといてそろそろ始めるぞ」

「……こっちはいつでも大丈夫」

「が、がんばります！」

「木下、ちゃんとウチを支えてなさいよ」

「ムッツリーニ君、楽しもうね」

先にプールに入っていて遊泳していた女子たちも大丈夫なようだ。
たぶん、姫路さんたちは遊泳してたからさっきの会話は聞かれてないよね…？
聞かれてたら確実に変態のレッテルを貼られてしまう気が……

「まぁ、一応俺が審判やってやるよ」

僕の心配を他所に明希が審判をかってでてくれる。

「そうか。
この人数で不正はないと思うが頼むな」

「あぁ」

～騎馬戦開始～

「よーし、全員位置についたな」

各ペアが四隅についたのを確認した明希が言う。

「試合開始！」

明希の掛け声と共に僕たちはいっせいに走り出す。狙いは一番厄介な雄二だ。
雄二も同じことを考えているのか僕たちの方へとまっすぐに向かってきている。

ただ、水の中を歩いているということもあって、さほど速さはでていない。

「姫路さん、無理にハチマキを取ろうと思わないで自分のハチマキを取られないことを優先して！」

頭上からの誘惑に耐えながらも姫路さんにアドバイスする。

「はいっ！
って、翔子ちゃんハチマキ着けてませんよ！」

「えっ！？」

見ると、姫路さんの言うとおり霧島さんはハチマキを着けていなかった。
その代わり――――

「なんで雄二がハチマキ着けてるんだよ！」

「明久！
誰がいつ上のやつにしかハチマキを着けちゃダメだと言った？
これも作戦の内だ！」

卑怯の極みだ…
自分でルールを作っておいて、その穴を自分でつくなんて…
って、よくよく考えたらこれってすごい不利じゃん！
姫路さんと霧島さんを肩車している僕と雄二は手をだせない。
手が使えるのは姫路さんと霧島さんだけ。
そして、霧島さんから姫路さんの頭に着いているハチマキをとることはできるが、姫路さんから雄二の頭に着いているハチマキを取る

ことはできない。

……いや、一回きりのチャンスがある。

「姫路さん、チャンスは一回きりだよ。集中して！」

「はいっ！」

姫路さんの了承を確認するとトップスピードで雄二に近づく。

「いくよ雄二！」

「こい明久！」

僕と雄二の距離が１m以内に縮まる。

本来ならこの距離で上の二人はハチマキを取り合えるはずだ。

しかし雄二がハチマキを着けてしまっているため、姫路さんはそれができない。

「やれ翔子！」

「……うん！」

だけど、同時にそれは回避に集中できることも意味するんだ！

「姫路さん！」

「はいっ！」

霧島さんの伸ばしてきた手をよけるように屈む。

「なっ！？」

自分と目線があった姫路さんに驚いたのか、雄二は驚愕の声をだす。
後は姫路さんが雄二からハチマキを取れば僕たちの勝ちだ！

ぱふっ

ただ、僕は重力とか作用点とかといった問題を忘れていた…

「アガルタぁぁぁ！！」

ぶしゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！

僕は今日一番のいや、人生で一番の鼻血をだしてプールに沈んでいった…

～数分後～

「起きろ明久！」

バシッ！

「いたっ！？」

雄二におもいっきり鳩尾をくらわせられて目が覚める。

「なんだよ雄二…」

「明久、今から作戦を開始するぞ」

雄二が辺りを警戒するようにして言う。

おそらく、作戦とはあの茶番劇のことだろう。

「いまいち気乗りしないけどわかったよ…」

「姫路はあそこにいるからしっかりやるんだぞ」

そう言いながら雄二が指さす方向には霧島さんと楽しそうに会話している姫路さんがいた。

「そういえば騎馬戦は誰が勝ったの？」

「ムッツリーニと工藤のペアだ…

お前が豪快にぶっ倒れてくれたおかげで俺の方までバランス崩しちまって失格。

んでもって、秀吉と島田のペアに勝ったムッツリーニと工藤のペアが勝ちというわけだ」

「そうなんだ…」

てっきり雄二が勝つと思っていたから意外である。

そんなことを考えながら辺りを見回すと明希の姿が見当たらない。

おそらく、僕が気絶してしまったことにより強制返還させられてしまったのだろう。

「まぁ、任せたよ」

「そっちこそしくじるなよ」

正直、成功するとは思わないが、雄二を送り出す。
まぁ、後で姫路さんにネタばらしすればいいよね……

瑞希ＳＩＤＥ

「……瑞希がんばって」

「はい…」

例の作戦を実行させるらしく、翔子ちゃんが一般の人たちがいる方向へと向かうのを見送ります。
明久君…
騙すようなことしてすいません…
あとで全て話しますから…

「ねえお嬢ちゃん」

そんなことを考えている私に声がかけられます。
もしかして翔子ちゃんがナンパの真似事を頼んだ人でしょうか？

「はい、なんで！？」

振り向いた私の目に映ったのは――――

明久ＳＩＤＥ

「イヤです！離してください！」

ぼーっとしていた僕は姫路さんの声で我に帰る。

「へへっ、ここで会うなんて奇遇だな」

急いで姫路さんの方に目線を移すと姫路さんがチャラチャラしたやつに腕を捕まれていた。あれが雄二の変装なのだろうか？

違う…

あいつは……

気づいた時には僕はもう走り出していた。

雄二ＳＩＤＥ

「イヤです！離してください！」

変装をし終えて、これからプールに向かう俺に姫路の声が聞こえてくる。

まずい！

姫路のことだからほっといたらナンパの一つや二つくらいくるだろう。

それを計算にいれてなかったわけじゃない。
だが、わずかに目を離した時間で絡まれるとは考えていなかった…
完全に俺の誤算だ。

ガラガラ

急いでプールへの扉を開けて入る。
明久のことだから、姫路を助けるために動くだろうが、あいつの腕っぷしはそこまで……いや、あいつならやりかねない…

明久じゃないあいつなら…

ザバーン!!

水しぶきの上がった方に目を向けると、その方向から翔子が走ってきていた。
本来なら翔子とここでおちあい、俺は赤の他人のフリをして姫路にナンパをするよう口裏を合わせていたが、今となってはそれに意味などない。

「雄二大変!瑞希が!」

「わかってる!
危ないから翔子はここで待ってろ!」

俺は翔子の脇を通り抜け様に言う。
果たしてさっきの水しぶきは明久が落とされたものか、それとも……

ザバーン!!

再度、誰が落ちた衝撃で水しぶきが上がる。
最悪だ…
おそらくあいつが出てきてる…
なら、姫路に被害はないだろうがこのままあいつがで続ければ明久のやつが！

明久ＳＩＤＥ

「おらよ！」

ザバーン！！

姫路さんに絡んでいたやつの仲間と思われるやつをプールに投げ落とす。

「お、おまえは…」

姫路さんの腕を掴んでいたやつがようやく水面に顔をだす。

「はんっ、どうやら覚えてるみたいだな。なら話ははぇ」

自らプールに飛び込むと深く腰をひく。

「死ねよ」

パシッ！

まっすぐに繰り出される俺の拳は後方から何者かによって止められる。

「明久、もうやめろ！」

なんだ、手をつかんだのは雄二か。

「雄二、悪いけど離してくれないかな？
今は雄二に構ってる暇なんてないんだ」

「明久！正気に戻れ！」

どうやら雄二はあくまで僕の邪魔をするらしい。

「てめぇに構ってる暇はねぇって言ってんだよ！」

「なっ！？」

ザバーン！！

雄二があまりにも聞き分けがないから捕まれた腕を利用して背負い投げの要領でプールに落とす。

まぁ、姫路さんに危害を加えたやつの成敗を邪魔したんだから雄二だって姫路さんの敵のようなものだ。なら気にする必要などない。

「明久てめぇ！」

「雄二うるさいよ！」

懲りずに俺を止めようとする雄二に鳩尾をくらわせる。

バシッ！

「目を覚ませ明久！」

「くどいんだよ！」

捕まれた手を振りほどこうとするが、雄二にしっかりと掴まれていて振りほどけない。

「姫路！
明久を正気に戻すんだ！」

「はっ、はい！」

雄二の声で我に帰ったように姫路さんが僕の方に近づいてくる。

「来ちゃダメだ姫路さん！」

来たら俺はまたこいつの中に戻らなきゃいけねぇ！
俺が戻っちまったら……あんな弱っちいやつじゃ姫路さんを護れねえんだよ！

「立ち止まるな姫路！」

「で、でも…」

「お前だってわかってるだろ！
こいつはいつもの明久じゃ……いや、明久ですらないんだ！」

「余計なことといっ！？」

姫路さんが俺に触れている…
ダメだ…
もう俺はここにいられねぇ…

雄二ＳＩＤＥ

「なんとか…なったか…」

姫路が明久に触れたことによるのか、明久は気絶してしまった。
前は普通に正気に戻るだけだったのに確実に悪化してやがる…
にしても、これで三回目か…
一回目はＢクラス戦の根本の時、二回目は清涼祭の誘拐事件、そして今回。
どれも例に漏れず姫路のピンチの時に明久はおかしくなっていた。
いったいあれはなんだ？
明久とは異なった自我を持つ二重人格とでも言うのか？
いや、なにか違う気がする。
二重人格では片付けられないほど恐ろしいことが明久の身に…

「雄二よ、大丈夫かのぅ？」

「あぁ、心配いらない」

さっきまでの様子を遠巻きに見ていた秀吉に言い返す。
その周りには島田たちもいるが、明久には見えちゃいなかったんだ

ろうな。
たぶん、さっきの明久には敵か味方の判断しかない。
間接的にでも姫路に害を与えるなら敵と…
だから俺にも殴りかかってきたって訳か。
そういや、姫路に絡んでた不良もいつの間にかいなくなってやがるな。
ちらっと見たが、あいつらは確か清涼祭の時の誘拐犯だ。
もしかしたらそれが明久の中で引き金になったのかもしれない。
まぁ、どちらにしろ今できることは一つだ。

「帰るか」

「そうね」

「プールの管理人にも謝らねばならんしのぅ」

たしかに秀吉の言う通りだな。
場所が貸し切りの騎馬戦専用プールだったのが不幸中の幸いといったところか。

「……瑞希、立てる？」

「はい…」

差し出された翔子の手を掴んで姫路が立ち上がる。

「よっと」

俺も気絶している明久を担ぐと市民プールをあとにした。

なにはともあれ、速急に対策をたてる必要があるな。

おそらくカギを握っているであろう姫路
記憶障害の打開策となるかもしれない翔子
それに当の本人である明久と…

第６８問　僕と君と騎馬戦勝負（後書き）

明久に違和感を感じる雄二。
果たして明久の身になにが起こっているのか！？

次回もよろしくお願いします！

第６９問　僕と君とそばにいるということ（前書き）

※今回は翔子に勝手な捏造設定がついています。
そういったものが苦手な方は気をつけてください。

第６９問　僕と君とそばにいるということ

明久ＳＩＤＥ

ここはどこだろう…？
周りを見渡せば辺り一面の漆黒。
そして僕の目の前にたたずむ白い影。

「君はだれ？」

「俺はお前だ」

影に顔はないが、うっすらと笑った気がした。
いや、ほくそ笑みを浮かべたという方が正しいかもしれない。

「お前が弱いから俺が生まれた」

「僕が弱いから？」

「お前にできないことをするために俺が生まれた」

影は僕の質問に答えることなく話し続ける。

「お前の護りたいもののために俺はいる」

影の言いたいことが難しすぎてよくわからない…
もしかしたら彼は僕になにかを伝えたいのかもしれないが、さっぱりだ…

「今はまださっぱりだろうな。
だが、いつかは決めなきゃならないんだ。
お前か俺、どちらが――――にふさわしいかを」

それだけを言うと影はかき消すように消えていってしまった。
それと共に僕の意識も段々と覚醒していく。

「ん……」

目を開けるとみんなが僕を心配そうな顔で覗き込んでいた。

「僕はいったい…」

「プールで倒れていたんだ。たぶん、滑って頭でも打ったんだろう」

そうだっただろうか？
僕はなにか重大なことを忘れている気がする。
忘れてはならない重大なことを…

「……心配した」

「もう、ほんと人騒がせなんだから…」

「しかし、無事じゃったのだからよしとしようではないか」

「それでもやっぱり心配なものは心配だよね」

「……吉井、どこか痛まない？」

「うん、どこも痛くないから平気だよ」

みんなが口々に僕を心配してくれているのはうれしい。
うれしいのだけど、僕はそれ以上にみんなの輪から外れてうつむいている姫路さんが気になった。

「姫路さん？」

「は、はい！？」

明らかに動揺している。
なにか深く考え込んでしまうようなことでもあったのだろうか？

「（明久、帰ったら話がある）」

みんなに気づかれないように雄二がそっと僕に言う。
僕はそれには答えないで、ただ頷くだけだ。

～明久宅～

バスを降りてみんなと別れた僕は雄二の提案で雄二と霧島さん、それにあれから元気のない姫路さんを家に招き入れた。
いったい、このメンバーで話とはなんだろうか？

「本来なら玲さんにも聞いてもらった方がいいんだが、仕方ない」

僕の向かいに座る雄二が言う。

「単刀直入に言う。明久、今のお前は異常だ」

「僕が異常？
バカなこと言わないでよ。この通り、体はピンピンしてるよ」

隣に座る姫路さんに当たらないように腕を振ってアピールする。

「物理的な意味じゃない。内面的な意味でだ。」

「たしかに僕は記憶障害を患ってるけど、それは明希のおかげで解決したも同然でしょ？」

そう、僕は記憶障害を抱えているが、明希が行ってくれる記憶共有のおかげで実質問題はないほどに解決しているのだ。

「なら、お前は根本と戦った時、誘拐事件の時、そして今回のナンパのことを覚えてるのか？」

「それは……」

言われてみればそうだ。
たしかにそれらの記憶は僕の中にない。
本来なら引き継いでもいいほどの重大な記憶にも関わらず…
いや、正確には断片的に記憶が抜けているんだ。
根本君と戦う前後、誘拐犯の最後のやつ意外、そして姫路さんがプールサイドで誘拐犯の一人に絡まれていたのまでは覚えている。
それまでは覚えているというのに、ぽっかりと穴の空いたように記憶が抜けている。いったい、なぜなんだ?

「考え中悪いが、話を進めさせてもらう。
お前の記憶がない時、お前はまるで別人のようになるんだ。
性格も口調も強さも。事実、俺もお前におされたしな…」

「僕が雄二を?」

信じられない。
中学時代、悪鬼羅刹と恐れられていたあの雄二を僕がおしていたなんて…

「それも覚えていないんだろう?」

「うん…
だけど、雄二にひどいことしちゃったみたいだね。ごめん…」

記憶にまったくないとしても僕が傷つけてしまったことにはかわりない。

「そんなことは俺も気にしてないからお前も気にする必要ない。

それよりも問題なのは、記憶のないときのお前だ。
その時のお前はまるで『明久』じゃない人格をもっているようだった」

僕とは別の人格が僕の中に…

「前々から考えていたんだが、最悪の場合、お前はあいつにのっとられてしまうんじゃないか心配してるんだ」

「あはは…
それはさすがに、ちょっと困るかな…」

暗い話続きでさっきから一言も話していない姫路さんと霧島さんを和ませようとおどけてみせる。

バンッ！

「冗談で言ってるんじゃねぇんだよ！」

テーブルを叩く雄二にみんなの視線が一層集まる。

「あの時のお前は今のお前以上に……明久以上にお前のことをわかっていた！
下手したら冗談抜きでお前お前じゃなくなっちまうんだよ！
俺は認めねえぞ。あんなやつがお前だなんて……俺の親友だなんて認めねぇ！」

「私も……私もイヤです！
あんな乱暴な明久君はもう見たくありません！
いくら私を護ってくれたとしてもうれしくありません！

暴力をふるうくらいなら、いっそ私を…私なんか護ってくれなくていいです…
強くなくていい。賢くなくていいから優しいままの……そのままの明久君でいてください…」

「雄二…姫路さん……」

二人の言葉でようやく実感する。
これは僕の考えている以上に重大なことだと…
僕の考えている以上にもう一人の僕は危険なのだと…
なにより今の僕が二人にとって必要とされているのだと。

「俺はお前を助けたいんだ」

「私も今の明久君にいてほしいんです」

「……吉井の力になりたい」

「ありがとう…
だけど、僕自身なにをしたらいいかわからないんだ…」

実際、僕は僕がどうなっているか一番わかっていないのだから同然といえば同然だろう。

「打開策ならある。
明久も翔子が一度覚えたことを忘れないのは知ってるよな」

「うん」

しかし、それと記憶障害になんの関係性があるのだろうか？

「で、ここからが俺と翔子の秘密だったんだが、翔子の完全記憶能力には穴がある。具体的には数週間に一度、数分だけ何も覚えられない時間が存在するんだ」

「そうなの霧島さん？」

「……うん。雄二から聞いた話だけど医者もそう言ってた」

霧島さんはしっかりとうなずきながら言う。

常に記憶障害の僕と定期的に記憶障害になる霧島さん。

一応、共通点はある。あるが、それだからどうしたといわれればそれまでだ。

「それで翔子を診ている医者に明久のことを話したら、なんとかなるかもしれないって言われたんだ。ただ、それには――――」

「翔子ちゃんの記憶障害の仕組みを紐解かないといけないんです…」

雄二に続くように姫路さんが言う。

おそらく、僕よりも前にこの話を聞かされていたのだろう。

「……まだ解明までに時間がかかるらしい」

「だから、それまでは極力あいつを表に出さないでくれ」

「そんなこと言われても、僕自身がコントロールできないんだからどうしようもないよ…」

気づいた時にはもう意識がなく、記憶が筒抜けになっているのだか

ら本当にどうしようもないのだ。

「それについては心配いらない。明久のそばに姫路がいてくれれば未然に防げる」

「姫路さんが僕のそばに？」

雄二に疑問を投げ掛けながら隣に座る姫路さんに目線を移すと、恥ずかしさからなのか下をむいたまま黙ってしまっている。

「あぁ。明久がおかしくなるのは例外なく姫路のピンチにだ」

たしかにそうである。姫路さんがピンチを自覚すると意識がなくなってしまっているのだ。

「そして明久を元に戻すにも姫路の力が必要なんだ」

「……だから瑞希には吉井のためにもそばにいてほしい」

霧島さんに言われた姫路さんはなにかを考えるように押し黙ったままだ。

「姫路さん、これは僕の問題だから無理に引き受けなくてもいいんだよ」

できれば引き受けてほしいが、それが原因で嫌われたとあっては話にならない。

「いえ、私は明久君のそばにいます。いたいんです」

「ありがとう……姫路さん…」

姫路さんの告白のような言葉に多少驚きながらも厚意を受けとる。

「でも…その…
明久君は私なんかがそばにいて迷惑じゃ…ないですか…？」

「迷惑なわけないじゃないか。
むしろ、姫路さんがそばにいてくれるのがうれしくて仕方ないくらいだよ」

「ふふっ、私も明久君のそばにいられるのがうれしくて仕方ないです♪」

そう言って笑う姫路さんは本当に楽しそうな、幸せそうな顔だった。
なんだかいい雰囲気な気もするが、それは僕がバカ故の勘違いだろう。

「こういうのもおかしいけど、改めてよろしくね姫路さん」

「こちらこそ、よろしくお願いしますね明久君」

それに今はこの距離でいい。
僕の手に届く幸せを僕自身が護れるなら、それで……

雄二ＳＩＤＥ

「じゃあな明久、姫路」

「……二人ともまた明日」

あれから、これからの方針を話し合ったのち、俺と翔子は明久の家からでる。

なんでも姫路は明久の姉さんに今日話したことを伝えるために明久の家に残るらしい。まったく、案外姫路もしたたかだな。

「バイバイ、雄二、霧島さん」

「また明日学校で会いましょうね」

見送りに来てくれた二人に手を振りながら翔子と並んで歩く。

「……結局、必要なかった」

「そうだな」

これでも一応、翔子の言いたいことくらいはわかってやっているつもりだ。

「……瑞希と吉井ならきっと大丈夫」

「当たり前だろ。

なんたって俺の親友と翔子の親友なんだからな」

だから負けるなよ明久、姫路…

「……私も二人の力になりたい」

「っつても、病院には昨日いったばかりだろ」

本当は俺だってなにかしてやりたいさ…
だけど俺には姫路みたいに明久を静めることもできなければ、翔子みたいに完全記憶能力をもっているわけでもないんだ…

「……そう意味じゃない。精神的な意味で支えてあげたい」

「っ！？」

ったく、どうしていつもお前は俺のこたえをもっているんだろうな。
なにももっていなくても、なにもできないわけじゃない。
あいつらを助けたいっていう気持ちが大切なんだよな。
わかってたつもりなのに、いつの間にか忘れちまっていた。
こんなにも大切で簡単なことなのに…
いや、あるいはこんなにも大切で簡単なことすら翔子がいなければダメなのかもしれない。

「翔子、ありがとな」

「……雄二もありがとう」

お前のありがとうの意味はわからない。
けれど、今の俺には意味を伝えられるだけの勇気はないから、ただ並んで歩くだけだ。

ありがとな翔子

俺のそばにいてくれて

第６９問　僕と君とそばにいるということ（後書き）

昨日は１１／１１。
要するにポッキーの日でした。
ですので、それにちなんで何か創作しようとしたができなかったのはご愛嬌（おい！

ということで次回もよろしくお願いします！

第７０問　選ばれなかったもの…（前書き）

空萬さん、感想ありがとうございました！

第７０問　選ばれなかったもの…

???ＳＩＤＥ

俺は『あいつ』の護りたいと願ったものを護っただけだ。

いつも自分を圧し殺している『あいつ』のしたいことをしてやってるだけだ。

なのになぜ俺が拒まれなきゃならない？

どうして俺じゃなくて『あいつ』なんだ……

どうして俺より弱く、なにもできない『あいつ』が選ばれる……

『強くなくていい。賢くなくていいから優しいままの……そのままの明久君でいてください…』

強くなくちゃ護れないだろ？

なのに…なんでだよ！

俺はいちゃいけないのかよ！

俺は『あいつ』と違って大切にされてないってことかよ！

イヤだ……

俺だって大切にされてぇよ……

俺にだって笑顔を向けてほしいよ……

なんで誰も俺を助けてくれないんだよ……

助けてくれよ――――

「主人（マスター）……」

第７０問　選ばれなかったもの…（後書き）

さて、いきなりなのですが明久が暴走状態になるときの名称を決めたいと思います。
『～～モード』とか『～～状態』みたいな名称でもいいですし、もう一人の明久に名前をつけるのでもいいので案がある方はぜひよろしくお願いします！

次回はお買い物デートの予定です！

第７１問　僕と君とそれぞれの歯車（前書き）

ＧＭＳさん、Ｄｒ．クロさん、黒炉さん、空萬さん、吉武　和さん、きるぐまー1号さん、感想＆ａｍｐ；名称案のご協力ありがとうございました！
たくさんのご協力感謝しております！

第７１問　僕と君とそれぞれの歯車

明久ＳＩＤＥ

「以上でＨＲを終了する。寄り道をせず、速やかに下校するように」

そう言って鉄人は教室から出ていった。

「明久君、今から予定とか入っていますか？」

「今日は特にないかな」

隣の席に座る姫路さんに返事を返す。今日の予定といえば、食材を買い足すための買い物くらいだから予定がないといっても差し支えないだろう。

「それなら…少し付き合ってほしいところがあるんですけど、いい…ですか？」

そう言って姫路さんは伏し目がちに尋ねてくる。

うっ……

時々、姫路さんは自分の魅力を自覚してやってるんじゃないかと思うほど僕への効力は高い。まぁ、そんなことはないのも重々承知してるんだけどね。

「も、もちろん大丈夫だよ。で、どこに行くの？」

「ちょっとスーパーにお買い物をしにいこうかと…

それで、できれば明久君の意見を参考にして作りたいとか思いまして…」

あぁ！

そんなにいじらしく、もじもじしてたら断れるわけないじゃないか。

というか、それ以前に――――

「ちょうど僕も買い物に行こうと思ってたから、遠慮はいらないよ」

まぁ、そういうことである。

「えっ？

でも、さっきは用事がないって…」

「あぁ、それは買い物なら姫路さんの用事に付き合った後でもできるでしょ？

だから、僕の中ではないも同然なんだよ」

さらに付け加えるならば、君との時間を長く共有したい……

そんな感情も混ざっていることを伝えるだけの勇気はない。

「なんだか気を遣わせちゃったみたいですみません…」

「気にしないでよ。

それよりも目当ての商品がなくなる前に早く行こうか？」

「はいっ！」

ムッツリーニＳＩＤＥ

カシャッ

今日もいい写真が撮れた。
これなら次回の発売までもう少しだ。
それにしても、あの二人の写真はよく売れる。
発売日当日に完売なんてざらだから、次は多めに生産するか…？
いや、それではプレミア価値がなくなってしまう。
やはり、ここは従来通り数量限定でいくとするか。

「あっ、いたいた土屋君！」

声のした方に振り向くとＤクラスの代表である平賀がこっちに向かってきていた。

「……どうした？」

「いや、次の文月新聞では土屋君のムッツリ商会の告知枠を用意しといたから、なにか書いてほしいことあるかなぁって思ってさ」

見え透いた取引だ。

「……なにが対価だ？」

「さすが土屋君、話が早くて助かるよ。
話は簡単だ、次回作の二人の写真集を僕の分、キープしておいてほしい」

「……それだけか？」

「できれば買い逃した分の再販も頼みたいけど、それは贅沢ってものだ」

ふっ、いいカモだな。

「……いいだろう。その代わり、ちゃんと枠は用意しとけよ」

「それなら心配はいらにいさ。
もう既に枠は確保してあるから、後は中身を決めるだけだ。行こうか土屋君」

仕事の早いやつだ。
平賀が同業者じゃなくてよかった…

「……あぁ、いいだろう」

秀吉ＳＩＤＥ

「練習は一旦、休憩とする」

「「「「はーい」」」」

顧問の先生が休憩をいれたので、みなが休み始める。

今日は外での発声練習ということもあり、水を飲みにいく者、校舎に戻る者、その場にへたれこむ者と様々じゃ。

ふー

演劇部の練習はやはり疲れるのじゃ…

しかし、それ以上に楽しさの方が勝っておるから問題ないのじゃがな。

そんなことを考えながら歩いておると、教室の窓から外を眺めておる島田が目に入ったのじゃ。あの顔、さてはまたなにか悩んでおるな？

そう察したわしは、教室へと向かった。

～教室～

「はぁ……」

わかりやすい落胆の色を示す島田に後ろからそっと近づいていく。

足音をたてぬよう、そーと、そっとじゃ。

「わっ！！」

「うひゃぁ！？」

後ろから驚かすわしに対して、島田は想像以上に珍妙な声をあげる。

危うくわしまで驚いてしまうところじゃったのじゃ…

「びっくりしたぁ……

まったく、どういうつもりよ木下！」

「いや、わしは島田の元気がなかったから元気付けようと思っただけでのぅ…」

島田の剣幕にたじろぎながらも弁解をはかる。

「そんなのありがた迷惑よ！」

それだけを言い残すと島田はわしの脇を通りすぎ、教室から出ていってしまった……

わしはただ、その背中を呆然と見つめるしかなかった。

「島田よ……」

今ならお主の気持ち、痛いほどにわかるぞ…

明久ＳＩＤＥ

「あっ、明久君見てください！」

姫路さんはなにかを見つけたらしく、嬉々として言う。

僕もそちらに目線を移せば、そこには見慣れた箸があった。

「姫路さんのお箸だね」

このスーパーで買ったものなのだから、ここにあるのはなにも不思議ではない。

「はいっ！
明久君に買ってもらった大切なお箸です！」

そう言う姫路さんの笑顔は、穢れを知らないように無邪気できれいだった。

「そういえば、姫路さんはなにを買いに来たの？」

いつまでも箸の前で止まってるわけにもいかないので話題をふる。

「今日はパエリアの材料を買いにきたんですよ」

なるほど、それで僕に助言を求めたというわけか。
たしかに理に叶っているが、今の姫路さんの腕ならば僕のサポートなどいらないのではないだろうか？
それに気になることも一つある……

「ねぇ、姫路さん。
そのパエリアって誰に作ってあげるの？」

「ふぇ？
普通に家族で食べる予定ですけど、よかったら明久君と玲さんも招待しますよ？」

たぶん、姫路さんは僕に気を遣っているのだろう。僕が傷付かないようにと…
だって、パエリアのように手間の掛かるものを客人もいないのに作

ろうとは思わないだろうから…

「悪い「きましょうアキくん」

見事に僕の声に被せるように姉さん登場。というか、どこから沸いて出てきた…

「昨晩ぶりですね瑞希さん」

「こんにちは玲さん」

姫路さん、せめて動じてよ…
そして姉さん、あたかも当然かのごとく会話に参加しないでくれるかな?

「ところで瑞希さん、今日の晩御飯にご招待してくれるのですか?」

「はいっ!
明久君たちが迷惑じゃなければ、ぜひ来てください」

なんだか、僕の意図しない方向へと話が進んでるよね…
いや経験上、こうなったら僕の意思なんか関係ないのはわかってはいるけど虚しいものである……

「迷惑なわけありませんよ。
むしろこちらが迷惑じゃないかと気になりますから」

姉さん、もし本当に迷惑だと思ってるなら遠慮しようよ…

「いえ、明久君や玲さんが来てくれた方が賑やかになりますから、

むしろ来てくれた方が嬉しいです」

「ということらしいので、おじゃまさせていただきましょうアキくん」

「うん…」

ここまで話が進んでいて、今さら僕に選択肢は残されていない…

はぁ…

なるべく姫路さんが誰に作ってあげるのか気づかないようにしたいなぁ……

そんなことを考え、僕は買い物を続けるのだった。

～姫路宅～

正直、後悔している…

ちょっと考えればわかるはずだったのに、僕は目先のことしか見えていなかったんだ……

姉さんとお義父さんを会わせるのが、どれだけ危険かなんて……

「本当に瑞希さんはできた娘ですね。うちのアキくんにはもったいないです」

「いえいえ、吉井君こそ立派ですよ。

彼は彼なりに自分をよく見つめて理解していますからね」

姫路さんがパエリア作りで席を外しているからいいものも、当の本

人である僕がいる場でこういった会話はやめてほしいものだ…

「アキくんが見つめてるのは瑞希さんですけどね」

「あはは、こりゃ瑞希も幸せ者だな」

いや、僕は今現在不幸のドン底にいますけど？
それとも、僕の不幸なんてしったこっちゃないというわけなのか…

「そうそう、アキくんったら家での会話はほとんど瑞希さんのことばかりなんですよ」

「それは瑞希も同じですよ」

ん？
姫路さん、家で僕のこと話してくれているんだ。なんだか嬉しいな。
これが知れただけでも今日は収穫だったかもしれない。
だから、摘み取れるものを摘み取ったらささっと退散するか…
そう考え、僕は台所でパエリアを作っている姫路さんの元へと向かった。

～台所～

「姫路さん、調子はどう？」

台所に入りながら僕は姫路さんに尋ねる。

「はい。概ね順調なんですけど、どうしてもアクセントが足りないんですよ…」

「アクセントかぁ…
ちょっと味見してみていい？」

「はい、ぜひどうぞ」

姫路さんがスプーンに一掬いのパエリアを差し出してくれる。

「……」

いや、あーんのポーズのまま固まられても困るんだけど…

「どうしたんですか明久君？
味見するんじゃなかったんですか？」

うん、前々から思ってたけど姫路さんって結構天然だよね。

「いや、さすがに姫路さんに食べさせてもらうのは恥ずかしいというかなんというか…」

「そ、そうですね。すみません…」

そう言って姫路さんは差し出したスプーンを下げる。
正直、惜しい気もするけど仕方ないことだろう。
そうケジメをつけてパエリアを一摘まみする。

ん？
見た目は海鮮パエリアなのに僕のと味が違う……

決してまずいとかいうわけじゃない。むしろおいしくなっている。

「姫路さん、このパエリアになにか入れた？」

「はい、レモン汁を入れたんですがおいしくなかったでしょうか…？」

「ううん、その逆だよ。
おいしすぎてびっくりしたくらいだよ」

「ふふっ、明久君はお上手ですね」

どうやら姫路さんは僕がお世辞を言っていると思っているようだ。
うーん、僕ってそんなに優男に見られてるのかなぁ……

「お世辞抜きでおいしいんだけど…
例えるなら、毎日姫路さんのご飯を食べたくなるくらいかな？」

「あぅ…／／／／
（明久君はいつも不意討ちばかりでずるいです…）」

あれ？
次は顔赤らめてうつむいちゃった…
調子でも悪くなったのかな？

「姫路さん、大丈夫？」

「は、はひ！らいじょうぶです！」

呂律がまわってない…

これは相当の重症なのかもしれない…

「姫路さん、少し休んでたら？」

「ほ、ほんとに大丈夫です！
そ、それより明久君はなにを入れたらいいと思いますか？」

「うーん…
出汁にハマグリをとるといいんじゃないかな？」

多少強引ながらも話題を戻されたのでアドバイスをいれる。

「ハマグリですか…」

「と言っても、出汁の話だから次回になるけどね」

「そうですね。
じゃあ、できたら明久君の家に持っていきます」

「そんな気遣いしてくれなくていいよ。
その時は僕も多少なりとも手伝うよ。今日みたいにね」

そう言うと僕はパエリアの仕上げにうつる。

「明久君……」

隣で作業を再開した姫路さんが呟くように言う。

「ありがとうございますね♪」

そう言って笑う君を見て思う。
その笑顔はどんな調味料にも勝る最高の隠し味だ。
君と君の笑顔があれば、どんな料理だって僕には最高のものとなる。
本来なら僕がお礼を言うべきなのだろうが、今日は受け取っておこう。

「どういたしまして」

それだけを言うと、僕は君に笑顔を返した。

第７１問　僕と君とそれぞれの歯車（後書き）

暴走状態の明久の名称ですが、私の予想を越えた数のアイデアをあげていただいてうれしさ半分、驚き半分の状態です。
どの名称になるかは次、暴走状態が話題にでる頃までには決めたいと思います。
ご協力ありがとうございました！

第７２問　僕と相談と急展開（前書き）

ＧＭＳさん、引き続きご協力ありがとうございました！

第７２問　僕と相談と急展開

明久ＳＩＤＥ

姫路さんと晩御飯を共にした週の金曜日、僕は秀吉の相談にのっていた。

「――――というわけなんじゃ」

秀吉が一通りの説明を終える。

要約すると、島田さんと喧嘩してしまったらしく、秀吉曰く自分の無神経さが原因だったらしい。それで僕に仲を取り持ってほしいとの相談なのだが、僕自身もなにをしてあげたらいいのかさっぱりだ。

「うーん…

それとなく聞ける機会があったら聞いてみるけど…」

実際、これくらいしかできないのが現状である。

「恩にきるのじゃ」

対する秀吉は、こんなあやふやな返事にも関わらず心底感謝しているようだった。別に騙している訳ではないが、ここまで感謝されると罪悪感があるものだ…

～放課後～

「吉井、ちょっといいかしら？」

「どうしたの島田さん？」

秀吉の件をどうしようかと悩んでいるところにタイミングよく島田さんが話しかけてくる。

「ここじゃ話しづらいから屋上に来て」

島田さんが周りの目をはばかるようにキョロキョロしながら言う。
よほど他人に聞かれたくない話なのだろう。
いや、もしかしたら島田さんも秀吉のことについて相談かな？

「うん、わかったよ」

それならちょうどいいので、僕は島田さんについて屋上へ向かう。

～屋上～

「あのね…吉井…」

島田さんが僕に背を向けながら話す。

「今から言うことは冗談でもなんでもないの…」

どうやら秀吉のことについての相談ではないようだが、余程重大な用件らしい。

「ウチと付き合ってほしいの」

島田さんがくるりと振り返りながら言う。って、えっ…？
島田さんが僕と付き合ってほしいって？

「島田さん、なに企んでるのさ…」

正直、恐怖で身震いしてしまいそうだ。

「だから冗談じゃないって言ってるでしょ！
ウチは本気で言ってるの！吉井のことが好きなのよ！」

「そんなこと…いきなり言われても…」

「いきなりじゃないわよ…
前々から吉井のことは気になっていたけど、試召戦争の時、召喚大会の時、それに合宿の時の真剣な姿を見てたら余計に好きなっちゃったのよ」

僕はなんてこたえてあげればいいんだろう？

受け入れて付き合えばいいんだろうか？
僕の気持ちに嘘をついてでも？

正直に断ればいいんだろうか？
島田さんを傷つけることになっても？

「なにも今すぐになんて言わないし、ウチだって吉井の想いくらい理解しているつもりよ。でも諦めきれなかったの…」

僕と同じなんだ…

姫路さんの隣を並んで歩くのに僕は相応しくない。

頭では理解しているのに諦められない僕と……

「だから、明日一日。

一日だけでいいからウチとデートして。

その後、改めて返事をくれればいいから」

第７２問　僕と相談と急展開（後書き）

半端なところで終わっていますが、明久のこたえは次回ということで！

第７３問　僕と想いと新たな展開（前書き）

マリオネットさん、感想ありがとうございました！

第７３問　僕と想いと新たな展開

明久ＳＩＤＥ

「うん、わかったよ…」

僕は一言、目の前の僕を好きだと言ってくれた少女に伝えた。

「ありがと…
じゃあ、明日の１１時に公園で」

それだけを言い残すと島田さんは僕の脇を通りすぎ、階段を下っていった。

「残酷だよね……」

いや、もしかしたら卑怯なのかもしれない。
あそこで島田さんを拒んだら、それは僕が僕自身の想いを拒んだにも等しい。

理解しているのに諦められない。

僕が何度も自問自答をしてきた想いに…
僕が認められないなら、受け入れられることもないだろうその想いに……
結局は島田さんのためじゃなく、僕自身のためなんだ。

「いつも……こんなのばかりだよ……」

～翌日～

僕は島田さんと約束していた公園へ向かって歩いていた。
右手の腕時計で時刻を確認すれば１０：４０だ。
公園までは残り１０分ほどだから充分に間に合うだろう。
そんなことを考えながら歩いていると、いつも姫路さんとわかれるT字路に差し掛かる。

そういえば昨日は姫路さんと帰ってなかったなぁ…
なんでも委員会の仕事が立て込んでいたらしく、部外者は手伝いもできないというので雄二たちを誘って帰ったのだ。
今日は土曜日だけど元気にしてるかな？
もしかしたら昨日の作業で疲れているかもしれない。
と、ここまで来てはたと気づく。
こっちって公園の方向じゃなくて、姫路さんの家の方向だ……
自然と足が姫路さんの家へと向いていたため、違和感を感じなかったがまずい！
今からT字路に戻って、そこから公園に行くとなると１１時に間に合わない可能性がある。今さらながら、僕はダッシュで公園へと向かった。

～公園～

「はぁはぁ…
ごめん、島田さん…」

あれから運よく信号に捕まることのなかった僕は、息もきれぎれで公園にやって来た。そこには既に島田さんがベンチに腰をかけて待っていたのだ。

「いいわよ。ウチも今来たばかりだし…
それよりも今日は来てくれてありがと」

そう言って笑う島田さんは無理をしているようだった。
きっと何分も前から待っていてくれたのだろう。
そこに息もきれぎれに走ってきた僕はどんなふうに映っただろうか？
約束をすっぽかそうとした嫌なやつ？
それとも時間すらまともに判断できないやつ？
どちらにせよ、姫路さんの隣を並んで歩くには相応しくない印象であることはたしかである。

「もうこんな時間だし、先にお昼にしましょう」

「うん」

「ウチのオススメのお店を紹介するから着いてきて」

そう言って歩き出した島田さんに僕は着いていくように歩きだす。

～レストラン～

島田さんの紹介でやってきたレストランの席に僕たちは座っている。
向かいの島田さんはメニューとにらめっこしながらどれを注文しようかと悩んでいるようだ。

「ねぇ、吉井はなににする？」

「えっ、僕？
えっとねぇ……」

とっさにメニューをめくりながら注文を決めようとする。
と、僕にとっては馴染みの深い料理が目に入った。

「じゃあ、僕はパエリアにしようかな」

なにパエリアかは書いていないが、おそらくは海鮮パエリアであるはずだ。

「ふーん…
やけにしゃれたものを頼むのね」

「まぁね。あはは……」

さすがにここで姫路さんと作り合っているなんて言ったら、気を悪くしかねないので笑ってごまかしておく。

「じゃあウチもそれにしようかしら」

そう言うと島田さんは近くにいた店員を呼び寄せる。

「パエリアを二つお願いね」

「かしこまりました」

注文をとった店員は仕事が立て込んでいるのか、そそくさと厨房に戻っていく。

そういえば姫路さんといった高級レストランのウェイターもてきぱきとした人だったなぁ…

そんなことを考え、僕は今からちょうど一週間前のことに想いをはせる。

思い返せば、今週一週間は結構姫路さんと親密に関わったと思う。

お義父さんの作戦（おせっかい？）によって行った高級レストラン

なにが僕にとって大切なのかを気づかせてくれた姫路さんの手作りパエリア

裏の僕とも言うべき存在を知った市民プール

すべてに姫路さんは密接に関係した。

いや、常日頃から僕がそうあることを願った結果なのかもしれない。

無謀にも……愚かにも諦めることなく想い続ける僕へのご褒美か。

はたまた自身の愚かさに気づかせるための戒めなのか…

わからないけど、やっぱり僕は――――

「吉井、さっきからなにボーッとしてるのよ。

早くしないとパエリア冷めちゃうわよ」

「あっ、ごめん。ちょっと考え事をね…」

そう言って、僕はいつの間にかテーブルに用意されていたパエリア

に手をつける。きていたのに気づかなかったけど、そんなに長い間ふけっていたのだろうか？
どうもいまいち実感ないなぁ…
それにしても、このパエリア――――

「おいしいわね」

「そう…だね…」

本当においしそうに食べる島田さんに僕は作り笑いを浮かべる。
別に島田さんとの食事がイヤなわけではない。
むしろ、友人と食べる食事はいつでも楽しいものだ。ただ――――

「（味気ない……）」

島田さんに聞こえないようにポツリと呟く。
パエリアがまずいわけではない。ただなにかが足りない気がしたんだ。
姫路さんの作ってくれるパエリアとは違う、決定的ななにかが……
姫路さんは自分のパエリアにアクセントが足りないと言ったが、それならばこのパエリアは味気ないと表現するのがぴったりだろう。
味の濃い薄いをいっているわけではなく、やはりなにかが足りないのだ……

「さっきからボーッとしちゃって、どうしたのよ？」

「あっ、いやなんでもないんだ。
それよりもこの後はどこいこうか？」

さすがに正直に話すわけにもいかないので、適当に話題をふる。

「そうね…
じゃあ、買い物なんてどうかしら？」

「うん、いいんじゃないかな…」

～スーパー～

昼食を終えた僕たちは近所のスーパーに来ていた。
僕の方はこれといって買うものもないから島田さんについていくだけだ。

「ねぇ、吉井はなにかほしいものある？」

「うーん、特にないんだ――」

そこまで言いかけた僕の目にあるものが目に入る。

「ちょっと待ってて」

そう言って僕は近くの保冷機に向かう。そして目当てであるものを――

「なにがあったの？」

かごに入れようとしたところに島田さんが覗きこんでくる。

「これなんだ」

そう言ってハマグリのパックを見せる。

「ハマグリなんて買ってどうするのよ？」

「ちょっとね」

まさか姫路さんと作るパエリアの出汁に使うなんて言えないよね…

「島田さんはなにかほしいものないの？」

「特に買わなきゃいけないものはないけど、葉月にコロッケでも買っていってあげようかしら」

「優しいんだね」

本当に僕の周りは優しい人ばかりだ…

「そ、そんなことないわよ。それよりも早くいきましょ」

「うん」

～文月学園　屋上～

あれからなにをするわけでもなく、街をぶらぶらしていた僕たちは文月学園の屋上に来ていた。いや、戻ってきたといった方が正しい

のかもしれない。

「吉井、こたえを…聞かせてもらっていいかしら？」

なにのこたえなのかを聞くのは愚問というものだろう。

だから僕はまっすぐ、島田さんの方に向くと口を開く。

「ごめん。やっぱり無理だよ…」

夏風の吹く中、僕は目の前にいる少女に伝えた。

「僕は姫路さんが好きなんだ…

だから島田さんと付き合うことはできないよ」

これが僕のだしたこたえ。

今日、一日すごしてみて改めて実感したんだ。僕は姫路さんが好きなんだって…

「そう……」

「ほんとにごめん…」

「ううん、吉井は悪くないわよ。
それにこれでウチもすっきりしたし」

「すっきりした？」

「うん。
だって最初から吉井が瑞希を選ぶのはわかってたから…
だから、吉井の口から言ってもらえて踏ん切りがついたわ」

そう言って島田さんはにかむ。その顔には悲しみの色がないといえば嘘になるが、それ以上にふっきれた明るさがみてとれた。

「でも、一つだけお願いきいてくれる？」

「僕にできることならね」

「その…ウチとこれからも友達でいてほしいの」

「そんなことなの？」

「そんなことって、ウチにとっては重要な問題なんだからね！」

そう言ってムスッとする島田さんはいつもの島田さんだった。

「違うよ。ただ単に島田さんが改まって言うからなにかと思ってさ」

「ウチにとっては重要な問題だって言ってるでしょ！」

「わかってるって。
それに、僕の方だって友達でいたいから断るわけないよ」

正直、これからの関係を危惧していた身としては島田さんの提案はありがたい。

「ありがとう、吉井。瑞希との仲、応援してるからね」

「こちらこそありがとう島田さん」

結局、島田さんには気を遣わせちゃったかな。

「じゃあ、ウチはもう行くから」

「うん、また月曜日ね」

「うん、バイバイ」

美波ＳＩＤＥ

結局、吉井にはふられっちゃたかぁ…
って言っても、吉井は今日一日ずっと上の空だったしウチは最初から勝ち目なんてなかったのかもしれないわね。きっと瑞希のこと考えてたんでしょうし…
ここまで想われてるんだから瑞希にも吉井にもがんばってほしいものよ。

ん？
ふと公園に目をやると木下が目にはいる。発生練習でもしてたのかしら？
どちらにしても木下にはあの時のこと謝らなきゃいけないわね。
冷静に考えればウチが八つ当たりしちゃっただけなんだし…

「木下ー！
ちょっと話があるのー！」

第７３問　僕と想いと新たな展開（後書き）

美波の恋についてはこれにて一段落ですが…？
４章も残すところ１・２話となる予定です。

あと、気づいた方もいるかもしれませんが、実を言うと今話は４章冒頭とリンクしております。

では、これからも拙作をどうぞよろしくお願いします！

第７４問　終わりと始まりと新たな進展（前書き）

ユニーク５０，０００突破！
ご愛読、どうもありがとうございます！

第７４問　終わりと始まりと新たな進展

秀吉ＳＩＤＥ

「木下ー！
ちょっと話があるのー！」

公園での発声練習を終え、休憩しておったわしの耳に島田の声が響く。
って、そんなことあるわけなかろうに。
わしは島田に嫌われてしまったのじゃから今さら話し掛けられる訳など――

「なに難しい顔してるのよ。木下らしくないわよ？」

「島田……かのぅ？」

わしは自分の目が信じられず、島田にたずねる。

「ウチがウチ以外の誰に見えるっていうの？」

「わしが言いたいのはそういうことではないのじゃ…
わしが聞きたいのは……島田に聞きたいことは……」

明久とはどうなったのか…
わしの真に聞きたいことはこれなのじゃ。
昨日、盗み聞きをする気はなかったが屋上での明久と島田の話を聞いてしまった。それからずっと気がかりなのじゃ…
それは友人を想う気持ちなのか、それとも別の……

それすらもわからぬわしはひどくもろく、不安定に違いない……

「あのね木下…
ウチ、瑞希に負けちゃったの」

「っ！？」

まさか島田の方からきりだしてくるとは思わなかったから、自分でも動揺を隠しきれていないのはわかっておる。

「その顔は知ってたのね…」

「すまぬ。盗み聞きをする気はなかったのじゃ…
言い訳がましいかもしれぬが、昨日のわしは屋上に発声練習をしようと思ってだけでのぅ…」

「ほんとに演劇が好きなのね」

「うむ、わしの生き甲斐じゃからな」

わしの唯一の取り柄を胸をはって言う。

「それに安心して、ウチは木下のことを恨んだりなんかしてないわ。
もちろん瑞希もね」

「島田は優しいのじゃな…」

「違うのよ
ウチはただ、友達を疑ったり恨んだりしたくないだけなのよ」

島田よ、わしはそういうのが優しさじゃと思うぞ。

「だから木下、この前はごめんなさい」

そう言うと島田は突然頭をさげる。

「な、なぜ島田が謝っておるのじゃ？
あれはわしの無神経さが招いた事態であってのぅ…」

「ううん、ウチが木下に八つ当たりをしちゃったからいけないのよ」

「いや、わしが」

「ウチよ」

「ここは退けぬのじゃ！」

「ウチだって譲れないわよ！」

いつの間にかわしらはお互いの顔がぶつかるというほどの距離まで近づいていることに気づく。

「ご、ごめん木下／／／」

「わしの方こそすまぬのじゃ／／／」

とっさに離れたわしらは真っ赤になった顔を相手に見せまいと後ろを向く。

「……」

「……」

しばらくどちらも話さぬ沈黙が続く。
夕暮れ時の公園で真逆を向く男女。
事情を知らぬものが見たらどう思うじゃろうな…

「ねぇ、木下…」

「な、なんじゃ？」

互いに顔を見せないように……見ないように話す。

「ウチはまだ…木下の友達でいていいかしら…？」

「なにを言っておる。そんなの当然いいに決まっておるのじゃ。
それよりも、わしの方こそ島田の友達でいいのかのぅ…？」

「当然じゃない。木下はウチの大切な友達なんだから」

そう言って島田はわしに笑顔を向けてくれる。
その笑顔はいつもの楽しい時に見せるそれよりも特別なものと思える笑顔。
もしかしたら、わしにとっては初めて向けられた本当の笑顔なのかもしれぬ。
そしてわしはその笑顔を見て決意する。

島田よ、お主の笑顔……わしが護ってみせようぞ

瑞希ＳＩＤＥ

夕日が街並み沈もうとする時間、わたしはレジ袋は持ちながら帰路についていました。当然ですが、レジ袋を持っているので買い物の帰りです。
と、人気のない通りの前方から誰かがこちらに向かってくるのが見えました。
夕日でよく見えないので目を凝らして見てみれば、それは私の見知った彼。
私の大好きなものをすべてもっている彼でした。

「あっ、姫路さん！」

彼は私を見つけると走り寄ってきてくれます。
彼が私の名前を呼んでくれる。
そんなささいなことが私にとっては幸せなんです。
きっと彼はそんなのおかしいって笑うでしょうね。
それでもいいんです。私はそれだけ彼が好きなんですから…

「明久君、こんにちは」

「うん、こんにちは姫路さん。買い物の帰り？」

私の持っているレジ袋を見ながら彼が尋ねてきます。

「はい、休日の分の買い出しにいっていました」

「そう……なんだ…」

私の言葉に対して彼が明らかな落胆の色を見せます。
もしかして、なにかまずいことを言っちゃったんでしょうか…

「明久君、なにかあったんですか？」

「ううん、なんでもないよ。
ただ、姫路さんが買い物に行っちゃったなら、もうこれは必要ないと思ってね」

そう言って彼はバックからハマグリのタッパーを取り出しました。

「もしかして……私のためにですか？」

「うん。この前言ってたパエリアの出汁に使うと思ってさ。
でも、もう必要なくなっちゃったからこれは僕が持って帰るね」

そう言う彼の顔はとても落ち込んでいるように見えます。
まるで私にあげることが嬉しくてたまらないんだと言わんばかりに…
私のためになるのが彼にとっての幸せだと言わんばかりに……
そんなのは私の勘違いだとわかっていますけど、それでも…

「必要ですよ…」

「えっ？
だって買い物に行ったんじゃ…」

「私、ハマグリだけ買い忘れちゃったんです」

ごめんなさい…
本当はハマグリを買い忘れてなんかいません。
だって、彼との約束を忘れるわけないじゃないですか。
でも、それ以上に彼の落ち込んでいる姿を見たくなかったんです。
いつも明るく元気な姿で周りを明るくしてくれる彼が好きですから。
彼の優しい笑顔が大好きですから…

「じゃあ、もらってくれるの…？」

「ふふっ、自分があげる側なのになんでそんなにおどおどしてるんですか？」

「いや、それはね…」

彼は困ったように頭をかきます。
やっぱり、そういったクセも一緒なんですね……

「あなたの持っている、そのハマグリを私に譲ってくれますか？」

いつまでも彼を困らしたままにしておくのもかわいそうですので私からきりだします。

「うん、このハマグリを姫路さんにあげるよ」

さっきとは打って変わって彼は満面の笑顔で私にハマグリを渡してくれました。

「ありがとうございますね」

だから、私も彼に負けないように精一杯の笑顔を返します。

「姫路さん、僕がそのレジ袋持ってくよ」

彼はそう言うと私の持っていたレジ袋を持ってくれました。

「なにからなにまでありがとうございます」

「これくらい気にしないでよ」

私と彼は並んで歩き始めます。

ですけど、ほどなくいくと私と彼が別れなければならない場所まで辿り着きした。ここから私たちの朝が始まり、ここで私の時間が終わるんです。

「私の家はあちらですからここまででいいですよ」

「そうだね…」

そう言うと彼は私にレジ袋を返してくれました。

本当は家まで着いてきてほしいですけど贅沢は言えません。

「じゃあ、今日はありがとうございました。

今度パエリアをつくる時には招待しますね」

「うん、その時はよろしくね。また月曜日ここで」

「はい、また月曜日会いましょう。じゃあ、さようなら」

「バイバイ姫路さん」

別れの挨拶をした私たちはそれぞれの道を歩き始めます。
ですけど、数歩進んだところで私は彼に振り返ります。

「やっぱり、もう一人の明久君も優しいんですね」

彼に聞こえるように言うと、私は再度帰路を歩き出しました。

「気づいてたのか……」

第７４問　終わりと始まりと新たな進展（後書き）

これにて恋愛協奏曲編は終了となります。
完全オリジナルの話となりましたが、いかがだったでしょうか？
よろしかったら感想、評価のほどよろしくお願いします。

特別問題　座談会（恋愛協奏曲編）（前書き）

黒兎１０１８さん、感想ありがとうございました！
※今回はいつも以上にキャラ崩れが激しいので注意してください。

唐「さぁ、ご恒例のざつじゃなくて座談会タイムだ！」

明「今、雑談って言おうとしたよ！」

唐「……そんな事実はない」

明「ムッツリーニの真似したってダメだからね！」

雄「明久、お前がツッコミ続けてると先に進まん」

明「ごめん…」

唐「じゃあ、気を取り直して今回のパーソナリティーを紹介しよう」

明「吉井明久です。今回で2回目……だよね？」

瑞「そうですね。私も2回目ですけど…
あっ、申し遅れました姫路瑞希と申します。本日はよろしくお願いしますね」

雄「姫路、誰に向かって話してるんだ？
というか、これって1回目の座談会と同じメンバーじゃねぇか！」

唐「雄二、ちゃんと自己紹介してくれないと困るよ」

雄「いや、↑に頭文字出てるんだから誰でもわかるだろ……」

秀「ウェルカムなのじゃ雄二よ！」

雄「うわっ！？
どこからでてきやがった秀吉！？」

秀「座談会でメタ発言をしたらわしの仲間入りなのじゃ！」

雄「人の話を聞け！
そしていつ俺がメタ発言したんだよ！」

秀「『↑』は立派なメタ発言なのじゃ！」

雄「くそ…
ここなら、こういうのも使えて便利だと思ったがこんな罠があっただなんて…」

瑞「木下君、今日はやけにテンションが高いですね……」

秀「うむ、今章はいつもよりセリフが多かったから気分がいいのじゃ」

明「もはやメタ発言を気にもせずにしゃべってるよ……」

秀「明久よ、世の中小さいことばかり気にしてたら大成できんぞ？」

明「それでもまもるべきルールはまもろうよ……」

秀「では自重するとして帰るのじゃ」

雄「いったいなにしに来たんだ……」

瑞「坂本君が仲間入りしたのを祝いにきたんじゃないんですか？」

明「姫路さん…
ここでの秀吉の言葉は真に受けちゃダメだよ…」

瑞「ですけど友達を疑うなんて…」

雄「たまに疑問に思うんだが姫路にしても翔子にしても本当に才女なのか…？」

明「雄二、姫路さんをバカにしたね。表にでろ」

雄「待て明久！お前、目がマジになってるから！」

希「痛感をもって生まれてきたことを後悔させてやらぁ！」

雄「うぉ！明希まで来やがった！？」

明&希「「くたばれぇぇぇ！！」」　ズゴッバコボコ！

唐「見事に蚊帳の外にいる気分だ……」

瑞「そんなこと気にしてないで明久君たちを止めてください！」

唐「大丈夫。ほっときゃおさまるからさ」

～数分後～

明「はぁはぁ…
１ＶＳ２でも退けをとらないとはさすが雄二…」

希「まだだ！
俺はまだ諦めねぇぜ！」

雄「ちっ…しぶといやつだ…」

希「主人！
主人だってこんなところで諦めるたまじゃねぇだろ？」

明「そうだね…
まだだよ…まだ僕は諦めない！
いや、諦めちゃいけないんだ！姫路さんのためにも！！」

雄「言うじゃねぇか明久！
受けてやるよ！お前の覚悟も想いもすべて！」

明＆希＆雄「うおぉぉぉぉぉぉ！！！」

翔「……雄二、おいたはめっ」ブスッ↑雄二の目にチョキ

雄「ぐぉぉ！？
目が目がぁぁぁぁ！あれほど目にチョキはやめろと言っただろ翔子！」

翔「……私も暴力はダメだって言った」

雄「お前のそれは暴力じゃないのか！？」

翔「……夫の不始末を片付けるのは妻の役目」

瑞「翔子ちゃんは本当に坂本君のことが好きなんですね」

雄「待て姫路！
俺のことが好きなやつが体罰を加えるか？」

明「雄二、愛のムチって言葉知ってる？」

唐「まぁ、この場合はそれが適用されるか微妙だけど…」

雄「おい！
誰も俺の心配はなしなのかよ！」

明「雄二だから大丈夫かなぁなんて…」

唐「いや、確定事項で大丈夫だな」

瑞「坂本君って丈夫なんですね」

雄「おかしいだろ！
それともあれか！この状況に不自然さを感じてるのは俺だけなのか！？」

翔「……瑞希、雄二は私のもの」

雄（普通にスルーされた……）

瑞「わかっていますから安心してください」

明&希「霧島さんだけじゃ飽き足らず姫路さんにまで手を出すなんて、なぶり殺しにしてやりたいほどに妬ましい！」

雄「くそっ！
なんかまたあらぬ疑いがかけられてるぞ！？」

唐「これ以上いくと確実にぐだるから解散！」

雄「おい待て！俺は放置なのかよ！」

～数分後～

唐「気を取り直して新しいメンバーで座談会をしよう」

利「Ａクラス所属久保利光。よろしく頼むよ」

優「一章以降、出番がない木下優子です…」

唐（すっかり忘れてた…）

須「異端審問会会長須川亮だ」

唐（こりゃ、字面だけ見ると中国語だな…

っていうか、なんでこのメンバーを抜粋したんだろう…）

A．その場のノリで決めました（笑）

須「俺、ここ初めてなんだから何したらいいかわからないんだが…」

唐「いや、ここにいるメンバーはみんな初登場だよ？」

利「うーん…
そんな素人ばかりで企画が成り立つのか疑問なんだけど、なにか秘策でもあるのかい？」

唐「いつも行き当たりばったりの企画だから、そんなものはないよ。今だって、終着点も決めずに書いてるしね」

優「そんなことなんてどうでもいいわよ…」

唐「まぁまぁ、優子さんもそんなにしょげないで。次章は出番あるからさ」

優「ほんと！？」

唐「うん。次章は今回とは打って変わって試召戦争メインだからね」

利「ということは僕の出番もあるってことだね」

唐「当然だよ」

須「ふっ、試召戦争か…
我ら異端審問会が崇める二人のためにFクラスが勝利させてもらお

う」

利「お供します会長！」

優「あんたはＡクラスでしょうが！」

唐「取り込んでいるところ悪いけど、クラス対抗じゃないよ？」

利＆優＆須「えっ？」

唐「厳密にはクラス対抗になるけど特殊ルールが設けられるからね」

優「おもしろそうじゃない」

利「そうだね」

須「ところで具体的にはどんな風に変わるんだ？」

唐「そいつは企業秘密ってやつだぜ」

優「まぁ、いいわ。
結局は点数を競いあうんだからＡクラスがそう簡単には負けないんだし」

利「そういう油断が足元を掬われる原因になるんだよ」

優「そ、そんなこと言われなくてもわかってるわよ！」

須「さてどうだか…」

優「なによ、やる気？」

唐「あぁやめろ、やめろ！
ここでいざこざがおきるとさっきの二の舞になる」

優「わかったわよ…」

須「しょうがないか…」

利「そうだ、聞きたいことがあるんだがいいかい？」

唐「どうぞ、どうぞ。本来、これはそういう企画なんだからさ」

利「すまないね。
それで質問なんだが、今章のラストで姫路君の言っていた『もう一人の明久君』って、誰のことだい？」

須「俺も気になってたんだよな。
姫路さんが話していたのは吉井じゃないのか？」

唐「それについてはわかってる読者も多いと思うけど、あの時の明久の人格は暴走状態の時のものなんだ」

優「姫路さんはそれに気づいていたってことね」

唐「そういうこと」

利「でもおかしくないかい？
暴走状態の時の吉井君はとても気性が荒いんじゃなかったかい？」

須「そうそう、まるでいつもの吉井みたいだったぞ」

唐「そりゃそうだよ。彼が明久のフリをしてでてきたんだからさ」

優「具体的にはどの辺りからなの？」

唐「美波と別れた後にでてきたって言えばいいかな？」

須「でも今回は姫路さんのピンチじゃなかったよな？」

唐「そこについては彼の根底に関わるから秘密ってことで」

利「要約すると、あの時の彼は吉井君のフリをした彼であって姫路君はそれに気づいていたということだね」

唐「まぁ、なんで明久のフリをしてたかは秘密だけど大方あってるよ」

須「なぁ、最後に一つ聞いていいか？」

唐「なに？」

須「なんで俺だけ名字の頭文字表示なんだ？」

唐「だって亮で書くとわからない人多そうだよ？」

須「言い返せない自分が恨めしい…」

唐「なにはともあれ、これからも拙作をどうぞよろしくお願いします！」

第７５問　僕と陰謀と大試召戦争

～バカテスト～

以下の文章を可能な限り、漢字になおしなさい。『かれはかのじょをまもった』

姫路瑞希の解答
『彼は彼女を守った』

教師から
正解です。姫路さんには簡単すぎましたね

島田美波の解答
『枯葉化農場を守った』

教師から
枯葉化＝彼はか、農場＝のじょ、でしょうか？
ある意味すごい発想ですが間違いです。

吉井明久の解答
『彼は彼女を護った』

教師から
君ならそう書くと思っていました。当然ですが、こちらも正解です。
最近の吉井君はまじめに授業を受けているので先生も感心しています

明久ＳＩＤＥ

「えっとだなぁ…
みんなには悪いんだが、クラス代表として伝えるべきことがあったのを忘れていた…」

帰りのＨＲで壇上に立つ雄二が歯切れ悪く言う。
いったい、なにを伝え忘れていたというのだろうか？

「明日から二年生全体で大試召戦争をすることになってるんだ…」

「「「なんだってぇぇぇ！？」」」

さすがＦクラス…
一句一音違わず同じセリフである…
……ん？
試召戦争？
試召戦争＝負けたら設備交換＝Ａクラスの設備も狙える＝姫路さんのためになんとしても勝つ！

「雄二！
なんでそんな大事なことを忘れてたのさ！」

「すまない…
とある作戦のために手間取っていたんだ…」

「「「そんな言い訳が通ると思うな！」」」

異端審問会の面々が立ち上がると雄二にカッターやコンパスを投げる準備をする。

「まぁ、落ち着け。俺はだな、――――」

いきり立つ須川君に対して雄二がなにかを耳打ちする。

すると、雄二から聞き終わった須川君が福村君へ福村君は横溝君といった具合で次々に伝言ゲームが繰り返されていく。

そして僕の前にいる今井君から僕に――はこなかった…

「「「坂本雄二を無罪放免とする！」」」

しかも雄二は刑を免れたらしい。なにも知らないのは見事に僕だけである。

なにこの疎外感…

僕ってクラス全員からハブられてるの？

そんな憂鬱な面持ちで何気なく横を見ると姫路さんが困ったようにうつ向いていた。

「どうしたの姫路さん？」

「その…明久君に心配かけるほどのことじゃないんですけど、私のところには伝言がまわってこなかったんです…」

姫路さんには悪いけど、雄二が話した話のめどが大方ついた。

大方、異端審問会の野次馬心を焚き付けるようなことを言ったのだろう。

例えば、僕と姫路さんの仲を取り持つために計画を練ってたとかが

有力だ。
いや、実際に市民プールに誘ってくれたんだからあながち嘘でもないのだろう。

「もしかして私はクラスのみんなから嫌われてるんでしょうか…？」

そう言う姫路さんの顔は明らかに落胆の色が見てとれた。
須川君たちのことすら真に受けちゃうなんて、本当に純粋なんだなぁ…

「大丈夫だよ。
たとえ、姫路さんがみんなに嫌われたとしても、僕にとって姫路さんが大切な人であることは変わりないからさ。僕はずっと姫路さんの味方だよ」

「明久君／／／／」

さっきとは打って変わって姫路さんは少し恥ずかしそうな笑顔を見せてくれた。

「わ、私にとっても明久君は大切な人です／／／／」

「あ、ありがとう姫路さん／／／／」

姫路さんは僕の言った言葉を返してくれただけだけど、このセリフは聞いている方は恥ずかしいものだ。
まるで、姫路さんが僕に気があるみたいな錯覚に陥りそう……
って、ダメだダメだ！
しっかりしろ吉井明久！
元学力最底辺、不細工で甲斐性なしのお前に姫路さんが気をもつわ

けないだろ？
もし仮にそうだとしても、お前は姫路さんを脳外科か精神科医に連れていってやるべきなんだ。
でも……もしも…それでも姫路さんが僕に気があるとしたら……

「（見ろ、吉井が珍しく積極的だぞ）」

「（いや、いつもの天然でイチャついてるだけかもしれない）」

「（だとしても目の保養であることに変わりはない）」

相変わらずだが、異端審問会の面々は勝手なことを言っている…

カシャッカシャッカシャッカシャッカシャッカシャッカシャッカシャッカシャッ

そしてムッツリーニはシャッターチャンスと言わんばかりに連写している…

「はぁ…
本当にこのクラスは進歩がないなぁ……」

諦め半分、呆れ半分でため息をつくと一連の会話に加わっていなかった秀吉と島田さんが目に入る。なにかを二人で楽しそうに話しているようだ。
そういえば今週に入ってから秀吉と島田さんが一緒にいるのをよく見かけるようになった。なにか二人の間であったのかな？
まぁ、なにはともあれあんなことがあった島田さんともギクシャクせずに普通に接しられてるのでよかったと思う。
もちろん、秀吉と島田さんの仲がいつの間にか戻っていたこともね。

「なんか大分話がずれてるが戻すぞ。
要するには明日から開催される大試召戦争だが、少し変わったルールがある。詳しくはこれを見てくれ」

そう言って雄二はプリントを配っていく。えーと、なになに……

～大試召戦争ルール～

その1、二人一組を原則とする。

その2、他クラスともペアになることはできる。

その3、自分の所属するクラス以外を討ち取れば、その相手の点数が自分に加算される。

その4、今回は特別なシステムを採用しており、召喚獣なしでの戦いとなる。

その5、各自、腕輪とは別に技が用意されている。

その6、最終的に生き残っていた人数の多いクラスが優勝となる。

その7、優勝したクラスの設備はワンランク引き上げられ、最下位クラスはワンランク引き下げられる。

「複雑すぎてわからない…」

「ダメだな吉井は。

しょうがないから俺が特別にルールを簡単にまとめてやるよ」

「助かるよ須川君」

うん、やっぱりもつべきものは友達だね。

「一度言わないからよく聞けよ」

「うん」

「姫路さんとペアを組んで優勝を目指せ。それだけだ」

なるほど、バカな僕でも理解がいくほどにわかりやすい。

もしかして須川君は人になにかを説明する才能があるのではないだろうか？

「ありがとう須川君」

「気にするなよ。俺たち友達だろ」

なんか騙されている気がしないでもないが、今は僕がするべきことをしよう。

「って、ことだから明日からよろしくね姫路さん」

僕の隣にいるのだから一連の会話も聞いているだろうと思い、姫路さんに話しかける。

「は、はいっ！

こちらこそよろしくおねがいしますね明久君」

やっぱり姫路さんの笑顔はいつ見ても癒されるなぁ…

「まぁ、そういうことだから明日は遅刻せずに登校しろよ」

そう言って雄二が壇上から降りる。

かくして、僕たちのこれまでにない試召戦争が始まったのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9907t/

バカとテストと失われゆく記憶(ロストメモリー)

2011年11月22日01時56分発行